



ユーザーガイド

Amazon EBS



Amazon EBS: ユーザーガイド

Copyright © 2024 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標とトレードドレスは、Amazon 以外の製品またはサービスとの関連において、顧客に混乱を招いたり、Amazon の名誉または信用を毀損するような方法で使用することはできません。Amazon が所有しない他の商標はすべてそれぞれの所有者に帰属します。所有者は必ずしも Amazon との提携や関連があるわけではありません。また、Amazon の支援を受けているとはかぎりません。

Table of Contents

Amazon EBS とは？	1
Amazon EBS の機能	1
関連サービス	2
Amazon EBS へのアクセス	3
料金	4
Amazon EBS のセットアップ	5
AWS アカウントへのサインアップ	5
管理ユーザーの作成	6
(オプション) Amazon EBS 暗号化用のカスタマーマネージドキーの作成および使用	7
(オプション) Amazon EBS スナップショットのパブリックアクセスのブロックを有効にする	7
EBS ボリューム	9
EBS ボリュームを使用する利点	10
データの可用性	10
データの永続性	11
データの暗号化	11
データセキュリティ	12
スナップショット	12
柔軟性	13
EBS ボリュームの種類	13
ソリッドステートドライブ (SSD) ボリューム	14
ハードディスクドライブ (HDD) ボリューム	16
旧世代のボリューム	17
汎用 SSD ボリューム	18
Provisioned IOPS SSD ボリューム	23
スループット最適化 HDD ボリュームと Cold HDD ボリューム	27
サイズと設定の制限	38
ストレージキャパシティ	39
サービスの制約事項	39
パーティションスキーム	40
データブロックサイズ	41
EBS ボリュームと NVMe	42
NVMe ドライバのインストールまたはアップグレード	43
EBS デバイスの特定	45

NVMe EBS ボリュームの操作	49
I/O オペレーションタイムアウト	50
Abort コマンド	51
ボリュームのライフサイクル	51
ボリュームの作成	53
インスタンスへのボリュームのアタッチ	58
複数のインスタンスへのボリュームのアタッチ	61
ボリュームを使用できるようにする	71
ボリュームの詳細の表示	85
ボリュームの変更	90
インスタンスからのボリュームのデタッチ	116
ボリュームの削除	121
ボリュームの置き換え	122
ボリュームのモニタリング	125
EBS ボリュームステータスチェック	125
EBS ボリュームイベント	128
障害のあるボリュームの操作	130
AutoEnable IO ボリューム属性の操作	133
障害テスト	135
EBS スナップショット	137
スナップショットの仕組み	139
スナップショットのコピーおよび共有	143
スナップショットの暗号化サポート	144
スナップショットのライフサイクル	144
スナップショットの作成	145
スナップショットに関する情報の表示	152
スナップショットをコピーする	155
スナップショットの共有	162
スナップショットのアーカイブ	169
スナップショットの削除	205
スナップショットライフサイクルの自動化	208
高速スナップショット復元	209
考慮事項	210
ボリューム作成クレジット	210
高速スナップショット復元の管理	211
高速スナップショット復元のモニタリング	216

高速スナップショット復元のクォータ	216
価格と請求	216
Snapshot Lock	217
概念	218
考慮事項	221
必要なアクセス許可	222
スナップショットロックの使用	224
モニタリング: CloudTrail	229
以下を使用してモニタリングします。 EventBridge	229
スナップショットのパブリックアクセスのブロック	232
考慮事項	232
IAM アクセス許可	233
スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にする	235
イベントのモニタリング	238
ごみ箱	240
ごみ箱のスナップショットを操作するための権限	240
ごみ箱のスナップショットを表示する	242
ごみ箱からスナップショットを復元する	243
Local snapshots on Outposts	245
よくある質問	245
前提条件	248
考慮事項	61
IAM によるアクセスの制御	249
ローカルスナップショット を使用する	251
EBS 暗号化	262
EBS 暗号化の仕組み	262
暗号化されたスナップショットに対する EBS 暗号化の動作	263
暗号化されていないスナップショットに対する EBS 暗号化の動作	263
使用できない KMS キーがデータキーに及ぼす影響	264
要件	265
サポートされるボリュームタイプ	265
サポートされるインスタンスタイプ	265
ユーザーのアクセス許可	266
インスタンスの権限	267
Amazon EBS 暗号化の使用	268
EBS 暗号化の KMS キーの選択	268

デフォルトで暗号化の有効化	269
API および CLI を使用してデフォルトの暗号化の設定	272
EBS リソースの暗号化	273
作成時の空のボリュームの暗号化	274
暗号化されていないリソースの暗号化	274
AWS KMSキーをローテーションします	275
例	276
暗号化されていないボリュームを復元する (デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合)	276
暗号化されていないボリュームを復元する (デフォルトでの暗号化が有効になっている場合)	277
暗号化されていないスナップショットをコピーする (デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合)	278
暗号化されていないスナップショットをコピーする (デフォルトでの暗号化が有効になっている場合)	278
暗号化ボリュームを再暗号化する	279
暗号化スナップショットを再暗号化する	279
暗号化されたボリュームと暗号化されていないボリュームとの間でデータを移行する	280
暗号化の結果	281
EBS パフォーマンス	284
Amazon EBS パフォーマンスのヒント	284
EBS 最適化インスタンスを使用する	284
パフォーマンスの計算方法を理解する	285
ワークロードを理解する	285
スナップショットからボリュームを初期化する際のパフォーマンス低下に注意する	285
HDD パフォーマンスが低下する要因	285
st1 および sc1 (Linux インスタンスインスタンスのみ) で高いスループットの読み取りが多いワークロードに先読みを増やす	286
最新の Linux カーネルを使用する (Linux インスタンスのみ)	287
RAID 0 を使用してインスタンスのリソース使用率を最大化する	288
Amazon CloudWatch を使用してパフォーマンスを追跡する	288
パフォーマンスの最適化	288
I/O の特性とモニタリング	288
IOPS	289
ボリューム のキュー長とレイテンシー	291
I/O サイズとボリュームのスループット制限	291

CloudWatch を使用して I/O 特性を監視する	292
関連リソース	294
ボリュームの初期化	294
RAID 設定	300
RAID 設定オプション	300
RAID 0 アレイの作成	301
RAID アレイでのボリュームのスナップショットの作成	310
EBS ボリュームのベンチマーク	310
インスタンスのセットアップ	311
ベンチマークツールのインストール	313
ボリュームキュー長の選択	314
C ステートの無効化	315
ベンチマークテストを実行する	316
Amazon Data Lifecycle Manager	320
クォータ	321
Amazon Data Lifecycle Manager の仕組み	321
ポリシー	322
ポリシースケジュール	323
[Target resource tags] (ターゲットのリソースタグ)	324
スナップショット	324
EBS-backed AMI	324
Amazon Data Lifecycle Manager のタグ	325
デフォルトポリシーとカスタムポリシー	325
EBS スナップショットポリシーの比較	326
EBS-backed AMI ポリシーの比較	328
デフォルトポリシー	330
考慮事項	330
EBS スナップショットのデフォルトポリシー	331
EBS-backed AMI のデフォルトポリシー	335
カスタムポリシー	339
スナップショットのライフサイクルの自動化	339
AMI ライフサイクルの自動化	413
クロスアカウントのスナップショットコピーの自動化	423
ライフサイクルポリシーの表示、変更、および削除	436
ライフサイクルポリシーの表示	436
ライフサイクルポリシーの変更	437

ライフサイクルポリシーの削除	67
AWS Identity and Access Management	442
AWS 管理ポリシー	442
IAM サービスロール	450
ユーザーのアクセス許可	457
暗号化のアクセス許可	458
スナップショットと AMI のライフサイクルのモニタリング	459
コンソールと AWS CLI	459
AWS CloudTrail	459
CloudWatch イベントを使用してポリシーを監視できます。	459
Amazon を使用してポリシーを監視する CloudWatch	462
トラブルシューティング	476
エラー: Role with name already exists	476
Amazon EBS ダイレクト API	478
EBS direct API について	478
スナップショット	479
ブロック	479
ブロックインデックス	479
ブロックトークン	479
チェックサム	479
暗号化	480
API アクション	480
EBS ダイレクト API 用の IAM アクセス許可	481
EBS direct API を使用する	487
スナップショットの読み取り	488
スナップショットへの書き込み	496
暗号化の使用	502
署名バージョン 4 の署名の使用	506
チェックサムの使用	507
StartSnapshot API のべき等	507
エラー時の再試行	509
パフォーマンスの最適化	512
EBS ダイレクト API サービスエンドポイント	513
EBS direct API の料金	517
API の料金	517
ネットワークコスト	518

インターフェイス VPC エンドポイント	518
EBS ダイレクト API VPC エンドポイントに関する考慮事項	518
EBS direct API でインターフェイス VPC エンドポイントを作成する	519
AWS CloudTrail で API コールをログ記録する	519
CloudTrail での EBS direct API 情報	519
EBS direct API のログファイルエントリを理解する	521
よくある質問	528
セキュリティ	530
データ保護	530
Amazon EBS のデータセキュリティ	532
保管中と転送中の暗号化	532
KMS キー管理	532
ID およびアクセス管理	533
対象者	533
アイデンティティによる認証	534
ポリシーを使用したアクセス権の管理	538
Amazon Elastic Block Store が IAM と連携する方法	540
アイデンティティベースポリシーの例	548
トラブルシューティング	566
コンプライアンス検証	568
レジリエンス	570
モニタリング	571
AWS CloudTrail	571
CloudTrail の Amazon EBS 情報	519
Amazon EBS ログファイルエントリの概要	521
Amazon CloudWatch	574
Amazon EBS ボリュームのメトリクス	575
Nitro インスタンスのメトリクス	587
高速スナップショット復元のメトリクス	591
Amazon EC2 コンソールのグラフ	592
Amazon EventBridge	594
EBS ボリュームイベント	595
EBS ボリュームの変更イベント	601
EBS スナップショットイベント	601
EBS スナップショットのアーカイブイベント	607
EBS 高速スナップショット復元イベント	607

AWS Lambda EventBridge イベントの処理に使用する	609
Amazon GuardDuty	612
クォータ	614
ドキュメント履歴	627
.....	dcxxxiv

Amazon Elastic Block Store とは？

Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) は、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスで使用できるスケーラブルな高性能ブロックストレージリソースを提供します。Amazon Elastic Block Store を使用すると、次のブロックストレージリソースを作成および管理できます。

- Amazon EBS ボリューム – Amazon EC2 インスタンスにアタッチするストレージボリュームです。ボリュームをインスタンスにアタッチすると、ファイルの保存やアプリケーションのインストールなど、コンピュータに接続されたローカルハードドライブを使用する場合と同じ方法でボリュームを使用できます。
- Amazon EBS スナップショット – ボリューム自体とは独立して持続する Amazon EBS ボリュームのポイントインタイムバックアップです。スナップショットを作成し、Amazon EBS ボリュームのデータをバックアップできます。その後、それらのスナップショットからいつでも新しいボリュームを復元できます。

トピック

- [Amazon EBS の機能](#)
- [関連サービス](#)
- [Amazon EBS へのアクセス](#)
- [料金](#)

Amazon EBS の機能

Amazon EBS は次の特徴と利点があります。

- 複数のボリュームタイプ – Amazon EBS では、幅広いアプリケーションのストレージパフォーマンスおよびコストを最適化できる複数のボリュームタイプが用意されています。ボリュームタイプは 2 つの主要カテゴリに分かれており、トランザクションワークロード用の SSD バックストレージおよびスループット集約型ワークロード用の HDD バックストレージがあります。
- スケーラビリティ – ニーズに合った容量およびパフォーマンスの仕様を備えた Amazon EBS ボリュームを作成できます。ニーズの変化に応じて、Elastic Volumes オペレーションを使用し、ダウンタイムなしで容量の動的な増加またはパフォーマンスの調整ができます。
- バックアップとリカバリ – Amazon EBS スナップショットを使用し、ボリュームに保存されているデータをバックアップします。その後、スナップショットを使用し、ボリュームをすぐに復元し

たり、AWS アカウント、AWS リージョン、アベイラビリティーゾーン間でデータを移行したりできます。

- **データ保護** – Amazon EBS 暗号化を使用し、Amazon EBS ボリュームおよび Amazon EBS スナップショットを暗号化します。暗号化オペレーションは Amazon EC2 インスタンスをホストするサーバー上で実行され、インスタンス、それに接続されたボリューム間、後続のスナップショット間で保管中のデータおよび転送中のデータの両方のセキュリティを確保します。
- **データの可用性と耐久性** – io2 Block Express ボリュームは、99.999% の耐久性を持っており、年間故障率は 0.001% です。その他のボリュームタイプは 99.8% ~ 99.9% の耐久性を持っており、年間故障率は 0.1% ~ 0.2% です。さらに、ボリュームのデータは、1 つのアベイラビリティーゾンの複数サーバー間で自動的にレプリケートされ、1 つのコンポーネントに障害が発生したときにデータが失われることを防ぎます。
- **データアーカイブ** – EBS スナップショットアーカイブは低コストのストレージ階層を提供し、規制やコンプライアンス上の理由、または今後のプロジェクトリリースのために 90 日以上保持する必要がある EBS スナップショットの完全なポイントインタイムコピーをアーカイブします。

関連サービス

Amazon EBS は次のサービスと連携します。

- **Amazon Elastic Compute Cloud** – AWS クラウドで仮想マシン (Amazon EC2 インスタンス) を起動および管理できるようにするサービス。EBS ボリュームをそれらのインスタンスにアタッチし、たとえば、ファイルの保存やアプリケーションのインストールなど、ローカルハードドライブを使用する場合と同じ方法で使用できます。詳細については、「[Amazon EC2 とは](#)」を参照してください。
- **AWS Key Management Service** – 暗号化キーを作成および管理をできるようにするマネージドサービス。AWS KMS 暗号化キーを使用して Amazon EBS ボリュームおよび Amazon EBS スナップショットに保存されているデータを暗号化できます。詳細については、「[How Amazon EBS uses AWS KMS](#)」を参照してください。
- **Amazon Data Lifecycle Manager** – EBS スナップショットおよび EBS-backed AMI の作成、保持、削除を自動化するマネージドサービス。Amazon Data Lifecycle Manager を使用し、Amazon EBS ボリュームおよび Amazon EC2 インスタンスのバックアップを自動化できます。詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager](#)」を参照してください。
- **EBS direct APIs** – EBS スナップショットの作成、スナップショットヘデータの直接書き込み、スナップショットのデータの読み取り、2 つのスナップショット間の違いや変更の特定をできるよ

にするサービス。詳細については、「[EBS direct API を使用して EBS スナップショットの内容にアクセスする](#)」を参照してください。

- ごみ箱 – 誤って削除した EBS スナップショットおよび EBS バック AMI を復元できるようにするデータリカバリサービス。詳細については、「[ごみ箱](#)」を参照してください。

Amazon EBS へのアクセス

次のインターフェイスを使用して Amazon EBS リソースの作成および管理を行うことができます。

Amazon EC2 コンソール

ボリュームおよびスナップショットを作成および管理するウェブインターフェイス。AWS アカウントにサインアップしている場合、<https://console.aws.amazon.com/ec2/> で Amazon EC2 コンソールにアクセスできます。

AWS Command Line Interface

コマンドラインシェルのコマンドを使用して Amazon EBS リソースを管理できるようにするコマンドラインツール。Windows、Mac、Linux でサポートされています。詳細については、「[AWS Command Line Interface ユーザーガイド](#)」および「[AWS CLI コマンドリファレンス](#)」を参照してください。

AWS Tools for PowerShell

PowerShell のコマンドラインから Amazon EBS リソースの操作をスクリプト処理できるようにする一連の PowerShell モジュール。詳細については、「[AWS Tools for Windows PowerShell ユーザーガイド](#)」および「[AWS Tools for PowerShell コマンドレットリファレンス](#)」を参照してください。

AWS CloudFormation

AWS リソースを説明する再利用可能な JSON または YAML テンプレートを作成できるようにして、それらのリソースをプロビジョニングして構成する完全マネージド型 AWS サービス。詳細については、[AWS CloudFormation ユーザーガイド](#)を参照してください。

Amazon EC2 クエリ API

Amazon EC2 クエリ API は、HTTP 動詞 GET または POST を使用する HTTP または HTTPS リクエスト、ならびに Action という名前のクエリパラメータを提供します。詳細については、「[Amazon EC2 API リファレンス](#)」を参照してください。

AWS SDK

AWS サービスと統合されたアプリケーションを構築できるようにする言語固有の API。AWSSDK は多くの一般的なプログラミング言語で利用できます。詳細については、「[AWS での構築ツール](#)」を参照してください。

料金

Amazon EBS については、お客様が利用されたプロビジョンの分のみのお支払いとなります。詳細については、[Amazon EBS の料金表](#)を参照してください。

Amazon EBS のセットアップ

このセクションのタスクを完了して、Amazon EBS リソースを使用するためのセットアップを行います。

タスク

- [AWS アカウントへのサインアップ](#)
- [管理ユーザーの作成](#)
- [\(オプション\) Amazon EBS 暗号化用のカスタマーマネージドキーの作成および使用](#)
- [\(オプション\) Amazon EBS スナップショットのパブリックアクセスのブロックを有効にする](#)

AWS アカウントへのサインアップ

AWS アカウントがない場合は、以下のステップを実行して作成します。

AWS アカウントにサインアップするには

1. <https://portal.aws.amazon.com/billing/signup> を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

サインアップ手順の一環として、通話呼び出しを受け取り、電話のキーパッドを使用して検証コードを入力するように求められます。

AWS アカウントにサインアップすると、AWS アカウントのルートユーザーが作成されます。ルートユーザーには、アカウント内のすべての AWS のサービスとリソースにアクセスできます。セキュリティのベストプラクティスとして、[管理ユーザーに管理アクセスを割り当て](#)、ルートユーザーのみを使用して[ルートユーザーアクセスが必要なタスク](#)を実行します。

サインアップ処理が完了すると、AWS からユーザーに確認メールが送信されます。<https://aws.amazon.com/> の [アカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理ユーザーの作成

AWS アカウント にサインアップしたら、AWS アカウントのルートユーザー をセキュリティで保護し、AWS IAM Identity Center を有効にして、管理ユーザーを作成します。これにより、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないようにします。

AWS アカウントのルートユーザーをセキュリティで保護する

1. [ルートユーザー] を選択し、AWS アカウント のメールアドレスを入力して、アカウント所有者として [AWS Management Console](#) にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

ルートユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「[ルートユーザーとしてサインインする](#)」を参照してください。

2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS アカウントのルートユーザーの仮想化 MFA デバイスを有効にする \(コンソール\)](#)」を参照してください。

管理ユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[AWS IAM Identity Center の有効化](#)」を参照してください。

2. IAM アイデンティティセンターで、管理ユーザーに管理アクセス権を付与します。

IAM アイデンティティセンターディレクトリ をアイデンティティソースとして使用するチュートリアルについては、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[デフォルト IAM アイデンティティセンターディレクトリを使用したユーザーアクセスの設定](#)」を参照してください。

管理ユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

IAM アイデンティティセンターのユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン User Guide」の「[Signing in to the AWS access portal](#)」を参照してください。

(オプション) Amazon EBS 暗号化用のカスターマネージドキーの作成および使用

Amazon EBS 暗号化は、AWS KMS 暗号化キーを使用して Amazon EBS ボリュームおよび Amazon EBS スナップショットを暗号化する暗号化ソリューションです。Amazon EBS は、各リージョンで Amazon EBS 暗号化用の一意の AWS マネージド KMS キーを自動的に作成します。この KMS キーには aws/efs エイリアスがあります。デフォルトの KMS キーをローテーションしたり、許可を管理したりすることはできません。Amazon EBS 暗号化に使用される KMS キーをより柔軟に制御するには、カスターマネージドキーの作成および使用を検討してください。

Amazon EBS 暗号化用のカスターマネージドキーの作成および使用方法

1. [対称暗号化 KMS キーを作成します。](#)
2. [Amazon EBS 暗号化のデフォルト KMS キーとして KMS キーを選択します。](#)
3. [Amazon EBS 暗号化に KMS キーを使用する許可をユーザーに付与します。](#)

(オプション) Amazon EBS スナップショットのパブリックアクセスのブロックを有効にする

スナップショットがパブリックに共有されないようにするために、スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にします。リージョンでスナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にすると、そのリージョンでスナップショットをパブリックに共有しようとする試みは自動的にブロックされます。これにより、スナップショットのセキュリティを強化し、スナップショットデータを不正アクセスや意図しないアクセスから保護することができます。

詳細については、「[スナップショットのパブリックアクセスのブロック](#)」を参照してください。

Console

スナップショットのパブリックアクセスのブロックを有効にする方法

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [EC2 ダッシュボード] を選択し、[アカウントの属性] (右側) で [データ保護とセキュリティ] を選択します。
3. [EBS スナップショットのブロックパブリックアクセス] セクションで [管理] を選択します。
4. [パブリックアクセスをブロック] を選択し、次のオプションのいずれかを選択します。

- [パブリックアクセスをすべてブロック] – スナップショットのパブリック共有をすべてブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。また、既にパブリックに共有されていたスナップショットはプライベートとして扱われ、一般公開されなくなります。
- [新しいパブリック共有をブロック] – スナップショットの新しいパブリック共有のみをブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。ただし、既にパブリックに共有されていたスナップショットは、引き続き一般公開されます。

5. [Update] (更新) を選択します。

AWS CLI

スナップショットのパブリックアクセスのブロックを有効にする方法

[enable-snapshot-block-public-access](#) コマンドを使用します。--state に、次のいずれかの値を指定します。

- `block-all-sharing` – スナップショットのパブリック共有をすべてブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。また、既にパブリックに共有されていたスナップショットはプライベートとして扱われ、一般公開されなくなります。
- `block-new-sharing` – スナップショットの新しいパブリック共有のみをブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。ただし、既にパブリックに共有されていたスナップショットは、引き続き一般公開されます。

```
aws ec2 enable-snapshot-block-public-access --state block-all-sharing/block-new-sharing
```

Amazon EBS ボリューム

Amazon EBS ボリュームは、耐久性に優れたブロックレベルのストレージボリュームであり、インスタンスにアタッチできます。ボリュームをインスタンスにアタッチすると、他の物理ハードドライブと同じように使用できます。EBS ボリュームには柔軟性があります。現行世代のインスタンスタイプにアタッチされた現行世代のボリュームの場合、サイズの拡張、プロビジョンド IOPS の容量の変更、実稼働ボリュームのボリュームタイプの変更を動的に行うことができます。

EBS ボリュームは、インスタンス用のシステムドライブ、データベースアプリケーションのストレージなど、頻繁に更新する必要があるデータのプライマリストレージとして使用できます。連続ディスクスキャンを実行するスループットが高いアプリケーションにも使用できます。EBS ボリュームは、EC2 インスタンスの運用状況から独立した永続性を持ちます。

複数の EBS ボリュームを 1 つのインスタンスにアタッチできます。ボリュームとそのアタッチ先インスタンスは同じアベイラビリティゾーンに存在する必要があります。ボリュームとインスタンスタイプによっては、[マルチアタッチ](#)を使用してボリュームを複数のインスタンスに同時にマウントできます。

Amazon EBS には、次のボリュームタイプが用意されています。汎用 SSD (gp2 および gp3)、プロビジョンド IOPS SSD (io1 および io2)、スループット最適化 HDD (st1)、Cold HDD (sc1)、磁気 (standard) です。それらはパフォーマンス特性と料金が異なるため、アプリケーションのニーズに応じてストレージのパフォーマンスとコストを調整できます。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの種類](#)」を参照してください。

アカウントには、利用できるストレージの合計に制限があります。これらの制限、および制限の引き上げをリクエストする方法についての詳細は、「[Amazon EBS エンドポイントとクォータ](#)」を参照してください。

料金の詳細については、[Amazon EBS 料金表](#)を参照してください。

コンテンツ

- [EBS ボリュームを使用する利点](#)
- [Amazon EBS ボリュームの種類](#)
- [EBS ボリュームのサイズと設定の制限](#)
- [Amazon EBS および NVMe](#)
- [Amazon EBS ボリュームのライフサイクル](#)
- [以前のスナップショットを使用した Amazon EBS ボリュームの置き換え](#)

- [Amazon EBS ボリュームのモニタリング](#)
- [Amazon EBS での障害テスト](#)

EBS ボリュームを使用する利点

EBS ボリュームには、インスタンスストアボリュームにはない利点があります。

利点

- [データの可用性](#)
- [データの永続性](#)
- [データの暗号化](#)
- [データセキュリティ](#)
- [スナップショット](#)
- [柔軟性](#)

データの可用性

EBS ボリュームを作成すると、そのボリュームは同じアベイラビリティーゾーン内で自動的にレプリケートされます。これは、1つのハードウェアコンポーネントの障害が原因でデータが失われることを防ぐためです。EBS ボリュームは、同じアベイラビリティーゾーン内の任意の EC2 インスタンスにアタッチできます。アタッチしたボリュームは、ハードドライブや他の物理デバイスと同じようなネイティブブロックとして表示されます。その時点で、インスタンスはローカルドライブと同じようにボリュームとやり取りできます。インスタンスに接続してファイルシステム (Linux インスタンスの Ext4 または Windows インスタンスの NTFS) を持った EBS ボリュームをフォーマットし、アプリケーションをインストールできます。

指定したデバイスに複数のボリュームをアタッチする場合は、ボリュームにまたがってデータをストライプすることで I/O とスループットのパフォーマンスを向上させることができます。

io1 および io2 の EBS ボリュームを、最大 16 個の Nitro ベースのインスタンスにアタッチできます。詳細については、[Amazon EBS マルチアタッチを使用した複数のインスタンスへのボリュームのアタッチ](#)を参照してください。それ以外の場合は、EBS ボリュームを 1 つのインスタンスにアタッチできます。

EBS ボリュームのモニタリングデータは無料で取得できます (EBS-backed インスタンスのルートデバイスボリュームのデータも含まれます)。メトリクスのモニタリングの詳細については、[Amazon](#)

[EBS の Amazon CloudWatch メトリックス](#)を参照してください。ボリュームのステータスの追跡の詳細については、[Amazon EventBridge フォー Amazon EBS](#)を参照してください。

データの永続性

EBS ボリュームは、インスタンスの運用状況に左右されない永続性のあるストレージを提供します。データが維持される限り、ボリュームの使用料が発生します。

EC2 コンソール上で使用する EBS ボリュームを設定するときに [Delete on Termination (終了時に削除)] チェックボックスをオフにした場合、実行中のインスタンスにアタッチされている EBS ボリュームを、インスタンスの終了時にデータがそのままの状態にインスタンスから自動的にデタッチすることができます。デタッチされたボリュームは新しいインスタンスに再アタッチできるので、迅速な復旧が可能です。[Delete on Termination (終了時に削除)] のチェックボックスがオンの場合、ボリュームは EC2 インスタンスの終了後に削除されます。EBS-backed インスタンスを使用している場合は、アタッチしたボリュームに格納されているデータに影響を与えることなく、インスタンスを停止および再起動できます。ボリュームは停止/起動のサイクルを通じてアタッチされたままです。これにより、必要なときに処理リソースとストレージリソースを使用するだけで、ボリュームでのデータの処理と格納を永続的に実行できるようになります。データは、ボリュームを明示的に削除するまでボリュームに保持されます。削除した EBS ボリュームが使用していた物理的なブロックストレージは、別のアカウントに再割り当てされる前に、ゼロで上書きされます。機密データを扱っている場合は、手動によるデータの暗号化や、Amazon EBS 暗号化で保護されているボリュームへのデータの格納を検討してください。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

デフォルトでは、インスタンスの起動時に作成およびアタッチされた ルート EBS ボリュームは、インスタンスの終了時に削除されます。この動作を変更するには、インスタンスの起動時にフラグ `DeleteOnTermination` の値を `false` に変更します。値を変更すると、インスタンスが終了してもボリュームが保持されるので、そのボリュームを別のインスタンスにアタッチできます。

デフォルトでは、インスタンスの起動時に作成およびアタッチされた 追加の EBS ボリュームは、インスタンスの終了時に削除されません。この動作を変更するには、インスタンスの起動時にフラグ `DeleteOnTermination` の値を `true` に変更します。値の変更により、ボリュームはインスタンスの終了時に削除されます。

データの暗号化

簡素化されたデータの暗号化を使用するには、Amazon EBS 暗号化 機能を使用して、暗号化の対象となる EBS ボリュームを作成できます。暗号化は、すべての EBS ボリュームタイプでサポートされています。暗号化された EBS ボリュームを使用すると、`data-at-rest` 規制/監査対象のデータやア

アプリケーションのさまざまな暗号化要件を満たすことができます。Amazon EBS 暗号化では、256 ビットの Advanced Encryption Standard アルゴリズム (AES-256) と Amazon が管理するキーインフラストラクチャが使用されます。暗号化は EC2 インスタンスをホストするサーバーで行われ、EC2 data-in-transit インスタンスから Amazon EBS ストレージへの暗号化が行われます。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

Amazon EBS 暗号化は、暗号化されたボリュームと、AWS KMS keys 暗号化されたボリュームから作成されたスナップショットを作成するときに使用されます。暗号化された EBS ボリュームをリージョンで初めて作成すると、AWS デフォルトのマネージド KMS キーが自動的に作成されます。このキーは、ユーザーがカスタマーマネージドキーを作成して使用しない限り、Amazon EBS 暗号化に使用されます。独自のカスタマーマネージドキーを作成すると、アクセスコントロールを作成、ローテーション、無効化、定義できるほか、データの保護に使用される暗号化キーを監査できるなど、より高い柔軟性が得られます。詳細については、[AWS Key Management Service デベロッパーガイド](#)を参照してください。

データセキュリティ

Amazon EBS ボリュームは、初期化されていない raw ブロックデバイスとして表示されます。これらのデバイスは、EBS インフラストラクチャ上に作成される論理デバイスであり、Amazon EBS サービスは、お客様による利用または再利用の前に、デバイスが論理的に空になっている (つまり、raw ブロックがゼロになっている、または暗号で擬似ランダムデータが含まれている) ようにします。

DoD 5220.22-M (National Industrial Security Program Operating Manual) や NIST 800-88 (Guidelines for Media Sanitization) に詳述されているような、使用後もしくは使用前 (またはその両方) に特定の使用方法を使用してすべてのデータを消去する必要がある手順がある場合、Amazon EBS でこれを行うことができます。ブロックレベルのアクティビティは、Amazon EBS サービス内の基盤となるストレージメディアに反映されます。

スナップショット

Amazon EBS は、Amazon S3 ボリュームのスナップショット (バックアップ) を作成し、ボリューム内のデータのコピーを EBS に書き込む機能を備えています。そこで、データは複数のアベイラビリティゾーンに冗長的に保存されます。スナップショットを作成するために、対象のボリュームが実行中のインスタンスにアタッチされている必要はありません。ボリュームにデータを書き込み続けながら、そのボリュームのスナップショットを定期的に作成して、新しいボリュームのベースラインとして使用できます。このスナップショットは、新しい EBS ボリュームを複数作成したり、アベイラビリティゾーン間でボリュームを移動したりするときに使用できます。暗号化された EBS ボリュームのスナップショットは自動的に暗号化されます。

スナップショットから新規ボリュームを作成する場合、このボリュームはスナップショット作成時における元のボリュームの正確なコピーになります。暗号化されたスナップショットから作成された EBS ボリュームは、自動的に暗号化されます。別のアベイラビリティゾーンを指定し、この機能を使用してそのゾーンにボリュームを複製することもできます。AWS スナップショットは特定のアカウントと共有することも、公開することもできます。スナップショットを作成すると、ソースボリュームのサイズではなく、バックアップされるサイズに基づいて、Amazon S3 で料金が発生します。同じボリュームの後続スナップショットは、増分スナップショットです。このスナップショットには、前回のスナップショット作成以降にボリュームに書き込まれた変更データと新規データのみが含まれ、この変更データと新規データに対してのみ料金が発生します。

スナップショットは増分バックアップです。つまり、最後にスナップショットを作成した時点から、ボリューム上で変更のあるブロックだけが保存されます。例えば、100 GiB のデータが格納されているボリュームがあるとします。最後にスナップショットを作成してから、そのうちの 5 GiB 分のデータしか変更されていない場合は、その変更された 5 GiB のデータだけが Amazon S3 に書き込まれます。スナップショットの保存は増分ベースで行われるものの、スナップショット削除プロセスは最新のスナップショットのみ保持するように設計されています。

ボリュームとスナップショットを分類および管理しやすくするため、任意のメタデータでタグ付けることができます。

ボリュームを自動的にバックアップするには、[Amazon Data Lifecycle Manager](#) または [AWS Backup](#) を使用できます。

柔軟性

EBS ボリュームは、実稼働環境での設定変更をサポートします。サービスを中断せずに、ボリュームタイプ、ボリュームサイズ、IOPS 容量を変更できます。詳細については、[Amazon EBS Elastic Volumes を使用してボリュームを変更する](#)を参照してください。

Amazon EBS ボリュームの種類

Amazon EBS では以下のボリュームタイプを提供しており、これらはパフォーマンス特性と料金が異なるため、アプリケーションのニーズに応じてストレージのパフォーマンスとコストを調整できます。

Important

インスタンスの構成、I/O 特性、ワークロードのデマンドなど、EBS ボリュームのパフォーマンスに影響を与える可能性がある要因は複数存在します。EBS ボリュームにプロビジョ

ニングされた IOPS を最大限に活用するには、EBS に最適化されたインスタンスを使用します。EBS ボリュームを最大限活用するための詳細については、[Amazon EBS ボリュームパフォーマンス](#)を参照してください。

料金の詳細については、[Amazon EBS 料金表](#)を参照してください。

ボリュームの種類

- [ソリッドステートドライブ \(SSD\) ボリューム](#)
- [ハードディスクドライブ \(HDD\) ボリューム](#)
- [旧世代のボリューム](#)

ソリッドステートドライブ (SSD) ボリューム

SSD-backed のボリュームは、主要なパフォーマンス属性は IOPS である I/O サイズの小さい頻繁な読み取り/書き込み操作を伴うトランザクションワークロード用に最適化されています。SSD-backed のボリュームタイプには、汎用 SSD とプロビジョンド IOPS SSD があります。SSD-Backed ボリュームの使用例と特性の概要を次に示します。

	汎用 SSD ボリューム		Provisioned IOPS SSD ボリューム	
ボ リ ユ ー ム タ イ プ	gp3	gp2	io2 Block Express 3	io1
耐久性	99.8% ~ 99.9% の耐久性 (0.1% ~ 0.2% の年間故障率)		99.999% の耐久性 (0.001% の年間故障率)	99.8% ~ 99.9% の 耐久性 (0.1% ~ 0.2 % の年間故障率)
ユース ケース	<ul style="list-style-type: none"> • トランザクションワークロード • 仮想デスクトップ • 中規模の単一インスタンスデータベース • 低レイテンシーのインタラクティブなアプリケーション 		必要なワークロー ド <ul style="list-style-type: none"> • ミリ秒未満のレ イテンシー 	<ul style="list-style-type: none"> • 持続的な IOPS パフォーマンス または 16,000 IOPS 以上のパ フォーマンスを

	<u>汎用 SSD ボリューム</u>		<u>Provisioned IOPS SSD ボリューム</u>	
	<ul style="list-style-type: none"> ブートボリューム 開発・テスト環境 		<ul style="list-style-type: none"> 持続的な IOPS パフォーマンス 64,000 IOPS または 1,000 MiB/秒を超えるスループット 	<ul style="list-style-type: none"> 必要とするワークロード I/O 集約型のデータベースワークロード
ボリュームサイズ	1GiB - 16TiB		4 GiB ~ 64 TiB ⁴	4 GiB ~ 16 TiB
ボリュームあたりの最大 IOPS	16,000 (64 KiB I/O)	16,000 (16 KiB I/O)	256,000 (16 KiB I/O) ⁵	64,000 (16 KiB I/O)
ボリュームあたりの最大スループット	1,000 MiB/秒	250 MiB/秒 ¹	4,000 MiB/秒	1,000 MiB/秒 ²
Amazon EBS マルチアタッチ	サポート外		サポート	
NVMe 予約	サポート外		サポート	サポートされていません

	汎用 SSD ボリューム	Provisioned IOPS SSD ボリューム
ブリー トボ リユー ム		サポート

¹ スループットの制限は、ボリュームサイズに応じて 128 MiB/秒～250 MiB/秒です。詳細については、「[gp2 ボリュームのパフォーマンス](#)」を参照してください。2018 年 12 月 3 日以前に作成され、作成後に変更されていないボリュームの場合は、[そのボリュームを変更](#)しない限り、完全なパフォーマンスには到達しない可能性があります。

² 1,000 MiB/秒の最大スループットを実現するには、ボリュームを 64,000 IOPS でプロビジョニングし、[Nitro System に構築されたインスタンス](#)にアタッチする必要があります。2017 年 12 月 6 日以前に作成され、作成後に変更されていないボリュームの場合は、[そのボリュームを変更](#)しない限り、完全なパフォーマンスには到達しない可能性があります。

³ 2023 年 11 月 21 日以降に作成されたすべての io2 ボリュームは io2 Block Express ボリュームです。2023 年 11 月 21 日より前に作成された io2 ボリュームは、[ボリュームの IOPS またはサイズを変更する](#)ことで io2 Block Express ボリュームに変換できます。

⁴ サイズが 16 TiB を超えるボリュームは、[Nitro System 上に構築されたインスタンスにのみアタッチ](#)できます。

⁵ 64,000 IOPS を超えるボリュームは、Nitro System [上に構築されたインスタンスにのみアタッチ](#)できます。Nitro 以外のインスタンスには最大 64,000 IOPS のボリュームをアタッチできますが、最大 32,000 IOPS までしか達成できません。

SSD-backed のボリュームタイプの詳細については、以下を参照してください。

- [汎用 SSD ボリューム](#)
- [Provisioned IOPS SSD ボリューム](#)

ハードディスクドライブ (HDD) ボリューム

HDD-backed のボリュームはパフォーマンスの主要な属性がスループットである大規模なストリーミングワークロード用に最適化されています。HDD ボリュームタイプには、スループット最適化 HDD と Cold HDD があります。以下は、HDD-Backed ボリュームのユースケースと特性の概要です。

	スループット最適化 HDD ポリユーム	Cold HDD ポリユーム
ボリュームタイプ	st1	sc1
耐久性	99.8% ~ 99.9% の耐久性 (0.1% ~ 0.2% の年間故障率)	
ユースケース	<ul style="list-style-type: none"> ビッグデータ データウェアハウス ログ処理 	<ul style="list-style-type: none"> アクセス頻度の低いデータ用のスループット指向ストレージ 低いストレージコストが重視されるシナリオ
ボリュームサイズ	125 GiB ~ 16 TiB	
ボリュームあたりの最大 IOPS (1 MiB I/O)	500	250
ボリュームあたりの最大スループット	500 MiB/秒	250 MiB/秒
Amazon EBS マルチアタッチ	サポートされていません	
ブートボリューム	サポートされていません	

ハードディスクドライブ (HDD) ボリュームの詳細については、「[スループット最適化 HDD ポリユームと Cold HDD ポリユーム](#)」を参照してください。

旧世代のボリューム

マグネティック (standard) ボリュームは、磁気ドライブによってバックアップされた旧世代のボリュームです。それらは、データへのアクセス頻度が低く、パフォーマンスが最も重要ではない小規

模なデータセットを持つワークロードに適しています。これらのボリュームは、平均約 100 IOPS を実現し、バースト能力は最大約数百 IOPS です。ボリュームのサイズは 1 GiB ~ 1 TiB です。

Tip

磁気ボリュームは、旧世代のボリュームタイプです。旧世代のボリュームより高いパフォーマンスまたはパフォーマンスの整合性が必要であれば、より新しいボリュームタイプの使用を検討するようお勧めします。

次の表は、旧世代の EBS ボリュームタイプを示しています。

	マグネティック
ボリュームタイプ	standard
ユースケース	データへのアクセス頻度が低いワークロード
ボリュームサイズ	1 GiB ~ 1 TiB
ボリュームあたりの最大 IOPS	40 ~ 200
ボリュームあたりの最大スループット	40 ~ 90 MiB/秒
ブートボリューム	サポート

詳細については、「[旧世代ボリューム](#)」を参照してください。

汎用 SSD ボリューム

汎用 SSD (gp2 および gp3) ボリュームは、ソリッドステートドライブ (SSD) によってサポートされます。これらは、さまざまなトランザクションワークロードに対して、料金とパフォーマンスのバランスをとります。これらには、仮想デスクトップ、中規模のシングルインスタンスデータベース、レイテンシーの影響を受けやすいインタラクティブなアプリケーション、開発およびテスト環境、およびブートボリュームが含まれます。これらのボリュームは、ほとんどのワークロードに推奨されます。

Amazon EBS は、次のタイプの汎用 SSD ボリュームを提供します。

型

- [汎用 SSD \(gp3\) ポリユーム](#)
- [汎用 SSD \(gp2\) ポリユーム](#)

汎用 SSD (gp3) ポリユーム

汎用 SSD (gp3) ポリユームは、最新世代の汎用 SSD ポリユームであり、Amazon EBS が提供する最も低コストの SSD ポリユームです。このポリユームタイプは、ほとんどの用途で料金とパフォーマンスの適切なバランスを提供するのに役立ちます。また、ポリユームサイズにかかわらず、ポリユームのパフォーマンスをスケールするのにも役立ちます。つまり、追加のブロックストレージ容量をプロビジョニングしなくても、必要なパフォーマンスをプロビジョニングできます。さらに、gp3 ポリユームでは、GiB あたりの料金が汎用 SSD (gp2) ポリユームよりも 20% 低くなります。

gp3 ポリユームは、1 桁のミリ秒単位のレイテンシーと 99.8 ~ 99.9% のポリユーム耐久性を実現し、年間故障率 (AFR) は 0.2 パーセント以下です。つまり、1 年間に実行中のポリユーム 1,000 個あたり最大 2 つのポリユーム障害が発生することになります。AWS gp3 ポリユームは、99% の確率でプロビジョニングされたパフォーマンスを発揮するように設計されます。

コンテンツ

- [gp3 ポリユームのパフォーマンス](#)
- [gp3 ポリユームサイズ](#)
- [gp2 から gp3 に移行する](#)

gp3 ポリユームのパフォーマンス

Tip

gp3 ポリユームはバーストパフォーマンスを使用しません。これらは、フルプロビジョンド IOPS とスループットパフォーマンスを無期限に維持できます。

IOPS パフォーマンス

gp3 ポリユームは、ストレージの料金に含まれている 3,000 IOPS の一貫したベースライン IOPS パフォーマンスを提供します。追加料金を支払うことで、ポリユームサイズの GiB あたり 500 IOPS

の割合で追加の IOPS (最大 16,000 まで) をプロビジョニングできます。32 GiB 以上のボリュームに対して最大 IOPS をプロビジョニングできます (GiB あたり 500 IOPS × 32 GiB = 16,000 IOPS)。

スループットパフォーマンス

gp3 ボリュームは、ストレージの料金に含まれている 125 MiB/秒の一貫したベースラインスループットパフォーマンスを提供します。追加料金を支払うことで、プロビジョンド IOPS あたり 0.25 MiB/秒の割合で追加のスループット (最大 1,000 MiB/秒) をプロビジョニングできます。最大スループットは、4,000 IOPS 以上かつ 8 GiB 以上 (4,000 IOPS × IOPS あたり 0.25 MiB/秒 = 1,000 MiB/秒) でプロビジョニングできます。

gp3 ボリュームサイズ

gp3 ボリュームのサイズ範囲は、1 GiB ~ 16 TiB です。

gp2 から gp3 に移行する

現在 gp2 ボリュームを使用している場合は、[Amazon EBS Elastic Volumes を使用してボリュームを変更する](#) オペレーションを使用してボリュームを gp3 に移行できます。Amazon EBS Elastic Volumes オペレーションを使用して、Amazon EC2 インスタンスを中断することなく、既存のボリュームのボリュームタイプ、IOPS、およびスループットを変更できます。コンソールを使用してボリュームを作成したり、スナップショットから AMI を作成したりする場合、ボリュームタイプには、汎用 SSD gp3 がデフォルトで選択されます。それ以外の場合は、gp2 がデフォルトで選択されます。このような場合、gp2 を使用する代わりに、ボリュームタイプとして gp3 を選択できます。

gp2 ボリュームを gp3 に移行することでどの程度のコストを削減できるかを調べるには、[Amazon EBS gp2 から gp3 への移行で削減できるコストの計算ツール](#)を使用してください。

汎用 SSD (gp2) ボリューム

これらは、さまざまなトランザクションワークロードに対応できるコスト効率の高いストレージとして使用できます。gp2 ボリュームを使用すると、ボリュームサイズに応じてパフォーマンスがスケールします。

Tip

gp3 ボリュームは、汎用 SSD ボリュームの最新世代です。このボリュームは、より予測可能なパフォーマンススケーリングと、gp2 ボリュームよりも最大 20% 低い料金を提供します。詳細については、「[汎用 SSD \(gp3\) ボリューム](#)」を参照してください。

gp2 ボリュームを gp3 に移行することでどの程度のコストを削減できるかを調べるには、[Amazon EBS gp2 から gp3 への移行で削減できるコストの計算ツール](#)を使用してください。

gp2ボリュームのレイテンシーは 1 桁ミリ秒で、ボリュームの耐久性は 99.8 ~ 99.9% で、年間故障率 (AFR) は 0.2 パーセント以下です。これは、1 年間に実行中のボリューム 1,000 個あたり最大 2 つのボリューム障害が発生することを意味します。AWS 99% gp2 の確率でプロビジョニングされたパフォーマンスを発揮するようにボリュームを設計します。

コンテンツ

- [gp2 ボリュームのパフォーマンス](#)
- [gp2 ボリュームサイズ](#)

gp2 ボリュームのパフォーマンス

IOPS パフォーマンス

ベースライン IOPS パフォーマンスは、最小 100 から最大 16,000 の間で、ボリュームサイズの GiB あたり 3 IOPS のレートで直線的にスケールします。IOPS パフォーマンスは次のようにプロビジョニングされます。

- 33.33 GiB 以下のボリュームは、最小 100 IOPS でプロビジョニングされます。
- 33.33 GiB を超えるボリュームは、最大 16,000 IOPS (5,334 GiB (3 X 5,334) で到達) まで、ボリュームサイズの GiB あたり 3 IOPS でプロビジョニングされます。
- 5,334 GiB 以上のボリュームは、16,000 IOPS でプロビジョニングされます。

1 TiB 未満の (および 3,000 IOPS 未満でプロビジョニングされた) gp2 ボリュームは、長期間にわたって必要な場合に 3,000 IOPS にバーストできます。ボリュームのバースト機能は I/O クレジットによって制御されます。I/O の需要がベースラインパフォーマンスよりも大きい場合、ボリュームは I/O クレジットを消費して、必要なパフォーマンスレベル (最大 3,000 IOPS) までバーストします。バースト中は、I/O クレジットは累積されず、ベースライン IOPS を上回る IOPS (使用率 = バースト IOPS - ベースライン IOPS) を上回る IOPS の割合で消費されます。ボリュームが蓄積した I/O クレジットが多いほど、バーストパフォーマンスを維持できる時間が長くなります。次のようにバースト期間を計算できます。

(I/O credit balance)

$$\text{Burst duration} = \frac{\text{-----}}{(\text{Burst IOPS}) - (\text{Baseline IOPS})}$$

I/O の需要がベースラインパフォーマンスレベル以下に低下すると、ボリュームは、ボリュームサイズの GiB あたり 3 I/O クレジット/秒のレートで I/O クレジットを獲得し始めます。ボリュームには 540 万 I/O クレジットの I/O クレジットの累積制限があり、これは少なくとも 30 分間で 3,000 IOPS の最大バーストパフォーマンスを維持するのに十分です。

Note

各ボリュームは、540 万 I/O クレジットの初期 I/O クレジットバランスを受け取ります。これにより、ブートボリュームの高速な初期ブートサイクルと、他のアプリケーションの優れたブートストラップエクスペリエンスが提供されます。

ボリュームサイズとボリュームの関連するベースラインパフォーマンス、バースト期間 (540 万 I/O クレジットから開始)、および空の I/O クレジットバランスを再補充するのにかかる時間の例を次の表に示します。

ボリュームサイズ (GiB)	ベースラインパフォーマンス (IOPS)	3000 IOPS におけるバースト期間 (秒)	空のクレジットバランスを補充する時間 (秒)
1 ~ 33.33	100	1,862	54,000
100	300	2,000	18,000
334 (最大スループットの最小サイズ)	1,002	2,703	5,389
750	2,250	7,200	2,400
1,000	3,000	該当なし*	該当なし*
5,334 (最大 IOPS の最小サイズ) 以上	16,000	該当なし*	該当なし*

* ボリュームのベースラインパフォーマンスが最大バーストパフォーマンスを超えた場合。

Amazon の Amazon EBS BurstBalance メトリックスを使用して、ボリュームの I/O クレジットバランスをモニタリングできます。CloudWatch このメトリックスは、残りの gp2 の I/O クレジットの割合を示します。詳細については、「[Amazon EBS I/O の特性およびモニタリング](#)」を参照してください。BurstBalance の値が一定のレベルまで下がったときに通知するアラームを設定できます。詳細については、「[CloudWatch アラームの作成](#)」を参照してください。

スループットパフォーマンス

gp2 ボリュームは、ボリュームサイズに応じて、128 MiB/秒 ~ 250 MiB/秒のスループットを提供します。スループットパフォーマンスは次のようにプロビジョニングされます。

- 170 GiB 以下のボリュームは、最大スループット 128 MiB/秒を提供します。
- 170 GiB より大きく 334 GiB より小さいボリュームは、250 MiB/秒の最大スループットまでバーストできます。
- 334 GiB 以上のボリュームは、250 MiB/秒を提供します。

gp2 ボリュームのスループットは、250 MiB/秒のスループット制限まで、次の計算式を使用して計算できます。

$$\text{Throughput in MiB/s} = \text{IOPS performance} \times \text{I/O size in KiB} / 1,024$$

gp2 ボリュームサイズ

gp2 ボリュームのサイズ範囲は、1 GiB ~ 16 TiB です。ボリュームのパフォーマンスはボリュームサイズに比例してスケールすることに注意してください。

Provisioned IOPS SSD ボリューム

プロビジョンド IOPS SSD ボリュームは、ソリッドステートドライブ (SSD) によってサポートされます。これらは、IOPS が高く、スループットが大量で、低レイテンシーを必要とする、重要なワークロード向けに設計された、最高パフォーマンスの Amazon EBS ストレージボリュームです。プロビジョンド IOPS SSD ボリュームは、期間の 99.9 パーセントにわたり、プロビジョニングされた IOPS パフォーマンスを実現します。

Amazon EBS は、2 種類のプロビジョンド IOPS SSD ボリュームを提供します。

- [プロビジョンド IOPS SSD \(io2\) Block Express ボリューム](#)
- [Provisioned IOPS SSD \(io1\) ボリューム](#)

プロビジョンド IOPS SSD (io2) Block Express ボリューム

io2 Block Express ボリュームは、次世代の Amazon EBS ストレージサーバーアーキテクチャにビルドされます。[Nitro System 上に構築されインスタンス](#)で実行される、最も要求の厳しい I/O 集約型アプリケーションのパフォーマンス要件を満たす目的として構築されています。最高級の耐久性と最小限のレイテンシーを備えた Block Express は、Oracle、SAP HANA、Microsoft SQL Server、SAS Analytics など、パフォーマンス重視のミッションクリティカルなワークロードの実行に最適です。

Block Express アーキテクチャにより、io2 ボリュームのパフォーマンスとスケールが向上します。Block Express サーバーは、Scalable Reliable Datagram (SRD) ネットワークプロトコルを使用して[Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)と通信します。このインターフェイスは、インスタンスのホストハードウェア上の Amazon EBS I/O 機能専用の Nitro Card に実装されます。I/O 遅延とレイテンシーのバラツキ (ネットワークジッター) を最小限に抑え、より高速で安定したパフォーマンスをアプリケーションに提供します。

io2 Block Express ボリュームは、年間故障率 (AFR) が 0.001% 以下で 99.999% のボリューム耐久性を提供するように設計されています。これは、1 年間で実行中のボリューム 100,000 個あたりにつき 1 つのボリュームの故障に相当します。io2 Block Express ボリュームは、ミリ秒未満のレイテンシーを実現する、単一ボリュームの恩恵を受けるワークロードに適しており、ボリュームより高い IOPS、より高いスループット、より大規模な gp3 ボリュームをサポートします。

プロビジョンド IOPS SSD (io2) Block Express ボリュームは、期間の 99.9 パーセントにわたり、プロビジョニングされた IOPS パフォーマンスを実現します。

io2 Block Express ボリュームは、[Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)のすべてでサポートされます。詳細については、[io2 Block Express ボリューム](#)を参照してください。

トピック

- [考慮事項](#)
- [パフォーマンス](#)

考慮事項

- io2 Block Express ボリュームは、米国東部 (オハイオ)、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (北カリフォルニア)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (香港)、カナダ (中部)、アジアパシフィック (ムンバイ)、アジアパシフィック (ソウル)、アジアパシフィック (シンガポール)、アジアパシフィック (シドニー)、アジアパシフィック (東京)、カナダ (中部)、欧州 (フランクフル

ト)、欧州 (アイルランド)、欧州 (ロンドン)、欧州 (ストックホルム)、および中東 (バーレーン) の各リージョンで利用できます。

- 2023 年 11 月 21 日以降に作成されたすべての io2 ボリュームは io2 Block Express ボリュームです。2023 年 11 月 21 日より前に作成された io2 ボリュームは、[ボリュームの IOPS またはサイズを変更する](#)ことで io2 Block Express ボリュームに変換できます。
- [Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)は、最大 64 TiB のサイズのボリュームにアタッチできます。他のインスタンスタイプは、最大 16 TiB のサイズのボリュームにアタッチできます。
- [Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)は、最大 256,000 IOPS でプロビジョニングされたボリュームにアタッチできます。他のインスタンスタイプは、最大 64,000 IOPS まででプロビジョニングされたボリュームにアタッチできますが、最大 32,000 IOPS までプロビジョニングできません。
- 16 TiB を超えるサイズまたは 64,000 を超える IOPS の io2 暗号化ボリューム、暗号化されていないスナップショットまたは共有暗号化スナップショットから作成するには、以下を行う必要があります。
 1. アカウントでそのスナップショットの暗号化されたコピーを作成します。
 2. そのスナップショットコピーを使用してボリュームを作成する

パフォーマンス

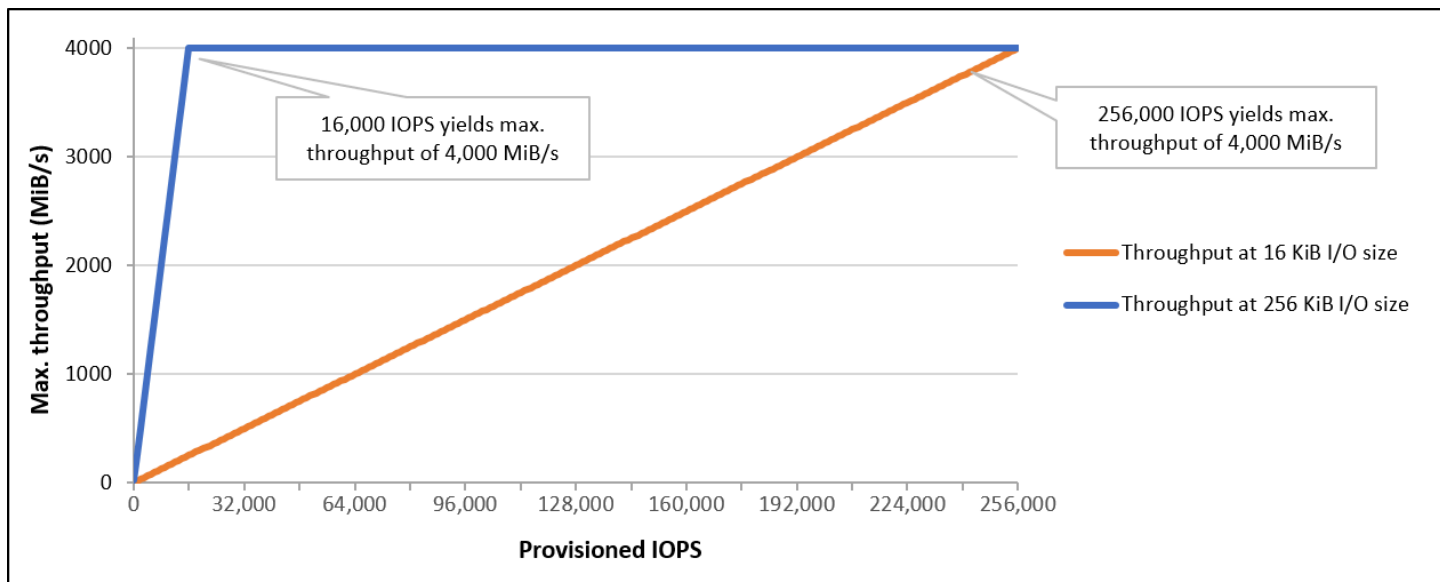
io2 Block Express ボリュームを使用すると、次のようにボリュームをプロビジョニングできます。

- ミリ秒未満の平均レイテンシー
- 最大 64 TiB (65,536 GiB) までのストレージ容量
- IOPS:GiB 比は 1,000:1 の、最大 256,000 のプロビジョンド IOPS。最大 IOPS は、256 GiB 以上でプロビジョニングできます (1,000 IOPS × 256 GiB = 256,000 IOPS)。

Note

[Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)で最大 256,000 IOPS を実現できます。他のインスタンスでは、最大 32,000 IOPS のパフォーマンスを達成できます。

- 最大 4,000 MiB/秒のボリュームスループット。スループットはプロビジョンド IOPS ごとに最大 0.256 MiB/秒に比例して拡張できます。16,000 IOPS 以上で最大スループットに達します。



Provisioned IOPS SSD (io1) ボリューム

プロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームは、ランダムアクセス I/O スループットにおけるストレージパフォーマンスと整合性が重要な、I/O 集約型ワークロード (特にデータベースワークロード) のニーズを満たすように設計されています。プロビジョンド IOPS SSD ボリュームでは、ボリュームの作成時に指定した、一貫性のある IOPS レートを使用します。Amazon EBS では、プロビジョニングされたパフォーマンスを 99.9% 提供します。

io1 ボリュームは、1 桁ミリ秒のレイテンシーと 99.8~99.9% のボリューム耐久性を提供し、年間故障率 (AFR) は 0.2% 以下です。これは、1 年間の期間において故障するボリュームの数が、実行中の 1,000 個のボリュームあたり最大 2 個であることを意味します。

io1 ボリュームは、すべての Amazon EC2 インスタンスタイプで使用できます。

パフォーマンス

io1 ボリュームのサイズは 4 GiB~16 TiB であり、ボリュームあたり 100 IOPS から最大 64,000 IOPS をプロビジョニングできます。リクエストされたボリュームサイズに対するプロビジョンド IOPS の最大割合 (GiB 単位) は 50:1 です。たとえば、100 GiB の io1 ボリュームは最大 5,000 IOPS でプロビジョニングできます。

1,280 GiB 以上のボリュームに対して、最大 IOPS をプロビジョニングできます ($50 \times 1,280 \text{ GiB} = 64,000 \text{ IOPS}$)。

- 最大 32,000 IOPS でプロビジョニングされた io1 ボリュームは、最大 256 KiB の I/O サイズをサポートし、最大 500 MiB/秒のスループットを生み出します。最大の I/O サイズでは、ピークのスループットが 2,000 IOPS に達します。
- 32,000 IOPS 超 (最大 64,000 IOPS) でプロビジョニングされた io1 ボリュームでは、プロビジョンド IOPS あたり 16 KiB のレートでスループットが直線的に増加します。例えば、48,000 IOPS でプロビジョニングされたボリュームは、最大 750 MiB/秒のスループット (プロビジョンド IOPS あたり 16 KiB × 48,000 プロビジョンド IOPS = 750 MiB/秒) をサポートできます。
- 1,000 MiB/秒の最大スループットを実現するには、ボリュームを 64,000 IOPS (プロビジョンド IOPS あたり 16 KiB × 64,000 プロビジョンド IOPS = 1,000 MiB/秒) でプロビジョニングする必要があります。
- [Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)で最大 64,000 IOPS のみを実現できます。他のインスタンスでは、最大 32,000 IOPS のパフォーマンスを達成できます。

次のグラフは、これらのパフォーマンスの特長を示しています。



発生する I/O あたりのレイテンシーは、プロビジョニングされる IOPS とワークロードプロファイルによって異なります。最適な I/O レイテンシーのエクスペリエンスを得るには、ワークロードの I/O プロファイルを満たすように IOPS をプロビジョニングしてください。

スループット最適化 HDD ボリュームと Cold HDD ボリューム

Amazon EBS によって提供される HDD-Backed ボリュームは、次のカテゴリに分類されます。

- スループット最適化 HDD: 高いスループットを必要とするアクセス頻度の高いワークロード向けの低コストの HDD

- Cold HDD: アクセス頻度の低いワークロード向けの最も低コストの HDD 設計

トピック

- [インスタンスごとのスループット制限](#)
- [スループット最適化 HDD ボリューム](#)
- [Cold HDD ボリューム](#)
- [HDD ボリュームを使用するときのパフォーマンスに関する考慮事項](#)
- [ボリュームのバーストバケットバランスのモニタリング](#)

インスタンスごとのスループット制限

st1 ボリュームと sc1 ボリュームのスループットは常に、次のいずれか小さい方によって決定されます。

- ボリュームのスループット制限
- インスタンスのスループット制限

ネットワークボトルネックを回避するには、すべての Amazon EBS ボリュームで、EBS 最適化 EC2 インスタンスを選択することをお勧めします。

スループット最適化 HDD ボリューム

スループット最適化 HDD (st1) ボリュームは、IOPS ではなくスループットでパフォーマンスを示す、低コストの磁気ストレージに使用できます。このボリュームタイプは、Amazon EMR、ETL、データウェアハウス、ログ処理など、サイズの大きなシーケンシャルワークロードに適しています。ブート可能な st1 ボリュームはサポートされていません。

スループット最適化 HDD (st1) ボリュームは Cold HDD (sc1) ボリュームに類似していますが、アクセスが頻繁なデータをサポートするように設計されています。

このボリュームタイプは、サイズの大きなシーケンシャル I/O が含まれるワークロードに適しており、サイズの小さなランダム I/O を実行するワークロードのお客様には、gp2 の使用をお勧めします。詳細については、「[HDD に対する読み取り/書き込みサイズが小さい場合の非効率性](#)」を参照してください。

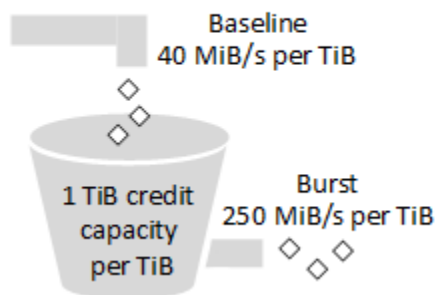
スループット最適化 HDD (st1) ポリユームを EBS 最適化インスタンスにアタッチすると、一貫したパフォーマンスが維持され、1 年で 99% の期間、想定されるスループットパフォーマンスの少なくとも 90% のポリユームが提供されます。

スループットクレジットとバーストパフォーマンス

gp2 と同様、st1 でもパフォーマンスのためにバーストバケットモデルが使用されます。ポリユームのベースラインスループット (ポリユームのスループットクレジットが蓄積されるレート) は、ポリユームサイズによって決まります。ポリユームのバーストスループット (クレジットがある場合に可能な消費レート) もポリユームサイズによって決まります。ポリユームが大きいほど、ベースラインとバーストスループットの値も大きくなります。また、ポリユームのクレジットが多いほど、バーストレベルでドライブ I/O に使用できる時間が長くなります。

次の図は、st1 のバーストバケット動作を示しています。

ST1 burst bucket



スループットとスループットクレジットの上限により、st1 ポリユームで使用可能なスループットは、以下の計算式で示されます。

$$(\text{Volume size}) \times (\text{Credit accumulation rate per TiB}) = \text{Throughput}$$

1 TiB の st1 ポリユームの場合、バーストスループットは 250 MiB/秒に制限され、バケットのクレジットは 40 MiB/秒で最大 1 TiB 分まで累積されます。

容量が大きいほど、これらの制限はリニアにスケールされ、スループットは最大 500 MiB/秒に制限されます。バケットが枯渇した後は、スループットは TiB あたり 40 MiB/秒のベースラインレートに制限されます。

ポリユームサイズが 0.125 ~ 16 TiB の場合、ベースラインスループットの範囲は 5 MiB/秒 ~ 500 MiB/秒 (上限値) です。次に示すように、この最大値には 12.5 TiB で到達します。

$$12.5 \text{ TiB} \times \frac{40 \text{ MiB/s}}{12.5} = 500 \text{ MiB/s}$$

1 TiB

バーストスループットの範囲は、31 MiB/秒～500 MiB/秒 (上限) です。次に示すように、この上限には 2 TiB で到達します。

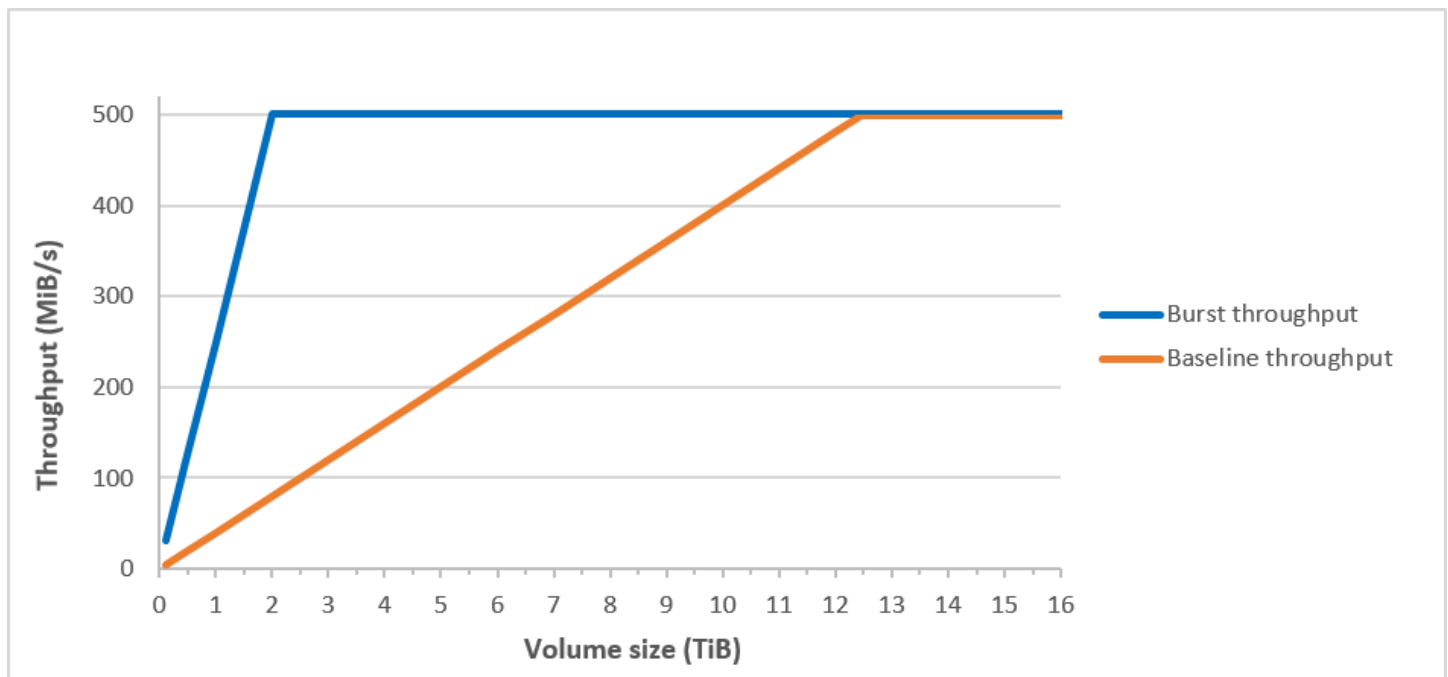
$$2 \text{ TiB} \times \frac{250 \text{ MiB/s}}{1 \text{ TiB}} = 500 \text{ MiB/s}$$

次の表は、st1 のベーススループット値およびバーストスループット値の範囲を示します。

ボリュームサイズ (TiB)	ST1 ベーススループット (MiB/秒)	ST1 バーストスループット (MiB/秒)
0.125	5	31
0.5	20	125
1	40	250
2	80	500
3	120	500
4	160	500
5	200	500
6	240	500
7	280	500
8	320	500
9	360	500
10	400	500
11	440	500
12	480	500

ボリュームサイズ (TiB)	ST1 ベーススループット (MiB/秒)	ST1 バーストスループット (MiB/秒)
12.5	500	500
13	500	500
14	500	500
15	500	500
16	500	500

次の図は、テーブルの値をグラフで示したものです。



Note

スループット最適化 HDD (st1) ボリュームのスナップショットを作成すると、スナップショットの進行中はボリュームのベースライン値までパフォーマンスが低下します。

CloudWatch メトリクスとアラームを使用してバーストバケット残高を監視する方法については、[を参照してください。ボリュームのバーストバケットバランスのモニタリング](#)

Cold HDD ボリューム

Cold HDD (sc1) ボリュームは、IOPS ではなくスループットでパフォーマンスを示す、低コストの磁気ストレージに使用できます。st1 は、sc1 よりスループット制限が低く、サイズの大きなコールドデータのシーケンシャルワークロードに適しています。データへのアクセス頻度が低く、コストの削減が必要である場合は、低コストなブロックストレージとして sc1 を使用できます。ブート可能な sc1 ボリュームはサポートされていません。

Cold HDD (sc1) ボリュームは、スループット最適化 HDD (st1) ボリュームに類似していますが、アクセス頻度が低いデータをサポートするように設計されています。

Note

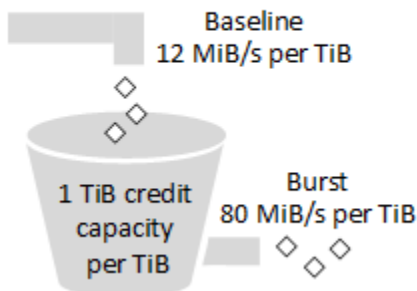
このボリュームタイプは、サイズの大きなシーケンシャル I/O が含まれるワークロードに適しており、サイズの小さなランダム I/O を実行するワークロードのお客様には、gp2 の使用をお勧めします。詳細については、「[HDD に対する読み取り/書き込みサイズが小さい場合の非効率性](#)」を参照してください。

Cold HDD (sc1) ボリュームを EBS 最適化インスタンスにアタッチすると、一貫したパフォーマンスが維持され、1 年で 99% の期間、想定されるスループットパフォーマンスの少なくとも 90% のボリュームが提供されます。

スループットクレジットとバーストパフォーマンス

gp2 と同様、sc1 でもパフォーマンスのためにバーストバケットモデルが使用されます。ボリュームのベースラインスループット (ボリュームのスループットクレジットが蓄積されるレート) は、ボリュームサイズによって決まります。ボリュームのバーストスループット (クレジットがある場合に可能な消費レート) もボリュームサイズによって決まります。ボリュームが大きいほど、ベースラインとバーストスループットの値も大きくなります。また、ボリュームのクレジットが多いほど、バーストレベルでドライブ I/O に使用できる時間が長くなります。

SC1 burst bucket



スループットとスループットクレジットの上限により、sc1 ボリュームで使用可能なスループットは、以下の計算式で示されます。

$$(\text{Volume size}) \times (\text{Credit accumulation rate per TiB}) = \text{Throughput}$$

1 TiB の sc1 ボリュームの場合、バーストスループットは 80 MiB/秒に制限され、バケットのクレジットは 12 MiB/秒で最大 1 TiB 分まで累積されます。

容量が大きいほど、これらの制限はリニアにスケールされ、スループットは最大 250 MiB/秒に制限されます。バケットが枯渇した後は、スループットは TiB あたり 12 MiB/秒のベースラインレートに制限されます。

ボリュームサイズが 0.125 ~ 16 TiB の場合、ベースラインスループットの範囲は 1.5 MiB/秒 ~ 192 MiB/秒 (最大値) です。次に示すように、この最大値には 16 TiB で到達します。

$$16 \text{ TiB} \times \frac{12 \text{ MiB/s}}{1 \text{ TiB}} = 192 \text{ MiB/s}$$

バーストスループットの範囲は、10 MiB/秒 ~ 250 MiB/秒 (上限) です。次に示すように、この上限には 3.125 TiB で到達します。

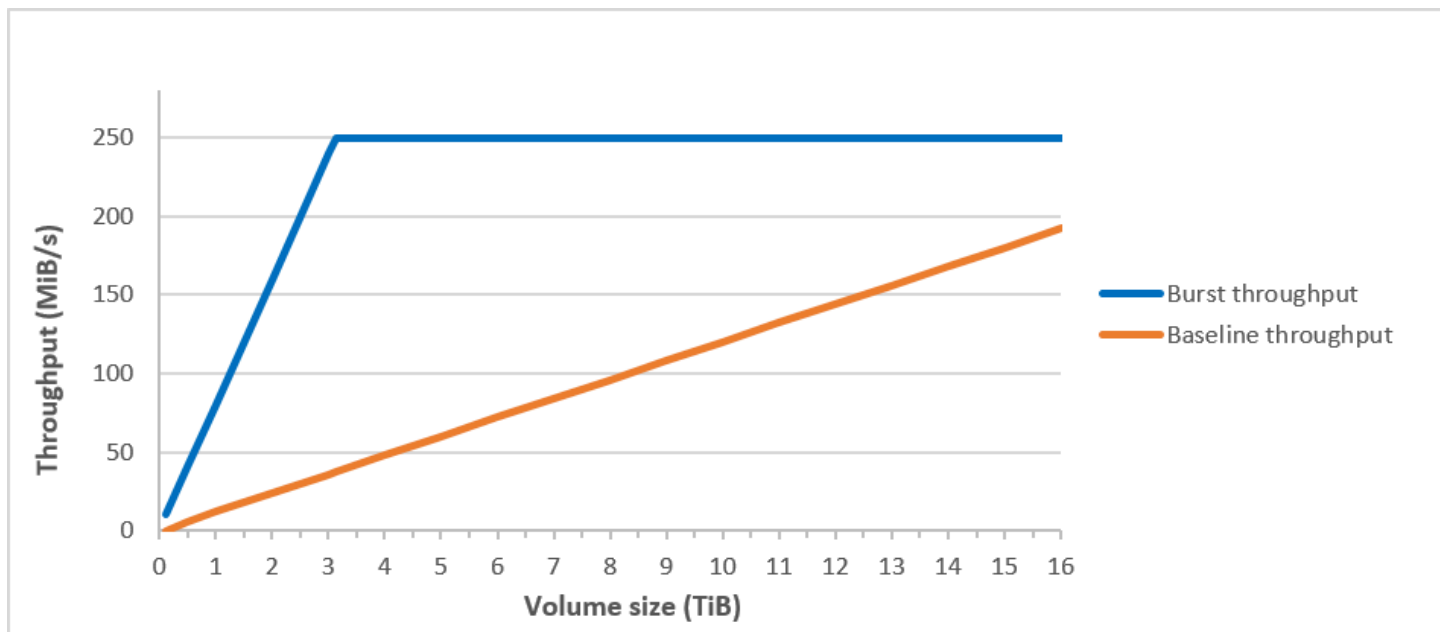
$$3.125 \text{ TiB} \times \frac{80 \text{ MiB/s}}{1 \text{ TiB}} = 250 \text{ MiB/s}$$

次の表は、sc1 のベーススループット値およびバーストスループット値の範囲を示します。

ボリュームサイズ (TiB)	SC1 ベーススループット (MiB/秒)	SC1 バーストスループット (MiB/秒)
0.125	1.5	10
0.5	6	40
1	12	80
2	24	160
3	36	240

ボリュームサイズ (TiB)	SC1 ベーススループット (MiB/秒)	SC1 バーストスループット (MiB/秒)
3.125	37.5	250
4	48	250
5	60	250
6	72	250
7	84	250
8	96	250
9	108	250
10	120	250
11	132	250
12	144	250
13	156	250
14	168	250
15	180	250
16	192	250

次の図は、テーブルの値をグラフで示したものです。



Note

Cold HDD (sc1) ボリュームのスナップショットを作成すると、スナップショットの進行中はボリュームのベースライン値までパフォーマンスが低下します。

CloudWatch メトリクスとアラームを使用してバーストバケット残高をモニタリングする方法については、[を参照してください。](#) [ボリュームのバーストバケットバランスのモニタリング](#)

HDD ボリュームを使用するときのパフォーマンスに関する考慮事項

HDD ボリュームを使用して最適なスループットを実現するには、次の考慮事項を念頭に置いてワークロードを計画してください。

スループット最適化 HDD と Cold HDD との比較

st1 と sc1 のバケットサイズはボリュームサイズによって異なり、フルバケットにはフルボリュームスキャンのための十分なトークンが含まれています。ただし、st1 ボリュームと sc1 ボリュームの場合は、サイズが大きくなるほど、インスタンスごとおよびボリュームごとのスループット制限により、ボリュームスキャンの完了にかかる時間が長くなります。ボリュームが小さなインスタンスにアタッチされている場合は、st1 または sc1 のスループット制限よりインスタンスごとのスループットの方に制限されます。

st1 と sc1 のいずれも、全体のうち 99% の時間はバーストスループットの 90% のパフォーマンス安定性を実現できるよう設計されています。毎時間、予測合計スループットの 99% 達成を目標に、準拠しない期間はほぼ均一に分散されています。

スキャン時間は、一般的にこの式で示します。

$$\frac{\text{Volume size}}{\text{Throughput}} = \text{Scan time}$$

例えば、パフォーマンス安定性の保証と他の最適化を想定すると、5 TiB のボリュームを持つ st1 のお客様は、フルボリュームスキャンが 2.91~3.27 時間で完了すると予測できます。

- 最適なスキャン時間

$$\frac{5 \text{ TiB}}{500 \text{ MiB/s}} = \frac{5 \text{ TiB}}{0.00047684 \text{ TiB/s}} = 10,486 \text{ seconds} = 2.91 \text{ hours}$$

- 最大スキャン時間

$$\frac{2.91 \text{ hours}}{(0.90)(0.99)} = 3.27 \text{ hours}$$

(0.90)(0.99) <-- From expected performance of 90% of burst 99% of the time

同様に、5 TiB のボリュームを持つ sc1 のお客様は、フルボリュームスキャンが 5.83~6.54 時間で完了すると予測できます。

- 最適なスキャン時間

$$\frac{5 \text{ TiB}}{250 \text{ MiB/s}} = \frac{5 \text{ TiB}}{0.000238418 \text{ TiB/s}} = 20972 \text{ seconds} = 5.83 \text{ hours}$$

- 最大スキャン時間

$$\frac{5.83 \text{ hours}}{(0.90)(0.99)} = 6.54 \text{ hours}$$

次の表は、フルバケットと十分なインスタンススループットを前提として、さまざまなサイズのボリュームに関する最も望ましいスキャン時間を示します。

ボリュームサイズ (TiB)	ST1 のスキャン時間、バーストを含む (時間)*	SC1 のスキャン時間、バーストを含む (時間)*
1	1.17	3.64
2	1.17	3.64
3	1.75	3.64
4	2.33	4.66
5	2.91	5.83
6	3.50	6.99
7	4.08	8.16
8	4.66	9.32
9	5.24	10.49
10	5.83	11.65
11	6.41	12.82
12	6.99	13.98
13	7.57	15.15
14	8.16	16.31
15	8.74	17.48
16	9.32	18.64

* これらのスキャン時間では、1 MiB のシーケンシャル I/O を実行する際のカューの平均深度 (整数に四捨五入) として 4 以上を前提としています。

したがって、スキャンを早く (最大 500 MiB/秒) 完了するために必要なスループット指向のワークロードがある場合や、または 1 日に複数のフルボリュームスキャンが必要な場合は、st1 を使用してください。コストを最適化している場合、データのアクセス頻度が比較的低い場合、スキャンのパフォーマンスとして 250 MiB/秒を超える必要がない場合は、sc1 を使用してください。

HDD に対する読み取り/書き込みサイズが小さい場合の非効率性

st1 ボリュームおよび sc1 ボリュームのパフォーマンスモデルは、シーケンシャル I/O 用に最適化され、高スループットのワークロードに適しています。多様な IOPS およびスループットのワークロードに対して許容範囲のパフォーマンスを提供しますが、サイズの小さなランダム I/O のワークロードには向いていません。

例えば、1 MiB 以下の I/O リクエストは、1 MiB の I/O クレジットとしてカウントされます。ただし、I/O がシーケンシャルであれば、1 MiB の I/O ブロックにマージされ、1 MiB の I/O クレジットとしてのみカウントされます。

ボリュームのバーストバケットバランスのモニタリング

Amazon で利用可能な Amazon EBS BurstBalance メトリックスを使用して st1、sc1 およびボリュームのバーストバケットレベルをモニタリングできます。CloudWatch のこのメトリックスは、バーストバケット内の残りの st1 と sc1 のスループットクレジットを示します。I/O BurstBalance に関連するメトリックスやその他のメトリックスの詳細については、[を参照してください](#)。 [Amazon EBS I/O の特性およびモニタリング](#) CloudWatch また、BurstBalance 値が特定のレベルに達したときに通知するアラームを設定することもできます。詳細については、「[アラームの作成 CloudWatch](#)」を参照してください。

EBS ボリュームのサイズと設定の制限

Amazon EBS ボリュームのサイズは、ブロックデータストレージの物理と算術だけでなく、オペレーティングシステム (OS) とファイルシステムの設計者の実装上の決定によっても制約されます。AWS サービスの信頼性を守るため、ボリュームサイズに追加の制限を課しています。

次のセクションでは、EBS ボリュームの使用可能サイズを制限する最も重要な要素と、EBS ボリュームを設定するための推奨事項について説明します。

コンテンツ

- [ストレージキャパシティ](#)
- [サービスの制約事項](#)
- [パーティションスキーム](#)

• データブロックサイズ

ストレージキャパシティ

次の表は、Amazon EBS で最も一般的に使用されているファイルシステムに実装された理論的なストレージ容量の概要を示しています (4,096 バイトのブロックサイズと仮定)。

パーティションスキーム	アドレス可能な最大ブロック	理論的な最大サイズ (ブロック x ブロックサイズ)	Ext4 に実装される最大サイズ*	XFS に実装される最大サイズ**	NTFS に実装される最大サイズ	EBS による最大サポート数
MBR	2 ³²	2 TiB	2 TiB	2 TiB	2 TiB	2 TiB
GPT	2 ⁶⁴	64 ZiB	1 EiB = 1024 ² TiB (RHEL7 で 認証され ている 50 TiB)	500 TiB (RHEL7 で認 証)	256 TiB	64 TiB†

: https://ext4.wiki.kernel.org/index.php/Ext4_Howto、および <https://access.redhat.com/solutions/1532>

** <https://access.redhat.com/solutions/1532>

† io2 Block Express ボリュームは、最大 64 TiB の GPT パーティションをサポートします。詳細については、[プロビジョンド IOPS SSD \(io2\) Block Express ボリューム](#)を参照してください。

サービスの制約事項

Amazon EBS では、データセンターの大規模な分散ストレージを仮想ハードディスクドライブに抽象化しています。EC2 インスタンスにインストールされたオペレーティングシステムにとって、アタッチされた EBS ボリュームは、512 バイトのディスクセクタを含む物理ハードディスクドライブのように見えます。OS は、ストレージ管理ユーティリティを使用して、データブロック (またはクラスター) をその仮想セクタに割り当てます。この割り当ては、マスターブートレコード (MBR) または GUID パーティションテーブル (GPT) などのボリュームパーティションスキームに準拠してお

り、インストールされているファイルシステム (ext4、NTFS など) の機能の範囲内で行うことができます。

EBS では、仮想ディスクセクタ内のデータは認識されません。セクタの整合性の保護のみ行われません。つまり、AWS アクションと OS アクションは互いに独立しているということです。ボリュームサイズを選択する場合は、次のように機能と制限の両方に注意してください。

- EBS では現在、最大 64 TiB のボリュームサイズがサポートされています。つまり、最大 64 TiB の EBS ボリュームを作成することはできますが、OS でその容量が認識されるかどうかは、その OS 自体の設計特性と、ボリュームのパーティションスキームによって異なります。
- ブートボリュームは、MBR または GPT パーティションスキームのいずれかを使用する必要があります。インスタンスを起動する AMI はブートモードを決定し、その後はブートボリュームに使用するパーティションスキームを決定します。

MBR を使用すると、ブートボリュームのサイズは 2 TiB に制限されます。

GPT を使用すると、GRUB2 (Linux) または UEFI ブートモード (Windows) と使用した場合、ブートボリュームは最大 64 TiB のサイズにすることができます。

詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」を参照してください。

- 2 TiB (2048 GiB) 以上の非ブートボリュームは、ボリューム全体にアクセスするには GPT パーティションテーブルを使用する必要があります。

パーティションスキーム

他にも影響がある中で、このパーティションスキームは、単一ボリュームで一意にアドレス解決できる論理データブロックの数を決定します。詳細については、[データブロックサイズ](#)を参照してください。使用されている一般的なパーティショニングスキームは、[Master Boot Record] マスターブートレコード (MBR) と GUID パーティションテーブル (GPT) です。これらのパーティションスキームの重要な違いは次のようにまとめることができます。

MBR

MBR では、32 ビットのデータ構造を使用して、ブロックアドレスを格納します。これは、各データブロックが、正の整数 2^{32} のいずれかにマッピングされることを意味します。アドレス可能なボリュームの最大サイズは、次の式により得られます。

$$2^{32} \times \text{Block size}$$

MBR ボリュームのブロックサイズは、通常 512 バイトに制限されています。したがって、

$$2^{32} \times 512 \text{ bytes} = 2 \text{ TiB}$$

この MBR ボリュームの 2 TiB の制限を増やすための回避策は、一般的に広く普及していません。そのため、Linux と Windows では、MBR ボリュームのサイズが 2 TiB AWS より大きいと表示されても、その MBR ボリュームが 2 TiB より大きいことは検出されません。

GPT

GPT では、64 ビットのデータ構造を使用して、ブロックアドレスを格納します。これは、各データブロックが、正の整数 2^{64} のいずれかにマッピングされることを意味します。アドレス可能なボリュームの最大サイズは、次の式により得られます。

$$2^{64} \times \text{Block size}$$

GPT ボリュームのブロックサイズは、一般的に 4,096 バイトです。したがって、

$$\begin{aligned} 2^{64} \times 4,096 \text{ bytes} \\ &= 2^{64} \times 2^{12} \text{ bytes} \\ &= 2^{70} \times 2^6 \text{ bytes} \\ &= 64 \text{ ZiB} \end{aligned}$$

実際のコンピュータシステムでは、この理論上の最大値のような大きな値はサポートされていません。実装されたファイルシステムのサイズは現在、ext4 では 50 TiB、NTFS では 256 TiB に制限されています。

データブロックサイズ

現代のハードドライブ上のデータストレージは、論理ブロックアドレスや、オペレーティングシステムで基礎となるハードウェアをほとんど把握することなく論理ブロック内のデータを読み書きできる抽象化レイヤーによって管理されています。OS は、ストレージデバイスを使用して、このブロックを物理セクタにマッピングしています。EBS は 512 バイトのセクタをオペレーティングシステムに割り当てます。これにより、セクタサイズの倍数であるデータブロックを使用してディスクへのデータの読み書きを行うことができます。

論理データブロックの一般的なデフォルトサイズは、現在 4,096 バイト (4 KiB) です。ワークロードによっては、ブロックサイズが小さいまたは大きい方がメリットを得られるため、ファイルシステ

ムはデフォルト以外のブロックサイズをサポートしています。このサイズはフォーマット時に指定できます。デフォルト以外のブロックサイズのシナリオは、このトピックの対象外ですが、指定したブロックサイズによっては、ボリュームのストレージキャパシティーに影響を及ぼす場合があります。次の表に、ブロックサイズの機能としてストレージキャパシティーを示します。

ブロックサイズ	最大ボリュームサイズ
4 KiB (デフォルト)	16 TiB
8 KiB	32 TiB
16 KiB	64 TiB
32 KiB	128 TiB
64 KiB (最大)	256 TiB

EBS で指定されているボリュームサイズ (64 TiB) の制限は、現在 16 KiB のデータブロックで使用できる最大サイズと同等です。

Amazon EBS および NVMe

EBS ボリュームは、[Nitro System](#)上に構築されたインスタンスで NVMe ブロックデバイスとして公開されます。

[Amazon EBS 製品の詳細](#)に記載されている EBS パフォーマンスガイダンスは、ブロックデバイスインターフェイスに関係なく有効です。

Linux インスタンス

デバイス名は、「/dev/nvme0n1」や「/dev/nvme1n1」などです。ブロックデバイスマッピングで指定したデバイス名は、NVMe デバイス名 (/dev/nvme[0-26]n1) を使用して名称変更されます。ブロックデバイスドライバは、ブロックデバイスマッピングのボリュームに指定した順序とは異なる順序で NVMe デバイス名を割り当てることができます。

Windows インスタンス

インスタンスにボリュームをアタッチする場合は、ボリュームのデバイス名を含めます。このデバイス名は Amazon EC2 によって使用されます。インスタンスのブロックデバイスドライバは、ポ

ボリュームのマウント時に実際のボリューム名を割り当て、この割り当てられた名前は Amazon EC2 が使用する名前とは異なる可能性があります。

コンテンツ

- [NVMe ドライバのインストールまたはアップグレード](#)
- [EBS デバイスの特定](#)
- [NVMe EBS ボリュームの操作](#)
- [I/O オペレーションタイムアウト](#)
- [Abort コマンド](#)

NVMe ドライバのインストールまたはアップグレード

NVMe ボリュームにアクセスするには、NVMe ドライバーをインストールする必要があります。インスタンスは、NVMe ボリュームタイプである NVMe EBS ボリュームや NVMe インスタンスストアボリュームも、NVMe ボリュームタイプでないボリュームもサポートできます。詳細については、「[ネットワーク機能とストレージ機能の概要](#)」を参照してください。

Linux インスタンス

以下の AMI には、必要な NVMe ドライバーが含まれています。

- Amazon Linux 2
- Amazon Linux AMI 2018.03
- linux-aws カーネルを搭載した Ubuntu 14.04 以降

Note

AWS Graviton ベースのインスタンスタイプには、カーネルを搭載した Ubuntu 18.04 以降が必要です linux-aws

- Red Hat Enterprise Linux 6.5 以降
- Red Hat Enterprise Linux 7.4 以降
- SUSE Linux Enterprise Server 12 SP2 以降
- CentOS 7.4.1708 以降
- FreeBSD 11.1 以降
- Debian GNU/Linux 9 以降

インスタンスに NVMe ドライバーがあることを確認するには

次のコマンドを使用して、インスタンスに NVMe ドライバーがあることを確認できます。

- Amazon Linux、RHEL、CentOS、SUSE Linux Enterprise Server

```
$ modinfo nvme
```

インスタンスに NVMe ドライバーがある場合、コマンドはそのドライバーに関する情報を返します。

- Amazon Linux 2、Ubuntu

```
$ ls /sys/module/ | grep nvme
```

インスタンスに NVMe ドライバーがある場合、コマンドはインストールされたドライバーを返します。

NVMe ドライバーを更新するには

インスタンスに NVMe ドライバーがある場合は、次の手順を使用してドライバーを最新バージョンに更新できます。

1. インスタンスに接続します。
2. パッケージのキャッシュを更新し、必要なパッケージの更新を次のように取得します。

- Amazon Linux 2、Amazon Linux、CentOS、Red Hat Enterprise Linux の場合:

```
[ec2-user ~]$ sudo yum update -y
```

- Ubuntu と Debian の場合:

```
[ec2-user ~]$ sudo apt-get update -y
```

3. Ubuntu 16.04 以降には、`linux-aws` パッケージが含まれます。このパッケージには、Nitro ベースのインスタンスで必要な NVMe および ENA ドライバーが含まれます。最新バージョンにするには、次のように `linux-aws` パッケージにアップグレードします。

```
[ec2-user ~]$ sudo apt-get install --only-upgrade -y linux-aws
```

Ubuntu 14.04 の場合は、次のように最新の `linux-aws` パッケージをインストールできます。

```
[ec2-user ~]$ sudo apt-get install linux-aws
```

4. インスタンスを再起動して、最新のカーネルバージョンを読み込みます。

```
sudo reboot
```

5. 再起動後にインスタンスに再接続します。

Windows インスタンス

AWS Windows Server 2008 R2 以降の Windows AMI には NVMe ドライバーが含まれています。AWS Amazon が提供する最新の AWS Windows AMI を使用していない場合は、『Windows インスタンス用 Amazon EC2 ユーザーガイド』の「[を使用して AWS PowerShell NVMe ドライバーをインストールまたはアップグレードする](#)」を参照してください。

EBS デバイスの特定

EBS では、シングルルート I/O 仮想化 (SR-IOV) を使用して、NVMe 規格を使用して Nitro ベースのインスタンスにボリュームをアタッチします。これらのデバイスは、オペレーティングシステムの標準 NVMe ドライバーに依存しています。これらのドライバーは、通常、インスタンスのブート時にアタッチ済みのデバイスを検出し、そのデバイスがブロックデバイスマッピングでどのように指定されているかではなく、デバイスが応答する順序に基づいてデバイスノードを作成します。

Linux インスタンス

Linux では、NVMe デバイス名は `/dev/nvme<x>n<y>` のパターンに従います。ただし、`<x>` は列挙順序で、EBS の場合の `<y>` は 1 です。場合によっては、デバイスは後続のインスタンスの開始時に異なる順序で検出に応答することがあり、デバイス名が変更されます。また、ブロックデバイスドライバーによって割り当てられるデバイス名は、ブロックデバイスマッピングで指定される名前と異なる場合があります。

インスタンス内の EBS ボリュームには、次のいずれかのような安定した識別子を使用することをお勧めします。

- Nitro ベースのインスタンスでは、ブロックデバイスマッピングは、EBS ボリュームをアタッチしているとき、または `AttachVolume` が `RunInstances` API コールが、NVMe コントローラー

ID のベンダー固有のデータフィールドに取り込まれる際に Amazon EC2 コンソールで指定されます。バージョン 2017.09.01 以降の Amazon Linux AMI で、このデータを読み込んでブロックデバイスマッピングへのシンボリックリンクを作成する udev ルールを提供します。

- EBS ボリューム ID とマウントポイントは、インスタンスの状態が変化しても安定しています。NVMe デバイス名は、インスタンスの起動時にデバイスが応答する順序に応じて変化します。一貫性のあるデバイスを識別するには、EBS ボリューム ID とマウントポイントを使用することをお勧めします。
- NVMe EBS ボリュームには、EBS ボリューム ID がデバイス ID のシリアル番号として設定されています。シリアル番号を一覧表示するには、`lsblk -o +SERIAL` コマンドを使用します。
- NVMe デバイス名の形式は、EBS ボリュームがインスタンスの起動中または起動後にアタッチされたかどうかによって異なります。インスタンスの起動後にアタッチされたボリュームの NVMe デバイス名には、`/dev/`プレフィクスが含まれますが、インスタンスの起動中にアタッチされたボリュームの NVMe デバイス名には `/dev/`プレフィクスが含まれません。Amazon Linux または FreeBSD AMI を使用している場合は、`sudo ebsnvme-id /dev/nvme0n1 -u` コマンドを使用して、一貫した NVMe デバイス名を指定します。その他のディストリビューションでは `sudo nvme id-ctrl -v /dev/nvme0n1` コマンドを使用して NVMe デバイス名を指定します。
- デバイスがフォーマットされると、ファイルシステムの存続期間中、存続する UUID が生成されます。デバイスラベルは同時に指定することができます。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」および「[間違ったボリュームからの起動](#)」を参照してください。

Amazon Linux AMI

AMI Amazon Linux 2017.09.01 以降 (Amazon Linux 2 を含む) では、次のように `ebsnvme-id` コマンドを実行して、NVMe デバイス名をボリューム ID とデバイス名にマップすることができます。

次の例は、インスタンスの起動時にアタッチされたボリュームのコマンドと出力を示しています。NVMe デバイス名には、`/dev/`プレフィクスが含まれないことに注意してください。

```
[ec2-user ~]$ sudo /sbin/ebsnvme-id /dev/nvme0n1
Volume ID: vol-01324f611e2463981
sda
```

次の例は、インスタンスの起動後にアタッチされたボリュームのコマンドと出力を示しています。NVMe デバイス名に、`/dev/`プレフィクスが含まれることに注意してください。

```
[ec2-user ~]$ sudo /sbin/ebsnvme-id /dev/nvme1n1
```



```
Volume ID: vol-064784f1011136656  
/dev/sdf
```

また、Amazon Linux はブロックデバイスマッピング (例えば、`/dev/sdf`) 内のデバイス名から NVMe デバイス名へのシンボリックリンクを作成します。

FreeBSD AMI

FreeBSD 12.2-RELEASE 以降では、上記のように `ebsnvme-id` コマンドを実行することができます。NVMe デバイスの名前 (`nvme0` など) またはディスクデバイス (`nvd0` または `nda0`) を渡します。FreeBSD は、ディスクデバイスへのシンボリックリンク (`/dev/aws/disk/ebs/volume_id` など) も作成します。

その他の Linux AMI

カーネルバージョン 4.2 以降では、次のように `nvme id-ctrl` コマンドを実行して、NVMe デバイスをボリューム ID にマップすることができます。最初に、Linux ディストリビューションのパッケージ管理ツールを使用して、NVMe コマンドラインのパッケージ `nvme-cli` をインストールします。他のディストリビューションのダウンロードおよびインストール手順については、ディストリビューションに固有のドキュメントを参照してください。

次の例では、インスタンスの起動時にアタッチされたボリュームのボリューム ID と NVMe デバイス名を取得します。NVMe デバイス名には、`/dev/`プレフィクスが含まれないことに注意してください。デバイス名は、NVMe コントローラベンダー固有の拡張子 (コントローラー ID のバイト 384:4095) を介して使用できます。

```
[ec2-user ~]$ sudo nvme id-ctrl -v /dev/nvme0n1  
NVME Identify Controller:  
vid      : 0x1d0f  
ssvid    : 0x1d0f  
sn       : vol01234567890abcdef  
mn       : Amazon Elastic Block Store  
...  
0000: 2f 64 65 76 2f 73 64 6a 20 20 20 20 20 20 20 20 "sda..."
```

次の例では、インスタンスの起動後にアタッチされたボリュームのボリューム ID と NVMe デバイス名を取得します。NVMe デバイス名には、`/dev/`プレフィクスが含まれることに注意してください。

```
[ec2-user ~]$ sudo nvme id-ctrl -v /dev/nvme1n1
```

```
NVME Identify Controller:
vid      : 0x1d0f
ssvid    : 0x1d0f
sn       : volabcdef01234567890
mn       : Amazon Elastic Block Store
...
0000: 2f 64 65 76 2f 73 64 6a 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 "/dev/sdf..."
```

lsblk コマンドは、使用可能なデバイスとそのマウントポイント (該当する場合) をリストします。これは、使用する正しいデバイス名を決定するのに役立ちます。この例では、`/dev/nvme0n1p1` がルートデバイスとしてマウントされ、`/dev/nvme1n1` はアタッチされていますがマウントされていません。

```
[ec2-user ~]$ lsblk
NAME                MAJ:MIN RM  SIZE RO TYPE MOUNTPOINT
nvme1n1              259:3   0  100G  0 disk
nvme0n1              259:0   0    8G  0 disk
  nvme0n1p1          259:1   0    8G  0 part /
  nvme0n1p128        259:2   0     1M  0 part
```

Windows インスタンス

ebsnvme-id コマンドを実行して、NVMe デバイスのディスク番号を EBS ボリューム ID およびデバイス名にマッピングできます。デフォルトでは、すべての EBS NVMe デバイスは列挙されません。特定のデバイスの情報を列挙するには、ディスク番号を渡します。ebsnvme-id このツールは、AWS で提供されている最新の Windows サーバー AMI に含まれています。C:\PROGRAMDATA\AMAZON\Tools

AWS NVMe ドライバパッケージ以降 1.5.0、ebsnvme-id ツールの最新バージョンがドライバパッケージによってインストールされます。最新バージョンはドライバーパッケージでのみ入手可能です。ebsnvme-id ツールのスタンドアロンダウンロードリンクにはアップデートが送信されなくなります。スタンドアロンリンクから入手できる最後のバージョンは 1.1.0 です。このバージョンは [ebsnvme-id.zip](#) リンクを使用してコンテンツを Amazon EC2 インスタンスに抽出することでダウンロード可能となり、ebsnvme-id.exe にアクセスできるようになります。

```
PS C:\Users\Administrator\Desktop> ebsnvme-id.exe
Disk Number: 0
Volume ID: vol-0d6d7ee9f6e471a7f
Device Name: sda1
```

```
Disk Number: 1
Volume ID: vol-03a26248ff39b57cf
Device Name: xvdd

Disk Number: 2
Volume ID: vol-038bd1c629aa125e6
Device Name: xvde

Disk Number: 3
Volume ID: vol-034f9d29ec0b64c89
Device Name: xvdb

Disk Number: 4
Volume ID: vol-03e2dbe464b66f0a1
Device Name: xvdc
PS C:\Users\Administrator\Desktop> ebsnvme-id.exe 4
Disk Number: 4
Volume ID: vol-03e2dbe464b66f0a1
Device Name: xvdc
```

NVMe EBS ボリユームの操作

NVMe EBS ボリユームをフォーマットしてマウントするには、[Amazon EBS ボリユームを使用できるようにする](#)を参照してください。

Linux インスタンス

Linux カーネル 4.2 以降を使用している場合は、NVMe EBS ボリユームのボリユームサイズを変更すると、自動的にインスタンスに反映されます。古い Linux カーネルの場合は、EBS ボリユームをデタッチしてアタッチするか、インスタンスを再起動してサイズ変更を反映させる必要があります。Linux カーネル 3.19 以降では、hdparm コマンドを次のように使用して NVMe デバイスの再スキャンを強制できます。

```
[ec2-user ~]$ sudo hdparm -z /dev/nvme1n1
```

NVMe EBS ボリユームをデタッチすると、インスタンスには、ボリユームをデタッチする前に、ファイルシステムのキャッシュまたはメタデータをフラッシュする機会が失われます。したがって、NVMe EBS ボリユームをデタッチする前に、まずそのボリユームを同期およびアンマウントする必要があります。ボリユームのデタッチに失敗した場合は、force-detachの説明に従って [インスタンスから Amazon EBS ボリユームをデタッチする](#) コマンドを試すことができます。

Windows インスタンス

最新の AWS Windows AMI には、EBS ボリュームを AWS NVMe ブロックデバイスとして公開するインスタンスタイプに必要な NVMe ドライバーが含まれています。ただし、Windows システムでルートボリュームのサイズを変更すると、この変更をインスタンスに反映するためにボリュームを再スキャンする必要があります。別の AMI からインスタンスを起動した場合、必要な AWS NVMe ドライバーが含まれていない可能性があります。インスタンスに最新の AWS NVMe ドライバーがインストールされていない場合は、インストールする必要があります。詳細については、「[AWS Windows インスタンス用 NVMe ドライバー](#)」を参照してください。

I/O オペレーションタイムアウト

ほとんどのオペレーティングシステムは、NVMe デバイスに送信される I/O オペレーションのタイムアウトを指定します。

Linux インスタンス

Linux では、Nitro ベースのインスタンスにアタッチされた EBS ボリュームは、オペレーティングシステムが提供するデフォルトの NVMe ドライバーを使用します。ほとんどのオペレーティングシステムは、NVMe デバイスに送信される I/O オペレーションのタイムアウトを指定します。デフォルトのタイムアウトは 30 秒で、`nvme_core.io_timeout` ブートパラメータを使用して変更できます。バージョン 4.6 より前の Linux カーネルでは、このパラメータは `nvme.io_timeout` です。

I/O レイテンシーがこの timeout パラメータの値を超えると、Linux NVMe ドライバーは I/O に失敗し、ファイルシステムまたはアプリケーションにエラーを返します。I/O オペレーションに応じて、ファイルシステムまたはアプリケーションはエラーを再試行できます。場合によっては、ファイルシステムを読み取り専用として再マウントすることがあります。

Xen インスタンスに接続された EBS ボリュームに類似するエクスペリエンスのため、

`nvme_core.io_timeout` を可能な限り最大値に設定することをお勧めします。現在のカーネルでは、最大値は 4294967295 ですが、以前のカーネルでは最大値は 255 です。Linux のバージョンに応じて、タイムアウトはすでにサポートされる最大値に設定されていることがあります。例えば、Amazon Linux AMI 2017.09.01 以降では、デフォルトでタイムアウトが 4294967295 に設定されています。

Linux ディストリビューションの最大値を確認するには、示されている最大値よりも高い値を `/sys/module/nvme_core/parameters/io_timeout` に書き込み、ファイルを保存する際に範囲外の数値結果エラーがないかどうかをチェックします。

Windows インスタンス

Windows では、デフォルトのタイムアウトは 60 秒で、最大は 25 秒です。TimeoutValue ディスククラスのレジストリ設定は、[SCSI ミニドライバのレジストリエントリ](#)で説明されている手順を使用して変更できます。

Abort コマンド

Abort コマンドは、以前にコントローラーに送信された特定のコマンドを中止するために発行される NVMe Admin コマンドです。このコマンドは、通常、I/O オペレーションのタイムアウトしきい値を超えたストレージデバイスに対して、デバイスドライバーによって発行されます。デフォルトで Abort コマンドをサポートする Amazon EC2 インスタンスタイプは、Abort コマンドの発行先であるアタッチされた Amazon EBS デバイスのコントローラーに以前に送信された特定のコマンドを中止します。

次のインスタンスタイプは、デフォルトで、アタッチされているすべての Amazon EBS ボリュームについて Abort コマンドをサポートします:

R5b、R6i、M6i、M6a、C6gn、C6i、X2gd、X2iezn、Im4gn、Is4gen。

他のインスタンスタイプは、アタッチされた Amazon EBS ボリュームに Abort コマンドが発行されてもアクションを実行しません。

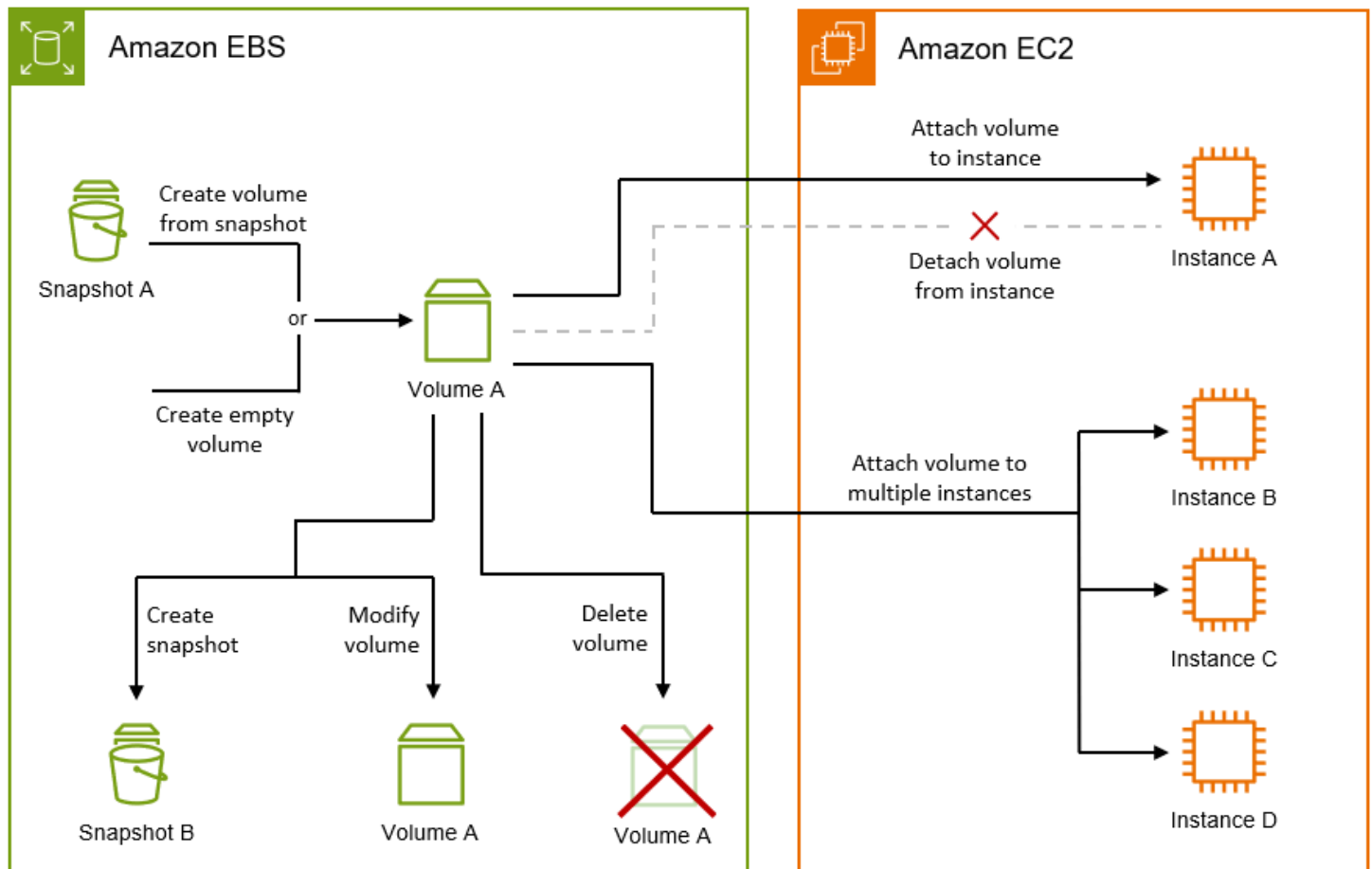
NVMe デバイスバージョン 1.4 以降の Amazon EBS デバイスは、Abort コマンドをサポートしています。

詳細については、「[NVMe Express Base Specification](#)」(NVMe Express の基本仕様)のセクション 5.1「Abort command」(中止コマンド)を参照してください。

Amazon EBS ボリュームのライフサイクル

Amazon EBS ボリュームのライフサイクルは、作成プロセスから始まります。Amazon EBS スナップショットからボリュームを作成するか、空のボリュームを作成できます。ボリュームを使用する前に、ボリュームと同じアベイラビリティゾーンにある 1 つ以上の Amazon EC2 インスタンスにボリュームをアタッチする必要があります。複数のボリュームを 1 つのインスタンスにアタッチできます。必要に応じて、1 つのインスタンスからボリュームをデタッチし、別のインスタンスにアタッチできます。ストレージ要件が変更された場合、いつでもボリュームのサイズまたはパフォーマンスを変更できます。Amazon EBS スナップショットを作成することで、point-in-timeボリュームのバックアップを作成できます。ボリュームが不要になった場合、それを削除して関連するストレージコストの発生を中止できます。

次の図は、ボリュームライフサイクルの一環としてボリュームに実行できるアクションを示しています。



インスタンスに接続してオペレーティングシステムのコマンドを実行することにより、実行するタスクもあります。たとえば、ボリュームのフォーマット、ボリュームのマウント、パーティションの管理、空きディスク容量の表示などです。

タスク

- [Amazon EBS ボリュームの作成](#)
- [インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#)
- [Amazon EBS マルチアタッチを使用した複数のインスタンスへのボリュームのアタッチ](#)
- [Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)
- [Amazon EBS ボリュームに関する情報の表示](#)
- [Amazon EBS Elastic Volumes を使用してボリュームを変更する](#)
- [インスタンスから Amazon EBS ボリュームをデタッチする](#)
- [Amazon EBS ボリュームの削除](#)

Amazon EBS ボリュームの作成

Amazon EBS ボリュームを作成し、同じアベイラビリティゾーン内の任意の EC2 インスタンスにアタッチできます。暗号化された EBS ボリュームを作成する場合、サポートされるインスタンスタイプにのみアタッチできます。詳細については、「[サポートされるインスタンスタイプ](#)」を参照してください。

高性能のストレージシナリオ用にボリュームを作成する場合、プロビジョンド IOPS ボリューム (io1 または io2) を使用して、アプリケーションをサポートするために十分な帯域幅を持つインスタンス (EBS 最適化インスタンスなど) にアタッチしてください。同様のアドバイスは、スループット最適化 HDD (st1) と Cold HDD (sc1) ボリュームにもあてはまります。

Note

Windows インスタンス用のボリュームを作成し、そのボリュームが 2048 GiB を超える場合 (または 2048 GiB より小さいが後で増加する可能性がある場合) は、GPT パーティションテーブルを使用するようにボリュームを設定してください。詳細については、[2 TB を超えるハードディスクの Windows サポート](#)を参照してください。

空の EBS ボリュームは、利用可能になるとすぐに最大のパフォーマンスを発揮し、初期化 (以前は事前ウォーミングと呼ばれました) を必要としません。ただし、スナップショットから作成されたボリュームのストレージブロックは、アクセスするためには事前に初期化する必要があります (Amazon S3 からプルダウンしてボリュームに書き込みます)。この準備処理には時間がかかるため、初めて各ブロックにアクセスした場合に、I/O 操作のレイテンシーの著しい増加が発生する可能性があります。ボリュームのパフォーマンスは、すべてのブロックがダウンロードされてボリュームに書き込まれると正常値に達します。ほとんどのアプリケーションにとって、ボリュームの存続期間全体でこのコストを割り当てることは、許容範囲内です。本番環境でこの初期パフォーマンスヒットを回避するには、ボリューム全体の即時初期化を強制するか、高速スナップショット復元を有効にします。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの初期化](#)」を参照してください。

ボリュームを作成する方法

- ブロックデバイスマッピングを指定すると、インスタンスの起動時に、EBS ボリュームを作成してアタッチします。詳細については、「[新しいインスタンス起動ウィザードを使用してインスタンスを起動する](#)」および「[ブロックデバイスマッピング](#)」を参照してください。
- EBS ボリュームを作成して、実行中のインスタンスにアタッチします。詳細については、以下の[空のボリュームの作成](#)を参照してください。

- 以前に作成したスナップショットから EBS ボリュームを作成し、実行中のインスタンスにアタッチします。詳細については、以下の [スナップショットからのボリュームの作成](#) を参照してください。

トピック

- [空のボリュームの作成](#)
- [スナップショットからのボリュームの作成](#)

空のボリュームの作成

空のボリュームは、使用可能になるとすぐに最大のパフォーマンスを発揮し、初期化を必要としません。

次のいずれかの方法を使用して、空の EBS ボリュームを作成します。

Console

コンソールを使用して、空の EBS ボリュームを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. [Create volume] (ボリュームの作成) を選択します。
4. [Volume type] (ボリュームタイプ) に、作成するボリュームのタイプを選択します。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの種類](#)」を参照してください。


汎用 SSD gp3 がデフォルトで選択されます。

5. [サイズ] に、ボリュームのサイズ (GiB) を入力します。詳細については、[EBS ボリュームのサイズと設定の制限](#)を参照してください。
6. (io1、io2、および gp3 のみ) IOPS では、ボリュームが提供する IOPS (1 秒あたりの入力/出力オペレーションの数) の最大数を入力します。
7. (gp3 のみ) [Throughput] (スループット) に、ボリュームが提供すべきスループットを MiB/秒単位で入力します。
8. [アベイラビリティゾーン] では、ボリュームを作成するアベイラビリティゾーンを選択します。ボリュームは、同じアベイラビリティゾーンにあるインスタンスにのみアタッチできます。

9. [Snapshot ID](スナップショット ID)はデフォルト値のままにしておきます (スナップショットからボリュームを作成しないでください)。
10. (io1 および io2 のみ) Amazon EBS マルチアタッチのボリュームを有効にするには、[Enable Multi-Attach](マルチアタッチの有効化) を選択します。詳細については、[Amazon EBS マルチアタッチを使用した複数のインスタンスへのボリュームのアタッチ](#)を参照してください。
11. ボリュームの暗号化ステータスを設定します。


アカウントにおいて[暗号化がデフォルト](#)で有効になっている場合、暗号化は自動的に有効になり、無効にすることはできません。ボリュームの暗号化に使用する KMS キーを選択できます。

アカウントの暗号化がデフォルトで有効になっていない場合、暗号化はオプションです。ボリュームを暗号化するには、[Encryption] (暗号化) で、[Encrypt this volume] (このボリュームを暗号化する) を選択し、次にボリュームの暗号化に使用する KMS キーを選択します。

 Note

暗号化されたボリュームは、Amazon EBS の暗号化をサポートするインスタンスにのみアタッチすることができます。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

12. (オプション) ボリュームにカスタムタグを割り当てるには、[タグ] セクションで [タグの追加] を選択し、タグのキーおよび値ペアを入力します。
13. [Create volume] (ボリュームの作成) を選択します。

 Note

[Volume state] (ボリュームの状態) が「available」となっていれば、そのボリュームは使用可能です。

14. ボリュームを使用するには、インスタンスにアタッチします。詳細については、「[インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#)」を参照してください。

AWS CLI

を使用して空の EBS ボリュームを作成するには AWS CLI

[create-volume](#) コマンドを使用します。

state が available となっていれば、そのボリュームは使用可能です。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用して空の EBS ボリュームを作成するには PowerShell

[New-EC2Volume](#) コマンドを実行します。

state が available となっていれば、そのボリュームは使用可能です。

スナップショットからのボリュームの作成

スナップショットから作成されたボリュームは、バックグラウンドで時間をかけて読み込まれます。つまり、インスタンスがアタッチされたボリュームとそのすべてのデータへのアクセスを開始する前に、Amazon S3 から EBS ボリュームにすべてのデータが転送されるのを待つ必要はありません。まだ読み込まれていないデータに対してインスタンスからのアクセスがあった場合、ボリュームは要求されたデータを Amazon S3 から即座にダウンロードし、引き続き残りのボリュームデータをバックグラウンドで読み込みます。ボリュームのパフォーマンスは、すべてのブロックがダウンロードされてボリュームに書き込まれると達成されます。本番環境で初期パフォーマンスヒットを回避するには、[Amazon EBS ボリュームの初期化](#)を参照してください。

暗号化されたスナップショットから作成された新しい EBS ボリュームは、自動的に暗号化されます。on-the-fly ボリュームを暗号化しながら、暗号化されていないスナップショットから復元することもできます。暗号化されたボリュームは、EBS 暗号化をサポートするインスタンスタイプにのみアタッチできます。詳細については、「[サポートされるインスタンスタイプ](#)」を参照してください。

次のいずれかの方法を使用して、スナップショットからボリュームを作成します。

Console

コンソールを使用してスナップショットから EBS ボリュームを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. [Create volume] (ボリュームの作成) を選択します。
4. [Volume type] (ボリュームタイプ) に、作成するボリュームのタイプを選択します。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの種類](#)」を参照してください。

汎用 SSD gp3 がデフォルトで選択されます。

5. [サイズ] に、ボリュームのサイズ (GiB) を入力します。詳細については、[EBS ボリュームのサイズと設定の制限](#)を参照してください。
6. (io1、io2、および gp3 のみ) IOPS では、ボリュームが提供する IOPS (1 秒あたりの入力/出力オペレーションの数) の最大数を入力します。
7. (gp3 のみ) [Throughput] (スループット) に、ボリュームが提供すべきスループットを MiB/秒単位で入力します。
8. [アベイラビリティゾーン] では、ボリュームを作成するアベイラビリティゾーンを選択します。ボリュームは、インスタンスと同じアベイラビリティゾーンに限りアタッチできます。
9. [Snapshot ID] (スナップショット ID) に、ボリュームの作成元となるスナップショットを選択します。
10. ボリュームの暗号化ステータスを設定します。

選択したスナップショットが暗号化されている場合、またはアカウントが[デフォルトで暗号化を有効にしている](#)場合は、暗号化が自動的に有効になり、無効にすることはできません。ボリュームの暗号化に使用する KMS キーを選択できます。

選択したスナップショットが暗号化されておらず、アカウントの暗号化がデフォルトで有効になっていない場合、暗号化はオプションです。ボリュームを暗号化するには、[Encryption] (暗号化) で、[Encrypt this volume] (このボリュームを暗号化する) を選択し、次にボリュームの暗号化に使用する KMS キーを選択します。

Note

暗号化されたボリュームは、Amazon EBS の暗号化をサポートするインスタンスにのみアタッチすることができます。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

11. (オプション) ボリュームにカスタムタグを割り当てるには、[タグ] セクションで [タグの追加] を選択し、タグのキーおよび値ペアを入力します。
12. [ボリュームの作成] を選択します。

Note

[Volume state] (ボリュームの状態) が「available」となっていれば、そのボリュームは使用可能です。

13. ボリュームを使用するには、インスタンスにアタッチします。詳細については、「[インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#)」を参照してください。

AWS CLI

を使用してスナップショットから EBS ボリュームを作成するには AWS CLI

[create-volume](#) コマンドを使用します。

state が available となっていれば、そのボリュームは使用可能です。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用してスナップショットから EBS ボリュームを作成するには PowerShell

[New-EC2Volume](#) コマンドを実行します。

state が available となっていれば、そのボリュームは使用可能です。

インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ

同じアベイラビリティゾーンに 1 つ以上のインスタンスに、利用可能な EBS ボリュームをボリュームとしてアタッチできます。

起動時に EBS ボリュームをインスタンスに追加する方法については、「[インスタンスブロックデバイスマッピング](#)」を参照してください。

考慮事項

- インスタンスにアタッチできるボリューム数を決定します。インスタンスにアタッチできる Amazon EBS ボリュームの最大数は、インスタンスのタイプとサイズによって異なります。詳細については、「[インスタンスボリューム数の制限](#)」を参照してください。
- ボリュームを複数のインスタンスにアタッチできるかどうかを判断し、マルチアタッチを有効にします。詳細については、[Amazon EBS マルチアタッチを使用した複数のインスタンスへのボリュームのアタッチ](#)を参照してください。
- ボリュームが暗号化されている場合、Amazon EBS 暗号化をサポートするインスタンスだけにアタッチできます。詳細については、「[サポートされるインスタンスタイプ](#)」を参照してください。
- AWS Marketplace ボリュームに製品コードがある場合:
 - ボリュームは停止されたインスタンスにのみアタッチできます。

- AWS Marketplace ボリュームにあるコードを購読する必要があります。
- タイプやオペレーティングシステムなどのインスタンスの設定は、AWS Marketplace その特定のコードをサポートしている必要があります。例えば、Windows インスタンスからのボリュームを Linux インスタンスにアタッチすることはできません。
- AWS Marketplace 製品コードはボリュームからインスタンスにコピーされます。

次のいずれかの方法を使用して、インスタンスにボリュームをアタッチします。

Console

コンソールを使用して、EBS ボリュームをインスタンスにアタッチするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. アタッチするボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Attach volume] (ボリュームのアタッチ) の順にクリックします。

Note

アタッチできるのは、Available のステータスにあるものボリュームのみです。

4. [Instance] (インスタンス) に、インスタンスの ID を入力するか、オプションのリストからインスタンスを選択します。

Note

- ボリュームは同じアベイラビリティゾーンに存在しているインスタンスにアタッチする必要があります。
- ボリュームが暗号化されている場合、Amazon EBS 暗号化 をサポートするインスタンスタイプだけにアタッチできます。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

5. [デバイス名] で、次のいずれかを実行します。
 - ルートボリュームの場合は、リストの「ルートボリューム用に予約済み」セクションから必要なデバイス名を選択します。通常、/dev/sda1または /dev/xvda AMI によっては Linux /dev/sda1 インスタンス用か、Windows インスタンス用です。

- データボリュームの場合は、リストの「推奨データボリューム」セクションから使用可能なデバイス名を選択します。
- カスタムデバイス名を使用するには、[カスタムデバイス名を指定] を選択し、使用するデバイス名を入力します。

このデバイス名は Amazon EC2 によって使用されます。インスタンスのブロックデバイスドライバは、ボリュームをマウントするときに異なるデバイス名を割り当てる場合があります。詳細については、「[Linux インスタンスのデバイス名](#)」または「[Windows インスタンスのデバイス名](#)」を参照してください。

6. [ボリュームのアタッチ] を選択します。
7. インスタンスに接続し、ボリュームをマウントします。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」を参照してください。

AWS CLI

を使用して EBS ボリュームをインスタンスにアタッチするには AWS CLI

[attach-volume](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用して EBS ボリュームをインスタンスにアタッチするには PowerShell

[Add-EC2Volume](#) コマンドを実行します。

Note

- インスタンスタイプのボリューム上限を超える数のボリュームをアタッチしようとする、そのリクエストは失敗します。詳細については、「[インスタンスボリューム数の制限](#)」を参照してください。
- 状況によっては、/dev/xvda または /dev/sda にアタッチしたボリューム以外のボリュームが、インスタンスのルートボリュームになっている場合があります。これは、別のインスタンスのルートボリュームや、ルートボリュームのスナップショットから作成されたボリュームを、既存のルートボリュームのインスタンスにアタッチした場合に起こります。詳細については、「[間違ったボリュームからの起動](#)」を参照してください。

Amazon EBS マルチアタッチを使用した複数のインスタンスへのボリュームのアタッチ

Amazon EBS マルチアタッチを使用すると、1つのプロビジョンド IOPS SSD (io1 または io2) ボリュームを、同じアベイラビリティゾーンにある複数のインスタンスにアタッチできます。複数のマルチアタッチが有効なボリュームを1つのインスタンスまたはインスタンスセットにアタッチできます。ボリュームがアタッチされている各インスタンスには、共有ボリュームに対する完全な読み取りおよび書き込みアクセス許可があります。マルチアタッチを使用すると、同時書き込みオペレーションを管理するアプリケーションで、アプリケーションの可用性を高めることが容易になります。

コンテンツ

- [考慮事項と制約事項](#)
- [パフォーマンス](#)
- [マルチアタッチの操作](#)
- [マルチアタッチ対応ボリュームのモニタリング](#)
- [料金と請求](#)
- [NVMe 予約](#)

考慮事項と制約事項

- マルチアタッチが有効なボリュームは、同じアベイラビリティゾーンにある「[Nitro System](#)」に構築された最大 16 のインスタンスにアタッチできます。
- Linux インスタンスは、マルチアタッチが有効な io1 および io2 ボリュームをサポートします。Windows インスタンスは、マルチアタッチが有効な io2 ボリュームのみをサポートします。
- インスタンスにアタッチできる Amazon EBS ボリュームの最大数は、インスタンスのタイプとサイズによって異なります。詳細については、「[インスタンスボリューム数の制限](#)」を参照してください。
- マルチアタッチは、[プロビジョンド IOPS SSD \(io1 および io2\) ボリュームでのみサポートされます](#)。
- io1 ボリューム用マルチアタッチは次のリージョンでのみ利用できます: 米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (ソウル)。

io2 用のマルチアタッチは、io2 をサポートするすべてのリージョンで使用できます。

Note

パフォーマンス、一貫性、耐久性を低コストで向上させるには、io2 ボリュームを使用することをお勧めします。

- マルチアタッチが有効になっている io1 ボリュームは、Scalable Reliable Datagram (SRD) ネットワークプロトコルのみをサポートする [Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)ではサポートされません。これらのインスタンスタイプでマルチアタッチを使用するには、io2 Block Express ボリュームを使用する必要があります。
- XFS や EXT4 などの標準ファイルシステムは、EC2 インスタンスなどの複数のサーバーから同時にアクセスできるように設計されていません。本稼働ワークロードのデータに対し復元性と信頼性を確保するには、クラスター化されたファイルシステムを使用する必要があります。
- マルチアタッチが有効な io2 ボリュームは I/O フェンスをサポートしています。I/O フェンスプロトコルは、データの一貫性を維持するために、共有ストレージ環境での書き込みアクセスを制御します。アプリケーションは、データの整合性を維持するために、アタッチされたインスタンスの書き込み順序を提供する必要があります。詳細については、「[NVMe 予約](#)」を参照してください。

マルチアタッチが有効な io1 ボリュームは I/O フェンスをサポートしていません。

- マルチアタッチが有効なボリュームは、ブートボリュームとして作成できません。
- マルチアタッチ対応のボリュームは、インスタンスあたり 1 つのブロックデバイスマッピングにアタッチできます。
- マルチアタッチは、Amazon EC2 コンソールまたは RunInstances API を使用してインスタンスの起動時に有効にすることはできません。
- Amazon EBS インフラストラクチャレイヤーに問題があるマルチアタッチが有効なボリュームは、アタッチされているすべてのインスタンスで使用できません。Amazon EC2 またはネットワークレイヤーでの問題は、一部のアタッチされたインスタンスにのみ影響する可能性があります。
- 次の表は、作成後にマルチアタッチが有効な io1 および io2 ボリュームに対するボリューム変更サポートを示しています。

	io2 ボリューム	io1 ボリューム
ボリュームタイプの変更	X	X

	io2 ボリューム	io1 ボリューム
ボリュームサイズの変更	✓	✗
プロビジョンド IOPS の変更	✓	✗
マルチアタッチの有効化	✓ *	✗
マルチアタッチの無効化	✓ *	✗

* ボリュームがインスタンスにアタッチされている間は、マルチアタッチを有効または無効にすることはできません。

パフォーマンス

アタッチされた各インスタンスは、ボリュームのプロビジョニングされた最大パフォーマンスまで IOPS の最大パフォーマンスを引き上げます。ただし、アタッチされたすべてのインスタンスの集計パフォーマンスは、ボリュームのプロビジョニングされた最大パフォーマンスを超えることはできません。アタッチされたインスタンスの IOPS に対する需要がボリュームのプロビジョンド IOPS よりも高い場合、ボリュームはプロビジョニングされたパフォーマンスを超えることはありません。

例えば、80,000 プロビジョンド IOPS で io2 マルチアタッチ対応のボリュームを作成し、それを 40,000 プロビジョンド IOPS をサポートする m7g.large インスタンスと、60,000 プロビジョンド IOPS をサポートする r7g.12xlarge インスタンスにアタッチするとします。各インスタンスは、ボリュームのプロビジョンド IOPS 80,000 を下回るため、最大 IOPS を駆動できます。ただし、両方のインスタンスがボリュームへの I/O を同時に駆動する場合、それらの合計 IOPS は、ボリュームのプロビジョニングされた 80,000 IOPS のパフォーマンスを超えることはできません。

整合性のあるパフォーマンスを実現するには、マルチアタッチが有効なボリュームのセクターにわたって、アタッチされたインスタンスから駆動される I/O のバランスを取ることがベストプラクティスです。

マルチアタッチの操作

マルチアタッチが有効なボリュームは、他の Amazon EBS ボリュームを管理する場合とほぼ同じ方法で管理できます。ただし、マルチアタッチ機能を使用するには、ボリュームに対してマルチアタッチ機能を有効にする必要があります。新しいボリュームを作成する場合、マルチアタッチはデフォルトで無効になっています。

目次

- [マルチアタッチの有効化](#)
- [マルチアタッチの無効化](#)
- [インスタンスへのボリュームのアタッチ](#)
- [終了時に削除](#)

マルチアタッチの有効化

ボリュームの作成時に、マルチアタッチを有効にできます。次のいずれかの方法を使用します。

Console

ボリューム作成中にマルチアタッチを有効にするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. [Create volume] (ボリュームの作成) を選択します。
4. [ボリュームタイプ] で、[プロビジョンド IOPS SSD (**io1**)] または [プロビジョンド IOPS SSD (**io2**)] を選択します。
5. [Size (サイズ)] と [IOPS] で、必要なボリュームサイズとプロビジョニングする IOPS 数を選択します。
6. [アベイラビリティゾーン] で、インスタンスと同じアベイラビリティゾーンを選択します。
7. [Amazon EBS Multi-Attach] (Amazon EBS マルチアタッチ) で、[Enable Multi-Attach] (マルチアタッチの有効化) を選択します。
8. (オプション) [Snapshot ID] (スナップショット ID) に、ボリュームの作成元となるスナップショットを選択します。
9. ボリュームの暗号化ステータスを設定します。

選択したスナップショットが暗号化されている場合、またはアカウントが[デフォルトで暗号化を有効にしている](#)場合は、暗号化が自動的に有効になり、無効にすることはできません。ボリュームの暗号化に使用する KMS キーを選択できます。

選択したスナップショットが暗号化されておらず、アカウントの暗号化がデフォルトで有効になっていない場合、暗号化はオプションです。ボリュームを暗号化するには、[Encryption] (暗号化) で、[Encrypt this volume] (このボリュームを暗号化する) を選択し、次にボリュームの暗号化に使用する KMS キーを選択します。

Note

暗号化されたボリュームは、Amazon EBS の暗号化をサポートするインスタンスにのみアタッチすることができます。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

10. (オプション) ボリュームにカスタムタグを割り当てるには、[タグ] セクションで [タグの追加] を選択し、タグのキーおよび値ペアを入力します。
11. [Create volume] (ボリュームの作成) を選択します。

Command line

ボリューム作成中にマルチアタッチを有効にするには

[create-volume](#) コマンドを使用して、`--multi-attach-enabled` パラメータを指定します。

```
$ C:\> aws ec2 create-volume --volume-type io2 --multi-attach-enabled --size 100 --iops 2000 --region us-west-2 --availability-zone us-west-2b
```

また、作成後の io2 ボリュームがどのインスタンスにもアタッチされていない場合に限り、マルチアタッチを有効にすることができます。

Note

作成後、io1 ボリュームに対してマルチアタッチを有効にすることはできません。

io2 ボリュームの作成後にマルチアタッチを有効にするには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

作成後にマルチアタッチを有効にするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. ボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Modify volume] (ボリュームの変更) の順にクリックします。
4. [Amazon EBS Multi-Attach] (Amazon EBS マルチアタッチ) で、[Enable Multi-Attach] (マルチアタッチの有効化) を選択します。
5. [Modify] を選択します。

Command line

作成後にマルチアタッチを有効にするには

[modify-volume](#) コマンドを使用して、`--multi-attach-enabled` パラメータを指定します。

```
$ C:\> aws ec2 modify-volume --volume-id vol-1234567890abcdef0 --multi-attach-enabled
```

マルチアタッチの無効化

複数のインスタンスにアタッチされている場合にのみ、io2 ボリュームに対してマルチアタッチを無効にできます。

Note

io1 ボリュームの作成後にマルチアタッチを無効にすることはできません。

io2 ボリュームのマルチアタッチを無効にするには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

マルチアタッチの作成後に無効にするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. ボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Modify volume] (ボリュームの変更) の順にクリックします。
4. [Amazon EBS Multi-Attach] (Amazon EBS マルチアタッチ) で、[Enable Multi-Attach] (マルチアタッチを有効化) の選択を解除します。
5. [Modify] を選択します。

Command line

マルチアタッチの作成後に無効にするには

[modify-volume](#) コマンドを使用して、`-no-multi-attach-enabled` パラメータを指定します。

```
$ C:\> aws ec2 modify-volume --volume-id vol-1234567890abcdef0 --no-multi-attach-enabled
```

インスタンスへのボリュームのアタッチ

マルチアタッチが有効なボリュームは、他の EBS ボリュームをアタッチするのと同じ方法でインスタンスにアタッチします。詳細については、[インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#)を参照してください。

終了時に削除

マルチアタッチが有効なボリュームは、最後にアタッチされたインスタンスが終了し、そのインスタンスが終了時にボリュームを削除するように設定されている場合、インスタンスの終了時に削除されます。ボリュームが複数のインスタンスにアタッチされ、ボリュームブロックデバイスマッピングで終了時の削除設定が異なる場合、最後にアタッチされたインスタンスのブロックデバイスマッピング設定によって、終了時の削除動作が決まります。

終了時の削除を予測できるようにするには、ボリュームがアタッチされているすべてのインスタンスについて、終了時の削除を有効または無効にします。

デフォルトでは、ボリュームがインスタンスにアタッチされると、ブロックデバイスマッピングの終了時に削除の設定は `false` に設定されます。マルチアタッチが有効なボリュームの終了時に削除をオンにするには、ブロックデバイスマッピングを修正します。

アタッチされたインスタンスの終了時にボリュームを削除する場合は、アタッチされたすべてのインスタンスのブロックデバイスマッピングで終了時に削除を有効にします。アタッチされたインスタン

スの終了後にボリュームを保持する場合は、アタッチされたすべてのインスタンスのブロックデバイスマッピングで、終了時に削除を無効にします。詳細については、「[インスタンスの終了時にデータを保持する](#)」を参照してください。

インスタンスの終了時の削除設定は、起動時または起動後に変更できます。インスタンスの起動時に終了時に削除を有効または無効にした場合、設定は起動時にアタッチされたボリュームにのみ適用されます。起動後にインスタンスにボリュームをアタッチする場合は、そのボリュームの終了時の削除動作を明示的に設定する必要があります。

終了時のインスタンスの削除設定は、コマンドラインツールでのみ変更できます。

既存のインスタンスの [終了時に削除] 設定を変更するには

[modify-instance-attribute](#) コマンドを使用して、DeleteOnTermination で `--block-device-mappings option` 属性を指定します。

```
aws ec2 modify-instance-attribute --instance-id i-1234567890abcdef0 --block-device-mappings file://mapping.json
```

mapping.json で、以下を指定します。

```
[
  {
    "DeviceName": "/dev/sdf",
    "Ebs": {
      "DeleteOnTermination": true/false
    }
  }
]
```

マルチアタッチ対応ボリュームのモニタリング

Amazon EBS ボリュームの CloudWatch メトリクスを使用して、マルチアタッチが有効なボリュームをモニタリングできます。詳細については、[Amazon EBS の Amazon CloudWatch メトリクス](#)を参照してください。

データは、アタッチされたすべてのインスタンスにわたって集約されます。アタッチされた個々のインスタンスのメトリクスをモニタリングすることはできません。

料金と請求

Amazon EBS マルチアタッチの使用に追加料金はかかりません。プロビジョンド IOPS SSD (io1 および io2) ボリュームに適用される標準料金が請求されます。詳細については、[Amazon EBS の料金表](#)を参照してください。

NVMe 予約

マルチアタッチ対応の io2 ボリュームは、業界標準のストレージフェンシングプロトコルのセットである NVMe 予約をサポートします。これらのプロトコルにより、複数のインスタンスから共有ボリュームへのアクセスを制御し、調整する予約を、作成および管理できます。共有ストレージアプリケーションが予約を使用して、データ整合性が確保されます。

トピック

- [要件](#)
- [NVMe 予約のサポートを有効にする](#)
- [サポートされている NVMe 予約コマンド](#)
- [料金](#)

要件

NVMe 予約は、io2 マルチアタッチ対応ボリュームでのみサポートされます。マルチアタッチが有効なボリュームは、Nitro システムで構築されたインスタンスにのみアタッチできます。

NVMe 予約は、次のオペレーティングシステムでサポートされています。

- SUSE Linux Enterprise 12 SP3 以降
- RHEL 8.3 以降
- Amazon Linux 2 以降
- Windows Server 2016 以降

Note

サポートされている、2023年9月13日以降の Windows Server AMI には、必要な NVMe ドライバーが含まれています。それ以前の AMI では、NVMe ドライバーバージョンを 1.5.0 以

降に更新する必要があります。詳細については、「[AWS Windows インスタンス用 NVMe ドライバー](#)」を参照してください。

EC2Launch v2 を使用してディスクを初期化する場合は、バージョン 2.0.1521 以降にアップグレードする必要があります。詳細については、「[EC2Launch v2 を使用した Windows インスタンスの設定](#)」を参照してください。

NVMe 予約のサポートを有効にする

2023 年 9 月 18 日以降に作成された、すべてのマルチアタッチ対応 io2 ボリュームで、NVMe 予約のサポートがデフォルトで有効になっています。

2023 年 9 月 18 日より前に作成された既存の io2 ボリュームで、NVMe 予約のサポートを有効にするには、ボリュームからすべてのインスタンスをデタッチし、必要なインスタンスをアタッチしなおす必要があります。すべてのインスタンスをデタッチした後にアタッチを行うと、NVMe 予約が有効になります。

サポートされている NVMe 予約コマンド

Amazon EBS は、次の NVMe 予約コマンドをサポートしています。

予約登録

予約キーの登録と解除、または置き換えを行います。登録キーによりインスタンスを識別、または認証します。予約キーをボリュームに登録すると、インスタンスとボリュームが関連付けられます。インスタンスが予約を取得するには、インスタンスをボリュームに登録する必要があります。

予約取得

ボリュームの予約の取得、名前空間による先行予約の保持、ボリュームで保持している予約の中止を行います。次の予約タイプを取得できます。

- 排他的書き込み予約
- 排他的アクセス予約
- 排他的書き込み - 登録者限定予約
- 排他的アクセス - 登録者限定予約
- 排他的書き込み - 全登録者用予約
- 排他的アクセス - 全登録者用予約

予約解除

ボリュームに保持されている予約を、解除またはクリアします。

予約レポート

ボリュームの登録状況と予約状況について説明します。

料金

マルチアタッチを有効にする際、または使用する際に、追加料金はかかりません。

Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする

Amazon EBS ボリュームをインスタンスにアタッチすると、ブロックデバイスとして公開されます。任意のファイルシステムでボリュームをフォーマットし、マウントできます。EBS ボリュームを使用できるようにすると、他のボリュームと同じようにアクセスできます。このファイルシステムに書き込まれるデータはすべて EBS ボリュームに書き込まれますが、デバイスを使用するアプリケーションには透過的になります。

EBS ボリュームのスナップショットは、バックアップ目的で作成したり、別のボリュームを作成する際のベースラインとして使用したりできます。詳細については、「[Amazon EBS スナップショット](#)」を参照してください。

使用準備中の EBS ボリュームが 2 TiB を超える場合は、GPT パーティショニングスキームを使用してボリューム全体にアクセスする必要があります。詳細については、「[EBS ボリュームのサイズと設定の制限](#)」を参照してください。

Linux インスタンス

アタッチ済みボリュームのフォーマットとマウント

ルートデバイス用の EBS ボリューム `/dev/xvda` を持つ EC2 インスタンスがあり、`/dev/sdf` を使用して空の EBS ボリュームをインスタンスにアタッチしたとします。新たなアタッチ済みボリュームを使用するには、次の手順を使用します。

Linux で EBS ボリュームをフォーマットしてマウントするには

1. SSH を使用してインスタンスに接続します。詳細については、「[Linux インスタンスへの接続](#)」を参照してください。
2. ブロックデバイスマッピングで指定したものと異なるデバイス名を使用して、デバイスをインスタンスにアタッチすることができます。詳細については、「[Linux インスタンスでのデバイス](#)」

[名](#)」を参照してください。lsblk コマンドを使用して、使用可能なディスクデバイスとマウントポイント (該当する場合) を表示し、使用する正しいデバイス名を決定します。lsblk の出力は、フルデバイスパスから /dev/ プレフィクスを削除します。

次の内容は、EBS ボリュームを NVMe ブロックデバイスとして公開する「[Nitro System](#)」で構築されたインスタンスの出力例を示します。ルートデバイス/dev/nvme0n1には、nvme0n1p1およびnvme0n1p128という名前の 2 つのパーティションがあります。アタッチされているボリュームは /dev/nvme1n1 パーティションがなく、まだマウントされていません。

```
[ec2-user ~]$ lsblk
NAME          MAJ:MIN RM  SIZE RO TYPE MOUNTPOINT
nvme1n1       259:0   0  10G  0 disk
nvme0n1       259:1   0   8G  0 disk
-nvme0n1p1    259:2   0   8G  0 part /
-nvme0n1p128  259:3   0    1M  0 part
```

以下は T2 インスタンスの出力例です。ルートデバイス/dev/xvdaには、xvda1という名前のパーティションが 1 つあります。アタッチされているボリュームは /dev/xvdf パーティションがなく、まだマウントされていません。

```
[ec2-user ~]$ lsblk
NAME     MAJ:MIN RM  SIZE RO TYPE MOUNTPOINT
xvda     202:0   0   8G  0 disk
-xvda1   202:1   0   8G  0 part /
xvdf     202:80  0  10G  0 disk
```

3. ボリュームにファイルシステムがあるかどうかを確認します。新しいボリュームは未加工のブロックデバイスであるため、マウントして使用する前に、ボリュームにファイルシステムを作成する必要があります。スナップショットから作成されたボリュームは、多くの場合既にファイルシステムがあります。既存のファイルシステムの上に新しいファイルシステムを作成すると、データが上書きされます。

次の方法のいずれか (または両方) を使用して、ボリューム上にファイルシステムがあるかどうかを判断します。

- file -s コマンドを使用して、ファイルシステムタイプなど、特定のデバイスに関する情報を取得します。次の例のように、出力に data だけが表示されている場合は、デバイスにはファイルシステムが存在していません。

```
[ec2-user ~]$ sudo file -s /dev/xvdf
/dev/xvdf: data
```

デバイスにファイルシステムがある場合は、ファイルシステムの種類に関する情報が表示されます。例えば、次の出力は XFS ファイルシステムを持つルートデバイスを示しています。

```
[ec2-user ~]$ sudo file -s /dev/xvda1
/dev/xvda1: SGI XFS filesystem data (blksz 4096, inosz 512, v2 dirs)
```

- `lsblk -f` コマンドを使用して、インスタンスにアタッチされているすべてのデバイスに関する情報を取得します。

```
[ec2-user ~]$ sudo lsblk -f
```

例えば、次の出力例では、3 つのデバイス — `nvme1n1`、`nvme0n1`、および `nvme2n1` がインスタンスにアタッチされていることを示しています。最初の列には、デバイスとそのパーティションが一覧表示されています。FSTYPE 列には、各デバイスのファイルシステムタイプが表示されています。特定のデバイスについての列が空の場合は、そのデバイスにファイルシステムがないことを意味します。この場合、デバイス `nvme1n1` とデバイス `nvme0n1` 上のパーティション `nvme0n1p1` はともに XFS ファイルシステムを使用してフォーマットされていますが、デバイス `nvme2n1` とデバイス `nvme0n1` 上のパーティション `nvme0n1p128` にはファイルシステムがありません。

```
NAME FSTYPE LABEL UUID MOUNTPOINT
nvme1n1 xfs 7f939f28-6dcc-4315-8c42-6806080b94dd
nvme0n1
##nvme0n1p1 xfs / 90e29211-2de8-4967-b0fb-16f51a6e464c /
##nvme0n1p128
nvme2n1
```

これらのコマンドの出力で、デバイス上にファイルシステムがないことが示された場合は、ファイルシステムを作成する必要があります。

4. (条件付き) 前の手順でデバイスにファイルシステムがあることがわかった場合は、このステップをスキップしてください。ボリュームが空の場合は、`mkfs -t` コマンドを使用し、そのボリューム上にファイルシステムを作成します。

⚠ Warning

すでにデータが入っているボリューム (例: スナップショットから作成されたボリューム) をマウントしている場合は、このコマンドを使用しないでください。そうでない場合、ボリュームがフォーマットされ、既存のデータが削除されます。

```
[ec2-user ~]$ sudo mkfs -t xfs /dev/xvdf
```

mkfs.xfs がないというエラーが表示された場合は、次のコマンドを使用して XFS ツールをインストールしてから、前述のコマンドを繰り返します。

```
[ec2-user ~]$ sudo yum install xfsprogs
```

5. mkdir コマンドを使用して、ボリュームのマウントポイントディレクトリを作成します。マウントポイントとは、ボリュームをマウントした後、ファイルシステムツリー内でボリュームが配置され、ファイルの読み書きが実行される場所です。次の例では、/data という名前のディレクトリが作成されます。

```
[ec2-user ~]$ sudo mkdir /data
```

6. 前のステップで作成したマウントポイントディレクトリにボリュームまたはパーティションをマウントします。

ボリュームにパーティションがない場合は、次のコマンドを実行してデバイス名を指定し、ボリューム全体をマウントします。

```
[ec2-user ~]$ sudo mount /dev/xvdf /data
```

ボリュームにパーティションがある場合は、次のコマンドを実行してパーティション名を指定し、パーティションをマウントします。

```
[ec2-user ~]$ sudo mount /dev/xvdf1 /data
```

7. 新しいボリュームマウントのファイルのアクセス許可をプレビューして、ユーザーとアプリケーションがボリュームに書き込みできることを確認します。ファイルのアクセス許可の詳細については、Linux Documentation Project の [ファイルセキュリティ](#) を参照してください。

8. インスタンスを再起動した後にマウントポイントが自動的に保存されることはありません。再起動後にこの EBS ボリュームを自動的にマウントするには、[再起動後に接続ボリュームを自動的にマウントする](#)を参照してください。

再起動後に接続ボリュームを自動的にマウントする

システムブート時に常に、このアタッチ済みの EBS ボリュームをマウントするには、`/etc/fstab` ファイルにデバイス用のエントリを追加します。

`/etc/fstab` でシステムの現在のデバイス名 (`/dev/xvdf` など) は使用できますが、代わりにデバイスの 128 ビット汎用一意識別子 (UUID) を使用することをお勧めします。デバイス名は変更される可能性があります。UUID はパーティションの存続期間を通じて持続します。UUID を使用することで、ハードウェアの再構成後にシステムが起動できなくなる可能性を減らすことができます。詳細については、[EBS デバイスの特定](#)を参照してください。

再起動後に接続ボリュームを自動的にマウントするには

1. (オプション) `/etc/fstab` ファイルのバックアップコピーを作成すると、編集集中に誤って破壊/削除してしまった場合にこのコピーを使用できます。

```
[ec2-user ~]$ sudo cp /etc/fstab /etc/fstab.orig
```

2. `blkid` コマンドを使用してデバイスの UUID を見つけます。再起動後にマウントするデバイスの UUID を書き留めます。次の手順で必要になります。

例えば、次のコマンドは、インスタンスにマウントされている 2 つのデバイスがあることを示し、両方のデバイスの UUID を表示します。

```
[ec2-user ~]$ sudo blkid
/dev/xvda1: LABEL="/" UUID="ca774df7-756d-4261-a3f1-76038323e572" TYPE="xfs"
PARTLABEL="Linux" PARTUUID="02dcd367-e87c-4f2e-9a72-a3cf8f299c10"
/dev/xvdf: UUID="aebf131c-6957-451e-8d34-ec978d9581ae" TYPE="xfs"
```

Ubuntu 18.04 では、`lsblk` コマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ sudo lsblk -o +UUID
```

3. `nano` や `vim` などのテキストエディタを使用して、`/etc/fstab` ファイルを開きます。

```
[ec2-user ~]$ sudo vim /etc/fstab
```

- 指定されたマウントポイントにデバイスをマウントするために、`/etc/fstab` に次のエントリを追加します。フィールドは、`blkid` (Ubuntu 18.04 の場合は `lsblk`) から返される UUID 値、マウントポイント、ファイルシステム、および推奨されるファイルシステムマウントオプションです。必須フィールドの詳細については、`man fstab` を実行して `fstab` マニュアルを開きます。

次の例では、UUID `aebf131c-6957-451e-8d34-ec978d9581ae` を使用してデバイスをマウントポイント `/data` にマウントし、`xf`s ファイルシステムを使用します。`defaults` フラグと `nofail` フラグも使用します。ファイルシステムがダンプされないように `0` を指定し、ルート以外のデバイスであることを示すように `2` を指定します。

```
UUID=aebf131c-6957-451e-8d34-ec978d9581ae /data xfs defaults,nofail 0 2
```

Note

このボリュームをアタッチしないでインスタンスを起動することを目的としている場合 (例えば、ボリュームを別のインスタンスに移動した後)、`nofail` マウントオプションを追加し、ボリュームのマウントでエラーが発生してもインスタンスが起動できるようにしてください。また、Debian から派生した OS (16.04 より前の Ubuntu バージョンなど) では、`nobootwait` マウントオプションを追加する必要があります。

- 入力内容が正しいことを確認するには、次のコマンドを実行してデバイスをアンマウントし、すべてのファイルシステムを `/etc/fstab` にマウントします。エラーがなければ、`/etc/fstab` ファイルは問題ありません。ファイルシステムは再起動後に自動的にマウントされます。

```
[ec2-user ~]$ sudo umount /data  
[ec2-user ~]$ sudo mount -a
```

エラーメッセージが表示されたら、ファイル内のエラーに対処してください。

Warning

`/etc/fstab` ファイルにエラーがあると、システムがブート不能になる可能性があります。`/etc/fstab` ファイルにエラーがあるシステムをシャットダウンしないでください。

/etc/fstab のエラーを修正する方法がわからず、このステップの最初のステップでバックアップファイルを作成した場合は、次のコマンドを使用してバックアップファイルから復元できます。

```
[ec2-user ~]$ sudo mv /etc/fstab.orig /etc/fstab
```

Windows インスタンス

次のいずれかの方法を使用し、Windows インスタンスでボリュームを使用できるようにします。

PowerShell

未フォーマットパーティションのすべての EBS ボリュームを Windows で使用できるようにするには PowerShell

1. リモートデスクトップを使用して Windows インスタンスにログインします。詳細については、「[Windows インスタンスに接続する](#)」を参照してください。
2. タスクバーで [スタート] メニューを開き、[Windows] を選択します。 PowerShell
3. PowerShell 開いたプロンプト内で、用意されている一連の Windows PowerShell コマンドを使用します。このスクリプトはデフォルトで次のアクションを実行します。
 1. ShellHWDetection サービスを停止します。
 2. パーティションスタイルが raw のディスクを列挙します。
 3. ディスクとパーティションタイプがサポートする最大サイズにまたがる新しいパーティションを作成します。
 4. 使用できるドライブ文字を割り当てます。
 5. 指定されたファイルシステムラベルを使用して、ファイルシステムを NTFS としてフォーマットします。
 6. ShellHWDetection サービスを再起動します。

```
Stop-Service -Name ShellHWDetection
Get-Disk | Where PartitionStyle -eq 'raw' | Initialize-Disk -PartitionStyle MBR
- PassThru | New-Partition -AssignDriveLetter -UseMaximumSize | Format-Volume -
FileSystem NTFS -NewFileSystemLabel "Volume Label" -Confirm:$false
```

```
Start-Service -Name ShellHWDetection
```

DiskPart command line tool

EBS DiskPart ボリュームをコマンドラインツールで使用できるようにするには

1. リモートデスクトップを使用して Windows インスタンスにログインします。詳細については、「[Windows インスタンスに接続する](#)」を参照してください。
2. 使用可能にするディスク番号を決定します。
 1. [スタート] メニューを開き、[Windows PowerShell] を選択します。
 2. Get-Disk コマンドレットを使用して、使用できるディスクのリストを取得します。
 3. コマンドの出力で、使用可能にするディスクに対応する[Number] (番号) を書き留めます。
3. DiskPart コマンドを実行するスクリプトファイルを作成します。
 1. [Start] (スタート) メニューを開き、[File Explorer] (ファイルエクスプローラ) を選択します。
 2. C:\ などのディレクトリに移動し、スクリプトファイルを保存します。
 3. フォルダ内の空白領域を選択するか、右クリックしてダイアログボックスを開き、カーソルを [New] (新規) の上に置いてコンテキストメニューにアクセスし、[Text Document] (テキストドキュメント) を選択します。
 4. テキストファイルの名前を diskpart.txt にします。
4. 次のコマンドをスクリプトファイルに追加します。ディスク番号、パーティションタイプ、ボリュームラベル、ドライブ文字の変更が必要になる場合があります。このスクリプトはデフォルトで次のアクションを実行します。
 1. 修正するディスク 1 を選択します。
 2. マスターブートレコード (MBR) パーティション構造を使用するようにボリュームを設定します。
 3. ボリュームを NTFS ボリュームとしてフォーマットします。
 4. ボリュームラベルを設定します。
 5. ボリュームにドライブ文字を割り当てます。

⚠ Warning

既存のデータがあるボリュームをマウントする場合は、ボリュームを再フォーマットしないでください。再フォーマットすると、既存のデータが削除されます。

```
select disk 1
attributes disk clear readonly
online disk noerr
convert mbr
create partition primary
format quick fs=ntfs label="volume_label"
assign letter="drive_letter"
```

詳細については、「[DiskPart 構文とパラメータ](#)」を参照してください。

5. コマンドプロンプトを開き、スクリプトがあるフォルダに移動し、次のコマンドを実行して、指定したディスクでボリュームを使用できるようにします。

```
C:\> diskpart /s diskpart.txt
```

Disk Management utility

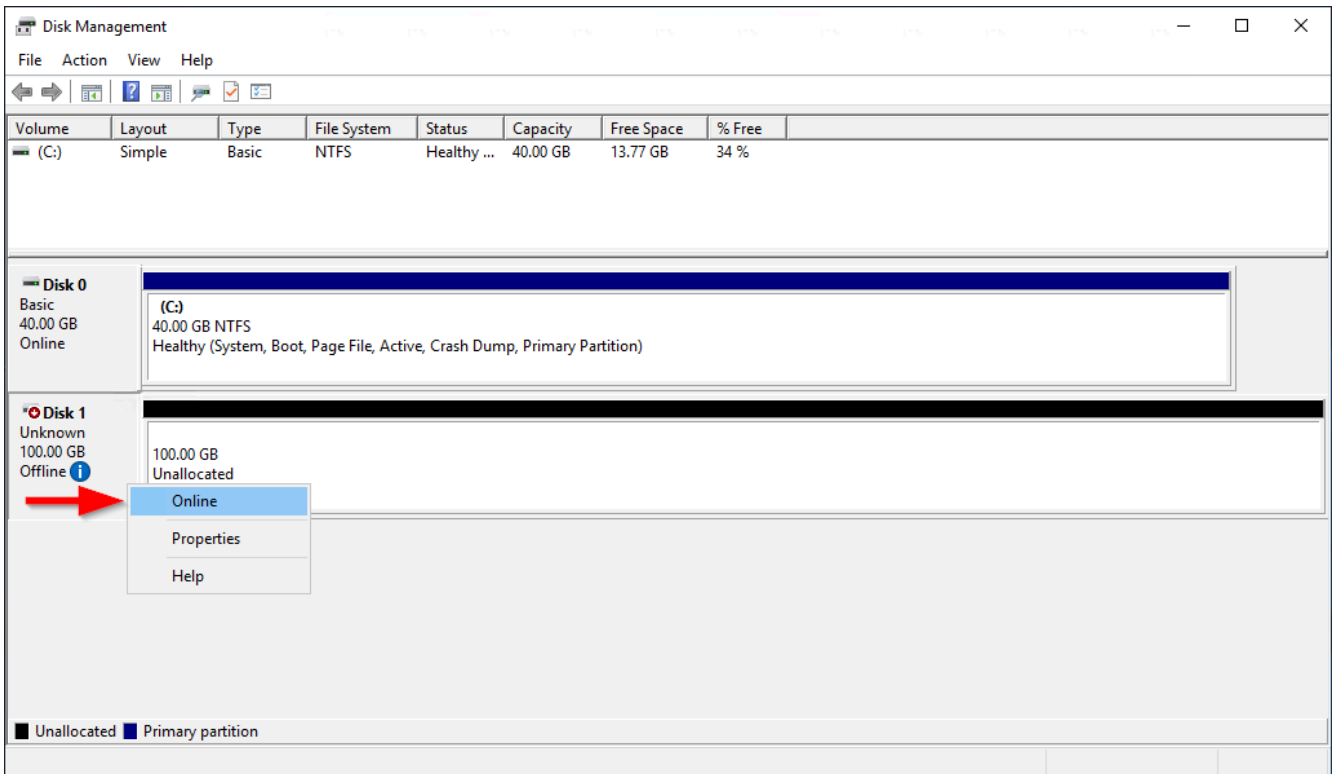
ディスク管理ユーティリティで EBS ボリュームを使用可能にするには

1. リモートデスクトップを使用して Windows インスタンスにログインします。詳細については、「[Windows インスタンスに接続する](#)」を参照してください。
2. [Disk Management] ユーティリティを起動します。タスクバーで、Windows ロゴのコンテキスト (右クリック) メニューを開き、[Disk Management] (ディスクの管理) を選択します。

i Note

Windows Server 2008 では、[スタート]、[管理ツール]、[コンピュータの管理]、[ディスクの管理] の順に選択します。

3. ボリュームをオンライン状態にします。下のペインで、EBS ボリューム用のディスクの左パネルのコンテキスト (右クリック) メニューを開きます。[Online] を選択します。



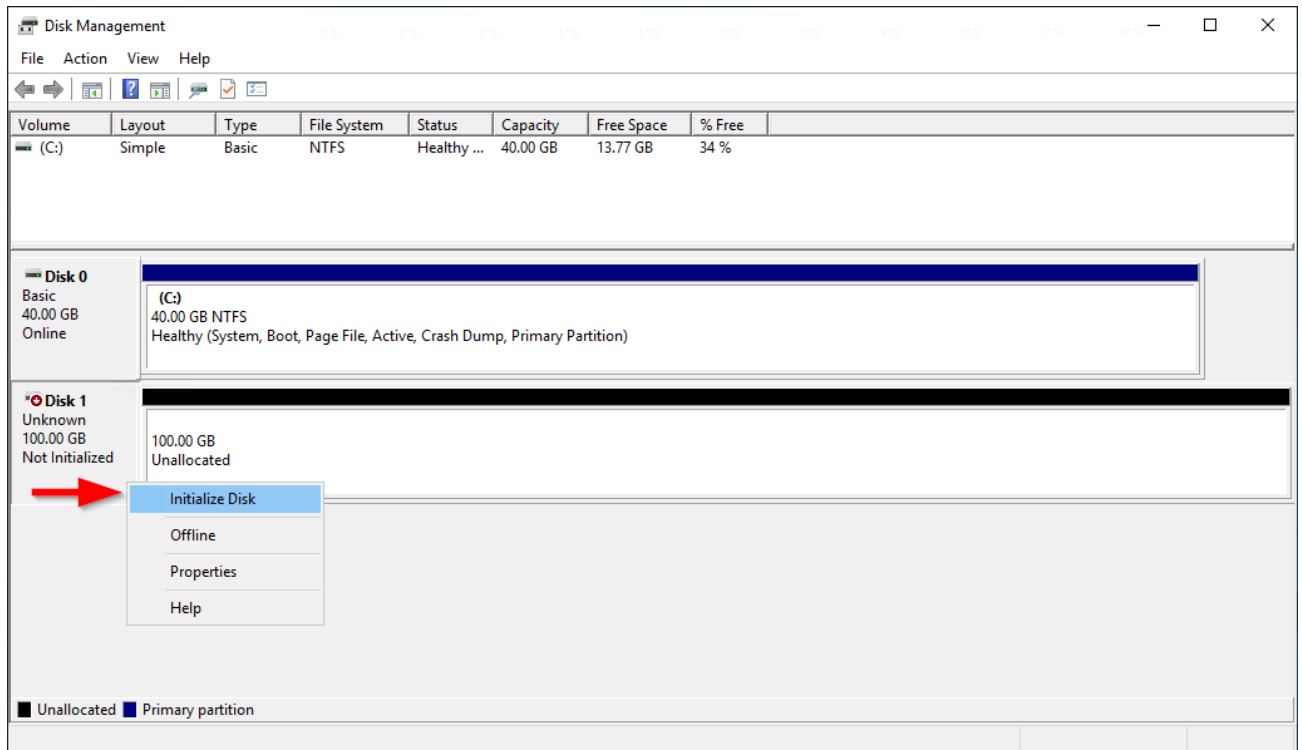
4. (条件に応じて) ディスクが初期化されていない場合は、使用する前に初期化する必要があります。ディスクが既に初期化されている場合は、このステップをスキップします。

Warning

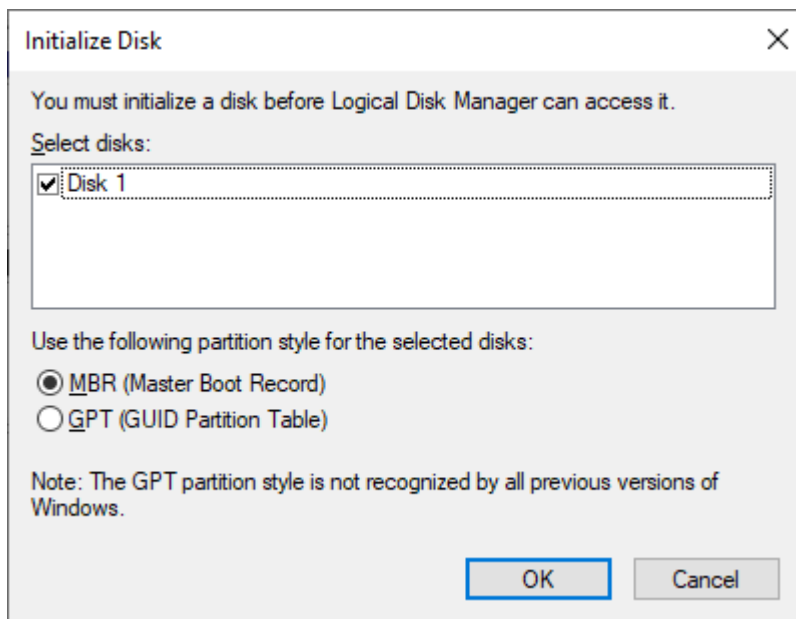
すでにデータが含まれるボリューム (パブリックデータセット、またはスナップショットから作成したボリュームなど) をマウントする場合は、ボリュームを再フォーマットしないように注意してください。再フォーマットすると、既存のデータが削除されます。

ディスクが初期化されていない場合は、次のように初期化します。

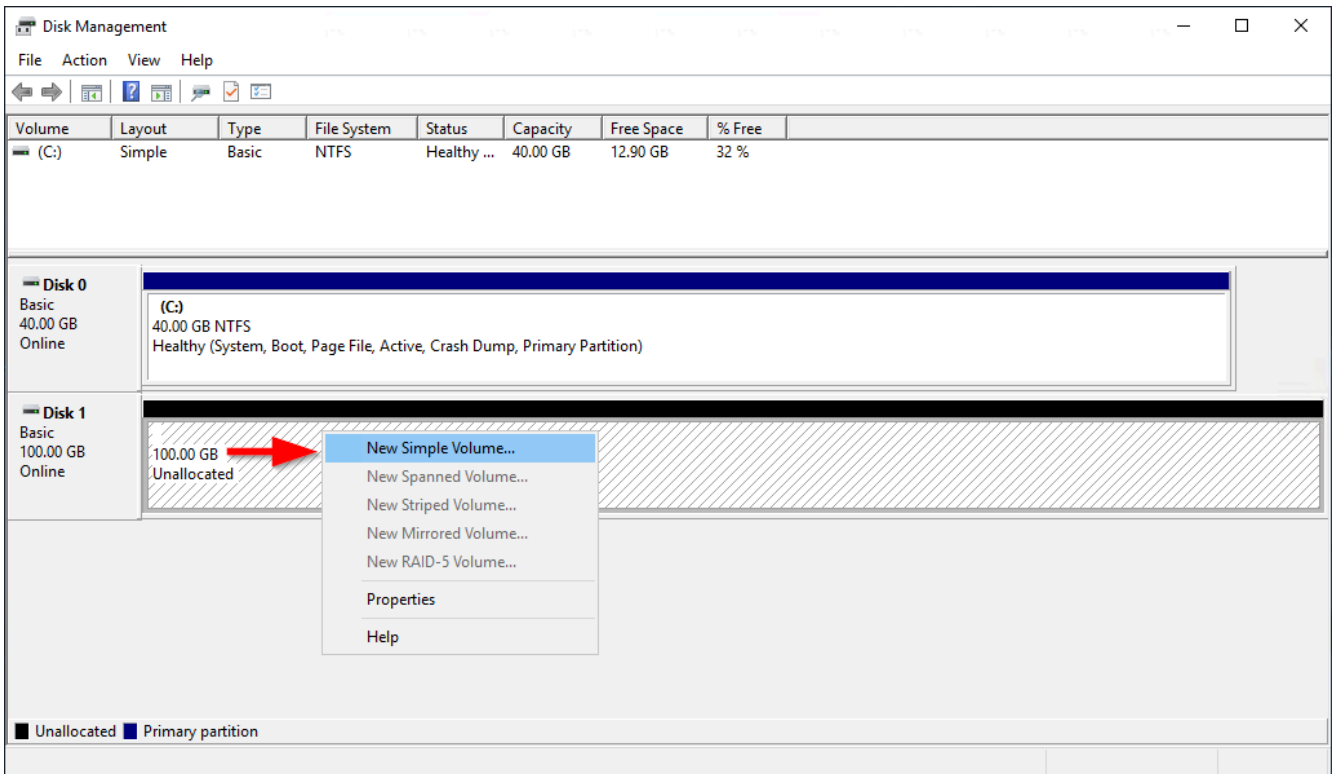
1. ディスクの左側パネルのコンテキスト (右クリック) メニューを開き、[Initialize Disk] (ディスクの初期化) を選択します。



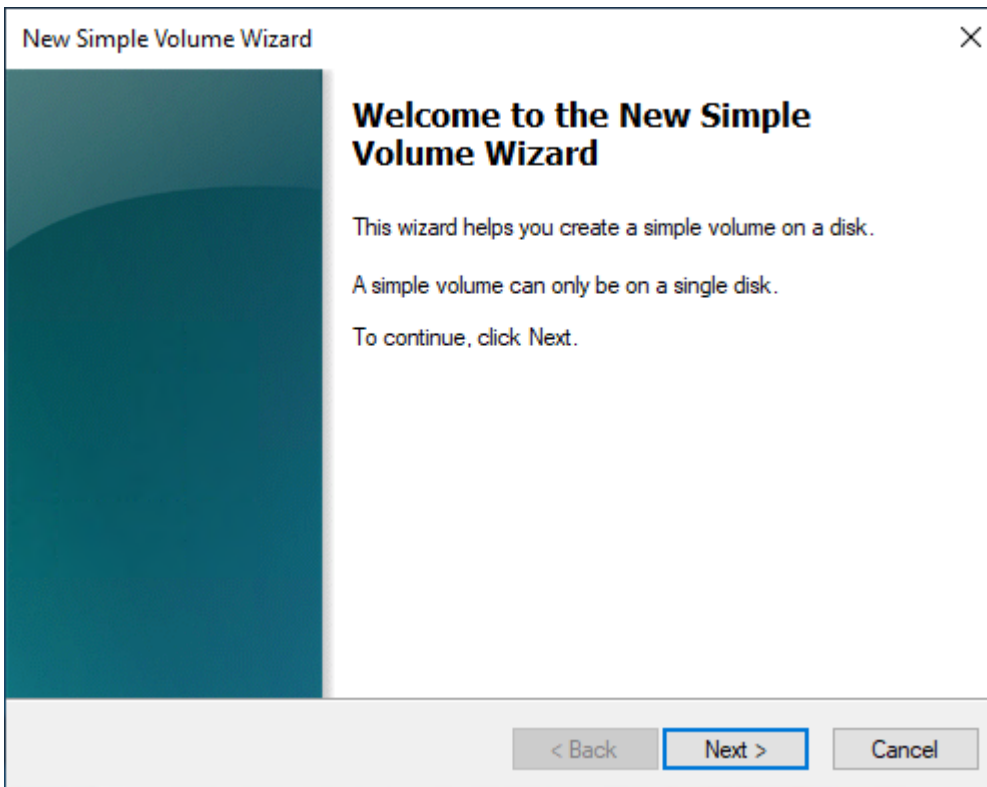
2. [Initialize Disk] (ディスクの初期化) ダイアログボックスで、パーティションスタイルを選択し、[OK] をクリックします。



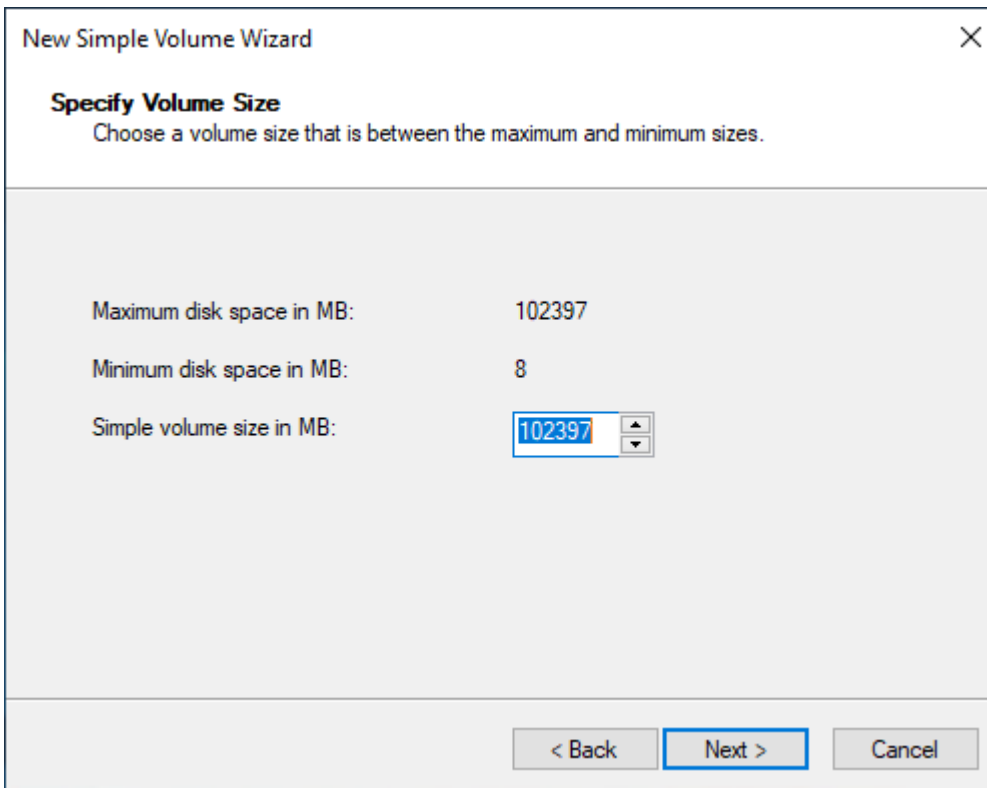
5. ディスクの右パネルのコンテキスト (右クリック) メニューを開き、[New Simple Volume] (新しいシンプルボリューム) を選択します。



6. [New Simple Volume Wizard] (新しいシンプルボリュームウィザード) で、[Next] (次へ) をクリックします。



7. デフォルトの最大値を変更する場合は、[Simple volume size in MB] (シンプルボリュームサイズ (MB)) を選択してから、[Next] (次へ) をクリックします。



The screenshot shows a dialog box titled "New Simple Volume Wizard" with a close button (X) in the top right corner. The main heading is "Specify Volume Size" with the instruction "Choose a volume size that is between the maximum and minimum sizes." Below this, there are three rows of information:

Maximum disk space in MB:	102397
Minimum disk space in MB:	8
Simple volume size in MB:	102397

The "Simple volume size in MB" value is displayed in a text box with a blue border and a spinner control to its right. At the bottom of the dialog, there are three buttons: "< Back", "Next >" (which is highlighted with a blue border), and "Cancel".

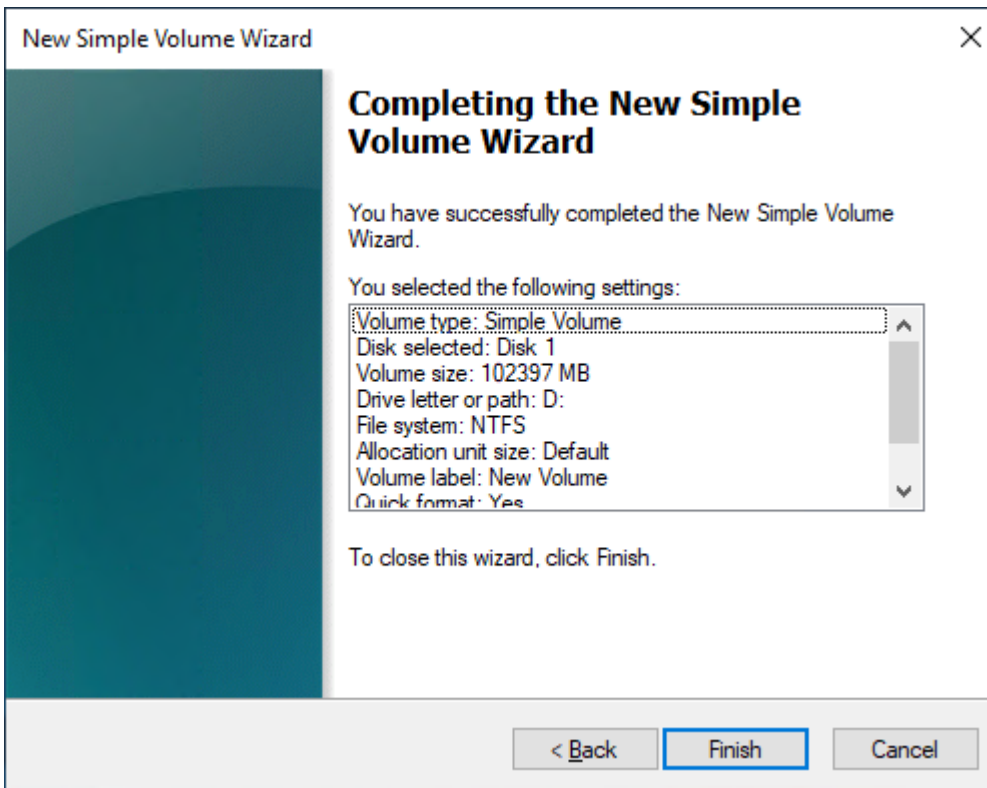
8. 必要に応じて、使用したいドライブ文字を [Assign the following drive letter] (次のドライブ文字を割り当てる) ドロップダウンの中に指定し、[Next] (次へ) をクリックします。

The screenshot shows the 'New Simple Volume Wizard' dialog box with the title 'Assign Drive Letter or Path'. Below the title is the instruction: 'For easier access, you can assign a drive letter or drive path to your partition.' There are three radio button options: 'Assign the following drive letter:' (selected), 'Mount in the following empty NTFS folder:', and 'Do not assign a drive letter or drive path'. The 'Assign the following drive letter:' option has a dropdown menu showing 'D'. The 'Mount in the following empty NTFS folder:' option has an empty text box and a 'Browse...' button. At the bottom, there are three buttons: '< Back', 'Next >', and 'Cancel'. The 'Next >' button is highlighted with a blue border.

9. [Volume Label] (ボリュームラベル) を指定し、必要に応じてデフォルト設定を調整し、[Next] (次へ) をクリックします。

The screenshot shows the 'New Simple Volume Wizard' dialog box with the title 'Format Partition'. Below the title is the instruction: 'To store data on this partition, you must format it first.' There is a sub-instruction: 'Choose whether you want to format this volume, and if so, what settings you want to use.' There are two radio button options: 'Do not format this volume' and 'Format this volume with the following settings:' (selected). Under the selected option, there are three settings: 'File system:' (dropdown menu showing 'NTFS'), 'Allocation unit size:' (dropdown menu showing 'Default'), and 'Volume label:' (text box showing 'New Volume'). There are also two checkboxes: 'Perform a quick format' (checked) and 'Enable file and folder compression' (unchecked). At the bottom, there are three buttons: '< Back', 'Next >', and 'Cancel'. The 'Next >' button is highlighted with a blue border.

10. 設定を確認してから、[Finish] (終了) をクリックして変更を適用し、[New Simple Volume] (新しいシンプルボリューム) ウィザードを閉じます。



Amazon EBS ボリュームに関する情報の表示

EBS ボリュームに関する詳細情報を表示できます。例えば、特定のリージョンの全てのボリュームの情報を表示したり、単一ボリュームの詳細 (サイズ、ボリュームタイプ、ボリュームが暗号化されているかどうか、ボリュームを暗号化するために使用した KMS キー、ボリュームがアタッチされている特定のインスタンスなど) を表示することができます。

インスタンスのオペレーティングシステムから、どのくらいのディスク容量が使用可能かなどの EBS ボリュームの詳細情報を取得できます。

トピック

- [ボリューム情報の表示](#)
- [ボリューム状態](#)
- [ボリュームメトリクスの表示](#)
- [空きディスク容量の表示](#)

ボリューム情報の表示

ボリュームに関する情報は、次のいずれかの方法を使用して表示できます。

Console

コンソールを使用して、EBS ボリュームについての情報を表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. リストを減らすには、タグとボリューム属性を使用してボリュームをフィルターできます。フィルターフィールドを選択し、タグまたはボリューム属性を選択し、フィルタ値を選択します。
4. ボリュームの詳細情報を表示するには、そのボリュームを選択します。

コンソールを使用してインスタンスにアタッチされている EBS ボリュームを表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[インスタンス] を選択します。
3. インスタンスを選択します。
4. [Storage] (ストレージ) タブの [Block devices] (ブロックデバイス) セクションでは、インスタンスにアタッチされているボリュームの一覧が表示されます。特定のボリュームに関する情報を表示するには、[Volume ID] (ボリューム ID) 列で該当する ID を選択します。

Amazon EC2 Global View

Amazon EC2 グローバルビューを使用して、AWS アカウントが有効になっているすべてのリージョンにわたりボリュームを表示することができます。詳細については、「[Amazon EC2 Global View](#)」を参照してください。

AWS CLI

を使用して EBS ボリュームに関する情報を表示するには AWS CLI

[describe-volumes](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用して EBS ボリュームに関する情報を表示するには PowerShell

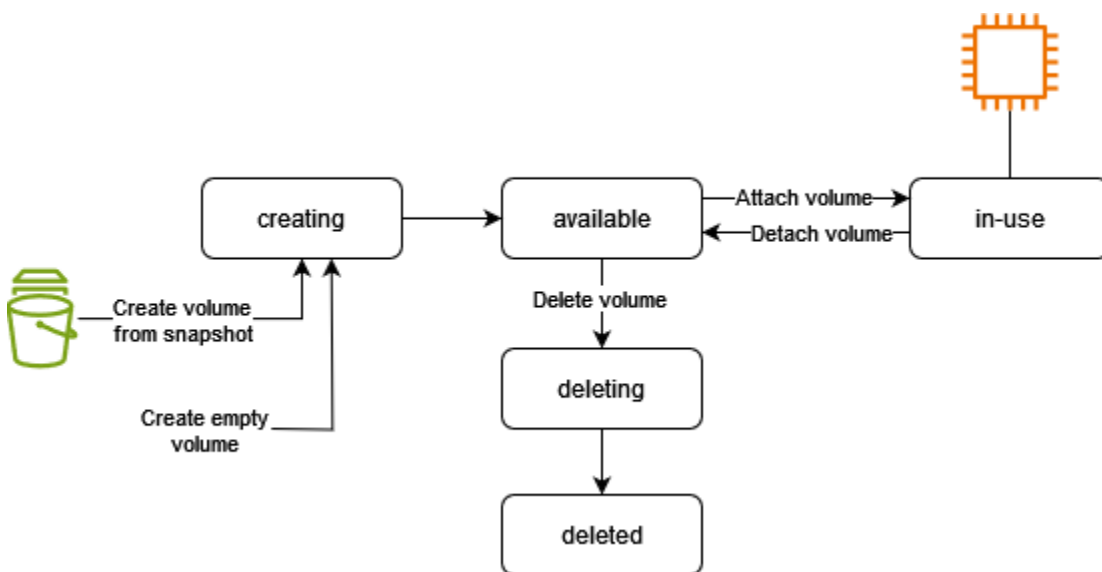
[Get-EC2Volume](#) コマンドを実行します。

ボリューム状態

ボリューム状態は、Amazon EBS ボリュームの可用性を示します。ボリュームの状態は、コンソールの [Volumes] ページの [State] 列に表示されるか、[AWS CLI describe-volumes](#) コマンドを使用して表示できます。

Amazon EBS ボリュームは、作成されてから削除されるまで、さまざまな状態に移行します。

次の図は、ボリュームの状態間の移行を示しています。Amazon EBS スナップショットからボリュームを作成するか、空のボリュームを作成できます。ボリュームを作成すると、creating 状態になります。ボリュームが使用可能になると、available 状態になります。ボリュームと同じアベイラビリティゾーンにあるインスタンスに、利用可能なボリュームをアタッチできます。ボリュームを別のインスタンスにアタッチまたは削除する前に、ボリュームをデタッチする必要があります。不要になったボリュームは削除できます。



次の表はボリューム状態をまとめたものです。

状態	説明
creating	ボリュームは作成中です。
available	ボリュームはインスタンスにアタッチされていません。
in-use	ボリュームはインスタンスにアタッチされています。

状態	説明
deleting	ボリュームは削除中です。
deleted	ボリュームは削除されました。
error	EBS ボリュームに関連する基となるハードウェアに障害が発生し、ボリュームに関連付けられているデータを回復できません。ボリュームを復元する方法またはボリューム上のデータを回復する方法については、 EBS ボリュームのステータスが「エラー」になる を参照してください。

ボリュームメトリクスの表示

EBS ボリュームに関する追加情報は Amazon CloudWatch から入手できます。詳細については、[「Amazon EBS の Amazon CloudWatch メトリックス」](#)を参照してください。

空きディスク容量の表示

Linux インスタンス

インスタンスの Linux オペレーティングシステムから、どのくらいのディスク容量が使用可能かなどの EBS ボリュームの詳細情報を取得できます。例えば、以下のコマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ df -hT /dev/xvda1
Filesystem      Type      Size  Used Avail Use% Mounted on
/dev/xvda1     xfs       8.0G  1.2G  6.9G  15% /
```

Tip

CloudWatch エージェントを使用して、インスタンスに接続せずに Amazon EC2 インスタンスからディスク容量使用状況メトリックスを収集することもできます。詳細については、Amazon [CloudWatch ユーザーガイドの「CloudWatch エージェント設定ファイルの作成」](#)と「[CloudWatch エージェントのインストール](#)」を参照してください。複数のインスタンスのディスク容量の使用状況を監視する必要がある場合は、Systems Manager CloudWatch を使用してそれらのインスタンスにエージェントをインストールして設定できます。詳細については、「[Systems Manager CloudWatch を使用したエージェントのインストール](#)」を参照してください。

Windows インスタンスの空きディスク領域表示の詳細については、Windows インスタンスの Amazon EC2 ユーザーガイドの[空きディスク容量の表示](#)を参照してください。

Windows インスタンス

インスタンスの Windows オペレーティングシステムから、どのくらいのディスク容量が使用可能かなどの EBS ボリュームの詳細情報を取得できます。例えば、エクスプローラーを開き、[This PC (この PC)] を選択します。

次の `dir` コマンドを使用して、出力の最後の行を確認することで空きディスク容量を表示することもできます。

```
C:\> dir C:
Volume in drive C has no label.
Volume Serial Number is 68C3-8081

Directory of C:\

03/25/2018  02:10 AM    <DIR>          .
03/25/2018  02:10 AM    <DIR>          ..
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Contacts
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Desktop
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Documents
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Downloads
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Favorites
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Links
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Music
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Pictures
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Saved Games
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Searches
03/25/2018  03:47 AM    <DIR>          Videos
                0 File(s)                0 bytes
                13 Dir(s)  18,113,662,976 bytes free
```

次の `fsutil` コマンドを使用して、空きディスク容量を表示することもできます。

```
C:\> fsutil volume diskfree C:
Total # of free bytes      : 18113204224
Total # of bytes          : 32210153472
Total # of avail free bytes : 18113204224
```

i Tip

CloudWatch エージェントを使用して、インスタンスに接続せずに Amazon EC2 インスタンスからディスク容量使用状況メトリックスを収集することもできます。詳細については、Amazon [CloudWatch ユーザーガイド](#)の「[CloudWatch エージェント設定ファイルの作成](#)」と「[CloudWatch エージェントのインストール](#)」を参照してください。複数のインスタンスのディスク容量の使用状況を監視する必要がある場合は、Systems Manager CloudWatch を使用してそれらのインスタンスにエージェントをインストールして設定できます。詳細については、「[Systems Manager CloudWatch を使用したエージェントのインストール](#)」を参照してください。

Linux インスタンスでの空きディスク領域表示の詳細については、Linux インスタンス用 Amazon EC2 ユーザーガイドの[空きディスク容量の表示](#)を参照してください。

Amazon EBS Elastic Volumes を使用してボリュームを変更する

Amazon EBS Elastic Volumes では、EBS ボリュームのボリュームサイズの増加、ボリュームタイプの変更、パフォーマンスの調整を行うことができます。インスタンスで Elastic Volumes をサポートしている場合は、ボリュームのデタッチやインスタンスの再起動を行うことなく、これらの操作を行うことができます。したがって、変更の適用中でも、アプリケーションを引き続き使用できます。

ボリュームの設定を変更するための料金は発生しません。ボリューム変更を開始すると、新しいボリューム設定料金が発生します。詳細については、[Amazon EBS 料金表](#)ページを参照してください。

コンテンツ

- [EBS ボリューム変更の要件](#)
- [EBS ボリュームへの変更のリクエスト](#)
- [EBS ボリューム変更の進行状況のモニタリング](#)
- [EBS ボリュームのサイズ変更後にファイルシステムの拡張](#)

EBS ボリューム変更の要件

Amazon EBS ボリュームを変更すると、以下の要件と制約事項が適用されます。EBS ボリュームの一般的な要件についての詳細は、[EBS ボリュームのサイズと設定の制限](#)を参照してください。

トピック

- [サポートされるインスタンスタイプ](#)
- [オペレーティングシステム](#)
- [制限事項](#)

サポートされるインスタンスタイプ

Elastic Volumes は、次のインスタンスでサポートされています。

- すべての[現行世代のインスタンス](#)
- 旧世代のインスタンス: C1、C3、C4、G2、I2、M1、M3、M4、R3 および R4

インスタンスタイプが Elastic Volumes をサポートしていない場合は、[Elastic Volumes がサポートされていない場合の EBS ボリュームの変更](#)を参照してください。

オペレーティングシステム

次のオペレーティングシステム要件が適用されます。

Linux

Linux AMI では、2 TiB (2048 GiB) 以上のブートボリュームについて GUID パーティションテーブル (GPT) と GRUB 2 が必要です。現在の多くの Linux AMI は依然として MBR パーティションスキームを使用しており、2 TiB までのブートボリュームのみをサポートしています。インスタンスが 2 TiB を超えるブートボリュームで起動しない場合、使用中の AMI は、2 TiB のブートボリュームサイズに制限されている可能性があります。ブートボリューム以外のボリュームには、Linux インスタンスでこの制限はありません。Windows ボリュームに影響する要件については、Windows インスタンスの Amazon EC2 ユーザーガイドの[Windows ボリュームの要件](#)を参照してください。

2 TiB より大きな値にブートボリュームのサイズを変更する前に、ボリュームが MBR と GPT のどちらのパーティション分割を使用しているのか確認します。それには、インスタンス上で、コマンドを実行します。

```
[ec2-user ~]$ sudo gdisk -l /dev/xvda
```

GPT パーティション分割を使用している Amazon Linux インスタンスでは、次の情報が返ります。

```
GPT fdisk (gdisk) version 0.8.10
```

```
Partition table scan:
```

```
MBR: protective
BSD: not present
APM: not present
GPT: present
```

```
Found valid GPT with protective MBR; using GPT.
```

MBR パーティション分割を使用している SUSE インスタンスは、次の情報を返します。

```
GPT fdisk (gdisk) version 0.8.8
```

```
Partition table scan:
```

```
MBR: MBR only
BSD: not present
APM: not present
GPT: not present
```

Windows

デフォルトでは、Windows はマスターブートレコード (MBR) パーティションテーブルを使用してボリュームを初期化します。MBR は 2 TiB (2048 GiB) 以下のボリュームのみをサポートするため、Windows はこのサイズ制限以上の MBR ボリュームのサイズ変更を阻止します。この場合、[Extend Volume (ボリュームの拡張)] のオプションは Windows の [Disk Management (ディスクの管理)] ユーティリティで無効になっています。AWS Management Console または AWS CLI を使用して、サイズ制限を超える MBR でパーティション分割されたボリュームを作成しても、Windows では超過分のスペースを検出または使用することはできません。Linux ボリュームに影響する要件については、Linux インスタンス用 Amazon EC2 ユーザーガイドの [Linux ボリュームの要件](#) を参照してください。

この制限を回避するには、GUID パーティションテーブル (GPT) でより大きな新しいボリュームを作成し、元の MBR ボリュームからデータをコピーします。

GPT ボリュームを作成するには

1. EC2 インスタンスのアベイラビリティゾーンに必要な容量の新しい空のボリュームを作成し、インスタンスにアタッチします。

Note

新しいボリュームには、スナップショットから復元したボリュームは使用できません。

2. Windows システムにログインし、[Disk Management (ディスク管理)] (diskmgmt.exe) を開きます。
3. 新しいディスクのコンテキスト (右クリック) メニューを開き、[Online] を選択します。
4. [Initialize Disk] ウィンドウで、新規のディスクを選択し、続いて [GPT (GUID Partition Table)], [OK] の順に選択します。
5. 初期化が完了したら、robocopy または teracopy などのツールを使用して元のボリュームから新しいボリュームにデータをコピーします。
6. [Disk Management] で、ドライブ文字を適切な値に変更し、古いボリュームをオフラインにします。
7. Amazon EC2 コンソールで、インスタンスから古いボリュームをデタッチ後、インスタンスを再起動して正常に稼働することを確認したら、古いボリュームを削除します。

制限事項

- ボリュームの変更でリクエストできる集計ストレージの最大数には制限があります。詳細については、「Amazon Web Services 全般のリファレンス」の「[Amazon EBS service quotas](#)」を参照してください。
- ボリュームを変更した後は、少なくとも 6 時間待機し、同じボリュームにさらに変更を加える前に状態が in-use または available であることを確認してください。
- EBS ボリュームの変更には、適用される設定変更に応じて、数分から数時間かかる場合があります。サイズが 1 TiB の EBS ボリュームを変更するには通常、最長 6 時間かかります。ただし、他の状況では、同じボリュームでも 24 時間以上かかることがあります。ボリュームの変更にかかる時間は、必ずしも直線的に増えるわけではありません。したがって、ボリュームが大きくても変更にかかる時間が短く、ボリュームが小さくても時間が長くなる場合もあります。
- ボリュームが 2016 年 11 月 3 日 23:40 (UTC) 以前にアタッチされていた場合は、Elastic Volumes サポートを初期化する必要があります。詳細については、[Elastic Volumes サポートの初期化](#)を参照してください。
- EBS ボリュームを変更する際にエラーメッセージが表示された場合や前世代のインスタンスタイプにアタッチされた EBS ボリュームを変更する場合は、以下のいずれかのステップを行ってください。
 - ルート以外のボリュームの場合は、ボリュームをインスタンスからデタッチして、変更を適用した後で、ボリュームを再アタッチします。
 - ルートボリュームの場合は、インスタンスを停止し、変更を適用した後で、インスタンスを再起動します。

- 完全に初期化されていないボリュームでは、変更時間が長くなります。詳細については、[Amazon EBS ボリュームの初期化](#)を参照してください。
- 変更後のボリュームサイズは、そのファイルシステムとパーティション設定スキームでサポートされる容量を超えることはできません。詳細については、[EBS ボリュームのサイズと設定の制限](#)を参照してください。
- ボリュームのボリュームタイプを変更する場合、サイズとパフォーマンスは、ターゲットとなるボリュームタイプの制限内にする必要があります。詳細については、[Amazon EBS ボリュームの種類](#)を参照してください。
- EBS ボリュームのサイズを小さく変更することはできません。ただし、より小さなボリュームを作成し、そのボリュームに対して rsync (Linux インスタンス) または robocopy (Windows インスタンス) などのアプリケーションレベルのツールを使用してデータを移行することができます。
- 32,000 IOPS 以上を、既存の io1 または io2 ボリュームにプロビジョニングした場合、パフォーマンスの向上を完全に確認するためには、そのボリュームを一度デタッチした後に再アタッチするか、インスタンスを再起動する必要があることがあります。
- [Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)にアタッチされた io2 ボリュームは、最大 64 TiB のサイズおよび最大 256,000 の IOPS をサポートします。他のインスタンスにアタッチされた io2 ボリュームは、最大 16 TiB のサイズおよび最大 64,000 の IOPS をサポートしますが、達成できるパフォーマンスは最大 32,000 IOPS までに限られます。
- マルチアタッチが有効な io2 ボリュームのボリュームタイプを変更することはできません。
- マルチアタッチが有効な io1 ボリュームのボリュームタイプ、サイズ、プロビジョンド IOPS を変更することはできません。
- タイプ io1、io2、gp2、gp3、または standard のルート ボリュームは、インスタンスからデタッチされていても、st1 または sc1 ボリュームに変更できません。
- m3.medium インスタンスはボリュームの変更を完全にサポートしていますが、m3.large、m3.xlarge、および m3.2xlarge インスタンスは、すべてのボリューム変更機能をサポートしていない場合があります。

EBS ボリュームへの変更のリクエスト

Amazon EBS の伸縮自在なボリュームでは、そのサイズを増やしたり、パフォーマンスを増減したり、ボリュームタイプを変更したりなどが、ボリュームをデタッチすることなく動的に行えます。

ボリュームを変更する場合は、次のプロセスで行います。

1. (オプション) 重要なデータを含むボリュームを変更する前に、変更をロールバックする必要がある場合に備えて、ボリュームのスナップショットを作成するのがベストプラクティスです。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの作成](#)を参照してください。
2. ボリュームの変更をリクエストします。
3. ボリューム変更の進行状況をモニタリングします。詳細については、[EBS ボリューム変更の進行状況のモニタリング](#)を参照してください。
4. ボリュームのサイズが変更された場合、増加されたストレージ容量を利用するには、ボリュームのファイルシステムを拡張します。詳細については、「[EBS ボリュームのサイズ変更後にファイルシステムの拡張](#)」を参照してください。

コンテンツ

- [Elastic Volumes を使用して EBS ボリュームを変更する](#)
- [Elastic Volumes サポートの初期化 \(必要な場合\)](#)
- [Elastic Volumes がサポートされていない場合の EBS ボリュームの変更](#)

Elastic Volumes を使用して EBS ボリュームを変更する

考慮事項

ボリュームを変更する際には、次の点に注意してください。

- ボリュームを変更した後は、少なくとも 6 時間待機し、同じボリュームにさらに変更を加える前に状態が `in-use` または `available` であることを確認してください。
- EBS ボリュームの変更には、適用される設定変更に応じて、数分から数時間かかる場合があります。サイズが 1 TiB の EBS ボリュームを変更するには通常、最長 6 時間かかります。ただし、他の状況では、同じボリュームでも 24 時間以上かかることがあります。ボリュームの変更にかかる時間は、必ずしも直線的に増えるわけではありません。したがって、ボリュームが大きくても変更にかかる時間が短く、ボリュームが小さくても時間が長くかかる場合もあります。
- ボリューム変更リクエストの送信後は、キャンセルできません。
- ボリュームサイズは増加することだけが可能です。ボリュームサイズを小さくすることはできません。
- ボリュームのパフォーマンスは増減できます。
- ボリュームタイプを変更しない場合は、ボリュームサイズとパフォーマンスを、現在のボリュームタイプの制限内であれば変更できます。ボリュームタイプを変更する場合は、ターゲットとなるボリュームタイプの制限内であれば、ボリュームサイズとパフォーマンスを変更することが可能です。

- ボリュームタイプを gp2 から gp3 に変更し、IOPS またはスループットパフォーマンスを指定しない場合、Amazon EBS はソース gp2 ボリュームと同等のパフォーマンス、またはベースライン gp3 パフォーマンスのいずれか高い方を自動的にプロビジョニングします。

例えば、IOPS またはスループットパフォーマンスを指定せずに、250 MiB/秒のスループットと 1,500 IOPS の 500 GiB gp2 ボリュームを gp3 に変更すると、Amazon EBS は 3,000 IOPS (ベースライン gp3 IOPS) と 250 MiB/秒 (ソース gp2 ボリュームスループットに一致するように) の gp3 ボリュームを自動的にプロビジョニングします。

EBS ボリュームを変更するには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

コンソールを使用して、EBS ボリュームを変更するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. ボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Modify volume] (ボリュームの編集) の順にクリックします。
4. [Modify Volume] (ボリュームの編集) 画面に、ボリューム ID とボリュームの現在の設定 (タイプ、サイズ、IOPS、スループットなど) が表示されます。新しい設定値を以下のように設定します。
 - タイプを変更するには、[Volume Type] (ボリュームタイプ) の値を選択します。
 - サイズを変更するには、[Size] に新しい値を入力します。
 - (gp3,io1, およびio2のみ) IOPS を変更するには、IOPS に新しい値を入力します。
 - (gp3 のみ) スループットを変更するには、[Throughput] (スループット) に新しい値を入力します。
5. ボリューム設定を変更したら、[変更] を選択します。確認を求めるメッセージが表示されたら、[Modify] (変更) を選択します。

6.

Important

ボリュームのサイズを大きくした場合は、追加のストレージ容量を利用するために、ボリュームのパーティションも拡張する必要があります。詳細については、「[EBS ボリュームのサイズ変更後にファイルシステムの拡張](#)」を参照してください。

7. (Windows インスタンスのみ) AWS NVMe ドライバーがないインスタンスに NVMe ボリュームのサイズを増やす場合、新規のボリュームサイズを表示するには、インスタンスを再起動して Windows を有効にする必要があります。AWS NVMe ドライバーのインストールの詳細については、「[AWS Windows インスタンス用 NVMe ドライバー](#)」を参照してください。

AWS CLI

AWS CLI を使用して、EBS ボリュームを変更するには

ボリュームの設定を 1 つ以上変更するには、[modify-volume](#) コマンドを使用します。例えば、サイズが 100 GiB で、タイプが gp2 のボリュームがある場合は、次のコマンドでこの設定を 10,000 IOPS、サイズが 200 GiB のタイプ io1 のボリュームに変更します。

```
aws ec2 modify-volume --volume-type io1 --iops 10000 --size 200 --volume-id vol-11111111111111111
```

出力例を次に示します。

```
{
  "VolumeModification": {
    "TargetSize": 200,
    "TargetVolumeType": "io1",
    "ModificationState": "modifying",
    "VolumeId": "vol-11111111111111111",
    "TargetIops": 10000,
    "StartTime": "2017-01-19T22:21:02.959Z",
    "Progress": 0,
    "OriginalVolumeType": "gp2",
    "OriginalIops": 300,
    "OriginalSize": 100
  }
}
```

Important

ボリュームのサイズを大きくした場合は、追加のストレージ容量を利用するために、ボリュームのパーティションも拡張する必要があります。詳細については、「[EBS ボリュームのサイズ変更後にファイルシステムの拡張](#)」を参照してください。

Elastic Volumes サポートの初期化 (必要な場合)

2016 年 11 月 3 日 23:40 (UTC) 以前にインスタンスにアタッチされたボリュームを変更する前に、次のいずれかのアクションを使用してボリュームのサポートを初期化する必要があります。

- ボリュームをデタッチしてアタッチする
- インスタンスの停止と起動

インスタンスでボリュームを変更する準備が完了していることを確認するには、次のいずれかの手順を使用します。

Console

コンソールを使用してインスタンスの準備が完了していることを確認するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[インスタンス] を選択します。
3. [列の表示/非表示] アイコン (歯車) を選択します。[Launch time (起動時刻)] 属性列を選択し、[Confirm (確認)] を選択します。
4. [起動時刻] 列でインスタンスの一覧をソートします。カットオフ日より前に開始されたインスタンスごとに、[Storage (ストレージ)] タブを選択し、[Attachment time (アタッチ時刻)] 列をチェックして、ボリュームがいつアタッチされたかを確認します。

AWS CLI

CLI を使用してインスタンスの準備が完了していることを確認するには

ボリュームが 2016 年 11 月 3 日 23:40 (UTC) 以前にアタッチされたかどうかを確認するには、次の [describe-instances](#) コマンドを使用します。

```
aws ec2 describe-instances --query "Reservations[*].Instances[*].
[InstanceId,LaunchTime<='2016-11-01',BlockDeviceMappings[*]
[Ebs.AttachTime<='2016-11-01']]" --output text
```

各インスタンスの出力の最初の行は、その ID と、カットオフ日より前に開始されたかどうか (True または False) を示します。その最初の行の後に、各 EBS ボリュームがカットオフ日より前にアタッチされたかどうかを示す 1 つ以上の行が続きます。次の出力例では、最初のインスタンスのボリューム変更を初期化する必要があります。これはカットオフ日より前に開始され、カットオ

7日より前にそのルートボリュームがアタッチされていたためです。他のインスタンスはカットオフ日以降に開始されたため、準備は完了しています。

```
i-e905622e      True
True
i-719f99a8     False
True
i-006b02c1b78381e57  False
False
False
i-e3d172ed     False
True
```

Elastic Volumes がサポートされていない場合の EBS ボリュームの変更

サポートされているインスタンスタイプを使用している場合は、Elastic Volumes を使用して、Amazon EBS ボリュームのサイズ、パフォーマンス、およびボリュームのタイプを動的に変更することができます。それらをデタッチする必要はありません。

Elastic Volumes は使用できないが、ルート (ブート) ボリュームの変更が必要になった場合は、インスタンスを停止し、ボリュームを変更してから、インスタンスを再起動する必要があります。

インスタンスが起動したら、ファイルシステムのサイズを確認して、拡大したボリュームスペースをインスタンスが認識しているかどうか表示できます。Linux では、df -h コマンドを使用してファイルシステムのサイズを確認します。

```
[ec2-user ~]$ df -h
Filesystem      Size  Used Avail Use% Mounted on
/dev/xvda1      7.9G  943M  6.9G  12% /
tmpfs           1.9G   0    1.9G   0% /dev/shm
```

新しく拡張したボリュームがサイズに反映されていない場合は、デバイスのファイルシステムを拡張して、インスタンスで新しいスペースを使えるようにします。詳細については、「[EBS ボリュームのサイズ変更後にファイルシステムの拡張](#)」を参照してください。

Windows インスタンスを使用すると、ボリュームを使用するためにオンラインにする必要がある場合があります。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」を参照してください。ボリュームを再フォーマットする必要はありません。

EBS ボリューム変更の進行状況のモニタリング

EBS ボリュームを変更すると、次のステータスになります。ボリュームの状態は modifying、optimizing、completed の順に変わります。この時点で、ボリュームは追加の変更を適用できる状態になります。

Note

まれに、一時的な AWS エラーのために failed 状態になる場合があります。これは、ボリュームのヘルスステータスを示すものではなく、ボリュームの変更に失敗したことを単に示しています。この場合は、再度ボリュームの変更を行います。

ボリュームが optimizing 状態である場合、ボリュームのパフォーマンスはソースとターゲットの設定仕様の間にあります。過渡的なボリュームのパフォーマンスは、ソースボリュームのパフォーマンスより劣ることはありません。IOPS をダウングレードする場合、過渡的なボリュームのパフォーマンスは、ターゲットボリュームと同程度のパフォーマンスになります。

ボリュームの変更による影響は次のとおりです。

- 通常、ボリュームが Optimizing 状態になってから、サイズの変更が完了して反映されるまでには数秒かかります。
- パフォーマンス (IOPS) の変更は、設定の変更内容に応じて、完了するまでに数分から数時間かかる場合があります。
- ボリュームが完全に初期化されていない場合など、新しい設定が有効になるまでに 24 時間を超える時間がかかる場合があります。通常、完全に使用された 1 TiB ボリュームが新しいパフォーマンス設定に移行するまでには約 6 時間かかります。

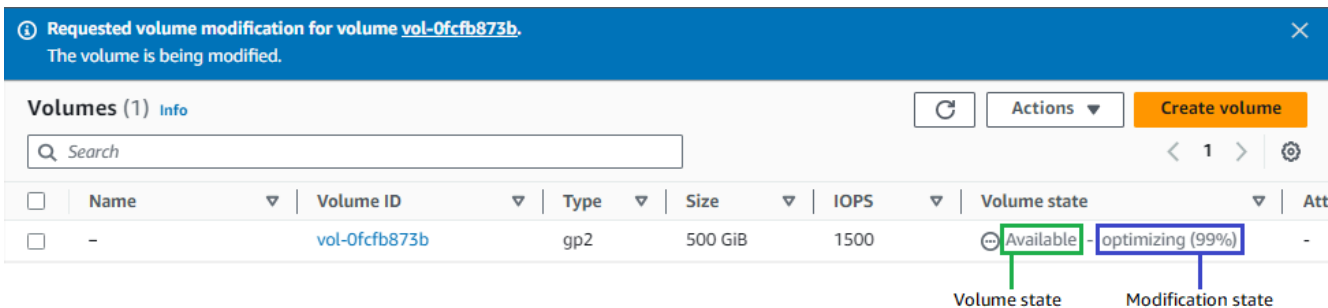
ボリュームの変更の進行状況をモニタリングするには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

Amazon EC2 コンソールを使用して変更の進行状況をモニタリングするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. ボリュームを選択します。

4. [詳細] タブの [ボリュームのステータス] 列と [ボリュームステータス] フィールドには、*volume-state - modification-state — Modification state* という形式の情報が含まれます。次の画像に、ボリュームとボリュームの変更状態を示します。



ボリュームの状態には、creating、available、in-use、deleting、deleted、error があります。

修正の状態には、modifying、optimizing、completed があります。

変更が完了すると、ボリュームの状態のみが表示されます。変更の状態と進行状況は表示されなくなります。

AWS CLI

AWS CLI を使用して変更の進行状況をモニタリングするには

1 つ以上のボリュームの変更の進行状況を表示するには、[describe-volumes-modifications](#) コマンドを使用します。次の例では、2 つのボリュームのボリューム変更を示します。

```
aws ec2 describe-volumes-modifications --volume-ids vol-11111111111111111111 vol-22222222222222222222
```

次の出力例では、これらのボリュームの変更の状態は、引き続き modifying になっています。進捗状況は、パーセンテージで報告されます。

```
{
  "VolumesModifications": [
    {
      "TargetSize": 200,
      "TargetVolumeType": "io1",
      "ModificationState": "modifying",
      "VolumeId": "vol-11111111111111111111",
    }
  ]
}
```

```

        "TargetIops": 10000,
        "StartTime": "2017-01-19T22:21:02.959Z",
        "Progress": 0,
        "OriginalVolumeType": "gp2",
        "OriginalIops": 300,
        "OriginalSize": 100
    },
    {
        "TargetSize": 2000,
        "TargetVolumeType": "sc1",
        "ModificationState": "modifying",
        "VolumeId": "vol-22222222222222222",
        "StartTime": "2017-01-19T22:23:22.158Z",
        "Progress": 0,
        "OriginalVolumeType": "gp2",
        "OriginalIops": 300,
        "OriginalSize": 1000
    }
]
}

```

次の例では、変更の状態が `optimizing` または `completed` であるすべてのボリュームを示し、その結果をフィルタリングおよびフォーマットして 2017 年 2 月 1 日以降に開始された変更のみを表示します。

```

aws ec2 describe-volumes-modifications --filters Name=modification-
state,Values="optimizing","completed" --query "VolumesModifications[?
StartTime>='2017-02-01'].{ID:VolumeId,STATE:ModificationState}"

```

2 つのボリュームに関する情報を含む出力例を以下に示します。

```

[
  {
    "STATE": "optimizing",
    "ID": "vol-06397e7a0eEXAMPLE"
  },
  {
    "STATE": "completed",
    "ID": "vol-ba74e18c2aEXAMPLE"
  }
]

```


CloudWatch Events console

CloudWatch Events では、ボリューム変更イベントの通知ルールを作成できます。ルールを使用して [Amazon SNS](#) で通知メッセージを生成するか、一致したイベントに反応して [Lambda 関数](#) を呼び出します。イベントは、ベストエフォートベースで発生します。

CloudWatch Events を使用して変更の進行状況をモニタリングするには

1. CloudWatch コンソール (<https://console.aws.amazon.com/cloudwatch/>) を開きます。
2. [Events]、[Create rule] の順に選択します。
3. [Build event pattern to match events by service] で、[Custom event pattern] を選択します。
4. [カスタムイベントパターンの構築] で、コンテンツを次の以下のように置き換え、[保存] を選択します。

```
{
  "source": [
    "aws.ec2"
  ],
  "detail-type": [
    "EBS Volume Notification"
  ],
  "detail": {
    "event": [
      "modifyVolume"
    ]
  }
}
```

以下にイベントデータの例を示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Volume Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "2017-01-12T21:09:07Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1:012345678901:volume/vol-03a55cf56513fa1b6"
  ],
}
```

```
"detail": {
  "result": "optimizing",
  "cause": "",
  "event": "modifyVolume",
  "request-id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab"
}
```

EBS ボリ्यूムのサイズ変更後にファイルシステムの拡張

[EBS ボリ्यूムのサイズを増やしたら](#)、パーティションおよびファイルシステムを新しいより大きなサイズに拡張する必要があります。ボリ्यूムが `optimizing` 状態に入るとすぐにこれを実行できます。

開始する前に

- 変更をロールバックする必要がある場合に備えて、ボリ्यूムのスナップショットを作成します。詳細については、「[Amazon EBS スナップショットの作成](#)」を参照してください。
- ボリ्यूムの変更が成功し、`optimizing` または `completed` 状態になっていることを確認します。詳細については、「[EBS ボリ्यूム変更の進行状況のモニタリング](#)」を参照してください。
- ボリ्यूムがインスタンスにアタッチされており、フォーマットおよびマウントされていることを確認します。詳細については、「[アタッチ済みボリ्यूムのフォーマットとマウント](#)」を参照してください。
- (Linux インスタンスのみ) Amazon EBS ボリ्यूムで論理ボリ्यूムを使用している場合、Logical Volume Manager (LVM) を使用して論理ボリ्यूムを拡張する必要があります。これを行う方法については、「[EBS ボリ्यूム全体で LVM 論理ボリ्यूムを作成する方法を教えてください](#)」の「論理ボリ्यूムを拡張する」のセクションを参照してください。AWSナレッジセンターの記事。

Linux インスタンス

Note

次の手順では、Linux の XFS および Ext4 ファイルシステムを拡張するプロセスについて説明します。別のファイルシステムの拡張に関する詳細については、そのドキュメントを参照してください。

ボリュームにパーティションがある場合、Linux でファイルシステムを拡張する前にパーティションを拡張する必要があります。

EBS ボリュームのファイルシステムを拡張する

サイズを変更したボリュームのファイルシステムを拡張するには、以下の手順を使用します。

Xen インスタンスおよび [Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)では、デバイスおよびパーティションの命名が異なることに注意してください。インスタンスが Xen ベースか Nitro ベースかを判断するには、以下のように [describe-instance-types](#) AWS CLI コマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ aws ec2 describe-instance-types --instance-type instance_type --query "InstanceTypes[].Hypervisor"
```

nitro は、インスタンスが Nitro ベースであることを示します。xen または xen-on-nitro は、インスタンスが Xen ベースであることを示しています。

EBS ボリュームのファイルシステムを拡張するには

1. [インスタンスに接続します](#)。
2. 必要に応じて、パーティションのサイズを変更します。そのためには、次の操作を行います。
 - a. ボリュームにパーティションがあるかどうかを確認します。lsblkコマンドを実行します。

Nitro instance example

次の出力例では、ルートボリューム (nvme0n1) には 2 つのパーティション (nvme0n1p1 および nvme0n1p128) がありますが、追加のボリューム (nvme1n1) にはパーティションがありません。

```
[ec2-user ~]$ sudo lsblk
NAME                MAJ:MIN RM  SIZE RO TYPE MOUNTPOINT
nvme1n1              259:0    0   30G  0 disk /data
nvme0n1              259:1    0   16G  0 disk
##nvme0n1p1          259:2    0    8G  0 part /
##nvme0n1p128        259:3    0    1M  0 part
```

Xen instance example

次の出力例では、ルートボリューム (xvda) にはパーティション (xvda1) がありますが、追加のボリューム (xvdf) にはパーティションがありません。

```
[ec2-user ~]$ sudo lsblk
NAME      MAJ:MIN RM  SIZE RO  TYPE MOUNTPOINT
xvda      202:0    0  16G  0  disk
##xvda1   202:1    0   8G  0  part /
xvdf      202:80   0  24G  0  disk
```

ボリュームにパーティションがある場合は、次のステップ (2b) から手順を続けます。ボリュームにパーティションがない場合は、手順 2b、2c、2d をスキップして、手順 3 から続行します。

トラブルシューティングのヒント

コマンド出力でボリュームが表示されない場合は、ボリュームが [インスタンスにアタッチ](#) され、[フォーマットおよびマウントされている](#)ことを確認します。

- b. パーティションを拡張する必要があるかどうかを確認します。前のステップの lsblk コマンド出力で、パーティションサイズとボリュームサイズを比較します。

パーティションサイズがボリュームサイズよりも小さい場合は、次のステップに進みます。パーティションサイズがボリュームサイズと同じ場合、パーティションを拡張することはできません。

トラブルシューティングのヒント

ボリュームがまだ元のサイズを反映している場合は、[ボリュームの変更が成功したことを確認](#)します。

- c. パーティションを拡張します。growpart コマンドを使用して、拡張するパーティションを指定します。

Nitro instance example

例えば、nvme0n1p1 という名前のパーティションを拡張するには、次のコマンドを使用します。

⚠ Important

デバイス名 (nvme0n1) とパーティション番号 (1) の間のスペースに注意してください。

```
[ec2-user ~]$ sudo growpart /dev/nvme0n1 1
```

Xen instance example

例えば、xvda1 という名前のパーティションを拡張するには、次のコマンドを使用します。

⚠ Important

デバイス名 (xvda) とパーティション番号 (1) の間のスペースに注意してください。

```
[ec2-user ~]$ sudo growpart /dev/xvda 1
```

i **トラブルシューティングのヒント**

- `mkdir: cannot create directory '/tmp/growpart.31171': No space left on device FAILED: failed to make temp dir:` サイズ変更の実行に必要な一時ディレクトリを `growpart` が作成するのに十分な空きディスク容量がボリュームにないことを示します。ディスク容量を少し解放してから、もう一度お試しください。
- `must supply partition-number:` 正しくないパーティションが指定されたことを示します。lsblk コマンドを使用してパーティション名を確認し、デバイス名とパーティション番号の間にスペースが入力されていることを確認します。
- `NOCHANGE: partition 1 is size 16773087. it cannot be grown:` パーティションが既にボリューム全体を拡張しており、拡張できないことを示します。[ボリュームの変更が成功したことを確認します。](#)

- d. パーティションが拡張されたことを確認します。lsblkコマンドを実行します。これで、パーティションのサイズはボリュームサイズと同じになります。

Nitro instance example

次の出力例は、両方のボリューム (nvme0n1) とパーティション (nvme0n1p1) が同じサイズ (16 GB) であることを示しています。

```
[ec2-user ~]$ sudo lsblk
NAME                MAJ:MIN RM  SIZE RO TYPE MOUNTPOINT
nvme1n1             259:0    0   30G  0 disk /data
nvme0n1             259:1    0   16G  0 disk
##nvme0n1p1        259:2    0   16G  0 part /
##nvme0n1p128     259:3    0    1M  0 part
```

Xen instance example

次の出力例は、両方のボリューム (xvda) とパーティション (xvda1) が同じサイズ (16 GB) であることを示しています。

```
[ec2-user ~]$ sudo lsblk
NAME      MAJ:MIN RM  SIZE RO TYPE MOUNTPOINT
xvda     202:0    0   16G  0 disk
##xvda1  202:1    0   16G  0 part /
xvdf     202:80   0   24G  0 disk
```

3. ファイルシステムを拡張します。

- a. 拡張する必要があるファイルシステムの名前、サイズ、タイプ、およびマウントポイントを取得します。df -hTコマンドを実行します。

Nitro instance example

次の出力例では、/dev/nvme0n1p1 ファイルシステムのサイズが 8 GB、タイプが xfs、マウントポイントが / であることを示しています。

```
[ec2-user ~]$ df -hT
Filesystem      Type  Size  Used Avail Use% Mounted on
/dev/nvme0n1p1  xfs   8.0G  1.6G  6.5G  20% /
/dev/nvme1n1    xfs   8.0G   33M  8.0G   1% /data
...
```

Xen instance example

次の出力例では、`/dev/xvda1` ファイルシステムのサイズが 8 GB、タイプが `ext4`、マウントポイントが `/` であることを示しています。

```
[ec2-user ~]$ df -hT
Filesystem      Type  Size  Used Avail Use% Mounted on
/dev/xvda1      ext4  8.0G  1.9G  6.2G  24%  /
/dev/xvdf1      xfs   24.0G  45M   8.0G  1%   /data
...
```

- b. ファイルシステムを拡張するコマンドは、ファイルシステムのタイプによって異なります。前のステップで書き留めたファイルシステムのタイプに基づいて、次の正しいコマンドを選択します。
- [XFS ファイルシステム] `xfsgrowfs` コマンドを使用して、前のステップで書き留めたファイルシステムのマウントポイントを指定します。

Nitro and Xen instance example

例えば、`/` にマウントされているファイルシステムを拡張するには、次のコマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ sudo xfs_growfs -d /
```

トラブルシューティングのヒント

- `xfsgrowfs: /data is not a mounted XFS filesystem`: 正しくないマウントポイントが指定されたか、ファイルシステムが XFS でないことを示します。マウントポイントとファイルシステムタイプを確認するには、`df -hT` コマンドを使用します。
 - `data size unchanged, skipping`: ファイルシステムが既にボリューム全体を拡張していることを示します。ボリュームにパーティションがない場合は、[ボリュームの変更が成功したことを確認します](#)。ボリュームにパーティションがある場合は、ステップ 2 で説明されているように、パーティションが拡張されていることを確認します。
- [Ext4 ファイルシステム] `resize2fs` コマンドを使用して、前のステップで書き留めたファイルシステムの名前を指定します。

Nitro instance example

例えば、マウントされた `/dev/nvme0n1p1` という名前のファイルシステムを拡張するには、次のコマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ sudo resize2fs /dev/nvme0n1p1
```

Xen instance example

例えば、マウントされた `/dev/xvda1` という名前のファイルシステムを拡張するには、次のコマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ sudo resize2fs /dev/xvda1
```

トラブルシューティングのヒント

- `resize2fs: Bad magic number in super-block while trying to open /dev/xvda1`: ファイルシステムが Ext4 ではないことを示します。ファイルのシステムタイプを確認するには、`df -hT` コマンドを使用します。
- `open: No such file or directory while opening /dev/xvdb1`: 正しくないパーティションが指定されたことを示します。パーティションを検証するには、`df -hT` コマンドを使用します。
- `The filesystem is already 3932160 blocks long. Nothing to do!`: ファイルシステムが既にボリューム全体を拡張していることを示します。ボリュームにパーティションがない場合は、[ボリュームの変更が成功したことを確認します](#)。ボリュームにパーティションがある場合は、ステップ 2 で説明されているように、パーティションが拡張されていることを確認します。

• [その他のファイルシステム] 手順については、ファイルシステムのドキュメントを参照してください。

- c. ファイルシステムが拡張されたことを確認します。 `df -hT` コマンドを使用して、ファイルシステムのサイズがボリュームサイズと等しいことを確認します。

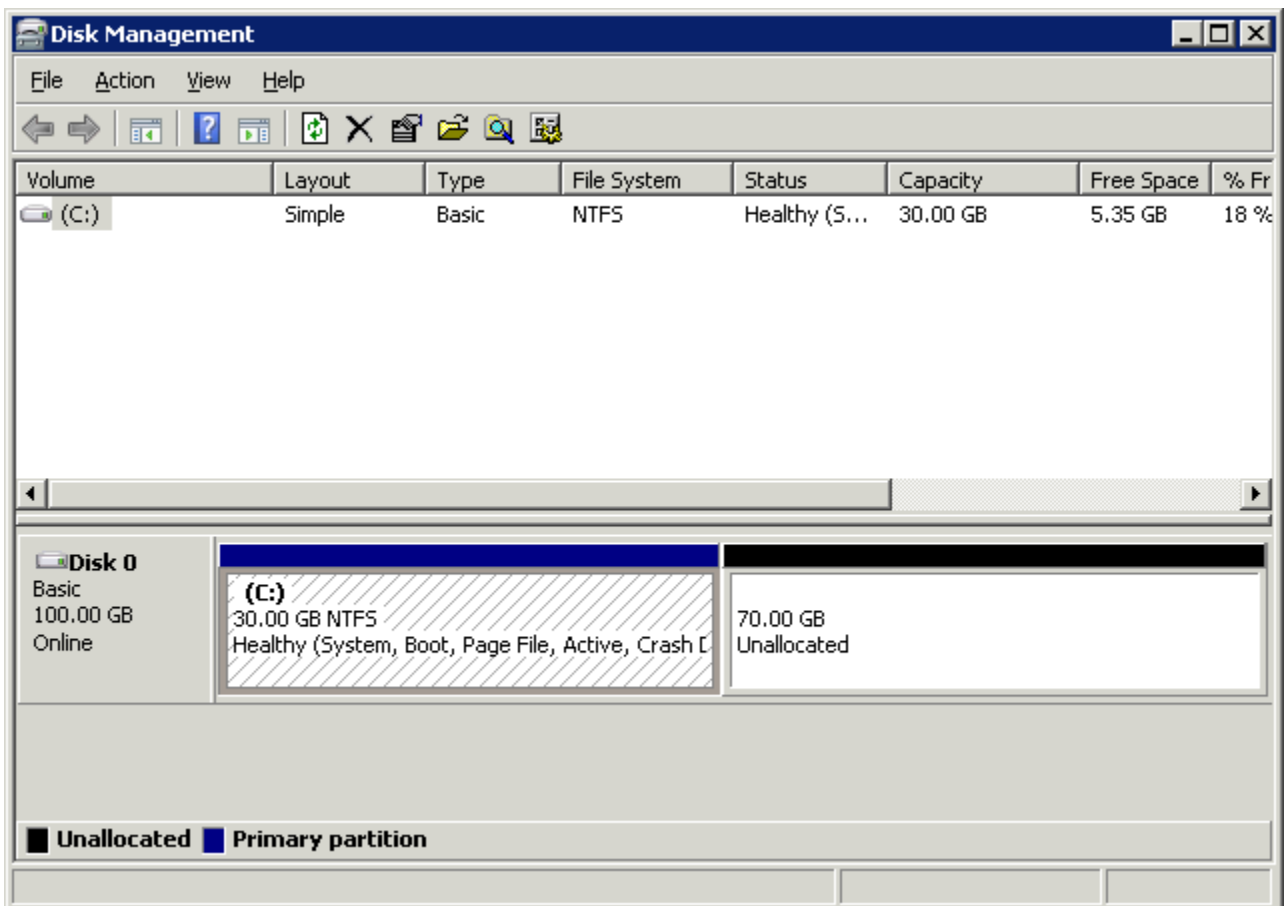
Windows インスタンス

次のいずれかの方法を使用して Windows インスタンスでファイルシステムを拡張します。

Disk Management utility

ディスクの管理を使用してファイルシステムを拡張するには

1. 重要なデータを含むファイルシステムを拡張する前に、変更をロールバックする必要がある場合に備えて、ファイルシステムを含むボリュームのスナップショットを作成するのがベストプラクティスです。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの作成](#)を参照してください。
2. リモートデスクトップを使用して Windows インスタンスにログインします。
3. [実行] ダイアログボックスに diskmgmt.msc と入力し、Enter キーを押します。ディスクの管理ユーティリティが表示されます。

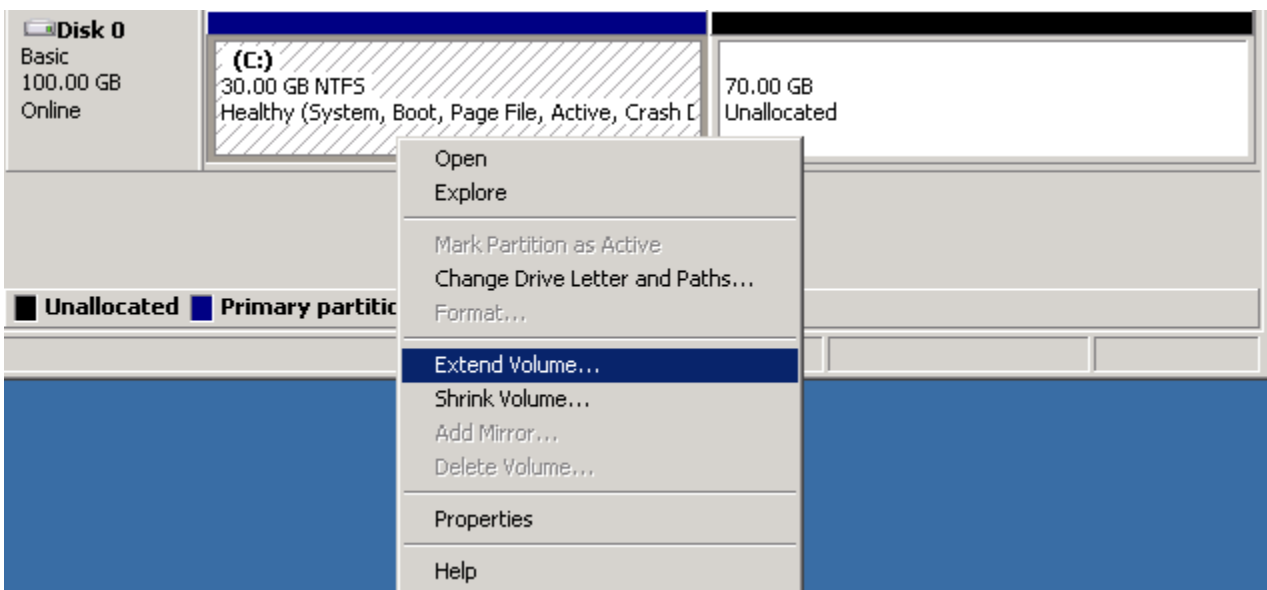


4. [ディスクの管理] メニューで、[操作]、[ディスクの再スキャン] の順に選択します。
5. 拡張したドライブのコンテキスト (右クリック) メニューを開き、[Extend Volume (ボリュームの拡張)] を選択します。

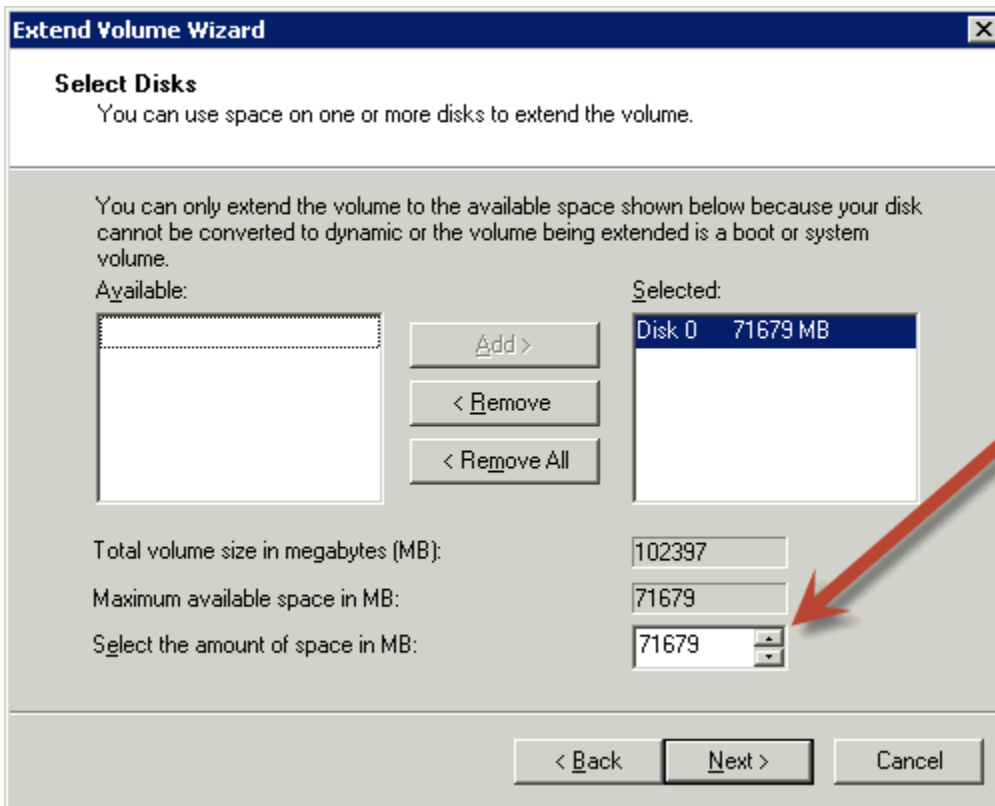
Note

次の場合には、[ボリュームを拡張]が無効化されている(グレー表示される)ことがあります。

- 未割り当ての領域が、ドライブに隣接していない。未割り当て領域は、拡張するドライブの右側に隣接している必要があります。
- ボリュームが、マスターブートレコード (MBR) パーティションスタイルを使用しており、そのサイズが既に 2 TB に達している。MBR を使用するボリュームのサイズは 2 TB を超えることはできません。



6. [Extend Volume (ボリュームの拡張)] ウィザードで、[Next (次へ)] を選択します。[Select the amount of space in MB] で、ボリュームを拡張するメガバイト数を入力します。通常は、使用可能な最大領域を指定します。[Selected] のハイライト表示されたテキストは、ボリュームの最終的なサイズではなく、追加分の容量を表します。ウィザードを終了します。



7. AWS NVMe ドライバーがないインスタンスで NVMe ボリュームのサイズを増やす場合、インスタンスを再起動して Windows を有効にし、新規のボリュームサイズを表示する必要があります。AWS NVMe ドライバーのインストールの詳細については、「[AWS Windows インスタンス用 NVMe ドライバー](#)」を参照してください。

PowerShell

PowerShell を使用して Windows ファイルシステムを拡張するには、以下の手順に従います。

PowerShell を使用してファイルシステムを拡張するには

1. 重要なデータを含むファイルシステムを拡張する前に、変更をロールバックする必要がある場合に備えて、ファイルシステムを含むボリュームのスナップショットを作成するのがベストプラクティスです。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの作成](#)を参照してください。
2. リモートデスクトップを使用して Windows インスタンスにログインします。
3. 管理者として PowerShell を実行します。

4. Get-Partition コマンドを実行します。PowerShell は、各パーティションに対応するパーティション番号、ドライブ文字、オフセット、サイズ、タイプを返します。拡張するパーティションのドライブ文字をメモします。
5. 以下のコマンドを実行して、ディスクを再スキャンします。

```
"rescan" | diskpart
```

6. **<drive-letter>** の代わりに手順 4 でメモしたドライブ文字を使用して、以下のコマンドを実行します。PowerShell から、許可されているパーティションの最小サイズと最大サイズがバイト単位で返されます。

```
Get-PartitionSupportedSize -DriveLetter <drive-letter>
```

7. 指定された規模にパーティションを拡張するには、**<size>** の代わりにボリュームの新しいサイズを入力しながら、次のコマンドを実行します。サイズは、KB、MB、GB で入力できます (50GB など)。

```
Resize-Partition -DriveLetter <drive-letter> -Size <size>
```

使用可能な最大サイズにパーティションを拡張するには、次のコマンドを実行します。

```
Resize-Partition -DriveLetter <drive-letter> -Size $(Get-PartitionSupportedSize  
-DriveLetter <drive-letter>).SizeMax
```

特定のサイズにファイルシステムを拡張するための、完全な PowerShell コマンドと、そのレスポンスフローを以下に示します。

```

PS C:\> Get-Partition

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&26a12046&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}

PartitionNumber  DriveLetter  Offset                Size  Type
-----
1                 C             1048576              30 GB  IFS

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&34763423&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}

PartitionNumber  DriveLetter  Offset                Size  Type
-----
1                 D             1048576               8 MB  IFS

PS C:\> "rescan" | diskpart

Microsoft DiskPart version 10.0.17763.1911

Copyright (C) Microsoft Corporation.
On computer:

DISKPART>
Please wait while DiskPart scans your configuration...

DiskPart has finished scanning your configuration.

DISKPART>
PS C:\> Get-PartitionSupportedSize -DriveLetter D

SizeMin      SizeMax
-----
8388608 107372085248

PS C:\> Resize-Partition -DriveLetter D -Size 50GB
PS C:\> Get-Partition

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&26a12046&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}

PartitionNumber  DriveLetter  Offset                Size  Type
-----
1                 C             1048576              30 GB  IFS

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&34763423&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}

PartitionNumber  DriveLetter  Offset                Size  Type
-----
1                 D             1048576              50 GB  IFS

```

使用可能な最大サイズにファイルシステムを拡張するための、完全な PowerShell コマンドと、そのレスポンスフローを以下に示します。

```

PS C:\> Get-Partition

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&26a12046&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}
PartitionNumber DriveLetter Offset Size Type
-----
1 C 1048576 30 GB IFS

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&34763423&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}
PartitionNumber DriveLetter Offset Size Type
-----
1 D 1048576 50 GB IFS

PS C:\> "rescan" | diskpart

Microsoft DiskPart version 10.0.17763.1911

Copyright (C) Microsoft Corporation.
On computer:

DISKPART>
Please wait while DiskPart scans your configuration...

DiskPart has finished scanning your configuration.

DISKPART>
PS C:\> Get-PartitionSupportedSize -DriveLetter D

SizeMin SizeMax
-----
59047936 107372085248

PS C:\> Resize-Partition -DriveLetter D -Size $(Get-PartitionSupportedSize -DriveLetter D).SizeMax
PS C:\> Get-Partition

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&26a12046&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}
PartitionNumber DriveLetter Offset Size Type
-----
1 C 1048576 30 GB IFS

DiskPath: \\?\scsi#disk&ven_nvme&prod_amazon_elastic_b#4&34763423&0&000000#{53f56307-b6bf-11d0-94f2-00a0c91efb8b}
PartitionNumber DriveLetter Offset Size Type
-----
1 D 1048576 100 GB IFS

```

インスタンスから Amazon EBS ボリュームをデタッチする

Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) ボリュームをインスタンスからデタッチしてから、別のインスタンスにアタッチまたは削除する必要があります。ボリュームをデタッチしても、ボリュームのデータには影響しません。

トピック

- [考慮事項](#)
- [ボリュームのアンマウントとデタッチ](#)

• [トラブルシューティング](#)

考慮事項

- インスタンスから Amazon EBS ボリュームをデタッチするには、明示的にデタッチするか、インスタンスを終了します。ただし、インスタンスが実行中の場合、最初にインスタンスからボリュームをアンマウントする必要があります。
- EBS ボリュームがインスタンスのルートデバイスである場合、ボリュームをデタッチする前に、インスタンスを停止する必要があります。
- (アンマウントせずに) 切り離れたボリュームを再接続することはできますが、同じマウントポイントが得られない可能性があります。進行中のボリュームがデタッチされたときにそのボリュームへの書き込みがあった場合、ボリューム上のデータは同期していない可能性があります。
- ボリュームをデタッチした後も、AWS ストレージ容量が無料利用枠の制限を超えている限り、ボリュームストレージの料金は請求されます。不要な料金の発生を防ぐために、ボリュームを削除する必要があります。詳細については、[Amazon EBS ボリュームの削除](#)を参照してください。

ボリュームのアンマウントとデタッチ

ボリュームをインスタンスからアンマウントおよびデタッチするには、次の手順を使用します。これは、ボリュームを別のインスタンスにアタッチする必要がある場合や、ボリュームを削除する必要がある場合に便利です。

ステップ

- [手順 1: ボリュームをアンマウントする](#)
- [手順 2: ボリュームをインスタンスからデタッチする](#)
- [ステップ 3: \(Windows インスタンスのみ\) オフラインデバイスのロケーションをアンインストールする](#)

手順 1: ボリュームをアンマウントする

Linux インスタンス

Linux インスタンスから、次のコマンドを使用して /dev/sdh デバイスのマウントを解除します。

```
[ec2-user ~]$ sudo umount -d /dev/sdh
```

Windows インスタンス

Windows インスタンスから、次のようにボリュームをマウント解除します。

1. [Disk Management] ユーティリティを起動します。
 - (Windows Server 2012 以降) タスクバーで、Windows ロゴを右クリックし、[Disk Management] を選択します。
 - (Windows Server 2008) [Start]、[Administrative Tools]、[Computer Management]、[Disk Management] の順に選択します。
2. ディスクを右クリック (例: [Disk 1] を右クリック) し、[オフライン] を選択します。ディスクのステータスが [オフライン] に変わるまで待ってから Amazon EC2 コンソールを開きます。

手順 2: ボリュームをインスタンスからデタッチする

インスタンスからボリュームをデタッチするには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

コンソールを使用して、EBS ボリュームをデタッチするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. ボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Detach Volume] (ボリュームのデタッチ) の順にクリックします。
4. 確認を求められたら、[デタッチ] を選択します。

AWS CLI

を使用してインスタンスから EBS ボリュームをデタッチするには AWS CLI

ボリュームをアンマウントしたら、[detach-volume](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用してインスタンスから EBS ボリュームをデタッチするには PowerShell

ボリュームをアンマウントしたら、コマンドを使用します。[Dismount-EC2Volume](#)

ステップ 3: (Windows インスタンスのみ) オフラインデバイスのロケーションをアンインストールする

ボリュームをインスタンスからアンマウントおよびデタッチすると、Windows はデバイスの場所にオフラインのフラグを立てます。インスタンスの再起動と停止および再起動後、デバイスの場所はオフラインのままになります。インスタンスを再起動すると、Windows はオフラインのデバイスの場所に残りのボリュームの 1 つをマウントする可能性があります。これにより、ボリュームが Windows で使用できなくなります。これが起こらないようにし、次に Windows を起動したときにすべてのボリュームがオンラインデバイスの場所に接続されるようにするには、次の手順に従います。

1. インスタンスで、デバイスマネージャーを開きます。
2. デバイスマネージャーで、[View]、[Show hidden devices] の順に選択します。
3. デバイスのリストで、[Storage controllers] ノードを展開します。

デタッチされたボリュームがマウントされたデバイスの場所に AWS NVMe Elastic Block Storage Adapter という名前が付けられ、グレー表示されます。

4. グレー表示されている AWS NVMe Elastic Block Storage Adapter という名前の各デバイスの場所を右クリックし、[Uninstall device] (デバイスをアンインストール) を選択し、[Uninstall] (アンインストール) を選択します。

Important

[Delete the driver software for this device] チェックボックスはオンにしないでください。

トラブルシューティング

ボリュームをデタッチする場合に発生する一般的な問題と、それらを解決する方法は、次のとおりです。

Note

データ損失の可能性に対する保護を許可するには、ボリュームのスナップショットを作成してからアンマウントを試みます。スタックしたボリュームの強制デタッチを行うと、インスタンスを再起動しない限り、ファイルシステムまたはファイルシステムに含まれるデータに

損害を与えたり、同じデバイス名を使用して新しいボリュームをアタッチできなくなったりする可能性があります。

- Amazon EC2 コンソールからボリュームを切り離しているときに問題が発生した場合は、`describe-volumes` CLI コマンドを使用して問題を診断すると便利ことがあります。詳細については、[describe-volumes](#)を参照してください。
- ボリュームの状態が `detaching` 状態のまま変わらない場合は、`[Force Detach]` を選択して、強制的にアタッチ解除することもできます。障害が発生したインスタンスからボリュームをアタッチ解除するための最後の手段として、またはボリュームを削除するためにデタッチする場合のみ、このオプションを使用してください。インスタンスは、ファイルシステムキャッシュやファイルシステムメタデータをフラッシュする機会を失います。このオプションを使用する場合は、ファイルシステムのチェックと修復の手順を手動で実行する必要があります。
- ボリュームを数分間何度も強制的に切断しようとしたが、`detaching` 状態のままになっている場合は、[AWS re:Post](#) へのヘルプのリクエストを送信できます。迅速に解決できるようにするため、ボリューム ID と、これまでに実行した手順を記述してください。
- まだマウントされたボリュームをデタッチしようとする、ボリュームはデタッチを実行しようとして `busy` 状態でスタックする可能性があります。`describe-volumes` からの次の出力は、この状態の例を示しています。

```
"Volumes": [
  {
    "AvailabilityZone": "us-west-2b",
    "Attachments": [
      {
        "AttachTime": "2016-07-21T23:44:52.000Z",
        "InstanceId": "i-fedc9876",
        "VolumeId": "vol-1234abcd",
        "State": "busy",
        "DeleteOnTermination": false,
        "Device": "/dev/sdf"
      }
      ...
    ]
  }
]
```

この状態が発生した場合、ボリュームのアンマウント、デタッチの強制、インスタンスの再起動、またはそれら 3 つをすべて行うまで、デタッチは無期限に遅れる可能性があります。

Amazon EBS ボリュームの削除

Amazon EBS ボリュームが不要になったら、それを削除することができます。削除後、ボリュームに含まれるデータは消去され、ボリューム自体はどのインスタンスにもアタッチできなくなります。削除前にボリュームのスナップショットを保存できるので、それを使用すれば後でボリュームを再作成できます。

Note

インスタンスにアタッチされているボリュームは削除できません。ボリュームを削除するには、まずボリュームをデタッチする必要があります。詳細については、[インスタンスから Amazon EBS ボリュームをデタッチする](#)を参照してください。

ボリュームがインスタンスにアタッチされているかどうかを確認できます。コンソールの [ボリューム] ページで、ボリュームの状態を表示できます。

- ボリュームがインスタンスにアタッチされている場合、そのボリュームは in-use 状態です。
- ボリュームがインスタンスからデタッチされている場合、そのボリュームは available 状態です。このボリュームは削除できます。

次のいずれかの方法を使用して、EBS ボリュームを削除できます。

Console

コンソールを使用して EBS ボリュームを削除するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. 削除するボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Delete Volume] (ボリュームの削除) の順にクリックします。

Note

[Delete Volume] (ボリュームの削除) がグレー表示されている場合、そのボリュームはインスタンスにアタッチされています。ボリュームを削除する前に、インスタンスからボリュームをデタッチする必要があります。

4. 確認ダイアログボックスで、[削除] を選択します。

AWS CLI

を使用して EBS ボリュームを削除するには AWS CLI

[delete-volume](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用して EBS ボリュームを削除するには PowerShell

[Remove-EC2Volume](#) コマンドを実行します。

以前のスナップショットを使用した Amazon EBS ボリュームの置き換え

Amazon EBS スナップショットは、速度、利便性、コストに優れるため、Amazon EC2 で推奨されるバックアップツールです。スナップショットからボリュームを作成すると、すべてのデータをそのままの状態、過去の特定時点の状態が再作成されます。スナップショットから作成されたボリュームをインスタンスにアタッチすることで、リージョン間でのデータの複製、テスト環境の作成、損傷または破損した本稼働ボリュームの完全な置換、特定のファイルとディレクトリの取得とアタッチされた別のボリュームへの転送を行うことができます。詳細については、「[Amazon EBS スナップショット](#)」を参照してください。

Amazon EBS ボリュームを、そのボリュームの以前のスナップショットから作成された別のボリュームに置き換えるには、次の手順のいずれかを使用できます。

Console

コンソールを使用してボリュームを置き換えるには

1. スナップショットからボリュームを作成し、新しいボリュームの ID を書き留めます。詳細については、「[スナップショットからのボリュームの作成](#)」を参照してください。

Note

必ずインスタンスと同じアベイラビリティゾーンに新しい EBS ボリュームを作成してください。ボリュームは、インスタンスと同じアベイラビリティゾーンに限りアタッチできます。

2. [インスタンス] ページで、ボリュームを置き換えるインスタンスを選択し、インスタンス ID を書き留めます。

インスタンスが選択された状態で、[Storage] (ストレージ) タブを選択します。[Block devices] (ブロックデバイス) セクションで、置き換えるボリュームを検索し、ボリュームのデバイス名を書き留めます (例: /dev/sda1)。

ボリューム ID を選択します。

3. [Volumes] (ボリューム) 画面で、ボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Detach volume] (ボリュームのデタッチ)、[Detach] (デタッチ) を順にクリックします。
4. ステップ 1 で作成した新しいボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Attach volume] (ボリュームのアタッチ) を選択します。

[Instance] (インスタンス) および [Device name] (デバイス名) に、ステップ 2 で書き留めたインスタンス ID とデバイス名を入力し、[Attach volume] (ボリュームのアタッチ) を選択します。

5. インスタンスに接続し、ボリュームをマウントします。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」を参照してください。

AWS CLI

を使用してボリュームを置き換えるには AWS CLI

1. スナップショットから新しいボリュームを作成します。[create-volume](#) コマンドを使用します。--snapshot-id には、使用するスナップショットの ID を指定します。--availability-zone には、インスタンスと同じアベイラビリティゾーンを指定します。必要に応じて、残りのパラメータを設定します。

Note

必ずインスタンスと同じアベイラビリティゾーンに新しい EBS ボリュームを作成してください。ボリュームは、インスタンスと同じアベイラビリティゾーンに限りアタッチできます。

```
$ aws ec2 create-volume \  
--volume-type volume_type \  
--size volume_size \  
--snapshot-id snapshot_id \  
--availability-zone az_id
```

コマンド出力で、新しいボリュームの ID を書き留めてください。

2. 置き換えるボリュームのデバイス名を取得します。[describe-instances](#) コマンドを使用します。--instance-ids には、ボリュームを置き換えるインスタンスの ID を指定します。

```
$ aws ec2 describe-instances --instance-ids instance_id
```

コマンド出力の BlockDeviceMappings で、置き換えるボリュームの DeviceName と VolumeId をメモします。

3. 交換するボリュームをインスタンスからデタッチします。[detach-volume](#) コマンドを使用します。--volume-id には、デタッチするボリュームの ID を指定します。

```
$ aws ec2 detach-volume --volume-id volume_id
```

4. 置換ボリュームをインスタンスにアタッチします。[attach-volume](#) コマンドを使用します。--volume-id には、置き換えるボリュームの ID を指定します。--instance-id には、ボリュームをアタッチするインスタンスの ID を指定します。--device には、先ほどメモしたものと同一デバイス名を指定します。

```
$ aws ec2 attach-volume \  
--volume-id volume_id \  
--instance-id instance_id \  
--device device_name
```

5. インスタンスに接続し、ボリュームをマウントします。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」を参照してください。

Amazon EBS ボリュームのモニタリング

AWS は、Amazon EBS ボリュームのモニタリングに使用できるデータを自動的に提供します。

コンテンツ

- [EBS ボリュームステータスチェック](#)
- [EBS ボリュームイベント](#)
- [障害のあるボリュームの操作](#)
- [AutoEnable IO ボリューム属性の操作](#)

モニタリングの詳細については、[Amazon EBS の Amazon CloudWatch メトリックスと Amazon EventBridge フォー Amazon EBS](#) を参照してください。

EBS ボリュームステータスチェック

ボリュームステータスチェックを利用すると、Amazon EBS ボリュームのデータの潜在的な不整合を容易に理解、追跡、および管理できます。これらのチェックは、Amazon EBS ボリュームに障害が発生しているかどうかを判断するために必要な情報を提供し、潜在的に不整合なボリュームの処理方法を制御できるように設計されています。

ボリュームステータスチェックは 5 分ごとに自動的に試行され、成功または失敗のステータスを返します。すべてのチェックが成功した場合、ボリュームのステータスは ok です。チェックが失敗した場合、ボリュームのステータスは impaired です。ステータスが insufficient-data の場合、ボリュームのチェックがまだ実行中である可能性があります。ボリュームステータスチェックの結果を表示して、障害のあるボリュームを特定し、必要なアクションを行うことができます。

ボリュームのデータが潜在的に不整合であると Amazon EBS が判断した場合、デフォルトでは、アタッチされたすべての EC2 インスタンスからそのボリュームへの I/O が無効になります。これにより、データの破損を防ぐことができます。I/O が無効になると、次のボリュームステータスチェックが失敗し、ボリュームステータスは impaired になります。さらに、I/O が無効になったこと、およびボリュームへの I/O を有効にすることによってボリュームの障害ステータスを解決できることを伝えるイベントが表示されます。ユーザーが I/O を有効にするまでシステムは待機するため、インスタンスがボリュームの使用を継続するかどうかを決定するか、それを実行する前に fsck (Linux インス

タンス) または `chkdsk` (Windows インスタンス) などコマンドを使用して整合性チェックを実行する判断をできる機会を与えます。

Note

ボリュームステータスはボリュームステータスチェックに基づいており、ボリューム状態を反映していません。従って、ボリュームステータスではボリュームが `error` 状態 (例えば、I/O を受け付けできない) であることは判りません。ボリュームの状態についての詳細は、[ボリューム状態](#)を参照してください。

あるボリュームの整合性について心配しているわけではなく、そのボリュームに障害が発生した際にそのボリュームをすぐに利用できるようにしたい場合は、デフォルトの動作を上書きして、I/O を自動的に有効にするようにボリュームを設定することができます。Auto-Enable IO 属性 (API の `autoEnableIO`) を有効にしている場合は、ボリューム状態のチェックは引き続きパスされます。また、ボリュームに潜在的な障害があると判断されたが、そのボリュームの I/O が自動的に有効になったことを伝えるイベントも表示されます。これにより、ボリュームの整合性を確認したり、後でボリュームを交換したりすることが可能になります。

I/O パフォーマンスステータスチェックは、実際のボリュームパフォーマンスと予想されるボリュームパフォーマンスを比較します。ボリュームパフォーマンスが想定未満である場合は、警告が表示されます。このステータスチェックは、インスタンスにアタッチされている、プロビジョンド IOPS SSD (`io1` および `io2`) ボリュームと、汎用 SSD (`gp3`) ボリュームに対してのみ使用できます。ステータスチェックは、汎用 SSD (`gp2`)、スループット最適化 HDD (`st1`)、Cold HDD (`sc1`)、または磁気 (`standard`) ボリュームでは使用できません。I/O パフォーマンスステータスチェックは 1 分ごとに 1 回実行され、CloudWatch は 5 分ごとにこのデータを収集します。`io1` または `io2` ボリュームをインスタンスにアタッチしてから、ステータスチェックが I/O パフォーマンスステータスを報告するまでに、最長で 5 分かかる場合があります。

Important

スナップショットから復元された Provisioned IOPS SSD ボリュームを初期化している間は、ボリュームのパフォーマンスが想定レベルの 50% を下回る場合があります。このため、ボリュームの [I/O Performance (I/O パフォーマンス)] ステータスチェックでは `warning` 状態が表示されます。これは想定動作です。初期化中の Provisioned IOPS SSD ボリュームの `warning` 状態は無視してかまいません。詳細については、[Amazon EBS ボリュームの初期化](#)を参照してください。

次の表に、Amazon EBS ボリュームのステータスを示します。

ボリュームのステータス	I/O 有効ステータス	I/O パフォーマンスステータス (io1、io2、および gp3 ボリュームのみ)
ok	Enabled (I/O Enabled または I/O Auto-Enabled)	Normal (ボリュームパフォーマンスは想定どおり)
warning	Enabled (I/O Enabled または I/O Auto-Enabled)	Degraded (ボリュームのパフォーマンスが想定を下回っている) Severely Degraded (ボリュームのパフォーマンスが想定をかなり下回っている)
impaired	Enabled (I/O Enabled または I/O Auto-Enabled) Disabled (ボリュームがオフラインで復旧の保留中、またはユーザーによる I/O の有効化待ち)	Stalled (ボリュームのパフォーマンスは致命的な影響を受けている) Not Available (I/O が無効なため、I/O パフォーマンスの判定不能)
insufficient-data	Enabled (I/O Enabled または I/O Auto-Enabled) Insufficient Data	Insufficient Data

次の方法を使用して、ステータスチェックを表示および操作できます。

Console

ステータスチェックを表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。

[Volume Status] (ボリュームのステータス) 列に、各ボリュームの動作状況が表示されます。

3. 特定のボリュームのステータスの詳細を表示するには、グリッドからボリュームを選択して、[Status Checks] (ステータスチェック) タブを選択します。
4. ステータスチェックが失敗したボリュームがある場合 (ステータスが `impaired` と示されている場合) は、[障害のあるボリュームの操作](#) を参照してください。

ナビゲータで [Events (イベント)] を選択して、インスタンスとボリュームのすべてのイベントを表示することもできます。詳細については、[EBS ボリュームイベント](#) を参照してください。

AWS CLI

ボリュームステータス情報を表示するには

[describe-volume-status](#) コマンドを使用します。

これらのコマンドラインインターフェイスの詳細については、「[Amazon EC2 へのアクセス](#)」を参照してください。

Tools for Windows PowerShell

ボリュームステータス情報を表示するには

[Get-EC2VolumeStatus](#) コマンドを使用します。

これらのコマンドラインインターフェイスの詳細については、「[Amazon EC2 へのアクセス](#)」を参照してください。

EBS ボリュームイベント

ボリュームのデータが潜在的に不整合であると Amazon EBS によって判断された場合、デフォルトでは、アタッチされているすべての EC2 インスタンスからそのボリュームへの I/O が無効になります。これにより、ボリュームステータスチェックが失敗し、障害の原因を示すボリュームステータスイベントが作成されます。

データが潜在的に不整合であるボリュームで I/O を自動的に有効にするには、Auto-Enabled IO ボリューム属性 (API の `autoEnableIO`) の設定を変更します。この属性の変更の詳細については、[障害のあるボリュームの操作](#) を参照してください。

各イベントには、イベントが発生した時刻を示す開始時刻と、そのボリュームに対する I/O が無効になった時間を示す継続時間が含まれています。ボリュームに対する I/O が有効になると、イベントに終了時刻が追加されます。

ボリュームステータスイベントには、次の説明のいずれかが含まれています。

Awaiting Action: Enable IO

ボリュームデータに整合性がない可能性があります。ボリュームに対する I/O は、ユーザーが明示的に有効にするまで無効になります。I/O を明示的に有効にすると、イベントの説明が IO Enabled に変更されます。

IO Enabled

このボリュームに対する I/O 操作が明示的に有効にされました。

IO Auto-Enabled

イベントの発生後に、このボリュームで I/O 操作が自動的に有効になりました。データを引き続き使用する前に、データの整合性を確認することをお勧めします。

Normal

io1、io2、および gp3 ボリュームのみ。ボリュームのパフォーマンスは想定どおりです。

Degraded

io1、io2、および gp3 ボリュームのみ。ボリュームのパフォーマンスは想定を下回っています。

Severely Degraded

io1、io2、および gp3 ボリュームのみ。ボリュームのパフォーマンスは想定をはるかに下回っています。

Stalled

io1、io2、および gp3 ボリュームのみ。ボリュームのパフォーマンスは致命的な影響を受けています。

次の方法を使用して、ボリュームイベントを表示できます。

Console

ボリュームイベントを表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [Events] を選択します。イベントを含むすべてのインスタンスおよびボリュームがリストされています。
3. ボリュームでフィルタリングして、ボリュームステータスのみを表示できます。特定のタイプのステータスでフィルタリングすることもできます。
4. ボリュームを選択して、その特定のイベントを表示します。

AWS CLI

ボリュームイベントを表示するには

[describe-volume-status](#) コマンドを使用します。

これらのコマンドラインインターフェイスの詳細については、「[Amazon EC2 へのアクセス](#)」を参照してください。

Tools for Windows PowerShell

ボリュームイベントを表示するには

[Get-EC2VolumeStatus](#) コマンドを使用します。

これらのコマンドラインインターフェイスの詳細については、「[Amazon EC2 へのアクセス](#)」を参照してください。

I/O が無効になっているボリュームがある場合は、[障害のあるボリュームの操作](#)を参照してください。I/O パフォーマンスが通常の状態を下回っているボリュームがある場合、実行したアクションを原因とする一時的な状態である可能性があります (ピーク使用時にボリュームのスナップショットを作成した、必要な I/O 帯域幅をサポートできないインスタンスでボリュームを実行した、ボリュームのデータに初めてアクセスした、など)。

障害のあるボリュームの操作

ボリュームのデータが整合していない可能性があるためにボリュームに障害がある場合は、以下のオプションを使用します。

Options

- [オプション 1: インスタンスにアタッチされたボリュームで整合性チェックを実行する](#)
- [オプション 2: 別のインスタンスを使用してボリュームで整合性チェックを実行する](#)
- [オプション 3: 不要なボリュームを削除する](#)

オプション 1: インスタンスにアタッチされたボリュームで整合性チェックを実行する

もっとも単純なオプションは、ボリュームが Amazon EC2 にアタッチされているときに、I/O を有効にしてから、ボリュームでデータの整合性チェックを実行するオプションです。

アタッチされたボリュームで整合性チェックを実行するには

1. アプリケーションによるボリュームの使用を停止します。
2. ボリュームの I/O を有効にします。次のいずれかの方法を使用します。

Console

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [Events] を選択します。
3. I/O 操作を有効にするボリュームを選択します。
4. [Actions] (アクション)、[Enable I/O] (I/Oを有効化) を選択します。

AWS CLI

AWS CLI を使用してボリュームの I/O を有効にするには

[enable-volume-io](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Tools for Windows PowerShell を使用してボリュームの I/O を有効にするには

[Enable-EC2VolumeIO](#) コマンドを使用します。

3. ボリュームのデータを確認します。
 - a. fsck (Linux インスタンス) または chkdsk (Windows インスタンス) コマンドを実行します。
 - b. (オプション) 関連するエラーメッセージがないか、使用可能なアプリケーションログまたはシステムログを確認します。

- c. ボリユームの障害が 20 分を超えて続く場合は、AWS サポートセンターに連絡してください。[Troubleshoot (トラブルシューティング)] をクリックしてから、[Troubleshoot Status Checks (ステータスチェックのトラブルシューティング)] ダイアログボックスの [Contact Support (サポートに問い合わせる)] を選択してサポートケースを送信します。

オプション 2: 別のインスタンスを使用してボリユームで整合性チェックを実行する

実動環境外部のボリユームをチェックするには、次の手順に従います。

Important

この手順を実行すると、ボリユーム I/O を無効にしたときに停止された書き込み I/O が失われる場合があります。

分離されたボリユームで整合性チェックを実行するには

1. アプリケーションによるボリユームの使用を停止します。
2. ボリユームをインスタンスからデタッチします。詳細については、[インスタンスから Amazon EBS ボリユームをデタッチする](#)を参照してください。
3. ボリユームの I/O を有効にします。次のいずれかの方法を使用します。

Console

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [Events] を選択します。
3. 前の手順でデタッチしたボリユームを選択します。
4. [Actions] (アクション)、[Enable I/O] (I/Oを有効化) を選択します。

AWS CLI

AWS CLI を使用してボリユームの I/O を有効にするには

[enable-volume-io](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Tools for Windows PowerShell を使用してボリユームの I/O を有効にするには

[Enable-EC2VolumeIO](#) コマンドを使用します。

4. ボリュームを別のインスタンスにアタッチします。詳細については、「[インスタンスの起動](#)」および「[インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#)」を参照してください。
5. ボリュームのデータを確認します。
 - a. fsck (Linux インスタンス) または chkdsk (Windows インスタンス) コマンドを実行します。
 - b. (オプション) 関連するエラーメッセージがないか、使用可能なアプリケーションログまたはシステムログを確認します。
 - c. ボリュームの障害が 20 分を超えて続く場合は、AWS サポートセンターに連絡してください。[Troubleshoot (トラブルシューティング)] を選択し、トラブルシューティングのダイアログボックスで [Contact Support (サポートに問い合わせる)] を選択して、サポートケースを送信します。

オプション 3: 不要なボリュームを削除する

環境からボリュームを削除するには、単にそれを削除します。ボリュームの削除の詳細については、[Amazon EBS ボリュームの削除](#)を参照してください。

ボリュームのデータをバックアップするスナップショットを最近作成した場合、そのスナップショットから新しいボリュームを作成できます。詳細については、[スナップショットからのボリュームの作成](#)を参照してください。

AutoEnable IO ボリューム属性の操作

ボリュームのデータが潜在的に不整合であると Amazon EBS によって判断された場合、デフォルトでは、アタッチされているすべての EC2 インスタンスからそのボリュームへの I/O が無効になります。これにより、ボリュームステータスチェックが失敗し、障害の原因を示すボリュームステータスイベントが作成されます。あるボリュームの整合性について心配しているわけではなく、そのボリュームに障害が発生した際にそのボリュームをすぐに利用できるようにしたい場合は、デフォルトの動作を上書きして、I/O を自動的に有効にするようにボリュームを設定することができます。Auto-Enable IO 属性 (API の `autoEnableIO`) を有効にしている場合は、ボリュームとインスタンスとの間の I/O が自動的に有効になり、ボリュームのステータスチェックはパスされます。また、ボリュームが潜在的に不整合な状態であること、ただしそのボリュームの I/O が自動的に有効になったことを伝えるイベントも表示されます。このイベントが発生した場合は、ボリュームの整合性をチェックし、必要に応じて置き換えます。詳細については、[EBS ボリュームイベント](#)を参照してください。

次のいずれかの方法を使用して、ボリュームの [Auto-Enabled IO] (IO の自動有効化) 属性を表示および変更できます。

Amazon EC2 console

ボリュームの、IO の自動有効化 属性を表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. ボリュームを選択して、[Status Checks] (ステータスチェック) を選択します。

[Auto-Enabled I/O] (自動有効化された I/O) には、ボリュームの現在の設定 ([Enabled] (有効) または [Disabled] (無効)) が表示されます。

ボリュームの、IO の自動有効化属性を変更するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. ボリュームを選択し、[Actions] (アクション)、[Manage auto-enabled I/O] (自動有効化 I/O の管理) を選択します。
4. 障害のあるボリュームの I/O を自動的に有効にするには、[Auto-Enable Volume I/O for impaired volumes] (障害のあるボリューム I/O の自動有効化) チェックボックスをオンにします。この機能を無効にするには、チェックボックスをクリアします。
5. [Update] (更新) を選択します。

AWS CLI

ボリュームの autoEnableIO 属性を表示するには

[describe-volume-attribute](#) コマンドを使用します。

ボリュームの autoEnableIO 属性を変更するには

[modify-volume-attribute](#) コマンドを使用します。

これらのコマンドラインインターフェイスの詳細については、「[Amazon EC2 へのアクセス](#)」を参照してください。

Tools for Windows PowerShell

ボリュームの `autoEnableIO` 属性を表示するには

[Get-EC2VolumeAttribute](#) コマンドを使用します。

ボリュームの `autoEnableIO` 属性を変更するには

[Edit-EC2VolumeAttribute](#) コマンドを使用します。

これらのコマンドラインインターフェイスの詳細については、「[Amazon EC2 へのアクセス](#)」を参照してください。

Amazon EBS での障害テスト

Pause I/O アクションを使用して、Amazon EBS AWS Fault Injection Service ボリュームとそれがアタッチされているインスタンスとの間の I/O を一時的に停止し、ワークロードが I/O の中断をどのように処理するかをテストします。を使用すると AWS FIS、Amazon CloudWatch アラームや OS のタイムアウト設定など、制御された実験を使用してアーキテクチャとモニタリングをテストし、ストレージ障害に対する耐障害性を向上させることができます。

[の詳細については AWS FIS、『ユーザーガイド』を参照してください。AWS Fault Injection Service](#)

考慮事項

ボリュームの I/O を一時停止する場合は、以下の考慮事項に留意してください。

- [Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)にアタッチされているすべての Amazon EBS ボリュームタイプの I/O を一時停止できます。
- ルートボリュームの I/O を一時停止できます。
- マルチアタッチの有効なボリュームの I/O を一時停止できます。マルチ接続が有効なボリュームの I/O を一時停止すると、そのボリュームと、そのボリュームがアタッチされているすべてのインスタンスとの間の I/O が一時停止されます。
- OS タイムアウト設定をテストするには、実験時間を `nvme_core.io_timeout` に指定された値以上に設定します。詳細については、「[I/O オペレーションタイムアウト](#)」を参照してください。
- I/O が一時停止しているボリュームに I/O を実行すると、次のことが起こります。
 - ボリュームのステータスが 120 秒以内で `impaired` に遷移します。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームのモニタリング](#)」を参照してください。

- キュー長 (VolumeQueueLength) CloudWatch のメトリックは 0 以外になります。アラームやモニタリングでは、キューの深さがゼロでないかどうかを監視する必要があります。詳細については、[Amazon EBS ボリュームのメトリクス](#)を参照してください。
- CloudWatch VolumeReadOpsVolumeWriteOpsまたはのメトリックはになります。これは0、ボリュームがもう I/O を処理していないことを示します。

制限事項

ボリュームの I/O を一時停止する場合は、以下の制限事項に留意してください。

- インスタンスストアボリュームはサポートされていません。
- Xen ベースのインスタンスタイプはサポートされていません。
- アウトポストで作成されたボリュームの I/O は、AWS Wavelength ゾーン AWS Outposts、またはローカルゾーン内では一時停止できません。

Amazon EC2 コンソールから基本的な実験を実行することも、コンソールを使用してより高度な実験を実行することもできます。AWS FIS コンソールを使用して高度な実験を行う方法の詳細については、『AWS Fault Injection Service ユーザーガイド』の[AWS FIS 「チュートリアル」](#)を参照してください。

Amazon EC2 コンソールを使用して基本的な実験を行うには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
3. I/O を一時停止するボリュームを選択し、[アクション]、[障害注入]、[ボリューム I/O の一時停止] の順に選択します。
4. [所要時間] には、ボリュームとインスタンス間の I/O を一時停止する期間を入力します。[所要時間] ドロップダウンリストの横のフィールドには、ISO 8601 形式の期間が表示されます。
5. 「サービスアクセス」セクションで、実験を行う際に想定する [IAM サービスロールを選択します](#)。AWS FIS デフォルトのロールか、作成した既存のロールを使用できます。詳細については、「[AWS FIS 実験の IAM ロールを作成する](#)」を参照してください。
6. [ボリュームの I/O を一時停止] を選択します。プロンプトが表示されたら、確認フィールドに start と入力し、[実験を開始] を選択します。
7. 実験の進行状況と影響をモニタリングします。詳細については、「AWS FIS ユーザーガイド」の「[AWS FISをモニタリングする](#)」を参照してください。

Amazon EBS スナップショット

Amazon EBS ボリューム上のデータは、Amazon EBS point-in-time スナップショットと呼ばれるコピーを作成することでバックアップできます。スナップショットは増分バックアップです。つまり、最新のスナップショットを作成した時点からデバイス上で変更があったブロックのみが保存されます。これにより、スナップショットを作成するのに要する時間が最小限に抑えられ、データを複製しないことで、ストレージコストが節約されます。

Important

AWS EBS ボリュームに保存されているデータは自動的にバックアップされません。データの回復力とディザスタリカバリのために、EBS スナップショットを定期的に作成するか、[Amazon Data Lifecycle Manager](#) または [AWS Backup](#) を使用して自動スナップショット作成を設定したりするのは、ユーザーの責任になります。

EBS スナップショットは Amazon S3 の S3 バケット (直接アクセスできない) に保存されます。Amazon EC2 コンソールまたは Amazon EC2 API を使用して、スナップショットの作成と管理を行うことができます。Amazon S3 コンソールまたは Amazon S3 API を使用してスナップショットにアクセスすることはできません。

各スナップショットには、(スナップショットを作成した瞬間から) データを新しい EBS ボリュームに復元するために必要な情報がすべて含まれます。スナップショットに基づいて EBS ボリュームを作成すると、新しいボリュームは、スナップショットの作成に使用されたボリュームの完全なレプリカとして開始されます。すぐに使用を開始できるよう、レプリケートされたボリュームはバックグラウンドでデータを読み込みます。まだ読み込まれていないデータにアクセスした場合、ボリュームは要求されたデータを Amazon S3 から即座にダウンロードし、引き続きボリュームの残りのデータをバックグラウンドで読み込みます。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの作成](#) を参照してください。スナップショットを削除すると、そのスナップショットに固有のデータだけが削除されます。詳細については、「[Amazon EBS スナップショットの削除](#)」を参照してください。

詳細については、[Amazon EBS スナップショット](#) の製品ページを参照してください。

スナップショットイベント

EBS スナップショットのステータスはイベントを通じて追跡できます。CloudWatch 詳細については、「[EBS スナップショットイベント](#)」を参照してください。

アプリケーション整合性のあるスナップショット (Windows インスタンスのみ)

Systems Manager Run Command を使用すると、Amazon EC2 Windows インスタンスにアタッチされたすべての EBS ボリュームのアプリケーションコンシステントスナップショットを取得できます。このスナップショットプロセスは、Windows [Volume Shadow Copy Service \(VSS\)](#) を使用して、アプリケーションとディスク間で保留中のトランザクションからのデータを含む VSS 対応アプリケーションのイメージレベルバックアップを取得します。すべてのアタッチされたボリュームのバックアップを実行する際に、インスタンスのシャットダウンあるいは切断を必要としません。詳細については、[VSS アプリケーションコンシステントなスナップショットの作成](#)を参照してください。

マルチボリュームスナップショット

スナップショットを使用すると、大規模データベースや複数の EBS ボリュームにわたるファイルシステムなど、重要なワークロードのバックアップを作成できます。マルチボリュームスナップショットを使用すると、EC2 インスタンスにアタッチされた複数の EBS ボリュームにわたって point-in-time、正確でデータ調整されたクラッシュコンシステントなスナップショットを作成できます。スナップショットは複数の EBS ボリュームにわたって自動的に作成されるため、クラッシュの一貫性を確保するためにインスタンスを停止したり、ボリューム間で調整したりする必要がなくなります。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの作成](#)のマルチボリューム EBS スナップショットを作成する手順を参照してください。

スナップショットの料金

スナップショットの料金は、保存されているデータの量に基づきます。スナップショットは増分であるため、スナップショットを削除すると、データストレージのコストが削減されない場合があります。スナップショットによって排他的に参照されるデータは、そのスナップショットが削除されると削除されますが、他のスナップショットによって参照されるデータは保持されます。詳細については、[AWS Billing ユーザーガイド](#)の Amazon Elastic Block Store のボリュームおよびスナップショットを参照してください。

コンテンツ

- [スナップショットの仕組み](#)
- [スナップショットのコピーおよび共有](#)
- [スナップショットの暗号化サポート](#)
- [Amazon EBS スナップショットのライフサイクル](#)
- [Amazon EBS 高速スナップショット復元](#)
- [Amazon EBS スナップショットのロック](#)
- [スナップショットのパブリックアクセスのブロック](#)

- [スナップショットのごみ箱](#)
- [Amazon EBS local snapshots on Outposts](#)

スナップショットの仕組み

ボリュームから作成する最初のスナップショットは、常にフルスナップショットです。これには、スナップショットの作成時にボリュームに書き込まれたすべてのデータブロックが含まれます。同じボリュームの後続スナップショットは、増分スナップショットです。それらには、最後のスナップショットが作成されてからボリュームに書き込まれた、変更されたデータブロックと新規のデータブロックのみが含まれます。

フルスナップショットのサイズは、ソースボリュームのサイズではなく、バックアップするデータのサイズによって決まります。同様に、フルスナップショットに関連するストレージコストは、ソースボリュームのサイズではなく、スナップショットのサイズによって決まります。例えば、50 GiB データのみを含む 200 GiB Amazon EBS ボリュームの最初のスナップショットを作成します。これにより、フルスナップショットのサイズは 50 GiB となり、50 GiB スナップショットストレージの料金が請求されます。

同様に、増分スナップショットのサイズとストレージコストは、前回のスナップショットが作成された後にボリュームに書き込まれたデータのサイズによって決まります。この例を続けて、20 GiB データを変更して 10 GiB データを追加した後に 200 GiB ボリュームの 2 つ目のスナップショットを作成すると、増分スナップショットのサイズは 30 GiB になります。その後、その追加の 30 GiB スナップショットストレージの料金が請求されます。

スナップショットの料金の詳細については、「[Amazon EBS 料金表](#)」を参照してください。

Important

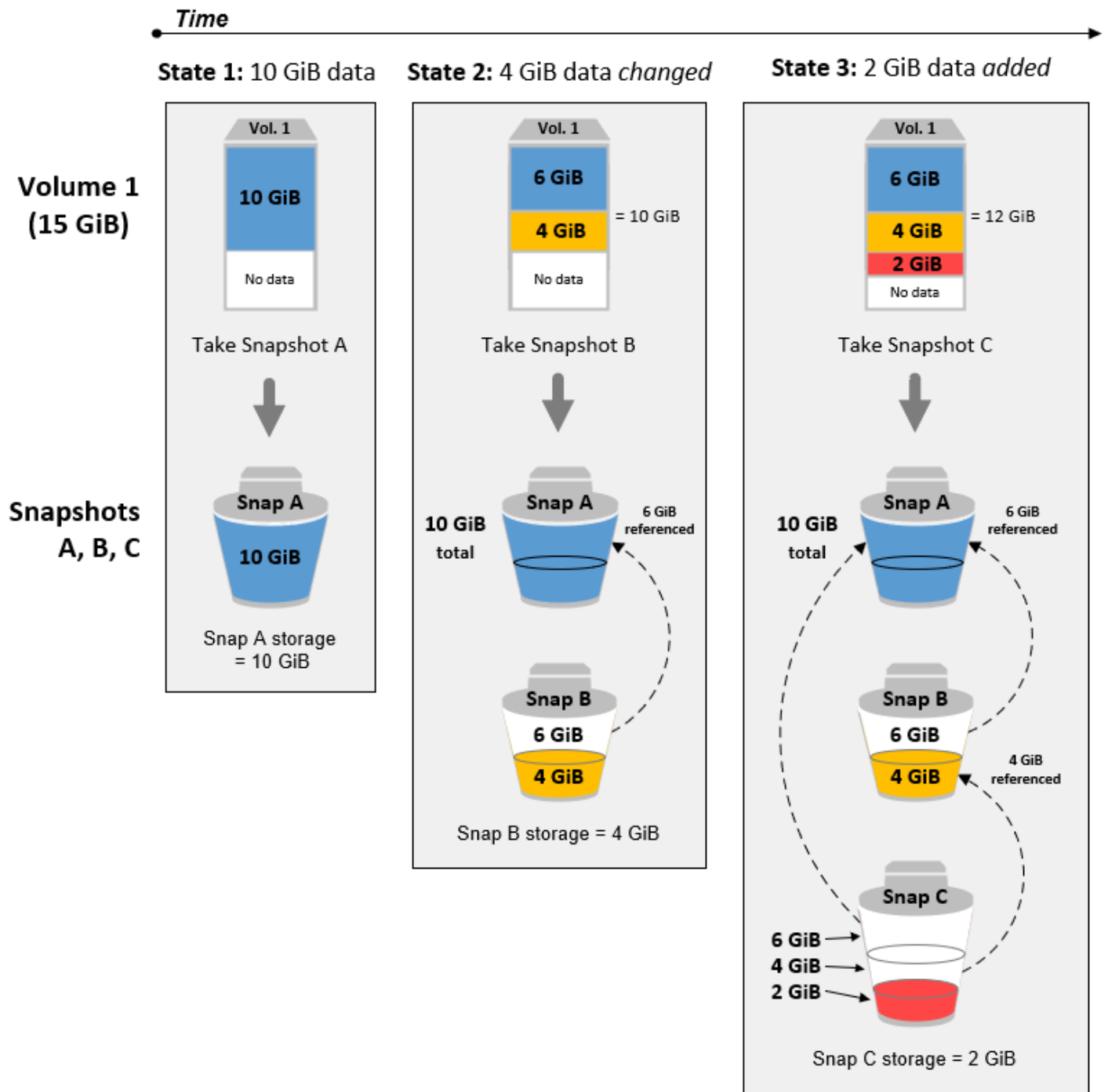
増分スナップショットをアーカイブすると、スナップショットの作成時にボリュームに書き込まれたすべてのブロックを含むフルスナップショットに変換されます。その後、Amazon EBS Snapshots Archive 階層に移動されます。アーカイブ階層のスナップショットは、標準階層のスナップショットとは異なるレートで請求されます。詳細については、「[料金と請求](#)」を参照してください。

次のセクションでは、EBS スナップショットがある時点でのボリュームの状態をキャプチャする方法、および変化するボリュームの後続のスナップショットが変更の履歴を作成する方法を説明します。

同じボリュームの複数のスナップショット

このセクションの図は、15 GiB サイズのボリューム 1 で 3 つの時点を示しています。これら 3 つのボリューム状態それぞれのスナップショットが作成されます。この図が特に示しているのは、次の点です。

- 状態 1 では、ボリュームに 10 GiB のデータがあります。スナップ A は、ボリュームの最初のスナップショットを取得したものです。スナップ A はフルスナップショットで、10 GiB データ全体がバックアップされます。
- 状態 2 では、ボリュームにはまだ 10 GiB のデータが含まれていますが、スナップ A の撮影後に変化したのは 4 GiB だけです。スナップ B は増分スナップショットです。変更された 4 GiB 部分だけをバックアップする必要があります。既にスナップ A にバックアップされている、変更がなかった残りの 6 GiB 分の未変更データは、再度バックアップされるのではなく、スナップ B で、参照されます。これは点線の矢印によって示されます。
- 状態 3 では、Snap B が撮影された後、2 GiB 分のデータがボリュームに追加され、合計 12 GiB となっています。スナップ C は増分スナップショットです。スナップ C は、スナップ B が作成されたあとに追加された 2 GiB 分のみコピーする必要があります。点線の矢印で示されているように、スナップ C はスナップ B に格納された 4 GiB 分のデータと、スナップ A に格納された 6 GiB 分のデータの両方を参照します。
- 3 つのスナップショットに必要な合計ストレージ量は 16 GiB です。これにより、スナップ A が 10 GiB、スナップ B が 4 GiB、スナップ C が 2 GiB になります。



異なるボリュームの増分スナップショット

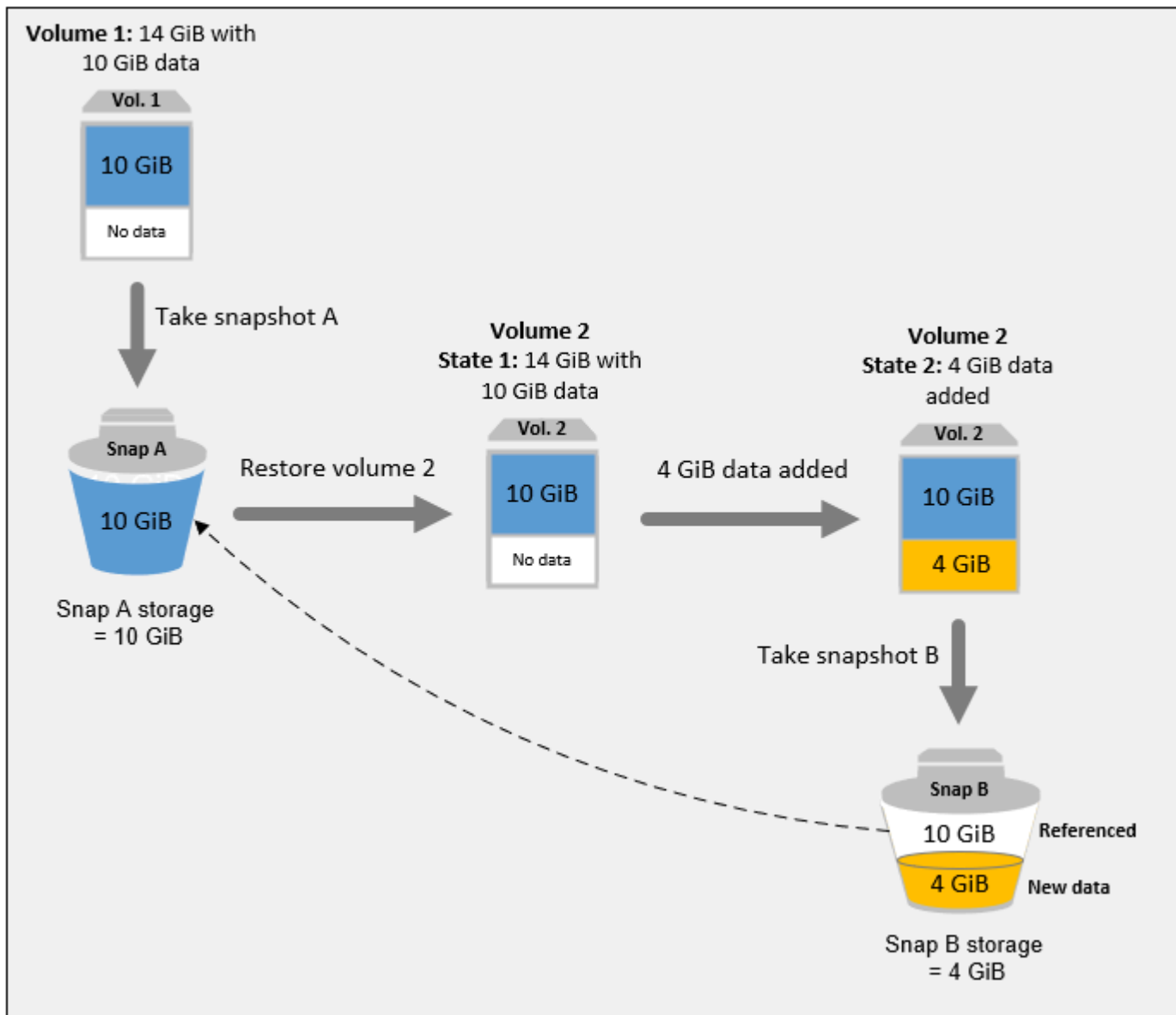
このセクションの図は、異なるボリュームから増分スナップショットを取得する方法を示しています。

1. 14 GiB 分のサイズのボリューム 1 は、10 GiB のデータがあります。スナップ A はボリュームで撮影された最初のスナップショットであるため、フルスナップショットであり、10 GiB のデータ全体がバックアップされます。
2. ボリューム 2 はスナップ A から作成されるので、スナップショットを取得した時点では ボリューム 1 の完全なレプリカとなります。
3. 時間が経つと、ボリューム 2 に 4 GiB のデータが追加され、合計サイズは 14 GiB になります。
4. ボリューム 2 は、スナップ B から取得されます。スナップ B では、スナップ A からボリュームが作成された後に追加された 4 GiB のデータのみがバックアップされます。もう一方の変更されていない 10 GiB のデータは、既にスナップ A に格納されており、再びバックアップされる代わりに、スナップ B から参照されます。

別のボリュームから作成されてはいますが、スナップ B はスナップ A の増分スナップショットです。

Important

この図では、Vol 1 とスナップ A を所有していて、Vol 2 が Vol 1 と同じ KMS キーで暗号化されていることを前提としています。Vol 1 AWS が別のアカウントによって所有されていて、そのアカウントが Snap A を取得して共有した場合、Snap B は完全なスナップショットになります。または、Vol 2 が Vol 1 とは異なる KMS キーで暗号化されている場合、スナップ B はフルスナップショットになります。



データが管理されている方法とスナップショットを削除するタイミングについては、[Amazon EBS スナップショットの削除](#)を参照してください。

スナップショットのコピーおよび共有

AWS スナップショットを複数のアカウントで共有するには、そのアカウントのアクセス権限を変更します。自分のスナップショットのコピーと、他のユーザーから共有されたスナップショットのコピーを作成できます。詳細については、「[Amazon EBS スナップショットの共有](#)」を参照してください。

スナップショットは、AWS そのスナップショットが作成されたリージョンに限定されます。EBS ボリュームのスナップショットを作成した後、そのスナップショットを使って、同じリージョンで新規ボリュームを作成できます。詳細については、[スナップショットからのボリュームの作成](#)を参照してください。スナップショットはリージョン間でコピーすることもできるため、地理的な拡大、データセンターの移行、災害対策など、複数のリージョンを使用することが可能になります。completed 状態であるアクセス可能なすべてのスナップショットをコピーできます。詳細については、[Amazon EBS スナップショットのコピー](#)を参照してください。

スナップショットの暗号化サポート

EBS スナップショットは、EBS 暗号化を完全にサポートします。

- 暗号化されたボリュームのスナップショットは自動的に暗号化されます。
- 暗号化されたスナップショットから作成されたボリュームは、自動的に暗号化されます。
- 自分が所有している、またはアクセスできる暗号化されていないスナップショットから作成したボリュームは暗号化できます。 on-the-fly
- 自分が所有している暗号化されていないスナップショットをコピーした場合、コピー処理中に暗号化できます。
- 自分が所有している、またはアクセス権がある暗号化されたスナップショットをコピーした場合、コピー処理中に異なるキーを使用して再暗号化できます。
- 暗号化されていないスナップショットから作成した暗号化されたボリュームの最初のスナップショットは常に完全なスナップショットです。
- ソーススナップショットと比べて CMK が異なる再暗号化されたボリュームの最初のスナップショットは常に完全なスナップショットです。

スナップショット暗号化の可能性のあるシナリオの完全なドキュメントは [Amazon EBS スナップショットの作成](#) と [Amazon EBS スナップショットのコピー](#) にあります。

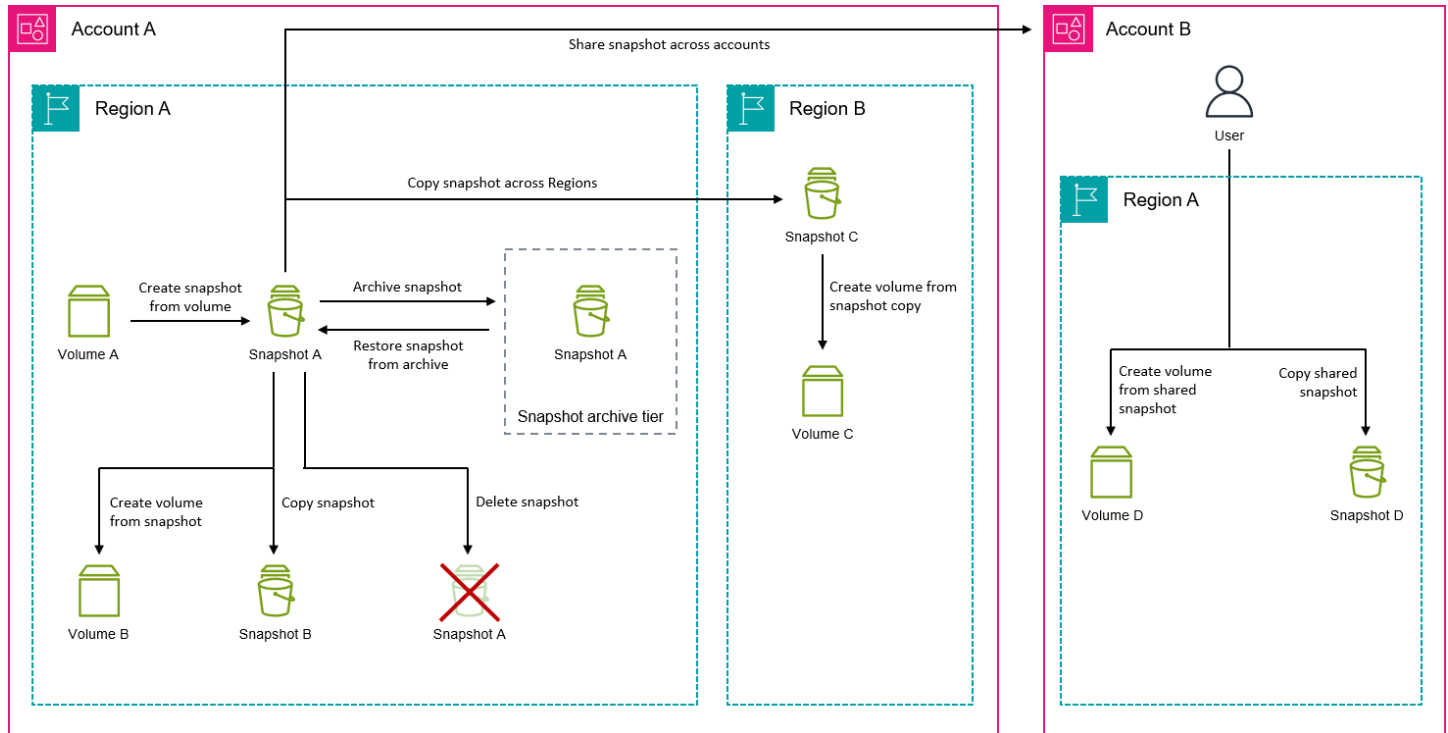
詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

Amazon EBS スナップショットのライフサイクル

Amazon EBS スナップショットのライフサイクルは、作成プロセスから始まります。Amazon EBS ボリュームからスナップショットを作成します。スナップショットを使用して新しい Amazon EBS ボリュームを復元できます。スナップショットのコピーは、同じリージョンまたは異なるリージョンで作成できます。スナップショットは、AWS アカウント公開または非公開で他のユーザーと共有で

きます。これらのアカウントは、共有スナップショットからボリュームを復元するか、独自のアカウントで共有スナップショットのコピーを作成することができます。スナップショットにすぐにアクセスする必要がない場合、スナップショットをアーカイブしてストレージコストを節約できます。

次の図は、スナップショットライフサイクルの一部としてスナップショットに実行できるアクションを示しています。



タスク

- [Amazon EBS スナップショットの作成](#)
- [Amazon EBS スナップショットに関する情報の表示](#)
- [Amazon EBS スナップショットのコピー](#)
- [Amazon EBS スナップショットの共有](#)
- [Amazon EBS スナップショットのアーカイブ](#)
- [Amazon EBS スナップショットの削除](#)
- [スナップショットライフサイクルの自動化](#)

Amazon EBS スナップショットの作成

Windows インスタンスでアプリケーション整合性のあるスナップショットを作成するには、「[Creating a VSS Application-Consistent Snapshot](#)」を参照してください。

EBS point-in-time ボリュームのスナップショットを作成して、新しいボリュームやデータバックアップのベースラインとして使用できます。ボリュームのスナップショットを定期的に作成する場合、スナップショットは増分です。新しいスナップショットは、最後のスナップショット以降に変更されたブロックのみを保存します。

スナップショットは非同期的に作成されます。point-in-time スナップショットはすぐに作成されますが、pendingスナップショットのステータスはスナップショットが完了するまで（変更されたブロックがすべてAmazon S3に転送されたとき）です。初期スナップショットが大きい場合や、多くのブロックが変更された後続のスナップショットの場合は、数時間かかることがあります。この処理の完了中に、進行中のスナップショットはボリュームに対する継続的な読み取りと書き込みの影響を受けません。

使用中のアタッチ済みボリュームのスナップショットを取ることができます。ただし、スナップショットでは、スナップショットコマンドを実行した時点でAmazon EBS ボリュームに書き込まれているデータのみがキャプチャされます。そのため、アプリケーションやオペレーティングシステムによってキャッシュされたデータは除外される可能性があります。スナップショットを取る間、ボリュームへのすべてのファイルの書き込みを停止できれば、完全なスナップショットを取ることができます。ただし、ボリュームへのすべてのファイルの書き込みを停止できない場合は、一貫した完全なスナップショットを取ることができるように、インスタンス内からボリュームをアンマウントし、スナップショットコマンドを実行して、ボリュームを再マウントします。スナップショットのステータスが pending の間は、ボリュームを再マウントして使用できます。

スナップショット管理を容易にするために、作成中にスナップショットにタグを付けたり、後でタグを追加したりすることができます。たとえば、スナップショットの作成元のボリュームを説明するタグを追加するか、元のボリュームをインスタンスにアタッチするために使用したデバイス名を説明するタグを追加することができます。

スナップショットの暗号化

暗号化されたボリュームから作成されたスナップショットは、自動的に暗号化されます。暗号化されたスナップショットから作成されたボリュームも、自動的に暗号化されます。暗号化されたボリュームのデータと関連付けられたスナップショットは、保管時も送信時も保護されます。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

デフォルトでは、自分が所有するスナップショットからのみボリュームを作成できます。ただし、AWS 暗号化されていないスナップショットは特定のアカウントと共有することも、公開することでコミュニティ全体で共有することもできます。AWS 詳細については、「[Amazon EBS スナップショットの共有](#)」を参照してください。

暗号化されたスナップショットは、AWS 特定のアカウントとのみ共有できます。他のユーザーが共有された暗号化スナップショットを使用できるようにするには、暗号化に使用された CMK キーも共有する必要があります。暗号化されたスナップショットへのアクセス権を持つユーザーは、そのスナップショットの独自のコピーを作成し、そのコピーを使用する必要があります。共有された暗号化スナップショットのコピーは、別のキーを使用して再暗号化することもできます。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの共有](#)を参照してください。

マルチボリュームスナップショット

point-in-time インスタンスにアタッチされた全ボリュームまたは一部のボリュームのスナップショットであるマルチボリュームスナップショットを作成できます。

デフォルトでは、インスタンスからマルチボリュームスナップショットを作成すると、Amazon EBS は、インスタンスにアタッチされているすべてのボリューム (ルートおよびデータ (非ルート)) のスナップショットを作成します。ただし、インスタンスにアタッチされているボリュームのサブセットのスナップショットを作成することもできます。

単一ボリュームのスナップショットと同じように、マルチボリュームスナップショットにタグを付けることができます。復元、コピー、または保存中にマルチボリュームスナップショットをまとめて管理するためにタグを付けることをお勧めします。ソースボリュームから対応するスナップショットにタグを自動的にコピーすることもできます。これにより、アクセスポリシー、添付情報、コスト割り当てなどのスナップショットメタデータをソースボリュームと一致するように設定できます。

スナップショットが作成されると、各スナップショットは個別のスナップショットとして扱われます。単一ボリュームのスナップショットと同じように、復元、削除、リージョン間またはアカウント間のコピーなど、すべてのスナップショットオペレーションを実行できます。

マルチボリュームの Crash-consistent スナップショットは通常、セットとして復元されます。インスタンスにインスタンス ID、名前、またはその他の関連する詳細をタグ付けして、Crash-consistent セット内にあるスナップショットを識別することは、役に立ちます。

スナップショットを作成すると、その時点で作成された EC2 コンソールにスナップショットが表示されます。point-in-time

マルチボリュームスナップショットセットの 1 つのスナップショットに障害が発生すると、他のすべてのスナップショットにエラーステータスが表示され、createSnapshots CloudWatch failedの結果を含むイベントがアカウントに送信されます。AWS 詳細については、「[スナップショットの作成 \(createSnapshots\)](#)」を参照してください。

Amazon Data Lifecycle Manager

スナップショットライフサイクルポリシーを作成して、個々のボリュームのスナップショットとインスタンスのマルチボリュームスナップショットの作成と保持を自動化できます。詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager](#)」を参照してください。

考慮事項

スナップショットの作成には、次の考慮事項が適用されます。

- ルートデバイスとして機能する EBS ボリュームのスナップショットを作成する場合は、スナップショットを取る前にインスタンスを停止することをお勧めします。
- 休止状態が有効にされているインスタンス、または休止状態のインスタンスからスナップショットを作成することはできません。休止状態になっている、または休止機能が有効になっているインスタンスからスナップショットまたは AMI を作成した場合、その AMI (あるいは、そのスナップショットから作成した AMI) から起動した新しいインスタンスに接続できないことがあります。
- ボリュームの前のスナップショットが pending 状態の間でもボリュームのスナップショットを作成できますが、1 つのボリュームで複数の pending スナップショットを作成すると、スナップショットが完了するまでボリュームのパフォーマンスが低下する場合があります。
- スナップショットの数は、1 つの pending または st1 ボリュームに対して 1 つの sc1 スナップショット、その他のボリュームタイプの 1 つのボリュームに対しては 5 つの pending スナップショットに制限されています。同一のボリュームで複数のスナップショットを同時に作成する際に ConcurrentSnapshotLimitExceeded エラーが発生した場合は、pending スナップショットが 1 つ以上完了するまで待ってから、そのボリュームの次のスナップショットを作成します。
- 製品コードを含むボリュームからスナップショットを作成すると、AWS Marketplace 製品コードがそのスナップショットに反映されます。
- インスタンスからマルチボリュームスナップショットセットを作成する際は、最大 127 個の (非ルートの) データボリュームを指定して除外できます。インスタンスにアタッチできる Amazon EBS ボリュームの最大数は、インスタンスのタイプとサイズによって異なります。詳細については、「[インスタンスボリューム数の制限](#)」を参照してください。

スナップショットを作成する

指定されたボリュームからスナップショットを作成するには、次のいずれかの手順に従います。

Console

コンソールを使用してスナップショットを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] (スナップショット)、[Create snapshot] (スナップショットの作成) の順にクリックします。
3. [リソースタイプ] で、[ボリューム] を選択します。
4. [Volume ID] (ボリューム ID) で、スナップショットを作成するボリュームを選択します。

[Encryption] (暗号化) フィールドは、選択したボリュームの暗号化ステータスを示します。選択したボリュームが暗号化されている場合、スナップショットは同じ KMS キーを使用して自動的に暗号化されます。選択したボリュームが暗号化されていない場合、スナップショットは暗号化されません。

5. (オプション) [説明] に、スナップショットの簡潔な説明を入力します。
6. (オプション) スナップショットにカスタムタグを割り当てるには、[Tags] (タグ) セクションで [Add tag] (タグの追加) を選択し、キーバリューのペアを入力します。最大 50 個のタグを追加できます。
7. [スナップショットを作成] を選択します。

AWS CLI

を使用してスナップショットを作成するには AWS CLI

[create-snapshot](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用してスナップショットを作成するには PowerShell

[New-EC2Snapshot](#) コマンドを実行します。

マルチボリュームスナップショットの作成

インスタンスからマルチボリュームスナップショットセットを作成する場合、ソースボリュームから対応するスナップショットにタグをコピーするかどうかを選択できます。ルートボリュームのスナップショットを作成するかどうかを指定できます。また、インスタンスにアタッチされているすべての

データ (非ルート) ボリュームのスナップショットを作成するかどうか、またはそれらのボリュームのサブセットのスナップショットを作成するかどうかを指定することもできます。

考慮事項

- マルチボリュームスナップショットでは、ルートボリュームと最大 127 個の (非ルートの) データボリュームを含め、各インスタンスで最大 128 個の Amazon EBS ボリュームをサポートしています。インスタンスにアタッチできる Amazon EBS ボリュームの最大数は、インスタンスのタイプとサイズによって異なります。詳細については、「[インスタンスボリューム数の制限](#)」を参照してください。

インスタンスのボリュームからスナップショットを作成するには、次のいずれかの手順に従います。

Console

コンソールを使用してマルチボリュームスナップショットを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] (スナップショット)、[Create snapshot] (スナップショットの作成) の順にクリックします。
3. [リソースタイプ] で、[Instance (インスタンス)] を選択します。
4. [Description] (説明) に、スナップショットの簡潔な説明を入力します。この説明は、すべてのスナップショットに適用されます。
5. (オプション) デフォルトでは、Amazon EBS は、インスタンスのルートボリュームのスナップショットを作成します。インスタンスのルートボリュームのスナップショットを作成しない場合は、[Exclude root volume] (ルートボリュームを除外) を選択します。
6. (オプション) デフォルトでは、Amazon EBS は、インスタンスにアタッチされたすべてのデータ (非ルート) ボリュームのスナップショットを作成します。インスタンスにアタッチされたデータ (非ルート) ボリュームのサブセットのスナップショットを作成する場合は、[Exclude specific data volumes] (特定のデータボリュームを除外) を選択します。[Attached data volumes] (アタッチされたデータボリューム) セクションには、選択したインスタンスに現在アタッチされているすべてのデータボリュームが一覧表示されます。

[Attached data volumes] (アタッチされたデータボリューム) セクションで、スナップショットを作成しないデータボリュームを選択します。マルチボリュームスナップショットセットには、未選択のままになっているボリュームのみが含まれます。最大 127 個のボリュームを除外できます。

7. (オプション) ソースボリュームから対応するスナップショットにタグを自動的にコピーするには、[Copy tags from volume] (ボリュームからタグをコピーする) で [Copy tags] (タグをコピー) を選択します。これにより、ソースボリュームに合わせてスナップショットメタデータ (アクセスポリシー、添付情報、コスト割り当てなど) が設定されます。
8. (オプション) スナップショットに追加のカスタムタグを割り当てるには、[Tags] (タグ) セクションで [Add tag] (タグの追加) を選択し、キーと値のペアを入力します。最大 50 個のタグを追加できます。
9. [スナップショットを作成] を選択します。

スナップショットの作成中、スナップショットはまとめて管理されます。ボリュームセット内のスナップショットの 1 つが失敗すると、他のスナップショットはそのボリュームセットのエラーステータスに移動します。[CloudWatch イベントを使用してスナップショットの進行状況を監視できます](#)。スナップショット作成プロセスが完了すると、CloudWatch 影響を受けるインスタンスのステータスと関連するすべてのスナップショットの詳細を含むイベントが生成されます。

AWS CLI

[を使用してマルチボリュームスナップショットを作成するには AWS CLI、create-snapshots コマンドを使用します。](#)

ルートボリュームのスナップショットを作成しない場合は、`--instance-specification ExcludeBootVolume` に `true` を指定します。インスタンスにアタッチされたすべてのデータ (非ルート) ボリュームのスナップショットを作成しない場合は、`--instance-specification ExcludeDataVolumes` に、スナップショットを作成しないデータボリュームの ID を指定します。除外する (非ルートの) データボリュームを最大 127 個指定できます。

Tools for Windows PowerShell;

Tools for Windows を使用してマルチボリュームスナップショットを作成するには、コマンドを使用します。PowerShell [New-EC2SnapshotBatch](#)

ルートボリュームのスナップショットを作成しない場合は、`- InstanceSpecification_ExcludeBootVolume` に 1 を指定します。インスタンスにアタッチされたすべてのデータ (非ルート) ボリュームのスナップショットを作成しない場合は、`- InstanceSpecification_ExcludeDataVolumes` に、スナップショットを作成しないデータボリュームの ID を指定します。除外する (非ルートの) データボリュームを最大 127 個指定できます。

スナップショットがすべて正常に完了すると、createSnapshots CloudWatch succeededの結果を含むイベントがアカウントに送信されます。AWS マルチボリュームスナップショットセットのスナップショットの1つでも障害が発生すると、他のすべてのスナップショットにエラーステータスが表示され、createSnapshots CloudWatch failedの結果を含むイベントがアカウントに送信されます。AWS 詳細については、「[スナップショットの作成 \(createSnapshots\)](#)」を参照してください。

EBS スナップショットの操作

スナップショットのコピー、スナップショットの共有、スナップショットからのボリュームの作成が可能です。詳細については、次を参照してください。

- [Amazon EBS スナップショットのコピー](#)
- [Amazon EBS スナップショットの共有](#)
- [スナップショットからのボリュームの作成](#)

Amazon EBS スナップショットに関する情報の表示

スナップショットに関する詳しい情報は、次のいずれかの方法で表示できます。

Console

コンソールを使用してスナップショットに関する詳細情報を表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
3. 所有しているスナップショットだけを表示するには、画面の左上隅で、[Owned by me] (自分が所有) を選択します。タグとスナップショット属性を使用してスナップショットをフィルターすることもできます。[Filter] (フィルター) フィールドで、属性フィールドを選択し、属性値を選択または入力します。たとえば、暗号化されたスナップショットだけを表示するには、[Encryption] (暗号化) を選択し、[true] を入力します。
4. 特定のスナップショットの詳細情報を表示するには、リストで ID を選択します。

AWS CLI

を使用してスナップショット情報を表示するには AWS CLI

[describe-snapshots](#) コマンドを使用します。

Example 例 1: タグに基づくフィルタリング

次のコマンドは、Stack=production タグでスナップショットの詳細を示します。

```
aws ec2 describe-snapshots --filters Name=tag:Stack,Values=production
```

Example 例 2: ボリュームに基づくフィルタリング

次のコマンドは、指定されたボリュームから作成されたスナップショットの詳細を示します。

```
aws ec2 describe-snapshots --filters Name=volume-id,Values=vol-049df61146c4d7901
```

Example 例3: スナップショットの経過日に基づくフィルタリング

では AWS CLI、JMESPath を使用して式を使用して結果をフィルタリングできます。例えば、次のコマンドは、指定された日付 (2020-03-31 で表記) より前に AWS アカウントによって作成されたすべてのスナップショット (123456789012 で表記) の ID を表示します。所有者を指定しない場合、結果にはすべてのパブリックスナップショットが含まれます。

```
aws ec2 describe-snapshots --filters Name=owner-id,Values=123456789012 --query "Snapshots[?(StartTime<='2020-03-31')].[SnapshotId]" --output text
```

次のコマンドは、指定した日付範囲で作成されたすべてのスナップショットの ID を表示します。

```
aws ec2 describe-snapshots --filters Name=owner-id,Values=123456789012 --query "Snapshots[?(StartTime>='2019-01-01') && (StartTime<='2019-12-31')].[SnapshotId]" --output text
```

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用してスナップショット情報を表示するには PowerShell

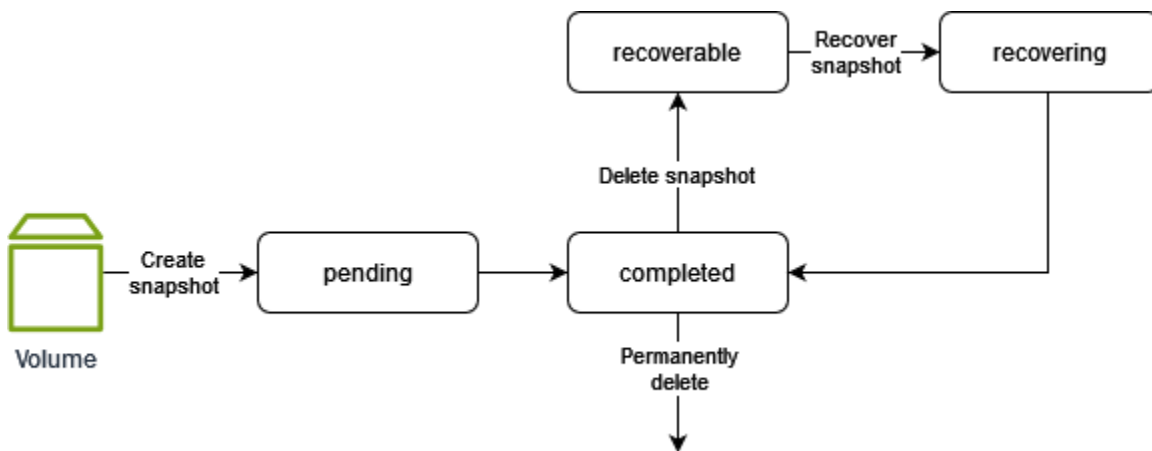
[Get-EC2Snapshot](#) コマンドを実行します。

```
PS C:\> Get-EC2Snapshot -SnapshotId snapshot_id
```

スナップショットの状態

Amazon EBS スナップショットは、作成されてから完全に削除されるまで、さまざまな状態に移行します。

次の図は、スナップショットの状態間の移行を示しています。スナップショットを作成すると、pending 状態になります。スナップショットが使用可能になると、completed 状態になります。スナップショットが不要になったら、削除できます。ごみ箱の保持ルールに一致するスナップショットを削除した場合、ごみ箱に保持されてから recoverable 状態になります。ごみ箱からスナップショットを復元した場合、recovering 状態になった後に completed 状態になります。それ以外の場合、スナップショットは完全に削除されます。



次の表はスナップショットの状態をまとめたものです。

ステータス	説明
pending	スナップショットの作成プロセスはまだ進行中です。スナップショットは、pending 状態にある間は使用できません。
completed	スナップショットの作成プロセスが完了し、スナップショットが使用可能になりました。
recoverable	スナップショットは現在、ごみ箱にあります。スナップショットを使用するには、まずごみ箱から復元する必要があります。

ステータス	説明
recovering	スナップショットはごみ箱から復元中です。スナップショットが復元されると、completed 状態に移行して使用可能になります。
error	スナップショットの作成プロセスが失敗しました。スナップショットが error 状態にある場合は使用できません。

Amazon EBS スナップショットのコピー

Amazon EBS を使用すると、point-in-time ボリュームのスナップショットを作成できます。このスナップショットは Amazon S3 に自動的に保存されます。スナップショットを作成し、Amazon S3 へのコピーが完了したら (スナップショットのステータスが completed)、AWS あるリージョンから別のリージョンに、または同じリージョン内にコピーできます。Amazon S3 のサーバー側の暗号化 (256 ビット AES) は、コピーオペレーション中に転送中のスナップショットのデータを保護します。スナップショットコピーは、元のスナップショットの ID とは異なる ID を受け取りません。

AWS マルチボリュームスナップショットを別のリージョンにコピーするには、作成時にマルチボリュームスナップショットセットに適用したタグを使用してスナップショットを取得します。次に、スナップショットを個別に別のリージョンにコピーします。

別のアカウントでスナップショットをコピーできるようにするには、そのアカウントへのアクセスを許可するようにスナップショットの権限を変更するか、AWS スナップショットを公開してすべてのアカウントがコピーできるようにする必要があります。詳細については、「[Amazon EBS スナップショットの共有](#)」を参照してください。

Amazon RDS スナップショットのコピーについては、『Amazon RDS ユーザーガイド』の[DB スナップショットのコピー](#)を参照してください。

ユースケース

- 地域拡大: AWS 新しいリージョンでアプリケーションを起動します。
- 移行: アプリケーションを新しいリージョンに移動して、可用性を向上させ、コストを最小化します。

- 災害対策: 異なる地理的場所にまたがって定期的にデータをバックアップし、ログを記録します。災害時には、point-in-time セカンダリリージョンに保存されているバックアップを使用してアプリケーションを復元できます。これにより、データ損失と復旧時間を最小限に抑えることができます。
- 暗号化: 以前に暗号化されたスナップショットを暗号化し、スナップショットの暗号化に使用されるキーを変更します。または (他のユーザーから共有された暗号化スナップショットの場合)、自分が所有するコピーを作成し、そのコピーからボリュームを作成できるようにします。
- データ保持および監査要件: 暗号化された EBS スナップショットを AWS アカウント間でコピーし、監査およびデータ保持のためにデータログや他のファイルを保持します。別のアカウントを使用すると、スナップショットが誤って削除されるのを防ぎ、AWS メインアカウントが不正アクセスされた場合にも保護されます。

コンテンツ

- [前提条件](#)
- [考慮事項](#)
- [料金](#)
- [増分スナップショットコピー](#)
- [暗号化とスナップショットのコピー](#)
- [スナップショットをコピーする](#)

前提条件

- 共有スナップショットや作成したスナップショットを含む「completed」ステータスのアクセス可能な任意のスナップショットをコピーできます。
- コピー AWS Marketplace、VM Import / エクスポート、および Storage Gateway のスナップショットは可能ですが、そのスナップショットがコピー先のリージョンでサポートされていることを確認する必要があります。
- 暗号されたスナップショットをコピーするには、ユーザーに Amazon EBS 暗号化を使用するための次のアクセス許可が必要です。
 - kms:DescribeKey
 - kms>CreateGrant
 - kms:GenerateDataKey
 - kms:GenerateDataKeyWithoutPlaintext

- kms:ReEncrypt
- kms:Decrypt
- AWS 別のアカウントから共有されている暗号化されたスナップショットをコピーするには、スナップショットの暗号化に使用されたカスタマー管理キーを使用する権限が必要です。詳細については、「[KMS キーの共有](#)」を参照してください。

考慮事項

- 宛先リージョンごとの 20 同時スナップショットコピーリクエストには制限があります。このクォータを超えると、ResourceLimitExceeded エラーが発生します。このエラーが発生した場合は、1 つ以上のコピー要求が完了するのを待ってから、新しいスナップショットコピー要求を作成してください。
- ユーザー定義タグは元のスナップショットから新しいスナップショットにコピーされません。コピー操作中または操作後に、ユーザー定義タグを追加することができます。
- スナップショットコピーオペレーションによって作成されたスナップショットには、vol-ffff や vol-ffffffff などの任意のボリューム ID が付されます。これらの任意のボリューム ID は、いかなる目的にも使用しないでください。
- スナップショットコピーオペレーションのために指定されたリソースレベルのアクセス権限は、新しいスナップショットにのみ適用されます。ソーススナップショットには、リソースレベルのアクセス権限は指定できません。例については、「[例: スナップショットのコピー](#)」を参照してください。

料金

- AWS リージョンやアカウント間でのスナップショットのコピーに関する料金情報については、「[Amazon EBS 料金表](#)」を参照してください。
- スナップショットをコピーして、新しい KMS キーで暗号化すると、完全な (増分ではない) コピーが作成されます。その結果、追加のストレージコストが発生します。
- スナップショットを新しいリージョンにコピーすると、完全な (増分ではない) コピーが作成されます。その結果、追加のストレージコストが発生します。同じスナップショットの後続のコピーは増分です。
- 同じアカウントで同じリージョンの同じカスタマーマネージド型キーを使用するスナップショットからの最初のスナップショットコピーは、完全な (増分ではない) コピーになります。その結果、追加のストレージコストが発生します。同じスナップショットの後続のコピーは増分です。

- 外部またはリージョン間のデータ転送を使用する場合は、[EC2 データ転送](#)の追加料金が適用されます。また、開始後にスナップショットを削除しても、転送済みのデータに対して料金が課されません。

増分スナップショットコピー

スナップショットコピーが増分かどうかは、最近完了したスナップショットコピーによって決定されます。リージョンまたはアカウントにわたってスナップショットをコピーする場合、次の条件に合致すればコピーは増分となります。

- スナップショットがコピー先のリージョンまたはアカウントにコピーされたことがある。
- 最近のスナップショットコピーがコピー先のリージョンまたはアカウントにまだ存在する。
- 最新のスナップショットコピーはアーカイブされていません。
- "コピー先" のリージョンまたはアカウントの全てのスナップショットのコピーが暗号化されていない、あるいは同じ KMS キーを使って暗号化されていた。

最近のスナップショットコピーが削除され、次のコピーがフルコピーである場合、増分コピーではありません。別のコピーを開始するときにコピーがまだ保留中の場合は、最初のコピーが終了した後のみ 2 番目のコピーが開始されます。

1 つのアカウントで同じリージョンのカスタマーマネージド型キーを使用してスナップショットコピーオペレーションを行うと、完全な (増分ではない) コピーが生成されます。同じスナップショットの後続のコピーは増分です。

スナップショットの増分コピーでは、スナップショットのコピーに必要な時間が短縮され、データを複製しないことで、データ転送とストレージ料金が節約されます。

コピー先リージョンまたはアカウントで最近のボリュームのスナップショットコピーをトラッキングできるように、スナップショットにボリューム ID と作成時刻をタグ付けすること推奨します。

スナップショットコピーがインクリメンタルかどうかを確認するには、[CloudWatch copySnapshot](#) イベントをチェックします。

暗号化とスナップショットのコピー

スナップショットをコピーする場合、コピーを暗号化するか、元のものとは異なる KMS キーを指定して、コピーされたスナップショットで新しい KMS キーが使用されるようにもできます。ただし、

コピーオペレーション中にスナップショットの暗号化状態を変更すると、完全コピー (増分ではない) が返され、より大規模なデータ転送およびストレージ料金が発生する可能性があります。詳細については、「[増分スナップショットコピー](#)」を参照してください。

AWS 別のアカウントから共有された暗号化されたスナップショットをコピーするには、そのスナップショットを使用する権限と、スナップショットの暗号化に使用されたカスタマー管理キー (CMK) が必要です。共有された暗号化されたスナップショットを使用する場合は、自分が所有する KMS キーを使用してスナップショットを再暗号化することをお勧めします。これにより、元の KMS キーが侵害された場合、または所有者が取り消した場合に保護され、スナップショットを使用して作成した暗号化されたボリュームへのアクセスが失われる可能性があります。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの共有](#)を参照してください。

Encrypted パラメータを true に設定すると、EBS スナップショットコピーに暗号化を適用できます。([\[デフォルトで暗号化\]](#) が有効になっている場合、Encrypted パラメータはオプションです。)

必要に応じて KmsKeyId を使用して、スナップショットコピーの暗号化に使用するカスタムキーを指定できます。(暗号化がデフォルトで有効になっている場合でも、Encrypted パラメータを true に設定する必要があります。) KmsKeyId が指定されていない場合、暗号化に使用されるキーはソーススナップショットの暗号化状態とその所有権によって異なります。

ユーザーが所有するスナップショットおよび共有されたスナップショットをコピーする際の設定に関して、各組み合わせの暗号化結果は次の表のとおりです。

デフォルトでの暗号化	Encrypted パラメータが設定されているか	ソーススナップショットの暗号化ステータス	デフォルト (KMS キーの指定なし)	カスタム (KMS キーの指定あり)
Disabled	いいえ	暗号化されていない	暗号化されていない	該当なし
		暗号化された	によって暗号化されます。AWS マネージドキー	
	はい	暗号化されていない	デフォルト KMS キーで暗号化	指定した KMS キーで暗号化**
		暗号化された	デフォルト KMS キーで暗号化	

デフォルトでの暗号化	Encrypted パラメータが設定されているか	ソーススナップショットの暗号化ステータス	デフォルト (KMS キーの指定なし)	カスタム (KMS キーの指定あり)
有効	いいえ	暗号化されていない	デフォルト KMS キーで暗号化	該当なし
		暗号化された	デフォルト KMS キーで暗号化	
	はい	暗号化されていない	デフォルト KMS キーで暗号化	指定した KMS キーで暗号化**
		暗号化された	デフォルト KMS キーで暗号化	

** これはコピースナップショットアクションで指定された KMS キーです。この KMS キーは、アカウントとリージョンで、デフォルトの KMS キーの代わりに使用されます。

スナップショットをコピーする

スナップショットをコピーするには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

コンソールを使用してスナップショットをコピーするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
3. コピーするスナップショットを選択し、[Actions] (アクション)、[Copy snapshot] (スナップショットのコピー) の順にクリックします。
4. [Description] (説明) に、スナップショットのコピーの簡潔な説明を入力します。

デフォルトでは、スナップショットとコピーを見分けられるよう、元のスナップショットに関する情報が説明に含まれています。この説明は必要に応じて変更できます。

5. [Destination Region] (送信先のリージョン) で、スナップショットのコピーを作成するリージョンを選択します。
6. スナップショットコピーの暗号化ステータスを指定します。

ソースのスナップショットが暗号化されている場合、またはアカウントでの暗号化を[デフォルトで有効](#)にしている場合、スナップショットコピーは自動的に暗号化され、その暗号化の状態を変更することはできません。

ソーススナップショットが暗号化されておらず、アカウントがデフォルトで暗号化を有効にしていない場合、暗号化はオプションです。スナップショットのコピーを暗号化するには、[Encryption] (暗号化) で、[Encrypt this snapshot] (スナップショットの暗号化) を選択します。次に、KMS キーで、送信先リージョンでスナップショットの暗号化に使用する KMS キーを選択します。

7. [スナップショットのコピー] を選択します。

AWS CLI

を使用してスナップショットをコピーするには AWS CLI

[copy-snapshot](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用してスナップショットをコピーするには PowerShell

[Copy-EC2Snapshot](#) コマンドを実行します。

エラーをチェックするには

暗号化キーを使用する権限なしで、暗号化されたスナップショットをコピーしようとする、メッセージが表示されずに操作に失敗します。ページを更新するまでエラー状態はコンソールに表示されません。次の例のように、コマンドラインからスナップショットの状態を確認することもできます。

```
aws ec2 describe-snapshots --snapshot-id snap-0123abcd
```

キーの権限が不十分なためにコピーに失敗した場合は、"StateMessage": "指定されたキー ID にはアクセスできません" というメッセージが表示されます。

暗号化されたスナップショットをコピーするときに、デフォルト CMK の DescribeKey 権限が必要です。明示的にこれらのアクセス許可を拒否するとコピーの障害が発生します。CMK キーの管理については、「[AWS KMSに対する認証とアクセス制御](#)」を参照してください。

Amazon EBS スナップショットの共有

スナップショットの許可を変更することで、他の AWS アカウントとスナップショットを共有できます。スナップショットは、AWS 他のすべてのアカウントと公開して共有することも、AWS 指定した個々のアカウントと非公開で共有することもできます。許可を受けたユーザーは、共有するスナップショットを使用して自分の EBS ボリュームを作成できますが、元のスナップショットは影響を受けません。

Important

スナップショットを共有すると、スナップショットのすべてのデータに他人がアクセスできるようになります。スナップショットの共有は、自分のスナップショットデータすべてを委託できる人とだけ行ってください。

スナップショットがパブリックに共有されないようにするために、スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にします。詳細については「[AMI へのパブリックアクセスをブロックする](#)」を参照してください。

トピック

- [スナップショットを共有する前に](#)
- [スナップショットの共有](#)
- [KMS キーの共有](#)
- [自分と共有されているスナップショットを表示する](#)
- [共有されているスナップショットを使用する](#)
- [共有するスナップショットの使用方法を決定する](#)

スナップショットを共有する前に

スナップショットの共有には、次の考慮事項が適用されます。

- そのリージョンでスナップショットのブロックパブリックアクセスが有効になっている場合、スナップショットをパブリックに共有しようとする試みはブロックされます。スナップショットは引き続きプライベートに共有できます。
- スナップショットは、スナップショットが作成されたリージョンに制限されます。別のリージョンとスナップショットを共有するには、そのリージョンにスナップショットをコピーして、そのコ

ピーを共有します。詳細については、「[Amazon EBS スナップショットのコピー](#)」を参照してください。

- デフォルトの AWS マネージドキーで暗号化されたスナップショットを共有することはできません。共有できるのは、カスタマーマネージド型キーを使用して暗号化されたスナップショットだけです。詳細については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドの[キーの作成](#)を参照してください。
- 暗号化されていないスナップショットのみをパブリックに共有できます。
- 暗号化されたスナップショットを共有する場合は、スナップショットの暗号化に使用するカスタマーマネージド型キーも共有する必要があります。詳細については、[KMS キーの共有](#)を参照してください。

スナップショットの共有

スナップショットを共有するには、このセクションで説明されているいずれかの方法を使用します。

Console

スナップショットを共有するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
3. スナップショットを選択し、[Actions] (アクション)、[Modify Permissions] (権限の変更) の順にクリックします。
4. スナップショットの権限を指定します。[Current setting] (現在の設定) は、スナップショットの現在の共有権限を示します。
 - AWS スナップショットをすべてのアカウントと公開して共有するには、[Public] を選択します。
 - AWS スナップショットを特定のアカウントとプライベートに共有するには、「プライベート」を選択します。次に、[Sharing accounts] (アカウントの共有) セクションで、[Add account] (アカウントの追加) を選択し、共有するアカウントの 12 桁のアカウント ID (ハイフンなし) を入力します。
5. [変更を保存] をクリックします。

AWS CLI

スナップショットのアクセス許可は、スナップショットの `createVolumePermission` 属性を使用して指定します。スナップショットを公開するには、グループを `all` に設定します。AWS スナップショットを特定のアカウントと共有するには、AWS ユーザーをそのアカウントの ID に設定します。

スナップショットをパブリックに共有するには

[modify-snapshot-attribute](#) コマンドを実行します。

`--attribute` で、`createVolumePermission` を指定します。`--operation-type` で、`add` を指定します。`--group-names` で、`all` を指定します。

```
$ aws ec2 modify-snapshot-attribute --snapshot-id 1234567890abcdef0 --attribute createVolumePermission --operation-type add --group-names all
```

スナップショットをプライベートに共有するには

[modify-snapshot-attribute](#) コマンドを実行します。

`--attribute` で、`createVolumePermission` を指定します。`--operation-type` で、`add` を指定します。には `--user-ids`、AWS スナップショットを共有するアカウントの 12 桁の ID を指定します。

```
$ aws ec2 modify-snapshot-attribute --snapshot-id 1234567890abcdef0 --attribute createVolumePermission --operation-type add --user-ids 123456789012
```

Tools for Windows PowerShell

スナップショットのアクセス許可は、スナップショットの `createVolumePermission` 属性を使用して指定します。スナップショットを公開するには、グループを `all` に設定します。AWS スナップショットを特定のアカウントと共有するには、ユーザーをそのアカウントの AWS ID に設定します。

スナップショットをパブリックに共有するには

[Edit-EC2SnapshotAttribute](#) コマンドを実行します。

`-Attribute` で、`CreateVolumePermission` を指定します。`-OperationType` で、`Add` を指定します。`-GroupName` で、`all` を指定します。

```
PS C:\> Edit-EC2SnapshotAttribute -SnapshotId 1234567890abcdef0 -Attribute
CreateVolumePermission -OperationType Add -GroupName all
```

スナップショットをプライベートに共有するには

[Edit-EC2SnapshotAttribute](#) コマンドを実行します。

-Attribute で、CreateVolumePermission を指定します。-OperationType で、Add を指定します。にはUserId、AWS スナップショットを共有するアカウントの 12 桁の ID を指定します。

```
PS C:\> Edit-EC2SnapshotAttribute -SnapshotId 1234567890abcdef0 -Attribute
CreateVolumePermission -OperationType Add -UserId 123456789012
```

KMS キーの共有

暗号化されたスナップショットを共有する場合は、スナップショットの暗号化に使用するカスターマネージド型キーも共有する必要があります。カスターマネージド型キーを作成したとき、または後でカスターマネージド型キーにクロスアカウント権限を適用することができます。

暗号化されたスナップショットにアクセスしている共有のカスターマネージド型キーのユーザーには、そのキーに対して、次の操作を実行するためのアクセス許可が与えられている必要があります。

- kms:DescribeKey
- kms>CreateGrant
- kms:GenerateDataKey
- kms:GenerateDataKeyWithoutPlaintext
- kms:ReEncrypt
- kms:Decrypt

Tip

最小権限のプリンシパルに従うには、kms>CreateGrant へのフルアクセスを許可しないでください。代わりに、kms:GrantIsForAWSResource 条件キーを使用して、サービスによってユーザーに代わって権限が作成された場合にのみ、ユーザーが KMS キーで権限を作成できるようにします。AWS

カスタマーマネージド型キーへのアクセスの制御方法については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドの[AWS KMSでのキーポリシーの使用](#)を参照してください。

コンソールを使用してカスタマー管理キーを共有するには AWS KMS

1. <https://console.aws.amazon.com/kms> AWS KMS でコンソールを開きます。
2. を変更するには AWS リージョン、ページの右上隅にあるリージョンセレクターを使用します。
3. ナビゲーションペインで、[カスタマー管理型のキー] を選択します。
4. [エイリアス] 列で、スナップショットの暗号化に使用したカスタマーマネージド型キーのエイリアス (テキストリンク) を選択します。キーの詳細が新しいページで開きます。
5. [キーポリシー] セクションに、ポリシービューまたはデフォルトビューのいずれかが表示されます。ポリシービューは、キーポリシードキュメントを表示します。デフォルトビューは、[キー管理者]、[キーの削除]、[キーの使用]、[その他の AWS アカウント] の各セクションを表示します。デフォルトビューは、コンソールでポリシーを作成し、それをカスタマイズしていない場合に表示されます。デフォルトビューが使用できない場合は、ポリシービューでポリシーを手動で編集する必要があります。詳細については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドの[キーポリシーの表示 \(コンソール\)](#)を参照してください。

アクセスできるビューに応じて、ポリシービューまたはデフォルトビューを使用して、次のように 1 AWS つ以上のアカウント ID をポリシーに追加します。

- (ポリシービュー) [編集] を選択します。1 AWS つ以上のアカウント ID を次のステートメントに追加します:"Allow use of the key"と"Allow attachment of persistent resources"。[変更を保存]をクリックします。次の例では、AWS アカウント ID 444455556666 がポリシーに追加されます。

```
{
  "Sid": "Allow use of the key",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"AWS": [
    "arn:aws:iam::111122223333:user/KeyUser",
    "arn:aws:iam::444455556666:root"
  ]},
  "Action": [
    "kms:Encrypt",
    "kms:Decrypt",
    "kms:ReEncrypt*",
    "kms:GenerateDataKey*",
    "kms:DescribeKey"
  ],
}
```



```
"Resource": "*"
},
{
  "Sid": "Allow attachment of persistent resources",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"AWS": [
    "arn:aws:iam::111122223333:user/KeyUser",
    "arn:aws:iam::444455556666:root"
  ]},
  "Action": [
    "kms:CreateGrant",
    "kms:ListGrants",
    "kms:RevokeGrant"
  ],
  "Resource": "*",
  "Condition": {"Bool": {"kms:GrantIsForAWSResource": true}}
}
```

- (デフォルトビュー) [AWS その他のアカウント] まで下にスクロールします。[AWS その他のアカウントを追加] を選択し、AWS プロンプトに従ってアカウント ID を入力します。別のアカウントを追加するには、「AWS 別のアカウントを追加」を選択し、AWS アカウント ID を入力します。すべての AWS アカウントを追加したら、[Save changes] (変更の保存) を選択します。

自分と共有されているスナップショットを表示する

自分と共有されているスナップショットは、次のいずれかの方法で表示できます。

Console

コンソールを使用して、共有されているスナップショットを表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[スナップショット] を選択します。
3. リストされたスナップショットをフィルターします。画面の左上隅で、次のいずれかのオプションを選択します。
 - [プライベートスナップショット] — プライベートで共有されているスナップショットのみを表示します。

- [パブリックスナップショット]— パブリックに共有されているスナップショットのみを表示します。

AWS CLI

コマンドラインを使用してスナップショットに関するアクセス許可を表示するには

[describe-snapshot-attribute](#) コマンドを実行します。

Tools for Windows PowerShell

コマンドラインを使用してスナップショットに関するアクセス許可を表示するには

[Get-EC2SnapshotAttribute](#) コマンドを実行します。

共有されているスナップショットを使用する

暗号化されていない共有スナップショットを使用するには

ID または説明で共有スナップショットを見つけます。詳細については、[自分と共有されているスナップショットを表示する](#) を参照してください。このスナップショットは、アカウント内で所有している、他のスナップショットと同じように使用できます。例えば、スナップショットからボリュームを作成したり、別のリージョンにコピーしたりすることができます。

暗号化された共有スナップショットを使用するには

ID または説明で共有スナップショットを見つけます。詳細については、[自分と共有されているスナップショットを表示する](#) を参照してください。アカウントに共有スナップショットのコピーを作成し、所有している KMS キーを使用して、そのコピーを暗号化します。その後、コピーを使用してボリュームを作成したり、別のリージョンにコピーしたりできます。

共有するスナップショットの使用方法を決定する

AWS CloudTrail を使用して、他のユーザーと共有したスナップショットがコピーされたのか、ボリュームの作成に使用されたのかを監視できます。以下のイベントが記録されます CloudTrail。

- SharedSnapshotCopyInitiated— 共有スナップショットがコピーされている。
- SharedSnapshotVolumeCreated— 共有スナップショットを使用してボリュームを作成していません。

の使用に関する詳細については CloudTrail、[「Amazon EC2 と Amazon EBS API の呼び出しを使用してログに記録する」](#)を参照してください。AWS CloudTrail

Amazon EBS スナップショットのアーカイブ

Amazon EBS Snapshots Archive は、頻繁な検索や高速な検索を必要としない、アクセス頻度の低いスナップショットを低コストで長期保存するために使用できる新しいストレージ階層です。

デフォルトでは、スナップショットを作成すると、Amazon EBS スナップショットスタンダード階層に保存されます(標準階層)。標準階層に保存されるスナップショットは、増分です。これは、最新のスナップショットが作成された後に変更された、ボリューム内のブロックのみが保存されることを意味します。

スナップショットをアーカイブすると、増分スナップショットはフルスナップショットに変換され、標準階層から Amazon EBS Snapshots Archive 階層 (アーカイブ階層) に移動します。完全なスナップショットには、スナップショットの作成時にボリュームに書き込まれたすべてのブロックが含まれます。

アーカイブされたスナップショットにアクセスする必要がある場合は、アーカイブ階層から標準階層に復元し、アカウント内の他のスナップショットと同じ方法で使用できます。

Amazon EBS Snapshots Archive では、90 日以上保存する予定で、ほとんどアクセスする必要のないスナップショットに対して、スナップショットストレージコストを最大 75% 削減できます。

一般的なユースケースを以下に示します。

- プロジェクト終了時のスナップショットなど、ボリューム内の唯一のスナップショットをアーカイブする
- コンプライアンス上の理由から、ある時点の、完全な増分スナップショットをアーカイブします。
- 毎月、四半期ごと、または年ごとの増分スナップショットをアーカイブします。

トピック

- [考慮事項と制約事項](#)
- [料金と請求](#)
- [クォータ](#)
- [スナップショットのアーカイブに関するガイドラインとベストプラクティス](#)
- [必要な IAM アクセス許可](#)
- [スナップショットのアーカイブを使用する](#)

• [スナップショットのアーカイブをモニタリングする](#)

考慮事項と制約事項

考慮事項

- 最小アーカイブ期間は 90 日です。90 日間の最小アーカイブ期間より前にアーカイブされたスナップショットを削除または永続的に復元すると、アーカイブ階層の残りの日数に対して請求され、最も近い時間に四捨五入されます。詳細については、[料金と請求](#)を参照してください。
- スナップショットのサイズによっては、アーカイブ階層から標準階層にアーカイブスナップショットを復元するのに最大 72 時間かかる場合があります。
- アーカイブされるスナップショットは、常に完全なスナップショットです。完全なスナップショットには、スナップショットの作成時にボリュームに書き込まれたすべてのブロックが含まれます。完全なスナップショットは、作成元の増分スナップショットよりも大きくなります。ただし、標準階層にボリュームの増分スナップショットが 1 つしかない場合、アーカイブ階層の完全なスナップショットのサイズは、標準階層のスナップショットと同じサイズになります。これは、ボリュームの最初のスナップショットが常に完全なスナップショットであるためです。
- 毎月、毎四半期、または毎年のスナップショットのアーカイブをお勧めします。単一ボリュームの毎日の増分スナップショットをアーカイブすると、標準ティアで保持する場合と比較してコストが高くなる可能性があります。
- スナップショットがアーカイブされると、スナップショット系統内の他のスナップショットによって参照されるスナップショットのデータは標準階層で保持されます。標準階層で保持される参照データに関連するデータおよびストレージコストは、系統内の次のスナップショットに割り当てられます。これにより、系列内の後続のスナップショットがアーカイブの影響を受けないことが保証されます。
- ごみ箱の保持ルールに一致するアーカイブスナップショットを削除すると、アーカイブされたスナップショットは、保持ルールで定義されている保持期間中、ごみ箱に保持されます。スナップショットを使用するには、まずそのスナップショットをごみ箱から復元し、次にアーカイブ階層から復元する必要があります。詳細については、「[ごみ箱](#)」および「[料金と請求](#)」を参照してください。
- アーカイブされたスナップショットをブロックデバイスマッピングに使用したり、Amazon EBS ボリュームを作成したりすることはできません。
- AWS Backup コンソール、API、またはコマンドラインツールを使用して AWS Backup によって作成されたスナップショットをアーカイブできます。詳細については、「AWS Backup 開発者ガイド」の「[バックアッププランの作成](#)」を参照してください。

制限事項

- completed 状態にあるスナップショットのみアーカイブできます。
- アーカイブできるのは、アカウント内で所有しているスナップショットだけです。共有されているスナップショットをアーカイブするには、まずスナップショットをアカウントにコピーしてから、スナップショットコピーをアーカイブします。
- アーカイブされたスナップショットを使用するには、まずそのスナップショットを標準階層に復元する必要があります。CreateVolume および RunInstances API オペレーションでスナップショットからボリュームを作成する場合や、スナップショットを共有またはコピーする場合には、スタンダード階層への復元が必要です。詳細については、「[アーカイブされたスナップショットの復元](#)」を参照してください。
- 1 つ以上の AMI に関連付けられているスナップショットをアーカイブできるのは、関連付けられている AMI がすべて無効になっている場合に限りです。詳細については、「[AMI の無効化](#)」を参照してください。
- 関連付けられたスナップショットが一時的に復元された場合、無効になっている AMI を有効にすることはできません。AMI を有効にする前に、関連付けられたすべてのスナップショットを完全に復元する必要があります。
- スナップショットのアーカイブまたはスナップショットの復元プロセスは、開始後にキャンセルできません。
- アーカイブされたスナップショットは共有できません。他のアカウントと共有しているスナップショットをアーカイブすると、スナップショットが共有されているアカウントは、スナップショットがアーカイブされた後にアクセスできなくなります。
- アーカイブされたスナップショットはコピーできません。アーカイブされたスナップショットをコピーする必要がある場合は、まずそのスナップショットを復元する必要があります。
- ローカルスナップショットでは、高速スナップショット復元を有効化できません。高速スナップショット復元は、スナップショットがアーカイブされると自動的に無効になります。高速スナップショット復元を使用する必要がある場合は、スナップショットを復元した後で、手動で有効にする必要があります。

料金と請求

アーカイブされたスナップショットは、1 GB あたり 0.0125 ドル/月 の料金が請求されます。たとえば、100 GiB のスナップショットをアーカイブすると、1 か月あたり 1.25 ドル (100 GiB * 0.0125 ドル) が請求されます。

スナップショットの復元は、復元されたデータ 1 GB あたり 0.03 ドルの料金が請求されます。たとえば、アーカイブ階層から 100 GiB のスナップショットを復元すると、3 ドル (100 GiB * 0.03 ドル) が 1 回請求されます。

スナップショットが標準階層に復元された後、スナップショットは 1 GB あたり 0.05 ドルのスナップショット標準料金が請求されます。

詳細については、[Amazon EBS の料金表](#)を参照してください。

最小アーカイブ期間の請求

最小アーカイブ期間は 90 日です。90 日間の最小アーカイブ期間より前にアーカイブされたスナップショットを削除または永続的に復元すると、残りの日分のアーカイブ階層ストレージ料金に相当する日数の日割り計算で、最も近い時間に四捨五入された料金が請求されます。たとえば、40 日後にアーカイブされたスナップショットを削除または完全に復元すると、最小アーカイブ期間の残りの 50 日間分の料金が請求されます。

Note

最小アーカイブ期間が 90 日前にアーカイブされたスナップショットを一時的に復元しても、この料金は発生しません。

一時的復元

スナップショットを一時的に復元すると、スナップショットはアーカイブ階層から標準階層に復元され、スナップショットのコピーはアーカイブ階層に残ります。一時復元期間の間、標準階層のスナップショットとアーカイブ層のスナップショットコピーの両方に対して請求されます。一時的に復元されたスナップショットが標準階層から削除されると、そのスナップショットに対する請求はなくなり、アーカイブ階層内のスナップショットに対してのみ請求されます。

永続的復元

スナップショットを永続的に復元すると、スナップショットはアーカイブ層から標準階層にリストアされ、スナップショットはアーカイブ階層から削除されます。スナップショットに対して請求されるのは、標準階層のみです。

スナップショットの削除

アーカイブ中にスナップショットを削除すると、すでにアーカイブ階層に移動されたスナップショットデータに対して請求されます。このデータには 90 日の最小アーカイブ期間が適用され、削除時にそれに応じて請求されます。例えば、100 GiB のスナップショットをアーカイブし、40 GiB のみがアーカイブされた後にスナップショットを削除すると、アーカイブ済みの 40 GiB の最小アーカイブ期間 90 日分の料金 1.50 USD が請求されます (1 GB あたり 0.0125 USD/月 * 40 GB * (90 日 * 24 時間) / (24 時間/日 * 30 日/月))。

アーカイブ階層からの復元中にスナップショットを削除すると、スナップショットのフルサイズのスナップショット復元に対して請求されます (スナップショットサイズ * 0.03 USD)。たとえば、アーカイブ層から 100 GiB のスナップショットを復元し、スナップショットの復元が完了する前にスナップショットを削除すると、3 USD (100 GiB のスナップショットサイズ * 0.03 ドル) が請求されます。

ごみ箱

アーカイブされたスナップショットは、ごみ箱に入っている間、アーカイブされたスナップショットの料金で請求されます。ごみ箱にあるアーカイブされたスナップショットには、90 日間の最小アーカイブ期間が適用され、最小アーカイブ期間より前にごみ箱によって削除された場合は、それに応じて請求されます。つまり、保持ルールによってアーカイブされたスナップショットがごみ箱から最低期間 90 日前に削除された場合、残りの日分の料金が請求されます。

スナップショットのアーカイブ中に保持ルールに一致するスナップショットを削除すると、アーカイブされたスナップショットは、保持ルールで定義されている保持期間中、ごみ箱に保持されます。これは、アーカイブされたスナップショットの料金で請求されます。

スナップショットのリストア中に保持ルールに一致するスナップショットを削除すると、復元されたスナップショットは保持期間の残りの期間ごみ箱に保持され、標準のスナップショットレートで請求されます。復元されたスナップショットを使用するには、まずそのスナップショットをごみ箱から復元する必要があります。

詳細については、「[ごみ箱](#)」を参照してください。

コスト追跡

AWS Cost and Usage Report にアーカイブされたスナップショットは、同じリソース ID と Amazon リソースネーム (ARN) を使用します。詳細については、[AWS Cost and Usage Report ユーザーガイド](#)を参照してください。

次の使用タイプを使用して、関連するコストを識別できます。

- SnapshotArchiveStorage— 月間データストレージの手数料

- SnapshotArchiveRetrieval — スナップショット復元の 1 回払い料金
- SnapshotArchiveEarlyDelete — 最小アーカイブ期間 (90 日) 前にスナップショットを削除または永続的に復元する手数料

クォータ

このセクションでは、アーカイブされたスナップショットと進行中のスナップショットのデフォルトのクォータについて説明します。

クォータ	デフォルトのクォータ			
ボリュームあたりのアーカイブされたスナップショット	25			
アカウントごとの進行中のスナップショットアーカイブ	25			
アカウントごとの進行中の	5			

クォータ	デフォルトのクォータ			
スナップショット				

ターゲット容量のデフォルトの制限を超える容量が必要な場合は、AWS Support センターの [\[ケースの作成\]](#) フォームから制限の引き上げをリクエストできます。

スナップショットのアーカイブに関するガイドラインとベストプラクティス

このセクションでは、スナップショットのアーカイブに関するガイドラインとベストプラクティスをいくつか示します。

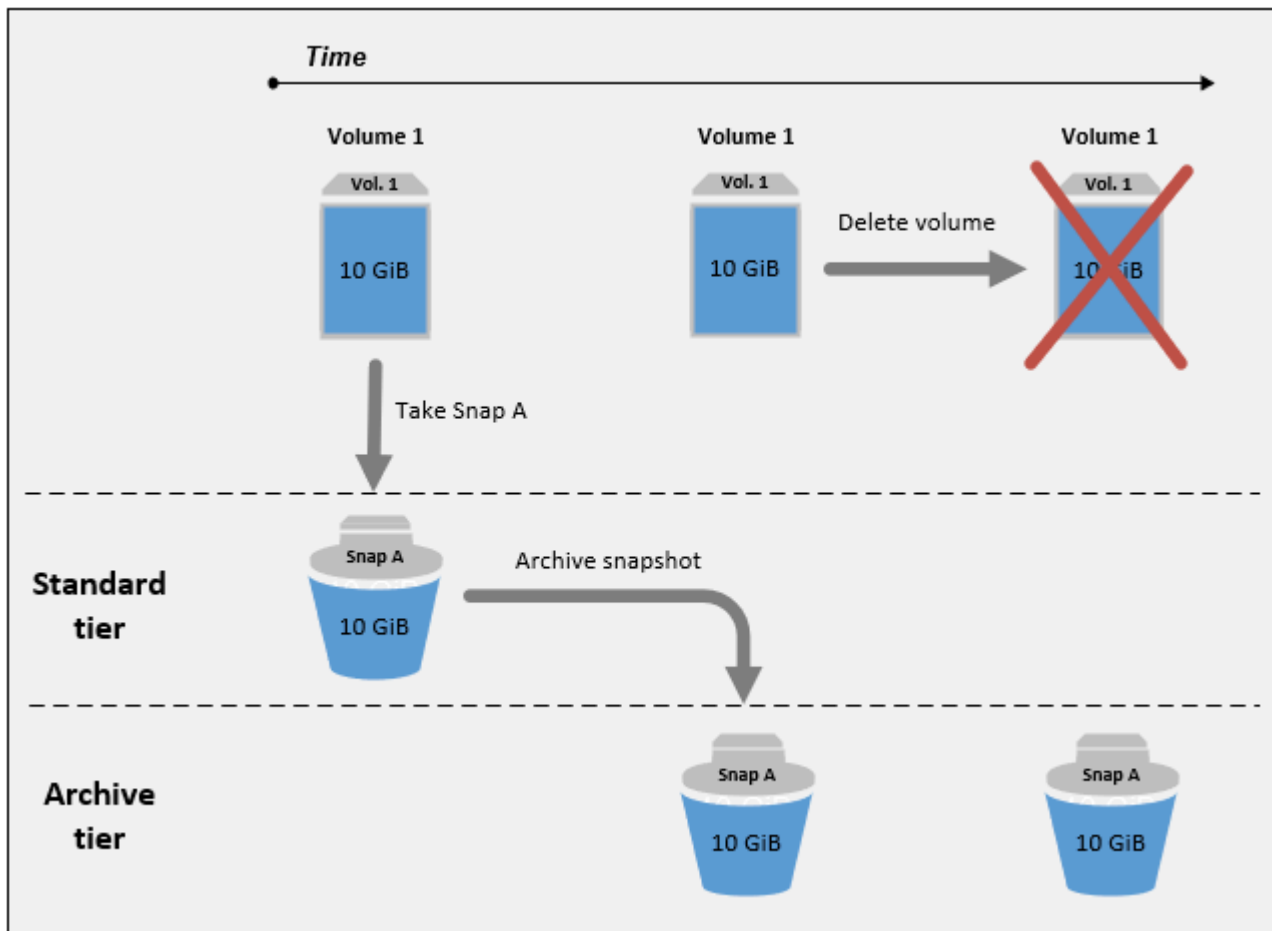
トピック

- [ボリュームの 1 つのスナップショットをアーカイブする](#)
- [単一ボリュームの増分スナップショットをアーカイブする](#)
- [コンプライアンス上の理由から完全なスナップショットをアーカイブする](#)
- [標準階層のストレージコストの削減を決定する](#)

ボリュームの 1 つのスナップショットをアーカイブする

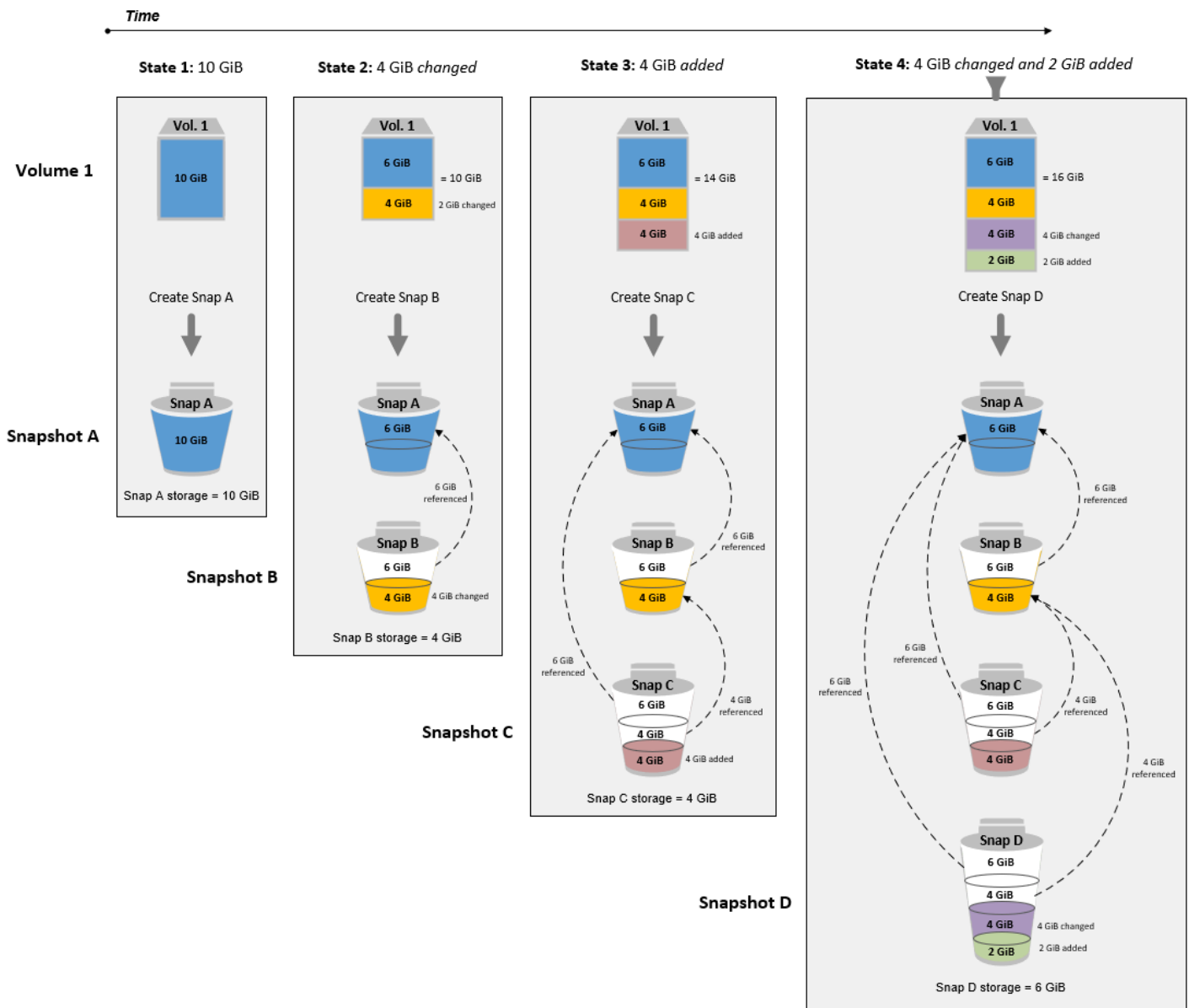
ボリュームのスナップショットが 1 つしかない場合、スナップショットは、スナップショットの作成時にボリュームに書き込まれたブロックと常に同じサイズになります。このようなスナップショットをアーカイブすると、標準階層のスナップショットは同等サイズのフルスナップショットに変換され、標準階層からアーカイブ階層に移動されます。

これらのスナップショットをアーカイブすることで、ストレージコストの削減に役立ちます。ソースボリュームが不要になった場合は、ストレージコストをさらに節約するためにボリュームを削除できます。



単一ボリュームの増分スナップショットをアーカイブする

増分スナップショットをアーカイブすると、スナップショットは完全なスナップショットに変換され、アーカイブ階層に移動されます。たとえば、以下の画像では、スナップ B をアーカイブする場合、スナップショットは 10 GiB の完全なスナップショットに変換され、アーカイブ階層に移動されます。同様に、スナップ C をアーカイブする場合の場合、アーカイブ階層内の完全なスナップショットのサイズは 14 GiB です。



標準階層のストレージコストを削減するためにスナップショットをアーカイブする場合は、増分スナップショットのセットに最初のスナップショットをアーカイブしないでください。これらのスナップショットは、スナップショット系統内の後続のスナップショットによって参照されます。ほとんどの場合、これらのスナップショットをアーカイブしても、ストレージコストは削減されません。

Note

増分スナップショットのセットには、最後のスナップショットをアーカイブしないでください。最後のスナップショットは、ボリュームの最新のスナップショットです。ボリュームが

破損または紛失した場合に、標準階層からボリュームを作成する場合は、標準階層でこのスナップショットが必要になります。

後続のスナップショットで参照されるデータを含むスナップショットをシステムでアーカイブすると、参照されるデータに関連付けられているデータストレージコストとストレージコストは、システム内の後続のスナップショットに割り当てられます。この場合、スナップショットをアーカイブしても、データストレージやストレージのコストは削減されません。例えば、上の図でスナップ B をアーカイブする場合、その 4 GiB のデータはスナップ C に帰属しています。この場合、アーカイブ階層のスナップ B のフルバージョンのストレージコストが発生し、標準階層のストレージコストは変わらないため、全体のストレージコストが増加します。

スナップ C をアーカイブする場合、データがシステムの後半で他のスナップショットによって参照されないため、標準階層ストレージは 4 GiB 減少します。また、スナップショットが完全なスナップショットに変換されるため、アーカイブ階層のストレージは 14 GiB 増加します。

コンプライアンス上の理由から完全なスナップショットをアーカイブする

コンプライアンス上の理由から、毎月、四半期、または年単位でボリュームのフルバックアップを作成する必要がある場合があります。これらのバックアップでは、スナップショットシステム内の他のスナップショットへの後方参照または前方参照なしで、スタンドアロンスナップショットが必要になる場合があります。EBS Snapshots Archive でアーカイブされたスナップショットは完全なスナップショットであり、システム内の他のスナップショットへの参照はありません。さらに、コンプライアンスのために、これらのスナップショットを数年間保持する必要があります。EBS スナップショットアーカイブを使用すると、これらの完全なスナップショットを長期保存するためにコストパフォーマンスに優れた方法でアーカイブできます。

標準階層のストレージコストの削減を決定する

増分スナップショットをアーカイブしてストレージコストを削減する場合は、アーカイブ階層の完全なスナップショットのサイズと、標準階層のストレージの削減を考慮する必要があります。ここでは、その方法について説明します。

Important

API レスポンスは、API が呼び出された時点での正確なデータです。API レスポンスは、スナップショットのシステムが変更された結果、スナップショットに関連付けられたデータが変わるため、異なる可能性があります。

標準階層でのストレージおよびストレージコストの削減を判断するには、次のステップに従います。

1. 完全なスナップショットのサイズを確認します。スナップショットのフルサイズを決定するには、[list-snapshot-blocks](#) コマンドを使用します。[--snapshot-id] に、アーカイブしたいスナップショットの ID を指定します。

```
$ aws ebs list-snapshot-blocks --snapshot-id snapshot_id
```

これにより、指定されたスナップショット内のすべてのブロックに関する情報を返します。コマンドによって返される最後のブロックの BlockIndex は、スナップショット内のブロック数を示します。ブロック数に 512 KiB (スナップショット・ブロック・サイズ) を乗算すると、アーカイブ階層内の完全なスナップショットのサイズに近い近似値が得られます (ブロック * 512 KiB = 完全なスナップショットサイズ)。

たとえば、次のコマンドは スナップショットスナップショット snap-01234567890abcdef のブロックの一覧を表示します。

```
$ aws ebs list-snapshot-blocks --snapshot-id snap-01234567890abcdef
```

以下はコマンド出力で、一部のブロックは省略されています。次の出力は、スナップショットに約 16,383 データブロックが含まれていることを示しています。これは、約 8 GiB (16,383 * 512 KiB = 7.99 GiB) の完全なスナップショットサイズに近似します。

```
{
  "VolumeSize": 8,
  "Blocks": [
    {
      "BlockToken": "ABgBAeShfa5RwG+RiWUg2pwmnCU/
YMnV7fGMxLbCWfEBEUmmuqac5RmoyVat",
      "BlockIndex": 0
    },
    {
      "BlockToken": "ABgBATdTONyThPUAbQhbUQXsn5TGoY/
J17GfE83j9WN7siupav0Tw9E1KpFh",
      "BlockIndex": 1
    },
    {
      "BlockToken": "EBEUmmuqXsn5TGoY/QwmnCU/YMnV74eKE2TSsn5TGoY/
E83j9WQhbUQXsn5T",
      "BlockIndex": 4
    }
  ]
}
```

```

    },
    .....
    {
        "BlockToken": "yThPUAbQhb5V8xpwmnCU/
YMnV74eKE2TSFY1sKP/4r05y47WETdTONyThPUA",
        "BlockIndex": 12890
    },
    {
        "BlockToken":
"ABgBASHKD5V8xEbaRKdxdkZZS4eKE2TSFY1MG1sKP/4r05y47WEHqKaNPcLs",
        "BlockIndex": 12906
    },
    {
        "BlockToken": "ABgBARR0GMUJo6P9X3CFHQGZNQ7av9B6vZtTTqV89QqC
+Sk00HWM1wkGXjnA",
        "BlockIndex": 16383
    }
],
"VolumeSize": 8,
"ExpiryTime": 1637677800.845,
"BlockSize": 524288
}

```

2. アーカイブするスナップショットを作成したソースボリュームを検索します。[describe-snapshots](#) コマンドを使用します。--snapshot-id に、アーカイブしたいスナップショットの ID を指定します。VolumeId レスポンスパラメータは、ソースボリュームの ID を示します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --snapshot-id snapshot_id
```

たとえば、次のコマンドは、スナップショット snap-09c9114207084f0d9 に関する情報を返します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --snapshot-id snap-09c9114207084f0d9
```

次のコマンド出力は、スナップショット snap-09c9114207084f0d9 がボリューム vol-0f3e2c292c52b85c3 から作成されたことを示しています。

```

{
  "Snapshots": [
    {
      "Description": "",

```

```

    "Tags": [],
    "Encrypted": false,
    "VolumeId": "vol-0f3e2c292c52b85c3",
    "State": "completed",
    "VolumeSize": 8,
    "StartTime": "2021-11-16T08:29:49.840Z",
    "Progress": "100%",
    "OwnerId": "123456789012",
    "SnapshotId": "snap-09c9114207084f0d9"
  }
]
}

```

3. ソースボリュームから作成されたすべてのスナップショットを検索します。[describe-snapshots](#) コマンドを使用します。volume-id フィルターを指定して、フィルター値に、前のステップで取得したボリューム ID を指定します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --filters "Name=volume-id, Values=volume_id"
```

たとえば、次のコマンドは、ボリューム vol-0f3e2c292c52b85c3 から作成されたすべてのスナップショットを返します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --filters "Name=volume-id,
Values=vol-0f3e2c292c52b85c3"
```

以下のコマンド出力は、ボリューム vol-0f3e2c292c52b85c3 から作成された 3 つのスナップショットを示します。

```

{
  "Snapshots": [
    {
      "Description": "",
      "Tags": [],
      "Encrypted": false,
      "VolumeId": "vol-0f3e2c292c52b85c3",
      "State": "completed",
      "VolumeSize": 8,
      "StartTime": "2021-11-14T08:57:39.300Z",
      "Progress": "100%",
      "OwnerId": "123456789012",
      "SnapshotId": "snap-08ca60083f86816b0"
    }
  ]
}

```

```
    },
    {
      "Description": "",
      "Tags": [],
      "Encrypted": false,
      "VolumeId": "vol-0f3e2c292c52b85c3",
      "State": "completed",
      "VolumeSize": 8,
      "StartTime": "2021-11-15T08:29:49.840Z",
      "Progress": "100%",
      "OwnerId": "123456789012",
      "SnapshotId": "snap-09c9114207084f0d9"
    },
    {
      "Description": "01",
      "Tags": [],
      "Encrypted": false,
      "VolumeId": "vol-0f3e2c292c52b85c3",
      "State": "completed",
      "VolumeSize": 8,
      "StartTime": "2021-11-16T07:50:08.042Z",
      "Progress": "100%",
      "OwnerId": "123456789012",
      "SnapshotId": "snap-024f49fe8dd853fa8"
    }
  ]
}
```

4. 前のコマンドの出力を使用して、スナップショットを最初のものから新しい順に作成時刻順にソートします。各スナップショットの `StartTime` レスポンスパラメータには、そのスナップショットの作成時刻が UTC 時間形式で表示されます。

たとえば、前のステップで返されたスナップショットは、最も古いものから新しいものまで作成時刻順に整理され、次のようになります。

1. `snap-08ca60083f86816b0` (最速 — アーカイブしたいスナップショットの前に作成される)
 2. `snap-09c9114207084f0d9` (アーカイブするスナップショット)
 3. `snap-024f49fe8dd853fa8` (最新 — アーカイブしたいスナップショットの後に作成される)
5. アーカイブしたいスナップショットの直前と直後に作成されたスナップショットを特定します。この場合、スナップショット `snap-09c9114207084f0d9` をアーカイブします。これは、3つのスナップショットのセットで作成された2番目の増分スナップショットで

す。スナップショット `snap-08ca60083f86816b0` は直前に作成され、スナップショット `snap-024f49fe8dd853fa8` が直後に作成されます。

6. アーカイブしたいスナップショット内の参照されていないデータを検索します。まず、アーカイブしたいスナップショットの直前に作成されたスナップショットと、アーカイブするスナップショットの間で異なるブロックを見つけます。[list-changed-blocks](#) コマンドを使用します。--first-snapshot-id に、アーカイブしたいスナップショットの直前に作成されたスナップショットの ID を指定します。--second-snapshot-id に、アーカイブしたいスナップショットの ID を指定します。

```
$ aws ebs list-changed-blocks --first-snapshot-id snapshot_created_before --second-snapshot-id snapshot_to_archive
```

たとえば、次のコマンドは、スナップショット `snap-08ca60083f86816b0` (アーカイブしたいスナップショットの前に作成されたスナップショット) とスナップショット `snap-09c9114207084f0d9` (アーカイブしたいスナップショット) の間で異なるブロックのブロックインデックスを表示します。

```
$ aws ebs list-changed-blocks --first-snapshot-id snap-08ca60083f86816b0 --second-snapshot-id snap-09c9114207084f0d9
```

以下に、一部のブロックが省略されたコマンド出力を示します。

```
{
  "BlockSize": 524288,
  "ChangedBlocks": [
    {
      "FirstBlockToken": "ABgBAX6y
+WH6Rm9y5zq1VyeTCmEzGmTT0jNZG1cDirFq1r0VeFbWXsH3W4z/",
      "SecondBlockToken": "ABgBASyx0bHHBnTERu
+9USLxYK/81UT0dbHIUFqUjQUkwTwK5qkjP8NSGyNB",
      "BlockIndex": 4
    },
    {
      "FirstBlockToken": "ABgBAcfL
+EfmQm1NgstqrFnYgsAxR4SDS04LkNLY00ChGBWcfJnnpn90E9XX1",
      "SecondBlockToken": "ABgBAdX0mtX6aBAAt3EBy
+8jFCESMpig7csKjb020cd08m2iNJV2Ue+cRwUqF",
      "BlockIndex": 5
    }
  ]
}
```

```

    "FirstBlockToken": "ABgBAVBaFJmbP/eRHGh7vnJlAwyiyNUi3MKZmEMxs2wC3AmM/
fc6yCOAMb65",
    "SecondBlockToken":
"ABgBADewWkHKTcrhZmsfM7GbaHyXD1Ctcn2nppz4wYItZRmAo1M72fpXU0Yv",
    "BlockIndex": 13
  },
  {
    "FirstBlockToken": "ABgBAQGxwuf6z095L6DpRoVRVn0qPxm9r7Wf60+i
+1tZ0dwPpGN39ijztLn",
    "SecondBlockToken": "ABgBAUdlitCVI7c6hGsT4ckkKCw6bMRclnV
+bKjViu/9UESTcw7CD9w4J2td",
    "BlockIndex": 14
  },
  {
    "FirstBlockToken":
"ABgBAZBFev4EHS1aSXTXxSE3mBZG6CNeIkwxpljzmgSHICG1FmZCyJXzE4r3",
    "SecondBlockToken":
"ABgBAVWR7QuQQB0AP2TtmNkgS4Aec5KAQVClDnpc91zBiNmSfW9ouIlbeXWy",
    "BlockIndex": 15
  },
  .....
  {
    "SecondBlockToken": "ABgBAeHwXPL+z3DBLjDhwjdAM9+CPGV5V05Q3rEEA
+ku50P498hjnTAgMhLG",
    "BlockIndex": 13171
  },
  {
    "SecondBlockToken":
"ABgBAbZcPiVtLx6U3Fb4lAjRdrkJMwW5M2tiCgIp6ZZpcZ8AwXxkjVUUHADq",
    "BlockIndex": 13172
  },
  {
    "SecondBlockToken": "ABgBAVmEd/pQ9VW9hWi0ujOAKcau0nUFC0
+eZ5ASVdWLXWwC04ijfoDTpTVZ",
    "BlockIndex": 13173
  },
  {
    "SecondBlockToken": "ABgBAT/jeN7w
+8ALuNdaiwXmsSfM6t0vMoLBLJ14LKvavw4IiB1d0iykWe6b",
    "BlockIndex": 13174
  },
  {
    "SecondBlockToken": "ABgBAXtGvUhTjjUqkwKXfXzyR2GpQei/
+pJSG/19ESwvt7Hd8GHaUqVs6Zf3",

```

```

        "BlockIndex": 13175
    }
],
"ExpiryTime": 1637648751.813,
"VolumeSize": 8
}

```

次に、同じコマンドを使用して、アーカイブするスナップショットとその直後に作成されたスナップショットとの間で異なるブロックを検索します。--first-snapshot-id に、アーカイブしたいスナップショットの ID を指定します。--second-snapshot-id に、アーカイブしたいスナップショットの直後に作成されたスナップショットの ID を指定します。

```

$ aws ebs list-changed-blocks --first-snapshot-id snapshot_to_archive --second-snapshot-id snapshot_created_after

```

たとえば、次のコマンドは、スナップショット snap-024f49fe8dd853fa8 (アーカイブしたいスナップショットの後に作成されたスナップショット) とスナップショット snap-09c9114207084f0d9 (アーカイブしたいスナップショット) の間で異なるブロックのブロックインデックスを表示します。

```

$ aws ebs list-changed-blocks --first-snapshot-id snap-09c9114207084f0d9 --second-snapshot-id snap-024f49fe8dd853fa8

```

以下に、一部のブロックが省略されたコマンド出力を示します。

```

{
  "BlockSize": 524288,
  "ChangedBlocks": [
    {
      "FirstBlockToken": "ABgBAVax0bHHBnTERu
+9USLxYK/81UT0dbSnkDk0gqwRFSFGWA7HYbkkAy5Y",
      "SecondBlockToken":
"ABgBASEvi9x80m7Htp37cKG2NT9XUzEbLHpGcayelomSoHpGy8LGyvG0yYfK",
      "BlockIndex": 4
    },
    {
      "FirstBlockToken": "ABgBAeL0mtX6aBAAt3EBy+8jFCESMpig7csfMrI4ufnQJT3XBm/
pwJZ1n2Uec",

```

```

    "SecondBlockToken": "ABgBAXmUTg6rAI
+v0LvekshbxCVpJjWILvxgC0AG0GQBEUNRVHkNABBwXLk0",
    "BlockIndex": 5
  },
  {
    "FirstBlockToken":
"ABgBATkwWkHKTcrhZmsfM7GbaHyXD1CtcnjIZv9YzisYsQTMHfTfh4AhS0s2",
    "SecondBlockToken": "ABgBAcmiPFovWgXQio
+VBrx0qGy4PKZ9SAAHaZ2HQBM9fQQU0+EXxQjVGv37",
    "BlockIndex": 13
  },
  {
    "FirstBlockToken":
"ABgBAbRlitCVI7c6hGsT4ckkKCw6bMRclnARrMt1hUbIhFnfz8kmUaZOP2ZE",
    "SecondBlockToken": "ABgBAXe935n544+rxhJ0INB8q7pAeoPZkkD27vkspE/
qKyv0wpozYII6UNCT",
    "BlockIndex": 14
  },
  {
    "FirstBlockToken": "ABgBAd+yxC026I
+1Nm2KmuKfrhjCkuaP6LXuol3opCNk6+XRGcct4suBHje1",
    "SecondBlockToken": "ABgBACppnXz821NtTvWBPTz8uUFXnS8jXubvghEjZulIjHgc
+7saWys77shb",
    "BlockIndex": 18
  },
  .....
  {
    "SecondBlockToken": "ABgBATni4sDE5rS8/a9pqV031U/1KCW
+CTxF13cQ5p2f2h1njpuUiGbqKGUa",
    "BlockIndex": 13190
  },
  {
    "SecondBlockToken": "ABgBARbXo7zFhu7IEQ/9VMYFCTCtCuQ
+iSlWvpBIshmeyeS5FD/M0i64U+a9",
    "BlockIndex": 13191
  },
  {
    "SecondBlockToken": "ABgBAZ8DhMk+rR0Xa4dZ1NK45rMYnVIGGSyTeiMli/sp/
JXUVZKJ9sMKIsGF",
    "BlockIndex": 13192
  },
  {
    "SecondBlockToken":
"ABgBATH6MBVE90416sq0C27s1nVntFUpDwiMcRWGyJHy8sIgL5yuYXHAvty",

```

```
        "BlockIndex": 13193
      },
      {
        "SecondBlockToken":
"ABgBARuZykaFBWpCWtJPXaPCneQMbyVgnITJqj4c1kJWPIj5Gn610Qyy+giN",
        "BlockIndex": 13194
      }
    ],
    "ExpiryTime": 1637692677.286,
    "VolumeSize": 8
  }
}
```

7. 前のステップで両方のコマンドで返された出力を比較します。両方のコマンド出力に同じブロックインデックスが表示される場合は、ブロックに参照されていないデータが含まれていることを示します。

例えば、前のステップのコマンド出力では、ブロック 4、5、13、14 がスナップショット snap-09c9114207084f0d9 に固有のものであり、スナップショットの系統の中で他のスナップショットから参照されていないことを示しています。

標準階層ストレージの削減を判断するには、両方のコマンド出力に表示されるブロック数に 512 KiB (スナップショットブロックサイズ) を掛けます。

たとえば、9,950 ブロックインデックスが両方のコマンド出力に表示されている場合、標準階層ストレージが約 4.85 GiB (9,950 ブロック * 512 KiB = 4.85 GiB) 減少することを示します。

8. 参照されていないブロックを標準階層に 90 日間格納するためのストレージコストを決定します。この値を、ステップ 1 で説明した完全なスナップショットをアーカイブ階層に格納するコストと比較します。最低 90 日間はアーカイブ階層から完全なスナップショットを復元しないことを前提として、値を比較することで、コスト削減を判断できます。詳細については、「[料金と請求](#)」を参照してください。

必要な IAM アクセス許可

デフォルトでは、ユーザーにはスナップショットのアーカイブを使う許可がありません。ユーザーがスナップショットのアーカイブを使用するには、特定のリソースと API アクションを使用する許可を付与する IAM ポリシーを作成する必要があります。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

スナップショットのアーカイブを使用するには、次の許可をユーザーに付与する必要があります。


- `ec2:DescribeSnapshotTierStatus`
- `ec2:ModifySnapshotTier`
- `ec2:RestoreSnapshotTier`

コンソールユーザーには、`ec2:DescribeSnapshots` のような追加の許可が必要になる場合があります。

暗号化されたスナップショットをアーカイブおよび復元するには、次の AWS KMS 追加許可が必要です。

- `kms:CreateGrant`
- `kms:Decrypt`
- `kms:DescribeKey`

以下は、暗号化されたスナップショットと暗号化されていないスナップショットをアーカイブ、復元、表示する許可を IAM ユーザーに付与する IAM ポリシーの例です。これには、コンソールユーザーの `ec2:DescribeSnapshots` 許可が含まれます。一部の許可が不要な場合は、ポリシーから削除できます。

 Tip

最小権限のプリンシパルに従うには、`kms:CreateGrant` へのフルアクセスを許可しないでください。代わりに、次の例に示すように、AWS のサービスによってユーザーに代わって許可が作成された場合にのみ、`kms:GrantIsForAWSResource` コンディションキーを使用して、KMS キーに許可を作成できるようにします。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:DescribeSnapshotTierStatus",
      "ec2:ModifySnapshotTier",
      "ec2:RestoreSnapshotTier",
      "ec2:DescribeSnapshots",
      "kms:CreateGrant",
```

```
        "kms:Decrypt",
        "kms:DescribeKey"
    ],
    "Resource": "*",
    "Condition": {
        "Bool": {
            "kms:GrantIsForAWSResource": true
        }
    }
}]
}
```

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- AWS IAM Identity Center のユーザーとグループ:

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[アクセス許可一式を作成](#)」の手順を実行します。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールの作成](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーが継承できるロールを作成します。手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー用ロールの作成](#)」を参照してください。
- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

スナップショットのアーカイブを使用する

トピック

- [スナップショットのアーカイブ](#)
- [アーカイブされたスナップショットの復元](#)
- [一時的に復元されたスナップショットの復元期間または復元タイプを変更する](#)
- [アーカイブされたスナップショットを表示する](#)

スナップショットのアーカイブ

アカウントで所有している `completed` の状態にあるあらゆるスナップショットをアーカイブすることができます。 `pending` または `error` の状態、または共有されているスナップショットにあるスナップショットはアーカイブできません。詳細については、「[考慮事項と制約事項](#)」を参照してください。

スナップショットが 1 つ以上の AMI に関連付けられている場合は、スナップショットをアーカイブする前に、関連付けられた AMI を無効にする必要があります。詳細については、「[AMI の無効化](#)」を参照してください。

アーカイブされたスナップショットは、スナップショット ID、暗号化ステータス、AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可、所有者情報、リソースタグを保持します。ただし、スナップショットをアーカイブすると、高速スナップショット復元とスナップショット共有は自動的に無効になります。

アーカイブの処理中も、スナップショットを引き続き使用できます。スナップショットの階層化ステータスが `archival-complete` の状態の場合、スナップショットは使用できません。

次のいずれかの方法を使用して、スナップショットをアーカイブします。

Console

スナップショットをアーカイブするには

Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

1. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
2. スナップショットのリストで、アーカイブするスナップショットを選択し、[Actions] (アクション)、[Archive snapshot] (スナップショットのアーカイブ) の順にクリックします。
3. 確定するには、[Archive snapshot] (スナップショットのアーカイブ) を選択します。

AWS CLI

スナップショットをアーカイブするには

[modify-snapshot-tier](#) AWS CLI コマンドを使用します。 `--snapshot-id` に、アーカイブするスナップショットの ID を指定します。 `--storage-tier` の場合、 `archive` を指定します。

```
$ aws ec2 modify-snapshot-tier \
```



```
--snapshot-id snapshot_id \  
--storage-tier archive
```

たとえば、次のコマンドは、スナップショット `snap-01234567890abcdef` をアーカイブします。

```
$ aws ec2 modify-snapshot-tier \  
--snapshot-id snap-01234567890abcdef \  
--storage-tier archive
```

次にコマンドの出力を示します。TieringStartTime レスポンスパラメータは、アーカイブプロセスが開始された日付と時刻を、UTC 時間形式 (YYYY-MM-DDTTH:MM:SSZ) で示します。

```
{  
  "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef",  
  "TieringStartTime": "2021-09-15T16:44:37.574Z"  
}
```

アーカイブされたスナップショットの復元

アーカイブされたスナップショットを使用するには、まずそのスナップショットを標準階層に復元する必要があります。復元されたスナップショットには、アーカイブされる前と同じスナップショット ID、暗号化ステータス、IAM アクセス許可、所有者情報、リソースタグがあります。復元後は、アカウント内の他のスナップショットと同じ方法で使用できます。復元されたスナップショットは、常に完全なスナップショットです。

スナップショットを復元するとき、そのスナップショットを永久にまたは一時的に復元することを選択できます。

スナップショットを永続的に復元すると、スナップショットはアーカイブ階層から標準階層に永続的に移動されます。スナップショットは、手動で再アーカイブするか、手動で削除するまで、復元され、使用可能な状態になります。スナップショットを永続的に復元すると、スナップショットはアーカイブ階層から削除されます。

スナップショットを一時的に復元すると、指定した復元期間中、スナップショットがアーカイブ階層から標準階層にコピーされます。スナップショットは復元されたままで、復元期間のみ使用できる状態になります。復元期間中、スナップショットのコピーはアーカイブ階層に残ります。期間が終了すると、スナップショットは標準階層から自動的に削除されます。復元期間中は、いつでも復元期間を

増減したり、復元タイプを永続的に変更したりすることができます。詳細については、「[一時的に復元されたスナップショットの復元期間または復元タイプを変更する](#)」を参照してください。

無効になっている AMI に関連付けられているスナップショットを復元してその AMI を使用する場合は、まず関連付けられたすべてのスナップショットを完全に復元し、その後「[無効化された AMI を再度有効にする](#)」必要があります。関連付けられたスナップショットが一時的に復元された場合、AMI を有効にすることはできません。次のコマンドを使用して AMI に関連付けられているすべてのスナップショットを検索できます。

```
$ C:\> aws ec2 describe-images --image-id ami_id \  
--query Images[*].BlockDeviceMappings[*].Ebs[].SnapshotId[]
```

次のいずれかの方法を使用して、アーカイブされたスナップショットを復元できます。

Console

アーカイブからスナップショットから復元するには

Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

1. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
2. スナップショットのリストで、復元するアーカイブされたスナップショットを選択し、[Action] (アクション)、[Restore snapshot from archive] (アーカイブからスナップショットを復元する) の順にクリックします。
3. 実行する復元のタイプを指定します。[Restore type] (復元タイプ) で、以下のいずれかを実行します。
 - スナップショットを永続的に復元するには、[Permanent] (永続) を選択します。
 - スナップショットを一時的に復元するには、[Temporary] (一時的)、[Temporary restore period] (一時復元期間) の順にクリックし、スナップショットを復元する日数を入力します。
4. 確定するには、[Restore snapshot] (スナップショットの復元) を選択します。

AWS CLI

アーカイブされたスナップショットを永続的に復元するには

[restore-snapshot-tier](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-id に、復元するスナップショットの ID を指定し、--permanent-restore オプションを含めます。

```
$ aws ec2 restore-snapshot-tier \  
--snapshot-id snapshot_id \  
--permanent-restore
```

たとえば、次のコマンドでは、スナップショット `snap-01234567890abcdef` を永続的に復元します。

```
$ aws ec2 restore-snapshot-tier \  
--snapshot-id snap-01234567890abcdef \  
--permanent-restore
```

次にコマンドの出力を示します。

```
{  
  "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef",  
  "IsPermanentRestore": true  
}
```

アーカイブされたスナップショットを一時的に復元するには

[restore-snapshot-tier](#) AWS CLI コマンドを使用します。 `--permanent-restore` オプションを省略します。 `--snapshot-id` に復元するスナップショットの ID を指定し、 `--temporary-restore-days` にスナップショットを復元する日数を指定します。

`--temporary-restore-days` は日単位で指定する必要があります。許容範囲は 1 ~ 180 です。値を指定しないと、デフォルトで 1 に設定されます。

```
$ aws ec2 restore-snapshot-tier \  
--snapshot-id snapshot_id \  
--temporary-restore-days number_of_days
```

たとえば、次のコマンドでは、スナップショット `snap-01234567890abcdef` を復元期間 5 日間で一時的に復元します。

```
$ aws ec2 restore-snapshot-tier \  
--snapshot-id snap-01234567890abcdef \  
--temporary-restore-days 5
```

次にコマンドの出力を示します。

```
{
  "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef",
  "RestoreDuration": 5,
  "IsPermanentRestore": false
}
```

一時的に復元されたスナップショットの復元期間または復元タイプを変更する

スナップショットを一時的に復元する場合は、スナップショットをアカウントに復元する日数を指定する必要があります。復元期間が過ぎると、スナップショットは標準階層から自動的に削除されます。

一時的に復元されたスナップショットの復元期間は、いつでも変更できます。

復元期間を増減するか、復元タイプを一時的から永続的に変更するかを選択できます。

復元期間を変更すると、新しい復元期間は現在の日付から有効になります。たとえば、新しい復元期間を 5 日間と指定すると、スナップショットは現在の日付から 5 日間復元されます。

Note

復元期間を 1 日に設定することで、一時的な復元を早期に終了できます。

復元タイプを一時から永続に変更すると、スナップショットコピーはアーカイブ階層から削除され、手動で再アーカイブまたは削除するまで、スナップショットはアカウントで引き続き使用できます。

スナップショットの復元期間は、次のいずれかの方法で変更できます。

Console

復元期間または復元タイプを変更するには

Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

1. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
2. スナップショットのリストで、以前に一時的に復元したスナップショットを選択し、[Actions] (アクション)、[Restore snapshot from archive] (アーカイブからスナップショットを復元する) の順にクリックします。
3. [Restore type] (復元タイプ) で、以下のいずれかを実行します。

- 復元タイプを一時的から永続的に変更するには、[Permanent] (永続) を選択します。
 - 復元期間を増減するには、[Temporary] (一時的) を保持し、次に[Temporary restore period] (一時復元期間) で、新しい復元期間を日単位で入力します。
4. 確定するには、[Restore snapshot] (スナップショットの復元) を選択します。

AWS CLI

復元期間または復元タイプを変更するには

[restore-snapshot-tier](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-id に、以前に一時的に復元したスナップショットの ID を指定します。復元タイプを一時的から永続的に変更するには、--permanent-restore を指定し、--temporary-restore-days は省略します。復元期間を増減するには、--permanent-restore を省略します。そして --temporary-restore-days で、新しい復元期間を日単位で指定します。

例: 復元期間を増減する

次のコマンドは、スナップショットの復元期間を snap-01234567890abcdef から 10 日間に変更します。

```
$ aws ec2 restore-snapshot-tier \  
--snapshot-id snap-01234567890abcdef \  
--temporary-restore-days 10
```

次にコマンドの出力を示します。

```
{  
  "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef",  
  "RestoreDuration": 10,  
  "IsPermanentRestore": false  
}
```

例: 復元タイプを永続に変更する

次のコマンドは、スナップショット snap-01234567890abcdef の復元タイプを一時的から永続的に変更します。

```
$ aws ec2 restore-snapshot-tier \  
--snapshot-id snap-01234567890abcdef \  
--permanent-restore
```

```
--snapshot-id snap-01234567890abcdef  
--permanent-restore
```

次にコマンドの出力を示します。

```
{  
  "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef",  
  "IsPermanentRestore": true  
}
```

アーカイブされたスナップショットを表示する

スナップショットのストレージ階層に関する情報は、次のいずれかの方法で表示できます。

Console

スナップショットのストレージ階層情報を表示するには

Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

1. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
2. スナップショットのリストで、スナップショットを選択し、[Storage tier] (ストレージ階層) タブを選択します。

タブは以下の情報を提供します。

- [Last tier change started on] (最後の階層変更の開始日時) — 前回のアーカイブまたは復元が始まった日時。
- [Tier change progress] (階層変更の進行状況) — 前回のアーカイブまたは復元アクションの進行状況 (パーセンテージ)。
- [Storage tier] (ストレージ階層) — スナップショットのストレージ階層。アーカイブされたスナップショットは常に archive、一時的に復元されたスナップショットを含め、標準階層に保存されたスナップショットは standard となります。
- [Tiering status] (階層化ステータス) — 前回のアーカイブまたは復元アクションのステータス。
- [Archive completed on] (アーカイブの完了日時) — アーカイブが完了した日時。
- [Temporary restore expires on] (一時的復元の有効期限) — 設定された一時的に復元されたスナップショットが期限切れになる日時

AWS CLI

アーカイブされたスナップショットに関するアーカイブ情報を表示するには

[describe-snapshot-tier-status](#) AWS CLI コマンドを使用します。snapshot-id フィルターを指定し、フィルター値にスナップショット ID を指定します。または、アーカイブされたすべてのスナップショットを表示するには、フィルターを省略します。

```
$ aws ec2 describe-snapshot-tier-status --filters "Name=snapshot-id,
Values=snapshot_id"
```

出力には、以下のレスポンスパラメータが含まれます。

- **Status**— スナップショットのステータス。アーカイブされたスナップショットはすべて `completed` になります。completed の状態にあるスナップショットのみアーカイブすることができます。
- **LastTieringStartTime** — アーカイブプロセスが開始した日と時刻のUTC 時間形式 (YYYY-MM-DDTHH:MM:SSZ)。
- **LastTieringOperationState** — アーカイブプロセスの現在の状態。状態には、`archival-in-progress` | `archival-completed` | `archival-failed` | `permanent-restore-in-progress` | `permanent-restore-completed` | `permanent-restore-failed` | `temporary-restore-in-progress` | `temporary-restore-completed` | `temporary-restore-failed` が含まれます。
- **LastTieringProgress** — スナップショットアーカイブプロセスの進行状況 (パーセント)。
- **StorageTier** — スナップショットのストレージ階層。アーカイブされたスナップショットは常に `archive`、一時的に復元されたスナップショットを含め、標準階層に保存されたスナップショットは `standard` となります。
- **ArchivalCompleteTime** — アーカイブプロセスの完了日時 (UTC 時間形式 (YYYY-MM-DDTHH:MM:SSZ))。

例

次のコマンドでは、スナップショット `snap-01234567890abcdef` に関する情報を表示します。

```
$ aws ec2 describe-snapshot-tier-status --filters "Name=snapshot-id,
Values=snap-01234567890abcdef"
```

次にコマンドの出力を示します。

```
{
  "SnapshotTierStatuses": [
    {
      "Status": "completed",
      "ArchivalCompleteTime": "2021-09-15T17:33:16.147Z",
      "LastTieringProgress": 100,
      "Tags": [],
      "VolumeId": "vol-01234567890abcdef",
      "LastTieringOperationState": "archival-completed",
      "StorageTier": "archive",
      "OwnerId": "123456789012",
      "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef",
      "LastTieringStartTime": "2021-09-15T16:44:37.574Z"
    }
  ]
}
```

アーカイブ階層と標準階層のスナップショットを表示するには

[describe-snapshot](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-ids に、スナップショットビューの ID を指定します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --snapshot-ids snapshot_id
```

たとえば、次のコマンドでは、スナップショット snap-01234567890abcdef に関する情報を表示します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --snapshot-ids snap-01234567890abcdef
```

次にコマンドの出力を示します。StorageTier レスポンスパラメータは、スナップショットが現在アーカイブされているかどうかを示します。archive は、スナップショットが現在アーカイブされ、アーカイブ階層に格納されていることを示します。standard は、スナップショットが現在アーカイブされておらず、標準階層に格納されていることを示します。

次の出力例では、Snap A がアーカイブされており、Snap B そして Snap C はアーカイブされていません。

また、RestoreExpiryTime レスポンスパラメータは、アーカイブから一時的に復元されるスナップショットに対してのみ返されます。これは、一時的に復元されたスナップショットが標

準階層から自動的に削除される時期を示します。永続的に復元されるスナップショットに対しては返されません。

次の出力例では、Snap C が一時的に復元され、2021-09-19T21:00:00.000Z (2021 年 9 月 19 日、21:00 UTC) に標準階層から自動的に削除されます。

```
{
  "Snapshots": [
    {
      "Description": "Snap A",
      "Encrypted": false,
      "VolumeId": "vol-01234567890aaaaaa",
      "State": "completed",
      "VolumeSize": 8,
      "StartTime": "2021-09-07T21:00:00.000Z",
      "Progress": "100%",
      "OwnerId": "123456789012",
      "SnapshotId": "snap-01234567890aaaaaa",
      "StorageTier": "archive",
      "Tags": []
    },
    {
      "Description": "Snap B",
      "Encrypted": false,
      "VolumeId": "vol-09876543210bbbbbb",
      "State": "completed",
      "VolumeSize": 10,
      "StartTime": "2021-09-14T21:00:00.000Z",
      "Progress": "100%",
      "OwnerId": "123456789012",
      "SnapshotId": "snap-09876543210bbbbbb",
      "StorageTier": "standard",
      "RestoreExpiryTime": "2019-09-19T21:00:00.000Z",
      "Tags": []
    },
    {
      "Description": "Snap C",
      "Encrypted": false,
      "VolumeId": "vol-054321543210cccccc",
      "State": "completed",
      "VolumeSize": 12,
      "StartTime": "2021-08-01T21:00:00.000Z",
      "Progress": "100%",
```

```
    "OwnerId": "123456789012",
    "SnapshotId": "snap-054321543210cccccc",
    "StorageTier": "standard",
    "Tags": []
  }
]
```

アーカイブ階層または標準階層に格納されているスナップショットのみを表示するには

[describe-snapshot](#) AWS CLI コマンドを使用します。--filter オプションを含め、フィルター名に storage-tier を指定し、フィルター値に対して archive または standard のいずれかを指定します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --filters "Name=storage-tier,Values=archive|standard"
```

たとえば、次のコマンドでは、アーカイブされたスナップショットだけを表示します。

```
$ aws ec2 describe-snapshots --filters "Name=storage-tier,Values=archive"
```

スナップショットのアーカイブをモニタリングする

Amazon EBS は、スナップショットアーカイブアクションに関連するイベントを発行します。AWS Lambda と Amazon CloudWatch Events を使用すると、イベント通知をプログラムで処理できます。イベントは、ベストエフォートベースで出力されます。詳細については、[Amazon CloudWatch Events ユーザーガイド](#)を参照してください。

利用できるイベントは次のとおりです。

- archiveSnapshot — スナップショットアーカイブアクションが成功または失敗したときに発行されます。

スナップショットアーカイブアクションが成功したときに発生するイベントの例を次に示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
```

```
"time": "2021-05-25T13:12:22Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef"
],
"detail": {
  "event": "archiveSnapshot",
  "result": "succeeded",
  "cause": "",
  "request-id": "123456789",
  "snapshot_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
  "startTime": "2021-05-25T13:12:22Z",
  "endTime": "2021-05-45T15:30:00Z",
  "recycleBinExitTime": "2021-10-45T15:30:00Z"
}
```

スナップショットアーカイブアクションが失敗した場合に発生するイベントの例を次に示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-05-25T13:12:22Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "archiveSnapshot",
    "result": "failed",
    "cause": "Source snapshot ID is not valid",
    "request-id": "1234567890",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "startTime": "2021-05-25T13:12:22Z",
    "endTime": "2021-05-45T15:30:00Z",
    "recycleBinExitTime": "2021-10-45T15:30:00Z"
  }
}
```

- `permanentRestoreSnapshot` — 永続復元アクションが成功または失敗したときに出力されません。

永続的な復元アクションが成功したときに発生するイベントの例を次に示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-05-25T13:12:22Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "permanentRestoreSnapshot",
    "result": "succeeded",
    "cause": "",
    "request-id": "1234567890",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "startTime": "2021-05-25T13:12:22Z",
    "endTime": "2021-10-45T15:30:00Z"
  }
}
```

永続的な復元アクションが失敗した場合に発生するイベントの例を次に示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-05-25T13:12:22Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "permanentRestoreSnapshot",
    "result": "failed",
    "cause": "Source snapshot ID is not valid",
    "request-id": "1234567890",
  }
}
```

```

    "snapshot_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "startTime": "2021-05-25T13:12:22Z",
    "endTime": "2021-05-45T15:30:00Z",
    "recycleBinExitTime": "2021-10-45T15:30:00Z"
  }
}

```

- `temporaryRestoreSnapshot` — 一時復元アクションが成功または失敗したときに出力されま

一時的な復元アクションが成功したときに発生するイベントの例を次に示します。

```

{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-05-25T13:12:22Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "temporaryRestoreSnapshot",
    "result": "succeeded",
    "cause": "",
    "request-id": "1234567890",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "startTime": "2021-05-25T13:12:22Z",
    "endTime": "2021-05-45T15:30:00Z",
    "restoreExpiryTime": "2021-06-45T15:30:00Z",
    "recycleBinExitTime": "2021-10-45T15:30:00Z"
  }
}

```

一時的な復元アクションが失敗した場合に発生するイベントの例を次に示します。

```

{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",

```

```
"account": "123456789012",
"time": "2021-05-25T13:12:22Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef"
],
"detail": {
  "event": "temporaryRestoreSnapshot",
  "result": "failed",
  "cause": "Source snapshot ID is not valid",
  "request-id": "1234567890",
  "snapshot_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
  "startTime": "2021-05-25T13:12:22Z",
  "endTime": "2021-05-45T15:30:00Z",
  "recycleBinExitTime": "2021-10-45T15:30:00Z"
}
}
```

- `restoreExpiry` — 一時的に復元されたスナップショットの復元期間の有効期限が切れたときに発行されます。

次に例を示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-05-25T13:12:22Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "restoreExpiry",
    "result": "succeeded",
    "cause": "",
    "request-id": "1234567890",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "startTime": "2021-05-25T13:12:22Z",
    "endTime": "2021-05-45T15:30:00Z",
    "recycleBinExitTime": "2021-10-45T15:30:00Z"
  }
}
```

```
}  
}
```

Amazon EBS スナップショットの削除

ボリュームの Amazon EBS スナップショットが不要になった場合は、これを削除できます。スナップショットを削除しても、ボリュームには影響しません。ボリュームを削除しても、そのボリュームが作成したスナップショットには影響しません。

増分スナップショットの削除

ボリュームのスナップショットを定期的に作成する場合、スナップショットは増分になります。最新のスナップショットを作成した時点から、デバイス上で変更があったブロックだけが、新しいスナップショットに保存されます。スナップショットの保存は増分ベースで行われるものの、最新のスナップショットさえあればボリュームを作成できるようにスナップショット削除プロセスは設計されています。

データが以前のスナップショットまたは一連のスナップショットに保持されているボリュームに存在し、後でボリュームから削除された場合、データは以前のスナップショットの一意のデータとみなされます。一意のデータは、一意のデータを参照するすべてのスナップショットが削除されない限り、一連のスナップショットから削除されません。

スナップショットを削除すると、そのスナップショットのみが参照するデータのみが削除されます。一意のデータは、それを参照するすべてのスナップショットが削除されるまで削除されません。ボリュームの過去のスナップショットを削除しても、そのボリュームのそれ以降のスナップショットからボリュームを作成する機能に影響することはありません。

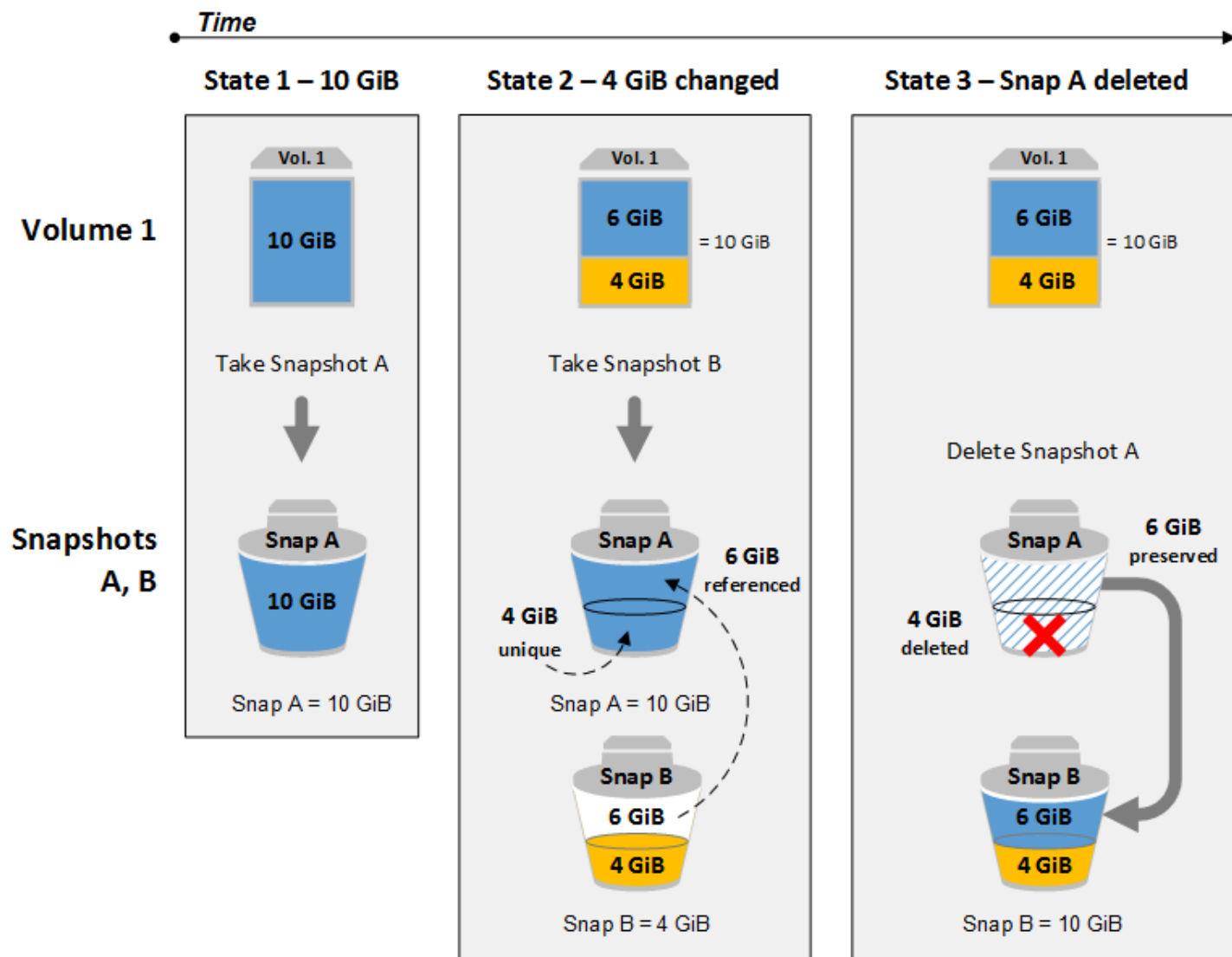
スナップショットを削除しても、組織のデータストレージコストが減少しない場合があります。他のスナップショットはそのスナップショットのデータを参照する場合があります。参照されたデータは常に保持されます。後から作成したスナップショットが使用しているデータを含むスナップショットを削除すると、参照されるデータに関連付けられたコストは後から作成されたスナップショットに割り当てられます。スナップショットにデータを保存する方法の詳細については、[スナップショットの仕組み](#)と次の例を参照してください。

次の図では、ボリューム 1 は 3 つの時点に示されています。スナップショットが最初の 2 つの状態をキャプチャし、3 つめでは、スナップショットが削除されています。

- 状態 1 では、ボリュームに 10 GiB のデータがあります。スナップ A がボリュームで作成された最初のスナップショットであるため、10 GiB のデータ全体をコピーする必要があります。

- 状態 2 では、ボリュームにはまだ 10 GiB のデータが含まれていますが、4 GiB 分が変更されました。スナップ B は、スナップ A が作成されたあとに変更された 4 GiB 分のみをコピーして格納する必要があります。すでにスナップ A にコピーおよび格納されている、変更がなかった残り 6 GiB 分のデータは、スナップ B によって、(再度) コピーされるのではなく、参照されます。これは点線の矢印によって示されます。
- 状態 3 では、ボリュームは状態 2 から変更されていませんが、スナップショット A は削除されています。スナップショット A に格納されている、スナップショット B によって参照された 6 GiB のデータは、大きい矢印に示されているように、スナップショット B に移動しました。その結果、未だに 10 GiB のデータを格納しなければなりません。スナップ A から保持されている、変更がなかった 6 GiB のデータと、スナップ B から変更があった 4 GiB のデータです。

別のスナップショットによって一部のデータが参照されているスナップショットの削除



考慮事項

スナップショットの削除には、次の考慮事項が適用されます。

- 登録済みの AMI によって使用されている EBS ボリュームのルートデバイスのスナップショットを削除することはできません。この考慮事項は、登録されている AMI が非推奨または無効になっている場合でも適用されます。スナップショットを削除するには、まず AMI の登録を解除する必要があります。詳細については、「[AMI の登録の解除](#)」を参照してください。
- Amazon EC2 AWS Backup を使用するサービスによって管理されているスナップショットは削除できません。代わりに、AWS Backup を使用してバックアップポールの対応するリカバリポイントを削除します。詳細については、「AWS Backup デベロッパーガイド」の「[Deleting backups](#)」(バックアップの削除)を参照してください。
- スナップショットを手動で作成、保持、削除することも、Amazon Data Lifecycle Manager を使用してスナップショットを管理することもできます。詳細については、[Amazon Data Lifecycle Manager](#)を参照してください。
- 進行中のスナップショットを削除することはできますが、スナップショットが完了しなければ削除は実行されません。これには時間がかかる場合があります。同時スナップショットの制限に達していて、追加のスナップショットを取得しようとする、ConcurrentSnapshotLimitExceeded エラーが発生することがあります。詳細については、Amazon Web Services 全般のリファレンスで Amazon EBS の「[Service Quotas](#)」を参照してください。
- ごみ箱の保存ルールに一致するスナップショットを削除すると、そのスナップショットはすぐに削除されるのではなく、ごみ箱に保持されます。詳細については、「[ごみ箱](#)」を参照してください。
- 無効化された EBS-backed の AMI に関連付けられているスナップショットは削除できません。詳細については、「[AMI の無効化](#)」を参照してください。

スナップショットを削除する

次のいずれかの方法でスナップショットを削除します。

Console

コンソールを使用してスナップショットを削除するには

- Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
- ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
- スナップショットを選択し、[Actions] (アクション)、[Delete snapshot] (スナップショットの削除) の順にクリックします。

4. [削除] をクリックします。

AWS CLI

を使用してスナップショットを削除するには AWS CLI

[delete-snapshot](#) コマンドを使用します。

Tools for Windows PowerShell

Windows 用ツールを使用してスナップショットを削除するには PowerShell

[Remove-EC2Snapshot](#) コマンドを実行します。

トラブルシューティングのヒント

スナップショットが現在 AMI によって使用されていることを示す Failed to delete snapshot エラーが表示された場合、スナップショットを削除する前に [関連付けられた AMI の登録を解除する](#) 必要があります。AMI に関連付けられているスナップショットを削除することはできません。

コンソールを使用していて、関連する AMI が無効になっている場合、無効になっている AMI を表示するには、[AMI] 画面の [無効化されたイメージ] フィルタを選択する必要があります。

マルチボリュームスナップショットの削除

マルチボリュームスナップショットを削除するには、スナップショットを作成したときにセットに適用したタグを使用して、マルチボリュームスナップショットセットのすべてのスナップショットを取得します。その後、スナップショットを個別に削除します。

マルチボリュームスナップショットセット内の個々のスナップショットの削除を妨げられることはありません。pending state の中にあるスナップショットを削除すると、そのスナップショットだけが削除されます。マルチボリュームスナップショットセット内の他のスナップショットは正常に完了します。

スナップショットライフサイクルの自動化

Amazon Data Lifecycle Manager を使用して、Amazon EBS ボリュームをバックアップするスナップショットの作成、保持、削除を自動化できます。

詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager](#)」を参照してください。

Amazon EBS 高速スナップショット復元

Amazon EBS 高速スナップショット復元 (FSR) を使用するとスナップショットからボリュームを作成でき、このボリュームは作成時に完全に初期化された状態になります。これにより、ブロックの初回アクセス時における I/O オペレーションのレイテンシーがなくなります。高速スナップショット復元を使用して作成されたすべてのボリュームでは、プロビジョンドパフォーマンスがすばやく実現されます。

開始するには、特定のアベイラビリティゾーンで特定のスナップショットの高速スナップショット復元を有効にします。スナップショットとアベイラビリティゾーンのペアごとに 1 つの高速スナップショット復元を参照します。高速スナップショット復元が有効になっているアベイラビリティゾーンの 1 つで、対応するスナップショットからボリュームを作成すると、ボリュームは高速スナップショット復元を使用して復元されます。

高速スナップショット復元は、スナップショットごとに明示的に有効化する必要があります。高速スナップショット復元が有効なスナップショットから復元されたボリュームから、新たにスナップショットを作成した場合でも、作成されたスナップショットの高速スナップショット復元は、自動的に有効化されません。新しいスナップショットの高速スナップショット復元は、明示的に有効にする必要があります。

高速スナップショット復元のパフォーマンスを十分に活用して復元できるボリュームの数は、スナップショットのボリューム作成クレジットの数によって決まります。詳細については、「[ボリューム作成クレジット](#)」を参照してください。

所有しているスナップショットに対しても、共有しているパブリックおよびプライベートスナップショットに対しても、高速スナップショット復元を有効にすることができます。

コンテンツ

- [考慮事項](#)
- [ボリューム作成クレジット](#)
- [高速スナップショット復元の管理](#)
- [高速スナップショット復元のモニタリング](#)
- [高速スナップショット復元のクォータ](#)
- [価格と請求](#)

考慮事項

- 高速スナップショット復元は、AWS Outposts、Local ゾーンおよび Wavelength ゾーンではサポートされていません。
- サイズが 16 TiB 以下のスナップショットで、スナップショットの高速復元を有効にできます。
- 最大 64,000 IOPS および 1,000 MiB/ 秒のスループットでプロビジョニングされたボリュームは、高速スナップショット復元の完全なパフォーマンス上の利点を享受します。64,000 IOPS または 1,000 MiB / 秒のスループットを超えるパフォーマンスでプロビジョニングされたボリュームの場合、完全なパフォーマンスを得るには、[ボリュームを初期化する](#) ことをお勧めします。

ボリューム作成クレジット

高速スナップショット復元のフルパフォーマンスの利点を享受するボリュームの数は、スナップショットのボリューム作成クレジットの数によって決まります。アベイラビリティゾーンごとにスナップショットあたり 1 つのクレジットバケットがあります。高速スナップショット復元を有効にしてスナップショットから作成するボリュームごとにクレジットバケットの 1 つのクレジットが消費されます。スナップショットから 1 つの初期化ボリュームを作成するには、バケットに少なくとも 1 つのクレジットが必要です。ボリュームの作成時、バケット内のクレジットが 1 つに満たない場合、この作成には、高速スナップショット復元のメリットを活用できません。

共有しているスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にすると、お客様のアカウントの共有スナップショット用に個別のクレジットバケットが割り当てられます。共有スナップショットからボリュームを作成する場合、クレジットはお客様のクレジットバケットから消費されます。スナップショット所有者のクレジットバケットからは消費されません。

クレジットバケットのサイズおよび補充レートは、スナップショットから作成したボリュームのサイズではなく、スナップショットのサイズによって決まります。

スナップショットの高速スナップショット復元を有効にすると、クレジットバケットはゼロクレジットから始まり、最大クレジット容量に達するまで設定されたレートで補充されます。また、クレジットを消費すると、クレジットバケットは、最大クレジット容量に達するまで時間の経過に伴って補充されます。

クレジットバケットの補充レートは次のように計算されます。

```
MIN (10, (1024 ÷ snapshot_size_gib))
```

クレジットバケットのサイズは、次のように計算されます。

```
MAX (1, MIN (10, (1024 ÷ snapshot_size_gib)))
```

例えば、スナップショットの高速スナップショット復元をサイズ 128 GiB を指定して有効にすると、補充レートは 0.1333 クレジット/分になります。

```
MIN (10, (1024 ÷ 128))  
= MIN (10, 8)  
= 8 credits per hour  
= 0.1333 credits per minute
```

クレジットバケットの最大サイズは、8 クレジットです。

```
MAX (1, MIN (10, (1024 ÷ 128)))  
= MAX (1, MIN (10, 8))  
= MAX (1, 8)  
= 8 credits
```

この例では、高速スナップショット復元を有効にすると、クレジットバケットはゼロクレジットで始まります。8 分後、クレジットバケットには初期化されたボリュームを 1 つ作成するのに十分なクレジット ($0.1333 \text{ credits} \times 8 \text{ minutes} = 1.066 \text{ credits}$) があります。クレジットバケットが満杯である場合、同時に 8 個の初期化ボリュームを作成できます (8 クレジット)。バケットが最大容量を下回ると、0.1333 クレジット/秒で補充されます。

CloudWatch メトリクスを使用して、クレジットバケットのサイズおよび各バケットで利用可能なクレジット数をモニタリングすることができます。詳細については、[高速スナップショット復元のメトリクス](#)を参照してください。

高速スナップショット復元を有効にしてスナップショットからボリュームを作成したら、[describe-volumes](#) を使用してボリュームを示し、高速スナップショット復元を使用して、ボリュームが初期化されたボリュームとして作成されたかどうかを、出力の `fastRestored` フィールドで確認することができます。

高速スナップショット復元の管理

トピック

- [高速スナップショット復元を有効または無効にする](#)
- [スナップショットの高速スナップショット復元の状態を表示する](#)

- [高速スナップショット復元を使用して復元したボリュームの表示](#)

高速スナップショット復元を有効または無効にする

デフォルトでは、高速スナップショット復元はスナップショットに対して無効になっています。高速スナップショット復元は、所有しているスナップショットおよび共有しているスナップショットに対して有効または無効にすることができます。スナップショットに対して高速スナップショット復元を有効または無効にすると、その変更はお客様のアカウントにのみ適用されます。

Note

スナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にすると、特定のアベイラビリティゾーンで高速スナップショット復元が有効になっている時間 (分単位) に対してお客様のアカウントに請求されます。最低料金として 1 時間分の料金が請求されます。

所有しているスナップショットを削除すると、お客様のアカウントのそのスナップショットに対して高速スナップショット復元が自動的に無効になります。共有しているスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にし、スナップショット所有者がそのスナップショットを削除または共有解除した場合、お客様のアカウントの共有スナップショットに対して高速スナップショット復元が自動的に無効になります。

共有しているスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にしており、そのスナップショットがカスタム CMK を使用して暗号化されている場合、スナップショット所有者がカスタム CMK に対するアクセス許可を取り消しても、スナップショットに対して高速スナップショット復元は自動的に無効になりません。そのスナップショットに対する高速スナップショット復元は手動で無効にする必要があります。

所有しているスナップショットまたは共有しているスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効または無効にするには、以下のいずれかの方法を使用します。

Console

高速スナップショット復元を有効または無効にするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
3. スナップショットを選択し、[Actions] (アクション)、[Manage fast snapshot restore] (高速スナップショット復元の管理) を選択します。

4. [高速スナップショット復元の設定] セクションには、選択したスナップショットの高速スナップショット復元を有効にできる、すべてのアベイラビリティゾーンが一覧表示されます。[Current status] (現在のステータス) のボリュームは、各ゾーンで高速スナップショット復元が現在有効か無効かを示します。

現在無効になっているゾーンで高速スナップショット復元を有効にするには、ゾーンを選択し、次に [Enable] (有効化) を選択し、[Enable] (有効化) を選択して確定します。

現在高速スナップショット復元が有効になっているゾーンで高速復元を無効にするには、[Disable] (無効) を選択します。

5. 必要な変更を行ったら、[Close] (閉じる) を選択します。

AWS CLI

AWS CLI を使用して高速スナップショット復元を管理するには

- [enable-fast-snapshot-restores](#)
- [disable-fast-snapshot-restores](#)
- [describe-fast-snapshot-restores](#)

Note

スナップショットの高速スナップショット復元を有効にすると、スナップショットは最適化中 (optimizing) 状態になります。optimizing の状態にあるスナップショットを使用しながらボリュームを復元することで、パフォーマンスに関する一定のメリットが得られます。高速スナップショット復元によるパフォーマンス上の最大限のメリットは、状態が enabled になったスナップショットでのみ提供されます。

スナップショットの高速スナップショット復元の状態を表示する

スナップショットの高速スナップショット復元は、以下のいずれかの状態になります。

- **enabling** — 高速スナップショット復元の有効化がリクエストされました。
- **optimizing** — 高速スナップショット復元の有効化中です。スナップショットの最適化には TiB あたり 60 分を要します。最適化されたスナップショットにより、ボリュームのリストア時のパフォーマンスに関し、一定のメリットが得られます。

- **enabled** — 高速スナップショット復元は有効になっています。十分なボリューム作成クレジットを持つ最適化されたスナップショットにより、ボリュームのリストア時のパフォーマンスに関し、最大限のメリットが得られます。
- **disabling** — 高速スナップショット復元の無効化がリクエストされました。または、高速スナップショット復元の有効化のリクエストが失敗しました。
- **disabled** — 高速スナップショット復元は無効になっています。高速スナップショット復元は必要に応じて再度有効にすることができます。

所有しているスナップショットまたは共有しているスナップショットの高速スナップショット復元の状態を表示するには、以下のいずれかの方法を使用します。

Console

コンソールを使用して高速スナップショット復元の状態を表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[スナップショット] を選択します。
3. スナップショットを選択します。
4. [Details] (詳細) タブの [Fast snapshot restore] (高速スナップショット復元) では、高速スナップショット復元の状態が表示されます。

AWS CLI

AWS CLI を使用して高速スナップショット復元が有効になっているスナップショットを表示するには

[describe-fast-snapshot-restores](#) コマンドを使用して、高速スナップショット復元が有効になっているスナップショットを参照します。

```
aws ec2 describe-fast-snapshot-restores --filters Name=state,Values=enabled
```

出力例を次に示します。

```
{
  "FastSnapshotRestores": [
    {
      "SnapshotId": "snap-0e946653493cb0447",
      "AvailabilityZone": "us-east-2a",
```



```

        "State": "enabled",
        "StateTransitionReason": "Client.UserInitiated - Lifecycle state
transition",
        "OwnerId": "123456789012",
        "EnablingTime": "2020-01-25T23:57:49.596Z",
        "OptimizingTime": "2020-01-25T23:58:25.573Z",
        "EnabledTime": "2020-01-25T23:59:29.852Z"
    },
    {
        "SnapshotId": "snap-0e946653493cb0447",
        "AvailabilityZone": "us-east-2b",
        "State": "enabled",
        "StateTransitionReason": "Client.UserInitiated - Lifecycle state
transition",
        "OwnerId": "123456789012",
        "EnablingTime": "2020-01-25T23:57:49.596Z",
        "OptimizingTime": "2020-01-25T23:58:25.573Z",
        "EnabledTime": "2020-01-25T23:59:29.852Z"
    }
]
}

```

高速スナップショット復元を使用して復元したボリュームの表示

該当するアベイラビリティゾーンで高速スナップショット復元が有効になっているスナップショットからボリュームを作成すると、ボリュームは高速スナップショット復元を使用して復元されます。

[describe-volumes](#) コマンドを使用して、高速スナップショット復元が有効になっているスナップショットから作成したボリュームを表示します。

```
aws ec2 describe-volumes --filters Name=fast-restored,Values=true
```

出力例を次に示します。

```

{
  "Volumes": [
    {
      "Attachments": [],
      "AvailabilityZone": "us-east-2a",
      "CreateTime": "2020-01-26T00:34:11.093Z",
      "Encrypted": true,

```

```
    "KmsKeyId": "arn:aws:kms:us-west-2:123456789012:key/8c5b2c63-b9bc-45a3-a87a-5513e232e843",
    "Size": 20,
    "SnapshotId": "snap-0e946653493cb0447",
    "State": "available",
    "VolumeId": "vol-0d371921d4ca797b0",
    "Iops": 100,
    "VolumeType": "gp2",
    "FastRestored": true
  }
]
```

高速スナップショット復元のモニタリング

スナップショットに対する高速スナップショット復元の状態が変わると、Amazon EBS によって Amazon CloudWatch Events が発行されます。詳細については、「[EBS 高速スナップショット復元 イベント](#)」を参照してください。

高速スナップショット復元のクォータ

高速スナップショット復元は、リージョンあたり最大 5 個のスナップショットに対して有効にすることができます。このクォータは、所有しているスナップショットおよび共有しているスナップショットに適用されます。共有しているスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にすると、お客様の高速スナップショット復元のクォータにカウントされます。スナップショット所有者の高速スナップショット復元のクォータにはカウントされません。

価格と請求

特定の Availability Zone でスナップショットの高速スナップショット復元を有効にしている時間中は、請求が発生します。料金は 1 時間を最小として時間単位で計算されます。

例えば、US-East-1a で 1 か月 (30 日間) にわたって 1 つのスナップショットのスナップショット高速復元を有効にすると、料金は 540 ドル になります (1 スナップショット x 1 AZ x 720 時間 x 1 時間あたり \$0.75)。us-east-1a、us-east-1b、us-east-1c で同じ期間にわたって 2 つのスナップショットの高速スナップショット復元を有効にすると、料金は 3240 USD になります (2 スナップショット x 3 AZ x 720 時間 x 1 時間あたり \$0.75)。

共有されているパブリックまたはプライベートスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にすると、お客様のアカウントに請求されます。スナップショット所有者には請求されま

せん。共有しているスナップショットがスナップショット所有者によって削除または共有解除されると、高速スナップショット復元がお客様のアカウントのスナップショットに対して無効になり、請求が停止されます。

詳細については、[Amazon EBS の料金表](#)を参照してください。

Amazon EBS スナップショットのロック

Amazon EBS スナップショットをロックして、偶発的または悪意のある削除から保護したり、WORM (write-once-read-many) 形式で特定の期間保存したりできます。スナップショットがロックされている期間は、付与されている IAM アクセス許可に関係なく、どのユーザーもスナップショット削除することはできません。ロックされたスナップショットは、他のスナップショットと同じ方法で引き続き使用できます。

Note

スナップショットロックは、SEC 17a-4、CFTC、および FINRA 規制の対象となる環境での使用について、Cohasset Associates によって評価済みです。スナップショットロックとこれらの規制との関係の詳細については、「[Cohasset Associates Compliance Assessment](#)」を参照してください。

スナップショットは、コンプライアンスモードとガバナンスモードのいずれかを使用してロックでき、特定の期間または特定の日付までロックできます。詳細については、「[ロックモード](#)」および「[ロック期間](#)」を参照してください。

料金

スナップショットは、追加料金なしでロックおよびロック解除できます。ロックされたスナップショットについては、Amazon EBS スナップショットの標準ストレージコストをお支払いいただきます。

トピック

- [Amazon EBS Snapshot Lock の概念](#)
- [Amazon EBS Snapshot Lock の考慮事項](#)
- [Amazon EBS Snapshot Lock の必要な許可](#)
- [Amazon EBS Snapshot Lock の使用](#)

- [を使用して Amazon EBS スナップショットロックをモニタリングする AWS CloudTrail](#)
- [Amazon を使用して Amazon EBS スナップショットロックを監視する EventBridge](#)

Amazon EBS Snapshot Lock の概念

次の内容は、Snapshot Lock の使用を開始する際に理解しておくべき重要な概念を示します。

目次

- [ロックモード](#)
- [ロック期間](#)
- [クーリングオフ期間](#)
- [ロック状態](#)

ロックモード

次の 2 つのモードのいずれかでスナップショットをロックできます。

ガバナンスモード

スナップショットがロックされた後、適切な IAM アクセス許可を持つユーザーは、スナップショットのロック解除ならびにロックモードおよびロック期間または有効期限の変更をいつでも行うことができます。ガバナンスモードでスナップショットをロックすると、そのスナップショットは直ちにロックされ、クーリングオフ期間はありません。ガバナンスモードでロックされたスナップショットを削除するには、まずスナップショットをロック解除するか、ロックの有効期限が切れるまで待つ必要があります。

ガバナンスモードを使用すると、特定のユーザーだけがスナップショットのロック解除やスナップショットのロック設定の変更を行えるようになるため、組織のデータガバナンス要件を満たすことができます。コンプライアンスモードでスナップショットをロックする前に、ガバナンスモードを使用してロック設定をテストすることもできます。

コンプライアンスモード

コンプライアンスモードでスナップショットをロックする場合、スナップショットをロックした直後に開始されるクーリングオフ期間をオプションで指定できます。クーリングオフ期間中、適切なアクセス許可を持つユーザーは、スナップショットのロック解除、ロックモードの変更、クーリングオフ期間の延長または短縮、およびロック期間または有効期限の延長または短縮を行うことができます。

クーリングオフ期間が終了すると、スナップショットのロック解除、ロックモードの変更、またはロック期間もしくは有効期限の短縮はできなくなります。ただし、ロック期間または有効期限の延長については行うことができます。コンプライアンスモードでロックされたスナップショットをクーリングオフ期間が終了した後に削除するには、ロックの有効期限が切れるまで待つ必要があります。

Note

リクエストのクーリングオフ期間を省略すると、クーリングオフ期間を設定していないコンプライアンスモードでスナップショットをロックできます。この場合、ロックは直ちに有効になり、スナップショットのロック解除、ロックモードの変更、またはロック期間もしくは有効期限の短縮はできなくなります。ただし、ロック期間または有効期限の延長については行うことができます。

コンプライアンスモードを使用すると、コンプライアンス上の理由から特定の期間削除すべきではないスナップショットを保護できます。コンプライアンスモードには、次の利点があります。

- スナップショットの WORM (Write Once Read Many) 設定が有効になります。
- スナップショットを偶発的または悪意のある削除から保護する追加の防御レイヤーを提供します。
- 保持期間を適用して特権ユーザーによる早期削除を防止し、組織のデータ保護ポリシーと手順を満たします。

Note

コンプライアンスモードでロックされたスナップショットをロックの有効期限が切れる前に削除する唯一の方法は、関連するアカウントを閉鎖することです。AWS

ロック期間

ロック期間とは、スナップショットのロック状態を継続できる期間のことです。ロック期間は、次のいずれかで指定できますが、両方での指定はできません。

日数

ロック期間は、スナップショットのロック状態を継続する日数で指定できます。指定した日数が経過すると、スナップショットは自動的にロック解除されます。期間は、1日から36,500日(100年)の範囲で設定できます。

ロックの有効期限

ロック期間は、将来の有効期限日によって決定できます。スナップショットのロック状態は、ロックの有効期限日を過ぎるまで継続します。ロックの有効期限日を過ぎると、スナップショットは自動的にロック解除されます。

クーリングオフ期間

クーリングオフ期間は、コンプライアンスモードでスナップショットをロックするときに指定できるオプションの期間です。クーリングオフ期間中、適切なアクセス許可を持つユーザーは、スナップショットのロック解除、ロックモードの変更、クーリングオフ期間の延長または短縮、およびロック期間の延長または短縮を行うことができます。クーリングオフ期間が終了すると、ユーザーは、付与されているアクセス許可に関係なく、スナップショットのロック解除、ロックモードの変更、クーリングオフ期間の復元、またはロック期間の短縮を行うことができなくなります。

クーリングオフ期間中は、スナップショットを削除できません。

指定した場合、クーリングオフ期間はスナップショットをロックした直後に開始されます。省略した場合、スナップショットは直ちに、クーリングオフ期間を設定していないコンプライアンスモードでロックされます。

クーリングオフ期間は 1~72 時間の範囲で設定できます。クーリングオフ期間を設定していないコンプライアンスモードでスナップショットを直ちにロックする場合は、リクエストのクーリングオフ期間を指定しないでください。

ロック状態

スナップショットロックは、次に示す状態のいずれかになります。

- `compliance-cooloff` – スナップショットはコンプライアンスモードでロックされていますが、まだクーリングオフ期間内です。スナップショットの削除はできませんが、ロックの解除や適切なアクセス許可を持つユーザーによるロック設定の変更は可能です。
- `governance` – スナップショットはガバナンスモードでロックされています。スナップショットの削除はできませんが、ロックの解除や適切なアクセス許可を持つユーザーによるロック設定の変更は可能です。
- `compliance` – スナップショットがクーリングオフ期間を設定していないコンプライアンスモードでロックされているか、クーリングオフ期間が切れています。スナップショットのロックを解除したり、削除したりすることはできません。ロック期間を延長できるのは、適切なアクセス許可を持つユーザーだけです。

- expired – スナップショットはコンプライアンスモードまたはガバナンスモードでロックされていますが、ロックの有効期限が切れています。スナップショットはロックされていないため、削除できます。

Amazon EBS Snapshot Lock の考慮事項

- スナップショットは、pending または completed 状態にある場合にのみロックできます。
 - スナップショットが pending 状態にあるときにロックし、一定期間ロックした場合、ロック期間はスナップショットが completed 状態に到達したときにのみ開始されます。スナップショットが pending 状態にあるときは削除できません。
 - スナップショットが pending 状態にあるときにロックし、何らかの理由でスナップショットの作成に失敗すると、ロックはキャンセルされます。
- クーリングオフ期間の終了後に、コンプライアンスモードでロックされているスナップショットのロック期間を延長した場合、別のクーリングオフ期間を指定することはできません。クーリングオフ期間を指定すると、リクエストは失敗します。
- アーカイブされたスナップショットはロックできます。また、ロックされたスナップショットはアーカイブできます。
- AMI に関連付けられているスナップショットはロックできます。
- ロックされたスナップショットが関連付けられている AMI を登録解除できます。
- ロックされたスナップショットの暗号化に使用された KMS キーを削除できます。
- で作成されたスナップショットはロックしないことをお勧めします。AWS Backup AWS Backup 保存期間が切れる前にスナップショットが削除されないことをすでに確認しています。で管理されるスナップショットのセキュリティをさらに強化するには AWS Backup、Vault Lock AWS Backup を使用することをおすすめします。詳細については、「[AWS Backup Vault Lock](#)」を参照してください。
- スナップショットの作成中や AMI の登録中にスナップショットをロックすることはできません。
- AWS Outposts上で、ローカルの Amazon EBS スナップショットをロックすることはできません。
- コンプライアンスモードでロックされたスナップショットをロックの有効期限が切れる前に削除する唯一の方法は、AWS 関連するアカウントを閉鎖することです。

AWS スナップショットをロックしている間にアカウントを閉鎖した場合、スナップショットはそのままアカウントを 90 AWS 日間停止します。90 日以内にアカウントを再開しない場合、AWS スナップショットはロックされていても削除されます。

Amazon EBS Snapshot Lock の必要な許可

デフォルトでは、ユーザーにはスナップショットロックを使用する許可はありません。ユーザーがスナップショットロックを使用するには、特定のリソースと API アクションを使用する許可を付与する IAM ポリシーを作成する必要があります。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

トピック

- [必要なアクセス許可](#)
- [条件キーでアクセスを制限します。](#)

必要なアクセス許可

スナップショットロックを使用するには、次の許可をユーザーに付与する必要があります。

- `ec2:LockSnapshot` – スナップショットをロックします。
- `ec2:UnlockSnapshot` – スナップショットのロックを解除します。
- `ec2:DescribeLockedSnapshots` – スナップショットロック設定を表示します。

以下は、スナップショットをロックおよびロック解除したり、スナップショットロック設定を表示したりする許可をユーザーに付与する IAM ポリシーの例です。これには、コンソールユーザーの `ec2:DescribeSnapshots` 許可が含まれます。一部の許可が不要な場合は、ポリシーから削除できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:LockSnapshot",
      "ec2:UnlockSnapshot",
      "ec2:DescribeLockedSnapshots",
      "ec2:DescribeSnapshots"
    ]
  }]
}
```

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- 以下のユーザーとグループ: AWS IAM Identity Center

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールの作成](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーが担当できるロールを作成します。手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー用ロールの作成](#)」を参照してください。
- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

条件キーでアクセスを制限します。

条件キーを使用して、スナップショットをロックする方法を制限できます。

トピック

- [ec2: SnapshotLockDuration](#)
- [EC2: CoolOffPeriod](#)

ec2: SnapshotLockDuration

ec2:SnapshotLockDuration 条件キーを使用すると、スナップショットをロックするときにユーザーが指定できるロック期間を制限できます。

次のポリシー例では、ユーザーが指定できるロック期間を 10~50 日に制限しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:LockSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:region::snapshot/*"
      "Condition": {
```

```
    "NumericGreaterThan" : {
      "ebs:SnapshotLockDuration" : 10
    }
    "NumericLessThan":{
      "ebs:SnapshotLockDuration": 50
    }
  }
}
]
```

EC2: CoolOffPeriod

ec2:CoolOffPeriod 条件キーを使用すると、ユーザーがクーリングオフ期間を設定していないコンプライアンスモードでスナップショットをロックできないようにすることができます。

以下のポリシー例では、コンプライアンスモードでスナップショットをロックする際、ユーザーがクーリングオフ期間を 48 時間より長く指定することを制限しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:LockSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:region::snapshot/*"
      "Condition": {
        "NumericGreaterThan": {
          "ec2:CoolOffPeriod": 48
        }
      }
    }
  ]
}
```

Amazon EBS Snapshot Lock の使用

次の手順に従って Amazon EBS Snapshot Lock を使用します。

タスク

- [スナップショットのロック](#)

- [スナップショットをロック解除する](#)
- [スナップショットのロック設定を更新する](#)
- [スナップショットロック設定を表示する](#)

スナップショットのロック

pending または completed 状態にあるスナップショットはロックできます。詳細については、「[Amazon EBS Snapshot Lock の考慮事項](#)」を参照してください。

Console

スナップショットをロックするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
3. ロックするスナップショットを選択し、[アクション]、[スナップショット設定]、[スナップショットロックの管理] の順に選択します。
4. [スナップショットをロック] を選択します。
5. [ロックモード] には、[ガバナンスモード] または [コンプライアンスモード] のいずれかを選択します。詳細については、「[ロックモード](#)」を参照してください。
6. [ロック期間] では、次のいずれかの操作を行います。
 - スナップショットを特定の期間ロックするには、[スナップショットのロック期間] を選択し、期間を日単位または年単位で入力します。
 - スナップショットを特定の日付と時刻までロックするには、[スナップショットのロック期間終了日] を選択し、有効期限の日付と時刻を選択します。

詳細については、「[ロック期間](#)」を参照してください。

7. (コンプライアンスモードのみ) [クーリングオフ期間] には、スナップショットのロックを解除してロック設定を変更できるクーリングオフ期間を指定します。詳細については、「[クーリングオフ期間](#)」を参照してください。
8. (コンプライアンスモードのみ) スナップショットをコンプライアンスモードでロックし、クーリングオフ期間が終了した後はスナップショットのロック解除ができなくなることを確認するには、[確認] を選択します。
9. [ロック設定を保存] を選択します。

AWS CLI

ガバナンスモードでスナップショットをロックするには

[lock-snapshot](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-id には、ロックするスナップショットの ID を指定します。--lock-mode の場合、governance を指定します。スナップショットを特定の期間ロックする場合は、--lock-duration にスナップショットをロックする期間を指定します。または、スナップショットを特定の日付までロックする場合は、--expiration-date にロックの有効期限が切れる日付と時刻を UTC タイムゾーン (YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssZ) で指定します。

```
$ aws ec2 lock-snapshot --snapshot-id snapshot_id \  
--lock-mode governance \  
--lock-duration 1-36500_days | --expiration-date YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssZ
```

スナップショットをコンプライアンスモードでロックするには

[lock-snapshot](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-id には、ロックするスナップショットの ID を指定します。--lock-mode の場合、compliance を指定します。--cool-off-period には、必要に応じてクーリングオフ期間を時間単位で指定します。スナップショットを特定の期間ロックする場合は、--lock-duration にスナップショットをロックする期間を指定します。または、スナップショットを特定の日付までロックする場合は、--expiration-date にロックの有効期限が切れる日付と時刻を UTC タイムゾーン (YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssZ) で指定します。

```
$ aws ec2 lock-snapshot --snapshot-id snapshot_id \  
--lock-mode compliance \  
--cool-off-period 1-72_hours \  
--lock-duration 1-36500_days | --expiration-date YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssZ
```

スナップショットをロック解除する

スナップショットをロック解除できるのは、スナップショットがガバナンスモードでロックされている場合、またはコンプライアンスモードでロックされていても、まだクーリングオフ期間内である場合のみです。

Console

スナップショットをロック解除するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
3. ロックを解除するスナップショットを選択し、[アクション]、[スナップショット設定]、[スナップショットロックの管理] の順に選択します。
4. [スナップショットのロック解除] を選択し、もう一度 [スナップショットのロック解除] を選択して確定します。

AWS CLI

スナップショットをロック解除するには

[unlock-snapshot](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-id には、ロック解除するスナップショットの ID を指定します。

```
$ aws ec2 unlock-snapshot --snapshot-id snapshot_id
```

スナップショットのロック設定を更新する

許可される更新内容はロック状態によって異なります。

- `governance` – ロックモードの変更およびロック期間または有効期限日の延長または短縮を行うことができます。
- `compliance-cooloff` – ロックモードの変更、クーリングオフ期間の延長または短縮、およびロック期間または有効期限日の延長または短縮を行うことができます。
- `compliance` – ロック期間または有効期限日の延長のみ行うことができます。

Console

スナップショットロック設定を更新するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。

3. ロック設定を変更するスナップショットを選択し、[アクション]、[スナップショット設定]、[スナップショットロックの管理] の順に選択します。
4. 必要に応じて設定を更新し、[ロック設定を保存] を選択します。

AWS CLI

スナップショットロック設定を更新するには

[lock-snapshot](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-id には、ロック設定を更新するスナップショットの ID を指定します。次に、変更するオプションのみを指定します。

スナップショットロック設定を表示する

スナップショットのロック設定を表示するには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

スナップショットロック設定を表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Snapshots] を選択します。
3. ロック設定を表示するスナップショットを選択し、[アクション]、[スナップショット設定]、[スナップショットロックの管理] の順に選択します。

AWS CLI

スナップショットロック設定を表示するには

[describe-locked-snapshots](#) コマンドを使用します。AWS CLI --snapshot-ids には、ロック設定を表示するスナップショットの ID を指定します。

```
$ aws ec2 describe-locked-snapshots --snapshot-ids snapshot_id
```

を使用して Amazon EBS スナップショットロックをモニタリングする AWS CloudTrail

コンソールからの呼び出しや API へのコード呼び出しを含め、Snapshot Lock の API コールをイベントとしてモニタリングできます。によって収集された情報を使用して CloudTrail、実行された要求、要求が行われた IP アドレス、要求の実行者、実行日時、その他の詳細情報を確認できます。

詳細については、「[AWS CloudTrailを使用した API コールのログ記録](#)」を参照してください。

Amazon を使用して Amazon EBS スナップショットロックを監視する EventBridge

Amazon EBS は、スナップショットロックアクションに関連するイベントを発行します。AWS Lambda と Amazon を使用して、EventBridge イベント通知をプログラムで処理できます。イベントは、ベストエフォートベースで発生します。詳細については、[Amazon EventBridge ユーザーガイドを参照してください](#)。

以下のイベントが発生します。

- ガバナンスモードまたはコンプライアンスモードで正常にロックされたスナップショット。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-01234-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "lockSnapshot",
    "result": "succeeded",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "source": "012345678901",
    "lockState": "compliance-cooloff",
    "lockCreatedOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "lockExpiresOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "lockDuration": 123,
```

```

    "lockStartDurationTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "coolOffPeriod": 24,
    "coolOffPeriodExpiresOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ"
  }
}

```

- スナップショットが pending 状態にあるときにロックされ、completed 状態に到達しなかった場合のロック失敗イベント。

```

{
  "version": "0",
  "id": "01234567-01234-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "lockSnapshot",
    "result": "failed",
    "cause": "snapshot failed",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "lockState": "pending-compliance",
    "lockCreatedOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "lockDuration": 123,
    "lockStartDurationTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "coolOffPeriod": 24,
    "coolOffPeriodExpiresOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ"
  }
}

```

- ロックの有効期限切れ

```

{
  "version": "0",
  "id": "01234567-01234-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",

```



```

"region": "us-east-1",
"resources": [
  "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef"
],
"detail": {
  "event": "lockDurationExpiry",
  "result": "succeeded",
  "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef",
  "lockState": "expired",
  "lockCreatedOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "lockExpiresOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "lockDuration": 123
}
}

```

- コンプライアンスモードでのロック後、クーリングオフ期間が終了。

```

{
  "version": "0",
  "id": "01234567-01234-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef"
  ],
  "detail": {
    "event": "cooloffperiodExpiry",
    "result": "succeeded",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567890abcdef",
    "lockState": "compliance",
    "lockCreatedOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "lockExpiresOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "lockDuration": 123,
    "lockStartDurationTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "cooloffPeriod": 24,
    "cooloffPeriodExpiresOn": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ"
  }
}

```

スナップショットのパブリックアクセスのブロック

スナップショットがパブリックに共有されないようにするために、スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にします。リージョンでスナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にすると、そのリージョンでスナップショットをパブリックに共有しようとする試みは自動的にブロックされます。これにより、スナップショットのセキュリティを強化し、スナップショットデータを不正アクセスや意図しないアクセスから保護することができます。

スナップショットのブロックパブリックアクセスは、次の2つのモードのいずれかで有効にできます。

- すべての共有をブロック – スナップショットのパブリック共有をすべてブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。また、既にパブリックに共有されていたスナップショットはプライベートとして扱われ、一般公開されなくなります。
- 新しい共有をブロック – スナップショットの新しいパブリック共有のみをブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。ただし、既にパブリックに共有されていたスナップショットは、引き続き一般公開されます。

料金

スナップショットのブロックパブリックアクセスは、追加料金なしで有効にできます。

目次

- [考慮事項](#)
- [IAM アクセス許可](#)
- [スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にする](#)
 - [スナップショットのパブリックアクセスの設定](#)
 - [スナップショットのブロックパブリックアクセスの設定を表示する](#)
 - [スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にする](#)
- [Amazon を使用してスナップショットのパブリックアクセスを監視、ブロック EventBridge](#)

考慮事項

- スナップショットのブロックパブリックアクセスを使用しても、プライベートスナップショットの共有は妨げられません。

- スナップショットのブロックパブリックアクセスが [すべての共有をブロック] モードで有効になっても、すでにパブリックに共有されているスナップショットのアクセス許可は変更されません。代わりに、これらのスナップショットが一般に公開されたり、パブリックアクセスされたりすることを防ぎます。したがって、これらのスナップショットの属性は、一般公開されていないにもかかわらず、パブリックに共有されていることを示します。
- スナップショットのブロックパブリックアクセスが [すべての共有をブロック] モードで有効になっている場合に、モードを [新しい共有をブロック] に変更するか、ブロックパブリックアクセスを無効にすると、それまでパブリックに共有されていたスナップショットはすべてプライベートとして扱われなくなり、再びパブリックアクセスが可能になります。
- スナップショットのブロックパブリックアクセスは、リージョンごとに設定が必要となります。この設定は、有効になっているリージョンのすべてのスナップショットに適用されます。スナップショットのパブリック共有を防ぐ必要があるリージョンごとに、スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にする必要があります。
- ブロックパブリックアクセスは、アカウントレベルの設定が必要となります。この設定は、管理者ユーザーを含むアカウントのすべてのユーザーに適用されます。スナップショットのブロックパブリックアクセスを組織レベルで有効にすることはできません。
- スナップショットのブロックパブリックアクセスを使用しても、EBS-backed AMI のパブリック共有を防ぐことはできません。スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にしても、ユーザーは EBS-backed AMI をパブリックに共有できます。EBS-backed AMI がパブリックに共有されている場合、その AMI にアクセスできるユーザーは、関連付けられたスナップショットからボリュームを作成できます。AMI のパブリック共有を防ぐには、[AMI のパブリックアクセスのブロック](#)を有効にします。
- ローカルスナップショットがオンの場合、スナップショットへのパブリックアクセスをブロックすることはできません。AWS Outposts

IAM アクセス許可

デフォルトでは、ユーザーにはスナップショットのブロックパブリックアクセスを使用する許可はありません。ユーザーがスナップショットのブロックパブリックアクセスを使用するには、特定の API アクションを使用する許可を付与する IAM ポリシーを作成する必要があります。ポリシーを作成したら、ユーザー、グループ、ロールに許可を追加します。

スナップショットのブロックパブリックアクセスを使用するには、次の許可をユーザーに付与する必要があります。

- `ec2:EnableSnapshotBlockPublicAccess` – スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にし、モードを変更します。
- `ec2:DisableSnapshotBlockPublicAccess` – スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にします。
- `ec2:GetSnapshotBlockPublicAccessState` – リージョンのスナップショット設定のブロックパブリックアクセスを表示します。

IAM ポリシーの例を次に示します。一部の許可が不要な場合は、ポリシーから削除できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:EnableSnapshotBlockPublicAccess",
      "ec2:DisableSnapshotBlockPublicAccess",
      "ec2:GetSnapshotBlockPublicAccessState"
    ],
    "Resource": "*"
  }]
}
```

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- 以下のユーザーとグループ: AWS IAM Identity Center

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールの作成](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーが担当できるロールを作成します。手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー用ロールの作成](#)」を参照してください。
- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にする

以下の手順を実行すると、スナップショットのブロックパブリックアクセスを設定およびモニタリングできます。

タスク

- [スナップショットのパブリックアクセスの設定](#)
- [スナップショットのブロックパブリックアクセスの設定を表示する](#)
- [スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にする](#)

スナップショットのパブリックアクセスの設定

スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にして、リージョン内でのスナップショットのパブリック共有を防ぎます。この機能を有効にすると、リージョン内でスナップショットをパブリックに共有するリクエストはブロックされます。

Important

スナップショットのブロックパブリックアクセスが [すべての共有をブロック] モードで有効になっている場合に、新しい共有をブロックするようにモードを変更すると、それまでパブリックに共有されていたスナップショットはすべてプライベートとして扱われなくなり、再びパブリックアクセスが可能になります。

Console

スナップショットのブロックパブリックアクセスを設定するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [EC2 ダッシュボード] を選択し、[アカウントの属性] (右側) で [データ保護とセキュリティ] を選択します。
3. [EBS スナップショットのブロックパブリックアクセス] セクションで [管理] を選択します。
4. [パブリックアクセスをブロック] を選択し、次のオプションのいずれかを選択します。
 - [パブリックアクセスをすべてブロック] – スナップショットのパブリック共有をすべてブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。

ん。また、既にパブリックに共有されていたスナップショットはプライベートとして扱われ、一般公開されなくなります。

- [新しいパブリック共有をブロック] – スナップショットの新しいパブリック共有のみをブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。ただし、既にパブリックに共有されていたスナップショットは、引き続き一般公開されます。

5. [更新] を選択します。

AWS CLI

スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にまたは変更するには

[enable-snapshot-block-public-access](#) コマンドを使用してください。--state に、次のいずれかの値を指定します。

- `block-all-sharing` – スナップショットのパブリック共有をすべてブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。また、既にパブリックに共有されていたスナップショットはプライベートとして扱われ、一般公開されなくなります。
- `block-new-sharing` – スナップショットの新しいパブリック共有のみをブロックします。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。ただし、既にパブリックに共有されていたスナップショットは、引き続き一般公開されます。

```
aws ec2 enable-snapshot-block-public-access --state block-all-sharing/block-new-sharing
```

スナップショットのブロックパブリックアクセスの設定を表示する

ブロックパブリックアクセスは、アカウントのリージョンごとに、次に示すステータスのいずれかになります。

- すべての共有をブロック – スナップショットのパブリック共有はすべてブロックされます。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。また、既にパブリックに共有されていたスナップショットはプライベートとして扱われ、一般公開されません。

- 新しい共有をブロック – スナップショットの新しいパブリック共有のみがブロックされます。アカウント内のユーザーは、新しいパブリック共有をリクエストできません。ただし、既にパブリックに共有されていたスナップショットは、引き続き一般公開されます。
- ブロック解除 – パブリック共有はブロックされません。ユーザーはスナップショットをパブリックに共有できます。

Console

スナップショットのブロックパブリックアクセスの設定を表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [EC2 ダッシュボード] を選択し、[アカウントの属性] (右側) で [データ保護とセキュリティ] を選択します。
3. [EBS スナップショットのブロックパブリックアクセス] セクションには、現在の設定が表示されます。

AWS CLI

スナップショットのブロックパブリックアクセスの設定を表示するには

[get-snapshot-block-public-access-state](#) コマンドを使用してください。

```
aws ec2 get-snapshot-block-public-access-state
```

スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にする

スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にして、リージョン内でのスナップショットのパブリック共有を許可します。この機能を無効にすると、ユーザーはリージョン内でスナップショットをパブリックに共有できるようになります。

Important

スナップショットのパブリックアクセスブロックが [すべての共有をブロック] モードで有効になっている場合に、パブリックアクセスブロックを無効にすると、それまでパブリックに共有されていたスナップショットはすべてプライベートとして扱われなくなり、再びパブリックアクセスが可能になります。

Console

スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [EC2 ダッシュボード] を選択し、[アカウントの属性] (右側) で [データ保護とセキュリティ] を選択します。
3. [EBS スナップショットのブロックパブリックアクセス] セクションで [管理] を選択します。
4. [パブリックアクセスをブロック] をオフにして、[更新] を選択します。

AWS CLI

スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にするには

[-access コマンドを使用してください。disable-snapshot-block-public](#)

```
aws ec2 disable-snapshot-block-public-access
```

Amazon を使用してスナップショットのパブリックアクセスを監視、ブロック EventBridge

Amazon EBS は、スナップショットのパブリックアクセスブロックに関連するイベントを発行します。AWS Lambda と Amazon を使用して、EventBridge イベント通知をプログラムで処理できます。イベントは、ベストエフォートベースで発生します。詳細については、[Amazon EventBridge ユーザーガイドを参照してください](#)。

以下のイベントが発生します。

- [すべての共有をブロック] モードで、スナップショットのブロックパブリックを有効にする

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Block Public Access Enabled",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2019-05-31T21:49:54Z",
  "region": "us-east-1",
```



```
"detail": {
  "SnapshotBlockPublicAccessState": "block-all-sharing",
  "message": "Block Public Access was successfully enabled in 'block-all-sharing'
mode"
}
}
```

- [新しい共有をブロック] モードで、スナップショットのブロックパブリックアクセスを有効にする

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Block Public Access Enabled",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2019-05-31T21:49:54Z",
  "region": "us-east-1",
  "detail": {
    "SnapshotBlockPublicAccessState": "block-new-sharing",
    "message": "Block Public Access was successfully enabled in 'block-new-sharing'
mode"
  }
}
```

- スナップショットのブロックパブリックアクセスを無効にする

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Block Public Access Disabled",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2019-05-31T21:49:54Z",
  "region": "us-east-1",
  "detail": {
    "SnapshotBlockPublicAccessState": "unblocked",
    "message": "Block Public Access was successfully disabled"
  }
}
```

スナップショットのごみ箱

ごみ箱は、誤って削除された Amazon EBS スナップショットと EBS-backed AMI を復元することを可能にするデータ復旧機能です。ごみ箱を使用する場合、リソースが削除されると、リソースは、完全に削除されるまでの時間として指定した期間、ごみ箱に保持されます。

リソースは、保持期間が終了する前であればいつでもごみ箱から復元できます。ごみ箱からリソースを復元すると、そのリソースはごみ箱から削除され、アカウント内の他のそのタイプのリソースと同じ方法で使用できます。保持期間が終了し、リソースが復元されない場合、リソースはごみ箱から完全に削除され、復旧できなくなります。

ごみ箱内のスナップショットは、アカウント内の通常のスナップショットと同じ料金で請求されます。ごみ箱および保持ルールの使用には、追加料金はかかりません。詳細については、[Amazon EBS の料金表](#)を参照してください。

詳細については、「[ごみ箱](#)」を参照してください。

トピック

- [ごみ箱のスナップショットを操作するための権限](#)
- [ごみ箱のスナップショットを表示する](#)
- [ごみ箱からスナップショットを復元する](#)

ごみ箱のスナップショットを操作するための権限

デフォルトでは、ユーザーには、ごみ箱にあるスナップショットを操作する許可はありません。ユーザーがこれらのリソースを利用するには、特定のリソースと API アクションを使用する許可を付与する IAM ポリシーを作成する必要があります。ポリシーを作成したら、ユーザー、グループ、ロールに許可を追加します。

ごみ箱にあるスナップショットを表示および復旧するには、ユーザーに次の許可が必要です。

- `ec2:ListSnapshotsInRecycleBin`
- `ec2:RestoreSnapshotFromRecycleBin`

ごみ箱内のスナップショットのタグを管理するには、次の追加の許可をユーザーに付与する必要があります。

- ec2:CreateTags
- ec2>DeleteTags

ごみ箱コンソールを使用するには、ユーザーに ec2:DescribeTags 許可が必要です。

IAM ポリシーの例を次に示します。これには、コンソールユーザーの ec2:DescribeTags 許可と、タグを管理するための ec2:CreateTags および ec2>DeleteTags の許可が含まれます。許可が不要な場合は、ポリシーから削除できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:ListSnapshotsInRecycleBin",
        "ec2:RestoreSnapshotFromRecycleBin"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateTags",
        "ec2>DeleteTags",
        "ec2:DescribeTags"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:Region:account-id:snapshot/*"
    }
  ]
}
```

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- 以下のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center:

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールの作成](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:
 - ユーザーが担当できるロールを作成します。手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー用ロールの作成](#)」を参照してください。
 - (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

ごみ箱の使用に必要な許可の詳細については、「[必要な IAM 許可](#)」を参照してください。

ごみ箱のスナップショットを表示する

スナップショットがごみ箱に入っている間は、次のような限定された情報を表示できます。

- スナップショットの ID。
- スナップショットの説明。
- スナップショットを作成したボリュームの ID。
- スナップショットが削除され、ごみ箱に入った日時。
- 保持期間の有効期限が切れる日時。この時点で、スナップショットはごみ箱から完全に削除されません。

ごみ箱のスナップショットは、次のいずれかの方法を使用して表示できます。

Recycle Bin console

コンソールを使用して、ごみ箱にあるスナップショットを表示するには

1. ごみ箱コンソール (<https://console.aws.amazon.com/rbin/home/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Recycle Bin] (ごみ箱) を選択します。
3. グリッドには、現在ごみ箱にあるすべてのスナップショットがリストされます。特定のスナップショットの詳細を表示するには、グリッドで選択し、[Actions] (アクション)、[View details] (詳細を表示) の順にクリックします。

AWS CLI

を使用してごみ箱内のスナップショットを表示するには AWS CLI

[list-snapshots-in-recycle AWS CLI -bin](#) コマンドを使用します。--snapshot-id オプションを使用して、特定のスナップショットを表示します。または、--snapshot-id オプションを省略して、ごみ箱内のすべてのスナップショットを表示します。

```
$ C:\> aws ec2 list-snapshots-in-recycle-bin --snapshot-id snapshot_id
```

たとえば、次のコマンドは、ごみ箱にあるスナップショット snap-01234567890abcdef に関する情報を提供します。

```
$ C:\> aws ec2 list-snapshots-in-recycle-bin --snapshot-id snap-01234567890abcdef
```

出力例:

```
{
  "SnapshotRecycleBinInfo": [
    {
      "Description": "Monthly data backup snapshot",
      "RecycleBinEnterTime": "2021-12-01T13:00:00.000Z",
      "RecycleBinExitTime": "2021-12-15T13:00:00.000Z",
      "VolumeId": "vol-abcdef09876543210",
      "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef"
    }
  ]
}
```

ごみ箱からスナップショットを復元する

スナップショットがごみ箱に入っている間は、いかなる方法でも使用することはできません。スナップショットを使用するには、まずスナップショットを復元する必要があります。ごみ箱からスナップショットを復元すると、そのスナップショットはすぐに使用でき、ごみ箱から削除されます。復元されたスナップショットは、アカウント内の他のスナップショットと同じ方法で使用できます。

次のいずれかの方法を使用して、ごみ箱からスナップショットを復元できます。

Recycle Bin console

コンソールを使用してごみ箱からスナップショットから復元する

1. ごみ箱コンソール (<https://console.aws.amazon.com/rbin/home/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Recycle Bin] (ごみ箱) を選択します。
3. グリッドには、現在ごみ箱にあるすべてのスナップショットがリストされます。復元するスナップショットを選択し、[Recover] (復元) を選択します。
4. プロンプトが表示されたら、[Recover] (復元) を選択します。

AWS CLI

削除したスナップショットをごみ箱から復元するには、AWS CLI

[restore-snapshot-from-recycle-bin](#) AWS CLI コマンドを使用します。--snapshot-id に、復元するスナップショットの ID を指定します。

```
$ C:\> aws ec2 restore-snapshot-from-recycle-bin --snapshot-id snapshot_id
```

例えば次のコマンドでは、スナップショットを snap-01234567890abcdef をごみ箱から復元します。

```
$ C:\> aws ec2 restore-snapshot-from-recycle-bin --snapshot-id  
snap-01234567890abcdef
```

出力例:

```
{  
  "SnapshotId": "snap-01234567890abcdef",  
  "Description": "Monthly data backup snapshot",  
  "Encrypted": false,  
  "OwnerId": "111122223333",  
  "Progress": "100%",  
  "StartTime": "2021-12-01T13:00:00.000000+00:00",  
  "State": "recovering",  
  "VolumeId": "vol-ffffffff",  
  "VolumeSize": 30  
}
```

Amazon EBS local snapshots on Outposts

Amazon EBS スナップショットは、EBS ボリュームのポイントインタイムコピーです。

デフォルトでは、Outpost 上の EBS ボリュームのスナップショットは、Outpost で使用するリージョンにある Amazon S3 内に保存されます。また、Outposts の Amazon EBS ローカルスナップショットを使用すれば、Outpost 上のボリュームのスナップショットを、その Outpost 自体の Amazon S3 にローカルに保存することもできます。これにより、スナップショットのデータが、Outpost 上、そしてお客様のオンプレミス上に存在することが保証されます。さらに、AWS Identity and Access Management (IAM) のポリシーと許可により、データ所在地に関する強制的なポリシーを設定することで、スナップショットデータが Outpost から離れないようにすることができます。これは、AWS リージョンがまだ提供されておらずデータの所在に関する要件が存在する、国または地域でのご利用において特に有用となります。

このトピックでは、Outposts の Amazon EBS ローカルスナップショットの使用に関する情報を提供します。Amazon EBS スナップショット自体と、AWS リージョンでのスナップショットの利用法の詳細については、[Amazon EBS スナップショット](#)を参照してください。

AWS Outposts の詳細については、「[AWS Outposts の特徴](#)」および「[AWS Outposts ユーザーガイド](#)」を参照してください。料金については、[AWS Outposts の料金](#)をご参照ください。

トピック

- [よくある質問](#)
- [前提条件](#)
- [考慮事項](#)
- [IAM によるアクセスの制御](#)
- [ローカルスナップショットを使用する](#)

よくある質問

1. ローカルスナップショットとは何ですか？

デフォルトでは、Outpost 上のボリュームの Amazon EBS スナップショットは、Outpost で使用するリージョンにある Amazon S3 内に保存されます。Outpost 上の Amazon S3 で Outpost がプロビジョニングされた場合は、スナップショットを Outpost それ自体に、ローカルで保存することを選択できます。ローカルにあるのは増分スナップショットです。つまり、最後にスナップショットを作成した時点から、ボリューム上で変更のあるブロックだけが保存されます。これら

のスナップショットからは、それらが置かれているのと同じ Outpost 上で、いつでもボリュームを復元することが可能です。Amazon EBS スナップショットの詳細については、[Amazon EBS スナップショット](#)を参照してください。

2. ローカルスナップショットを使用する理由は何ですか？

スナップショットは、データをバックアップするのに便利な手段です。ローカルスナップショットでは、スナップショットデータはすべて Outpost にローカルに保存されます。このデータは、ご使用の設備の外部に移動することはありません。これは、AWS リージョンがまだ提供されておらず、データの所在に関する要件が存在する国または地域のお客様にとって特に有用となります。

また、ローカルスナップショットを使用することで、帯域幅が制約された環境でリージョンと Outpost の間の通信を行う場合に、使用すべき帯域幅を削減できます。

3. どうすれば、スナップショットデータが、強制的に Outposts 上に保存されるようになりますか？

AWS Identity and Access Management (IAM) ポリシーを使用すると、プリンシパル (AWS アカウント、IAM ユーザー、および IAM ロール) がローカルスナップショットを使用する際の許可を制御し、データの所在場所を強制的に決めることができます。Outpost ボリュームとインスタンスからのスナップショットの作成と、そのスナップショットの AWS リージョン内への保存を、プリンシパルが実行しないようにポリシーを構成できます。現時点では、スナップショットとイメージを Outpost からリージョンにコピーすることはできません。詳細については、[IAM によるアクセスの制御](#)を参照してください。

4. マルチボリュームの Crash-consistent な ローカルスナップショットはサポートされていますか？

はい。Outpost 上のインスタンスから、マルチボリュームの Crash-consistent な ローカルスナップショットを作成できます。

5. ローカルスナップショットを作成するにはどうしたらよいですか？

スナップショットは、AWS Command Line Interface (AWS CLI) または Amazon EC2 コンソールを使用して手動で作成できます。詳細については、[ローカルスナップショットを使用する](#)を参照してください。また、Amazon Data Lifecycle Manager を使用することで、ローカルスナップショットのライフサイクルを自動化することもできます。詳細については、[Outpost のスナップショットを自動化する](#)を参照してください。

6. Outpost がリージョンへの接続を失った場合でも、ローカルスナップショットの作成、使用、または削除を実行できますか？

いいえ。スナップショットのヘルスにとって重要なアクセス、承認、ログ記録、モニタリングサービスなどは、リージョンにより提供されるため、Outpost はそのリージョンに接続されて

いる必要があります。接続が失われると、新しい ローカルスナップショット の作成、既存の ローカルスナップショット からのボリュームの作成やインスタンスの起動、あるいは ローカルスナップショット の削除はできなくなります。

7. ローカルスナップショット の削除後に Amazon S3 ストレージ容量が使用可能になるまでどれくらい待つ必要がありますか？

Amazon S3 ストレージ容量は、それを参照している ローカルスナップショット とボリュームを削除した後、72 時間以内に使用可能になります。

8. Outpost 上の Amazon S3 容量が不足しないようにするにはどうしたらよいですか？

ストレージ容量の不足を避けるためには、Amazon CloudWatch アラームを使用して Amazon S3 ストレージ容量を監視し、必要がなくなったスナップショットとボリュームを削除することをお勧めします。Amazon Data Lifecycle Manager を使用して ローカルスナップショット のライフサイクルを自動化する場合は、必要以上に長くスナップショットを保持しないように、スナップショットの保持ポリシーで定義してください。

9. Outposts でローカル Amazon S3 の容量が不足するとどうなりますか？

Outposts でローカル Amazon S3 の容量が不足した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は Outposts にローカルスナップショットを正常に作成できません。Amazon Data Lifecycle Manager は Outposts にローカルスナップショットを作成しようとしませんが、スナップショットはすぐに error の状態になり、最終的に Amazon Data Lifecycle Manager によって削除されます。SnapshotsCreateFailed Amazon CloudWatch メトリクスを使用して、スナップショットのライフサイクルポリシーでスナップショット作成の失敗をモニタリングすることをお勧めします。詳細については、[Amazon を使用してポリシーを監視する CloudWatch](#) を参照してください。

10. ローカルスナップショット とその ローカルスナップショット で保存された AMI はスポットインスタンスおよびスポットフリートで使用できますか？

いいえ。ローカルスナップショット、もしくは ローカルスナップショット でバックアップされた AMI を使用して、スポットインスタンスまたはスポットフリートを起動することはできません。

11. ローカルスナップショット とその ローカルスナップショット で保存された AMI は Amazon EC2 Auto Scaling で使用できますか？

はい。スナップショットと同じ Outpost にあるサブネットで Auto Scaling グループを起動する際は、ローカルスナップショット と、ローカルスナップショット で保存された AMI を使用できます。Amazon EC2 Auto Scaling グループのサービスリンクロールには、スナップショットの暗号化用に、KMS キー を使用するためのアクセス権限が必要です。

ローカルスナップショット、またはローカルスナップショットで保存された AMI を使用して、Auto Scaling グループを AWS リージョン内で起動することはできません。

前提条件

スナップショットを Outpost に保存するには、Outposts 上で Amazon S3 を使用しプロビジョニングされた Outpost が必要です。Outposts 上の Amazon S3 の詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの、[Amazon S3 on Outposts の使用](#)を参照してください。

考慮事項

ローカルスナップショットを使用する際には、次の点に注意してください。

- Outposts でローカルスナップショットを使用するには、AWS リージョンへの接続が必要です。
- スナップショットのメタデータは、Outpost に関連付けられた AWS リージョンに保存されます。これにはスナップショットのデータ自体は含まれません。
- Outposts に保存されたスナップショットは、デフォルトで暗号化されます。非暗号化スナップショットはサポートされていません。Outpost で作成されたスナップショットや Outpost にコピーされたスナップショットは、リージョンのデフォルトの KMS キー、またはリクエスト時に指定した別の KMS キーを使用して暗号化されます。
- Outpost 上でローカルスナップショットからボリュームを作成する場合、異なる KMS キーを使用して、そのボリュームを再暗号化することはできません。ローカルスナップショットから作成されたボリュームは、ソーススナップショットと同じ KMS キーを使用して暗号化する必要があります。
- Outpost からローカルスナップショットを削除したあと、削除されたスナップショットで使用していた Amazon S3 のストレージ容量は、72 時間以内に使用できるようになります。詳細については、[ローカルスナップショットを削除する](#)を参照してください。
- Outpost からローカルスナップショットをエクスポートすることはできません。
- ローカルスナップショットでは、高速スナップショット復元を有効化できません。
- EBS direct API はローカルスナップショットではサポートされていません。
- Outpost と AWS リージョン間、Outpost 間、あるいは Outpost 内で、ローカルスナップショットまたは AMI をコピーすることはできません。ただし、AWS リージョンから Outpost に、スナップショットをコピーすることは可能です。詳細については、[AWS リージョンから Outpost にスナップショットをコピーする](#)を参照してください。

- AWS リージョンから Outpost にスナップショットをコピーする際、データはサービスリンクを介して転送されます。複数のスナップショットを同時にコピーすると、Outpost で実行されている他のサービスに影響を与える可能性があります。
- ローカルスナップショットは共有できません。
- IAM ポリシーを使用して、データの所在に関する要件が満たされていることを確認する必要があります。詳細については、[IAM によるアクセスの制御](#)を参照してください。
- ローカルスナップショットは増分バックアップです。最新のスナップショットが作成された後に変更された、ボリューム内のブロックのみが保存されます。各ローカルスナップショットには、データを新しい EBS ボリュームに復元するために必要な、(スナップショットが作成された瞬間の) 情報がすべて含まれます。詳細については、[スナップショットの仕組み](#)を参照してください。
- IAM ポリシーを使用して、CopySnapshot と CopyImage アクションに対し、データの所在場所を強制的に指定することはできません。

IAM によるアクセスの制御

AWS Identity and Access Management (IAM) ポリシーを使用すると、プリンシパル (AWS アカウント、IAM ユーザー、および IAM ロール) がローカルスナップショットを使用する際の許可を制御できます。次に、ローカルスナップショットで特定のアクションを実行するためのアクセス許可を、付与または拒否する際に使用していただけるポリシーの例を示しました。

Important

スナップショットとイメージの、Outpost からリージョンへのコピーは現在サポートされていません。そのため現時点では、IAM ポリシーを使用して、CopySnapshot と CopyImage アクションにデータの所在場所を指定することはできません。

トピック

- [スナップショットのデータの所在場所を強制的に指定する](#)
- [プリンシパルによる ローカルスナップショット の削除を防止する](#)

スナップショットのデータの所在場所を強制的に指定する

次のポリシー例では、Outpost `arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef` 上のボリュームとインスタンスからスナップショットを作成することと、スナップショットデータを AWS リージョンに保存することを、すべてのプリンシパルに対し禁止し

ています。プリンシパルは引き続き ローカルスナップショット を作成できます。このポリシーにより、すべてのスナップショットが、その Outpost 上に保持されることが保証されます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Deny",
      "Action": [
        "ec2:CreateSnapshot",
        "ec2:CreateSnapshots"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "ec2:SourceOutpostArn": "arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0"
        },
        "Null": {
          "ec2:OutpostArn": "true"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateSnapshot",
        "ec2:CreateSnapshots"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

プリンシパルによる ローカルスナップショット の削除を防止する

次のポリシー例では、すべてのプリンシパルに対し、Outpost `arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0` に格納されているローカルスナップショットの削除を禁止しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [  
  {  
    "Effect": "Deny",  
    "Action": [  
      "ec2:DeleteSnapshot"  
    ],  
    "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",  
    "Condition": {  
      "StringEquals": {  
        "ec2:OutpostArn": "arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/  
op-1234567890abcdef0"  
      }  
    }  
  },  
  {  
    "Effect": "Allow",  
    "Action": [  
      "ec2:DeleteSnapshot"  
    ],  
    "Resource": "*"   
  }  
]
```

ローカルスナップショットを使用する

このセクションでは、ローカルスナップショットの使用方法について説明します。

トピック

- [スナップショットの保存に関するルール](#)
- [Outpost 上のボリュームから ローカルスナップショットを作成する](#)
- [Outpost 上のインスタンスからマルチボリュームの ローカルスナップショットを作成する](#)
- [ローカルスナップショットからの AMI の作成](#)
- [AWS リージョンから Outpost にスナップショットをコピーする](#)
- [AWS リージョンから Outpost に AMI をコピーする](#)
- [ローカルスナップショットからボリュームを作成する](#)
- [ローカルスナップショットによってバックアップされた AMI からインスタンスを起動する](#)
- [ローカルスナップショットを削除する](#)
- [Outpost のスナップショットを自動化する](#)

スナップショットの保存に関するルール

スナップショットの保存には、次のルールが適用されます。

- ボリュームの最新のスナップショットを Outpost に保存した後は、後続するすべてのスナップショットも同じ Outpost に保存する必要があります。
- ボリュームの最新のスナップショットが AWS リージョンに格納された場合は、連続するすべてのスナップショットは同じリージョンに保存します。そのボリュームから ローカルスナップショットの作成を開始するには、次の操作を行います。
 1. AWS リージョンでボリュームのスナップショットを作成します。
 2. そのスナップショットを、AWS リージョンから Outpost にコピーします。
 3. ローカルスナップショット から新しいボリュームを作成します。
 4. そのボリュームを Outpost 上のインスタンスにアタッチします。

Outpost の新しいボリュームの場合、そこで作成されるスナップショットは Outpost または AWS リージョンに保存できます。その後、連続するすべてのスナップショットは、同じロケーションに保存する必要があります。

- ローカルスナップショット (Outpost で作成されたスナップショット、および AWS リージョンから Outpost にコピーされたスナップショットを含む) は、同じ Outpost にボリュームを作成するためにのみ使用できます。
- リージョンにあるスナップショットから Outpost にボリュームを作成する場合、その新しいボリュームの後に続くスナップショットはすべて、同じリージョンに置かれる必要があります。
- ローカルスナップショット から Outpost にボリュームを作成する場合、その新しいボリュームの後に続くスナップショットはすべて、同じ Outpost 上に置かれる必要があります。

Outpost 上のボリュームから ローカルスナップショット を作成する

Outpost のボリュームから ローカルスナップショット を作成することができます。スナップショットの保存先は、ソースボリュームと同じ Outpost にするか、Outpost で使用しているリージョンにするか、どちらかを選択できます。

ローカルスナップショット は、同じ Outpost にボリュームを作成するためにのみ使用できます。

次のいずれかの方法を使用して、Outpost 上のボリュームから ローカルスナップショット を作成します。

Console

ローカルスナップショット を Outpost 上のボリュームから作成するには

Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

1. ナビゲーションペインの [ボリューム] を選択します。
2. Outpost にあるボリュームを選択し、[アクション]、[スナップショットの作成] の順にクリックします。
3. (オプション) [説明] に、スナップショットの簡潔な説明を入力します。
4. [スナップショットの送信先] で、[AWS Outpost] を選択します。スナップショットが、ソースボリュームと同じ Outpost に作成されます。[Outpost ARN] フィールドには、送信先 Outpost の Amazon リソースネーム (ARN) が表示されます。
5. (オプション) [タグを追加] を選択して、タグをスナップショットに追加します。タグごとに、タグキーとタグの値を指定します。
6. [スナップショットの作成] を選択します。

Command line

ローカルスナップショット を Outpost 上のボリュームから作成するには

[create-snapshot](#) コマンドを使用します。この際、スナップショットの作成元となるボリュームの ID と、スナップショットの保存先となる Outpost の ARN を指定します。Outpost ARN を省略した場合、スナップショットは Outpost で使用している AWS リージョンに保存されます。

例えば次のコマンドでは、vol-1234567890abcdef0 ボリュームの ローカルスナップショット を作成した上で、そのスナップショットを Outpost arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0 に保存しています。

```
$ aws ec2 create-snapshot --volume-id vol-1234567890abcdef0 --outpost-arn
arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0 --description
"single volume local snapshot"
```


Outpost 上のインスタンスからマルチボリュームの ローカルスナップショット を作成する

Outpost のインスタンスから、Crash-consistent でマルチボリュームな ローカルスナップショット を作成できます。スナップショットは、ソースインスタンスと同じ Outpost に保存するか、Outpost で使用しているリージョンに保存するかを選択できます。

マルチボリュームな ローカルスナップショット は、同じ Outpost にボリュームを作成する用途のみ使用できます。

Outpost 上のインスタンスからマルチボリュームな ローカルスナップショット を作成するには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

Outpost 上のインスタンスからマルチボリュームなローカルスナップショット を作成するには

Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

1. ナビゲーションペインで、[スナップショット] を選択します。
2. [スナップショットの作成] を選択します。
3. [リソースタイプの選択] で、[インスタンス] を選択します。
4. [インスタンス ID] で、スナップショットの作成元となる、Outpost 上のインスタンスを選択します。
5. (オプション) [説明] に、スナップショットの簡潔な説明を入力します。
6. [スナップショットの送信先] で、[AWS Outpost] を選択します。スナップショットが、ソースインスタンスと同じ Outpost に作成されます。[Outpost ARN] に、送信先 Outpost の ARN が表示されます。
7. インスタンスのルートボリュームをマルチボリュームスナップショットセットから除外するには、[Exclude root volume] (ルートボリュームを除外) を選択します。これを実行すると、Amazon EBS は、インスタンスのルートボリュームのスナップショットを作成しません。
8. マルチボリュームスナップショットセットから特定のデータボリュームを除外するには、[Exclude specific data volumes] (特定のデータボリュームを除外) を選択します。[Attached data volumes] (アタッチされたデータボリューム) セクションには、選択したインスタンスに現在アタッチされているすべてのデータボリュームが一覧表示されます。

[Attached data volumes] (アタッチされたデータボリューム) セクションで、マルチボリュームスナップショットセットから除外するデータボリュームの選択を解除します。マルチボリュームスナップショットセットには、選択されたままになっているボリュームのみが含まれます。

9. (オプション) ソースボリュームから対応するスナップショットにタグを自動的にコピーするには、[Copy tags from volume] (ボリュームからタグをコピーする) で [Copy tags] (タグをコピー) を選択します。これにより、ソースボリュームに合わせてスナップショットメタデータ (アクセスポリシー、添付情報、コスト割り当てなど) が設定されます。
10. (オプション) スナップショットに追加のカスタムタグを割り当てるには、[Tags] (タグ) セクションで [Add tag] (タグの追加) を選択し、キーと値のペアを入力します。最大 50 個のタグを追加できます。
11. [スナップショットの作成] を選択します。

スナップショットの作成中、スナップショットはまとめて管理されます。ボリュームセット内のスナップショットの 1 つが失敗すると、そのボリュームセットにある他のスナップショットも、エラーステータスに遷移します。

Command line

Outpost 上のインスタンスからマルチボリュームな ローカルスナップショットを作成するには

[create-snapshots](#) コマンドを使用します。この際、スナップショットの作成元となるインスタンスの ID と、スナップショットの保存先となる Outpost の ARN を指定します。Outpost の ARN を省略した場合は、Outpost で使用している AWS リージョンに、スナップショットが保存されます。

例えば次のコマンドでは、インスタンス `i-1234567890abcdef0` にアタッチされたボリュームのスナップショットを作成した後、そのスナップショットを Outpost `arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0` に保存しています。

```
$ aws ec2 create-snapshots --instance-specification InstanceId=i-1234567890abcdef0
--outpost-arn arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0
--description "multi-volume local snapshots"
```

ローカルスナップショットからのAMIの作成

ローカルスナップショットと、Outpostのリージョンに格納されているスナップショットの組み合わせを使用して、Amazon マシンイメージ (AMI) を作成できます。例えば、us-east-1 に Outpost がある場合には、その Outpost 上でローカルスナップショットによりバックアップされたデータボリュームと、us-east-1 リージョン内のスナップショットによりバックアップされたルートボリュームを持つ、AMI を作成できます。

Note

- 複数の Outposts に保存されたバックアップ用のスナップショットを含むような、AMI を作成することはできません。
- 現時点では、CreateImage API を使用して、Outposts 上のインスタンスから AMI を直接作成することはできません。また、Amazon S3 が有効化された Outposts に対し、Amazon EC2 コンソールを使用して AMI を作成することもサポートされていません。
- ローカルスナップショットによってバックアップされた AMI は、同じ Outpost でインスタンスを起動するためにのみ使用できます。

リージョンに置かれたスナップショットから Outpost に AMI を作成するには

1. リージョンから Outpost にスナップショットをコピーします。詳細については、[AWS リージョンから Outpost にスナップショットをコピーする](#)を参照してください。
2. Amazon EC2 コンソールまたは `register-image` コマンドを使用して、Outpost にコピーしたスナップショットから AMI を作成します。詳細については、[スナップショットから AMI を作成する](#)を参照してください。

Outpost のインスタンスから Outpost に AMI を作成するには

1. Outpost 上にあるインスタンスからスナップショットを作成し、そのスナップショットを同じ Outpost に保存します。詳細については、[Outpost 上のインスタンスからマルチボリュームのローカルスナップショットを作成する](#)を参照してください。
2. Amazon EC2 コンソールまたは `register-image` コマンドで、ローカルスナップショットを使用しながら AMI を作成します。詳細については、[スナップショットから AMI を作成する](#)を参照してください。

Outpost のインスタンスからリージョンに AMI を作成するには

1. Outpost 上のインスタンスからスナップショットを作成し、そのスナップショットをリージョンに保存します。詳細については、[Outpost 上のボリュームから ローカルスナップショット を作成する](#)または[Outpost 上のインスタンスからマルチボリュームの ローカルスナップショット を作成する](#)を参照してください。
2. Amazon EC2 コンソールまたは `register-image` コマンドで、リージョンのスナップショットコピーを使用しながら AMI を作成します。詳細については、[スナップショットから AMI を作成する](#)を参照してください。

AWS リージョンから Outpost にスナップショットをコピーする

AWS リージョンから Outpost にスナップショットをコピーできます。これは、スナップショットが Outpost で使用しているリージョンにある場合にのみ実行できます。スナップショットが別のリージョンにある場合は、まずスナップショットを Outpost で使用しているリージョンにコピーした上で、そのリージョンから Outpost にコピーする必要があります。

Note

Outpost とリージョン間、異なる Outpost 間、または同じ Outpost 内で、ローカルスナップショットをコピーすることはできません。

リージョンから Outpost へのスナップショットのコピーには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

AWS リージョンから Outpost にスナップショットをコピーするには

Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

1. ナビゲーションペインで、[スナップショット] を選択します。
2. リージョン内のスナップショットを選択し、アクション、コピーの順にクリックします。
3. [送信先リージョン] で、保存先となる Outpost のリージョンを選択します。
4. [スナップショットの送信先] で、[AWS Outpost] を選択します。

[スナップショットの送信先] フィールドは、選択した送信先リージョンに Outposts がある場合にのみ表示されます。このフィールドが表示されない場合は、選択した送信先リージョンに Outposts がありません。

5. [送信先 Outpost の ARN] に、スナップショットのコピー先となる Outpost の ARN を入力します。
6. (オプション) [説明] に、コピーされるスナップショットの簡潔な説明を入力します。
7. スナップショットをコピーする際には、暗号化がデフォルトで有効化されます。暗号化を無効にすることはできません。KMS キー で、使用する KMS キー を選択します。
8. [コピー] を選択します。

Command line

リージョンから Outpost にスナップショットをコピーするには

[copy-snapshot](#) コマンドを使用します。この際、コピーするスナップショットの ID、スナップショットのコピー元のリージョン、およびコピー先の Outpost の ARN を指定します。

例えば次のコマンドでは、スナップショット `snap-1234567890abcdef0` を `us-east-1` リージョンから Outpost `arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0` にコピーしています。

```
$ aws ec2 copy-snapshot --source-region us-east-1 --source-snapshot-id snap-1234567890abcdef0 --destination-outpost-arn arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0 --description "Local snapshot copy"
```

AWS リージョンから Outpost に AMI をコピーする

AMI を AWS リージョンから Outpost にコピーできます。AMI をリージョンから Outpost にコピーすると、その AMI に関連付けられたすべてのスナップショットも、リージョンから Outpost にコピーされます。

AMI に関連付けられたスナップショットが Outpost のリージョンに置かれている場合にのみ、その AMI をリージョンから Outpost にコピーすることができます。スナップショットが別のリージョンにある場合は、最初に AMI を Outpost で使用するリージョンにコピーし、そのリージョンから AMI を Outpost にコピーする必要があります。

Note

Outpost とリージョン間、異なる Outpost 間、または 同一の Outpost 内で、AMI をコピーすることはできません。

AMI のリージョンから Outpost へのコピーは、AWS CLI からのみ行えます。

Command line

リージョンから Outpost に AMI をコピーするには

[copy-image](#) コマンドを使用します。この際、コピーする AMI の ID、ソースリージョン、および送信先 Outpost の ARN を指定します。

例えば次のコマンドでは、AMI `ami-1234567890abcdef0` を `us-east-1` リージョンから Outpost `arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0` にコピーしています。

```
$ aws ec2 copy-image --source-region us-east-1 --source-image-id ami-1234567890abcdef0 --name "Local AMI copy" --destination-outpost-arn arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0
```

ローカルスナップショット からボリュームを作成する

ローカルスナップショット から Outposts にボリュームを作成できます。このボリュームは、ソーススナップショットと同じ Outpost に作成する必要があります。Outpost のリージョンにボリュームを作成するために、ローカルスナップショット を使用することはできません。

ローカルスナップショット からボリュームを作成する場合、異なる KMS キー を使用して、そのボリュームを再暗号化することはできません。ローカルスナップショット から作成されたボリュームは、ソーススナップショットと同じ KMS キーを使用して暗号化する必要があります。

詳細については、[スナップショットからのボリュームの作成](#)を参照してください。

ローカルスナップショットによってバックアップされた AMI からインスタンスを起動する

ローカルスナップショットによってバックアップされた AMI からインスタンスを起動できます。インスタンスは、ソース AMI と同じ Outpost で起動する必要があります。詳細については、AWS Outposts ユーザーガイドの、[Outposts でインスタンスを起動する](#)をご参照ください。

ローカルスナップショットを削除する

ローカルスナップショットを、Outpost から削除することができます。スナップショットを Outpost から削除した場合、削除したスナップショットで使用されていた Amazon S3 のストレージ容量は、そのスナップショットを参照していたスナップショットとボリュームの削除から、72 時間以内に使用できるようになります。

Amazon S3 ストレージ容量はすぐには利用できないので、Amazon CloudWatch アラームを使用して Amazon S3 ストレージ容量を監視することをお勧めします。ストレージ容量の不足を避けるため、必要がなくなったスナップショットとボリュームを削除します。

スナップショットの削除の詳細については、[スナップショットを削除する](#)を参照してください。

Outpost のスナップショットを自動化する

Amazon Data Lifecycle Manager のスナップショットライフサイクルポリシーを作成すると、Outpost 上にあるボリュームとインスタンスのために、スナップショットの作成、コピー、保持、削除を自動化できます。スナップショットをリージョンに保存するか、それらを Outpost でローカルに保存するかを選択できます。さらに、AWS リージョンで作成および保存されているスナップショットを Outpost に自動的にコピーできます。

次の表に、サポートされている機能の概要を示します。

リソースのロケーション	スナップショットの送信先	リージョン間のコピー		高速スナップショット復元	クロスアカウントの共有
		リージョンへのコピー	Outpost へのコピー		
Region	Region	✓	✓	✓	✓
Outpost	Region	✓	✓	✓	✓
Outpost	Outpost	✗	✗	✗	✗

考慮事項

- 現行では、Amazon EBS スナップショットライフサイクルポリシーのみがサポートされています。EBS-backed AMI ポリシー、およびクロスアカウント共有イベントポリシーは、サポートされていません。
- ポリシーにより、リージョン内のボリュームまたはインスタンス用のスナップショットを管理する場合、そのスナップショットは、ソースリソースと同じリージョンに作成されます。
- ポリシーが、Outpost 上にあるボリュームまたはインスタンス用のスナップショットを管理している場合は、ソース Outpost、またはその Outpost が使用しているリージョンのどちらかに、スナップショットを作成できます。
- リージョン内のスナップショットと、Outpost 上にあるスナップショットの両方を、1つのポリシーで管理することはできません。リージョンと Outpost で、ともにスナップショットを自動化する必要がある場合は、個別にポリシーを作成する必要があります。
- 高速スナップショット復元は、Outpost で作成されたスナップショット、または Outpost にコピーされたスナップショットではサポートされていません。
- Outpost で作成されたスナップショットでは、クロスアカウント共有はサポートされていません。

ローカルスナップショットを管理するスナップショットライフサイクルの作成の詳細については、[Automating snapshot lifecycles \(スナップショットライフサイクルの自動化\)](#)を参照してください。

Amazon EBS 暗号化

Amazon EBS 暗号化は、EC2 インスタンスに関連付けられた EBS リソースの簡単な暗号化ソリューションとして使用します。Amazon EBS 暗号化では、独自のキー管理インフラストラクチャを構築、保守、保護する必要はありません。Amazon EBS 暗号化は、暗号化されたボリュームとスナップショットを作成するときに、AWS KMS keys を使用します。

暗号化オペレーションは EC2 インスタンスをホストするサーバー上で実行され、インスタンスとそれに接続された EBS ストレージ間でのデータの保存と転送中のデータの両方のセキュリティを保証します。

1 つのインスタンスに対し、暗号化されたボリュームと暗号化されていないボリュームの両方を、同時にアタッチできます。

コンテンツ

- [EBS 暗号化の仕組み](#)
- [Amazon EBS 暗号化の要件](#)
- [Amazon EBS 暗号化の使用](#)
- [EBS リソースの暗号化](#)
- [AWS KMSキーをローテーションします](#)
- [Amazon EBS 暗号化の例](#)

EBS 暗号化の仕組み

EC2 インスタンスのブートボリュームとデータボリュームの両方を暗号化できます。

暗号化された EBS ボリュームを作成し、サポートされるインスタンスタイプにアタッチする場合、以下のタイプのデータが暗号化されます。

- ボリューム内の保存データ
- ボリュームとインスタンスの間で移動されるすべてのデータ
- ボリュームから作成されたすべてのスナップショット
- それらのスナップショットから作成されたすべてのボリューム

Amazon EBS は、業界標準の AES-256 データ暗号化を使用して、ボリュームをデータキーで暗号化します。データキーは、ボリューム情報とともに保存される前に、AWS KMS キーを使用して AWS KMS によって生成され、AWS KMS によって暗号化されます。すべてのスナップショット、および同じ AWS KMS キーを使用してそれらのスナップショットから作成された後続のボリュームは、同じデータキーを共有します。詳細については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドの[データキー](#)を参照してください。

Amazon EC2 は AWS KMS と連携して、EBS ボリュームの暗号化と復号化を行います。この処理の方法は、暗号化されたボリュームから作成されたスナップショットが、暗号化されているか暗号化されていないかによって若干異なります。

暗号化されたスナップショットに対する EBS 暗号化の動作

ユーザーが所有している暗号化されたスナップショットから暗号化されたボリュームを作成する場合、Amazon EC2 は AWS KMS と連携して、次のように EBS ボリュームを暗号化および復号化します。

1. Amazon EC2 は、ボリュームの暗号化のために選択した KMS キーを指定して、[GenerateDataKeyWithoutPlaintext](#) リクエストを AWS KMS に送信します。
2. スナップショットと同じ KMS キーを使用してボリュームを暗号化すると、AWS KMS は、スナップショットと同じデータキーを使用し、同じ KMS キーでこれを暗号化します。ボリュームが別の KMS キーを使用して暗号化されている場合、AWS KMS は新しいデータキーを生成し、指定した KMS キーでこれを暗号化します。暗号化されたデータキーは Amazon EBS に送信され、ボリュームメタデータとともに保存されます。
3. 暗号化されたボリュームをインスタンスにアタッチすると、Amazon EC2 は [CreateGrant](#) リクエストを AWS KMS に送信し、データキーを復号化できるようにします。
4. AWS KMS は、暗号化されたデータキーを復号して、Amazon EC2 に復号されたデータキーを送信します。
5. Amazon EC2 は、Nitro ハードウェア内のプレーンテキストデータキーを使用して、ボリュームのディスク I/O を暗号化します。プレーンテキストデータキーは、ボリュームがインスタンスにアタッチされる限り、メモリ内で維持されます。

暗号化されていないスナップショットに対する EBS 暗号化の動作

暗号化されていないスナップショットから暗号化されたボリュームを作成する場合、Amazon EC2 は AWS KMS と連携して、次のように EBS ボリュームを暗号化および復号化します。

1. Amazon EC2は [CreateGrant](#) リクエストを AWS KMS に送信し、スナップショットから作成されたボリュームを暗号化できるようにします。
2. Amazon EC2 は、ボリュームの暗号化のために選択した KMS キー を指定して、[GenerateDataKeyWithoutPlaintext](#) リクエストを AWS KMS に送信します。
3. AWS KMS は新しいデータキーを生成し、ボリュームの暗号化のために選択した KMS キーで暗号化し、暗号化したデータキーを Amazon EBS に送信して、ボリュームのメタデータと共に保存します。
4. Amazon EC2は [Decrypt](#) リクエストを AWS KMS に送信して、ボリュームデータを暗号化するための暗号化キーを取得します。
5. 暗号化されたボリュームをインスタンスにアタッチすると、Amazon EC2 は [CreateGrant](#) リクエストを AWS KMS に送信し、データキーを復号化できるようにします。
6. 暗号化されたボリュームをインスタンスにアタッチすると、Amazon EC2 は暗号化されたデータキーを指定しながら、[Decrypt](#) リクエストを AWS KMS に送信します。
7. AWS KMS は、暗号化されたデータキーを復号して、Amazon EC2 に復号されたデータキーを送信します。
8. Amazon EC2 は、Nitro ハードウェア内のプレーンテキストデータキーを使用して、ボリュームのディスク I/O を暗号化します。プレーンテキストデータキーは、ボリュームがインスタンスにアタッチされる限り、メモリ内で維持されます。

詳細については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドの[Amazon Elastic Block Store \(Amazon EBS\) で AWS KMS を使用する方法](#)および[Amazon EC2 の例 2](#)を参照してください。

使用できない KMS キーがデータキーに及ぼす影響

KMS キーが使用できなくなると、その影響はほぼ即時に表れます (最終的な一貫性の対象となります)。KMS キーのキーステータスは新しい条件を反映して変化し、暗号化オペレーションで KMS キーを使用するすべてのリクエストは失敗します。

KMS キーを使用不可にするアクションを実行しても、EC2 インスタンスまたはアタッチされた EBS ボリュームに対して直ちに影響が及ぶことはありません。Amazon EC2 は、ボリュームがインスタンスにアタッチされている間、KMS キーではなくデータキーを使用してすべてのディスク I/O を暗号化します。

ただし、暗号化された EBS ボリュームが EC2 インスタンスからデタッチされると、Amazon EBS は Nitro ハードウェアからデータキーを削除します。次回、暗号化された EBS ボリュームが EC2 インスタンスにアタッチされると、アタッチメントは失敗します。これは、Amazon EBS は KMS キー

を使用してボリュームの暗号化されたデータキーを復号できないためです。EBS ボリュームを再度使用するには、KMS キーを再度使用可能にする必要があります。

Tip

使用不可にする KMS キーから生成されたデータキーで暗号化された EBS ボリュームのデータにアクセスする必要がなくなった場合は、KMS キーを使用不可にする前に EC2 インスタンスから EBS ボリュームをデタッチすることをお勧めします。

詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[使用できない KMS キーがデータキーに及ぼす影響](#)」を参照してください。

Amazon EBS 暗号化の要件

開始する前に、以下の要件が満たされていることを確認します。

要件

- [サポートされるボリュームタイプ](#)
- [サポートされるインスタンスタイプ](#)
- [ユーザーのアクセス許可](#)
- [インスタンスの権限](#)

サポートされるボリュームタイプ

暗号化は、すべての EBS ボリュームタイプでサポートされます。暗号化されたボリュームでは、暗号化されていないボリュームと同じ IOPS パフォーマンスが期待できます。遅延に対する影響は最小限に抑えられます。暗号化されていないボリュームにアクセスするのと同じ方法で、暗号化されたボリュームにアクセスできます。暗号化と復号は透過的に処理され、ユーザーやアプリケーションから追加の操作を必要としません。

サポートされるインスタンスタイプ

Amazon EBS 暗号化は、すべての[現行世代](#)および[前世代](#)のインスタンスタイプで利用できます。

ユーザーのアクセス許可

EBS 暗号化の KMS キーを使用すると、KMS キーポリシーにより、必要な AWS KMS アクションにアクセスできるすべてのユーザーがこの KMS キーを使用して EBS リソースを暗号化または復号できるようになります。EBS 暗号化を使用するには、次のアクションを呼び出す許可をユーザーに付与する必要があります。

- kms:CreateGrant
- kms:Decrypt
- kms:DescribeKey
- kms:GenerateDataKeyWithoutPlainText
- kms:ReEncrypt

Tip

最小権限のプリンシパルに従うには、kms:CreateGrant へのフルアクセスを許可しないでください。代わりに、次の例に示すように、AWS のサービスによってユーザーに代わって許可が作成された場合にのみ、kms:GrantIsForAWSResource コンディションキーを使用して、KMS キーに許可を作成できるようにします。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "kms:CreateGrant",
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:us-east-2:123456789012:key/abcd1234-a123-456d-a12b-
a123b4cd56ef"
      ],
      "Condition": {
        "Bool": {
          "kms:GrantIsForAWSResource": true
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
}
```

詳細については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドのデフォルトのキーポリシーセクションの[AWS アカウントへのアクセスを許可し、IAM ポリシーを有効にする](#)を参照してください。

インスタンスの権限

インスタンスが暗号化された AMI、ボリューム、またはスナップショットと通信しようとする、インスタンスの ID 専用ロールに KMS キーグラントが発行されます。ID 専用ロールは、インスタンスがユーザーに代わって暗号化された AMI、ボリューム、またはスナップショットを操作するために使用する IAM ロールです。

ID のみのロールは、手動で作成または削除する必要はなく、ポリシーも関連付けられていません。また、ID のみのロール認証情報にはアクセスできません。

Note

ID 専用ロールは、インスタンスのアプリケーションが Amazon S3 オブジェクトや Dynamo DB AWS KMS テーブルなどの他の暗号化されたリソースにアクセスするために使用することはありません。これらの操作は、Amazon EC2 インスタンスロールの認証情報、AWS またはインスタンスに設定したその他の認証情報を使用して実行されます。

ID のみのロールには、[サービスコントロールポリシー](#) (SCP) と [KMS](#) キーポリシーが適用されます。SCP キーまたは KMS キーが KMS キーへの ID 専用ロールアクセスを拒否すると、暗号化されたボリュームで、または暗号化された AMI やスナップショットを使用して EC2 インスタンスを起動できないことがあります。

aws:SourceIp、aws:VpcSourceIp、aws:SourceVpc、またはaws:SourceVpce AWS グローバル条件キーを使用してネットワークロケーションに基づいてアクセスを拒否する SCP またはキーポリシーを作成する場合は、これらのポリシーステートメントがインスタンスのみのロールに適用されないようにする必要があります。ポリシーの例については、「[データペリメータポリシーの例](#)」を参照してください。

ID 専用ロール ARN は次の形式を使用します:

```
arn:aws-partition:iam::account_id:role/aws:ec2-infrastructure/instance_id
```

キーグラントがインスタンスに発行されると、キーグラントはそのインスタンス固有のロール割り当てセッションに発行されます。被付与者のプリンシパル ARN は以下の形式を使用します:

```
arn:aws-partition:sts::account_id:assumed-role/aws:ec2-infrastructure/instance_id
```

Amazon EBS 暗号化の使用

次の手順に従って Amazon EBS 暗号化を使用します。

タスク

- [EBS 暗号化の KMS キーの選択](#)
- [デフォルトで暗号化の有効化](#)
- [API および CLI を使用してデフォルトの暗号化の設定](#)

EBS 暗号化の KMS キーの選択

Amazon EBS は、AWS リソースを保存する各リージョンに一意の AWS マネージドキー を自動的に作成します。この KMS キーにはエイリアス `alias/aws/ebs` があります。デフォルトでは、Amazon EBS は暗号化にこの KMS キーを使用します。または、作成した対称カスタマー マネージド型暗号化キーを EBS 暗号化のデフォルトの KMS キーとして指定することもできます。独自の KMS キーを使用することにより、KMS キーの作成、更新、無効化ができるなど、より高い柔軟性が得られます。

Important

Amazon EBS は非対称暗号化 KMS キーをサポートしていません。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[対称および非対称暗号化 KMS キーの使用](#)」を参照してください。

Amazon EC2 console

リージョンの EBS 暗号化用にデフォルト KMS キーを設定するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションバーから、使用するリージョンを選択します。
3. ナビゲーションペインの [EC2 ダッシュボード] を選択します。

4. ページの右上で、[アカウントの属性]、[データ保護とセキュリティ] の順に選択します。
5. [管理] を選択します。
6. [Default encryption key] (デフォルトの暗号化キー) で、対称カスタマーマネージド型暗号化キーを選択します。
7. [Update EBS encryption] (EBS 暗号化を更新する) を選択します。

デフォルトで暗号化の有効化

作成した新しい EBS ボリュームとスナップショットコピーの暗号化を強制するように AWS アカウントを設定できます。例えば、Amazon EBS は、インスタンスの起動時に作成された EBS ボリュームと、暗号化されていないスナップショットからコピーしたスナップショットを暗号化します。暗号化されていない EBS リソースから暗号化された EBS リソースへの移行の例については、[暗号化されていないリソースの暗号化](#)を参照してください。

デフォルトでは、暗号化は既存の EBS ボリュームまたはスナップショットには影響しません。

考慮事項

- デフォルトでの暗号化はリージョン固有の設定です。リージョンに対して有効にした場合、そのリージョン内の個々のボリュームまたはスナップショットに対して無効にすることはできません。
- デフォルトで Amazon EBS 暗号化は、すべての[現行世代](#)および[前世代](#)のインスタンスタイプでサポートされています。
- スナップショットをコピーして、新しい KMS キーで暗号化すると、完全な (増分ではない) コピーが作成されます。その結果、追加のストレージコストが発生します。
- AWS Server Migration Service (SMS) を使用してサーバーを移行する場合は、デフォルトでの暗号化を有効にしないでください。デフォルトでの暗号化がすでに有効になっていて、デルタレプリケーションエラーが発生している場合は、デフォルトでの暗号化を無効にしてください。代わりに、レプリケーションジョブの作成時に AMI 暗号化を有効にします。

Amazon EC2 console

リージョンの暗号化をデフォルトで有効にするには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションバーから、使用するリージョンを選択します。
3. ナビゲーションペインの [EC2 ダッシュボード] を選択します。

4. ページの右上で、[アカウントの属性]、[データ保護とセキュリティ] の順に選択します。
5. [Manage] (管理) を選択します。
6. [Enable] (有効化) を選択します。デフォルトの暗号化キーとして、ユーザーの代わりに作成したエイリアス `alias/aws/ebs` と共に AWS マネージドキー をそのまま維持するか、対称カスタマーマネージド型暗号化キーを選択します。
7. [Update EBS encryption] (EBS 暗号化を更新する) を選択します。

AWS CLI

デフォルトの暗号化設定を表示するには

- 特定のリージョンの場合

```
$ aws ec2 get-efs-encryption-by-default --region region
```

- アカウントの全リージョンの場合

```
$ for region in $(aws ec2 describe-regions --region us-east-1 --query "Regions[*].
[RegionName]" --output text); do default=$(aws ec2 get-efs-encryption-by-default
--region $region --query "{Encryption_By_Default:EbsEncryptionByDefault}" --
output text); kms_key=$(aws ec2 get-efs-default-kms-key-id --region $region | jq
'.KmsKeyId'); echo "$region --- $default --- $kms_key"; done
```

暗号化をデフォルトで有効にするには

- 特定のリージョンの場合

```
$ aws ec2 enable-efs-encryption-by-default --region region
```

- アカウントの全リージョンの場合

```
$ for region in $(aws ec2 describe-regions --region us-east-1 --query "Regions[*].
[RegionName]" --output text); do default=$(aws ec2 enable-efs-encryption-by-
default --region $region --query "{Encryption_By_Default:EbsEncryptionByDefault}"
--output text); kms_key=$(aws ec2 get-efs-default-kms-key-id --region $region |
jq '.KmsKeyId'); echo "$region --- $default --- $kms_key"; done
```


暗号化をデフォルトで無効にするには

- 特定のリージョンの場合

```
$ aws ec2 disable-ebs-encryption-by-default --region region
```

- アカウントの全リージョンの場合

```
$ for region in $(aws ec2 describe-regions --region us-east-1 --query "Regions[*].  
[RegionName]" --output text); do default=$(aws ec2 disable-ebs-encryption-by-  
default --region $region --query "{Encryption_By_Default:EbsEncryptionByDefault}"  
--output text); kms_key=$(aws ec2 get-ebs-default-kms-key-id --region $region |  
jq '.KmsKeyId'); echo "$region --- $default --- $kms_key"; done
```

PowerShell

デフォルトの暗号化設定を表示するには

- 特定のリージョンの場合

```
PS C:\> Get-EC2EbsEncryptionByDefault -Region region
```

- アカウントの全リージョンの場合

```
PS C:\> (Get-EC2Region).RegionName | ForEach-Object { [PSCustomObject]@{ Region  
= $_; EC2EbsEncryptionByDefault = Get-EC2EbsEncryptionByDefault -Region $_;  
EC2EbsDefaultKmsKeyId = Get-EC2EbsDefaultKmsKeyId -Region $_ } } | Format-Table -  
AutoSize
```

暗号化をデフォルトで有効にするには

- 特定のリージョンの場合

```
PS C:\> Enable-EC2EbsEncryptionByDefault -Region region
```

- アカウントの全リージョンの場合

```
PS C:\> (Get-EC2Region).RegionName | ForEach-Object { [PSCustomObject]@{ Region  
= $_; EC2EbsEncryptionByDefault = Enable-EC2EbsEncryptionByDefault -Region $_;
```

```
EC2EbsDefaultKmsKeyId = Get-EC2EbsDefaultKmsKeyId -Region $_ } } | Format-Table -
AutoSize
```

暗号化をデフォルトで無効にするには

- 特定のリージョンの場合

```
PS C:\> Disable-EC2EbsEncryptionByDefault -Region region
```

- アカウントの全リージョンの場合

```
PS C:\> (Get-EC2Region).RegionName | ForEach-Object { [PSCustomObject]{ Region
= $_; EC2EbsEncryptionByDefault = Disable-EC2EbsEncryptionByDefault -Region $_;
EC2EbsDefaultKmsKeyId = Get-EC2EbsDefaultKmsKeyId -Region $_ } } | Format-Table -
AutoSize
```

既存のスナップショットまたは暗号化されたボリュームに関連付けられている KMS キー を変更することはできません。ただし、スナップショットコピーオペレーション中に別の KMS キー を関連付けて、コピーしたスナップショットを新しい KMS キー で暗号化できます。

API および CLI を使用してデフォルトの暗号化の設定

以下の API アクションおよび CLI コマンドを使用して、デフォルトで暗号化およびデフォルトの KMS キー を管理できます。

API アクション	CLI コマンド	説明
DisableEbsEncryptionByDefault	disable-ebs-encryption-by-default	デフォルトでの暗号化を無効にします。
EnableEbsEncryptionByDefault	enable-ebs-encryption-by-default	デフォルトでの暗号化を有効にします。
GetEbsDefaultKmsKeyId	get-ebs-default-kms-key-id	デフォルトの KMS キー について説明します。

API アクション	CLI コマンド	説明
GetEbsEncryptionByDefault	get-ebs-encryption-by-default	デフォルトの暗号化が有効かどうかを示します。
ModifyEbsDefaultKmsKeyId	modify-ebs-default-kms-key-id	EBS ボリュームの暗号化に使用されるデフォルトの KMS キーを変更します。
ResetEbsDefaultKmsKeyId	reset-ebs-default-kms-key-id	EBS ボリュームの暗号化に使用するデフォルトの KMS キーとして、AWS マネージドキーをリセットします。

EBS リソースの暗号化

EBS ボリュームを暗号化するには、[デフォルトでの暗号化](#)を使用するか、暗号化するボリュームを作成するときに暗号化を有効にします。

ボリュームを暗号化する場合、ボリュームの暗号化に使用する対称暗号化 KMS キーを指定できます。KMS キーが指定されていない場合、暗号化に使用される KMS キーはソーススナップショットの暗号化状態とその所有権によって異なります。詳細については、[暗号化結果の表](#)を参照してください。

Note

API または AWS CLI を使用して KMS キーを指定している場合は、AWS によって KMS キーが非同期的に認証されます。無効な KMS キー ID、エイリアス、または ARN を指定すると、アクションは完了したように見える場合がありますが、最終的には失敗します。

既存のスナップショットまたはボリュームに関連付けられている KMS キー を変更することはできません。ただし、スナップショットコピーオペレーション中に別の KMS キー を関連付けて、コピーしたスナップショットを新しい KMS キー で暗号化できます。

作成時の空のボリュームの暗号化

新しい空の EBS ボリュームを作成するときは、特定のボリューム作成オペレーションで暗号化を有効にすることで暗号化できます。デフォルトで EBS 暗号化を有効にしたボリュームでは、EBS 暗号化用のデフォルト KMS キー を使用した暗号化が、自動的に実行されます。または、ボリュームの作成オペレーションごとに異なる対称暗号化 KMS キーを指定することもできます。ボリュームは最初に使用可能になった時点で暗号化されているため、データは常に保護されています。詳細な手順については、[Amazon EBS ボリュームの作成](#)を参照してください。

デフォルトでは、ボリュームの作成時に選択した KMS キー が、ボリュームから作成したスナップショットとそれらの暗号化されたスナップショットから復元したボリュームを暗号化します。暗号化されたボリュームまたはスナップショットから暗号化を削除することはできません。つまり、暗号化されたスナップショット、または暗号化されたスナップショットのコピーから復元されたボリュームは、常に暗号化されます。

暗号化されたボリュームのパブリックスナップショットはサポートされていませんが、暗号化されたスナップショットを特定のアカウントと共有できます。詳細な手順については、[Amazon EBS スナップショットの共有](#)を参照してください。

暗号化されていないリソースの暗号化

暗号化されていない既存のボリュームまたはスナップショットを直接暗号化することはできません。ただし、暗号化されていないボリュームまたはスナップショットから暗号化されたボリュームあるいはスナップショットを作成できます。暗号化をデフォルトで有効にした場合、Amazon EBS は EBS 暗号化のデフォルト KMS キー を使用して、新しいボリュームとスナップショットを自動的に暗号化します。それ以外の場合は、Amazon EBS 暗号化のデフォルトの KMS キーまたは対称カスタマーマネージド型暗号化キーを使用して、個々のボリュームまたはスナップショットを作成するときに暗号化を有効にすることができます。詳細については、[Amazon EBS ボリュームの作成](#)および[Amazon EBS スナップショットのコピー](#)を参照してください。

スナップショットコピーを [カスタマー管理キー](#) に暗号化するには、[暗号化されていないスナップショットをコピーする \(デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合\)](#) に示すように、暗号化を有効にし、KMS キー を指定する必要があります。

⚠ Important

Amazon EBS は非対称暗号化 KMS キーをサポートしていません。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[対称および非対称暗号化 KMS キーの使用](#)」を参照してください。

EBS-Backed AMI からインスタンスを起動するときに新しい暗号化状態を適用することもできます。これは、EBS-backed AMI に、説明の通りに暗号化できる EBS ボリュームのスナップショットが含まれているためです。詳細については、「[EBS-backed AMI での暗号化の利用](#)」を参照してください。

AWS KMSキーをローテーションします

暗号化のベストプラクティスでは、暗号化キーの広範な再利用を推奨していません。KMS キーの新しい暗号化マテリアルを作成するには、新しい KMS キーを作成し、アプリケーションまたはエイリアスを変更して新しい KMS キーを使用します。または、既存の KMS キーの自動キーローテーションを有効にすることができます。

KMS キーの自動キーローテーションを有効にすると、AWS KMSは KMS キーの新しい暗号化マテリアルを毎年生成します。AWS KMSは古い暗号化マテリアルをすべて保存するため、KMS キーで暗号化されたすべてのデータを復号することができます。KMS キーを削除しない限り、AWS KMSはローテーションされたキーマテリアルを一切削除しません。

データの暗号化にローテーションされた KMS キーを使用する場合、AWS KMS は現在のキーマテリアルを使用します。暗号化データの復号化にローテーションされた KMS キーを使用する場合、AWS KMSはそのデータの暗号化に使用されたキーマテリアルのバージョンを使用します。ローテーションされた KMS キーは、コード変更なしでアプリケーションと AWS サービスで安全に使用できます。

ℹ Note

自動キーローテーションは、AWS KMS が作成するキーマテリアルを使用した対称カスタマー管理型キーのみでサポートされています。AWS KMS は AWS マネージドキー を毎年自動的にローテーションします。AWS マネージドキーのキーローテーションを有効化または無効化することはできません。

詳細については、「AWS Key Management Service 開発者ガイド」の「[キーの自動ローテーションの仕組み](#)」を参照してください。

Amazon EBS 暗号化の例

暗号化された EBS リソースを作成すると、ボリューム作成パラメータまたは AMI やインスタンスのブロックデバイスマッピングで別のカスターマネージド型キーを指定しない限り、アカウントの EBS 暗号化のデフォルト KMS キーによって暗号化されます。詳細については、「[EBS 暗号化の KMS キーの選択](#)」を参照してください。

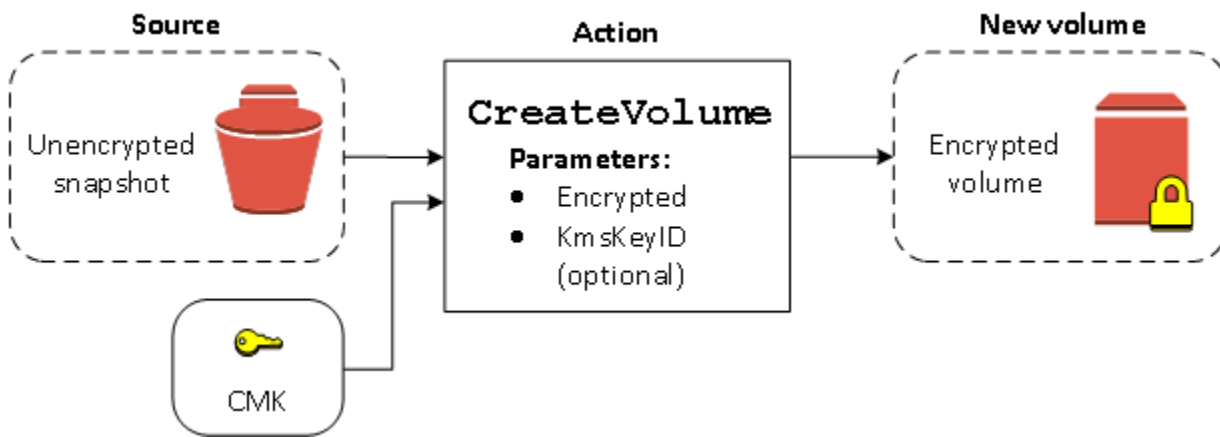
次の例では、ボリュームとスナップショットの暗号化状態を管理する方法を示します。暗号化のケースの完全なリストについては、[暗号化の結果の表](#)を参照してください。

例

- [暗号化されていないボリュームを復元する \(デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合\)](#)
- [暗号化されていないボリュームを復元する \(デフォルトでの暗号化が有効になっている場合\)](#)
- [暗号化されていないスナップショットをコピーする \(デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合\)](#)
- [暗号化されていないスナップショットをコピーする \(デフォルトでの暗号化が有効になっている場合\)](#)
- [暗号化ボリュームを再暗号化する](#)
- [暗号化スナップショットを再暗号化する](#)
- [暗号化されたボリュームと暗号化されていないボリュームとの間でデータを移行する](#)
- [暗号化の結果](#)

暗号化されていないボリュームを復元する (デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合)

デフォルトでの暗号化を有効にしないと、暗号化されていないスナップショットから復元されたボリュームは、デフォルトで暗号化されません。ただし、Encrypted パラメータと、必要に応じて KmsKeyId パラメータを設定して、結果のボリュームを暗号化することができます。以下の図は、そのプロセスを示したものです。

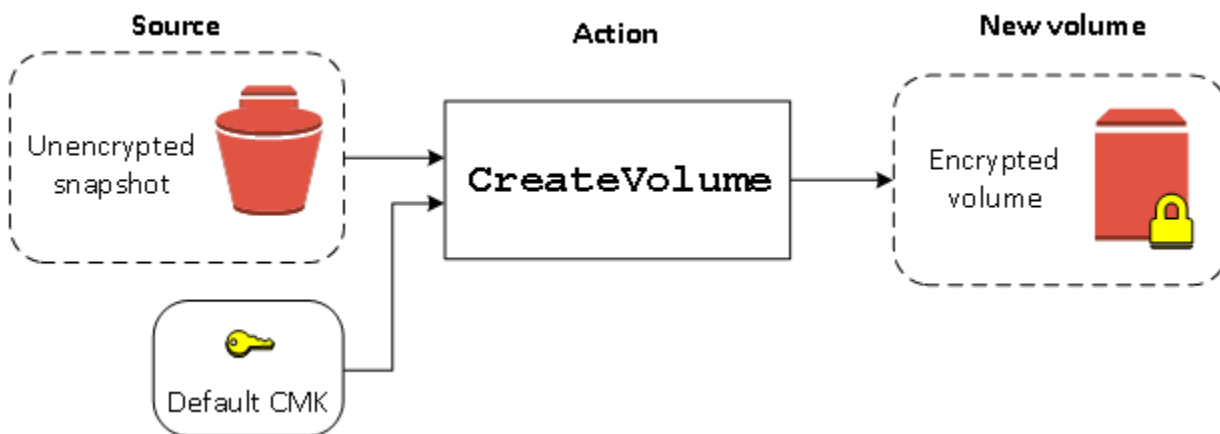


KmsKeyId パラメータを省略すると、結果のボリュームは EBS 暗号化のデフォルト KMS キーを使用して暗号化されます。ボリュームを別の KMS キーに暗号化するには、KMS キー ID を指定する必要があります。

詳細については、[スナップショットからのボリュームの作成](#)を参照してください。

暗号化されていないボリュームを復元する (デフォルトでの暗号化が有効になっている場合)

デフォルトでの暗号化を有効にした場合、暗号化されていないスナップショットから復元されたボリュームには暗号化が必須であり、デフォルトの KMS キーを使用するために暗号化パラメータは必要ありません。以下の図に、このデフォルトの簡単なケースを示しています。

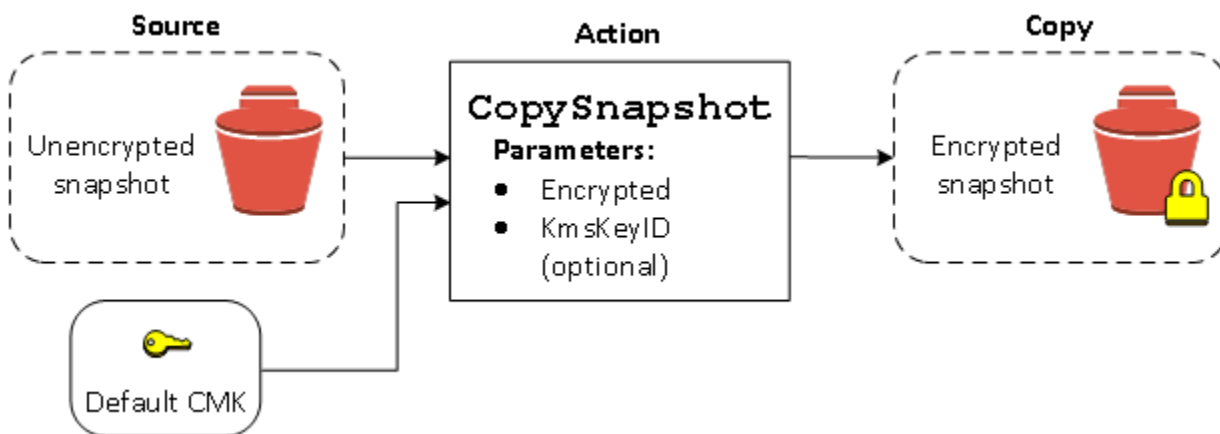


復元したボリュームを対称カスタマーマネージド型暗号化キーに暗号化する場合は、[暗号化されていないボリュームを復元する \(デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合\)](#) に示すように Encrypted と KmsKeyId の両方のパラメータを指定する必要があります。

暗号化されていないスナップショットをコピーする (デフォルトでの暗号化が有効になっていない場合)

デフォルトでの暗号化を有効にしないと、暗号化されていないスナップショットのコピーは、デフォルトで暗号化されません。ただし、Encrypted パラメータと、必要に応じて KmsKeyId パラメータを設定して、結果のスナップショットを暗号化することができます。KmsKeyId を省略すると、結果のスナップショットはデフォルトの KMS キーに暗号化されます。ボリュームを別の対称暗号化 KMS キーに暗号化するには、KMS キー ID を指定する必要があります。

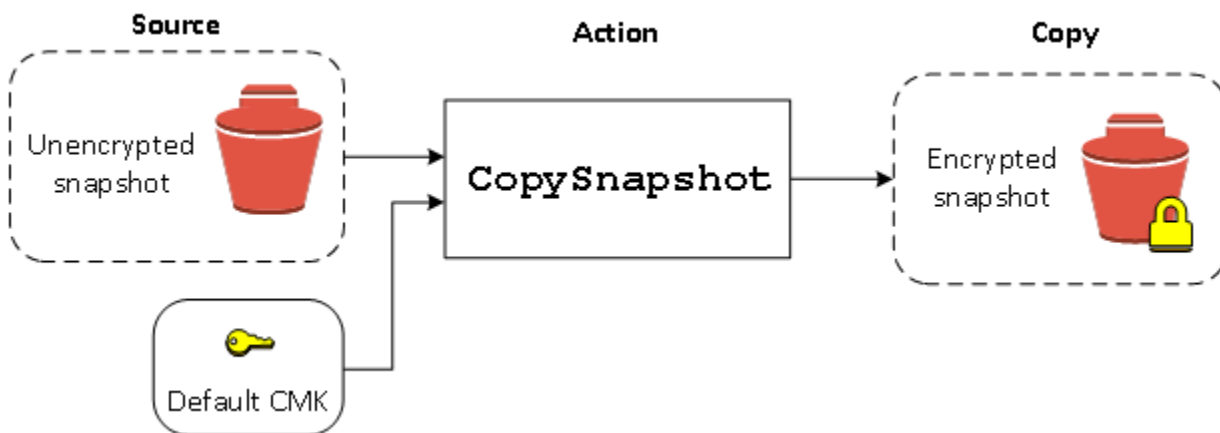
以下の図は、そのプロセスを示したものです。



EBS ボリュームを暗号化するには、暗号化されていないスナップショットを暗号化されたスナップショットにコピーし、その暗号化されたスナップショットからボリュームを作成することができます。詳細については、[Amazon EBS スナップショットのコピー](#)を参照してください。

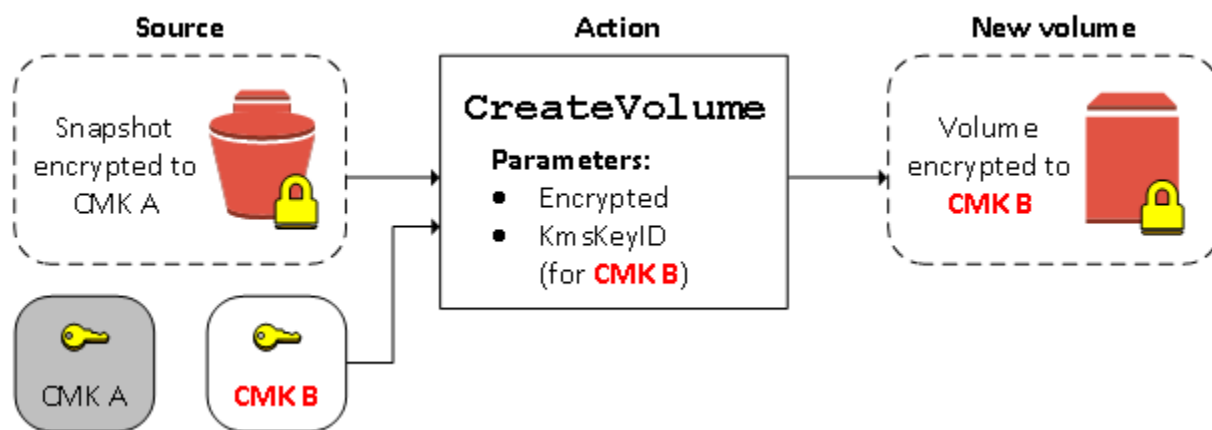
暗号化されていないスナップショットをコピーする (デフォルトでの暗号化が有効になっている場合)

デフォルトでの暗号化を有効にした場合、暗号化されていないスナップショットのコピーには暗号化が必須であり、デフォルトの KMS キーを使用する場合は、暗号化パラメータは必要ありません。このデフォルトのケースを次の図に示します。



暗号化ボリュームを再暗号化する

CreateVolume アクションが暗号化されたスナップショットに対して実行される時は、別の KMS キーでそれを再暗号化することができます。以下の図は、そのプロセスを示したものです。この例では、KMS キー A と KMS キー B の 2 つの KMS キーを所有しています。ソーススナップショットは KMS キー A によって暗号化されています。ボリュームの作成中に、パラメータとして指定された KMS キー B の KMS キー ID を使用して、ソースデータは自動的に復号され、次に KMS キー B によって再暗号化されます。

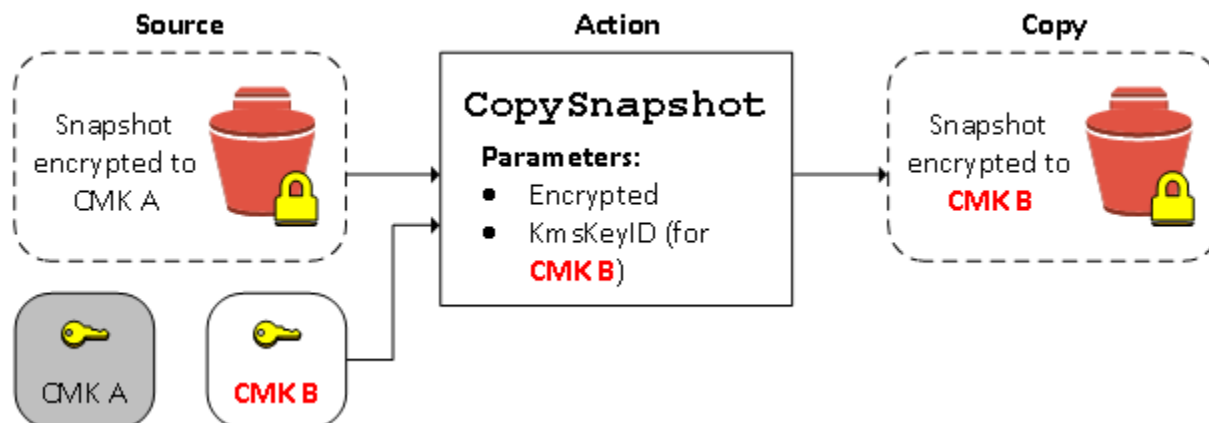


詳細については、[スナップショットからのボリュームの作成](#)を参照してください。

暗号化スナップショットを再暗号化する

スナップショットをコピー時に暗号化する機能により、既に暗号化された自己所有のスナップショットに新しい対称暗号化 KMS キーを適用できます。結果として作成されたコピーから復元されたボリュームには、新しい KMS キーを使用してのみアクセスすることができます。以下の図は、そのプロセスを示したものです。この例では、KMS キー A と KMS キー B の 2 つの KMS キーを所有しています。ソーススナップショットは KMS キー A によって暗号化されています。コピー中に、パ

ラメータとして指定された KMS キー B の KMS キー ID を使用して、ソースデータは自動的に KMS キー B によって再暗号化されます。



関連するシナリオでは、共有されているスナップショットのコピーに新しい暗号化パラメータを適用するよう選択できます。デフォルトでは、コピーは、スナップショットの所有者によって共有された KMS キーを使用して暗号化されます。ただし、管理する別の KMS キーを使用して、共有スナップショットのコピーを作成することをお勧めします。これにより、元の KMS キーが侵害された場合や、所有者が何らかの理由で KMS キーを無効にした場合に、ボリュームへのアクセスが保護されます。詳細については、[暗号化とスナップショットのコピー](#)を参照してください。

暗号化されたボリュームと暗号化されていないボリュームとの間でデータを移行する

暗号化されているボリュームと暗号化されていないボリュームの両方に対してアクセス許可がある場合は、これらの中で自由にデータを転送できます。EC2 では、暗号化と復号化のオペレーションが透過的に実行されます。

Linux インスタンス

例えば、rsync コマンドを使用してデータをコピーします。次のコマンドでは、移行元のデータは /mnt/source にあり、移行先のボリュームは /mnt/destination にマウントされています。

```
[ec2-user ~]$ sudo rsync -avh --progress /mnt/source/ /mnt/destination/
```

Windows インスタンス

例えば、robocopy コマンドを使用してデータをコピーします。次のコマンドでは、移行元のデータは D:\ にあり、移行先のボリュームは E:\ にマウントされています。

```
PS C:\> robocopy D:\sourcefolder E:\destinationfolder /e /copyall /eta
```

非表示のフォルダで問題が発生することを回避するために、ボリューム全体をコピーするのではなく、フォルダを使用することをお勧めします。

暗号化の結果

次の表に、設定可能な組み合わせごとの暗号化の結果を示します。

EBS 暗号化が有効になっていますか？	デフォルトで暗号化が有効になっていますか？	ボリュームのソース	デフォルト (カスタマーマネージド型キーの指定なし)	カスタム (カスタマーマネージド型キーの指定あり)
いいえ	いいえ	新しい (空の) ボリューム	暗号化されていない	該当なし
いいえ	いいえ	所有する暗号化されていないスナップショット	暗号化されていない	
いいえ	いいえ	お客様が所有する暗号化されたスナップショット	同じキーで暗号化されている	
いいえ	いいえ	お客様と共有されている暗号化されていないスナップショット	暗号化されていない	
いいえ	いいえ	お客様と共有されている暗号化されたスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化*	
はい	いいえ	新しいボリューム	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	指定したカスタマーマネージド型キーにより暗号化**
はい	いいえ	所有する暗号化されていないスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	

EBS 暗号化が有効になっていますか？	デフォルトで暗号化が有効になっていますか？	ボリュームのソース	デフォルト (カスタマーマネージド型キーの指定なし)	カスタム (カスタマーマネージド型キーの指定あり)
はい	いいえ	お客様が所有する暗号化されたスナップショット	同じキーで暗号化されている	
はい	いいえ	お客様と共有されている暗号化されていないスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	
はい	いいえ	お客様と共有されている暗号化されたスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	
いいえ	はい	新しい (空の) ボリューム	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	該当なし
いいえ	はい	所有する暗号化されていないスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	
いいえ	はい	お客様が所有する暗号化されたスナップショット	同じキーで暗号化されている	
いいえ	はい	お客様と共有されている暗号化されていないスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	
いいえ	はい	お客様と共有されている暗号化されたスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	
はい	はい	新しいボリューム	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	指定したカスタマーマネージド型キーにより暗号化

EBS 暗号化が有効になっていますか？	デフォルトで暗号化が有効になっていますか？	ボリュームのソース	デフォルト (カスタマーマネージド型キーの指定なし)	カスタム (カスタマーマネージド型キーの指定あり)
はい	はい	所有する暗号化されていないスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	
はい	はい	お客様が所有する暗号化されたスナップショット	同じキーで暗号化されている	
はい	はい	お客様と共有されている暗号化されていないスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	
はい	はい	お客様と共有されている暗号化されたスナップショット	デフォルトのカスタマーマネージド型キーで暗号化	

* これは、AWS アカウントとリージョンで、EBS 暗号化に使用されるデフォルトのカスタマーマネージド型キーです。デフォルトでは、これが EBS 用の一意の AWS マネージドキーになりますが、カスタマーマネージド型キーを指定することもできます。詳細については、「[EBS 暗号化の KMS キーの選択](#)」を参照してください。

** これは、ボリュームの起動時に指定されたカスタマーマネージド型キーです。このカスタマーマネージド型キーは、AWS アカウントとリージョンで、既定のカスタマーマネージド型キーの代わりに使用されます。

Amazon EBS ボリュームパフォーマンス

Amazon EBS のパフォーマンスは、I/O 特性やインスタンスとボリュームの設定などを含むいくつかの要因に左右されます。Amazon EBS 製品および Amazon EC2 製品の詳細ページに記載されているガイダンスに従うと、通常は良好なパフォーマンスを実現することができます。ただし、ピークパフォーマンスを実現するには、多少のチューニングを行う必要な場合があります。最適な設定を決定するには、ベンチマークに加えて、実際のワークロードからの情報でパフォーマンスをチューニングすることをお勧めします。EBS ボリュームの基本操作について理解したら、必要とする I/O パフォーマンスと、Amazon EBS パフォーマンスを向上させるオプションを確認し、そのパフォーマンス要件に対応できるようにすることをお勧めします。

AWS が EBS ボリュームタイプのパフォーマンスを更新しても、既存のボリュームにすぐには反映されない場合があります。古いボリュームで完全なパフォーマンスを確認するためには、最初に ModifyVolume アクションの実行が必要になる場合があります。詳細については、「[Amazon EBS Elastic Volumes を使用してボリュームを変更する](#)」を参照してください。

コンテンツ

- [Amazon EBS パフォーマンスのヒント](#)
- [Amazon EBS パフォーマンスの最適化](#)
- [Amazon EBS I/O の特性およびモニタリング](#)
- [Amazon EBS ボリュームの初期化](#)
- [Amazon EBS および RAID の構成](#)
- [EBS ボリュームのベンチマーク](#)

Amazon EBS パフォーマンスのヒント

ここに示すヒントは、さまざまなユーザーシナリオで、EBS ボリュームから最適なパフォーマンスを得るためのベストプラクティスを表しています。

EBS 最適化インスタンスを使用する

EBS 最適化スループットがサポートされていないインスタンスでは、インスタンスと EBS ボリュームの間のトラフィックが、ネットワークトラフィックと競合する場合があります。EBS 最適化インスタンスでは、これら 2 種類のトラフィックを分離した状態が維持されます。EBS 最適化インスタンスの設定によっては、追加コストが発生する場合 (C3、R3、M3 など) と、追加コストなしで常に

EBS 最適化状態になる場合 (M4、C4、C5、D2 など) があります。詳細については、「[Amazon EBS パフォーマンスの最適化](#)」を参照してください。

パフォーマンスの計算方法を理解する

EBS ボリュームのパフォーマンスを測定する場合、関連する測定単位と、パフォーマンスの計算方法を理解することが重要です。詳細については、[Amazon EBS I/O の特性およびモニタリング](#)を参照してください。

ワークロードを理解する

EBS ボリュームの最大パフォーマンス、I/O 操作の数およびサイズ、各アクションが完了するまでの所要時間は、互いに関連しています。これらの各要因 (パフォーマンス、I/O、レイテンシー) は相互に影響を与えます。また、アプリケーションが異なると、影響を受ける要因もさまざまに異なります。詳細については、「[EBS ボリュームのベンチマーク](#)」を参照してください。

スナップショットからボリュームを初期化する際のパフォーマンス低下に注意する

スナップショットから作成された新しい EBS ボリュームの各データブロックに初めてアクセスするときには、レイテンシーが著しく増加します。このパフォーマンスヒットは、以下のいずれかの方法で回避できます。

- 各ブロックへのアクセスが、ボリュームの本番環境への移行前に起こるようにする。このプロセスは、初期化と呼ばれます (以前は事前ウォーミングと呼ばれていました)。詳細については、[Amazon EBS ボリュームの初期化](#)を参照してください。
- スナップショットの高速スナップショット復元を有効化して、スナップショットから作成される EBS ボリュームが作成時に完全に初期化され、各ボリュームのあらゆるプロビジョンドパフォーマンスが即座に発揮されるようにします。詳細については、[Amazon EBS 高速スナップショット復元](#)を参照してください。

HDD パフォーマンスが低下する要因

スループット最適化 HDD (st1) または Cold HDD (sc1) ボリュームのスナップショットを作成すると、スナップショットの進行中はボリュームのベースライン値までパフォーマンスが低下する可能性があります。この動作は、これらのボリュームタイプに固有です。パフォーマンスが制限される他の要因としては、インスタンスでのサポート範囲を超えるスループットの強要、スナップショットから

作成したボリュームの初期化中のパフォーマンス低下、ボリュームに対する大量の小さなランダム I/O などがあります。HDD ボリュームのスループットを計算する方法については、[Amazon EBS ボリュームの種類](#)を参照してください。

アプリケーションから送られる I/O リクエスト数が十分でない場合も、パフォーマンスに影響します。これは、ボリュームのキュー長や I/O サイズを確認することで監視できます。このキュー長とは、アプリケーションからボリュームへの I/O リクエストのうち処理待ちのもの数です。最大限の安定性を確保するために、HDD-Backed ボリュームで 1 MiB のシーケンシャル I/O を実行する際には、キュー長 (整数に四捨五入) を 4 以上に保つ必要があります。安定したパフォーマンスの確保については、[Amazon EBS I/O の特性およびモニタリング](#)を参照してください。

st1 および sc1 (Linux インスタンスインスタンスのみ) で高いスループットの読み取りが多いワークロードに先読みを増やす

一部のワークロードでは読み取りが多く、オペレーティングシステムのページキャッシュを通じて (例えば、ファイルシステムから) ブロックデバイスへのアクセスが行われます。この場合、最大スループットを実現するには、先読みを 1 MiB に設定することをお勧めします。これは HDD ボリュームにのみ適用されるブロックデバイス単位の設定です。

ブロックデバイスに対する現在の先読み値を調べるには、次のコマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ sudo blockdev --report /dev/<device>
```

ブロックデバイス情報は次の形式で返されます。

R0	RA	SSZ	BSZ	StartSec	Size	Device
rw	256	512	4096	4096	8587820544	/dev/<device>

表示されているデバイスについては、先読み値として 256 (デフォルト値) が報告されています。この数値にセクターサイズ (512 バイト) を乗算すると、先読みバッファのサイズ (この場合は 128 KiB) を得ることができます。バッファ値を 1 MiB に設定するには、次のコマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ sudo blockdev --setra 2048 /dev/<device>
```

最初のコマンドをもう一度実行して、先読み設定が 2,048 になったことを確認します。

この設定は、ワークロードがサイズの大きなシーケンシャル I/O で構成される場合にのみ使用してください。ワークロードの内容として、サイズの小さなランダム I/O がほとんどであれば、この設定

を使用すると逆にパフォーマンスが低下します。一般的に、サイズの小さい I/O やランダム I/O が大部分を占めるワークロードの場合は、st1 や sc1 ポリユームではなく、汎用 SSD (gp2 および gp3) ポリユームの使用を検討してください。

最新の Linux カーネルを使用する (Linux インスタンスのみ)

間接記述子がサポートされている最新の Linux カーネルを使用します。Linux カーネル 3.8 以降には、すべてこのサポートがあり、現行世代の EC2 インスタンスも同様です。平均 I/O サイズが 44 KiB 前後であれば、間接記述子がサポートされていないインスタンスやカーネルを使用している可能性があります。Amazon CloudWatch のメトリクスから平均 I/O サイズを得る方法については、[Amazon EBS I/O の特性およびモニタリング](#)を参照してください。

st1 または sc1 ポリユームで最大スループットを達成するには、256 の値を、`xen_blkfront.max` パラメータ (Linux カーネルバージョン 4.6 未満の場合) または `xen_blkfront.max_indirect_segments` パラメータ (Linux カーネルバージョン 4.6 以降の場合) に適用することを推奨します。適切なパラメータは、OS の起動コマンドラインで設定できます。

例えば、Amazon Linux AMI では、`/boot/grub/menu.lst` に記述されている GRUB 設定で kernel 行の末尾に追加できます。

```
kernel /boot/vmlinuz-4.4.5-15.26.amzn1.x86_64 root=LABEL=/ console=ttyS0
xen_blkfront.max=256
```

後のカーネルの場合、コマンドは次のようになります。

```
kernel /boot/vmlinuz-4.9.20-11.31.amzn1.x86_64 root=LABEL=/ console=tty1 console=ttyS0
xen_blkfront.max_indirect_segments=256
```

この設定を有効にするには、インスタンスを再起動する必要があります。

詳細については、「[準仮想化 AMIs 向けの GRUB の設定](#)」を参照してください。他の Linux ディストリビューションでは (特に GRUB ブートローダーが使用されていない場合)、カーネル パラメータの調整に別のアプローチが必要になることがあります。

EBS I/O の特性の詳細については、このトピックの[Amazon EBS: パフォーマンスを考慮した設計プレゼンテーション](#)を参照してください。

RAID 0 を使用してインスタンスのリソース使用率を最大化する

一部のインスタンスタイプでは、単一の EBS ボリュームをプロビジョニングする場合よりも I/O スループットを増やすことができます。複数のボリュームを RAID 0 設定で結合し、これらのインスタンス用の利用可能な帯域幅を使用できます。詳細については、[Amazon EBS および RAID の構成](#)を参照してください。

Amazon CloudWatch を使用してパフォーマンスを追跡する

Amazon Web Services は、Amazon CloudWatch による分析と表示が可能な Amazon EBS のパフォーマンスメトリクスと、ボリュームの健全性の監視に使用できるステータスチェックを提供します。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームのモニタリング](#)」を参照してください。

Amazon EBS パフォーマンスの最適化

Amazon EBS 最適化インスタンスは、最適化された設定スタックを使用し、Amazon EBS I/O 用に専用のキャパシティを追加で提供します。このように最適化することで、Amazon EBS I/O と、インスタンスからのその他のトラフィックとの間の競合を最小に抑え、EBS ボリュームの最高のパフォーマンスを実現します。

EBS 最適化インスタンスは、Amazon EBS 用に専用の帯域幅を用意します。汎用 SSD (gp2 および gp3) ボリュームを EBS 最適化インスタンスにアタッチすると、1年で99%の期間、プロビジョンド IOPS パフォーマンスの少なくとも90%のボリュームが提供されます。また、プロビジョンド IOPS SSD (io1 および io2) ボリュームでは、1年で99.9%の期間、プロビジョンド IOPS パフォーマンスの少なくとも90%のボリュームが提供されます。スループット最適化 HDD (st1) および Cold HDD (sc1) のどちらでも、1年で99%の期間、想定されるスループットパフォーマンスの少なくとも90%のボリュームが提供されます。毎時間、予測合計スループットの99%達成を目標に、準拠しない期間はほぼ均一に分散されています。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの種類](#)」を参照してください。

詳細については、「Linux インスタンス用 Amazon EC2 ユーザーガイド」の「[Amazon EBS 最適化インスタンス](#)」を参照してください。

Amazon EBS I/O の特性およびモニタリング

ボリューム設定が同じであっても、特定の I/O 特性により EBS ボリュームのパフォーマンス動作が向上します。SSD-Backed ボリューム – 汎用 SSD (gp2 および gp3) とプロビジョンド IOPS SSD

(io1 および io2) – I/O オペレーションがランダムでもシーケンシャルでも、安定したパフォーマンスが提供されます。HDD-Backed ボリューム – スループット最適化 HDD (st1) および Cold HDD (sc1) – サイズが大きくシーケンシャルな I/O の場合のみ、最適なパフォーマンスが提供されます。アプリケーションにおける SSD ボリュームおよび HDD ボリュームのパフォーマンスについて理解するには、ボリュームに対するデマンド、ボリュームに対して使用可能な IOPS の量、I/O 操作が完了するまでにかかる時間、およびボリュームのスループット制限の間のつながりについて知ることが重要です。

トピック

- [IOPS](#)
- [ボリュームのキュー長とレイテンシー](#)
- [I/O サイズとボリュームのスループット制限](#)
- [CloudWatch を使用して I/O 特性を監視する](#)
- [関連リソース](#)

IOPS

IOPS とは、1 秒あたりの入出力操作数を表す測定単位です。操作は KiB 単位で計測され、基礎となるドライブテクノロジーが1つの I/O としてカウントするデータの最大量を決定します。I/O サイズは、SSD ボリュームで 256 KiB、HDD ボリュームで 1,024 KiB に制限されます。これは、小さい I/O やランダム I/O の扱いにおいて、SSD ボリュームは HDD ボリュームに比べてはるかに効率的であるためです。

小さな I/O 操作が物理的に連続している場合、Amazon EBS ではできる限りこれらを最大の I/O サイズになるまで、単一の I/O 操作にマージして処理します。同様に、I/O 操作が最大 I/O サイズより大きい場合、Amazon EBS ではより小さな I/O 操作に分割して処理しようとします。例をいくつか、次の表に示します。

ボリュームタイプ	最大 I/O サイズ	アプリケーションからの I/O 操作	IOPS 数	コメント
SSD	256 KiB	1 x 1024 KiB I/O 操作	4 (1,024 ÷ 256 = 4)	Amazon EBS は、1,024 の I/O 操作を 4 つのより小

ボリュームタイプ	最大 I/O サイズ	アプリケーションからの I/O 操作	IOPS 数	コメント
				さな 256 KiB の操作に分割します。
		8 x シーケンシャル 32 KiB I/O 操作	1 (8 x 32 = 256)	Amazon EBS は、8 つの連続した 32 KiB の I/O 操作を、1 つの 256 KiB の操作にマージします。
		8 つのランダムな 32 KiB の I/O 操作	8	Amazon EBS は、ランダムな I/O 操作を個別にカウントします。
HDD	1,024 KiB	1 x 1024 KiB I/O 操作	1	I/O 操作は、すでに最大 I/O サイズと等しくなっています。マージまたは分割されません。
		8 x シーケンシャル 128 KiB I/O 操作	1 (8 x 128 = 1,024)	Amazon EBS は、連続した 8 つの 128 KiB I/O 操作を、1 つの 1,024 KiB の I/O 操作にマージします。
		8 つのランダムな 32 KiB の I/O 操作	8	Amazon EBS は、ランダムな I/O 操作を個別にカウントします。

このため、3,000 IOPS をサポートする SSD-Backed ボリュームを (Provisioned IOPS SSD ボリュームを 3,000 IOPS でプロビジョニングするか、汎用 SSD ボリュームを 1000 GiB にサイズ設定することによって) 作成し、十分な帯域幅を提供できる EBS 最適化インスタンスにアタッチした場合、1 秒あたり最大 3,000 件の I/O 操作分のデータを転送できます (スループットは I/O サイズで決まります)。

ボリュームのキュー長とレイテンシー

ボリュームのキュー長とは、デバイスに対する保留中の I/O リクエストの数です。レイテンシーとは、実際に I/O 操作にかかるエンドツーエンドのクライアント時間です。つまり、I/O を EBS に送信してから、読み取りまたは書き込みの I/O が完了したという確認を EBS から受信するまでの時間ということになります。ゲストオペレーティングシステムまたは EBS へのネットワークリンクでのボトルネックを回避するには、I/O サイズとレイテンシーに合わせて正しくキュー長を調整する必要があります。

最適なキュー長は、アプリケーションがどの程度 IOPS およびレイテンシーの影響を受けるかによってワークロードごとに異なります。EBS ボリュームで利用可能なパフォーマンスをフル活用するための十分な I/O リクエストがワークロードから提供されないと、プロビジョニングどおりの IOPS またはスループットをボリュームで実現できないことがあります。

トランザクション量の多いアプリケーションは、I/O レイテンシーの上昇の影響を受けるため、SSD-Backed ボリュームが適しています。キュー長を小さく抑え、ボリュームで利用可能な限り高い IOPS を維持することにより、低いレイテンシーと高い IOPS を実現できます。ボリュームで利用可能な IOPS を超える IOPS を継続的に強制すると、I/O レイテンシーが上昇する可能性があります。

スループットが高いアプリケーションは I/O レイテンシーの上昇による影響を受けにくいいため、HDD-Backed ボリュームが適しています。HDD-Backed ボリュームに対する高いスループットを維持するには、サイズの大きなシーケンシャル I/O を実行するときにキュー長を大きくします。

I/O サイズとボリュームのスループット制限

SSD-Backed ボリュームで I/O サイズが非常に大きい場合は、ボリュームのスループット制限に達することにより、IOPS 値がプロビジョニングした値よりも小さくなる場合があります。例えば、利用可能なバーストクレジットを持つ 1,000 GiB 未満の gp2 ボリュームの IOPS 制限は 3,000 で、ボリュームスループット制限は 250 MiB/秒です。256 KiB の I/O サイズを使用している場合、ボリュームは 1000 IOPS ($1000 \times 256 \text{ KiB} = 250 \text{ MiB}$) でスループット制限に達します。より小さい I/O サイズ (16 KiB など) では、スループットが 250 MiB/s を大幅に下回っているため、同じボリュームで 3,000 IOPS を維持できます。(これらの例では、ボリュームの I/O がインスタンスのスループット限界に達

していないと想定しています)。各 EBS ボリュームタイプのスループット制限については、[Amazon EBS ボリュームの種類](#)を参照してください。

サイズの小さな I/O 操作では、インスタンス内で測定した IOPS がプロビジョニングの値より高くなる場合があります。この状況は、インスタンスのオペレーティングシステムが、小さな I/O 操作を Amazon EBS に渡す前に、大きな操作にマージした場合に生じます。

ワークロードが HDD バックアップの st1 および sc1 ボリュームでシーケンシャル I/O を使用する場合、ワークロードで使用している I/O がシーケンシャルであれば、インスタンス内で測定した IOPS が予測値より高くなる場合があります。この状況は、インスタンスのオペレーティングシステムが、シーケンシャル I/O をマージし、1,024 KiB サイズ単位でカウントすることによって生じます。ワークロードで小さな I/O またはランダム I/O を使用している場合は、スループットが予測値より低くなる場合があります。これは、非シーケンシャルの各ランダム I/O をカウントして合計の IOPS カウントを求める過程で、予測より早くボリュームの IOPS 制限に達する場合があります。

EBS ボリュームタイプに関係なく、設定したはずの IOPS またはスループットを得られない場合は、EC2 インスタンスの帯域幅が制限要因になっていないか確認してください。最適なパフォーマンスを得るには、常に現行世代の EBS 最適化インスタンス (または、10 Gb/s のネットワーク接続を確保できるインスタンス) を使用してください。予想された IOPS が得られない別の原因として、EBS ボリュームに対して十分な I/O を提供していないことが考えられます。

CloudWatch を使用して I/O 特性を監視する

これらの I/O 特性は、各ボリュームの [CloudWatch ボリュームメトリクス](#) を使用してモニタリングできます。考慮すべき重要なメトリクスは次のとおりです。

- VolumeStalledIOCheck
- BurstBalance
- VolumeReadBytes | VolumeWriteBytes
- VolumeReadOps | VolumeWriteOps
- VolumeQueueLength

VolumeStalledIOCheck は、EBS ボリュームのステータスをモニタリングして、ボリュームに障害が発生した時期を判断します。メトリクスは、EBS ボリュームが I/O 操作を完了できるかどうかに基づいて 0 (合格) または 1 (失敗) ステータスを返すバイナリ値です。このチェックでは、Amazon EBS インフラストラクチャに関する次のような根本的な問題が検出されます。

- EBS ボリュームの基盤となるストレージサブシステムのハードウェアまたはソフトウェアの問題
- EC2 インスタンスからの EBS ボリュームの到達可能性に影響する、物理ホスト上のハードウェアの問題
- インスタンスと EBS ボリューム間の接続に関する問題

VolumeStalledIOCheck メトリクスが失敗した場合は、AWS が問題を解決するまで待つか、影響を受けたボリュームの置き換えやボリュームがアタッチされているインスタンスの停止および再起動などのアクションを実行することができます。ほとんどの場合、このメトリクスが失敗すると、EBS は数分以内にボリュームを自動的に診断して復元します。AWS Fault Injection Service の [\[I/O の一時停止\]](#) アクションを使用してコントロールされた実験を実行し、このメトリクスに基づいてアーキテクチャやモニタリングをテストし、ストレージ障害に対する回復力を向上させることができます。

Amazon EBS ストレージ I/O レイテンシー

は、VolumeReadOps、VolumeWriteOps、VolumeTotalReadTime、および VolumeTotalWriteTime を使用して測定できます。次の式を使用すると、ボリュームの平均 I/O レイテンシーをモニタリングできます。

$$\text{Average I/O latency in ms/op} = (\text{VolumeTotalReadTime} + \text{VolumeTotalWriteTime}) / (\text{VolumeReadOps} + \text{VolumeWriteOps})$$

I/O レイテンシーが必要な値よりも大きい場合、駆動される IOPS をチェックして、アプリケーションがプロビジョニングした IOPS 以上の処理を実行しようとしていないことを確認します。ボリューム上の IOPS の平均駆動回数をモニタリングするには、次の式を使用します。

$$\text{Estimated average IOPS in ops/s} = (\text{Sum}(\text{VolumeReadOps}) + \text{Sum}(\text{VolumeWriteOps})) / (\text{Period} - \text{Sum}(\text{VolumeIdleTime}))$$

ボリュームが提供できるよりも多くの IOPS がアプリケーションに必要な場合は、次のいずれかの使用を検討する必要があります。

- 必要なレイテンシーを実現するのに十分な IOPS がプロビジョニングされている、gp3、io2、または io1 ボリューム
- 十分なベースライン IOPS パフォーマンスを実現するより大容量の gp2 ボリューム

st1 および sc1 の HDD-Back ボリュームは、1,024 KiB の最大 I/O サイズを活用するワークロードに最適な設定になっています。ボリュームの平均 I/O サイズを求めるには、VolumeWriteBytes を VolumeWriteOps で除算します。読み取り操作にも同じ計算を適用できます。平均 I/O サイズが

64 KiB を下回る場合は、st1 または sc1 のボリュームに送る I/O 操作のサイズを大きくすると、パフォーマンスが向上します。

Note

平均 I/O サイズが 44 KiB 前後であれば、間接記述子がサポートされていないインスタンスやカーネルを使用している可能性があります。Linux カーネル 3.8 以降には、すべてこのサポートがあり、現行世代のインスタンスも同様です。

BurstBalance は gp2、st1、および sc1 ボリュームのバーストバケットバランスを残りのバランスの割合として表示します。バーストバケットが減ると、ボリューム I/O (gp2 ボリューム用) またはボリュームスループット (st1 および sc1 ボリューム用) はベースラインにスロットリングされます。この理由でボリュームに制限が適用されているかどうかを確認するには、BurstBalance の値を調べてください。利用可能な Amazon EBS メトリクスの完全なリストについては、[Amazon EBS の Amazon CloudWatch メトリックス](#) および「[Nitro ベースのインスタンスの Amazon EBS メトリックス](#)」を参照してください。

関連リソース

Amazon EBS の I/O 特性の詳細については、re:Invent プレゼンテーション [Amazon EBS: パフォーマンスを考慮した設計](#) を参照してください。

Amazon EBS ボリュームの初期化

空の EBS ボリュームは、作成されるとすぐに最大のパフォーマンスを発揮し、初期化 (以前は事前ウォーミングと呼ばれました) を必要としません。

スナップショットから作成されたボリュームの場合、ボリュームのタイプを問わず、アクセスする前に、ストレージブロックが Amazon S3 からプルダウンされてボリュームに書き込まれている必要があります。この事前処理には一定の時間がかかるため、各ブロックへの初回アクセス時には、I/O 操作のレイテンシーが著しく増加する可能性があります。ボリュームのパフォーマンスは、すべてのブロックがダウンロードされてボリュームに書き込まれると正常値に達します。

Important

スナップショットから作成された Provisioned IOPS SSD ボリュームを初期化している間は、ボリュームのパフォーマンスが想定レベルの 50% を下回る場合があります。この

ため、ボリュームは [I/O Performance (I/O 性能)] ステータスチェックで warning 状態が表示されます。これは想定動作です。初期化中の Provisioned IOPS SSD ボリュームの warning 状態は無視してかまいません。詳細については、[EBS ボリュームステータスチェック](#)を参照してください。

ほとんどのアプリケーションにとって、ボリュームの存続期間全体で初期化コストを割り当てることは、許容範囲内です。本番環境におけるこの初期パフォーマンスヒットは、以下のいずれかの方法で回避できます。

- ボリューム全体の即時初期化を強制する。詳細については、[Linux インスタンス](#) (Linux インスタンス) または [Windows インスタンス](#) (Windows インスタンス) を参照してください。
- スナップショットの高速スナップショット復元を有効化して、スナップショットから作成される EBS ボリュームが作成時に完全に初期化され、各ボリュームのあらゆるプロビジョンドパフォーマンスが即座に発揮されるようにします。詳細については、「[Amazon EBS 高速スナップショット復元](#)」を参照してください。

Linux インスタンス

Linux で、スナップショットから作成されたボリュームを初期化するには

1. 新しく復元されたボリュームを Linux インスタンスにアタッチします。
2. インスタンスのブロックデバイスを一覧表示するには、lsblk コマンドを使用します。

```
[ec2-user ~]$ lsblk
NAME MAJ:MIN RM SIZE RO TYPE MOUNTPOINT
xvdf  202:80  0  30G  0 disk
xvda1 202:1   0   8G  0 disk /
```

ここでは、新しいボリューム/dev/xvdf がアタッチされていますが、マウントされていないことがわかります (MOUNTPOINT 列の下にリストされているパスがないため)。

3. デバイスのすべてのブロックを読み取るには、dd ユーティリティまたは fio ユーティリティを使用します。Linux システムにデフォルトでインストールされているのは dd コマンドですが、マルチスレッドの読み取りが可能な fio の方が、処理速度が大幅に速くなります。

Note

このステップは、使用している EC2 インスタンスの帯域幅、ボリュームに対してプロビジョニングされている IOPS、そしてボリュームのサイズに応じて、数分から数時間かかることがあります。

[dd] if (入力ファイル) パラメータは、初期化するドライブに設定します。of (出力ファイル) パラメータは、Linux ヌル仮想デバイス /dev/null に設定する必要があります。bs パラメータは、読み取り操作のブロックサイズに設定します。最適なパフォーマンスを得るには、この値を 1 MB に設定します。

Important

dd を誤って使用すると、ボリュームのデータが失われる場合があります。以下のコマンド例に正確に従ってください。if=/dev/**xvdf** パラメータのみ、読み出しているデバイスの名前によって異なります。

```
[ec2-user ~]$ sudo dd if=/dev/xvdf of=/dev/null bs=1M
```

[fio] システムに fio がインストールされている場合、ボリュームを初期化するには次のコマンドを使用します。--filename (入力ファイル) パラメータは、初期化するドライブに設定します。

```
[ec2-user ~]$ sudo fio --filename=/dev/xvdf --rw=read --bs=1M --iodepth=32 --ioengine=libaio --direct=1 --name=volume-initialize
```

Amazon Linux に fio をインストールするには、次のコマンドを使用します。

```
sudo yum install -y fio
```

Ubuntu に fio インストールするには、次のコマンドを使用します。

```
sudo apt-get install -y fio
```

この操作が終了すると、読み取り操作のレポートが表示されます。これでボリュームを使用する準備ができました。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」を参照してください。

Windows インスタンス

どちらのツールを使用する前も、次のようにシステム上のディスクについての情報を収集してください。

システムディスクに関する情報を収集するには

1. システムで使用可能なディスクを一覧表示するには、`wmic` コマンドを使用します。

```
wmic diskdrive get size,deviceid
```

出力例を次に示します。

```
DeviceID          Size
\\.\PHYSICALDRIVE2 80517265920
\\.\PHYSICALDRIVE1 80517265920
\\.\PHYSICALDRIVE0 128849011200
\\.\PHYSICALDRIVE3 107372805120
```

2. `dd` または `fio` を使用して、初期化するディスクを識別します。C: ドライブは、`\\.\PHYSICALDRIVE0` にあります。使用するドライブ番号がはっきりしない場合は、`diskmgmt.msc` ユーティリティを使用して、ドライブ文字とディスクドライブ番号を比較できます。

Use the dd utility

`dd` をインストールおよび使用してボリュームを初期化するには、次の手順を実行します。

重要な考慮事項

- ボリュームの初期化には、使用している EC2 インスタンスの帯域幅、ボリュームに対してプロビジョニングされている IOPS、そしてボリュームのサイズに応じて、数分から数時間かかることがあります。

- dd を誤って使用すると、ボリュームのデータが失われる場合があります。この手順を正確に実行してください。

Windows 向け dd をインストールするには

Windows 用 dd プログラムは、Linux や Unix システムで共通して使用できる dd プログラムと同様の環境を提供します。このプログラムを使用すると、スナップショットから作成された Amazon EBS ボリュームを初期化することができます。最新のベータバージョンでは、`/dev/null` 仮想デバイスをサポートしています。以前のバージョンをインストールする場合は、代わりに `nul` 仮想デバイスを使用できます。詳細なドキュメントは、<http://www.chrysocome.net/dd> から入手できます。

1. Windows 用の最新バイナリバージョンの dd を、<http://www.chrysocome.net/dd> からダウンロードします。
2. (オプション) 簡単に覚えられる場所に、コマンドラインユーティリティ用のフォルダを作成します (`C:\bin` など)。コマンドラインユーティリティ用にフォルダを既に指定した場合、次の手順を実行する代わりに、そのフォルダを使用できます。
3. バイナリパッケージを解凍し、`dd.exe` ファイルをコマンドラインユーティリティのフォルダ (`C:\bin` など) にコピーします。
4. どこからでもフォルダ内のプログラムを実行できるようにするため、Path 環境変数にコマンドラインユーティリティのフォルダを追加します。
 - a. [スタート] を選択し、[PC] のコンテキスト (右クリック) メニューを開いて、[プロパティ] を選択します。
 - b. [システムの詳細設定]、[環境変数] の順に選択します。
 - c. [システム環境変数] で [Path] 変数を選択し、[編集] を選択します。
 - d. [変数値] として、既存の値の最後に、セミコロンとコマンドラインユーティリティフォルダの場所 (`;C:\bin\) を追加します。`
 - e. [OK] をクリックして、[システム変数の編集] ウィンドウを閉じます。
5. 新しいコマンドプロンプトウィンドウを開きます。前の手順を行っても、現在開いているコマンドプロンプトウィンドウの環境変数は更新されません。前の手順を完了した時点で開くコマンドプロンプトウィンドウが更新されます。

Windows 用 dd を使ってボリュームを初期化するには

指定したデバイスのすべてのブロックの読み取り (および /dev/null 仮想デバイスへの出力の送信) を実行するには、次のコマンドを実行します。このコマンドは、既存のデータを安全に初期化します。

```
dd if=\\.\PHYSICALDRIVE $n$  of=/dev/null bs=1M --progress --size
```

dd がボリュームの末尾を超えて読み取りを行おうとすると、エラーが表示されることがあります。このエラーを無視しても問題ありません。

以前のバージョンの dd コマンドを使用した場合、そのコマンドは /dev/null デバイスをサポートしていません。代わりに、次のように nul デバイスを使用することができます。

```
dd if=\\.\PHYSICALDRIVE $n$  of=nul bs=1M --progress --size
```

Use the fio utility

fio をインストールおよび使用してボリュームを初期化するには、次の手順を実行します。

Windows 用 fio をインストールするには

Windows 用 fio プログラムは、Linux や Unix システムで共通して使用できる fio プログラムと同様の環境を提供します。このプログラムを使用すると、スナップショットから作成された Amazon EBS ボリュームを初期化することができます。詳細については、<https://github.com/axboe/fio> を参照してください。

1. [fio MSI](#) インストーラーをダウンロードするには、最新リリースの[アセット]を展開して、MSI インストーラーを選択します。
2. fio をインストールします。

Windows 用 fio を使用してボリュームを初期化するには

1. 次のようなコマンドを実行してボリュームを初期化します。

```
fio --filename=\\.\PHYSICALDRIVE $n$  --rw=read --bs=128k --iodepth=32 --direct=1  
--name=volume-initialize
```

2. この操作が終了すると、新規ボリュームを使用する準備が完了します。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームを使用できるようにする](#)」を参照してください。

Amazon EBS および RAID の構成

Amazon EBS では、従来のベアメタルサーバーで使用できる標準的な RAID 設定はすべて使用できます。ただしその RAID 設定が、お使いのインスタンスのオペレーティングシステムでサポートされている必要があります。これは、RAID がすべてソフトウェアレベルで実現されるためです。

Amazon EBS ボリュームのデータは、同じアベイラビリティーゾーン内の複数のサーバーにレプリケートされます。これは、コンポーネントの 1 つに障害が発生したことが原因でデータが失われるのを防ぐためです。このレプリケーションにより、一般的なコモディティディスクドライブに比べて Amazon EBS ボリュームの信頼性が 10 倍に高まります。詳細については、Amazon EBS 製品の詳細ページの[Amazon EBS の可用性と耐久性](#)を参照してください。

コンテンツ

- [RAID 設定オプション](#)
- [RAID 0 アレイの作成](#)
- [RAID アレイでのボリュームのスナップショットの作成](#)

RAID 設定オプション

RAID 0 アレイを作成すると、単一の Amazon EBS ボリュームでプロビジョニングする場合よりも、ファイルシステムで高レベルのパフォーマンスが実現されます。I/O パフォーマンスが最も重要視される場合には、RAID 0 を使用します。RAID 0 では、I/O がストライプ内のボリューム全体に分散されます。ボリュームを追加すると、スループットと IOPS を追加したことになります。ただし、ストライプのパフォーマンスは、セット内で最もパフォーマンスの低いボリュームにより制限されることに留意してください。セット内のボリュームが 1 つ失われた場合でも、結果としてアレイのデータが完全に失われます。

RAID 0 アレイの最終的なサイズは、アレイ内のボリュームサイズの合計です。帯域幅は、アレイ内のボリュームで利用可能な帯域幅の合計です。例えば、4,000 のプロビジョンド IOPS が設定された 500 GiB の io1 ボリュームが 2 つある場合、そのそれぞれが、使用可能な帯域幅が 8,000 IOPS でスループットが 1,000 MiB/秒の、1000 GiB の RAID 0 アレイを構築します。

Important

RAID 5 と RAID 6 ではボリュームに使用できる IOPS の一部がパリティ書き込み操作によって消費されるため、Amazon EBS にはこれらの RAID モードをお勧めしません。RAID アレイの構成によっては、これらの RAID モードで使用できる IOPS が RAID 0 構成と比較し

て 20 ~ 30% 少なくなる場合があります。これらの RAID モードにはコストの増加も伴います。ボリュームサイズとスピードが同じ 2 ボリュームの RAID 0 アレイの方が、コストが 2 倍の 4 ボリュームの RAID 6 アレイよりも優れたパフォーマンスが得られる場合があります。

RAID 1 も、Amazon EBS での使用が推奨されません。RAID 1 ではデータが同時に複数のボリュームに書き込まれるため、非 RAID 構成と比較して、Amazon EC2 と Amazon EBS の間により大きな帯域幅が必要となります。さらに、RAID 1 は書き込みパフォーマンスの向上をもたらしません。

RAID 0 アレイの作成

次の手順に従って RAID 0 アレイを作成します。

考慮事項

- この手順を実行する前に、RAID 0 アレイのサイズおよびプロビジョニングする IOPS 数を決定してください。
- アレイに作成するボリュームのサイズと IOPS パフォーマンス値は同一にしてください。EC2 インスタンスで利用可能な帯域幅を超えるアレイを作成しないよう注意してください。
- RAID ボリュームからの起動は避ける必要があります。デバイスの 1 つが失敗した場合、オペレーティングシステムを起動できなくなる場合があります。

Linux インスタンス

Linux で RAID 0 アレイを作成するには

1. アレイに Amazon EBS ボリュームを作成します。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの作成](#)」を参照してください。
2. アレイをホストするインスタンスに Amazon EBS ボリュームをアタッチします。詳細については、「[インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#)」を参照してください。
3. mdadm コマンドを使用して、新しくアタッチした Amazon EBS ボリュームから論理 RAID デバイスを作成します。`[number_of_volumes]` に、構成するアレイ内のボリュームの数を入れ、`device_name` に、アレイ内の各ボリュームのデバイス名 (`/dev/xvdf` など) を入れます。`MY_RAID` を、配列の一意の名前で置き換えることもできます。

Note

インスタンスのデバイス名を見つけるには、lsblk コマンドを使用してデバイスのリストを表示します。

RAID 0 アレイを作成するには、次のコマンドを実行します (アレイをストライプ化するには `--level=0` オプションをメモしておきます)。

```
[ec2-user ~]$ sudo mdadm --create --verbose /dev/md0 --level=0 --name=MY_RAID --raid-devices=number_of_volumes device_name1 device_name2
```

Tip

mdadm: command not found エラーが発生した場合は、`sudo yum install mdadm` コマンドを使用して mdadm をインストールします。

- RAID アレイでの初期化と同期に許可された時間です。これらのオペレーションの進行状況は、次のコマンドを使用して追跡できます。

```
[ec2-user ~]$ sudo cat /proc/mdstat
```

出力例を次に示します。

```
Personalities : [raid0]
md0 : active raid0 xvdc[1] xvdb[0]
      41910272 blocks super 1.2 512k chunks

unused devices: <none>
```

一般的に、次のコマンドで RAID アレイに関する詳細情報を表示できます。

```
[ec2-user ~]$ sudo mdadm --detail /dev/md0
```

出力例を次に示します。

```
/dev/md0:
```



```

Version : 1.2
Creation Time : Wed May 19 11:12:56 2021
  Raid Level : raid0
  Array Size : 41910272 (39.97 GiB 42.92 GB)
  Raid Devices : 2
  Total Devices : 2
  Persistence : Superblock is persistent

Update Time : Wed May 19 11:12:56 2021
  State : clean
Active Devices : 2
Working Devices : 2
Failed Devices : 0
Spare Devices : 0

Chunk Size : 512K

Consistency Policy : none

Name : MY_RAID
  UUID : 646aa723:db31bbc7:13c43daf:d5c51e0c
  Events : 0

Number Major Minor RaidDevice State
   0     202    16         0  active sync  /dev/sdb
   1     202    32         1  active sync  /dev/sdc

```

- RAID アレイにファイルシステムを作成し、それを後でマウントするときに、使用するラベルをそのファイルシステムに提供します。例えば、ext4 ファイルシステムのラベル **MY_RAID** で作成するには、次のコマンドを実行します。

```
[ec2-user ~]$ sudo mkfs.ext4 -L MY_RAID /dev/md0
```

アプリケーションの要件またはオペレーティングシステムの制限によって、ext3 や XFS などの異なるファイルシステムタイプを使用できます (対応するファイルシステム作成コマンドについては、ファイルシステムの資料を参照してください)。

- RAID アレイがブート時に自動的に再編成されることを確認するには、RAID 情報を含むように設定ファイルを作成します。

```
[ec2-user ~]$ sudo mdadm --detail --scan | sudo tee -a /etc/mdadm.conf
```

Note

Amazon Linux 以外の Linux ディストリビューションを使用している場合は、このコマンドを変更する必要があることがあります。例えば、ファイルを別の場所に配置することや、`--examine` パラメータを追加することが必要な場合があります。詳細については、Linux インスタンスで `man mdadm.conf` を実行します。

- 新しい RAID 設定のブロックデバイスモジュールを適切に事前ロードする新しいラムディスクイメージを作成する:

```
[ec2-user ~]$ sudo dracut -H -f /boot/initramfs-$(uname -r).img $(uname -r)
```

- RAID アレイのマウントポイントを作成します。

```
[ec2-user ~]$ sudo mkdir -p /mnt/raid
```

- 最後に、作成したマウントポイントに RAID デバイスをマウントします。

```
[ec2-user ~]$ sudo mount LABEL=MY_RAID /mnt/raid
```

これで RAID デバイスを使用する準備ができました。

- (オプション) システムブート時に常に、この Amazon EBS ボリュームをマウントするには、`/etc/fstab` ファイルにデバイス用のエントリを追加します。
 - `/etc/fstab` ファイルのバックアップコピーを作成すると、編集時に誤って破壊/削除してしまった場合にこのコピーを使用できます。

```
[ec2-user ~]$ sudo cp /etc/fstab /etc/fstab.orig
```

- お好みのテキストエディタ (`/etc/fstab` や `nano` など) を使用して、`vim` ファイルを開きます。
- 「`UUID=`」で始まる行にコメントして、ファイルの最後に次の形式で RAID ボリュームの新しい行を追加します。

```
device_label mount_point file_system_type fs_mntops fs_freq fs_passno
```

この行の最後の 3 つのフィールドは、ファイルシステムのマウントオプション、ファイルシステムのダンプ頻度、ブート時に実行されるファイルシステムチェックの順番です。これらの値がわからない場合は、次の例の値を使用してください。(defaults,nofail 0 2) /etc/fstab エントリの詳細については、fstab のマニュアルページを参照してください。(コマンドラインで `man fstab` を入力します。)) 例えば、マウントポイント /mnt/raid にラベル MY_RAID を持つデバイスに ext4 ファイルシステムをマウントするには、/etc/fstab に次のエントリを追加します。

Note

このボリュームをアタッチしないでインスタンスを起動することを目的としている場合 (例えば、このボリュームが異なるインスタンス間で移動される可能性がある場合)、nofail マウントオプションを追加し、ボリュームのマウントでエラーが発生してもインスタンスが起動できるようにしてください。Debian から派生した OS (Ubuntu など) では、noboottwait マウントオプションも追加する必要があります。

```
LABEL=MY_RAID      /mnt/raid  ext4    defaults,nofail    0      2
```

- d. 新しいエントリを /etc/fstab に追加した後、エントリが正しく動作するかを確認する必要があります。sudo mount -a コマンドを使用して、すべてのファイルシステムを /etc/fstab にマウントします。

```
[ec2-user ~]$ sudo mount -a
```

前のコマンドを実行してもエラーが発生しない場合、/etc/fstab ファイルに問題はありません。次回ブート時にファイルシステムは自動的にマウントされます。このコマンドを実行してエラーが発生した場合、エラーを調べて、/etc/fstab を修正してください。

Warning

/etc/fstab ファイルにエラーがあると、システムがブート不能になる可能性があります。/etc/fstab ファイルにエラーがあるシステムをシャットダウンしないでください。

- e. (オプション) /etc/fstab のエラーの修正方法が不明な場合、次のコマンドを使って、いつでもバックアップの /etc/fstab ファイルを復元することができます。

```
[ec2-user ~]$ sudo mv /etc/fstab.orig /etc/fstab
```

Windows インスタンス

Windows で RAID 0 アレイを作成するには

1. アレイに Amazon EBS ボリュームを作成します。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの作成](#)」を参照してください。
2. アレイをホストするインスタンスに Amazon EBS ボリュームをアタッチします。詳細については、「[インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#)」を参照してください。
3. Windows インスタンスに接続します。詳細については、「[Windows インスタンスに接続する](#)」を参照してください。
4. コマンドプロンプトを開いて、diskpart コマンドを入力します。

diskpart

```
Microsoft DiskPart version 6.1.7601
Copyright (C) 1999-2008 Microsoft Corporation.
On computer: WIN-BM6QPPL51C0
```

5. DISKPART プロンプトで、次のコマンドを使用して、利用できるディスクの一覧を表示できます。

```
DISKPART> list disk
```

Disk ###	Status	Size	Free	Dyn	Gpt
-----	-----	-----	-----	---	---
Disk 0	Online	30 GB	0 B		
Disk 1	Online	8 GB	0 B		
Disk 2	Online	8 GB	0 B		

アレイで使用するディスクを確認し、ディスクの番号を書き留めます。

6. アレイで使用する各ディスクは、既存のボリュームを含まないオンラインの動的なディスクである必要があります。ベーシックディスクを動的なディスクに変換する手順と既存のボリュームを削除する手順は以下のとおりです。

- a. 次のコマンドを使用して、アレイで利用するディスクを選択します。*n* を利用するディスクの番号に置き換えます。

```
DISKPART> select disk n

Disk n is now the selected disk.
```

- b. 選択したディスクが Offline と表示されている場合は、online disk コマンドを実行してオンラインにします。
- c. 選択したディスクにおいて、前述のlist disk コマンドの出力の Dyn 列にアスタリスクが付いていない場合、動的なディスクに変換する必要があります。

```
DISKPART> convert dynamic
```

Note

ディスクが書き込み禁止であることを示すエラーが表示された場合は、ATTRIBUTE DISK CLEAR READONLY コマンドを使って読み取り専用フラグをクリアしてから、動的ディスク変換をもう一度試してください。

- d. detail disk コマンドを使用して、選択したディスクの既存のボリュームを確認します。

```
DISKPART> detail disk

XENSRV PVDISK SCSI Disk Device
Disk ID: 2D8BF659
Type    : SCSI
Status  : Online
Path    : 0
Target  : 1
LUN ID  : 0
Location Path : PCIR00T(0)#PCI(0300)#SCSI(P00T01L00)
Current Read-only State : No
Read-only    : No
Boot Disk    : No
Pagefile Disk : No
Hibernation File Disk : No
Crashdump Disk : No
Clustered Disk : No
```

Volume ###	Ltr	Label	Fs	Type	Size	Status	Info
Volume 2	D	NEW VOLUME	FAT32	Simple	8189 MB	Healthy	

ディスクのボリュームの番号を書き留めます。この例では、ボリュームの番号は 2 です。ボリュームがない場合、次の手順は省略できます。

- e. (前の手順でボリュームの存在が確認された場合のみ) 前の手順で確認したディスクで既存のボリュームを選択して削除します。

Warning

この手順により、ボリュームの既存データがすべて失われます。

- i. ボリュームを選択します。 *n* をボリュームの番号と置き換えてください。

```
DISKPART> select volume n
Volume n is the selected volume.
```

- ii. ボリュームを削除します。

```
DISKPART> delete volume

DiskPart successfully deleted the volume.
```

- iii. 選択したディスクで削除する必要があるボリュームごとに以下の手順を繰り返します。

- f. アレイで使用するディスクごとに [Step 6](#) を繰り返します。

7. 使用するディスクが動的なディスクであるかどうかを確認します。このケースでは、ディスク 1 と 2 を RAID ボリュームのために使用しています。

```
DISKPART> list disk

Disk ###  Status              Size      Free      Dyn  Gpt
-----  -
Disk 0    Online              30 GB     0 B
Disk 1    Online               8 GB     0 B    *
Disk 2    Online               8 GB     0 B    *
```

8. RAID アレイを作成します。Windows では、RAID 0 ボリュームはストライプ化されたボリュームとして参照されます。

次のコマンドにより、ディスク 1 とディスク 2 上にストライプ化されたボリュームアレイを作成します (アレイをストライプ化するには `stripe` オプションをメモしてください)。

```
DISKPART> create volume stripe disk=1,2
DiskPart successfully created the volume.
```

9. 新しいボリュームを確認します。

```
DISKPART> list volume
```

```
DISKPART> list volume
```

Volume ###	Ltr	Label	Fs	Type	Size	Status	Info
Volume 0	C		NTFS	Partition	29 GB	Healthy	System
Volume 1			RAW	Stripe	15 GB	Healthy	


Type 列には、Volume 1 が `stripe` ボリュームであることが示されていることに注意してください。

10. ボリュームを選択してフォーマットし、ボリュームの使用を開始できるようにします。

a. フォーマットするボリュームを選択します。 *n* をボリュームの番号に置き換えます。

```
DISKPART> select volume n
Volume n is the selected volume.
```

b. ボリュームをフォーマットします。

 Note

完全フォーマットを実行するには、`quick` オプションを省略します。

```
DISKPART> format quick recommended label="My new volume"
100 percent completed
DiskPart successfully formatted the volume.
```

- c. ボリリュームに使用可能な任意のドライブ文字を割り当てます。

```
DISKPART> assign letter f
```

```
DiskPart successfully assigned the drive letter or mount point.
```

新しいボリリュームを使用する準備ができました。

RAID アレイでのボリリュームのスナップショットの作成

スナップショットを使用して、RAID 配列で EBS ボリリュームのデータをバックアップする場合には、そのスナップショットが一貫していることを確認する必要があります。これは、ボリリュームのスナップショットが個別に作成されるためです。同期されていないスナップショットから RAID 配列の EBS ボリリュームを復元すると、配列の整合性は低下します。

RAID 配列の一貫性のあるスナップショットを作成するには、[EBS マルチボリリュームスナップショット](#)を使用します。マルチボリリュームスナップショットを使用すると、EC2 インスタンスにアタッチされた複数の EBS ボリリュームにわたって point-in-time、データを調整し、クラッシュコンシステントなスナップショットを作成できます。スナップショットは複数の EBS ボリリュームにわたって自動的に作成されるため、一貫性を保証できるように、ボリリューム間で調整してインスタンスを停止する必要はありません。詳細については、[Amazon EBS スナップショットの作成](#)のマルチボリリュームスナップショットを作成するステップを参照してください。

EBS ボリリュームのベンチマーク

I/O ワークロードをシミュレートすることで、Amazon EBS ボリリュームのパフォーマンスをテストできます。手順は次のとおりです。

1. EBS 最適化インスタンスを作成する。
2. 新しい EBS ボリリュームを作成します。
3. EBS 最適化インスタンスにボリリュームをアタッチする。
4. ブロックデバイスを設定およびマウントします。
5. ツールをインストールし、I/O パフォーマンスを評価する。
6. ボリリュームの I/O パフォーマンスを評価する。
7. ボリリュームを削除し、料金が発生しないようにインスタンスを終了する。

⚠ Important

手順の一部を実行すると、ベンチマークを実行する EBS ボリューム上の既存のデータが破壊されます。ベンチマーク手順は、本番ボリュームではなく、テスト目的で特別に作成されたボリュームで使用するために用意されています。

インスタンスのセットアップ

EBS ボリュームで最適なパフォーマンスを実現するには、EBS 最適化インスタンスを使用することをお勧めします。EBS 最適化インスタンスは、Amazon EC2 および Amazon EBS 間の専用スループットとインスタンスを提供します。EBS 最適化インスタンスは、Amazon EC2 と Amazon EBS の間で所定の帯域幅を実現するものであり、インスタンスタイプに応じて仕様で選択できます。

EBS 最適化インスタンスを作成するには、Amazon EC2 コンソールを使用してインスタンスを起動するときに [EBS 最適化インスタンスとして起動する] を選択するか、コマンドラインを使用するときに `--ebs-optimized` を指定します。このオプションをサポートするインスタンスタイプを必ず選択してください。

Provisioned IOPS SSD または 汎用 SSD ボリュームの設定

Amazon EC2 コンソールを使用して、プロビジョンド IOPS SSD (io1 および io2) または汎用 SSD (gp2 および gp3) ボリュームを作成するには、[ボリュームタイプ] で、[プロビジョンド IOPS SSD (io1)]、[プロビジョンド IOPS SSD (io2)]、[汎用 SSD (gp2)]、または [汎用 SSD (gp3)] を選択します。コマンドラインの `--volume-type` パラメータには、io1、io2、gp2、または gp3 を指定します。io1、io2、および gp3 ボリュームの場合は、`--iops` パラメータに、1 秒あたりの I/O オペレーション数 (IOPS) を指定します。詳細については、[Amazon EBS ボリュームの種類](#) および [Amazon EBS ボリュームの作成](#) を参照してください。

(Linux インスタンスのみ) テストの例には、6 ボリュームを備えた RAID 0 アレイを作成することをお勧めします。これは高いレベルのパフォーマンスを実現します。料金は、ボリューム数ではなく、プロビジョニングされたギガバイト (および io1、io2、gp3 ボリュームに対してプロビジョニングされた IOPS 数) に対して発生します。したがって、ストライプセットを作成するために、複数の小さなボリュームを作成しても追加コストは発生しません。Oracle Orion を使用してボリュームを評価する場合は、Oracle ASM と同じ方法でストライピングをシミュレートできます。したがって、Orion でストライピングを行えるようにすることをお勧めします。別のベンチマークツールを使用する場合は、ボリュームのストライピングを自身で行う必要があります。

RAID 0 アレイの作り方の詳細については、「[RAID 0 アレイの作成](#)」を参照してください。

スループット最適化 HDD (st1) または Cold HDD (sc1) ボリュームをセットアップする

st1 ボリュームを作成するには、Amazon EC2 コンソールを使用してボリュームを作成するときに [スループット最適化 HDD] を選択するか、コマンドラインを使用して `--type st1` を指定します。sc1 ボリュームを作成するには、Amazon EC2 コンソールを使用してボリュームを作成するときに [Cold HDD] を選択するか、コマンドラインを使用して `--type sc1` を指定します。EBS ボリュームの作成の詳細については、[Amazon EBS ボリュームの作成](#) を参照してください。インスタンスへのこれらのボリュームのアタッチについては、[インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ](#) を参照してください。

(Linux インスタンスのみ) AWS は、AWS CloudFormation に使用する JSON テンプレートを提供し、このセットアップ手順を簡単にします。これには、[テンプレート](#) にアクセスして JSON ファイルとして保存します。AWS CloudFormation では、独自の SSH キーを設定して、st1 ボリュームを評価するためのパフォーマンステスト環境を簡単にセットアップすることができます。テンプレートを使用すると、現行世代のインスタンスと 2 TiB の st1 ボリュームが作成され、このボリュームが `/dev/xvdf` のインスタンスにアタッチされます。

(Linux インスタンスのみ) テンプレートを使用して HDD ボリュームを作成する方法

1. <https://console.aws.amazon.com/cloudformation> で AWS CloudFormation コンソールを開きます。
2. [Create Stack] を選択します。
3. [Upload a Template to Amazon S3] を選択し、さきほど入手した JSON テンプレートを選択します。
4. スタックに、「ebs-perf-testing」のような名前を付け、インスタンスタイプ (デフォルトは r3.8xlarge) および SSH キーを選択します。
5. [Next] を 2 回選択し、[Create Stack] を選択します。
6. 新しいスタックのステータスが [CREATE_IN_PROGRESS] から [COMPLETE] に移行したら、[Outputs] (出力) を選択して新しいインスタンスのパブリック DNS エントリを取得します。このインスタンスには、2 TiB の st1 ボリュームがアタッチされます。
7. ユーザー `ec2-user` として、前のステップで DNS エントリから取得したホスト名を使用し、新しいスタックに SSH を使用して接続します。
8. [ベンチマークツールのインストール](#) に進みます。

ベンチマークツールのインストール

次の表に、EBS ボリュームのパフォーマンスをベンチマークするために使用できるツールのいくつかを示します。

Linux インスタンス

ツール	説明
fio	<p>I/O パフォーマンスを評価します (fio は libaio-devel に依存することに注意してください。)</p> <p>fio を Amazon Linux にインストールするには、次のコマンドを実行します。</p> <pre>[ec2-user ~]\$ sudo yum install -y fio</pre> <p>Ubuntu に fio インストールするには、次のコマンドを実行します。</p> <pre>sudo apt-get install -y fio</pre>
Oracle Orion Calibration ツール	<p>Oracle データベースで使用するストレージシステムの I/O パフォーマンスを調整します。</p>

Windows インスタンス

ツール	説明
DiskSpd	<p>DiskSpd は、Microsoft の Windows、Windows Server、クラウドサーバーインフラストラクチャエンジニアリングチームのストレージパフォーマンスツールです。これは、次からダウンロードできます。https://github.com/Microsoft/diskspd/releases</p> <p>diskspd.exe 実行可能ファイルをダウンロードした後、管理者権限でコマンドプロンプトを開き (「管理者として実行を選択」)、diskspd.exe ファイルをコピーしたディレクトリに移動します。</p>

ツール	説明
	<p>適切な実行可能フォルダ (amd64fre、armfre または x86fre)) から目的の diskspd.exe 実行可能ファイルを C:\DiskSpd などの短い、単純なパスにコピーします。ほとんどの場合、amd64fre フォルダから 64 ビットバージョンの DiskSpd を使用します。</p> <p>DiskSpd のソースコードは、https://github.com/Microsoft/diskspd の GitHub でホストされています。</p>
CrystalDiskMark	<p>CrystalDiskMark は、シンプルなディスクベンチマークソフトウェアです。https://crystalmark.info/en/software/crystaldiskmark/ でダウンロードできます。</p>

これらのベンチマークツールは、さまざまなテストパラメータをサポートしています。使用するのは、ボリュームがサポートするワークロードを見積もるためのコマンドです。評価に必要な基本的なコマンドの例を以下に示します。

ボリュームキュー長の選択

ワークロードとボリュームタイプに基づいて最適なボリュームキュー長を選択します。

SSD-Backed ボリュームのキュー長

SSD-Backed ボリュームでワークロードに最適なキュー長を決定するには、使用可能な 1000 IOPS ごとにキュー長 1 を指定するようにお勧めします (汎用 SSD ボリュームのベースライン、Provisioned IOPS SSD ボリュームにプロビジョニングする値)。その後、アプリケーションのパフォーマンスを監視して、アプリケーション要件に応じて値を調整することができます。

プロビジョニングした IOPS、スループット、または最適なシステムキュー長 (現在は 32 に設定) に達するまでは、キュー長を大きくする方が有益です。例えば、IOPS として 3,000 がプロビジョニングされたボリュームでは、キュー長 3 を設定します。アプリケーションに最適な値を確認するには、これらの値を増減して調整してください。

HDD-Backed ボリュームのキュー長

HDD-Backed ボリュームのワークロードに対する最適なキュー長を決定するには、1 MiB のシーケンシャル I/O の実行時に 4 以上のキュー長を設定しておくようお勧めします。その後、アプリケーションのパフォーマンスを監視して、アプリケーション要件に応じて値を調整することができます。

例えば、2 TiB の st1 ボリュームで、バーストスループットが 500 MiB/秒、IOPS が 500 の場合は、1,024 KiB、512 KiB、または 256 KiB のシーケンシャル I/O を実行する際に、キュー長をそれぞれ 4、8、または 16 に設定します。アプリケーションに最適な値を確認するには、これらの値を増減して調整してください。

C ステートの無効化

ベンチマークを実行する前に、プロセッサの C ステートを無効にする必要があります。サポートされている CPU の一時的にアイドル状態のコアは、電力を節約するために C ステートに入ることができます。コアが処理を再開するために呼び出されると、コアが再び完全に動作するまで一定の時間が経過します。このレイテンシーは、プロセッサのベンチマークルーチンを妨げる可能性があります。C ステートとその EC2 インスタンスタイプでサポートされるインスタンスの詳細については、[EC2 インスタンスタイプのプロセッサのステート制御](#)を参照してください。

Linux インスタンス

Amazon Linux、RHEL、および CentOS で C ステートを無効にするには、次のようにします。

1. C ステートの数を取得します。

```
$ C:\> cpupower idle-info | grep "Number of idle states:"
```

2. C ステート c1 から cN にして無効にします。理想的には、コアは c0 ステートにある必要があります。

```
$ C:\> for i in `seq 1 $((N-1))`; do cpupower idle-set -d $i; done
```

Windows インスタンス

次のようにして、Windows システムで C ステートを無効にできます。

1. PowerShell で、現在のアクティブな電力スキームを取得します。

```
$current_scheme = powercfg /getactivescheme
```

2. 電力スキームの GUID を取得します。

```
(Get-WmiObject -class Win32_PowerPlan -Namespace "root\cimv2\power" -Filter "ElementName='High performance']").InstanceID
```

3. 電力設定 GUID を取得します。

```
(Get-WmiObject -class Win32_PowerSetting -Namespace "root\cimv2\power" -Filter "ElementName='Processor idle disable']").InstanceID
```

4. 電力設定サブグループの GUID を取得します。

```
(Get-WmiObject -class Win32_PowerSettingSubgroup -Namespace "root\cimv2\power" -Filter "ElementName='Processor power management']").InstanceID
```

5. インデックスの値を 1 に設定して、C ステートを無効にします。値 0 は、C ステートが無効であることを示します。

```
powercfg /  
setacvalueindex <power_scheme_guid> <power_setting_subgroup_guid> <power_setting_guid>  
1
```

6. アクティブなスキームを設定して、設定が保存されるようにします。

```
powercfg /setactive <power_scheme_guid>
```

ベンチマークテストを実行する

次の手順では、さまざまな EBS ボリュームタイプに対するベンチマークコマンドについて説明します。

EBS ボリュームがアタッチされている EBS 最適化インスタンスで、次のコマンドを実行します。EBS ボリュームをスナップショットから作成した場合は、ベンチマークテストを実行する前に、必ず初期化してください。詳細については、「[Amazon EBS ボリュームの初期化](#)」を参照してください。

ボリュームのテストが完了したら、クリーンアップに関する次のトピックの [Amazon EBS ボリュームの削除](#) および「[インスタンスの終了](#)」を参照してください。

Provisioned IOPS SSD ボリュームと 汎用 SSD ボリュームをベンチマークする

Linux インスタンス

作成した RAID 0 アレイで fio を実行します。

次のコマンドは、16 KB のランダム書き込みオペレーションを実行します。

```
[ec2-user ~]$ sudo fio --directory=/mnt/p_iops_vol0 --ioengine=psync --
name fio_test_file --direct=1 --rw=randwrite --bs=16k --size=1G --numjobs=16 --
time_based --runtime=180 --group_reporting --norandommap
```

次のコマンドは、16 KB のランダム読み取りオペレーションを実行します。

```
[ec2-user ~]$ sudo fio --directory=/mnt/p_iops_vol0 --name fio_test_file --direct=1
--rw=randread --bs=16k --size=1G --numjobs=16 --time_based --runtime=180 --
group_reporting --norandommap
```

結果の読み方については、チュートリアル[fio のディスク IO パフォーマンスの確認](#)を参照してください。

Windows インスタンス

作成したボリュームで DiskSpd を実行します。

次のコマンドは、C: ドライブ上にある 20 GB のテストファイルを使用して、30 秒のランダム I/O テストを実行します。書き込み率 25%、読み取り率 75%、ブロックサイズは 8 K です。これは、それぞれ 4 つの未処理の I/O を持ち、1 GB の書き込みエントロピー値シードを持つ 8 つのワーカースレッドを使用します。テストの結果は、DiskSpeedResults.txt というテキストファイルに保存されます。これらのパラメータは、SQL Server OLTP ワークロードをシミュレートします。

```
diskspd -b8K -d30 -o4 -t8 -h -r -w25 -L -Z1G -c20G C:\iotest.dat > DiskSpeedResults.txt
```

結果の読み方については、チュートリアル[DiskSPd のディスク IO パフォーマンスの確認](#)を参照してください。

st1 および sc1 ボリュームのベンチマーク (Linux インスタンス)

st1 ボリュームまたは sc1 ボリュームで fio を実行します。

Note

これらのテストを実行する前に、[st1 および sc1 \(Linux インスタンスインスタンスのみ\) で高いスループットの読み取りが多いワークロードに先読みを増やす](#)の説明に従って、バッファ付き I/O をインスタンスに設定してください。

次のコマンドでは、アタッチされた `st1` ブロックデバイス (例: `/dev/xvdf`) に対して、1 MiB のシーケンシャル読み取り操作を実行します。

```
[ec2-user ~]$ sudo fio --filename=/dev/<device> --direct=1 --rw=read --randrepeat=0
--ioengine=libaio --bs=1024k --iodepth=8 --time_based=1 --runtime=180 --
name=fio_direct_read_test
```

次のコマンドでは、アタッチされた `st1` ブロックデバイスに対して、1 MiB のシーケンシャル書き込み操作を実行します。

```
[ec2-user ~]$ sudo fio --filename=/dev/<device> --direct=1 --rw=write --randrepeat=0
--ioengine=libaio --bs=1024k --iodepth=8 --time_based=1 --runtime=180 --
name=fio_direct_write_test
```

ワークロードによっては、ブロックデバイスの異なる部分に対してシーケンシャル読み取りとシーケンシャル書き込みの組み合わせを実行するケースがあります。このようなワークロードを評価する場合は、読み取りと書き込みに対して別々の `fio` ジョブを同時に実行し、`fio offset_increment` オプションを使用して、ブロックデバイスの別々の場所を各ジョブに割り当てることをお勧めします。

このワークロードの実行は、シーケンシャル書き込みまたはシーケンシャル読み取りのワークロードの場合より、少し複雑になります。テキストエディターを使用して、次の内容を含む `fio` ジョブファイル (この例では `fio_rw_mix.cfg`) を作成します。

```
[global]
clocksource=clock_gettime
randrepeat=0
runtime=180

[sequential-write]
bs=1M
ioengine=libaio
direct=1
iodepth=8
filename=/dev/<device>
do_verify=0
rw=write
rwmixread=0
rwmixwrite=100

[sequential-read]
bs=1M
```



```
ioengine=libaio
direct=1
iodepth=8
filename=/dev/<device>
do_verify=0
rw=read
rwmixread=100
rwmixwrite=0
offset=100g
```

次に、以下のコマンドを実行します。

```
[ec2-user ~]$ sudo fio fio_rw_mix.cfg
```

結果の読み方については、チュートリアル[fio のディスク I/O パフォーマンスの確認](#)を参照してください。

シーケンシャルの読み取りまたは書き込みの操作を使用しても、ダイレクト I/O の fio ジョブを複数実行した場合は、st1 および sc1 ボリュームで予測を下回るスループットになります。単一のダイレクト I/O ジョブを使用し、iodepth パラメータを指定して、I/O 操作の同時実行数を制御することをお勧めします。

Amazon Data Lifecycle Manager

Amazon Data Lifecycle Manager を使用して、EBS スナップショットと EBS-backed AMI の作成、保持、削除を自動化できます。スナップショットと AMI 管理を自動化すると、次のことができるようになります。

- 定期的なバックアップスケジュールを実施して貴重なデータを保護する。
- 定期的に更新できる標準化された AMI を作成する。
- 監査担当者または社内のコンプライアンスが必要とするバックアップを保持する。
- 古いバックアップを削除してストレージコストを削減する。
- 分離されたリージョンまたはアカウントにデータをバックアップするディザスタリカバリ用バックアップポリシーを作成します。

Amazon とのモニタリング機能と組み合わせると AWS CloudTrail、Amazon EventBridge Data Lifecycle Manager は Amazon EC2 インスタンスと個々の EBS ボリュームの完全なバックアップソリューションを追加費用なしで提供します。

Important

- Amazon Data Lifecycle Manager では、他の方法で作成されたスナップショットまたは AMI を管理することはできません。
- Amazon Data Lifecycle Manager では、instance store-backed AMI の作成、保持、および削除を自動化することはできません。

コンテンツ

- [クォータ](#)
- [Amazon Data Lifecycle Manager の仕組み](#)
- [デフォルトポリシーとカスタムポリシー](#)
- [デフォルトポリシー](#)
- [カスタムポリシー](#)
- [ライフサイクルポリシーの表示、変更、および削除](#)

- [AWS Identity and Access Management](#)
- [スナップショットと AMI のライフサイクルのモニタリング](#)
- [トラブルシューティング](#)

クォータ

AWS お客様のアカウントには、Amazon Data Lifecycle Manager に関連する以下のクォータがあります。

説明	クォータ
リージョンごとのカスタムライフサイクルポリシー	100
リージョンごとの EBS スナップショットのデフォルトポリシー	1
リージョンごとの EBS-backed AMI のデフォルトポリシー	1
リソースあたりのタグ	45

Amazon Data Lifecycle Manager の仕組み

以下はAmazon Data Lifecycle Managerの主要な要素です。

要素

- [ポリシー](#)
- [ポリシースケジュール \(カスタムポリシーのみ\)](#)
- [ターゲットリソースタグ \(カスタムポリシーのみ\)](#)
- [スナップショット](#)
- [EBS-backed AMI](#)
- [Amazon Data Lifecycle Manager のタグ](#)

ポリシー

Amazon Data Lifecycle Manager で、バックアップの作成と保持の要件を定義するポリシーを作成します。これらのポリシーでは通常、以下を指定できます。

- **ポリシータイプ** – ポリシーで管理するバックアップリソースのタイプ (スナップショットまたは EBS-backed AMI) を定義します。
- **ターゲットリソース** – ポリシーのターゲットとなるリソースのタイプ (インスタンスまたは EBS ボリューム) を定義します。
- **作成頻度** – ポリシーを実行し、スナップショットまたは AMI を作成する頻度を定義します。
- **保持しきい値** – スナップショットまたは AMI の作成後、ポリシーで保持する期間を定義します。
- **追加アクション** – クロスリージョンでのコピー、アーカイブ、リソースのタグ付けなど、ポリシーで実行する必要がある追加アクションを定義します。

Amazon Data Lifecycle Manager には、デフォルトポリシーとカスタムポリシーが用意されています。

デフォルトポリシー

デフォルトポリシーでは、最近のバックアップがないリージョン内のすべてのボリュームとインスタンスをバックアップします。必要に応じて、除外パラメータを指定してボリュームとインスタンスを除外できます。

Amazon Data Lifecycle Manager は、次のポリシーをサポートします。

- **EBS スナップショットのデフォルトポリシー** – ボリュームをターゲットとし、スナップショットの作成、保持、および削除を自動化します。
- **EBS-backed AMI のデフォルトポリシー** – インスタンスをターゲットし、EBS-backed AMI の作成、保持、および登録解除を自動化します。

デフォルトポリシーは、各アカウントおよび AWS リージョンのリソースタイプごとに 1 つしか設定できません。

カスタムポリシー

カスタムポリシーは、割り当てられたタグに基づく特定のリソースをターゲットとしており、高速スナップショット復元、スナップショットアーカイブ、クロスアカウントコピー、事前スクリプトと事後スクリプトなどの高度な機能をサポートします。カスタムポリシーには最大 4 つのスケジュール

を含めることができ、各スケジュールには独自の作成頻度、保持しきい値、および高度な機能設定を設定できます。

Amazon Data Lifecycle Manager は、次のカスタムポリシーをサポートします。

- EBS スナップショットポリシー – ボリュームまたはインスタンスをターゲットとし、EBS スナップショットの作成、保持、および削除を自動化します。
- EBS-backed AMI ポリシー – インスタンスをターゲットし、EBS-backed AMI の作成、保持、および登録解除を自動化します。
- クロスアカウントコピーのイベントポリシー – 共有されているスナップショットのクロスリージョンコピーアクションを自動化します。

詳細については、「[デフォルトポリシーとカスタムポリシー](#)」を参照してください。

ポリシースケジュール (カスタムポリシーのみ)

ポリシースケジュールは、ポリシーによってスナップショットまたは AMI が作成されるタイミングを定義します。ポリシーは、最大 4 つのスケジュール — (1 つの必須スケジュールと、最大 3 つのオプションのスケジュール) を持つことができます。

1 つのポリシーに複数のスケジュールを追加すると、同じポリシーを使用して異なる頻度でスナップショットまたは AMI を作成できます。例えば、毎日、毎週、毎月、および毎年 of スナップショットを作成する単一のポリシーを作成できます。これにより、複数のポリシーを管理する必要がなくなります。

スケジュールごとに、頻度、高速スナップショット復元設定 (スナップショットライフサイクルポリシーのみ)、クロスリージョンのコピールール、およびタグを定義できます。スケジュールに割り当てられているタグは、そのスケジュールが初期化された時点で作成される、スナップショットまたは AMI に自動的に割り当てられます。さらに、Amazon Data Lifecycle Manager は、スケジュールの頻度に基づいて、システム生成タグを各スナップショットまたは AMI に自動的に割り当てます。

各スケジュールは、その頻度に基づいて個別に初期化されます。複数のスケジュールが同時に初期化された場合、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットまたは AMI を 1 つだけ作成し、保持期間が最も長いスケジュールのスナップショット保持設定を適用します。初期化されたすべてのスケジュールのタグがスナップショットまたは AMI に適用されます。

- (スナップショットライフサイクルポリシーのみ) 初期化された 1 つ以上のスケジュールで高速スナップショット復元が有効になっている場合、初期化されたすべてのスケジュールで指定されてい

る、すべてのアベイラビリティゾーンで、スナップショットの高速スナップショット復元が有効化されます。初期化されたスケジュールの最も長い保持設定が、各アベイラビリティゾーンに対して使用されます。

- 初期化された複数のスケジュールでクロスリージョンコピーが有効化されている場合は、それらのスケジュール全体で指定されているすべてのリージョンに対し、スナップショットもしくはAMIがコピーされます。初期化されたスケジュールの最も長い保存期間が適用されます。

ターゲットリソースタグ (カスタムポリシーのみ)

Amazon Data Lifecycle Manager カスタムポリシーでは、バックアップするリソースを識別するためのリソースタグが使用されます。スナップショットまたは EBS-backed AMI ポリシーの作成時に、複数のターゲットリソースタグを指定することができます。指定されたタイプのリソース (インスタンスまたはボリューム) のうち、指定されたターゲットリソースタグの少なくとも 1 つを持つすべてのリソースがポリシーのターゲットになります。例えば、ボリュームをターゲットとするスナップショットポリシーを作成し、`purpose=prod`、`costcenter=prod`、`environment=live` をターゲットリソースタグとして指定した場合、ポリシーは、これらのタグとキー値のペアのいずれかを持つすべてのボリュームをターゲットとします。

リソースで複数のポリシーを実行する場合は、ターゲットリソースに複数のタグを割り当ててから、それぞれが特定のリソースタグをターゲットとする個別のポリシーを作成できます。

タグキーに \ や = の文字を使用することはできません。ターゲットリソースタグでは大文字と小文字が区別されます。詳細については、「[リソースのタグ付け](#)」を参照してください。

スナップショット

スナップショットは、EBS ボリュームからデータをバックアップするための主な手段です。ストレージコストを節約するために、連続するスナップショットは増分で、以前のスナップショット以降に変更されたボリュームデータのみが含まれています。ボリュームの一連のスナップショットでスナップショットを 1 つ削除すると、そのスナップショットに固有のデータだけが削除されます。キャプチャされたボリュームの残りの部分は保存されます。詳細については、「[Amazon EBS スナップショット](#)」を参照してください。

EBS-backed AMI

Amazon マシンイメージ (AMI) には、インスタンスの起動に必要な情報が用意されています。同じ設定で複数のインスタンスが必要な場合は、1 つの AMI から複数のインスタンスを起動できま

す。Amazon Data Lifecycle Manager は、EBS-backed AMI のみをサポートします。EBS-backed AMI には、ソースインスタンスにアタッチされた各 EBS ボリュームのスナップショットが含まれます。詳細については、「[Amazon マシンイメージ \(AMI\)](#)」を参照してください。

Amazon Data Lifecycle Manager のタグ

Amazon Data Lifecycle Manager は、ポリシーによって作成されたすべてのスナップショットと AMI に対し以下のようなタグを適用することで、他の方法で作成されたスナップショットや AMI と区別します。

- `aws:dlm:lifecycle-policy-id`
- `aws:dlm:lifecycle-schedule-name`
- `aws:dlm:expirationTime` – 期間ベースのスケジュールにより作成されたスナップショット用。スナップショットを標準階層から削除する時期を表します。
- `dlm:managed`
- `aws:dlm:archived` – スケジュールによりアーカイブされたスナップショット用。
- `aws:dlm:pre-script` – 事前スクリプトにより作成されたスナップショット用。
- `aws:dlm:post-script` – 事後スクリプトにより作成されたスナップショット用。

作成時に、スナップショットと AMI に適用するカスタムタグを指定することもできます。タグキーに \ や = の文字を使用することはできません。

Amazon Data Lifecycle Manager がボリュームをスナップショットポリシーに関連付けるために使用するターゲットタグは、オプションで、ポリシーによって作成されたスナップショットに適用できます。同様に、インスタンスを AMI ポリシーに関連付けるために使用するターゲットタグは、ポリシーによって作成された AMI にオプションで適用できます。

デフォルトポリシーとカスタムポリシー

このセクションでは、デフォルトポリシーとカスタムポリシーを比較し、それぞれの類似点と相違点に焦点を当てます。

トピック

- [EBS スナップショットポリシーの比較](#)
- [EBS-backed AMI ポリシーの比較](#)

EBS スナップショットポリシーの比較

次の表は、EBS スナップショットのデフォルトポリシーとカスタム EBS スナップショットポリシーの違いを示しています。

機能	EBS スナップショットのデフォルトポリシー	カスタム EBS スナップショットポリシー
マネージドバックアップリソース	EBS スナップショット	EBS スナップショット
ターゲットリソースタイプ	ボリューム	ボリュームまたはインスタンス
リソースターゲット設定	最新のスナップショットがないリージョン内のすべてのボリュームをターゲットとします。除外パラメータを指定して特定のボリュームを除外できます。	特定のタグを持つボリュームまたはインスタンスのみをターゲットとします。
除外パラメータ	はい。ブートボリューム、特定のボリュームタイプ、特定のタグが付いたボリュームは除外できます。	はい。インスタンスをターゲットにするときに、ブートボリュームと特定のタグが付いたボリュームを除外できます。
Support AWS 拠点	[いいえ]	はい
複数のスケジュールのサポート	[いいえ]	はい。ポリシーごとに最大 4 つのスケジュールまで
サポートされている保持タイプ	経過期間ベースの保持のみ	経過期間ベースの保持とカウントベースの保持
スナップショットの作成頻度	1~7 日おき。	毎日、毎週、毎月、毎年、または cron 式を使用したカスタム頻度。

機能	EBS スナップショットのデフォルトポリシー	カスタム EBS スナップショットポリシー
スナップショット保持期限	2～14 日。	最大 1,000 スナップショット (カウントベース) または最大 100 年 (経過期間ベース)。
アプリケーション整合性のあるスナップショットのサポート	[いいえ]	はい。事前スクリプトと事後スクリプトを使用する
スナップショットアーカイブのサポート	[いいえ]	はい
高速スナップショット復元のサポート	[いいえ]	はい
クロスリージョンでのコピーのサポート	はい。デフォルト設定を使用 ¹	はい。カスタム設定を使用
クロスアカウント共有のサポート	[いいえ]	はい
拡張削除のサポート ²	はい	いいえ

¹ デフォルトポリシーの場合:

- タグをクロスリージョンコピーにコピーすることはできません。
- コピーには、ソーススナップショットと同じ保持期間が使用されます。
- コピーは、ソーススナップショットと同じ暗号化状態を取得します。送信先リージョンで暗号化がデフォルトで有効になっている場合、ソーススナップショットが暗号化されていなくても、コピー

は常に暗号化されます。コピーは、送信先リージョンのデフォルト KMS キーで常に暗号化されま

す。

² デフォルトポリシーとカスタムポリシーの場合:

- ターゲットインスタンスまたはボリュームが削除された場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、保持期間に基づいて、最後の 1 つ前のスナップショットまで削除し続けます。デフォルトポリシーでは、削除を拡張して、最後のスナップショットを含めるようにできます。
- ポリシーが削除されるか、エラーまたは無効状態になると、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットの削除を停止します。デフォルトポリシーでは、削除を拡張して、最後の 1 つを含むスナップショットの削除を続行できます。

EBS-backed AMI ポリシーの比較

次の表は、EBS-backed AMI のデフォルトポリシーとカスタム EBS-backed AMI ポリシーの違いを示しています。

機能	EBS-backed AMI のデフォルトポリシー	カスタム EBS-backed AMI ポリシー
マネージドバックアップリソース	EBS-backed AMI	EBS-backed AMI
ターゲットリソースタイプ	インスタンス	インスタンス
リソースターゲット設定	最新の AMI がないリージョン内のすべてのインスタンスをターゲットとします。除外パラメータを指定して特定のインスタンスを除外できます。	特定のタグを持つインスタンスのみをターゲットとします。
AMI 作成前のインスタンスの再起動	[いいえ]	はい

機能	EBS-backed AMI のデフォルトポリシー	カスタム EBS-backed AMI ポリシー
除外パラメータ	はい。特定のタグが付いたインスタンスを除外できます。	[いいえ]
複数のスケジュールのサポート	[いいえ]	はい。ポリシーごとに最大 4 つのスケジュールまで。
AMI の作成頻度	1~7 日おき。	毎日、毎週、毎月、毎年、または cron 式を使用したカスタム頻度。
サポートされている保持タイプ	経過期間ベースの保持のみ。	経過期間ベースの保持とカウントベースの保持。
AMI 保持	2~14 日。	最大 1000 個の AMI (カウントベース) または最大 100 年 (経過期間ベース)。
AMI の非推奨サポート	[いいえ]	はい
クロスリージョンでのコピーのサポート	はい。デフォルト設定を使用 ¹	はい。カスタム設定を使用
拡張削除のサポート ²	はい	いいえ

¹ デフォルトポリシーの場合:

- タグをクロスリージョンコピーにコピーすることはできません。
- コピーには、ソース AMI と同じ保持期間が使用されます。
- コピーには、ソース AMI と同じ暗号化状態を適用します。送信先リージョンで暗号化がデフォルトで有効になっている場合、ソース AMI が暗号化されていない場合でも、コピーは常に暗号化されます。コピーは、送信先リージョンのデフォルト KMS キーで常に暗号化されます。

² デフォルトポリシーとカスタムポリシーの場合:

- ターゲットインスタンスが終了した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、保持期間に基づいて、最後の 1 つ前の AMI まで登録解除し続けます。デフォルトポリシーでは、登録解除を拡張して、最後の AMI を含めるようにできます。
- ポリシーが削除されるか、エラーまたは無効状態になると、Amazon Data Lifecycle Manager は AMI の登録解除を停止します。デフォルトポリシーでは、削除を拡張して、最後の 1 つを含む AMI の登録解除を続行できます。

デフォルトポリシー

インスタンスから EBS-backed AMI を定期的に作成する場合、EBS-backed AMI のデフォルトポリシーを使用します。アタッチ状態に関係なくすべてのボリュームのスナップショットを作成する場合、または特定のボリュームを除外する場合は、EBS スナップショットのデフォルトポリシーを使用します。

このセクションでは、デフォルトポリシーを作成する方法について説明します。

トピック

- [考慮事項](#)
- [EBS スナップショットのデフォルトポリシー](#)
- [EBS-backed AMI のデフォルトポリシー](#)

考慮事項

デフォルトポリシーを使用する際には、次の点に注意してください。

- デフォルトポリシーでは、最近のバックアップ (スナップショットまたは AMI) があるターゲットリソース (インスタンスまたはボリューム) をバックアップしません。作成頻度によって、どのリソースがバックアップされるかが決まります。ボリュームまたはインスタンスは、最新のスナップショットまたは AMI がポリシーの作成頻度よりも古い場合にのみバックアップされます。例えば、作成頻度を 3 日に指定した場合、EBS スナップショットのデフォルトポリシーでは、最新のスナップショットが 3 日より前のボリュームのスナップショットのみが作成されます。
- デフォルトでは、除外パラメータが指定されていない限り、デフォルトポリシーはそのリージョン内のすべてのインスタンスまたはボリュームをターゲットとします。

- デフォルトポリシーでは、一意のスナップショットの最小セットを作成します。例えば、EBS-backed AMI ポリシーと EBS スナップショットポリシーを有効にした場合、スナップショットポリシーでは、EBS-backed AMI ポリシーで既にバックアップされているボリュームのスナップショットを複製しません。
- デフォルトポリシーでは、24 時間以上経過したリソースのみをターゲットにし始めます。
- ボリュームを削除するか、デフォルトポリシーのターゲットとなるインスタンスを終了すると、Amazon Data Lifecycle Manager は、保持期間に従って、それまで作成されたバックアップ (スナップショットまたは AMI) を最後の 1 つ前のバックアップまで削除し続けます。必要がない場合は、このバックアップを手動で削除する必要があります。

Amazon Data Lifecycle Manager で最後のバックアップを削除する場合は、[拡張削除] を有効にします。

- デフォルトポリシーが削除されるか、エラーまたは無効状態になると、Amazon Data Lifecycle Manager は以前に作成されたバックアップ (スナップショットまたは AMI) の削除を停止します。Amazon Data Lifecycle Manager で、最後の 1 つを含むバックアップの削除を続行する場合は、ポリシーを削除する前、またはポリシーの状態が「無効」または「削除済み」に変わる前に、[拡張削除] を有効にする必要があります。
- デフォルトポリシーを作成して有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager はターゲットリソースを 4 時間の時間ウィンドウにランダムに割り当てます。ターゲットリソースは、割り当てられたウィンドウ中に、指定した作成頻度でバックアップされます。例えば、ポリシーの作成頻度が 3 日で、ターゲットリソースが 12 時～16 時のウィンドウに割り当てられている場合、そのリソースは 3 日ごとに 12 時～16 時の間にバックアップされます。

EBS スナップショットのデフォルトポリシー

次の手順では、EBS スナップショットのデフォルトポリシーを作成する方法を示します。

Console

EBS スナップショットのデフォルトポリシーを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションパネルで、[ライフサイクルマネージャー]、[ライフサイクルポリシーの作成] の順に選択します。
3. [ポリシータイプ] で [デフォルトポリシー] を選択し、次に [EBS スナップショットポリシー] を選択します。

4. [説明] にポリシーの簡単な説明を入力します。
5. [IAM ロール] で、スナップショットを管理する許可を持つ IAM ロールを選択します。

Amazon Data Lifecycle Manager が提供するデフォルトの IAM ロールを使用する場合は、[デフォルト] を選択することをお勧めします。ただし、以前に作成したカスタム IAM ロールを使用することもできます。

6. [作成頻度] で、ポリシーを実行してボリュームのスナップショットを作成する頻度を指定します。

指定する頻度によって、どのボリュームをバックアップするかも決まります。このポリシーにより、指定した頻度内に他の手段でバックアップされていないボリュームのみがバックアップされます。例えば、作成頻度を 3 日に指定した場合、このポリシーでは、過去 3 日以内にバックアップされていないボリュームのスナップショットのみが作成されます。

7. [保持期間] には、作成されたスナップショットをポリシーで保持する期間を指定します。スナップショットが保持しきい値に達すると、自動的に削除されます。保持期間は、作成頻度と同じか長くする必要があります。
8. (オプション) [除外パラメータ] を設定すると、スケジュールされたバックアップから特定のボリュームを除外できます。除外されたボリュームは、ポリシー実行時にバックアップされません。
 - a. ブートボリュームを除外するには、[ブート・ボリュームを除外] を選択します。ブートボリュームを除外すると、データ (非ブート) ボリュームのみがポリシーでバックアップされます。つまり、インスタンスにブートボリュームとしてアタッチされているボリュームのスナップショットは作成されません。
 - b. 特定のボリュームタイプを除外するには、[特定のボリュームタイプを除外] を選択し、除外するボリュームタイプを選択します。残りのタイプのボリュームのみがポリシーでバックアップされます。
 - c. 特定のタグを持つボリュームを除外するには、[タグを追加] を選択し、タグのキーと値を指定します。このポリシーでは、指定したタグのいずれかを持つボリュームのスナップショットは作成されません。
9. (オプション) [詳細設定] で、ポリシーで実行する必要があるその他のアクションを指定します。
 - a. 割り当てられたタグをソースボリュームからスナップショットにコピーするには、[ボリュームからタグをコピー] を選択します。
 - b. [拡張削除] を無効にした場合:

- ソースボリュームが削除された場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、保持期間に基づいて、それまで作成された、最後の 1 つ前のスナップショットまで削除し続けます。Amazon Data Lifecycle Manager で、最後の 1 つを含むすべてのスナップショットを削除する場合は、[拡張削除] を選択します。
- ポリシーが削除されるか、error または disabled 状態になると、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットの削除を停止します。Amazon Data Lifecycle Manager で、最後の 1 つを含むスナップショットの削除を続行する場合は、[拡張削除] を選択します。

Note

[拡張削除] を有効にすると、上記の両方の動作が同時にオーバーライドされません。

- c. ポリシーによって作成されたスナップショットを他のリージョンにコピーするには、[クロスリージョンコピーを作成] を選択し、送信先リージョンを最大 3 つ選択します。
 - ソーススナップショットが暗号化されている場合、または送信先リージョンで暗号化がデフォルトで有効になっている場合には、コピーされたスナップショットは、送信先リージョンの EBS 暗号化用のデフォルト KMS キーを使用して暗号化されます。
 - ソーススナップショットが暗号化されておらず、送信先リージョンで暗号化がデフォルトで無効になっている場合、コピーされたスナップショットは暗号化されません。
10. (オプション) ポリシーにタグを追加するには、[タグを追加] を選択し、タグのキーと値のペアを指定します。
 11. [デフォルトポリシーの作成] を選択します。

Note

Role with name `AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` already exists エラーが発生した場合、詳細については「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

AWS CLI

EBS スナップショットのデフォルトポリシーを作成するには

[create-lifecycle-policy](#) コマンドを実行します。ユースケースやプリファレンスに応じて、次の 2 つの方式のいずれかでリクエストパラメータを指定できます。

- 方式 1

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--state ENABLED | DISABLED \  
--description "policy_description" \  
--execution-role-arn role_arn \  
--default-policy VOLUME \  
--create-interval creation_frequency_in_days (1-7) \  
--retain-interval retention_period_in_days (2-14) \  
--copy-tags | --no-copy-tags \  
--extend-deletion | --no-extend-deletion \  
--cross-region-copy-targets TargetRegion=destination_region_code \  
--exclusions ExcludeBootVolumes=true | false,  
ExcludeTags=[{Key=tag_key,Value=tag_value}], ExcludeVolumeTypes="standard | gp2 |  
gp3 | io1 | io2 | st1 | sc1"
```

例えば、リージョン内のすべてのボリュームをターゲットとし、デフォルトの IAM ロールを使用し、毎日実行し (デフォルト)、スナップショットを 7 日間保持する (デフォルト) という設定の EBS スナップショットのデフォルトポリシーを作成する場合は、次のパラメータを指定する必要があります。

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--state ENABLED \  
--description "Daily default snapshot policy" \  
--execution-role-arn arn:aws:iam::account_id:role/  
AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \  
--default-policy VOLUME
```

- 方式 2

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--state ENABLED | DISABLED \  
--description "policy_description" \  
--execution-role-arn role_arn \  
--default-policy VOLUME \  
--policy-details file://policyDetails.json
```

ここで `policyDetails.json` には以下が含まれます。


```
{
  "PolicyLanguage": "SIMPLIFIED",
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",
  "ResourceType": "VOLUME",
  "CopyTags": true | false,
  "CreateInterval": creation_frequency_in_days (1-7),
  "RetainInterval": retention_period_in_days (2-14),
  "ExtendDeletion": true | false,
  "CrossRegionCopyTargets": [{"TargetRegion": "destination_region_code"}],
  "Exclusions": {
    "ExcludeBootVolume": true | false,
  "ExcludeVolumeTypes": ["standard | gp2 | gp3 | io1 | io2 | st1 | sc1"],
    "ExcludeTags": [{
      "Key": "exclusion_tag_key",
      "Value": "exclusion_tag_value"
    }]
  }
}
```

EBS-backed AMI のデフォルトポリシー

次の手順では、EBS-backed AMI のデフォルトポリシーを作成する方法を示します。

Console


EBS-backed AMI のデフォルトポリシーを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションパネルで、[ライフサイクルマネージャー]、[ライフサイクルポリシーの作成] の順に選択します。
3. [ポリシータイプ] に [デフォルトポリシー] を選択し、次に [EBS-backed AMI ポリシー] を選択します。
4. [説明] にポリシーの簡単な説明を入力します。
5. [IAM ロール] で、AMI を管理する許可を持つ IAM ロールを選択します。

Amazon Data Lifecycle Manager が提供するデフォルトの IAM ロールを使用する場合は、[デフォルト] を選択することをお勧めします。ただし、以前に作成したカスタム IAM ロールを使用することもできます。

6. [作成頻度] では、ポリシーを実行してインスタンスから AMI を作成する頻度を指定します。

指定する頻度によって、どのインスタンスがバックアップされるかも決まります。このポリシーにより、指定した頻度内に他の手段でバックアップされていないインスタンスのみがバックアップされます。例えば、作成頻度を 3 日に指定した場合、このポリシーでは、過去 3 日以内にバックアップされていないインスタンスからのみ AMI が作成されます。
7. [保持期間] には、作成された AMI をポリシーで保持する期間を指定します。AMI が保持しきい値に達すると、その AMI は自動的に登録解除され、関連付けられているスナップショットが削除されます。保持期間は、作成頻度と同じか長くする必要があります。
8. (オプション) [除外パラメータ] を設定すると、スケジュールされたバックアップから特定のインスタンスを除外できます。除外されたインスタンスは、ポリシー実行時にバックアップされません。
 - 特定のタグを持つインスタンスを除外するには、[タグを追加] を選択し、タグのキーと値を指定します。このポリシーでは、指定したタグのいずれかを持つインスタンスからは AMI が作成されません。
9. (オプション) [詳細設定] で、ポリシーで実行する必要があるその他のアクションを指定します。
 - a. 割り当てられたタグをソースインスタンスからその AMI にコピーするには、[インスタンスからタグをコピー] を選択します。
 - b. [拡張削除] を無効にした場合:
 - ソースインスタンスが終了した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、保持期間に基づいて、それまで作成された、最後の 1 つ前の AMI まで登録解除し続けます。Amazon Data Lifecycle Manager で、最後の 1 つを含むすべての AMI の登録を解除する場合は、[拡張削除] を選択します。
 - ポリシーが削除されるか、error または disabled 状態になると、Amazon Data Lifecycle Manager は AMI の登録解除を停止します。Amazon Data Lifecycle Manager で、最後の 1 つを含む AMI の登録解除を続行する場合は、[拡張削除] を選択します。
 - c. ポリシーによって作成された AMI を他のリージョンにコピーするには、[クロスリージョンコピーを作成] を選択し、送信先リージョンを最大 3 つ選択します。

 Note

拡張削除を有効にすると、上記の両方の動作が同時にオーバーライドされます。

- ソース AMI が暗号化されている場合、または送信先リージョンで暗号化がデフォルトで有効になっている場合には、コピーされた AMI は、送信先リージョンの EBS 暗号化用のデフォルト KMS キーを使用して暗号化されます。
 - ソース AMI が暗号化されておらず、送信先リージョンで暗号化がデフォルトで無効になっている場合、コピーされた AMI は暗号化されません。
10. (オプション) ポリシーにタグを追加するには、[タグを追加] を選択し、タグのキーと値のペアを指定します。
 11. [デフォルトポリシーの作成] を選択します。

Note

Role with name
AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement already
exists エラーが発生した場合、詳細については「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

AWS CLI

EBS-backed AMI のデフォルトポリシーを作成するには

[create-lifecycle-policy](#) コマンドを実行します。ユースケースやプリファレンスに応じて、次の 2 つの方式のいずれかでリクエストパラメータを指定できます。

- 方式 1

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--state ENABLED | DISABLED \  
--description "policy_description" \  
--execution-role-arn role_arn \  
--default-policy INSTANCE \  
--create-interval creation_frequency_in_days (1-7) \  
--retain-interval retention_period_in_days (2-14) \  
--copy-tags | --no-copy-tags \  
--extend-deletion | --no-extend-deletion \  
--cross-region-copy-targets TargetRegion=destination_region_code \  
--exclusions ExcludeTags=[{Key=tag_key,Value=tag_value}]
```

例えば、リージョン内のすべてのインスタンスをターゲットとし、デフォルトの IAM ロールを使用し、毎日実行し (デフォルト)、AMI を 7 日間保持する (デフォルト) という設定の EBS-backed AMI のデフォルトポリシーを作成する場合は、次のパラメータを指定する必要があります。

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--state ENABLED \  
--description "Daily default AMI policy" \  
--execution-role-arn arn:aws:iam::account_id:role/  
AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement \  
--default-policy INSTANCE
```

• 方式 2

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--state ENABLED | DISABLED \  
--description "policy_description" \  
--execution-role-arn role_arn \  
--default-policy INSTANCE \  
--policy-details file://policyDetails.json
```

ここで `policyDetails.json` には以下が含まれます。

```
{  
  "PolicyLanguage": "SIMPLIFIED",  
  "PolicyType": "IMAGE_MANAGEMENT",  
  "ResourceType": "INSTANCE",  
  "CopyTags": true | false,  
  "CreateInterval": creation_frequency_in_days (1-7),  
  "RetainInterval": retention_period_in_days (2-14),  
  "ExtendDeletion": true | false,  
  "CrossRegionCopyTargets": [{"TargetRegion": "destination_region_code"}],  
  "Exclusions": {  
    "ExcludeTags": [{  
      "Key": "exclusion_tag_key",  
      "Value": "exclusion_tag_value"  
    }]  
  }  
}
```

カスタムポリシー

このセクションでは、カスタム EBS スナップショット、EBS-backed AMI、およびクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成する方法について説明します。

トピック

- [スナップショットのライフサイクルの自動化](#)
- [AMI ライフサイクルの自動化](#)
- [クロスアカウントのスナップショットコピーの自動化](#)

スナップショットのライフサイクルの自動化

以下の手順では、Amazon Data Lifecycle Manager を使用して Amazon EBS スナップショットのライフサイクルを自動化する方法を示します。

トピック

- [スナップショットライフサイクルポリシーを作成する](#)
- [スナップショットライフサイクルポリシーに関する考慮事項](#)
- [追加リソース](#)
- [事前スクリプトと事後スクリプトを使用するための要件](#)
- [事前スクリプトと事後スクリプトによるアプリケーション整合性のあるスナップショットの自動化](#)
- [事前スクリプトと事後スクリプトのその他のユースケース](#)
- [事前スクリプトと事後スクリプトの仕組み](#)
- [事前スクリプトと事後スクリプトで作成されたスナップショットの識別](#)
- [事前スクリプトと事後スクリプトの実行をモニタリング](#)

スナップショットライフサイクルポリシーを作成する

スナップショットのライフサイクルポリシーを作成するには、次のいずれかの手順を使用します。

Console

スナップショットのポリシーを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。

2. ナビゲーションペインで、[Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー]、[ライフサイクルポリシーの作成] の順に選択します。
3. リポジトリの [ポリシータイプの選択] 画面で、[EBS スナップショットポリシー] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. [Target resources] (ターゲットリソース) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [Target resource types] (ターゲットリソースタイプ) で、バックアップするリソースの種類を選択します。Volume を選択して個々のポリシーのボリュームのスナップショットを作成するか、Instance を選択してインスタンスにアタッチされたボリュームからマルチボリュームスナップショットを作成します。
 - b. (AWS アウトポストのお客様のみ) ターゲットリソースの配置場所を指定してください。

[ターゲットリソースの場所] で、ターゲットリソースが存在する場所を指定します。

 - AWS ターゲットリソースがリージョンにある場合は、「リージョン」を選択します AWS。Amazon Data Lifecycle Manager は、現在のリージョン内で、一致するターゲットタグを持つ、指定されたタイプのすべてのリソースをバックアップします。リソースがリージョンにある場合、ポリシーによって作成されたスナップショットも、同じリージョンに保存されます。
 - ターゲットリソースがアカウントの Outpost にある場合は、[AWS Outpost] を選択します。Amazon Data Lifecycle Manager は、アカウントのすべての Outpost 内で、一致するターゲットタグを持つ、指定されたタイプのすべてのリソースをバックアップします。リソースが Outpost にある場合、ポリシーによって作成されたスナップショットは、リソースと同じリージョンか、同じ Outpost のどちらかに保存できます。
 - アカウントに Outposts がない場合は、このオプションは非表示になり、AWS 地域が選択されます。
 - c. [Target resource tags] (ターゲットリソースタグ) で、バックアップするボリュームもしくはインスタンスを識別する、リソースタグを選択します。ポリシーでは、指定されたタグキーと値のペアを持つリソースのみがバックアップされます。
5. [説明] にポリシーの簡単な説明を入力します。
6. [IAM ロール] では、スナップショットの管理、ならびにボリュームとインスタンスの記述に必要な、アクセス許可を持つ IAM ロールを選択します。Amazon Data Lifecycle Manager が提供するデフォルトのロールを使用するには、[デフォルトのロール] を選択します。以前に作成したカスタム IAM ロールを使用する場合には、[別のロールを選択] をクリックした上で、使用するロールを選択します。


7. [ポリシータグ] に、ライフサイクルポリシーに適用されるタグを追加します。これらのタグは、ポリシーを識別および分類するために使用することができます。
8. [Policy status] (ポリシーステータス) では、[Enable] (有効化) を選択すると、次のスケジュールした時刻にポリシーが実行されます。ポリシーが実行されないようにするには、[Disable policy] (ポリシーの無効化) を選択します。ここでポリシーを有効にしない場合、作成後に手動で有効にするまで、スナップショットの作成は開始されません。
9. (インスタンスのみをターゲットとするポリシー) ボリュームをマルチボリュームスナップショットセットから除外します。

デフォルトでは、Amazon Data Lifecycle Manager は、ターゲットインスタンスにアタッチされたすべてのボリュームのスナップショットを作成します。ただし、アタッチされたボリュームのサブセットのスナップショットを作成することもできます。[Parameters] (パラメータ) セクションで、次を実行します。

- ターゲットインスタンスにアタッチされたルートボリュームのスナップショットを作成しない場合は、[Exclude root volume] (ルートボリュームを除外) を選択します。このオプションを選択すると、ターゲットインスタンスにアタッチされているデータ (非ルート) ボリュームのみがマルチボリュームスナップショットセットに含まれます。
- ターゲットインスタンスにアタッチされたデータ (非ルート) ボリュームのサブセットのスナップショットを作成する場合は、[Exclude specific data volumes] (特定のデータボリュームを除外) を選択し、スナップショットを作成しないデータボリュームを識別するために使用するタグを指定します。Amazon Data Lifecycle Manager は、指定されたタグのいずれかを含むデータボリュームのスナップショットを作成しません。Amazon Data Lifecycle Manager は、指定されたタグを持たないデータボリュームのスナップショットのみを作成します。

10. [次へ] をクリックします。
11. [スケジュールの設定] 画面で、ポリシースケジュールを設定します。ポリシーには、最大 4 つのスケジュールを含めることができます。スケジュール 1 は必須です。スケジュール 2、3、および 4 はオプションです。追加したポリシースケジュールごとに、以下の操作を行います。
 - a. [スケジュールの詳細] セクションで、次の操作を行います。
 - i. [スケジュール名] で、スケジュールの分かりやすい名前を指定します。
 - ii. [頻度] とそれに関連するフィールドで、ポリシーの実行間隔を設定します。

ポリシーの実行は、日次、週次、月次、年次のいずれかのスケジュールで設定できます。または、[カスタム cron 式] をクリックし、最長 1 年の間隔を指定します。詳細については、Amazon CloudWatch イベントユーザーガイドの「[Cron 式](#)」を参照してください。

 Note

スケジュールに対しスナップショットのアーカイブを有効にする必要がある場合は、その頻度に、[monthly] (毎月) または [yearly] (毎年) のいずれかを選択する必要があります。または、作成頻度が 28 日以上 of CRON 式を指定します。

頻度を毎月とし、特定の週の特定の日 (例えば、その月の第 2 木曜日) にスナップショットを作成する場合、カウントベースのスケジュールでは、アーカイブ階層の保存回数は 4 以上にする必要があります。

- iii. [開始時刻] では、ポリシー実行の開始予定時刻を指定します。初回のポリシー実行は、予定時刻から 1 時間以内に開始されます。時刻は、hh:mm UTC 形式で入力する必要があります。
- iv. [保持タイプ] では、スケジュールによって作成されるスナップショットの保持ポリシーを指定します。

スナップショットは、総数または期間に基づいて保持できます。


• カウントベースの保持

- スナップショットアーカイブを無効にすると、範囲は 1~1000 になります。保持期間がしきい値に達すると、最も古いスナップショットは完全に削除されます。
- スナップショットアーカイブを有効にすると、範囲は 0 (作成直後にアーカイブ) ~1000 になります。保持期間がしきい値に達すると、最も古いスナップショットは完全なスナップショットに変換され、アーカイブ階層に移動します。

• 年齢に基づく保持

- スナップショットアーカイブを無効にすると、範囲は 1 日~100 年になります。保持期間がしきい値に達すると、最も古いスナップショットは完全に削除されます。

- スナップショットアーカイブを有効にすると、範囲は 0 日 (作成直後にアーカイブ) ~100 年になります。保持期間がしきい値に達すると、最も古いスナップショットは完全なスナップショットに変換され、アーカイブ階層に移動します。

 Note

- すべてのスケジュールは、同じ保持タイプ (期間ベースまたはカウントベース) にする必要があります。保持タイプを指定できるのは、スケジュール 1 のみです。スケジュール 2、3、4 は、スケジュール 1 から保持タイプを継承します。各スケジュールには、独自の保持回数または期間を設定できます。
- 高速スナップショット復元、クロスリージョンコピー、またはスナップショットの共有を有効にする場合は、保持回数で 1 以上を、または保持期間で 1 日以上を指定する必要があります。

- v. (AWS Outposts お客様のみ) スナップショットの保存先を指定します。

[スナップショットの送信先] で、ポリシーによって作成されるスナップショットの送信先を指定します。

- ポリシーがリージョンのリソースを対象としている場合、スナップショットは同じリージョンで作成する必要があります。AWS リージョンは自動的に選択されます。
- ポリシーが Outpost のリソースをターゲットにしている場合は、スナップショットの作成先をソースリソースと同じ Outpost、または、その Outpost に関連付けられたリージョンのどちらかで選択できます。
- アカウントに Outposts がない場合は、このオプションは非表示になり、AWS 地域が選択されます。

- b. スナップショットのタグ付けを設定します。

[タグ付け] セクションで、以下を実行します。

- i. ソースボリュームのすべてのユーザー定義タグを、スケジュールにより作成されたスナップショットにコピーするには、[ソースからタグをコピー] を選択します。

- ii. 他のタグを指定し、このスケジュールによって作成されたスナップショットに割り当てるには、[タグを追加] をクリックします。
- c. アプリケーション整合性のあるスナップショット用の事前スクリプトと事後スクリプトを設定します。

詳細については、「[事前スクリプトと事後スクリプトによるアプリケーション整合性のあるスナップショットの自動化](#)」を参照してください。

- d. (ボリュームのみをターゲットとするポリシー) スナップショットアーカイブを設定します。

[スナップショットのアーカイブ] セクションで、次の操作を行います。

Note

スナップショットのアーカイブを有効にできるのは、ポリシー内で1つのスケジュールのみです。

- i. スケジュールのスナップショットアーカイブを有効にするには、[Archive snapshots created by this schedule] (このスケジュールで作成されたスナップショットをアーカイブする) を選択します。

Note

スナップショットのアーカイブを有効にできるのは、スナップショットの作成頻度に毎月または毎年を設定した場合、または作成頻度が28日以上上のcron式を指定した場合のみです。

- ii. アーカイブ層のスナップショットのための保存ルールを指定します。
 - [count-based schedules] (カウントベースのスケジュール) で、アーカイブ層に保持するスナップショットの数を指定します。保持数のしきい値に達した場合は、最も古いスナップショットが完全にアーカイブ階層から削除されます。例えば、3を指定した場合、スケジュールは最大3つのスナップショットをアーカイブ階層に保持します。4番目のスナップショットをアーカイブする際には、アーカイブ階層に既存の3つのスナップショットのうち、最も古いものが削除されます。

- [age-based schedules] (期間ベースのスケジュール) で、アーカイブ階層でのスナップショットの保持期間を指定します。保持数のしきい値に達した場合は、最も古いスナップショットが完全にアーカイブ階層から削除されます。例えば、120 日間を指定した場合、その期間に達したスナップショットは、スケジュールによりアーカイブ階層から自動的に削除されます。

⚠ Important

アーカイブされたスナップショットの最小保持期間は 90 日です。スナップショットを少なくとも 90 日間保持する保存ルールを指定する必要があります。

- e. 高速スナップショット復元を有効にします。

スケジュールによって作成されたスナップショットで高速スナップショット復元を有効化するには、[高速スナップショット復元] セクションで、[スナップショットの高速復元を有効化する] を選択します。高速スナップショット復元を有効にする場合は、特定のアベイラビリティゾーンを選択する必要があります。保存期間に基づく保持スケジュールを使用する場合は、各スナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にする期間を指定する必要があります。スケジュールでカウントベースの保持を使用する場合は、高速スナップショット復元を有効にするスナップショットの最大数を指定する必要があります。

スケジュールが Outpost にスナップショットを作成している場合、高速スナップショット復元を有効にすることはできません。高速スナップショット復元は、Outpost に保存されているローカルスナップショットではサポートされません。

i Note

特定のアベイラビリティゾーンでスナップショットの高速スナップショット復元を有効にしている時間中は、請求が発生します。料金は 1 時間を最小として時間単位で計算されます。

- f. クロスリージョンコピーを設定します。

スケジュールによって作成されたスナップショットを、Outpost または別のリージョンにコピーするには、[クロスリージョンのコピー] セクションで、[クロスリージョンコピーを有効化する] を選択します。

スケジュールによってリージョンにスナップショットが作成されている場合は、アカウント内で最大3つの異なるリージョンあるいは Outposts に対し、そのスナップショットをコピーできます。コピー先となるリージョンまたは Outposts ごとに、個別のクロスリージョンコピールールを指定する必要があります。

リージョンまたは Outposts ごとに、異なる保持ポリシーを選択できます。また、すべてのタグをコピーするか、いずれのタグもコピーしないかを選択できます。ソーススナップショットが暗号化されている場合、またはデフォルトの暗号化が有効化されている場合には、コピーされたスナップショットも暗号化されます。ソーススナップショットが暗号化されていない場合には、暗号化できます。KMS キー を指定しない場合、スナップショットは、各送信先リージョンにおける EBS 暗号化用のデフォルト KMS キーを使用して暗号化されます。送信先リージョンで KMS キー を指定する場合、選択した IAM ロールには KMS キー へのアクセス権が必要です。

Note

リージョンごとのスナップショットの同時コピー数を超えないようにする必要があります。

ポリシーが Outpost にスナップショットを作成している場合、リージョンまたは別の Outpost に対し、そのスナップショットをコピーすることはできません。また、クロスリージョンコピー設定は使用できません。

g. クロスアカウントの共有を設定します。

クロスアカウント共有では、スケジュールによって作成されたスナップショットを他のアカウントと自動的に共有するようにポリシーを設定します。AWS 以下の操作を実行します。

- i. AWS 他アカウントとの共有を有効にするには、「クロスアカウント共有を有効にする」を選択します。
- ii. スナップショットを共有するアカウントを追加するには、[アカウントを追加] をクリックし、12桁のAWSアカウントIDを入力した後、[追加] をクリックします。
- iii. スナップショットの共有を特定の期間後に自動的に解除するには、[Unshare automatically] (共有を自動解除する) を選択します。スナップショットの共有の自動解除を選択した場合、自動的な共有解除が実行されるまでの期間は、ポリシーがスナップショットを保持する期間より長くすることはできません。例えば、ポリシー

の保存設定でスナップショットが 5 日間保持される場合、スナップショットの共有を自動的に解除するまでの期間としてポリシーに設定できるのは、最大 4 日間です。これは、期間ベースおよび数値ベースのスナップショット保持設定を持つポリシーに適用されます。

自動的な共有解除を有効にしない場合、スナップショットは削除されるまで共有されます。

Note

共有できるのは、暗号化されていないスナップショットまたはカスタマーマネージド型キーを使用して暗号化されたスナップショットだけです。デフォルトの EBS 暗号化 KMS キーで暗号化されたスナップショットを共有することはできません。暗号化されたスナップショットを共有する場合は、ソースボリュームの暗号化に使用された KMS キーも、ターゲットアカウントと共有する必要があります。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[他のアカウントのユーザーに KMS キーの使用を許可する](#)」を参照してください。

- h. 新たにスケジュールを追加するには、画面の上部にある [他のスケジュールを追加する] をクリックします。追加スケジュールごとに、このトピックの説明にならってフィールドを設定します。
 - i. 必要なスケジュールを追加したら、[ポリシーをレビュー] をクリックします。
12. ポリシーの概要を確認した後、[ポリシーを作成] をクリックします。

Note

Role with name AWSDataLifecycleManagerDefaultRole already exists エラーが発生した場合、詳細については「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

Command line

[create-lifecycle-policy](#) コマンドを使用してスナップショットライフサイクルポリシーを作成します。PolicyType で、EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT を指定する。

Note

構文を簡略化するために、次の例では、ポリシーの詳細を含む JSON ファイル、`policyDetails.json` を使用しています。

例 1 – 2 つのスケジュールを持つスナップショットライフサイクルポリシー

この例では、値が 115 で `costcenter` のタグキーを持つすべてのボリュームのスナップショットを作成するスナップショットライフサイクルポリシーを作成します。ポリシーには、2 つのスケジュールが含まれます。最初のスケジュールでは、毎日 03:00 UTC にスナップショットが作成されます。2 番目のスケジュールでは、毎週金曜日の 17:00 (UTC) に週次のスナップショットが作成されます。

```
aws dlm create-lifecycle-policy \  
  --description "My volume policy" \  
  --state ENABLED \  
  --execution-role-arn  
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \  
  --policy-details file://policyDetails.json
```

次は、`policyDetails.json` ファイルの例です。

```
{  
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",  
  "ResourceTypes": [  
    "VOLUME"  
  ],  
  "TargetTags": [{  
    "Key": "costcenter",  
    "Value": "115"  
  }],  
  "Schedules": [{  
    "Name": "DailySnapshots",  
    "TagsToAdd": [{  
      "Key": "type",  
      "Value": "myDailySnapshot"  
    }],  
    "CreateRule": {  
      "Interval": 24,  
      "IntervalUnit": "HOURS",
```

```

        "Times": [
            "03:00"
        ]
    },
    "RetainRule": {
        "Count": 5
    },
    "CopyTags": false
},
{
    "Name": "WeeklySnapshots",
    "TagsToAdd": [{
        "Key": "type",
        "Value": "myWeeklySnapshot"
    }],
    "CreateRule": {
        "CronExpression": "cron(0 17 ? * FRI *)"
    },
    "RetainRule": {
        "Count": 5
    },
    "CopyTags": false
}
]}

```

リクエストが成功すると、コマンドは新しく作成されたポリシーの ID を返します。以下は出力例です。

```

{
  "PolicyId": "policy-0123456789abcdef0"
}

```

例 2 - インスタンスをターゲットとし、データ (非ルート) ボリユームのサブセットのスナップショットを作成するスナップショットライフサイクルポリシー

この例では、code=production でタグ付けされたインスタンスからマルチボリユームスナップショットセットを作成するスナップショットライフサイクルポリシーを作成します。ポリシーには 1 つのスケジュールのみが含まれます。スケジュールでは、code=temp でタグ付けされたデータボリユームのスナップショットは作成されません。

```

aws dlm create-lifecycle-policy \
  --description "My volume policy" \

```

```
--state ENABLED \  
--execution-role-arn  
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \  
--policy-details file://policyDetails.json
```

次は、policyDetails.json ファイルの例です。

```
{  
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",  
  "ResourceTypes": [  
    "INSTANCE"  
  ],  
  "TargetTags": [{  
    "Key": "code",  
    "Value": "production"  
  }],  
  "Parameters": {  
    "ExcludeDataVolumeTags": [{  
      "Key": "code",  
      "Value": "temp"  
    }]  
  },  
  "Schedules": [{  
    "Name": "DailySnapshots",  
    "TagsToAdd": [{  
      "Key": "type",  
      "Value": "myDailySnapshot"  
    }],  
    "CreateRule": {  
      "Interval": 24,  
      "IntervalUnit": "HOURS",  
      "Times": [  
        "03:00"  
      ]  
    },  
    "RetainRule": {  
      "Count": 5  
    },  
    "CopyTags": false  
  }  
}]
```


リクエストが成功すると、コマンドは新しく作成されたポリシーの ID を返します。以下は出力例です。

```
{
  "PolicyId": "policy-0123456789abcdef0"
}
```

例 3 — Outpost リソースでのローカルスナップショットを自動化する、スナップショットライフサイクルポリシー

この例では、すべての Outposts について、team=dev によりタグ付けされたボリュームのスナップショットを作成する、スナップショットライフサイクルポリシーを作成します。このポリシーにより、ソースボリュームと同じ Outposts にスナップショットが作成されます。このポリシーによるスナップショットの作成は、00:00 UTCから開始され、その後 12 時間ごとに実行されます。

```
aws dlm create-lifecycle-policy \
  --description "My local snapshot policy" \
  --state ENABLED \
  --execution-role-arn
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \
  --policy-details file://policyDetails.json
```

次は、policyDetails.json ファイルの例です。

```
{
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",
  "ResourceTypes": "VOLUME",
  "ResourceLocations": "OUTPOST",
  "TargetTags": [{
    "Key": "team",
    "Value": "dev"
  }],
  "Schedules": [{
    "Name": "on-site backup",
    "CreateRule": {
      "Interval": 12,
      "IntervalUnit": "HOURS",
      "Times": [
        "00:00"
      ],
    },
  ],
}
```

```

"Location": [
  "OUTPOST_LOCAL"
],
"RetainRule": {
  "Count": 1
},
"CopyTags": false
}
]
}

```

例 4 — リージョンにスナップショットを作成し、それを Outpost にコピーするスナップショットライフサイクルポリシー

次のポリシー例では、team=dev によりタグ付けされたボリュームのスナップショットを作成します。スナップショットは、ソースボリュームと同じリージョンに作成されます。スナップショットの作成は、00:00 UTC から開始され、その後 12 時間ごとに実行されます。スナップショットは最大 1 個まで保持されます。また、このポリシーでは、スナップショットを Outpost arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/op-1234567890abcdef0 にコピーし、デフォルトの暗号化 KMS キー を使用しながら、コピーされたスナップショットの暗号化も行います。コピーの保持期間は 1 か月間です。

```

aws dlm create-lifecycle-policy \
  --description "Copy snapshots to Outpost" \
  --state ENABLED \
  --execution-role-arn
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \
  --policy-details file://policyDetails.json

```

次は、policyDetails.json ファイルの例です。

```

{
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",
  "ResourceTypes": "VOLUME",
  "ResourceLocations": "CLOUD",
  "TargetTags": [{
    "Key": "team",
    "Value": "dev"
  }],
  "Schedules": [{
    "Name": "on-site backup",
    "CopyTags": false,

```

```

    "CreateRule": {
      "Interval": 12,
      "IntervalUnit": "HOURS",
      "Times": [
        "00:00"
      ],
      "Location": "CLOUD"
    },
    "RetainRule": {
      "Count": 1
    },
    "CrossRegionCopyRules" : [
      {
        "Target": "arn:aws:outposts:us-east-1:123456789012:outpost/
op-1234567890abcdef0",
        "Encrypted": true,
        "CopyTags": true,
        "RetainRule": {
          "Interval": 1,
          "IntervalUnit": "MONTHS"
        }
      }
    ]
  }
}]

```

例 5 - アーカイブが有効な期間ベースのスケジュールを持つスナップショットライフサイクルポリシー

この例では、Name=Prod によりタグ付けされたボリュームを対象とする、スナップショットライフサイクルポリシーを作成します。このポリシーには、毎月の初日の午前 9 時にスナップショットを作成する、期間ベースのスケジュールが 1 つあります。スケジュールは、各スナップショットをアーカイブ階層に移動した後も、そのスナップショットを標準階層に 1 日間保持します。スナップショットは、90 日間アーカイブ階層に保持された後に削除されます。

```

aws dlm create-lifecycle-policy \
  --description "Copy snapshots to Outpost" \
  --state ENABLED \
  --execution-role-arn
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \
  --policy-details file://policyDetails.json

```

次は、policyDetails.json ファイルの例です。

```
{
  "ResourceTypes": [ "VOLUME" ],
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",
  "Schedules" : [
    {
      "Name": "sched1",
      "TagsToAdd": [
        {"Key": "createdby", "Value": "dlm"}
      ],
      "CreateRule": {
        "CronExpression": "cron(0 9 1 * ? *)"
      },
      "CopyTags": true,
      "RetainRule": {
        "Interval": 1,
        "IntervalUnit": "DAYS"
      },
      "ArchiveRule": {
        "RetainRule": {
          "RetentionArchiveTier": {
            "Interval": 90,
            "IntervalUnit": "DAYS"
          }
        }
      }
    }
  ],
  "TargetTags": [
    {
      "Key": "Name",
      "Value": "Prod"
    }
  ]
}
```

例 6 - アーカイブが有効なカウントベースのスケジュールを持つスナップショットライフサイクルポリシー

この例では、Purpose=Test によりタグ付けされたボリュームを対象とする、スナップショットライフサイクルポリシーを作成します。このポリシーには、毎月の初日の午前 9 時にスナップショットを作成する、カウントベースのスケジュールが 1 つあります。スケジュールは、作成直

後にスナップショットをアーカイブし、最大 3 つのスナップショットをアーカイブ階層に保持します。

```
aws dlm create-lifecycle-policy \  
  --description "Copy snapshots to Outpost" \  
  --state ENABLED \  
  --execution-role-arn  
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \  
  --policy-details file:///policyDetails.json
```

次は、policyDetails.json ファイルの例です。

```
{  
  "ResourceTypes": [ "VOLUME"],  
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",  
  "Schedules" : [  
    {  
      "Name": "sched1",  
      "TagsToAdd": [  
        {"Key": "createdby", "Value": "dlm"}  
      ],  
      "CreateRule": {  
        "CronExpression": "cron(0 9 1 * ? *)"  
      },  
      "CopyTags": true,  
      "RetainRule": {  
        "Count": 0  
      },  
      "ArchiveRule": {  
        "RetainRule": {  
          "RetentionArchiveTier": {  
            "Count": 3  
          }  
        }  
      }  
    }  
  ],  
  "TargetTags": [  
    {  
      "Key": "Purpose",  
      "Value": "Test"  
    }  
  ]  
}
```

}

スナップショットライフサイクルポリシーに関する考慮事項

スナップショットのライフサイクルポリシーには、次の一般的な考慮事項が適用されます。

- スナップショットライフサイクルポリシーは、ポリシーと同じリージョンにあるインスタンスまたはボリュームのみを対象としています。
- 最初のスナップショット作成オペレーションは、指定された開始時刻から 1 時間以内に開始されます。その後続くスナップショット作成オペレーションは、スケジュールされた時刻の 1 時間以内に開始されます。
- ボリュームまたはインスタンスをバックアップするために複数のポリシーを作成できます。例えば、ボリュームに 2 つのタグがあり、タグ A が 12 時間ごとにスナップショットを作成するポリシー A のターゲットであり、タグ B が 24 時間ごとにスナップショットを作成するポリシー B のターゲットである場合、Amazon Data Lifecycle Manager は両方のポリシーのスケジュールに従ってスナップショットを作成します。または、複数のスケジュールを持つ単一のポリシーを作成することで、同じ結果を得ることができます。例えば、タグ A のみをターゲットとするポリシーを 1 つ作成し、スケジュールを 2 つ指定できます (1 つは 12 時間ごと、1 つは 24 時間ごと)。
- ターゲットリソースタグでは大文字と小文字が区別されます。
- ポリシーによってターゲットにされたリソースからターゲットタグを削除した場合、以降、Amazon Data Lifecycle Manager では、標準階層とアーカイブ層に既に存在するスナップショットの管理は行いません。不要になった場合は手動で削除する必要があります。
- インスタンスをターゲットとするポリシーを作成し、ポリシーの作成後に新しいボリュームがターゲットインスタンスにアタッチされた場合、新しく追加されたボリュームは、次のポリシー実行時にバックアップに含まれます。ポリシー実行時にインスタンスにアタッチされたすべてのボリュームが含まれます。
- スナップショットを 1 つだけ作成するように設定されているカスタム cron ベースのスケジュールを持つポリシーを作成した場合、そのポリシーでは、保持のしきい値に達しても、そのスナップショットは自動的に削除されません。スナップショットが不要になった場合は、手動で削除する必要があります。
- 保持期間が作成頻度よりも短い経過日ベースのポリシーを作成した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は次のスナップショットが作成されるまで常に最新のスナップショットを保持します。例えば、経過日ベースのポリシーで保存期間が 7 日間のスナップショットが毎月 1 つ作成される場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、保持期間が 7 日間であっても、各スナップショットを 1 か月間保持します。

[スナップショットの共有](#)には、次の考慮事項が適用されます。

- スナップショットのアーカイブは、ボリュームをターゲットとするスナップショットポリシーに対してのみ有効にできます。
- アーカイブルールは、ポリシーごとに 1 つのスケジュールでのみ指定が可能です。
- コンソールを使用している場合、スケジュールに設定されている作成頻度が、毎月または毎年、または 28 日以上の cron 式の場合にのみ、スナップショットアーカイブを有効にできます。

AWS CLI、AWS API、または AWS SDK を使用している場合、作成間隔が 28 日以上の cron 式がスケジュールに含まれている場合にのみ、スナップショットアーカイブを有効にできます。

- アーカイブ階層における最小保持期間は 90 日です。
- アーカイブされるスナップショットは、アーカイブ階層に移動される際に完全なスナップショットに変換されます。これにより、スナップショットのストレージコストが高くなる可能性があります。詳細については、「[料金と請求](#)」を参照してください。
- スナップショットのアーカイブを使用する場合、スナップショットの高速復元とスナップショット共有は無効になります。
- うるう年のために、保持ルールによるアーカイブの保持期間が 90 日到達できない場合、Amazon Data Lifecycle Manager が、スナップショットの保持期間が最低 90 日間になるように調整します。
- Amazon Data Lifecycle Manager によって作成されたスナップショットを手動でアーカイブし、スケジュールによる保持期間のしきい値を超えても依然としてアーカイブされている場合には、そのスナップショットに対して Amazon Data Lifecycle Manager による管理は行われません。ただし、スケジュールによる保持期間のしきい値に達する前にスナップショットを標準階層に復元すれば、そのスナップショットに対し、引き続きスケジュールの保存ルールに従った管理が行われます。
- 標準階層に永続的または一時的に復元された (Amazon Data Lifecycle Manager がアーカイブを行った) スナップショットが、スケジュールでの保持期間のしきい値に達した後も標準階層に残っている場合、そのスナップショットに対する Amazon Data Lifecycle Manager による管理は行われなくなります。ただし、保持期間のしきい値に達する前にスナップショットを再アーカイブすると、この保持期間が終了した時点で、スナップショットはスケジュールにより削除されます。
- Amazon Data Lifecycle Manager によってアーカイブされたスナップショットは、Archived snapshots per volume および In-progress snapshot archives per account のクォータにカウントされます。
- 24 時間再試行した後も、スケジュールがスナップショットをアーカイブできない場合、スナップショットは標準階層に残されます。その後、アーカイブ層から削除される予定時刻に基づいて削除されるようにスケジュールされます。例えば、スナップショットを 120 日間アーカイブするスケ

スケジュールでは、アーカイブが失敗してもスナップショットが 120 日間は標準階層に残され、その後完全に削除されます。カウントベースのスケジュールの場合、スナップショットはスケジュールによるの保持回数にカウントされません。

- スナップショットは、それが作成されたリージョンと同じリージョンにアーカイブされる必要があります。クロスリージョンコピーとスナップショットアーカイブを有効にしている場合、このスナップショットのコピーは Amazon Data Lifecycle Manager によりアーカイブされません。
- Amazon Data Lifecycle Manager によってアーカイブされたスナップショットには、aws:dlm:archived=true システムタグが付けられます。さらに、アーカイブが有効な期間ベースのスケジュールで作成されたスナップショットには、aws:dlm:expirationTime システムタグ (スナップショットがアーカイブされる予定の日付と時刻を示します) が付けられます。

ルートボリュームとデータ (非ルート) ボリュームの除外には、次の考慮事項が適用されます。

- ブートボリュームを除外することを選択し、インスタンスにアタッチされた追加のデータボリュームをすべて除外するタグを指定した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は影響を受けるインスタンスのスナップショットを作成せず、SnapshotsCreateFailedCloudWatch メトリックスを発行します。詳細については、「[を使用してポリシーをモニタリングする](#)」を参照してください。CloudWatch

スナップショットライフサイクルポリシーによってターゲットにされたボリュームを削除したり、インスタンスを終了したりする場合の考慮事項は次のとおりです。

- 数値ベースの保持期間が設定されたポリシーでターゲットされているボリュームの削除やインスタンスの終了を行った場合、以後 Amazon Data Lifecycle Manager では、これらのボリュームまたはインスタンスで作成されたスナップショットの管理は行いません。前に作成されたこれらのスナップショットが不要になった場合、手動で削除する必要があります。
- 期間ベースの保持スケジュールが設定されたポリシーによってターゲットされているボリュームの削除やインスタンスの終了を行っても、ポリシーは、削除されたボリュームまたは終了されたインスタンスから以前に作成されたスナップショットを、定義されたスケジュールに基づいて順番にすべて (ただし、最新のものは除き) 削除し続けます。最後のスナップショットが不要になった場合は、手動で削除する必要があります。

スナップショットライフサイクルポリシーや[高速スナップショット復元](#)に関する考慮事項は次のとおりです。

- Amazon Data Lifecycle Manager は、サイズが 16 TiB 以下のスナップショットに対してのみ高速スナップショット復元を有効にできます。詳細については、「[Amazon EBS 高速スナップショット復元](#)」を参照してください。
- 高速スナップショット復元が有効化されているスナップショットについては、対応するポリシーを削除もしくは無効化した場合、対応するポリシーの高速スナップショット復元を無効化した場合、または対応するアベイラビリティゾーンの高速スナップショット復元を無効化した場合であっても、当該復元は有効に保たれます。このようなスナップショットについては、手動で高速スナップショット復元を無効化する必要があります。
- ポリシーの高速スナップショット復元の有効化中に、有効化できるスナップショットの最大数を超えると、Amazon Data Lifecycle Manager はスケジュールに沿ったスナップショット作成は行わないものの、作成したスナップショットの高速スナップショット復元は無効化しません。高速スナップショット復元が有効化されているスナップショットが削除されると、その次に Amazon Data Lifecycle Manager が作成するスナップショットの高速スナップショット復元が有効化されます。
- あるスナップショットの高速スナップショット復元を有効化すると、当該スナップショットが最適化されるまでに、1 TiB あたり 60 分の時間がかかります。Amazon Data Lifecycle Manager が次のスナップショットを作成する前に各スナップショットが完全に最適化されるようなスケジュールの設定をお勧めします。
- インスタンスを対象とするポリシーの高速スナップショット復元を有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager は、マルチボリュームスナップショットセット内の各スナップショットの高速スナップショット復元を個別に有効にします。Amazon Data Lifecycle Manager が、マルチボリュームスナップショットセット内のスナップショットの 1 つに対して高速スナップショット復元を有効にできない場合でも、スナップショットセット内の残りのスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にしようとします。
- 特定のアベイラビリティゾーンでスナップショットの高速スナップショット復元を有効にしている時間中は、請求が発生します。料金は 1 時間を最小として時間単位で計算されます。詳細については、「[価格と請求](#)」を参照してください。

Note

ライフサイクルポリシーの設定によっては、複数のスナップショットに対して同時に複数のアベイラビリティゾーンで高速スナップショット復元を有効にすることができます。

スナップショットライフサイクルポリシーおよび[マルチアタッチ](#)が有効なボリュームに関する考慮事項は次のとおりです。

- マルチアタッチが有効な同じボリュームを持つインスタンスをターゲットとするライフサイクルポリシーを作成する場合、Amazon Data Lifecycle Manager はアタッチされたインスタンスごとにボリュームのスナップショットを開始します。timestamp タグを使用して、アタッチされたインスタンスから作成された時間整合性のあるスナップショットのセットを識別します。

アカウント間でスナップショットを共有する場合の考慮事項は次のとおりです。

- 共有できるのは、暗号化されていないスナップショットまたは カスタマーマネージド型キー を使用して暗号化されたスナップショットだけです。
- デフォルトの EBS 暗号化 KMS キー で暗号化されたスナップショットを共有することはできません。
- 暗号化されたスナップショットを共有する場合は、ソースボリュームの暗号化に使用された KMS キーも、ターゲットアカウントと共有する必要があります。詳細については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドの[他のアカウントのユーザーに KMS キーの使用を許可する](#)をご参照ください。

スナップショットのポリシーや[スナップショットのアーカイブ](#)に関する考慮事項は次のとおりです。

- ポリシーによって作成されたスナップショットを手動でアーカイブし、ポリシーの保持しきい値に達したときにそのスナップショットがアーカイブ階層にある場合、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットを削除しません。Amazon Data Lifecycle Manager は、スナップショットがアーカイブ階層に保存されている間は、スナップショットを管理しません。アーカイブ階層に保存されているスナップショットが不要になった場合は、手動で削除する必要があります。

次の考慮事項は、スナップショットポリシーおよび「[ごみ箱](#)」に適用されます。

- Amazon Data Lifecycle Manager がポリシーの保持しきい値に達したときにスナップショットを削除してごみ箱に移動し、そのスナップショットをごみ箱から手動で復元した場合は、スナップショットが不要になったら手動で削除する必要があります。Amazon Data Lifecycle Manager は、スナップショットを管理しなくなります。
- ポリシーによって作成されたスナップショットを手動で削除し、ポリシーの保持しきい値に達したときにそのスナップショットをごみ箱にある場合、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットを削除しません。Amazon Data Lifecycle Manager は、スナップショットをごみ箱に保存されている間は、スナップショットを管理しません。

ポリシーの保持しきい値に達する前にスナップショットがごみ箱から復元された場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、ポリシーの保持しきい値に達したときにスナップショットを削除しません。

ポリシーの保持しきい値に達した後にスナップショットがごみ箱から復元された場合、Amazon Data Lifecycle Manager はそのスナップショットを削除しません。スナップショットが不要になった場合は、手動で削除する必要があります。

以下は、エラー状態にあるスナップショットライフサイクルポリシーに関する考慮事項です。

- 期間ベースの保持スケジュールを持つポリシーの場合、ポリシーが error 状態の間に有効期限を迎えるスナップショットは無期限に保持されます。これらのスナップショットは手動で削除する必要があります。ポリシーを再度有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager は保持期間が終了した時にスナップショットの削除を再開します。
- カウントベースの保存スケジュールが設定されているポリシーの場合、ポリシーが error 状態の間はスナップショットの作成と削除が停止されます。ポリシーを再度有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットの作成を再開し、保持しきい値に達した時にスナップショットの削除を再開します。

スナップショットポリシーと [スナップショットロック](#) に関する考慮事項は次のとおりです。

- Amazon Data Lifecycle Manager によって作成されたスナップショットを手動でロックし、その後保持しきい値を超えても依然としてロックされている場合、そのスナップショットについては Amazon Data Lifecycle Manager による管理は行われません。スナップショットが不要になった場合は、手動で削除する必要があります。
- Amazon Data Lifecycle Manager によって作成され、高速スナップショット復元が有効化されているスナップショットを手動でロックし、その後保持しきい値を超えても依然としてロックされている場合、そのスナップショットについては Amazon Data Lifecycle Manager による高速スナップショット復元の無効化または削除は行われません。スナップショットが不要になった場合は、手動で高速スナップショット復元を無効にして削除する必要があります。
- Amazon Data Lifecycle Manager によって作成されたスナップショットを AMI に手動で登録してからロックし、その後保持しきい値を超えても依然としてロックされた状態で AMI に関連付けられている場合、そのスナップショットについては Amazon Data Lifecycle Manager による削除の試行が続行されます。AMI の登録が解除され、スナップショットのロックが解除されると、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットを自動的に削除します。

追加リソース

詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager AWS ストレージを使用した Amazon EBS スナップショットと AMI 管理の自動化](#)」ブログを参照してください。

事前スクリプトと事後スクリプトを使用するための要件

次の表は、Amazon Data Lifecycle Manager で事前スクリプトと事後スクリプトを使用する際の要件の概要を示しています。

要件	アプリケーションコンシステントなスナップショット		
	VSS バックアップ	カスタム SSM ドキュメント	その他のユースケース
SSM エージェントがターゲットインスタンスにインストールされ実行されている	✓	✓	✓
VSS システム要件がターゲットインスタンスで満たされている	✓		
ターゲットインスタンスに関連付けられた VSS 対応インスタンスプロファイル	✓		
ターゲットインスタンスにインストールされている VSS コンポーネント	✓		
プレスクリプトコマンドとポストスクリプトコマンドを使用		✓	✓

アプリケーションコンシステントなスナップショット

して SSM ドキュメントを準備します。

Amazon Data Lifecycle Manager IAM ロールの準備プレスクリプトとポストスクリプトの実行	✓	✓	✓
インスタンスを対象とし、プレスクリプトとポストスクリプト用に設定するスナップショットポリシーを作成します。	✓	✓	✓

事前スクリプトと事後スクリプトによるアプリケーション整合性のあるスナップショットの自動化

Amazon Data Lifecycle Manager では、インスタンスをターゲットとするスナップショットライフサイクルポリシーで事前スクリプトと事後スクリプトを有効にすることで、アプリケーション整合性のあるスナップショットを自動化できます。

Amazon Data Lifecycle Manager は AWS Systems Manager (Systems Manager) と統合されており、アプリケーションと整合性のあるスナップショットをサポートします。Amazon Data Lifecycle Manager は、事前スクリプトと事後スクリプトを含む Systems Manager (SSM) コマンドドキュメントを使用して、アプリケーション整合性のあるスナップショットを完成させるために必要なアクションを自動化します。Amazon Data Lifecycle Manager は、スナップショットの作成を開始する前に、事前スクリプト内のコマンドを実行して I/O をフリーズおよびフラッシュします。Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットの作成を開始した後に、事後スクリプト内のコマンドを実行して I/O を解凍します。

Amazon Data Lifecycle Manager を使用すると、以下のアプリケーション整合性のあるスナップショットを自動化できます。

- Volume Shadow Copy Service (VSS) を使用した Windows アプリケーション
- SAP HANA はマネージド SSDM ドキュメントを使用します。AWS 詳細については、「[SAP HANA 用 Amazon EBS スナップショット](#)」を参照してください。
- SSM ドキュメントテンプレートを使用する MySQL、PostgreSQL、InterSystems IRIS などのセルフマネージド型データベース

トピック

- [アプリケーション整合性のあるスナップショットの使用開始](#)
- [Amazon Data Lifecycle Manager での VSS バックアップに関する考慮事項](#)
- [アプリケーション整合性のあるスナップショットの責任共有](#)

アプリケーション整合性のあるスナップショットの使用開始

このセクションでは、Amazon Data Lifecycle Manager を使用してアプリケーション整合性のあるスナップショットを自動化するために必要な手順について説明します。

ステップ 1: ターゲットインスタンスを準備する

Amazon Data Lifecycle Manager を使用して、ターゲットインスタンスをアプリケーション整合性のあるスナップショット用に準備する必要があります。ユースケースに応じて、以下のいずれかを実行します。

Prepare for VSS Backups

ターゲットインスタンスを VSS バックアップ用に準備するには

1. SSM Agent がまだインストールされていない場合は、ターゲットインスタンスにインストールします。SSM Agent がターゲットインスタンスに既にインストールされている場合は、このステップをスキップしてください。

詳細については、「[Windows 用 Amazon EC2 インスタンスに SSM Agent を手動でインストールする](#)」を参照してください。

2. SSM Agent が実行中であることを確認します。詳細については、「[SSM Agent ステータスの確認とエージェントの起動](#)」を参照してください。
3. Systems Manager の Amazon EC2 インスタンスをセットアップします。詳細については、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「[Amazon EC2 インスタンス用 System Manager のセットアップ](#)」を参照してください。

4. [VSS バックアップのシステム要件が満たされていることを確認します。](#)
5. [VSS 対応インスタンスプロファイルをターゲットインスタンスにアタッチします。](#)
6. [VSS コンポーネントをインストールします。](#)

Prepare for SAP HANA backups

ターゲットインスタンスを SAP HANA バックアップ用に準備するには

1. ターゲットインスタンス上に SAP HANA 環境を準備します。
 - a. SAP HANA と一緒にインスタンスをセットアップします。既存の SAP HANA 環境がない場合は、「[AWSでの SAP HANA 環境設定](#)」を参照してください。
 - b. SystemDB に適切な管理者ユーザーとしてログインします。
 - c. Amazon Data Lifecycle Manager で使用するデータベースバックアップユーザーを作成します。

```
CREATE USER username PASSWORD password NO FORCE_FIRST_PASSWORD_CHANGE;
```

例えば、次のコマンドは、名前が `d1m_user` でパスワードが `password` のユーザーを作成します。

```
CREATE USER d1m_user PASSWORD password NO FORCE_FIRST_PASSWORD_CHANGE;
```

- d. 前のステップで作成したデータベースバックアップユーザーに BACKUP_OPERATOR ロールを割り当てます。

```
GRANT BACKUP_OPERATOR TO username
```

例えば、次のコマンドは、`d1m_user` という名前のユーザーにロールを割り当てます。

```
GRANT BACKUP_OPERATOR TO d1m_user
```

- e. オペレーティングシステムに管理者 (例: `sidadm`) としてログインします。
- f. 接続情報を保存する `hdbuserstore` エントリを作成して、ユーザーが情報を入力しなくても SAP HANA SSM ドキュメントが SAP HANA に接続できるようにします。


```
hdbuserstore set DLM_HANADB_SNAPSHOT_USER  
localhost:3hana_instance_number13 username password
```

例:

```
hdbuserstore set DLM_HANADB_SNAPSHOT_USER localhost:30013 dlm_user password
```

g. 接続をテストします。

```
hdbsql -U DLM_HANADB_SNAPSHOT_USER "select * from dummy"
```

- SSM Agent がまだインストールされていない場合は、ターゲットインスタンスにインストールします。SSM Agent がターゲットインスタンスに既にインストールされている場合は、このステップをスキップしてください。

詳細については、「[Linux 用 Amazon EC2 インスタンスに SSM Agent を手動でインストールする](#)」を参照してください。

- SSM Agent が実行中であることを確認します。詳細については、「[SSM Agent ステータスの確認とエージェントの起動](#)」を参照してください。
- Systems Manager の Amazon EC2 インスタンスをセットアップします。詳細については、「[AWS Systems Manager ユーザーガイド](#)」の「[Amazon EC2 インスタンス用 System Manager のセットアップ](#)」を参照してください。

Prepare for custom SSM documents

ターゲットインスタンスのカスタム SSM ドキュメントを準備するには

- SSM Agent がまだインストールされていない場合は、ターゲットインスタンスにインストールします。SSM Agent がターゲットインスタンスに既にインストールされている場合は、このステップをスキップしてください。
 - (Linux インスタンス) [Linux 用 Amazon EC2 インスタンスに SSM Agent を手動でインストールする](#)
 - (Windows インスタンス) [Windows 用 Amazon EC2 インスタンスに SSM Agent を手動でインストールする](#)
- SSM Agent が実行中であることを確認します。詳細については、「[SSM Agent ステータスの確認とエージェントの起動](#)」を参照してください。

3. Systems Manager の Amazon EC2 インスタンスをセットアップします。詳細については、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「[Amazon EC2 インスタンス用 System Manager のセットアップ](#)」を参照してください。

ステップ 2: SSM ドキュメントを準備する

Note

このステップはカスタム SSM ドキュメントの場合にのみ必要です。VSS バックアップや SAP HANA には必要ありません。VSS バックアップと SAP HANA では、Amazon Data Lifecycle Manager AWS はマネージド SSM ドキュメントを使用します。

MySQL、PostgreSQL、InterSystems IRIS などの自己管理型データベースのアプリケーションと整合性のあるスナップショットを自動化する場合は、スナップショットの作成を開始する前に I/O をフリーズしてフラッシュするプレスクリプトと、スナップショット作成の開始後に I/O をフリーズ解除するポストスクリプトを含む SSM コマンドドキュメントを作成する必要があります。

MySQL、PostgreSQL、または InterSystems IRIS データベースが標準構成を使用している場合は、以下のサンプル SSM ドキュメントコンテンツを使用して SSM コマンドドキュメントを作成できます。MySQL、PostgreSQL、または InterSystems IRIS データベースが標準以外の構成を使用している場合は、以下のサンプルコンテンツを SSM コマンドドキュメントの出発点として使用し、要件に合わせてカスタマイズできます。あるいは、新しい SSM ドキュメントを最初から作成する場合は、以下の空の SSM ドキュメントテンプレートを使用して、該当するドキュメントセクションに事前コマンドと事後コマンドを追加できます。

⚠ 次の点に注意してください。

- データベース設定に対して SSM ドキュメントが適切かつ必要なアクションを実行していることを確認するのは、ユーザーの責任になります。
- SSM ドキュメント内の事前スクリプトと事後スクリプトが I/O を正常にフリーズ、フラッシュ、および解凍できた場合にのみ、スナップショットのアプリケーション整合性が保証されます。
- SSM ドキュメントには、pre-script、post-script、dry-run などの allowedValues の必須フィールドが含まれている必要があります。Amazon Data Lifecycle Manager は、これらのセクションのコンテンツに基づいてインスタンス上でコマ

ンドを実行します。SSM ドキュメントにこれらのセクションがない場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、そのドキュメントを実行に失敗したものと扱います。

MySQL sample document content

```
###=====###
# Copyright Amazon.com, Inc. or its affiliates. All Rights Reserved.

# Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of
# this
# software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the
# Software
# without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify,
# merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to
# permit persons to whom the Software is furnished to do so.

# THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR
# IMPLIED,
# INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A
# PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT
# HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION
# OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE
# SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.
###=====###
schemaVersion: '2.2'
description: Amazon Data Lifecycle Manager Pre/Post script for MySQL databases
parameters:
  executionId:
    type: String
    default: None
    description: (Required) Specifies the unique identifier associated with a pre
and/or post execution
    allowedPattern: ^(None|[a-fA-F0-9]{8}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]
{4}-[a-fA-F0-9]{12})$
  command:
    # Data Lifecycle Manager will trigger the pre-script and post-script actions
during policy execution.
    # 'dry-run' option is intended for validating the document execution without
triggering any commands
    # on the instance. The following allowedValues will allow Data Lifecycle Manager
to successfully
    # trigger pre and post script actions.
```

```

type: String
default: 'dry-run'
description: (Required) Specifies whether pre-script and/or post-script should
be executed.
allowedValues:
- pre-script
- post-script
- dry-run

```

mainSteps:

```

- action: aws:runShellScript
description: Run MySQL Database freeze/thaw commands
name: run_pre_post_scripts
precondition:
  StringEquals:
  - platformType
  - Linux
inputs:
  runCommand:
  - |
    #!/bin/bash

```

```

###=====###
### Error Codes

```

```

###=====###
# The following Error codes will inform Data Lifecycle Manager of the type of
error
# and help guide handling of the error.
# The Error code will also be emitted via AWS Eventbridge events in the
'cause' field.
# 1 Pre-script failed during execution - 201
# 2 Post-script failed during execution - 202
# 3 Auto thaw occurred before post-script was initiated - 203
# 4 Pre-script initiated while post-script was expected - 204
# 5 Post-script initiated while pre-script was expected - 205
# 6 Application not ready for pre or post-script initiation - 206

```

```

###=====###

```

```

### Global variables

```

```

###=====###

```

```

START=$(date +%s)

```

```

# For testing this script locally, replace the below with OPERATION=$1.

```

```
OPERATION={{ command }}
FS_ALREADY_FROZEN_ERROR='freeze failed: Device or resource busy'
FS_ALREADY_THAWED_ERROR='unfreeze failed: Invalid argument'
FS_BUSY_ERROR='mount point is busy'

# Auto thaw is a fail safe mechanism to automatically unfreeze the application
after the
# duration specified in the global variable below. Choose the duration based
on your
# database application's tolerance to freeze.
export AUTO_THAW_DURATION_SECS="60"

# Add all pre-script actions to be performed within the function below
execute_pre_script() {
    echo "INFO: Start execution of pre-script"
    # Check if filesystem is already frozen. No error code indicates that
filesystem
# is not currently frozen and that the pre-script can proceed with
freezing the filesystem.
    check_fs_freeze
    # Execute the DB commands to flush the DB in preparation for snapshot
snap_db
    # Freeze the filesystem. No error code indicates that filesystem was
successfully frozen
    freeze_fs

    echo "INFO: Schedule Auto Thaw to execute in ${AUTO_THAW_DURATION_SECS}
seconds."
    $(nohup bash -c execute_schedule_auto_thaw >/dev/null 2>&1 &)
}

# Add all post-script actions to be performed within the function below
execute_post_script() {
    echo "INFO: Start execution of post-script"
    # Unfreeze the filesystem. No error code indicates that filesystem was
successfully unfrozen.
    unfreeze_fs
    thaw_db
}

# Execute Auto Thaw to automatically unfreeze the application after the
duration configured
# in the AUTO_THAW_DURATION_SECS global variable.
execute_schedule_auto_thaw() {
```

```

    sleep ${AUTO_THAW_DURATION_SECS}
    execute_post_script
}

# Disable Auto Thaw if it is still enabled
execute_disable_auto_thaw() {
    echo "INFO: Attempting to disable auto thaw if enabled"
    auto_thaw_pgid=$(pgrep -f execute_schedule_auto_thaw | xargs -i ps -hp {}
-o pgid)
    if [ -n "${auto_thaw_pgid}" ]; then
        echo "INFO: execute_schedule_auto_thaw process found with pgid
${auto_thaw_pgid}"
        sudo pkill -g ${auto_thaw_pgid}
        rc=$?
        if [ ${rc} != 0 ]; then
            echo "ERROR: Unable to kill execute_schedule_auto_thaw process.
retval=${rc}"
        else
            echo "INFO: Auto Thaw has been disabled"
        fi
    fi
}

# Iterate over all the mountpoints and check if filesystem is already in
freeze state.
# Return error code 204 if any of the mount points are already frozen.
check_fs_freeze() {
    for target in $(lsblk -nlo MOUNTPOINTS)
    do
        # Freeze of the root and boot filesystems is dangerous and pre-script
does not freeze these filesystems.
        # Hence, we will skip the root and boot mountpoints while checking if
filesystem is in freeze state.
        if [ $target == '/' ]; then continue; fi
        if [[ "$target" == */boot* ]]; then continue; fi

        error_message=$(sudo mount -o remount,noatime $target 2>&1)
        # Remount will be a no-op without a error message if the filesystem is
unfrozen.
        # However, if filesystem is already frozen, remount will fail with
busy error message.
        if [ $? -ne 0 ];then
            # If the filesystem is already in frozen, return error code 204
            if [[ "$error_message" == *"$FS_BUSY_ERROR"* ]];then

```

```

        echo "ERROR: Filesystem ${target} already frozen. Return Error
Code: 204"
        exit 204
    fi
    # If the check filesystem freeze failed due to any reason other
than the filesystem already frozen, return 201
    echo "ERROR: Failed to check_fs_freeze on mountpoint $target due
to error - $errormessage"
    exit 201
fi
done
}

# Iterate over all the mountpoints and freeze the filesystem.
freeze_fs() {
    for target in $(lsblk -nlo MOUNTPOINTS)
    do
        # Freeze of the root and boot filesystems is dangerous. Hence, skip
filesystem freeze
        # operations for root and boot mountpoints.
        if [ $target == '/' ]; then continue; fi
        if [[ "$target" == */boot* ]]; then continue; fi
        echo "INFO: Freezing $target"
        error_message=$(sudo fsfreeze -f $target 2>&1)
        if [ $? -ne 0 ];then
            # If the filesystem is already in frozen, return error code 204
            if [[ "$error_message" == *"$FS_ALREADY_FROZEN_ERROR"* ]]; then
                echo "ERROR: Filesystem ${target} already frozen. Return Error
Code: 204"
                sudo mysql -e 'UNLOCK TABLES;'
                exit 204
            fi
            # If the filesystem freeze failed due to any reason other than the
filesystem already frozen, return 201
            echo "ERROR: Failed to freeze mountpoint $targetdue due to error -
$errormessage"
            thaw_db
            exit 201
        fi
        echo "INFO: Freezing complete on $target"
    done
}

# Iterate over all the mountpoints and unfreeze the filesystem.

```

```
unfreeze_fs() {
    for target in $(lsblk -nlo MOUNTPOINTS)
    do
        # Freeze of the root and boot filesystems is dangerous and pre-script
does not freeze these filesystems.
        # Hence, will skip the root and boot mountpoints during unfreeze as
well.

        if [ $target == '/' ]; then continue; fi
        if [[ "$target" == */boot* ]]; then continue; fi
        echo "INFO: Thawing $target"
        error_message=$(sudo fsfreeze -u $target 2>&1)
        # Check if filesystem is already unfrozen (thawed). Return error code
204 if filesystem is already unfrozen.
        if [ $? -ne 0 ]; then
            if [[ "$error_message" == *"$FS_ALREADY_THAWED_ERROR"* ]]; then
                echo "ERROR: Filesystem ${target} is already in thaw state.
Return Error Code: 205"
                exit 205
            fi
            # If the filesystem unfreeze failed due to any reason other than
the filesystem already unfrozen, return 202
            echo "ERROR: Failed to unfreeze mountpoint $target due to error
- $error_message"
            exit 202
        fi
        echo "INFO: Thaw complete on $target"
    done
}

snap_db() {
    # Run the flush command only when MySQL DB service is up and running
sudo systemctl is-active --quiet mysqld.service
    if [ $? -eq 0 ]; then
        echo "INFO: Execute MySQL Flush and Lock command."
        sudo mysql -e 'FLUSH TABLES WITH READ LOCK;'
        # If the MySQL Flush and Lock command did not succeed, return error
code 201 to indicate pre-script failure
        if [ $? -ne 0 ]; then
            echo "ERROR: MySQL FLUSH TABLES WITH READ LOCK command failed."
            exit 201
        fi
        sync
    else
```

```
        echo "INFO: MySQL service is inactive. Skipping execution of MySQL
Flush and Lock command."
    fi
}

thaw_db() {
    # Run the unlock command only when MySQL DB service is up and running
    sudo systemctl is-active --quiet mysqld.service
    if [ $? -eq 0 ]; then
        echo "INFO: Execute MySQL Unlock"
        sudo mysql -e 'UNLOCK TABLES;'
    else
        echo "INFO: MySQL service is inactive. Skipping execution of MySQL
Unlock command."
    fi
}

export -f execute_schedule_auto_thaw
export -f execute_post_script
export -f unfreeze_fs
export -f thaw_db

# Debug logging for parameters passed to the SSM document
echo "INFO: ${OPERATION} starting at $(date) with executionId:
${EXECUTION_ID}"

# Based on the command parameter value execute the function that supports
# pre-script/post-script operation
case ${OPERATION} in
    pre-script)
        execute_pre_script
        ;;
    post-script)
        execute_post_script
        execute_disable_auto_thaw
        ;;
    dry-run)
        echo "INFO: dry-run option invoked - taking no action"
        ;;
    *)
        echo "ERROR: Invalid command parameter passed. Please use either pre-
script, post-script, dry-run."
        exit 1 # return failure
        ;;
endcase
```



```

esac

END=$(date +%s)
# Debug Log for profiling the script time
echo "INFO: ${OPERATION} completed at $(date). Total runtime: $(( ${END} -
${START} )) seconds."

```

PostgreSQL sample document content

```

###=====###
# Copyright Amazon.com, Inc. or its affiliates. All Rights Reserved.

# Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of
this
# software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the
Software
# without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify,
# merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to
# permit persons to whom the Software is furnished to do so.

# THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR
IMPLIED,
# INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A
# PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT
# HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION
# OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE
# SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.
###=====###
schemaVersion: '2.2'
description: Amazon Data Lifecycle Manager Pre/Post script for PostgreSQL databases
parameters:
  executionId:
    type: String
    default: None
    description: (Required) Specifies the unique identifier associated with a pre
and/or post execution
    allowedPattern: ^(None|[a-fA-F0-9]{8}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]
{4}-[a-fA-F0-9]{12})$
  command:
    # Data Lifecycle Manager will trigger the pre-script and post-script actions
during policy execution.
    # 'dry-run' option is intended for validating the document execution without
triggering any commands

```

```

# on the instance. The following allowedValues will allow Data Lifecycle Manager
to successfully
# trigger pre and post script actions.
  type: String
  default: 'dry-run'
  description: (Required) Specifies whether pre-script and/or post-script should
be executed.
  allowedValues:
    - pre-script
    - post-script
    - dry-run

```

mainSteps:

```

- action: aws:runShellScript
  description: Run PostgreSQL Database freeze/thaw commands
  name: run_pre_post_scripts
  precondition:
    StringEquals:
      - platformType
      - Linux
  inputs:
    runCommand:
      - |
        #!/bin/bash

```

```
###=====###
```

```
### Error Codes
```

```
###=====###
```

```

# The following Error codes will inform Data Lifecycle Manager of the type of
error

```

```

# and help guide handling of the error.

```

```

# The Error code will also be emitted via AWS Eventbridge events in the
'cause' field.

```

```

# 1 Pre-script failed during execution - 201

```

```

# 2 Post-script failed during execution - 202

```

```

# 3 Auto thaw occurred before post-script was initiated - 203

```

```

# 4 Pre-script initiated while post-script was expected - 204

```

```

# 5 Post-script initiated while pre-script was expected - 205

```

```

# 6 Application not ready for pre or post-script initiation - 206

```

```
###=====###
```

```
### Global variables

###=====###
START=$(date +%s)
OPERATION={{ command }}
FS_ALREADY_FROZEN_ERROR='freeze failed: Device or resource busy'
FS_ALREADY_THAWED_ERROR='unfreeze failed: Invalid argument'
FS_BUSY_ERROR='mount point is busy'

# Auto thaw is a fail safe mechanism to automatically unfreeze the application
after the
# duration specified in the global variable below. Choose the duration based
on your
# database application's tolerance to freeze.
export AUTO_THAW_DURATION_SECS="60"

# Add all pre-script actions to be performed within the function below
execute_pre_script() {
    echo "INFO: Start execution of pre-script"
    # Check if filesystem is already frozen. No error code indicates that
filesystem
# is not currently frozen and that the pre-script can proceed with
freezing the filesystem.
    check_fs_freeze
    # Execute the DB commands to flush the DB in preparation for snapshot
snap_db
    # Freeze the filesystem. No error code indicates that filesystem was
successfully frozen
    freeze_fs

    echo "INFO: Schedule Auto Thaw to execute in ${AUTO_THAW_DURATION_SECS}
seconds."
    $(nohup bash -c execute_schedule_auto_thaw >/dev/null 2>&1 &)
}

# Add all post-script actions to be performed within the function below
execute_post_script() {
    echo "INFO: Start execution of post-script"
    # Unfreeze the filesystem. No error code indicates that filesystem was
successfully unfrozen
    unfreeze_fs
}
```

```
# Execute Auto Thaw to automatically unfreeze the application after the
duration configured
# in the AUTO_THAW_DURATION_SECS global variable.
execute_schedule_auto_thaw() {
    sleep ${AUTO_THAW_DURATION_SECS}
    execute_post_script
}

# Disable Auto Thaw if it is still enabled
execute_disable_auto_thaw() {
    echo "INFO: Attempting to disable auto thaw if enabled"
    auto_thaw_pgid=$(pgrep -f execute_schedule_auto_thaw | xargs -i ps -hp {}
-o pgid)
    if [ -n "${auto_thaw_pgid}" ]; then
        echo "INFO: execute_schedule_auto_thaw process found with pgid
${auto_thaw_pgid}"
        sudo pkill -g ${auto_thaw_pgid}
        rc=$?
        if [ ${rc} != 0 ]; then
            echo "ERROR: Unable to kill execute_schedule_auto_thaw process.
retval=${rc}"
        else
            echo "INFO: Auto Thaw has been disabled"
        fi
    fi
}

# Iterate over all the mountpoints and check if filesystem is already in
freeze state.
# Return error code 204 if any of the mount points are already frozen.
check_fs_freeze() {
    for target in $(lsblk -nlo MOUNTPOINTS)
    do
        # Freeze of the root and boot filesystems is dangerous and pre-script
does not freeze these filesystems.
        # Hence, we will skip the root and boot mountpoints while checking if
filesystem is in freeze state.
        if [ $target == '/' ]; then continue; fi
        if [[ "$target" == */boot* ]]; then continue; fi

        error_message=$(sudo mount -o remount,noatime $target 2>&1)
        # Remount will be a no-op without a error message if the filesystem is
unfrozen.
```

```

        # However, if filesystem is already frozen, remount will fail with
        busy error message.
        if [ $? -ne 0 ];then
            # If the filesystem is already in frozen, return error code 204
            if [[ "$error_message" == *"$FS_BUSY_ERROR"* ]];then
                echo "ERROR: Filesystem ${target} already frozen. Return Error
Code: 204"
                exit 204
            fi
            # If the check filesystem freeze failed due to any reason other
            than the filesystem already frozen, return 201
            echo "ERROR: Failed to check_fs_freeze on mountpoint $target due
to error - $errormessage"
            exit 201
        fi
    done
}

# Iterate over all the mountpoints and freeze the filesystem.
freeze_fs() {
    for target in $(lsblk -nlo MOUNTPOINTS)
    do
        # Freeze of the root and boot filesystems is dangerous. Hence, skip
        filesystem freeze
        # operations for root and boot mountpoints.
        if [ $target == '/' ]; then continue; fi
        if [[ "$target" == */boot* ]]; then continue; fi
        echo "INFO: Freezing $target"
        error_message=$(sudo fsfreeze -f $target 2>&1)
        if [ $? -ne 0 ];then
            # If the filesystem is already in frozen, return error code 204
            if [[ "$error_message" == *"$FS_ALREADY_FROZEN_ERROR"* ]]; then
                echo "ERROR: Filesystem ${target} already frozen. Return Error
Code: 204"
                exit 204
            fi
            # If the filesystem freeze failed due to any reason other than the
            filesystem already frozen, return 201
            echo "ERROR: Failed to freeze mountpoint $targetdue due to error -
$error_message"
            exit 201
        fi
        echo "INFO: Freezing complete on $target"
    done
}

```

```
}

# Iterate over all the mountpoints and unfreeze the filesystem.
unfreeze_fs() {
    for target in $(lsblk -nlo MOUNTPOINTS)
    do
        # Freeze of the root and boot filesystems is dangerous and pre-script
does not freeze these filesystems.
        # Hence, will skip the root and boot mountpoints during unfreeze as
well.
        if [ $target == '/' ]; then continue; fi
        if [[ "$target" == */boot* ]]; then continue; fi
        echo "INFO: Thawing $target"
        error_message=$(sudo fsfreeze -u $target 2>&1)
        # Check if filesystem is already unfrozen (thawed). Return error code
204 if filesystem is already unfrozen.
        if [ $? -ne 0 ]; then
            if [[ "$error_message" == *"$FS_ALREADY_THAWED_ERROR"* ]]; then
                echo "ERROR: Filesystem ${target} is already in thaw state.
Return Error Code: 205"
                exit 205
            fi
            # If the filesystem unfreeze failed due to any reason other than
the filesystem already unfrozen, return 202
            echo "ERROR: Failed to unfreeze mountpoint $target due to error
- $error_message"
            exit 202
        fi
        echo "INFO: Thaw complete on $target"
    done
}

snap_db() {
    # Run the flush command only when PostgreSQL DB service is up and running
sudo systemctl is-active --quiet postgresql
    if [ $? -eq 0 ]; then
        echo "INFO: Execute Postgres CHECKPOINT"
        # PostgreSQL command to flush the transactions in memory to disk
        sudo -u postgres psql -c 'CHECKPOINT;'
        # If the PostgreSQL Command did not succeed, return error code 201 to
indicate pre-script failure
        if [ $? -ne 0 ]; then
            echo "ERROR: Postgres CHECKPOINT command failed."
            exit 201
        fi
    fi
}
```

```
        fi
        sync
    else
        echo "INFO: PostgreSQL service is inactive. Skipping execution of
CHECKPOINT command."
        fi
    }

    export -f execute_schedule_auto_thaw
    export -f execute_post_script
    export -f unfreeze_fs

    # Debug logging for parameters passed to the SSM document
    echo "INFO: ${OPERATION} starting at $(date) with executionId:
${EXECUTION_ID}"

    # Based on the command parameter value execute the function that supports
    # pre-script/post-script operation
    case ${OPERATION} in
        pre-script)
            execute_pre_script
            ;;
        post-script)
            execute_post_script
            execute_disable_auto_thaw
            ;;
        dry-run)
            echo "INFO: dry-run option invoked - taking no action"
            ;;
        *)
            echo "ERROR: Invalid command parameter passed. Please use either pre-
script, post-script, dry-run."
            exit 1 # return failure
            ;;
    esac

    END=$(date +%s)
    # Debug Log for profiling the script time
    echo "INFO: ${OPERATION} completed at $(date). Total runtime: ((${END} -
${START})) seconds."
```

InterSystems IRIS sample document content

```

###=====###
# MIT License
#
# Copyright (c) 2024 InterSystems
#
# Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy
# of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal
# in the Software without restriction, including without limitation the rights
# to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell
# copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is
# furnished to do so, subject to the following conditions:
#
# The above copyright notice and this permission notice shall be included in all
# copies or substantial portions of the Software.
#
# THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR
# IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY,
# FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE
# AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER
# LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM,
# OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE
# SOFTWARE.
###=====###
schemaVersion: '2.2'
description: SSM Document Template for Amazon Data Lifecycle Manager Pre/Post script
  feature for InterSystems IRIS.
parameters:
  executionId:
    type: String
    default: None
    description: Specifies the unique identifier associated with a pre and/or post
  execution
    allowedPattern: ^(None|[a-fA-F0-9]{8}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{12})$
  command:
    type: String
    # Data Lifecycle Manager will trigger the pre-script and post-script actions.
    You can also use this SSM document with 'dry-run' for manual testing purposes.
    default: 'dry-run'
    description: (Required) Specifies whether pre-script and/or post-script should
  be executed.

```



```
#The following allowedValues will allow Data Lifecycle Manager to successfully
trigger pre and post script actions.
```

```
allowedValues:
```

- pre-script
- post-script
- dry-run

```
mainSteps:
```

- action: aws:runShellScript
 - description: Run InterSystems IRIS Database freeze/thaw commands
 - name: run_pre_post_scripts
 - precondition:
 - StringEquals:
 - platformType
 - Linux
 - inputs:
 - runCommand:
 - |
 - #!/bin/bash

```
###=====###
```

```
### Global variables
```

```
###=====###
```

```
DOCKER_NAME=iris
```

```
LOGDIR=./
```

```
EXIT_CODE=0
```

```
OPERATION={{ command }}
```

```
START=$(date +%s)
```

```
# Check if Docker is installed
```

```
# By default if Docker is present, script assumes that InterSystems IRIS is
running in Docker
```

```
# Leave only the else block DOCKER_EXEC line, if you run InterSystems IRIS
non-containerised (and Docker is present).
```

```
# Script assumes irissys user has OS auth enabled, change the OS user or
supply login/password depending on your configuration.
```

```
if command -v docker &> /dev/null
```

```
then
```

```
    DOCKER_EXEC="docker exec $DOCKER_NAME"
```

```
else
```

```
    DOCKER_EXEC="sudo -i -u irissys"
```

```
fi
```

```

# Add all pre-script actions to be performed within the function below
execute_pre_script() {
    echo "INFO: Start execution of pre-script"

    # find all iris running instances
    iris_instances=$(($DOCKER_EXEC iris qall 2>/dev/null | tail -n +3 | grep
'^up' | cut -c5- | awk '{print $1}'))
    echo "`date`: Running iris instances $iris_instances"

    # Only for running instances
    for INST in $iris_instances; do

        echo "`date`: Attempting to freeze $INST"

        # Detailed instances specific log
        LOGFILE=$LOGDIR/$INST-pre_post.log

        #check Freeze status before starting
        $DOCKER_EXEC irissession $INST -U '%SYS'
        "##Class(Backup.General).IsWDSuspendedExt()"
        freeze_status=$?
        if [ $freeze_status -eq 5 ]; then
            echo "`date`: ERROR: $INST IS already FROZEN"
            EXIT_CODE=204
        else
            echo "`date`: $INST is not frozen"
            # Freeze
            # Docs: https://docs.intersystems.com/irislatest/csp/documatic/
%25CSP.Documatic.cls?LIBRARY=%25SYS&CLASSNAME=Backup.General#ExternalFreeze
            $DOCKER_EXEC irissession $INST -U '%SYS'
            "##Class(Backup.General).ExternalFreeze(\"$LOGFILE\",,,,,,600,,,300)"
            status=$?

            case $status in
                5) echo "`date`: $INST IS FROZEN"
                    ;;
                3) echo "`date`: $INST FREEZE FAILED"
                    EXIT_CODE=201
                    ;;
                *) echo "`date`: ERROR: Unknown status code: $status"
                    EXIT_CODE=201
                    ;;
            esac
        done
    esac

```

```

        echo "`date`: Completed freeze of $INST"
    fi
done
echo "`date`: Pre freeze script finished"
}

# Add all post-script actions to be performed within the function below
execute_post_script() {
    echo "INFO: Start execution of post-script"

    # find all iris running instances
    iris_instances=$(($DOCKER_EXEC iris qall 2>/dev/null | tail -n +3 | grep
'^up' | cut -c5- | awk '{print $1}'))
    echo "`date`: Running iris instances $iris_instances"

    # Only for running instances
    for INST in $iris_instances; do

        echo "`date`: Attempting to thaw $INST"

        # Detailed instances specific log
        LOGFILE=$LOGDIR/$INST-pre_post.log

        #check Freeze status befor starting
        $DOCKER_EXEC irissession $INST -U '%SYS'
        "##Class(Backup.General).IsWDSuspendedExt()"
        freeze_status=$?
        if [ $freeze_status -eq 5 ]; then
            echo "`date`: $INST is in frozen state"
            # Thaw
            # Docs: https://docs.intersystems.com/irislatest/csp/documatic/
            %25CSP.Documatic.cls?LIBRARY=%25SYS&CLASSNAME=Backup.General#ExternalFreeze
            $DOCKER_EXEC irissession $INST -U%SYS
            "##Class(Backup.General).ExternalThaw(\"$LOGFILE\")"
            status=$?

            case $status in
                5) echo "`date`: $INST IS THAWED"
                    $DOCKER_EXEC irissession $INST -U%SYS
                    "##Class(Backup.General).ExternalSetHistory(\"$LOGFILE\")"
                    ;;
                3) echo "`date`: $INST THAW FAILED"
                    EXIT_CODE=202
                    ;;
            esac
        fi
    done
}

```

```
        *) echo "`date`: ERROR: Unknown status code: $status"
           EXIT_CODE=202
           ;;
        esac
        echo "`date`: Completed thaw of $INST"
    else
        echo "`date`: ERROR: $INST IS already THAWED"
        EXIT_CODE=205
    fi
done
echo "`date`: Post thaw script finished"
}

# Debug logging for parameters passed to the SSM document
echo "INFO: ${OPERATION} starting at $(date) with executionId:
${EXECUTION_ID}"

# Based on the command parameter value execute the function that supports
# pre-script/post-script operation
case ${OPERATION} in
pre-script)
    execute_pre_script
    ;;
post-script)
    execute_post_script
    ;;
dry-run)
    echo "INFO: dry-run option invoked - taking no action"
    ;;
*)
    echo "ERROR: Invalid command parameter passed. Please use either pre-
script, post-script, dry-run."
    # return failure
    EXIT_CODE=1
    ;;
esac

END=$(date +%s)
# Debug Log for profiling the script time
echo "INFO: ${OPERATION} completed at $(date). Total runtime: $(( ${END} -
${START} )) seconds."
exit $EXIT_CODE
```

[詳細については、リポジトリを参照してください。GitHub](#)

Empty document template

```
###=====###
# Copyright Amazon.com, Inc. or its affiliates. All Rights Reserved.

# Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of
# this
# software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the
# Software
# without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify,
# merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to
# permit persons to whom the Software is furnished to do so.

# THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR
# IMPLIED,
# INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A
# PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT
# HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION
# OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE
# SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.
###=====###
schemaVersion: '2.2'
description: SSM Document Template for Amazon Data Lifecycle Manager Pre/Post script
feature
parameters:
  executionId:
    type: String
    default: None
    description: (Required) Specifies the unique identifier associated with a pre
and/or post execution
    allowedPattern: ^(None|[a-fA-F0-9]{8}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]
{4}-[a-fA-F0-9]{12})$
    command:
      # Data Lifecycle Manager will trigger the pre-script and post-script actions
during policy execution.
      # 'dry-run' option is intended for validating the document execution without
triggering any commands
      # on the instance. The following allowedValues will allow Data Lifecycle Manager
to successfully
      # trigger pre and post script actions.
      type: String
      default: 'dry-run'
```

```
description: (Required) Specifies whether pre-script and/or post-script should
be executed.
```

```
allowedValues:
```

- pre-script
- post-script
- dry-run

```
mainSteps:
```

- action: aws:runShellScript
 description: Run Database freeze/thaw commands
 name: run_pre_post_scripts
 precondition:
 StringEquals:
 - platformType
 - Linux
 inputs:
 runCommand:
 - |
 #!/bin/bash

```
###=====###
```

```
### Error Codes
```

```
###=====###
```

```
# The following Error codes will inform Data Lifecycle Manager of the type of
error
```

```
# and help guide handling of the error.
```

```
# The Error code will also be emitted via AWS Eventbridge events in the
'cause' field.
```

```
# 1 Pre-script failed during execution - 201
```

```
# 2 Post-script failed during execution - 202
```

```
# 3 Auto thaw occurred before post-script was initiated - 203
```

```
# 4 Pre-script initiated while post-script was expected - 204
```

```
# 5 Post-script initiated while pre-script was expected - 205
```

```
# 6 Application not ready for pre or post-script initiation - 206
```

```
###=====###
```

```
### Global variables
```

```
###=====###
```

```
START=$(date +%s)
```

```
# For testing this script locally, replace the below with OPERATION=$1.
```

```
OPERATION={{ command }}

# Add all pre-script actions to be performed within the function below
execute_pre_script() {
    echo "INFO: Start execution of pre-script"
}

# Add all post-script actions to be performed within the function below
execute_post_script() {
    echo "INFO: Start execution of post-script"
}

# Debug logging for parameters passed to the SSM document
echo "INFO: ${OPERATION} starting at $(date) with executionId:
${EXECUTION_ID}"

# Based on the command parameter value execute the function that supports
# pre-script/post-script operation
case ${OPERATION} in
    pre-script)
        execute_pre_script
        ;;
    post-script)
        execute_post_script
        ;;
    dry-run)
        echo "INFO: dry-run option invoked - taking no action"
        ;;
    *)
        echo "ERROR: Invalid command parameter passed. Please use either pre-
script, post-script, dry-run."
        exit 1 # return failure
        ;;
esac

END=$(date +%s)
# Debug Log for profiling the script time
echo "INFO: ${OPERATION} completed at $(date). Total runtime: $(( ${END} -
${START} )) seconds."
```

SSM ドキュメントコンテンツを取得したら、以下のいずれかの手順でカスタム SSM ドキュメントを作成します。

Console

SSM コマンドドキュメント を作成するには

1. <https://console.aws.amazon.com//systems-manager/> **AWS Systems Manager** でコンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで [ドキュメント] を選択し、[ドキュメントの作成]、[コマンドまたはセッション] の順に選択します。
3. [名前] に、ドキュメントのわかりやすい名前を入力します。
4. [ターゲットタイプ] で [/] を選択しますAWS::EC2::Instance。
5. [ドキュメントタイプ] に、[コマンド] を選択します。
6. [コンテンツ] フィールドで [YAML] を選択し、ドキュメントコンテンツを貼り付けます。
7. [ドキュメントタグ] セクションで、タグキーが DLMScriptsAccess でタグ値が true のタグを追加します。

Important

DLMScriptsAccess:trueこのタグは、「ステップ 3: Amazon Data Lifecycle Manager IAM ロールを準備する」AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess AWS で使用した管理ポリシーに必要です。このポリシーでは aws:ResourceTag 条件キーが使用されており、このタグを持つ SSM ドキュメントへのアクセスを制限します。

8. [ドキュメントの作成] を選択します。

AWS CLI

SSM コマンドドキュメント を作成するには

[create-document](#) コマンドを使用します。--name には、ドキュメントのわかりやすい名前を指定します。--document-type の場合、Command を指定します。--content には、SSM ドキュメントコンテンツを含む .yaml ファイルへのパスを指定します。--tags の場合、"Key=DLMScriptsAccess,Value=true" を指定します。

```
$ aws ssm create-document \  
--content file://path/to/file/documentContent.yaml \  
--name "document_name" \  

```



```
--document-type "Command" \  
--document-format YAML \  
--tags "Key=DLMScriptsAccess,Value=true"
```

ステップ 3: Amazon Data Lifecycle Manager の IAM ロールを準備する

Note

このステップは次の場合に必要です。

- カスタム IAM ロールを使用する、事前/事後スクリプト対応のスナップショットポリシーを作成または更新します。
- コマンドラインを使用して、デフォルトを使用する、事前/事後スクリプト対応のスナップショットポリシーを作成または更新します。

コンソールを使用して、スナップショット管理用のデフォルトロール () を使用するプレ/ポストスクリプト対応のスナップショットポリシーを作成または更新する場合は、このステップをスキップしてください。AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleこの場合、ポリシーはそのロールに自動的にアタッチされます。AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess

ポリシーに使用する IAM ロールが、ポリシーのターゲットとなるインスタンスで事前スクリプトと事後スクリプトを実行するために必要な SSM アクションを実行する権限を Amazon Data Lifecycle Manager に付与していることを確認する必要があります。

Amazon Data Lifecycle Manager には、必要なアクセス権限を含む管理ポリシー (AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess) が用意されています。スナップショットを管理するための IAM ロールにこのポリシーをアタッチすると、確実にアクセス許可を含めることができます。

Important

AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess 管理ポリシーは、プレスクリプトとポストスクリプトを使用する際に、aws:ResourceTag条件キーを使用して特定の SSM ドキュメントへのアクセスを制限します。Amazon Data Lifecycle Manager が SSM ドキュメントにアクセスできるようにするには、SSM ドキュメントに DLMScriptsAccess:true のタグが付けられていることを確認する必要があります。

あるいは、カスタムポリシーを手動で作成するか、使用する IAM ロールに必要なアクセス許可を直接割り当てることもできます。AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess 管理ポリシーで定義されているものと同じ権限を使用できますが、aws:ResourceTag条件キーはオプションです。その条件キーを含めない場合は、SSM ドキュメントに DLMScriptsAccess:true のタグを付ける必要はありません。

以下のいずれかの方法を使用して IAM AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccessロールにポリシーを追加します。

Console

マネージドポリシーをカスタムロールにアタッチするには

1. <https://console.aws.amazon.com/iam/> で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションパネルで [Roles (ロール)] を選択します。
3. スナップショットを管理するためのカスタムロールを検索し、選択します。
4. [アクセス許可] タブで、[アクセス許可の追加]、[ポリシーをアタッチ] の順に選択します。
5. AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess管理ポリシーを検索して選択し、[Add permissions] を選択します。

AWS CLI

マネージドポリシーをカスタムロールにアタッチするには

[attach-role-policy](#) コマンドを実行します。---role-name には、カスタムロールの名前を指定します。--policy-arn の場合、arn:aws:iam::aws:policy/AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess を指定します。

```
$ aws iam attach-role-policy \  
--policy-arn arn:aws:iam::aws:policy/AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess \  
--role-name your_role_name
```

ステップ 4: スナップショットライフサイクルポリシーを作成する

アプリケーション整合性のあるスナップショットを自動化するには、インスタンスをターゲットとするスナップショットライフサイクルポリシーを作成し、そのポリシーの事前スクリプトと事後スクリプトを設定する必要があります。

Console

スナップショットライフサイクルポリシーを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー]、[ライフサイクルポリシーの作成] の順に選択します。
3. リポジトリの [ポリシータイプの選択] 画面で、[EBS スナップショットポリシー] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. [Target resources] (ターゲットリソース) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [ターゲットリソースタイプ] で、[Instance] を選択します。
 - b. [ターゲットリソースタグ] で、バックアップするインスタンスを識別するリソースタグを指定します。指定したタグを持つリソースのみがバックアップされます。
5. IAM ロールには、AWSDataLifecycleManagerDefaultRole(スナップショット管理用のデフォルトロール) を選択するか、プレスクリプトとポストスクリプト用に作成して準備したカスタムロールを選択します。
6. 必要に応じて、スケジュールと追加のオプションを設定します。メンテナンスウィンドウ中など、ワークロードに合った期間にスナップショット作成時刻をスケジュールすることをお勧めします。

SAP HANA では、高速スナップショット復元を有効にすることをお勧めします。


Note

VSS バックアップのスケジュールを有効にすると、[特定のデータボリュームを除外] または [ソースからタグをコピー] を有効にすることはできません。

7. [事前スクリプトと事後スクリプト] セクションで [事前スクリプトと事後スクリプトを有効にする] を選択し、ワークロードに応じて次の操作を行います。
 - Windows アプリケーションのアプリケーション整合性のあるスナップショットを作成するには、[VSS バックアップ] を選択します。
 - SAP HANA ワークロードのアプリケーション整合性のあるスナップショットを作成するには、[SAP HANA] を選択します。
 - カスタム SSM ドキュメントを使用して、自己管理型の MySQL、PostgreSQL、または InterSystems IRIS データベースを含む、他のすべてのデータベースとワークロードのアプリ

リケーションと整合性のあるスナップショットを作成するには、「カスタム SSM ドキュメント」を選択します。

1. [自動化オプション] に、[事前スクリプトと事後スクリプト] を選択します。
 2. [SSM ドキュメント] に、準備した SSM ドキュメントを選択します。
8. 選択したオプションに応じて、以下の追加オプションを設定します。
- [スクリプトタイムアウト] — (カスタム SSM ドキュメントのみ) Amazon Data Lifecycle Manager がスクリプトの実行試行を完了していない場合に、その試行が失敗するまでのタイムアウト期間。スクリプトがタイムアウト期間内に完了しない場合、Amazon Data Lifecycle Manager はその試行に失敗します。タイムアウト期間は、事前スクリプトと事後スクリプトに個別に適用されます。デフォルトのタイムアウト期間は 10 秒です。また、最大タイムアウト期間は 120 秒です。
 - [失敗したスクリプトの再試行] — タイムアウト期間内に完了しなかったスクリプトを再試行する場合は、このオプションを選択します。事前スクリプトが失敗した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、事前スクリプトと事後スクリプトの実行を含め、スナップショット作成プロセス全体を再試行します。事後スクリプトが失敗した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、事後スクリプトのみを再試行します。この場合、事前スクリプトは完了し、スナップショットが作成された可能性があります。
 - Crash-consistent スナップショットをデフォルトで作成 – このオプションを選択すると、事前スクリプトの実行に失敗した場合に、Crash-consistent スナップショットがデフォルトで作成されます。これは、事前スクリプトと事後スクリプトが有効になっていない場合の、Amazon Data Lifecycle Manager のデフォルトのスナップショット作成動作です。再試行を有効にした場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、再試行回数をすべて使い切った後にのみ、Crash-consistent スナップショットをデフォルトで作成します。事前スクリプトが失敗し、Crash-consistent スナップショットがデフォルトで作成されなかった場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、そのスケジュールの実行中にインスタンスのスナップショットを作成しません。

 Note

SAP HANA のスナップショットを作成する場合は、このオプションを無効にすることをお勧めします。SAP HANA ワークロードの Crash-consistent スナップショットは、同じ方法では復元できません。

9. [デフォルトポリシーの作成] を選択します。

Note

Role with name `AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` already exists エラーが発生した場合、詳細については「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

AWS CLI

スナップショットライフサイクルポリシーを作成するには

`create-lifecycle-policy` Scripts コマンドを使用し `CreateRule`、パラメーターをに含めてください。パラメータの詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager API リファレンス](#)」を参照してください。

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--description "policy_description" \  
--state ENABLED \  
--execution-role-arn iam_role_arn \  
--policy-details file://policyDetails.json
```

ユースケースに応じて、ここで `policyDetails.json` には以下のいずれかが含まれます。

• VSS バックアップ

```
{  
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",  
  "ResourceTypes": [  
    "INSTANCE"  
  ],  
  "TargetTags": [{  
    "Key": "tag_key",  
    "Value": "tag_value"  
  }],  
  "Schedules": [{  
    "Name": "schedule_name",  
    "CreateRule": {  
      "CronExpression": "cron_for_creation_frequency",  
      "Scripts": [{  
        "ExecutionHandler": "AWS_VSS_BACKUP",  
        "ExecuteOperationOnScriptFailure": true/false,      }],  
    }  
  }],  
}
```

```

        "MaximumRetryCount": retries (0-3)
      ]]
    },
    "RetainRule": {
      "Count": retention_count
    }
  ]]
}

```

- SAP HANA バックアップ

```

{
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",
  "ResourceTypes": [
    "INSTANCE"
  ],
  "TargetTags": [{
    "Key": "tag_key",
    "Value": "tag_value"
  }],
  "Schedules": [{
    "Name": "schedule_name",
    "CreateRule": {
      "CronExpression": "cron_for_creation_frequency",
      "Scripts": [{
        "Stages": ["PRE", "POST"],
        "ExecutionHandlerService": "AWS_SYSTEMS_MANAGER",
        "ExecutionHandler": "AWSSystemsManagerSAP-CreateDLMSnapshotForSAPHANA",
        "ExecuteOperationOnScriptFailure": true/false,
        "ExecutionTimeout": timeout_in_seconds (10-120),
        "MaximumRetryCount": retries (0-3)
      }
    ]
  }],
  "RetainRule": {
    "Count": retention_count
  }
}

```

- カスタム SSM ドキュメント

```
{
```

```

"PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",
"ResourceTypes": [
  "INSTANCE"
],
"TargetTags": [{
  "Key": "tag_key",
  "Value": "tag_value"
}],
"Schedules": [{
  "Name": "schedule_name",
  "CreateRule": {
    "CronExpression": "cron_for_creation_frequency",
    "Scripts": [{
      "Stages": ["PRE","POST"],
      "ExecutionHandlerService":"AWS_SYSTEMS_MANAGER",
      "ExecutionHandler":"ssm_document_name|arn",
      "ExecuteOperationOnScriptFailure":true/false,
      "ExecutionTimeout":timeout_in_seconds (10-120),
      "MaximumRetryCount":retries (0-3)
    }]
  },
  "RetainRule": {
    "Count": retention_count
  }
}]
}

```

Amazon Data Lifecycle Manager での VSS バックアップに関する考慮事項

Amazon Data Lifecycle Manager では、Amazon EC2 インスタンスで実行されている VSS (Volume Shadow Copy Service) 対応の Windows アプリケーションをバックアップおよび復元できます。アプリケーションに Windows VSS に登録された VSS ライターがある場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、そのアプリケーションに対してアプリケーションと整合性のあるスナップショットを作成します。

Note

Amazon Data Lifecycle Manager は現在、Amazon EC2 で実行されているリソースのアプリケーション整合性のあるスナップショットのみをサポートしています。特に、既存のインスタンスをバックアップから作成された新しいインスタンスに置き換えることでアプリケーションデータを復元できるバックアップシナリオを対象としています。VSS バックアップで

は、すべてのインスタンスタイプまたはアプリケーションがサポートされているわけではありません。詳細については、「[AWS VSS とは?](#)」を参照してください。Windows インスタンス用 Amazon EC2 ユーザーガイドに記載されています。

サポートされていない インスタンスタイプ

以下の Amazon EC2 インスタンスタイプは、VSS バックアップではサポートされていません。ポリシーがこれらのインスタンスタイプのいずれかをターゲットにしている場合、Amazon Data Lifecycle Manager は引き続き VSS バックアップを作成できますが、スナップショットには必要なシステムタグがタグ付けされていない可能性があります。これらのタグがないと、スナップショットは作成後に Amazon Data Lifecycle Manager によって管理されません。これらのスナップショットは手動で削除する必要がある場合があります。

- T3: t3.nano | t3.micro
- T3a: t3a.nano | t3a.micro
- T2: t2.nano | t2.micro

アプリケーション整合性のあるスナップショットの責任共有

次の点を確認する必要があります。

- SSM Agent がターゲットインスタンスにインストールされ up-to-date、実行されている
- Systems Manager には、ターゲットインスタンスで必要なアクションを実行する権限があります。
- Amazon Data Lifecycle Manager には、ターゲットインスタンスでの事前スクリプトと事後スクリプトの実行に必要な Systems Manager アクションを実行する権限があります。
- 自己管理型 MySQL、PostgreSQL、InterSystems IRIS データベースなどのカスタムワークロードの場合、使用する SSM ドキュメントには、データベース設定の I/O をフリーズ、フラッシュ、およびフリーズ解除するための適切に必要なアクションが含まれています。
- スナップショット作成時刻はワークロードのスケジュールに合わせて調整されます。例えば、スケジュールされたメンテナンスウィンドウ中にスナップショットの作成をスケジュールしようとしません。

Amazon Data Lifecycle Manager では以下の動作が保証されます。

- スナップショットの作成は、スケジュールされたスナップショット作成時刻から 60 分以内に開始されます。
- 事前スクリプトは、スナップショットの作成が開始される前に実行されます。
- 事後スクリプトは、事前スクリプトが成功し、スナップショットの作成が開始された後に実行されます。Amazon Data Lifecycle Manager は、事前スクリプトが成功した場合にのみ事後スクリプトを実行します。事前スクリプトが失敗した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は事後スクリプトを実行しません。
- スナップショットは作成時に適切なタグでタグ付けされます。
- CloudWatch メトリクスとイベントは、スクリプトが開始されたとき、およびスクリプトが失敗または成功したときに出力されます。

事前スクリプトと事後スクリプトのその他のユースケース

事前スクリプトと事後スクリプトを使用してアプリケーション整合性のあるスナップショットを自動化するだけでなく、事前スクリプトと事後スクリプトを一緒に、または個別に使用して、スナップショット作成前または作成後の他の管理タスクを自動化できます。例:

- スナップショットを作成する前に、事前スクリプトを使用してパッチを適用します。これにより、毎週または毎月の定期的なソフトウェアアップデートを適用した後にスナップショットを作成できます。

Note

事前スクリプトのみを実行することを選択した場合は、[Crash-consistent スナップショットをデフォルトで作成] がデフォルトで有効になります。

- スナップショットを作成した後に、事後スクリプトを使用してパッチを適用します。これにより、毎週または毎月の定期的なソフトウェアアップデートを適用する前にスナップショットを作成できます。

他のユースケースで使用を開始する

このセクションでは、アプリケーション整合性のあるスナップショット以外のユースケースで事前スクリプトまたは事後スクリプトを使用する場合に実行する必要がある手順について説明します。

ステップ 1: ターゲットインスタンスを準備する

ターゲットインスタンスを事前スクリプトまたは事後スクリプト用に準備するには

1. SSM Agent がまだインストールされていない場合は、ターゲットインスタンスにインストールします。SSM Agent がターゲットインスタンスに既にインストールされている場合は、このステップをスキップしてください。
 - (Linux インスタンス) [Linux 用 Amazon EC2 インスタンスに SSM Agent を手動でインストールする](#)
 - (Windows インスタンス) [Windows 用 Amazon EC2 インスタンスに SSM Agent を手動でインストールする](#)
2. SSM Agent が実行中であることを確認します。詳細については、「[SSM Agent ステータスの確認とエージェントの起動](#)」を参照してください。
3. Systems Manager の Amazon EC2 インスタンスをセットアップします。詳細については、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「[Amazon EC2 インスタンス用 System Manager のセットアップ](#)」を参照してください。

ステップ 2: SSM ドキュメントを準備する

実行するコマンドを使った事前スクリプトまたは事後スクリプトを含む SSM コマンドドキュメントを作成する必要があります。

以下の空の SSM ドキュメントテンプレートを使用して SSM ドキュメントを作成し、事前スクリプトコマンドと事後スクリプトコマンドを該当するドキュメントセクションに追加できます。

⚠ 次の点に注意してください。

- SSM ドキュメントがユーザーのワークロードに対して適切かつ必要なアクションを実行していることを確認するのは、ユーザーの責任になります。
- SSM ドキュメントには、pre-script、post-script、dry-run などの allowedValues の必須フィールドが含まれている必要があります。Amazon Data Lifecycle Manager は、これらのセクションのコンテンツに基づいてインスタンス上でコマンドを実行します。SSM ドキュメントにこれらのセクションがない場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、そのドキュメントを実行に失敗したものとして扱います。

```
###=====###
# Copyright Amazon.com, Inc. or its affiliates. All Rights Reserved.

# Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this
# software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software
# without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify,
# merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to
# permit persons to whom the Software is furnished to do so.

# THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED,
# INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A
# PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT
# HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION
# OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE
# SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.
###=====###
schemaVersion: '2.2'
description: SSM Document Template for Amazon Data Lifecycle Manager Pre/Post script
  feature
parameters:
  executionId:
    type: String
    default: None
    description: (Required) Specifies the unique identifier associated with a pre and/
or post execution
    allowedPattern: ^(None|[a-fA-F0-9]{8}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{4}-[a-fA-F0-9]{4}-
[a-fA-F0-9]{12})$
    command:
      # Data Lifecycle Manager will trigger the pre-script and post-script actions during
policy execution.
      # 'dry-run' option is intended for validating the document execution without
triggering any commands
      # on the instance. The following allowedValues will allow Data Lifecycle Manager to
successfully
      # trigger pre and post script actions.
      type: String
      default: 'dry-run'
      description: (Required) Specifies whether pre-script and/or post-script should be
executed.
      allowedValues:
        - pre-script
        - post-script
        - dry-run
```

```

mainSteps:
- action: aws:runShellScript
  description: Run Database freeze/thaw commands
  name: run_pre_post_scripts
  precondition:
    StringEquals:
      - platformType
      - Linux
  inputs:
    runCommand:
      - |
        #!/bin/bash

###=====###
### Error Codes

###=====###
# The following Error codes will inform Data Lifecycle Manager of the type of
error
# and help guide handling of the error.
# The Error code will also be emitted via AWS Eventbridge events in the 'cause'
field.
# 1 Pre-script failed during execution - 201
# 2 Post-script failed during execution - 202
# 3 Auto thaw occurred before post-script was initiated - 203
# 4 Pre-script initiated while post-script was expected - 204
# 5 Post-script initiated while pre-script was expected - 205
# 6 Application not ready for pre or post-script initiation - 206

###=====###
### Global variables

###=====###
START=$(date +%s)
# For testing this script locally, replace the below with OPERATION=$1.
OPERATION={{ command }}

# Add all pre-script actions to be performed within the function below
execute_pre_script() {
    echo "INFO: Start execution of pre-script"
}

```

```
# Add all post-script actions to be performed within the function below
execute_post_script() {
    echo "INFO: Start execution of post-script"
}

# Debug logging for parameters passed to the SSM document
echo "INFO: ${OPERATION} starting at $(date) with executionId: ${EXECUTION_ID}"

# Based on the command parameter value execute the function that supports
# pre-script/post-script operation
case ${OPERATION} in
    pre-script)
        execute_pre_script
        ;;
    post-script)
        execute_post_script
        ;;
    dry-run)
        echo "INFO: dry-run option invoked - taking no action"
        ;;
    *)
        echo "ERROR: Invalid command parameter passed. Please use either pre-
script, post-script, dry-run."
        exit 1 # return failure
        ;;
esac

END=$(date +%s)
# Debug Log for profiling the script time
echo "INFO: ${OPERATION} completed at $(date). Total runtime: $(( ${END} -
${START} )) seconds."
```

ステップ 3: Amazon Data Lifecycle Manager の IAM ロールを準備する

Note

このステップは次の場合に必要です。

- カスタム IAM ロールを使用する、事前/事後スクリプト対応のスナップショットポリシーを作成または更新します。

- コマンドラインを使用して、デフォルトを使用する、事前/事後スクリプト対応のスナップショットポリシーを作成または更新します。

コンソールを使用して、スナップショット管理用のデフォルトロール () を使用するプレ/ポストスクリプト対応のスナップショットポリシーを作成または更新する場合は、このステップをスキップしてください。AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleこの場合、ポリシーはそのロールに自動的にアタッチされます。AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess

ポリシーに使用するその IAM ロールが、ポリシーのターゲットとなるインスタンスで事前スクリプトと事後スクリプトを実行するために必要な SSM アクションを実行する権限を Amazon Data Lifecycle Manager に付与していることを確認する必要があります。

Amazon Data Lifecycle Manager には、必要なアクセス権限を含む管理ポリシー (AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess) が用意されています。スナップショットを管理するための IAM ロールにこのポリシーをアタッチすると、確実にアクセス許可を含めることができます。

Important

AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess 管理ポリシーは、プレスクリプトとポストスクリプトを使用する際に、aws:ResourceTag条件キーを使用して特定の SSM ドキュメントへのアクセスを制限します。Amazon Data Lifecycle Manager が SSM ドキュメントにアクセスできるようにするには、SSM ドキュメントに DLMScriptsAccess:true のタグが付けられていることを確認する必要があります。

あるいは、カスタムポリシーを手動で作成するか、使用する IAM ロールに必要なアクセス許可を直接割り当てることもできます。AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess 管理ポリシーで定義されているものと同じ権限を使用できますが、aws:ResourceTag条件キーはオプションです。この条件キーを使用しない場合は、SSM ドキュメントに DLMScriptsAccess:true のタグを付ける必要はありません。

以下のいずれかの方法を使用して IAM AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccessロールにポリシーを追加します。

Console

マネージドポリシーをカスタムロールにアタッチするには

1. <https://console.aws.amazon.com/iam/> で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションパネルで [Roles (ロール)] を選択します。
3. スナップショットを管理するためのカスタムロールを検索し、選択します。
4. [アクセス許可] タブで、[アクセス許可の追加]、[ポリシーをアタッチ] の順に選択します。
5. AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess 管理ポリシーを検索して選択し、[Add permissions] を選択します。

AWS CLI

マネージドポリシーをカスタムロールにアタッチするには

[attach-role-policy](#) コマンドを実行します。---role-name には、カスタムロールの名前を指定します。--policy-arn の場合、arn:aws:iam::aws:policy/AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess を指定します。

```
$ aws iam attach-role-policy \  
--policy-arn arn:aws:iam::aws:policy/AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess \  
--role-name your_role_name
```

スナップショットライフサイクルポリシーを作成する

Console

スナップショットライフサイクルポリシーを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー]、[ライフサイクルポリシーの作成] の順に選択します。
3. リポジトリの [ポリシータイプの選択] 画面で、[EBS スナップショットポリシー] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. [Target resources] (ターゲットリソース) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [ターゲットリソースタイプ] で、[Instance] を選択します。

- b. [ターゲットリソースタグ] で、バックアップするインスタンスを識別するリソースタグを指定します。指定したタグを持つリソースのみがバックアップされます。
5. IAM ロールには、AWSDataLifecycleManagerDefaultRole(スナップショット管理用のデフォルトロール) を選択するか、プレスクリプトとポストスクリプト用に作成して準備したカスタムロールを選択します。
 6. 必要に応じて、スケジュールと追加のオプションを設定します。メンテナンスウィンドウ中など、ワークロードに合った期間にスナップショット作成時刻をスケジュールすることをお勧めします。
 7. [事前スクリプトと事後スクリプト] セクションで、[事前スクリプトと事後スクリプトを有効にする] を選択し、次の操作を行います。
 - a. [カスタム SSM ドキュメント] を選択します。
 - b. [自動化] オプションで、実行するスクリプトに一致するオプションを選択します。
 - c. [SSM ドキュメント] に、準備した SSM ドキュメントを選択します。
 8. 必要に応じて、次の追加オプションを設定します。
 - [スクリプトタイムアウト] — Amazon Data Lifecycle Manager がスクリプトの実行試行を完了していない場合に、その試行が失敗するまでのタイムアウト期間。スクリプトがタイムアウト期間内に完了しない場合、Amazon Data Lifecycle Manager はその試行に失敗します。タイムアウト期間は、事前スクリプトと事後スクリプトに個別に適用されます。デフォルトのタイムアウト期間は 10 秒です。また、最大タイムアウト期間は 120 秒です。
 - [失敗したスクリプトの再試行] — タイムアウト期間内に完了しなかったスクリプトを再試行する場合は、このオプションを選択します。事前スクリプトが失敗した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、事前スクリプトと事後スクリプトの実行を含め、スナップショット作成プロセス全体を再試行します。事後スクリプトが失敗した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、事後スクリプトのみを再試行します。この場合、事前スクリプトは完了し、スナップショットが作成された可能性があります。
 - Crash-consistent スナップショットをデフォルトで作成 – このオプションを選択すると、事前スクリプトの実行に失敗した場合に、Crash-consistent スナップショットがデフォルトで作成されます。これは、事前スクリプトと事後スクリプトが有効になっていない場合の、Amazon Data Lifecycle Manager のデフォルトのスナップショット作成動作です。再試行を有効にした場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、再試行回数をすべて使い切った後ののみ、Crash-consistent スナップショットをデフォルトで作成します。事前スクリプトが失敗し、Crash-consistent スナップショットがデフォルトで作成されなかった

場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、そのスケジュールの実行中にインスタンスのスナップショットを作成しません。

9. [デフォルトポリシーの作成] を選択します。

Note

Role with name `AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` already exists エラーが発生した場合、詳細については「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

AWS CLI

スナップショットライフサイクルポリシーを作成するには

`create-lifecycle-policy` コマンドを使用し、`Scripts` パラメータを含めてください。CreateRule パラメータの詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager API リファレンス](#)」を参照してください。

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
--description "policy_description" \  
--state ENABLED \  
--execution-role-arn iam_role_arn \  
--policy-details file://policyDetails.json
```

ここで `policyDetails.json` には以下が含まれます。

```
{  
  "PolicyType": "EBS_SNAPSHOT_MANAGEMENT",  
  "ResourceTypes": [  
    "INSTANCE"  
  ],  
  "TargetTags": [{  
    "Key": "tag_key",  
    "Value": "tag_value"  
  }],  
  "Schedules": [{  
    "Name": "schedule_name",  
    "CreateRule": {  
      "CronExpression": "cron_for_creation_frequency",  
      "Scripts": [{
```

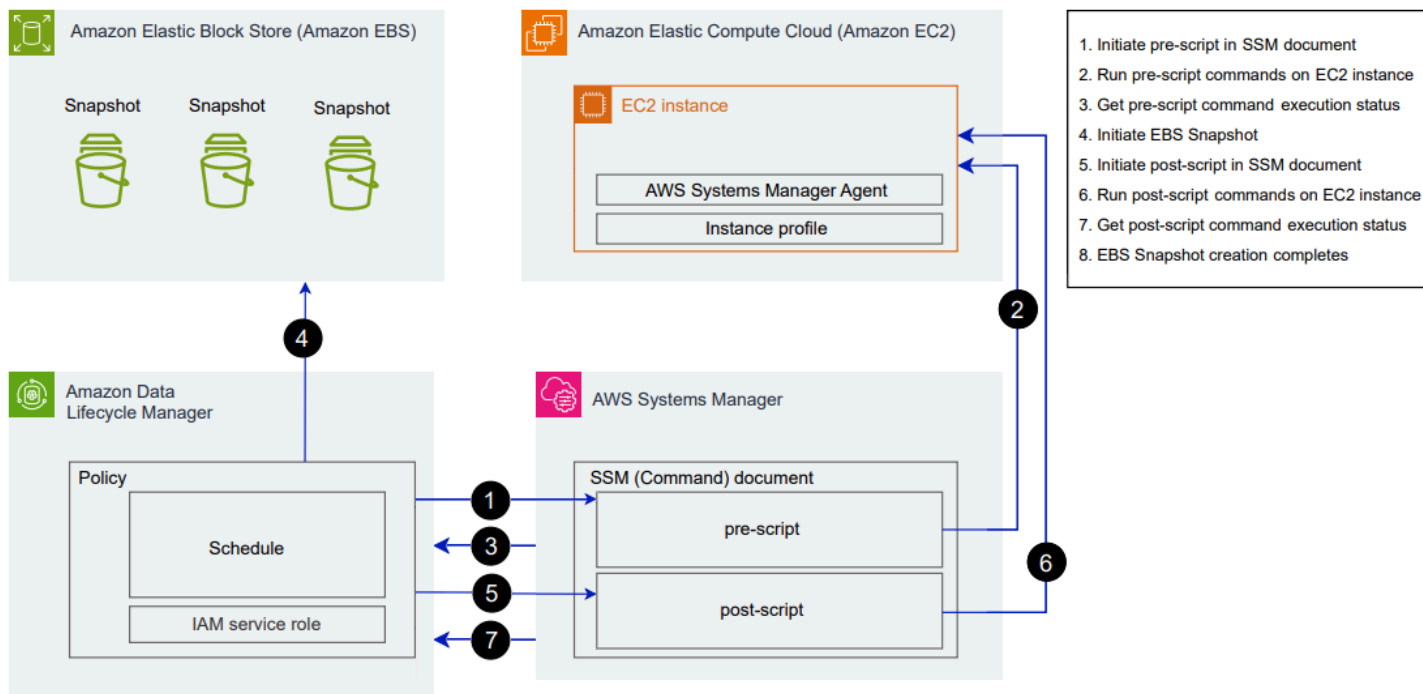
```

    "Stages": [ "PRE" | "POST" | "PRE", "POST" ],
    "ExecutionHandlerService": "AWS_SYSTEMS_MANAGER",
    "ExecutionHandler": "ssm_document_name|arn",
    "ExecuteOperationOnScriptFailure": true/false,
    "ExecutionTimeout": timeout_in_seconds (10-120),
    "MaximumRetryCount": retries (0-3)
  ]]
},
"RetainRule": {
  "Count": retention_count
}
}]
}

```

事前スクリプトと事後スクリプトの仕組み

次の図は、カスタム SSM ドキュメントを使用する場合の事前スクリプトと事後スクリプトのプロセスフローを示しています。これは、VSS バックアップには適用されません。



スケジュールされたスナップショット作成時刻に、以下のアクションおよびクロスサービスインタラクションが発生します。

1. Amazon Data Lifecycle Manager は、SSM ドキュメントを呼び出して pre-script パラメータを渡すことにより、事前スクリプトアクションを開始します。

Note

ステップ 1~3 は、事前スクリプトを実行する場合にのみ発生します。事後スクリプトのみを実行する場合、ステップ 1~3 はスキップされます。

- Systems Manager は、ターゲットインスタンスで実行されている SSM Agent に事前スクリプトコマンドを送信します。SSM Agent はインスタンス上でコマンドを実行し、ステータス情報を Systems Manager に送り返します。


例えば、SSM ドキュメントを使用してアプリケーション整合性のあるスナップショットを作成する場合、スナップショットの取得前にバッファリングされたすべてのデータがボリュームに書き込まれるように、事前スクリプトは I/O をフリーズおよびフラッシュする場合があります。

- Systems Manager は、事前スクリプトコマンドのステータス更新を Amazon Data Lifecycle Manager に送信します。事前スクリプトが失敗した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、事前スクリプトオプションと事後スクリプトオプションの設定方法に応じて、以下のいずれかのアクションを実行します。

再試行	Crash-consistent スナップショットをデフォルトで作成	アクション
残り再試行回数ありで有効	有効	成功するか、再試行が終了するまでスクリプトを再試行してください。
正常に完了することなく終了	有効	Crash-consistent スナップショットが作成されるため、事後スクリプトは実行しません。
残り再試行回数ありで有効	無効	成功するか、再試行が終了するまでスクリプトを再試行してください。
正常に完了することなく終了	無効	ターゲットインスタンスのスナップショット作成がスキップされるため、事後スクリプトは実行しません。

再試行	Crash-consistent スナップショットをデフォルトで作成	アクション
無効	有効	Crash-consistent スナップショットが作成されるため、事後スクリプトは実行しません。
無効	無効	ターゲットインスタンスのスナップショット作成がスキップされるため、事後スクリプトは実行しません

- Amazon Data Lifecycle Manager がスナップショットの作成を開始します。
- Amazon Data Lifecycle Manager は、SSM ドキュメントを呼び出して post-script パラメータを渡すことにより、事後スクリプトアクションを開始します。

 Note

ステップ 5~7 は、事前スクリプトを実行する場合にのみ発生します。事後スクリプトのみを実行する場合、ステップ 1~3 はスキップされます。

- Systems Manager は、ターゲットインスタンスで実行されている SSM Agent に事後スクリプトコマンドを送信します。SSM Agent はインスタンス上でコマンドを実行し、ステータス情報を Systems Manager に送り返します。

例えば、SSM ドキュメントでアプリケーション整合性のあるスナップショットが有効になっている場合、スナップショットの取得後にデータベースが通常の I/O 操作を再開できるように、この事後スクリプトは I/O を凍結する場合があります。

- 事後スクリプトを実行し、Systems Manager で正常に完了したことが表示されれば、処理は完了します。

事後スクリプトが失敗した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、事前スクリプトオプションと事後スクリプトオプションの設定方法に応じて、以下のいずれかのアクションを実行します。

再試行	アクション
残り再試行回数ありで有効	成功するか、再試行回数を使い切るまで事後スクリプトを再試行します
成功することなく終了	ポストスクリプトをスキップする
無効	ポストスクリプトをスキップする

事後スクリプトが失敗しても、事前スクリプト (有効な場合) は正常に完了し、スナップショットが作成された可能性があることに注意してください。インスタンスが期待どおりに動作していることを確認するために、インスタンスに対してさらにアクションを実行する必要がある場合があります。例えば、事前スクリプトが I/O を一時停止してフラッシュしたが、事後スクリプトが I/O の解凍に失敗した場合は、I/O を自動解凍するようにデータベースを設定するか、I/O を手動で解凍する必要があります。

- スナップショットの作成プロセスは、事後スクリプトの完了後に完了することがあります。スナップショットの完了にかかる時間は、スナップショットのサイズによって異なります。

事前スクリプトと事後スクリプトで作成されたスナップショットの識別

Amazon Data Lifecycle Manager は、事前スクリプトと事後スクリプトで作成されたスナップショットに、以下のシステムタグを自動的に割り当てます。

- キー: `aws:dlm:pre-script`、値: `SUCCESS|FAILED`

タグ値 `SUCCESS` は、事前スクリプトが正常に実行されたことを示します。タグ値 `FAILED` は、事前スクリプトが正常に実行されなかったことを示します。

- キー: `aws:dlm:post-script`、値: `SUCCESS|FAILED`

タグ値 `SUCCESS` は、事後スクリプトが正常に実行されたことを示します。タグ値 `FAILED` は、事後スクリプトが正常に実行されなかったことを示します。

カスタム SSM ドキュメントと SAP HANA バックアップでは、スナップショットに `aws:dlm:pre-script:SUCCESS` と `aws:dlm:post-script:SUCCESS` の両方のタグが付けられている場合、アプリケーション整合性のあるスナップショットが正常に作成されたと推測できます。

さらに、VSS バックアップを使用して作成されたアプリケーション整合性のあるスナップショットには、自動的に次のタグが付けられます。

- キー: `AppConsistent tag`、値: `true|false`

タグ値 `true` は、VSS バックアップが成功し、スナップショットとアプリケーションの整合性が保たれていることを示します。タグ値 `false` は、VSS バックアップが成功せず、スナップショットとアプリケーションの整合性が保たれていないことを示します。

事前スクリプトと事後スクリプトの実行をモニタリング

Amazon CloudWatch メトリクス

Amazon Data Lifecycle Manager は、プレスクリプトとポストスクリプトが失敗して成功したときと、VSS バックアップが失敗して成功したときに、CloudWatch 次のメトリクスを公開します。

- `PreScriptStarted`
- `PreScriptCompleted`
- `PreScriptFailed`
- `PostScriptStarted`
- `PostScriptCompleted`
- `PostScriptFailed`
- `VSSBackupStarted`
- `VSSBackupCompleted`
- `VSSBackupFailed`

詳細については、「[Amazon を使用してポリシーを監視する CloudWatch](#)」を参照してください。

Amazon EventBridge

Amazon Data Lifecycle Manager は、プレスクリプトまたはポストスクリプトが開始されたとき、成功したとき、または失敗したときに、次の Amazon EventBridge イベントを発行します。

- `DLM Pre Post Script Notification`

詳細については、「[CloudWatch イベントを使用してポリシーを監視できます。](#)」を参照してください。

AMI ライフサイクルの自動化

以下の手順では、Amazon Data Lifecycle Manager を使用して EBS-backed AMI のライフサイクルを自動化する方法を示します。

トピック

- [AMI ライフサイクルポリシーを作成する](#)
- [AMI ライフサイクルポリシーに関する考慮事項](#)
- [追加リソース](#)

AMI ライフサイクルポリシーを作成する

AMI ライフサイクルポリシーを作成するには、次のいずれかの手順に従います。

Console

AMI ポリシーを作成するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー]、[ライフサイクルポリシーの作成] の順に選択します。
3. [ポリシータイプの選択] 画面で、[EBS-backed AMI ポリシー] を選択した後、[次] をクリックします。
4. [Target resources] (ターゲットのリソース) セクションの [Target resource tags] (ターゲットリソースタグ) で、バックアップするボリュームまたはインスタンスを識別するリソースタグを選択します。ポリシーでは、特定のタグキーと値のペアを持つリソースのみがバックアップされます。
5. [説明] にポリシーの簡単な説明を入力します。
6. [IAM ロール] で、AMI とスナップショットを管理しインスタンスを記述するためのアクセス許可を持つ、IAM ロールを選択します。Amazon Data Lifecycle Manager から提供されるデフォルトのロールを使用するには、[デフォルトロール] を選択します。以前に作成したカスタム IAM ロールを使用するには、[別のロールを選択] をクリックした上で、使用するロールを選択します。
7. [ポリシータグ] に、ライフサイクルポリシーに適用されるタグを追加します。これらのタグは、ポリシーを識別および分類するために使用することができます。

8. [作成後のポリシーの状態] で、[ポリシーの有効化] を選択すると、次にスケジュールした時刻でポリシーが実行されます。ポリシーが実行されないようにするには、[ポリシーの無効化] を選択します。ここでポリシーを有効にしない場合、作成後に手動で有効にするまで AMI の作成は開始されません。
9. [インスタンスの再起動] セクションに、AMI の作成前にインスタンスを再起動するかどうかが表示されています。ターゲットのインスタンスが再起動されないようにするには、[いいえ] を選択します。[いいえ] を選択することで、データの整合性に問題が発生する場合があります。AMI の作成前にインスタンスを再起動するには、[はい] を選択します。これを選択すると、データの整合性が保証されます。ただし、複数のターゲットインスタンスが同時に再起動する可能性があります。
10. [次へ] をクリックします。
11. [スケジュールの設定] 画面で、ポリシースケジュールを設定します。1 つのポリシーには、最大 4 つのスケジュールを含めることができます。スケジュール 1 は必須です。スケジュール 2、3、および 4 はオプションです。追加したポリシースケジュールごとに、以下の操作を行います。
 - a. [スケジュールの詳細] セクションで、次の操作を行います。
 - i. [スケジュール名] で、スケジュールの分かりやすい名前を指定します。
 - ii. [頻度] とそれに関連するフィールドで、ポリシーの実行間隔を設定します。


ポリシーの実行は、日次、週次、月次、年次のいずれかのスケジュールで設定できます。または、[カスタム cron 式] をクリックし、最長 1 年の間隔を指定します。詳細については、Amazon CloudWatch イベントユーザーガイドの「[Cron 式](#)」を参照してください。

- iii. [開始時刻] では、ポリシー実行の開始予定時刻を指定します。初回のポリシー実行は、スケジュールした時刻から 1 時間以内に開始されます。時刻は、hh:mm UTC 形式で入力する必要があります。
- iv. [保持タイプ] で、スケジュールで作成された AMI の保持ポリシーを指定します。

AMI は、総数または期間に基づいて保持できます。

カウントベースの保持の場合、指定できる範囲は 1~1000 です。このカウントが最大数に達すると、新しい AMI が作成される時点で、最も古いスナップショットの登録が解除されます。

保存期間に基づく保持の場合、指定できる範囲は 1 日 ~ 100 年です。各 AMI の保存期間が終了すると、その AMI は削除されます。

 Note

すべてのスケジュールは、同じ保持タイプである必要があります。保持タイプを指定できるのは、スケジュール 1 のみです。スケジュール 2、3、4 は、スケジュール 1 から保持タイプを継承します。各スケジュールには、独自の保持回数または期間を設定できます。

b. AMI のタグ付けを設定します。

[タグ付け] セクションで、以下を実行します。

- i. ソースインスタンスからスケジュールにより作成された AMI に対し、すべてのユーザー定義タグをコピーするには、[ソースからタグをコピー] を選択します。
- ii. デフォルトで、スケジュールによって作成された AMI には、ソースインスタンスの ID を使用して自動的にタグ付けが行われます。この自動タグ付けが行われないようにするには、[可変タグ] から、instance-id:\$(instance-id) タイルを削除します
- iii. 他のタグを指定し、このスケジュールによって作成された AMI に割り当てるには、[タグを追加] をクリックします。

c. AMI の非推奨を設定します。

使用しなくなった AMI を非推奨にするには、AMI 非推奨セクションで、このスケジュールの AMI 非推奨を有効にするを選択し、AMI 非推奨ルールを指定します。AMI の非推奨ルールでは、AMI を非推奨にするタイミングを指定します。

スケジュールでカウントベースの AMI 保持を使用する場合は、非推奨にする最も古い AMI の数を指定する必要があります。非推奨カウントは、スケジュールの AMI 保持カウント以下である必要があります、また 1000 を超えることはできません。例えば、最大 5 つの AMI を保持するようにスケジュールが設定されている場合、最も古い 5 つの AMI を非推奨にするようにスケジュールを設定することができます。

スケジュールで年齢ベースの AMI 保持を使用する場合は、AMI が非推奨になるまでの期間を指定する必要があります。非推奨カウントは、スケジュールの AMI 保持期間以下である必要があります、10 年 (120 か月、520 週、または 3650 日) を超えることはできません。


例えば、AMI を10 日間保持するようにスケジュールが設定されている場合、作成後 10 日経過後に AMI を非推奨にするようにスケジュールを設定できます。

- d. クロスリージョンでのコピーを設定します。

スケジュールによって作成された AMI を別のリージョンにコピーするには、[クロスリージョンのコピー] セクションで、[クロスリージョンコピーを有効化する] を選択します。AMI は、アカウント内で最大 3 つの異なるリージョンにコピーできます。コピー先となるリージョンごとに、個別のクロスリージョンコピーのためのルールを指定する必要があります。

コピー先リージョンごとに、以下を指定できます：

- AMI コピーの保持ポリシー。保持期間が終了すると、コピー先リージョンのコピーは自動的に登録解除されます。
- AMI コピーの暗号化ステータス。ソース AMI が暗号化されている場合、または暗号化がデフォルトで有効化されている場合には、コピーされた AMI も常に暗号化されます。ソース AMI が暗号化されておらず、暗号化がデフォルトで無効になっている場合は、オプションで暗号化を有効にできます。KMS キー を指定しない場合、AMI は、各送信先リージョンにおける EBS 暗号化用のデフォルト KMS キー を使用して暗号化されます。送信先リージョンで KMS キー を指定する場合、選択した IAM ロールには KMS キー へのアクセス権が必要です。
- AMI コピーの非推奨ルール。非推奨期間が終了すると、AMI コピーは自動的に非推奨になります。非推奨期間は、コピーの保存期間以下である必要があり、また10 年を超えることはできません。
- ソース AMI からすべてのタグをコピーするか、タグをコピーしないかです。

 Note

リージョンごとの、AMI の同時コピー数を超えないようにします。

- e. 新たにスケジュールを追加するには、画面の上部にある [他のスケジュールを追加する] をクリックします。追加スケジュールごとに、このトピックの説明にならってフィールドを設定します。
- f. 必要なスケジュールを追加したら、[ポリシーをレビュー] をクリックします。

12. ポリシーの概要を確認した後、[ポリシーを作成] をクリックします。

Note

Role with name

AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement already exists エラーが発生した場合、詳細については「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

Command line

[create-lifecycle-policy](#) コマンドを使用して AMI ライフサイクルポリシーを作成します。PolicyType で、IMAGE_MANAGEMENT を指定する。

Note

構文を簡略化するために、次の例では、ポリシーの詳細を含む JSON ファイル、policyDetails.json を使用しています。

例 1: 年齢ベースの保持と AMI の非推奨

この例では、ターゲットインスタンスを再起動せずに、値が production で purpose のタグキーを持つすべてのインスタンスの AMI を作成する AMI ライフサイクルポリシーを作成します。ポリシーには、毎日 01:00 UTC 時に AMI を作成するスケジュールが 1 つ含まれます。ポリシーは AMI を 2 日間保持し、そして 1 日後に非推奨にします。また、作成した AMI に対し、ソースインスタンスからタグもコピーされます。

```
aws dlm create-lifecycle-policy \  
  --description "My AMI policy" \  
  --state ENABLED \  
  --execution-role-arn  
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement \  
  --policy-details file://policyDetails.json
```

次は、policyDetails.json ファイルの例です。

```
{  
  "PolicyType": "IMAGE_MANAGEMENT",  
  "ResourceTypes": [  

```

```
    "INSTANCE"
  ],
  "TargetTags": [{
    "Key": "purpose",
    "Value": "production"
  }],
  "Schedules": [{
    "Name": "DailyAMIs",
    "TagsToAdd": [{
      "Key": "type",
      "Value": "myDailyAMI"
    }],
    "CreateRule": {
      "Interval": 24,
      "IntervalUnit": "HOURS",
      "Times": [
        "01:00"
      ]
    },
    "RetainRule": {
      "Interval": 2,
      "IntervalUnit": "DAYS"
    },
    "DeprecateRule": {
      "Interval": 1,
      "IntervalUnit": "DAYS"
    },
    "CopyTags": true
  }
],
  "Parameters": {
    "NoReboot": true
  }
}
```

リクエストが成功すると、コマンドは新しく作成されたポリシーの ID を返します。以下は出力例です。

```
{
  "PolicyId": "policy-9876543210abcdef0"
}
```

例 2: クロスリージョンコピーを使用した、カウントベースの保持と AMI の非推奨

この例では、ターゲットインスタンスを再起動し、production の値の purpose タグキーを持つすべてのインスタンスの AMI を作成し、AMI ライフサイクルポリシーを作成します。このポリシーには、17:30 UTC 時に始まる 6 時間ごとに AMI を作成するスケジュールが 1 つ含まれます。ポリシーは 3 AMI を保持し、2 つの最も古い AMI を自動的に非推奨にします。また、AMI を us-east-1 にコピーし、2 つの AMI コピーを保持し、最も古い AMI を自動的に非推奨にするクロスリージョンコピールールもあります。

```
aws dlm create-lifecycle-policy \  
  --description "My AMI policy" \  
  --state ENABLED \  
  --execution-role-arn  
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement \  
  --policy-details file://policyDetails.json
```

次は、policyDetails.json ファイルの例です。

```
{  
  "PolicyType": "IMAGE_MANAGEMENT",  
  "ResourceTypes" : [  
    "INSTANCE"  
  ],  
  "TargetTags": [{  
    "Key": "purpose",  
    "Value": "production"  
  }],  
  "Parameters" : {  
    "NoReboot": true  
  },  
  "Schedules" : [{  
    "Name" : "Schedule1",  
    "CopyTags": true,  
    "CreateRule" : {  
      "Interval": 6,  
      "IntervalUnit": "HOURS",  
      "Times" : ["17:30"]  
    },  
    "RetainRule":{  
      "Count" : 3  
    },  
    "DeprecateRule":{  
      "Count" : 2  
    },  
  },  
}
```

```
    "CrossRegionCopyRules": [{
      "TargetRegion": "us-east-1",
      "Encrypted": true,
      "RetainRule":{
        "IntervalUnit": "DAYS",
        "Interval": 2
      },
      "DeprecateRule":{
        "IntervalUnit": "DAYS",
        "Interval": 1
      },
      "CopyTags": true
    }]
  }
}
```

AMI ライフサイクルポリシーに関する考慮事項

AMI ライフサイクルポリシーを作成する場合の一般的な考慮事項は次のとおりです。

- AMI ライフサイクルポリシーは、ポリシーと同じリージョンにあるインスタンスのみを対象としています。
- 最初の AMI 作成のオペレーションは、指定された開始時刻から 1 時間以内に開始されます。後続の AMI 作成オペレーションは、それらがスケジュールされた時刻から 1 時間以内に開始されます。
- Amazon Data Lifecycle Manager が AMI を登録解除すると、バックアップスナップショットが自動的に削除されます。
- ターゲットリソースタグでは大文字と小文字が区別されます。
- ポリシーによってターゲットにされたインスタンスからターゲットタグを削除した場合、以降、Amazon Data Lifecycle Manager では、標準階層に存在する AMI の管理は行いません。不要になった場合は手動で削除する必要があります。
- インスタンスをバックアップするために複数のポリシーを作成できます。例えば、インスタンスに 2 つのタグがあり、タグ A が 12 時間ごとに AMI を作成するポリシー A のターゲットであり、タグ B が 24 時間ごとに AMI を作成するポリシー B のターゲットである場合、Amazon Data Lifecycle Manager は両方のポリシーのスケジュールに従って AMI を作成します。または、複数のスケジュールを持つ単一のポリシーを作成することで、同じ結果を得ることができます。例えば、タグ A のみをターゲットとするポリシーを 1 つ作成し、スケジュールを 2 つ指定できます (1 つは 12 時間ごと、1 つは 24 時間ごと)。

- ポリシーの作成後にターゲットインスタンスにアタッチされた新しいボリュームは、次のポリシー実行時に自動的にバックアップに含まれます。ポリシー実行時にインスタンスにアタッチされたすべてのボリュームが含まれます。
- AMI を 1 つだけ作成するように設定されたカスタム cron ベースのスケジュールでポリシーを作成した場合、保持のしきい値に達しても、その AMI はポリシーによって自動的に登録解除されることはありません。AMI が不要になった場合は、手動で登録解除する必要があります。
- 保持期間が作成頻度よりも短い経過日ベースのポリシーを作成した場合、Amazon Data Lifecycle Manager は次の AMI が作成されるまで常に最新の AMI を保持します。例えば、経過日ベースのポリシーで保存期間が 7 日間の AMI が毎月 1 つ作成される場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、保持期間が 7 日間であっても、各 AMI を 1 か月間保持します。
- カウントベースのポリシーの場合、Amazon Data Lifecycle Manager は常に、保持ポリシーに従って最も古い AMI の登録解除を試みる前に、作成頻度に従って AMI を作成します。
- AMI を正常に登録解除し、関連するバックアップスナップショットを削除するには、数時間かかることがあります。以前に作成した AMI が正常に登録解除される前に Amazon Data Lifecycle Manager が次の AMI を作成した場合、一時的に保持数を超える数の AMI を保持する可能性があります。

ポリシーによってターゲットにされたインスタンスを終了する場合の考慮事項は次のとおりです。

- カウントベースの保持スケジュールが設定されたポリシーによってターゲットにされたインスタンスを終了すると、以前に終了したインスタンスから作成された AMI は、ポリシーで管理されなくなります。これらの以前に作成された AMI は、不要になったら手動で登録解除する必要があります。
- 経過時間ベースの保持スケジュールが設定されたポリシーで作成されたインスタンスを終了すると、ポリシーは定義されたスケジュールに従って、すでに作成された、最後の 1 つ前の AMI まで AMI を登録解除し続けます。最後の AMI が不要になった場合は、手動で削除する必要があります。

AMI ポリシーと AMI の非推奨に関する考慮事項は次のとおりです。

- カウントベースの保持を行っているスケジュールで AMI 非推奨カウントを増やすと、そのスケジュールによって作成されたすべての AMI (既存および新規) に変更が適用されます。
- 年齢ベースの保持でスケジュールの AMI の非推奨期間を長くした場合、その変更は新しい AMI のみ適用されます。既存の AMI は影響を受けません。

- スケジュールからAMIの非推奨ルールを削除しても、Amazon Data Lifecycle Manager は、そのスケジュールで以前に非推奨となっていたAMIの非推奨をキャンセルしません。
- スケジュールのAMIの非推奨カウントや期間を減らしても、Amazon Data Lifecycle Manager は、そのスケジュールによって以前に非推奨とされたAMIの非推奨をキャンセルしません。
- AMI ポリシーで作成されたAMIを手動で非推奨にしても、Amazon Data Lifecycle Manager は非推奨を上書きしません。
- AMI ポリシーで以前に非推奨とされたAMIの非推奨を手動でキャンセルしても、Amazon Data Lifecycle Manager はキャンセルを上書きしません。
- AMI が複数の競合するスケジュールで作成され、1 つ以上のスケジュールにAMIの非推奨ルールがない場合、Amazon Data Lifecycle Manager はそのAMIを非推奨としません。
- AMI が複数の競合するスケジュールで作成され、それらのすべてのスケジュールにAMIの非推奨ルールがある場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、非推奨に移行する日が最も遅くなる非推奨ルールを使用します。

次の考慮事項は、AMI ポリシーおよび「[ごみ箱](#)」に適用されます。

- Amazon Data Lifecycle Manager がポリシーの保持しきい値に達したときにAMIの登録を解除してごみ箱に移動した時にそのAMIをごみ箱から手動で復元する場合、AMIが不要になった際には手動でAMIの登録を解除する必要があります。Amazon Data Lifecycle Manager は、AMIを管理しなくなります。
- ポリシーによって作成されたAMIを手動で登録解除し、ポリシーの保持しきい値に達したときにそのAMIのごみ箱にある場合、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットを登録解除しません。Amazon Data Lifecycle Manager は、AMIのごみ箱に保存されている間は、スナップショットを管理しません。

ポリシーの保持しきい値に達する前にAMIのごみ箱から復元された場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、ポリシーの保持しきい値に達したときにAMIを削除します。

ポリシーの保持しきい値に達した後にAMIのごみ箱から復元された場合、Amazon Data Lifecycle Manager はそのAMIを削除しません。不要になった場合は、手動で削除する必要があります。

以下は、エラー状態にあるAMIポリシーに関する考慮事項です。

- 期間ベースの保持スケジュールを持つポリシーの場合、ポリシーがerror状態の間に有効期限を迎えるAMIは無期限に保持されます。これらのAMIは手動で登録解除する必要があります。ポリ

シーを再度有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager は保持期間が終了した時に AMI の登録解除を再開します。

- カウントベースの保持スケジュールが設定されているポリシーの場合、ポリシーが error 状態の間は AMI の作成と登録解除が停止されます。ポリシーを再度有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager は AMI の作成を再開し、保持しきい値に達した時に AMI の登録解除を再開します。

AMI ポリシーおよび [AMIの無効化](#)に関する考慮事項は次のとおりです。

- Amazon Data Lifecycle Manager が作成した AMI を無効化し、保持しきい値に達したときにその AMI が無効になっている場合、Amazon Data Lifecycle Manager は AMI を登録解除し、関連付けられたスナップショットを削除します。
- Amazon Data Lifecycle Manager が作成した AMI を無効にし、関連付けられたスナップショットを手動でアーカイブし、保持しきい値に達したときにそれらのスナップショットがアーカイブされた場合、Amazon Data Lifecycle Manager はそれらのスナップショットを削除せず、管理もできなくなります。

追加リソース

詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager AWS ストレージを使用した Amazon EBS スナップショットと AMI 管理の自動化](#)」ブログを参照してください。

クロスアカウントのスナップショットコピーの自動化

クロスアカウントのスナップショットのコピーを自動化すると、Amazon EBS スナップショットを分離アカウントの特定のリージョンにコピーし、暗号化キーを使用してそれらのスナップショットを暗号化できます。これにより、アカウントが侵害された場合にデータの損失から保護することができます。

アカウント間でスナップショットのコピーを自動化するには、次の 2 つのアカウントが使用されます。

- ソースアカウント — ソースアカウントは、スナップショットを作成してターゲットアカウントと共有するアカウントです。このアカウントでは、設定した間隔でスナップショットを作成し、それを他のアカウントと共有する EBS スナップショットポリシーを作成する必要があります。AWS
- ターゲットアカウント — ターゲットアカウントは、スナップショットを共有する共有先アカウントを持つアカウントで、共有スナップショットのコピーを作成するアカウントです。このアカウント

トでは、指定した1つ以上のソースアカウントによって共有されるスナップショットを自動的にコピーするクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成する必要があります。

トピック

- [クロスアカウントスナップショットコピーポリシーの作成](#)
- [スナップショット説明フィルターの指定](#)
- [クロスアカウントスナップショットコピーポリシーに関する考慮事項](#)
- [追加リソース](#)

クロスアカウントスナップショットコピーポリシーの作成

アカウント間でスナップショットをコピーするためにソースアカウントとターゲットアカウントを準備するには、次の手順を実行します。

手順 1: EBS スナップショットポリシーを作成する (ソースアカウント)

ソースアカウントで EBS スナップショットポリシーを作成します。これにより、スナップショットを作成し、必要なターゲットアカウントと共有します。

ポリシーを作成するときは、必ずクロスアカウント共有を有効にし、AWS スナップショットを共有するターゲットアカウントを指定してください。このアカウントは、スナップショットを共有するアカウントです。暗号化されたスナップショットを共有する場合は、選択したターゲットアカウントに、ソースボリュームの暗号化に使用された KMS キーを使用するためのアクセス権限を付与する必要があります。詳細については、「[ステップ 2: カスタマーマネージド型キー \(ソースアカウント\) を共有する](#)」を参照してください。

Note

共有できるのは、暗号化されていないスナップショットまたはカスタマーマネージド型キーを使用して暗号化されたスナップショットだけです。デフォルトの EBS 暗号化 KMS キーで暗号化されたスナップショットを共有することはできません。暗号化されたスナップショットを共有する場合は、ソースボリュームの暗号化に使用された KMS キーも、ターゲットアカウントと共有する必要があります。詳細については、「[AWS Key Management Service デベロッパーガイド](#)」の「[他のアカウントのユーザーに KMS キーの使用を許可する](#)」を参照してください。

EBS スナップショットポリシーを作成する方法については、[スナップショットのライフサイクルの自動化](#)を参照してください。

EBS スナップショットポリシーを作成するには、次のいずれかの方法を使用します。

ステップ 2: カスタマーマネージド型キー (ソースアカウント) を共有する

暗号化されたスナップショットを共有する場合は、IAM ロールと (前のステップで選択した) ターゲットの AWS アカウントに、ソースボリュームの暗号化に使用されたカスタマーマネージド型キーを使用するためのアクセス権限を付与する必要があります。

Note

この手順は、暗号化されたスナップショットを共有する場合にのみ実行してください。暗号化されていないスナップショットを共有する場合は、この手順をスキップします。

Console

1. <https://console.aws.amazon.com/kms> AWS KMS でコンソールを開きます。
2. を変更するには AWS リージョン、ページの右上隅にあるリージョンセレクターを使用します。
3. ナビゲーションペインで、[カスタマーマネージド型キー] を選択してから、ターゲットアカウントと共有する必要がある KMS キーを選択します。

KMS キーの ARN を記録しておきます。これは後で必要になります。

4. [キーポリシー] タブで、[キーユーザー] セクションまで下にスクロールします。[追加] を選択し、前のステップで選択した IAM ロールの名前を入力してから、[追加] をクリックします。
5. [キーポリシー] タブで、[その他の AWS アカウント] セクションまで下にスクロールします。[Add AWS other accounts] を選択し、AWS 前のステップでスナップショットの共有先として選択したターゲットアカウントをすべて追加します。
6. [変更を保存] をクリックします。

Command line

[get-key-policy](#) コマンドを使用して、現在 KMS キーにアタッチされているキーポリシーを取得します。

例えば、次のコマンドは、9d5e2b3d-e410-4a27-a958-19e220d83a1e の ID を持つ KMS キー のキーポリシーを取得し、snapshotKey.json という名前のファイルに書き込みます。

```
$ aws kms get-key-policy \  
  --policy-name default \  
  --key-id 9d5e2b3d-e410-4a27-a958-19e220d83a1e \  
  --query Policy \  
  --output text > snapshotKey.json
```

任意のテキストエディタを使用してキーポリシーを開きます。スナップショットポリシーの作成時に指定した IAM ロールの ARN と、KMS キー を共有するターゲットアカウントの ARN を追加します。

例えば、次のポリシーでは、デフォルトの IAM ロールの ARN と、ターゲットアカウント 222222222222. 用のルートアカウントの ARN を追加しました。

Tip

最小権限のプリンシパルに従うには、kms:CreateGrant へのフルアクセスを許可しないでください。代わりに、kms:GrantIsForAWSResource条件キーを使用して、次の例のように、AWS サービスによってユーザーに代わって権限が作成された場合にのみ、ユーザーが KMS キーで権限を作成できるようにします。

```
{  
  "Sid" : "Allow use of the key",  
  "Effect" : "Allow",  
  "Principal" : {  
    "AWS" : [  
      "arn:aws:iam::111111111111:role/service-role/  
AWSDataLifecycleManagerDefaultRole",  
      "arn:aws:iam::222222222222:root"  
    ]  
  },  
  "Action" : [  
    "kms:Encrypt",  
    "kms:Decrypt",  
    "kms:ReEncrypt*",  
    "kms:GenerateDataKey*",  
    "kms:DescribeKey"  
  ]  
}
```

```
    ],
    "Resource" : "*"
  },
  {
    "Sid" : "Allow attachment of persistent resources",
    "Effect" : "Allow",
    "Principal" : {
      "AWS" : [
        "arn:aws:iam::111111111111:role/service-role/
AWSDataLifecycleManagerDefaultRole",
        "arn:aws:iam::222222222222:root"
      ]
    },
    "Action" : [
      "kms:CreateGrant",
      "kms:ListGrants",
      "kms:RevokeGrant"
    ],
    "Resource" : "*",
    "Condition" : {
      "Bool" : {
        "kms:GrantIsForAWSResource" : "true"
      }
    }
  }
}
```

ファイルを保存して閉じます。次に、[put-key-policy](#) コマンドを使用して、更新したキーポリシーを KMS キーにアタッチします。

```
$ aws kms put-key-policy \
  --policy-name default \
  --key-id 9d5e2b3d-e410-4a27-a958-19e220d83a1e \
  --policy file://snapshotKey.json
```

手順 3: クロスアカウントコピーイベントポリシーの作成 (ターゲットアカウント)

ターゲットアカウントで、必要なソースアカウントで共有されるスナップショットを自動的にコピーするクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成する必要があります。

このポリシーは、指定されたソースアカウントの 1 つがスナップショットを共有する場合にのみ、ターゲットアカウントで実行されます。

クロスアカウントコピーイベントポリシーを作成するには、次のいずれかの方法を使用します。

Console

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー]、[ライフサイクルポリシーの作成] の順に選択します。
3. [ポリシータイプの選択] 画面で、[クロスアカウントコピーのイベントポリシー] を選択した上で、[次へ] をクリックします。
4. [ポリシーの説明] に、ポリシーの簡単な説明を入力します。
5. [ポリシータグ] に、ライフサイクルポリシーに適用されるタグを追加します。これらのタグは、ポリシーを識別および分類するために使用することができます。
6. [イベントの設定] セクションで、ポリシーを実行するスナップショット共有イベントを定義します。以下の操作を実行します。
 - a. [共有アカウント] には、AWS 共有スナップショットのコピー元となるソースアカウントを指定します。[アカウントを追加] を選択し、12 AWS 桁のアカウント ID を入力して [追加] を選択します。
 - b. [説明でフィルタリング] に、正規表現を使用して必要なスナップショットの説明を入力します。指定したソースアカウントによって共有され、指定したフィルターに一致する説明を持つスナップショットのみが、ポリシーによってコピーされます。詳細については、[を参照してください](#) [スナップショット説明フィルターの指定](#)
7. [IAM ロール] で、スナップショットのコピーアクションを実行するアクセス許可を持つ IAM ロールを選択します。Amazon Data Lifecycle Manager から提供されるデフォルトのロールを使用するには、[デフォルトロール] を選択します。以前に作成したカスタム IAM ロールを使用する場合には、[別のロールを選択] をクリックした上で、使用するロールを選択します。

暗号化されたスナップショットをコピーする場合は、ソースボリュームの暗号化に使用する暗号化 KMS キー を使用するためのアクセス権限を選択した IAM ロールに付与する必要があります。同様に、別の KMS キー を使用して送信先リージョンのスナップショットを暗号化する場合は、送信先 KMS キー を使用するためのアクセス権限を IAM ロールに付与する必要があります。詳細については、[を参照してください](#) [ステップ 4: IAM ロールに必要な KMS キー の使用を許可する \(ターゲットアカウント\)](#)
8. [コピーアクション] セクションで、アクティブ化された際にポリシーが実行する、スナップショットのコピーアクションを定義します。ポリシーは、スナップショットを最大 3 つの

リージョンにコピーできます。コピー先となるリージョンごとに、個別のコピールールを指定する必要があります。追加したルールごとに以下を実行します。

- a. [名前] に、コピーアクションのわかりやすい名前を入力します。
 - b. [Target Region] (ターゲットリージョン) で、スナップショットをコピー先リージョンを選択します。
 - c. [有効期限] では、作成したスナップショットのコピーを、ターゲットリージョンに保持する期間を指定します。
 - d. スナップショットのコピーを暗号化するには、[暗号化] で、[暗号化の有効化] を選択します。ソーススナップショットが暗号化されている場合、またはアカウントで暗号化がデフォルトで有効になっている場合は、ここで暗号化を有効になくても、スナップショットのコピーは常に暗号化されます。ソーススナップショットが暗号化されておらず、アカウントで暗号化がデフォルトで有効になっていない場合は、暗号化を有効または無効にすることができます。暗号化を有効にし、KMS キーを指定しない場合、スナップショットは、各送信先リージョンでデフォルトの暗号化 KMS キーを使用して暗号化されます。送信先のリージョンの KMS キーを指定する場合は、KMS キーへのアクセスが必要です。
9. さらに、スナップショットのコピーアクションを追加するには、[新しいリージョンを追加] をクリックします。
10. [Policy status after creation (作成後のポリシーの状態)] では、[Enable policy (ポリシーの有効化)] を選択すると、次のスケジュールした時刻にポリシーが実行されます。ポリシーが実行されないようにするには、[Disable policy (ポリシーの無効化)] を選択します。ここでポリシーを有効にしない場合、作成後に手動で有効にするまで、スナップショットのコピーは開始されません。
11. [Create policy] を選択します。

Command line

[create-lifecycle-policy](#) コマンドを使用してポリシーを作成します。クロスアカウントコピーイベントポリシーを作成するには、PolicyType で、EVENT_BASED_POLICY を指定します。

例えば、次のコマンドは、ターゲットアカウント 222222222222 にクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成します。ポリシーは、ソースアカウント 111111111111 によって共有されるスナップショットをコピーします。ポリシーは、スナップショットを sa-east-1 と eu-west-2 にコピーします。sa-east-1 にコピーされたスナップショットは暗号化されず、3 日間保持されます。eu-west-2 にコピーされたスナップショットは KMS キー

8af79514-350d-4c52-bac8-8985e84171c7 を使用して暗号化され、1 か月間保持されます。このポリシーは、デフォルトの IAM ロールを使用します。

```
$ aws dlm create-lifecycle-policy \  
  --description "Copy policy" \  
  --state ENABLED \  
  --execution-role-arn arn:aws:iam::222222222222:role/service-role/  
AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \  
  --policy-details file://policyDetails.json
```

以下は、policyDetails.json ファイルの内容を示しています。

```
{  
  "PolicyType" : "EVENT_BASED_POLICY",  
  "EventSource" : {  
    "Type" : "MANAGED_CWE",  
    "Parameters": {  
      "EventType" : "shareSnapshot",  
      "SnapshotOwner": ["111111111111"]  
    }  
  },  
  "Actions" : [{  
    "Name" : "Copy Snapshot to Sao Paulo and London",  
    "CrossRegionCopy" : [{  
      "Target" : "sa-east-1",  
      "EncryptionConfiguration" : {  
        "Encrypted" : false  
      },  
      "RetainRule" : {  
        "Interval" : 3,  
        "IntervalUnit" : "DAYS"  
      }  
    },  
    {  
      "Target" : "eu-west-2",  
      "EncryptionConfiguration" : {  
        "Encrypted" : true,  
        "CmkArn" : "arn:aws:kms:eu-west-2:222222222222:key/8af79514-350d-4c52-bac8-8985e84171c7"  
      },  
      "RetainRule" : {  
        "Interval" : 1,  
        "IntervalUnit" : "MONTHS"  
      }  
    }  
  ]  
}
```



```
    }  
  }]  
}]  
}
```

リクエストが成功すると、コマンドは新しく作成されたポリシーの ID を返します。以下は出力例です。

```
{  
  "PolicyId": "policy-9876543210abcdef0"  
}
```

ステップ 4: IAM ロールに必要な KMS キー の使用を許可する (ターゲットアカウント)

暗号化されたスナップショットをコピーする場合は、(前の手順で選択した) IAM ロールに、ソースボリュームの暗号化に使用された カスタマーマネージド型キー を使用するためのアクセス権限を付与する必要があります。

Note

暗号化されたスナップショットをコピーする場合のみ、この手順を実行してください。暗号化されていないスナップショットをコピーする場合は、この手順をスキップします。

以下のいずれかの方法を使用して、必要なポリシーを IAM ロールに追加します。

Console

1. IAM コンソール (<https://console.aws.amazon.com/iam/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[ロール] を選択します。前の手順でクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成したときに選択した IAM ロールを検索して選択します。デフォルトロールを使用することを選択した場合、AWSDataLifecycleManagerDefaultRole ロールには名前が付けられます。
3. [インラインポリシーの追加] を選択し、次に [JSON] タブを選択します。
4. 既存のポリシーを次のように置き換え、ステップ 2 でソースボリュームの暗号化に使用され、ソースアカウントによって共有された KMS キーの ARN を指定します。

Note

複数のソースアカウントからコピーする場合は、各ソースアカウントから対応する KMS キー ARN を指定する必要があります。

次の例では、ポリシーは、ソースアカウント 111111111111 で共有された KMS キー 1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab とターゲットアカウント 222222222222 に存在する KMS キー 4567dcba-23ab-34cd-56ef-0987654321yz を使用するためのアクセス権限を IAM ロールに付与します。

Tip

最小権限のプリンシパルに従うには、`kms:CreateGrant` へのフルアクセスを許可しないでください。代わりに、`kms:GrantIsForAWSResource` 条件キーを使用して、次の例のように、AWS サービスによってユーザーに代わって権限が作成された場合にのみ、ユーザーが KMS キーで権限を作成できるようにします。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:RevokeGrant",
        "kms:CreateGrant",
        "kms:ListGrants"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:us-east-1:111111111111:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab",
        "arn:aws:kms:us-east-1:222222222222:key/4567dcba-23ab-34cd-56ef-0987654321yz"
      ],
      "Condition": {
        "Bool": {
          "kms:GrantIsForAWSResource": "true"
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Encrypt",
      "kms:Decrypt",
      "kms:ReEncrypt*",
      "kms:GenerateDataKey*",
      "kms:DescribeKey"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kms:us-east-1:111111111111:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab",
      "arn:aws:kms:us-east-1:222222222222:key/4567dcba-23ab-34cd-56ef-0987654321yz"
    ]
  }
]
```

5. [Review policy] (ポリシーの確認) を選択します。
6. [名前] にポリシーのわかりやすい名前を入力し、[ポリシーの作成] を選択します。

Command line

お好みのテキストエディタを使用して、`policyDetails.json` という名前の新しい JSON ファイルを作成します。以下のポリシーを追加し、ステップ 2 でソースボリュームの暗号化に使用され、ソースアカウントによって共有された KMS キーの ARN を指定します。

Note

複数のソースアカウントからコピーする場合は、各ソースアカウントから対応する KMS キー ARN を指定する必要があります。

次の例では、ポリシーは、ソースアカウント 111111111111 で共有された KMS キー 1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab とターゲットアカウント 222222222222 に存在する KMS キー 4567dcba-23ab-34cd-56ef-0987654321yz を使用するためのアクセス権限を IAM ロールに付与します。

i Tip

最小権限のプリンシパルに従うには、`kms:CreateGrant` へのフルアクセスを許可しないでください。代わりに、`kms:GrantIsForAWSResource` 条件キーを使用して、次の例のように、AWS サービスによってユーザーに代わって権限が作成された場合にのみ、ユーザーが KMS キーで権限を作成できるようにします。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:RevokeGrant",
        "kms:CreateGrant",
        "kms:ListGrants"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:us-east-1:111111111111:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab",
        "arn:aws:kms:us-east-1:222222222222:key/4567dcba-23ab-34cd-56ef-0987654321yz"
      ],
      "Condition": {
        "Bool": {
          "kms:GrantIsForAWSResource": "true"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Encrypt",
        "kms:Decrypt",
        "kms:ReEncrypt*",
        "kms:GenerateDataKey*",
        "kms:DescribeKey"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:us-east-1:111111111111:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab",
```

```
"arn:aws:kms:us-  
east-1:222222222222:key/4567dcba-23ab-34cd-56ef-0987654321yz"  
    ]  
  }  
]  
}
```

ファイルを保存して閉じます。次に、[put-role-policy](#) コマンドを使用して IAM ロールにポリシーを追加します。

例

```
$ aws iam put-role-policy \  
  --role-name AWSDataLifecycleManagerDefaultRole \  
  --policy-name CopyPolicy \  
  --policy-document file://AdminPolicy.json
```

スナップショット説明フィルターの指定

ターゲットアカウントでスナップショットコピーポリシーを作成する場合は、スナップショットの説明フィルターを指定する必要があります。スナップショット説明フィルターにより、ポリシーによってコピーされるスナップショットを制御できる追加のフィルターレベルを指定できます。つまり、スナップショットは、指定したソースアカウントのいずれかによって共有され、指定したフィルターに一致するスナップショットの説明がある場合にのみ、ポリシーによりコピーされます。つまり、スナップショットが指定されたソースアカウントのいずれかによって共有されているのに、指定したフィルターに一致する説明がない場合、そのスナップショットはポリシーによってコピーされません。

スナップショットフィルターの説明は、正規表現を使用して指定する必要があります。コンソールとコマンドラインを使用してクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成する場合、このフィールドは必須です。使用できる正規表現の例を次に示します。

- `.*`— このフィルターは、すべてのスナップショットの説明に一致します。この式を使用すると、ポリシーは、指定したソースアカウントの1つが共有しているすべてのスナップショットをコピーします。
- `Created for policy: policy-0123456789abcdef0.*`— このフィルターは、`policy-0123456789abcdef0` の ID を持ったポリシーによって作成されたスナップショットにのみ一致します。このような式を使用すると、ポリシーは、指定したソースアカウントのい

れかによってアカウントと共有され、指定された ID を持つポリシーによって作成されたスナップショットのみをコピーします。

- `.*production.*`— このフィルターは、説明のいずれかの場所に `production` の単語が含まれているスナップショットに一致します。この式を使用すると、ポリシーは、指定したソースアカウントのいずれかで共有され、説明に指定されたテキストを含むすべてのスナップショットをコピーします。

クロスアカウントスナップショットコピーポリシーに関する考慮事項

以下はアカウント間のコピーイベントポリシーの考慮事項です。

- コピーできるのは、暗号化されていないスナップショットまたは カスタマーマネージド型キー を使用して暗号化されたスナップショットだけです。
- Amazon Data Lifecycle Manager の外部で共有されるスナップショットをコピーするクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成できます。
- ターゲットアカウントのスナップショットを暗号化する場合、クロスアカウントコピーイベントポリシー用に選択された IAM ロールには、必要な KMS キー を使用するためのアクセス権限が必要です。

追加リソース

詳細については、「[暗号化された Amazon EBS AWSAWS スナップショットをアカウントストレージ間で自動的にコピーする](#)」ブログを参照してください。

ライフサイクルポリシーの表示、変更、および削除

既存のライフサイクルポリシーを表示、変更、削除するには、次の手順に従います。

トピック

- [ライフサイクルポリシーの表示](#)
- [ライフサイクルポリシーの変更](#)
- [ライフサイクルポリシーの削除](#)

ライフサイクルポリシーの表示

次のいずれかの手順に従ってライフサイクルポリシーを表示します。

Console

ライフサイクルポリシーを表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー] の順に選択します。
3. リストからライフサイクルポリシーの ID を選択します。

Command line

ライフサイクルポリシーの概要情報を取得するには

[get-lifecycle-policies](#) コマンドを実行します。

```
aws dlm get-lifecycle-policies
```

特定のライフサイクルポリシーに関する情報を表示するには

[get-lifecycle-policy](#) コマンドを実行します。 --policy-id で、表示するポリシーの ID を指定します。

```
aws dlm get-lifecycle-policy --policy-id policy-0123456789abcdef0
```

ライフサイクルポリシーの変更

ポリシーの変更に関する考慮事項

- ターゲットタグを削除して AMI またはスナップショットポリシーを変更すると、それらのタグを持つボリュームまたはインスタンスはポリシーで管理されなくなります。
- スケジュール名を変更すると、古いスケジュール名で作成されたスナップショットまたは AMI はポリシーで管理されなくなります。
- 経過時間ベースの保持スケジュールを、新たな期間を使用するスケジュールに修正すると、新たな期間は、変更後に作成された新たなスナップショットまたは AMI にのみ適用されます。新たなスケジュールは、変更前に作成されたスナップショットまたは AMI の保持スケジュールに影響を及ぼすことはありません。

- 作成後、ポリシーの保持スケジュールをカウントベースから経過時間ベースに変更することはできません。この変更を行うには、新たなポリシーを作成する必要があります。
- 期間ベースの保持スケジュールを持つポリシーを無効にすると、ポリシーが無効になっている間に有効期限が切れるように設定されたスナップショットまたは AMI は無期限に保持されます。スナップショットを削除するか、AMI を手動で登録解除する必要があります。ポリシーを再度有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager は保持期間の終了時にスナップショットの削除または AMI の登録解除を再開します。
- カウントベースの保持スケジュールを持つポリシーを無効にすると、ポリシーはスナップショットまたは AMI の作成と削除を停止します。ポリシーを再度有効にすると、Amazon Data Lifecycle Manager はスナップショットと AMI の作成を再開し、保持しきい値に達するとスナップショットまたは AMI の削除を再開します。
- スナップショットアーカイブを有効にしたポリシーを含むポリシーを無効にした時点で、アーカイブ層に残されているスナップショットに対しては、Amazon Data Lifecycle Manager による管理が行われなくなります。不要になったスナップショットは、手動で削除する必要があります。
- カウントベースのスケジュールでスナップショットのアーカイブを有効にした場合、このアーカイブルールは、以後スケジュールに従って作成およびアーカイブされるすべての新しいスナップショットに適用されます。また、このスケジュールによって以前に作成およびアーカイブされた既存のスナップショットにも適用されます。
- 期間ベースのスケジュールに対しスナップショットのアーカイブを有効にした場合、アーカイブルールは、有効化した時点以降に作成された新しいスナップショットにのみ適用されます。スナップショットのアーカイブを有効にする前に作成された既存のスナップショットは、それらのスナップショットが最初に作成およびアーカイブされた時点で設定されていたスケジュールに従って、引き続きそれぞれのストレージ階層から削除されます。
- カウントベースのスケジュールでスナップショットのアーカイブを無効にすると、スケジュールはただちにスナップショットのアーカイブを停止します。スケジュールによって以前にアーカイブされたスナップショットはアーカイブ階層に残り、Amazon Data Lifecycle Manager によって削除されることはありません。
- 期間ベースのスケジュールにおいてスナップショットのアーカイブを無効にすると、ポリシーで作成されアーカイブが予定されているスナップショットは、スケジュールされた (aws:dlm:expirationTime システムタグが示す) アーカイブの日時に完全に削除されます。
- スケジュールにおいてスナップショットのアーカイブを無効にした場合、スケジュールは、その時点でスナップショットのアーカイブを停止します。スケジュールによって以前にアーカイブされたスナップショットはアーカイブ階層に残り、Amazon Data Lifecycle Manager によって削除されることはありません。

- カウントベースのスケジュールにおいてアーカイブ保持数を変更した場合、この新しい保存数は、以前にスケジュールによってアーカイブされた既存のスナップショットの数も含まれます。
- 期間ベースのスケジュールにおいてアーカイブの保持期間を変更した場合は、この変更を行った時点後にアーカイブされたスナップショットに対してのみ、新しい保持期間が適用されます。

次のいずれかの手順に従ってライフサイクルポリシーを変更します。

Console

ライフサイクルポリシーを変更するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー] の順に選択します。
3. リストからライフサイクルポリシーを選択します。
4. [アクション]、[ライフサイクルポリシーの変更] の順に選択します。
5. 必要に応じてポリシー設定を修正します。具体例を挙げると、スケジュールを修正する、タグを追加もしくは削除する、またはポリシーを有効化もしくは無効化することができます。
6. [ポリシーの変更] を選択します。

Command line

[update-lifecycle-policy](#) コマンドを使用して、ライフサイクルポリシーの情報を変更します。構文を簡略化するために、この例では、ポリシーの詳細を含む JSON ファイル、`policyDetailsUpdated.json` を参照しています。

```
aws dlm update-lifecycle-policy \  
  --state DISABLED \  
  --execution-role-arn  
arn:aws:iam::12345678910:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole" \  
  --policy-details file://policyDetailsUpdated.json
```

次は、`policyDetailsUpdated.json` ファイルの例です。

```
{  
  "ResourceTypes": [  
    "VOLUME"
```

```
],
  "TargetTags": [
    {
      "Key": "costcenter",
      "Value": "120"
    }
  ],
  "Schedules": [
    {
      "Name": "DailySnapshots",
      "TagsToAdd": [
        {
          "Key": "type",
          "Value": "myDailySnapshot"
        }
      ],
      "CreateRule": {
        "Interval": 12,
        "IntervalUnit": "HOURS",
        "Times": [
          "15:00"
        ]
      },
      "RetainRule": {
        "Count": 5
      },
      "CopyTags": false
    }
  ]
}
```

更新されたポリシーを表示するには、`get-lifecycle-policy` コマンドを使用します。状態、タグの値、スナップショットの間隔、およびスナップショットの開始時刻が変更されたことがわかります。

ライフサイクルポリシーの削除

ポリシーの変更に関する考慮事項

- ポリシーを削除した場合でも、そのポリシーによって作成されたスナップショットまたは AMI は自動的に削除されません。これらのスナップショットや AMI が不要になった場合は、手動で削除する必要があります。

- スナップショットのアーカイブが有効になっているポリシーを削除すると、その時点でアーカイブ層にあったスナップショットには、Amazon Data Lifecycle Manager による管理が行われなくなります。不要になったスナップショットは、手動で削除する必要があります。
- アーカイブが有効化された期間ベースのスケジュールを含むポリシーを削除すると、そのポリシーによって作成されアーカイブが予定されていたスナップショットは、スケジュールされた (aws:dlm:expirationtime システムタグで示されている) アーカイブの日時に完全に削除されます。

次のいずれかの手順に従ってライフサイクルポリシーを削除します。

Console

ライフサイクルポリシーを削除するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [Elastic Block Store]、[ライフサイクルマネージャー] の順に選択します。
3. リストからライフサイクルポリシーを選択します。
4. [アクション]、[ライフサイクルポリシーの削除] の順に選択します。
5. 確認を求めるメッセージが表示されたら、[ポリシーの削除] を選択します。

Command line

[delete-lifecycle-policy](#) コマンドを使用してライフサイクルポリシーを削除し、ポリシーで指定されているターゲットタグを解放して再利用できるようにします。

Note

Amazon Data Lifecycle Manager によって作成されたスナップショットだけを削除できません。

```
aws dlm delete-lifecycle-policy --policy-id policy-0123456789abcdef0
```

[Amazon Data Lifecycle Manager API リファレンス](#)には、Amazon Data Lifecycle Manager クエリ API の各アクションとデータ型の説明と構文があります。

または、AWS SDK の 1 つを使用して、使用しているプログラミング言語またはプラットフォームに合わせた方法で API にアクセスすることもできます。詳細については、[AWS SDK](#) を参照してください。

AWS Identity and Access Management

Amazon Data Lifecycle Manager へのアクセスには、認証情報が必要です。それらの資格情報には、インスタンス、ボリューム、スナップショット、AMIなどの AWS リソースにアクセスするためのアクセス許可が必要です。以下のセクションでは、AWS Identity and Access Management (IAM) の使用方法と、リソースへの安全なアクセスを支援する方法について詳しく説明します。

トピック

- [AWS 管理ポリシー](#)
- [IAM サービスロール](#)
- [ユーザーのアクセス許可](#)
- [暗号化のアクセス許可](#)

AWS 管理ポリシー

AWS 管理ポリシーは、によって作成および管理されるスタンドアロンポリシーです。AWS AWS 管理ポリシーは、多くの一般的なユースケースにアクセス権限を与えるように設計されています。AWS 管理ポリシーを使用すると、ポリシーを自分で作成するよりも、ユーザー、グループ、ロールに適切な権限を割り当てる方が効率的です。

ただし、AWS 管理ポリシーで定義されている権限は変更できません。AWS AWS 管理ポリシーに定義されている権限が更新されることがあります。行われた更新は、ポリシーがアタッチされているすべてのプリンシパルエンティティ (ユーザー、グループ、ロール) に影響します。

Amazon Data Lifecycle Manager は、AWS 一般的なユースケースに対応する管理ポリシーを提供します。これらのポリシーでは、より効率的に適切なアクセス許可を定義し、リソースへのアクセスを制御できます。Amazon Data Lifecycle Manager AWS が提供する管理ポリシーは、Amazon Data Lifecycle Manager に渡すロールにアタッチされるように設計されています。

トピック

- [AWSDataLifecycleManagerServiceRole](#)
- [AWSDataLifecycleManagerServiceRoleForAMIManagement](#)

- [AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess](#)
- [AWS 管理ポリシーの更新](#)

AWSDataLifecycleManagerServiceRole

AWSDataLifecycleManagerServiceRoleこのポリシーは、Amazon EBS スナップショットポリシーとクロスアカウントコピーイベントポリシーを作成および管理するための適切なアクセス権限をAmazon Data Lifecycle Manager に提供します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateSnapshot",
        "ec2:CreateSnapshots",
        "ec2>DeleteSnapshot",
        "ec2:DescribeInstances",
        "ec2:DescribeVolumes",
        "ec2:DescribeSnapshots",
        "ec2:EnableFastSnapshotRestores",
        "ec2:DescribeFastSnapshotRestores",
        "ec2:DisableFastSnapshotRestores",
        "ec2:CopySnapshot",
        "ec2:ModifySnapshotAttribute",
        "ec2:DescribeSnapshotAttribute",
        "ec2:ModifySnapshotTier",
        "ec2:DescribeSnapshotTierStatus"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateTags"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```

        "events:PutRule",
        "events>DeleteRule",
        "events:DescribeRule",
        "events:EnableRule",
        "events:DisableRule",
        "events:ListTargetsByRule",
        "events:PutTargets",
        "events:RemoveTargets"
    ],
    "Resource": "arn:aws:events:*:*:rule/AwsDataLifecycleRule.managed-cwe.*"
}
]
}

```

AWSDataLifecycleManagerServiceRoleForAMIManagement

AWSDataLifecycleManagerServiceRoleForAMIManagementこのポリシーは、Amazon EBS ベースのAMI ポリシーを作成および管理するための適切なアクセス権限を Amazon Data Lifecycle Manager に提供します。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateTags",
      "Resource": [
        "arn:aws:ec2:*:*:snapshot/*",
        "arn:aws:ec2:*:*:image/*"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:DescribeImages",
        "ec2:DescribeInstances",
        "ec2:DescribeImageAttribute",
        "ec2:DescribeVolumes",
        "ec2:DescribeSnapshots"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {

```

```
    "Effect": "Allow",
    "Action": "ec2:DeleteSnapshot",
    "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:ResetImageAttribute",
      "ec2:DeregisterImage",
      "ec2:CreateImage",
      "ec2:CopyImage",
      "ec2:ModifyImageAttribute"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:EnableImageDeprecation",
      "ec2:DisableImageDeprecation"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:*::image/*"
  }
]
```

AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess

すべての Amazon EC2 インスタンスで事前スクリプトと事後スクリプトを実行するために必要な Systems Manager アクションを実行する権限を Amazon Data Lifecycle Manager に付与します。

Important

このポリシーでは、事前スクリプトと事後スクリプトを使用するときに、aws:ResourceTag 条件キーを使って特定の SSM ドキュメントへのアクセスを制限します。Amazon Data Lifecycle Manager が SSM ドキュメントにアクセスできるようにするには、SSM ドキュメントに DLMScriptsAccess:true のタグが付けられていることを確認する必要があります。

```
{
```

```

"Version": "2012-10-17",
"Statement": [
  {
    "Sid": "AllowSSMReadOnlyAccess",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ssm:GetCommandInvocation",
      "ssm:ListCommands",
      "ssm:DescribeInstanceInformation"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Sid": "AllowTaggedSSMDocumentsOnly",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ssm:SendCommand",
      "ssm:DescribeDocument",
      "ssm:GetDocument"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:ssm:*:*:document/*"
    ],
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "aws:ResourceTag/DLMScriptsAccess": "true"
      }
    }
  },
  {
    "Sid": "AllowSpecificAWSOwnedSSMDocuments",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ssm:SendCommand",
      "ssm:DescribeDocument",
      "ssm:GetDocument"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:ssm:*:*:document/AWSEC2-CreateVssSnapshot",
      "arn:aws:ssm:*:*:document/AWSSystemsManagerSAP-
CreateDLMSnapshotForSAPHANA"
    ]
  },
  {

```



```

        "Sid": "AllowAllEC2Instances",
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ssm:SendCommand"
        ],
        "Resource": [
            "arn:aws:ec2:*:*:instance/*"
        ]
    }
}

```

AWS 管理ポリシーの更新

AWS AWS サービスは管理ポリシーを維持および更新します。AWS 管理ポリシーの権限は変更できません。新しい機能をサポートするために、AWS サービスによって管理ポリシーに権限が追加されることがあります。この種の更新は、ポリシーがアタッチされているすべてのアイデンティティ (ユーザー、グループ、ロール) に影響を与えます。新しい機能がリリースされたとき、または新しい操作が可能になったときに、AWS サービスが管理ポリシーを更新する可能性が最も高くなります。AWS サービスは管理ポリシーから権限を削除しないため、ポリシーを更新しても既存の権限が損なわれることはありません。

次の表は、このサービスが変更の追跡を開始してからの Amazon Data Lifecycle Manager AWS の管理ポリシーの更新に関する詳細を示しています。このページへの変更に関する自動通知を受けるには、[Amazon EBS ユーザーガイドのドキュメント履歴](#) の RSS フィードを購読してください。

変更	説明	日付
AWSDataLifecyleManagerSSMFullAccess— ポリシーの権限を更新しました。	AWSSystemManagerSAP-CreateDLMSnapshotForSAPHANA SSM ドキュメントを使用した SAP HANA で、アプリケーション整合性のあるスナ	2023 年 11 月 17 日

変更	説明	日付
	アップショットをサポートするようにポリシーを更新しました。	
AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess—AWS 新しい管理ポリシーを追加しました。	Amazon Data Lifecycle Manager AWSDataLifecycleManagerSSMFullAccess AWS が管理ポリシーを追加しました。	2023 年 11 月 7 日

変更	説明	日付
AWSDatalifecycleManagerServiceRole— スナップショットのアーカイブをサポートする権限を追加しました。	Amazon Data Lifecycle Manager に ec2:ModifySnapshotTier および ec2:DescribeSnapshotTierStatus アクションが追加され、スナップショットのアーカイブおよびスナップショットのアーカイブステータスの確認に必要なアクセス許可をスナップショットポリシーに付与できるようになりました。	2022 年 9 月 30 日

変更	説明	日付
AWSDataLifecycleManagerServiceRoleForAMIManagement—AMIの廃止をサポートする権限を追加しました。	Amazon Data Lifecycle Manager は、ec2:EnableImageDeprecation および ec2:DisableImageDeprecation アクションを使用して、AMI の非推奨を有効または無効にするアクセス権限を EBS-backed AMI ポリシーに付与します。	2021 年 8 月 23 日
Amazon Data Lifecycle Manager が変更追跡を開始しました	Amazon Data Lifecycle Manager は、AWS 管理ポリシーの変更の追跡を開始しました。	2021 年 8 月 23 日

IAM サービスロール

AWS Identity and Access Management (IAM) ロールは、ID で実行できることとできないことを決定するアクセス権限ポリシーを持つ AWS ID であるという点で、ユーザーと同様です。AWS ただし、ユーザーは 1 人の特定の人に一意に関連付けられますが、ロールはそれを必要とする任意の人が引き受けるようになっています。サービスロールは、AWS ユーザーに代わってアクションを実行するためにサービスが引き受けるロールです。お客様に代わってバックアップ操作を実行するサービスとして、Amazon Data Lifecycle Manager では、お客様に代わってポリシー操作を実行するときに、

想定するロールを渡す必要があります。IAM ロールの詳細については、IAM ユーザーガイドの [IAM ロール](#) を参照してください。

Amazon Data Lifecycle Manager に渡すロールには、Amazon Data Lifecycle Manager がポリシー操作に関連するアクション (スナップショットと AMI の作成、スナップショットと AMI のコピー、スナップショットの削除、AMI の登録解除など) を実行できるようにするアクセス権限を持つ IAM ポリシーが必要です。Amazon Data Lifecycle Manager のポリシータイプごとに異なるアクセス権限が必要です。ロールには、Amazon Data Lifecycle Manager が信頼されたエンティティとして登録されている必要があります。これにより、Amazon Data Lifecycle Manager はロールを引き受けることができます。

トピック

- [Amazon Data Lifecycle Manager のデフォルトのサービスロール](#)
- [Amazon Data Lifecycle Manager のカスタムサービスロール](#)

Amazon Data Lifecycle Manager のデフォルトのサービスロール

Amazon Data Lifecycle Manager は、以下のデフォルトのサービスロールを使用します：

- `AWSDataLifecycleManagerDefaultRole`—スナップショットを管理するためのデフォルトロール。 `d1m.amazonaws.com` サービスのみを信頼してロールを引き受け、Amazon Data Lifecycle Manager は、お客様に代わってスナップショットおよびクロスアカウントのスナップショットコピーポリシーで必要なアクションを実行できます。 `AWSDataLifecycleManagerServiceRole` AWS このロールは管理ポリシーを使用します。

Note

ロールの ARN 形式は、コンソールを使用して作成されたか、AWS CLIを使用して作成されたかによって異なります。コンソールを使用してロールが作成された場合、ARN 形式は `arn:aws:iam::account_id:role/service-role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` です。ロールがを使用して作成された場合 AWS CLI、ARN 形式は `arn:aws:iam::account_id:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` です。

- `AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement`—AMI を管理するためのデフォルトロール。 `d1m.amazonaws.com` サービスのみを信頼してロールを引き受けます。これにより、Amazon Data Lifecycle Manager が、お客様に代わってEBS-backed AMI ポリシーで必要なアクションを実行できるようになります。

す。AWSDataLifecycleManagerServiceRoleForAMIManagement AWS このロールは管理ポリシーを使用します。

Amazon Data Lifecycle Manager コンソールを使用している場合、Amazon Data Lifecycle Manager は、AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleスナップショットまたはクロスアカウントスナップショットコピーポリシーを初めて作成したときにサービスロールを自動的に作成し、EBS ベースの AMI AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagementポリシーを初めて作成するときにサービスロールを自動的に作成します。

コンソールを使用していない場合は、コマンドを使用してサービスロールを手動で作成できます。[create-default-role](#)では--resource-type、「作成AWSDataLifecycleManagerDefaultRole」または「作成image」を指定しますsnapshot AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement。

```
$ aws dlm create-default-role --resource-type snapshot/image
```

デフォルトのサービスロールを削除したのち、再度作成する必要がある場合は、同じ手順でアカウントにロールを再作成できます。

Amazon Data Lifecycle Manager のカスタムサービスロール

デフォルトのサービスロールを使用する代わりに、必要なアクセス許可を持つカスタム IAM ロールを作成し、ライフサイクルポリシーの作成時に、そのロールを選択することもできます。

カスタム IAM ロールを作成するには

1. 次のアクセス許可でロールを作成します。

- スナップショットライフサイクルポリシーを管理するためのアクセス許可

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateSnapshot",
        "ec2:CreateSnapshots",
        "ec2>DeleteSnapshot",
        "ec2:DescribeInstances",
```

```

        "ec2:DescribeVolumes",
        "ec2:DescribeSnapshots",
        "ec2:EnableFastSnapshotRestores",
        "ec2:DescribeFastSnapshotRestores",
        "ec2:DisableFastSnapshotRestores",
        "ec2:CopySnapshot",
        "ec2:ModifySnapshotAttribute",
        "ec2:DescribeSnapshotAttribute",
        "ec2:ModifySnapshotTier",
        "ec2:DescribeSnapshotTierStatus"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:CreateTags"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "events:PutRule",
        "events>DeleteRule",
        "events:DescribeRule",
        "events:EnableRule",
        "events:DisableRule",
        "events:ListTargetsByRule",
        "events:PutTargets",
        "events:RemoveTargets"
    ],
    "Resource": "arn:aws:events:*:*:rule/AwsDataLifecycleRule.managed-
cwe.*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ssm:GetCommandInvocation",
        "ssm:ListCommands",
        "ssm:DescribeInstanceInformation"
    ],
    "Resource": "*"
},

```

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "ssm:SendCommand",
    "ssm:DescribeDocument",
    "ssm:GetDocument"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:ssm:*:*:document/*"
  ],
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "aws:ResourceTag/DLMScriptsAccess": "true"
    }
  }
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "ssm:SendCommand",
    "ssm:DescribeDocument",
    "ssm:GetDocument"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:ssm:*:*:document/*"
  ]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "ssm:SendCommand"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:ec2:*:*:instance/*"
  ],
  "Condition": {
    "StringNotLike": {
      "aws:ResourceTag/DLMScriptsAccess": "false"
    }
  }
}
]
```


- AMI ライフサイクルポリシーを管理するためのアクセス許可

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateTags",
      "Resource": [
        "arn:aws:ec2:*::snapshot/*",
        "arn:aws:ec2:*::image/*"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:DescribeImages",
        "ec2:DescribeInstances",
        "ec2:DescribeImageAttribute",
        "ec2:DescribeVolumes",
        "ec2:DescribeSnapshots"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2>DeleteSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:ResetImageAttribute",
        "ec2:DeregisterImage",
        "ec2:CreateImage",
        "ec2:CopyImage",
        "ec2:ModifyImageAttribute"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```

        "ec2:EnableImageDeprecation",
        "ec2:DisableImageDeprecation"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:*::image/*"
}
]
}

```

詳細については、IAM ユーザーガイドの [ロールの作成](#) を参照してください。

2. ロールに信頼関係を追加します。
 - a. IAM コンソールで、[ロール] を選択します。
 - b. 作成したロールを選択し、信頼関係を選択します。
 - c. [信頼関係の編集] を選択して、次のポリシーを追加し、[信頼ポリシーの更新] を選択します。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "Service": "d1m.amazonaws.com"
    },
    "Action": "sts:AssumeRole"
  }]
}

```

[Confused Deputy Problem \(混乱した使節の問題\)](#) から自分を守るため

に、aws:SourceAccount および aws:SourceArn の条件キーを使用することをお勧めします。例えば、前述の信頼ポリシーに次の条件ブロックを追加できます。aws:SourceAccount は、ライフサイクルポリシーの所有者であり、aws:SourceArn は、ライフサイクルポリシーの ARN です。ライフサイクルポリシー ID が不明である場合は、ARN のその部分にワイルドカード (*) を選択することができ、ライフサイクルポリシーを作成後に信頼ポリシーを更新します。

```

"Condition": {
  "StringEquals": {
    "aws:SourceAccount": "account_id"
  },

```

```

    "ArnLike": {
      "aws:SourceArn": "arn:partition:dml:region:account_id:policy/policy_id"
    }
  }
}

```

ユーザーのアクセス許可

ユーザーが Amazon Data Lifecycle Manager を使用するには、次の許可が必要です。

Note

- `ec2:DescribeAvailabilityZones`、`ec2:DescribeRegions`、`kms:ListAliases`、および `kms:DescribeKey` 許可は、コンソールユーザーにのみ必要です。コンソールへのアクセスが不要な場合は、許可を削除できます。
- `AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` ロールの ARN 形式は、コンソールを使用して作成されたか、を使用して作成されたかによって異なります。AWS CLI コンソールを使用してロールが作成された場合、ARN 形式は `arn:aws:iam::account_id:role/service-role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` です。ロールがを使用して作成された場合 AWS CLI、ARN 形式は次のようになります。 `arn:aws:iam::account_id:role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` 次のポリシーは、ロールがを使用して作成されたことを前提としています。AWS CLI

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "dml:*",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "iam:PassRole",
      "Resource": [
        "arn:aws:iam::account_id:role/service-role/AWSDataLifecycleManagerDefaultRole",

```

```
        "arn:aws:iam::account_id:role/service-role/  
AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement"  
    ],  
    {  
        "Effect": "Allow",  
        "Action": "iam:ListRoles",  
        "Resource": "*"   
    },  
    {  
        "Effect": "Allow",  
        "Action": [  
            "ec2:DescribeAvailabilityZones",  
            "ec2:DescribeRegions",  
            "kms:ListAliases",  
            "kms:DescribeKey"  
        ],  
        "Resource": "*"   
    }  
  ]  
}
```

詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー許可の変更](#)」を参照してください。

暗号化のアクセス許可

Amazon Data Lifecycle Manager および暗号化されたリソースを操作する場合は、次の点を考慮してください。

- ソースボリュームが暗号化されている場合は、Amazon Data Lifecycle Manager のデフォルトロール (AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleとAWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement) に、ボリュームの暗号化に使用される KMS キーを使用する権限があることを確認してください。
- 暗号化されていないスナップショット、または暗号化されていないスナップショットによってバックアップされた AMI に対するクロスリージョンコピーを有効にし、送信先リージョンで暗号化を有効にする場合は、デフォルトのロールに、送信先リージョンで暗号化を実行するのに必要な KMS キーを使用するためのアクセス権限があることを確認してください。
- 暗号化されたスナップショット、または暗号化されたスナップショットによってバックアップされた AMI に対してクロスリージョンコピーを有効にする場合は、デフォルトのロールに、送信元および送信先の両方の KMS キーを使用するためのアクセス権限があることを確認してください。

- 暗号化されたスナップショットのスナップショットアーカイブを有効にする場合は、Amazon Data Lifecycle Manager のデフォルトロール () に、スナップショットの暗号化に使用される KMS `AWSDataLifecycleManagerDefaultRole` キーを使用する権限があることを確認してください。

詳細については、AWS Key Management Service デベロッパーガイドの[他のアカウントのユーザーに KMS キーの使用を許可する](#)をご参照ください。

スナップショットと AMI のライフサイクルのモニタリング

次の機能を使用して、スナップショットと AMI のライフサイクルをモニタリングできます。

機能

- [コンソールと AWS CLI](#)
- [AWS CloudTrail](#)
- [CloudWatch イベントを使用してポリシーを監視できます。](#)
- [Amazon を使用してポリシーを監視する CloudWatch](#)

コンソールと AWS CLI

ライフサイクルポリシーは、Amazon EC2 コンソールまたは AWS CLI を使用して表示できます。ポリシーによって作成された各スナップショットと AMI には、タイムスタンプとポリシー関連のタグがあります。タグを使用してスナップショットと AMI をフィルタリングして、意図したとおりにバックアップが作成されていることを確認できます。コンソールを使用したライフサイクルポリシーの表示の詳細については、[ライフサイクルポリシーの表示](#)を参照してください。

AWS CloudTrail

を使用すると AWS CloudTrail、ユーザーアクティビティと API の使用状況を追跡して、内部ポリシーや規制基準への準拠を証明できます。詳細については、『[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)』を参照してください。

CloudWatch イベントを使用してポリシーを監視できます。

Amazon EBS と Amazon Data Lifecycle Manager は、ライフサイクルポリシーアクションに関するイベントを発行します。Amazon Events を使用すると AWS Lambda、CloudWatch イベント通知

をプログラムで処理できます。イベントは、ベストエフォートベースで発生します。詳細については、[Amazon CloudWatch Events ユーザーガイドを参照してください](#)。

利用できるイベントは次のとおりです。

Note

AMI ライフサイクルポリシーアクションでは、イベントは発生しません。

- createSnapshot – CreateSnapshot アクションが成功または失敗したときに発生する Amazon EBS イベント。詳細については、「[Amazon EventBridge フォー Amazon EBS](#)」を参照してください。
- DLM Policy State Change – ライフサイクルポリシーがエラー状態になったときに発生する Amazon Data Lifecycle Manager イベント。このイベントには、エラーを引き起こした原因の説明が含まれています。

次に、IAM ロールによって付与されたアクセス権限が不十分な場合のイベントの例を示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
  "detail-type": "DLM Policy State Change",
  "source": "aws.dlm",
  "account": "123456789012",
  "time": "2018-05-25T13:12:22Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dlm:us-east-1:123456789012:policy/policy-0123456789abcdef"
  ],
  "detail": {
    "state": "ERROR",
    "cause": "Role provided does not have sufficient permissions",
    "policy_id": "arn:aws:dlm:us-east-1:123456789012:policy/policy-0123456789abcdef"
  }
}
```

制限を超えた場合のイベントの例を次に示します。

```
{
```

```
"version": "0",
"id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
"detail-type": "DLM Policy State Change",
"source": "aws.dlm",
"account": "123456789012",
"time": "2018-05-25T13:12:22Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "arn:aws:dlm:us-east-1:123456789012:policy/policy-0123456789abcdef"
],
"detail":{
  "state": "ERROR",
  "cause": "Maximum allowed active snapshot limit exceeded",
  "policy_id": "arn:aws:dlm:us-east-1:123456789012:policy/
policy-0123456789abcdef"
}
}
```

- DLM Pre Post Script Notification – 事前スクリプトまたは事後スクリプトが開始、成功、または失敗したときに発生するイベント。

VSS バックアップが成功した場合のイベントの例を示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "12345678-1234-1234-1234-123456789012",
  "detail-type": "DLM Pre Post Script Notification",
  "source": "aws.dlm",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-10-27T22:04:52Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": ["arn:aws:dlm:us-east-1:123456789012:policy/
policy-01234567890abcdef"],
  "detail": {
    "script_stage": "",
    "result": "success",
    "cause": "",
    "policy_id": "arn:aws:dlm:us-east-1:123456789012:policy/
policy-01234567890abcdef",
    "execution_handler": "AWS_VSS_BACKUP",
    "source": "arn:aws:ec2:us-east-1:123456789012:instance/i-01234567890abcdef",
    "resource_type": "EBS_SNAPSHOT",
    "resources": [{
```

```
        "status": "pending",
        "resource_id": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-01234567890abcdef",
        "source": "arn:aws:ec2:us-east-1:123456789012:volume/
vol-01234567890abcdef"
    }],
    "request_id": "a1b2c3d4-a1b2-a1b2-a1b2-a1b2c3d4e5f6",
    "start_time": "2023-10-27T22:03:29.370Z",
    "end_time": "2023-10-27T22:04:51.370Z",
    "timeout_time": ""
}
}
```

Amazon を使用してポリシーを監視する CloudWatch

Amazon Data Lifecycle Manager のライフサイクルポリシーは CloudWatch、未加工データを収集し、読み取り可能なほぼリアルタイムのメトリクスに処理することでモニタリングできます。これらのメトリクスを使用して、ポリシーによって作成、削除、コピーされた Amazon EBS スナップショットと EBS Backed AMI の数を正確に把握できます。また、特定のしきい値をモニタリングするアラームを設定し、しきい値に達したときに通知を送信したりアクションを実行したりできます。

メトリクスは 15 か月間保持されるため、履歴情報にアクセスして長期間にわたるライフサイクルポリシーのパフォーマンスをよりの確に把握できます。

Amazon の詳細については CloudWatch、[Amazon CloudWatch ユーザーガイドを参照してください](#)。

トピック

- [サポートされるメトリクス](#)
- [CloudWatch ポリシーのメトリクスを表示します。](#)
- [ポリシーのグラフメトリクス](#)
- [CloudWatch ポリシーのアラームを作成します。](#)
- [ユースケースの例](#)
- [失敗したアクションを報告するポリシーの管理](#)

サポートされるメトリクス

Data Lifecycle Manager 名前空間には、Amazon Data Lifecycle Manager ライフサイクルポリシーの以下のメトリクスが含まれます。サポートされるメトリクスは、ポリシータイプによって異なります。

すべてのメトリクスは、DLMPolicyId デイメンションで測定できます。最も有用な統計データは sum と average、そして測定単位は count です。

タブを選択すると、そのポリシータイプでサポートされているメトリクスが表示されます。

EBS snapshot policies

メトリクス	説明
Resources Targeted	スナップショットまたは EBS-backed AMI ポリシーで指定されたタグがターゲットとするリソースの数。
Snapshots CreateStarted	スナップショットポリシーによって開始されたスナップショット作成アクションの数。後続の再試行が複数ある場合でも、各アクションは 1 回だけ記録されます。 スナップショット作成アクションが失敗すると、Amazon Data Lifecycle Manager は SnapshotsCreateFailed メトリクスを送信します。
Snapshots CreateCompleted	スナップショットポリシーにより作成されたスナップショットの数。これには、スケジュールされた時刻から 60 分以内に成功した再試行が含まれます。
Snapshots CreateFailed	スナップショットポリシーにより作成できなかったスナップショットの数。これには、スケジュールされた時刻から 60 分以内に失敗した再試行が含まれます。
Snapshots SharedCompleted	スナップショットポリシーによってアカウント間で共有されたスナップショットの数。

メトリクス	説明
Snapshots DeleteCompleted	<p>スナップショットポリシーまたは EBS-backed AMI ポリシーにより削除されたスナップショットの数。このメトリクスは、ポリシーによって作成されたスナップショットにのみ適用されます。このポリシーは、ポリシーによって作成されたクロスリージョンスナップショットコピーには適用されません。</p> <p>このメトリクスには、EBS-backed AMI ポリシーが AMI の登録を解除したときに削除されるスナップショットが含まれます。</p>
Snapshots DeleteFailed	<p>スナップショットポリシーまたは EBS-backed AMI ポリシーにより削除できなかったスナップショットの数。このメトリクスは、ポリシーによって作成されたスナップショットにのみ適用されます。このポリシーは、ポリシーによって作成されたクロスリージョンスナップショットコピーには適用されません。</p> <p>このメトリクスには、EBS-backed AMI ポリシーが AMI の登録を解除したときに削除されるスナップショットが含まれます。</p>
Snapshots CopiedRegionStarted	<p>スナップショットポリシーによって開始されたクロスリージョンスナップショットコピーアクションの数。</p>
Snapshots CopiedRegionCompleted	<p>スナップショットポリシーによって作成されたクロスリージョンスナップショットコピーの数。これには、スケジュールされた時刻から 24 時間以内に成功した再試行が含まれます。</p>
Snapshots CopiedRegionFailed	<p>スナップショットポリシーにより作成できなかったクロスリージョンスナップショットコピーの数。これには、スケジュールされた時刻から 24 時間以内に失敗した再試行が含まれます。</p>
Snapshots CopiedRegionDeleteCompleted	<p>スナップショットポリシーによって削除された、保持ルールで指定されたクロスリージョンスナップショットコピーの数。</p>

メトリクス	説明
Snapshots CopiedRegionDeleteFailed	スナップショットポリシーにより、保持ルールで指定された削除できなかったクロスリージョンのスナップショットコピーの数。
snapshots ArchiveDeletionFailed	スナップショットポリシーによりアーカイブ層から削除できなかったアーカイブ済みスナップショットの数。
snapshots ArchiveScheduled	スナップショットポリシーによりアーカイブが予定されているスナップショットの数。
snapshots ArchiveCompleted	スナップショットポリシーによりアーカイブが正常に行われたスナップショットの数。
snapshots ArchiveFailed	スナップショットポリシーによりアーカイブできなかったスナップショットの数。
snapshots ArchiveDeletionCompleted	スナップショットポリシーによりアーカイブ層から正常に削除できたアーカイブ済みスナップショットの数。
PreScript Started	<p>事前スクリプトが正常に開始されたインスタンスの数。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>
PreScript Completed	<p>事前スクリプトが正常に完了したインスタンスの数。事前スクリプトが指定したタイムアウト期間外に完了した場合でも、メトリクスは出力されます。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>

メトリクス	説明
PreScriptFailed	<p>事前スクリプトが正常に完了しなかったインスタンスの数。事前スクリプトが指定したタイムアウト期間外に完了した場合でも、メトリクスは出力されます。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>
PostScriptStarted	<p>ポストスクリプトが正常に開始されたインスタンスの数。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>
PostScriptCompleted	<p>ポストスクリプトが正常に完了したインスタンスの数。事後スクリプトが指定したタイムアウト期間外に完了した場合でも、メトリクスは出力されます。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>
PostScriptFailed	<p>事後スクリプトが正常に完了しなかったインスタンスの数。事後スクリプトが指定したタイムアウト期間外に完了した場合でも、メトリクスは出力されます。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>
VSSBackupStarted	<p>VSS バックアップが正常に開始されたインスタンスの数。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>
VSSBackupCompleted	<p>VSS バックアップが正常に完了したインスタンスの数。VSS バックアップがタイムアウト期間外に完了した場合でも、メトリクスは出力されます。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>

メトリクス	説明
VSSBackup Failed	<p>VSS バックアップが正常に完了しなかったインスタンスの数。VSS バックアップがタイムアウト期間外に完了した場合でも、メトリクスは出力されます。</p> <p>スクリプトの再試行が有効になっている場合、このメトリクスはポリシー実行ごとに複数回出力される可能性があります。</p>

EBS-backed AMI policies

EBS-backed AMI ポリシーでは、次のメトリクスを使用できます。

メトリクス	説明
Resources Targeted	<p>スナップショットまたは EBS-backed AMI ポリシーで指定されたタグがターゲットとするリソースの数。</p>
Snapshots DeleteCompleted	<p>スナップショットポリシーまたは EBS-backed AMI ポリシーにより削除されたスナップショットの数。このメトリクスは、ポリシーによって作成されたスナップショットにのみ適用されます。このポリシーは、ポリシーによって作成されたクロスリージョンスナップショットコピーには適用されません。</p> <p>このメトリクスには、EBS-backed AMI ポリシーが AMI の登録を解除したときに削除されるスナップショットが含まれます。</p>
Snapshots DeleteFailed	<p>スナップショットポリシーまたは EBS-backed AMI ポリシーにより削除できなかったスナップショットの数。このメトリクスは、ポリシーによって作成されたスナップショットにのみ適用されます。このポリシーは、ポリシーによって作成されたクロスリージョンスナップショットコピーには適用されません。</p> <p>このメトリクスには、EBS-backed AMI ポリシーが AMI の登録を解除したときに削除されるスナップショットが含まれます。</p>

メトリクス	説明
Snapshots CopiedRegionDelete Completed	スナップショットポリシーによって削除された、保持ルールで指定されたクロスリージョンスナップショットコピーの数。
Snapshots CopiedRegionDelete Failed	スナップショットポリシーにより、保持ルールで指定された削除できなかったクロスリージョンのスナップショットコピーの数。
ImagesCreateStarted	EBS ベースの CreateImageAMI ポリシーによって開始されたアクションの数。
ImagesCreateCompleted	EBS-backed AMI ポリシーによって作成された AMI の数。
ImagesCreateFailed	EBS-backed AMI ポリシーによって作成できなかった AMI の数。
ImagesDeregisterCompleted	EBS-backed AMI ポリシーによって登録解除された AMI の数。
ImagesDeregisterFailed	EBS-backed AMI ポリシーによって登録解除できなかった AMI の数。
ImagesCopiedRegionStarted	EBS-backed AMI ポリシーによって開始されたクロスリージョンコピーアクションの数。

メトリクス	説明
ImagesCopiedRegionCompleted	EBS-Backed AMI ポリシーによって作成されたクロスリージョン AMI コピーの数。
ImagesCopiedRegionFailed	EBS-backed AMI ポリシーによって作成できなかったクロスリージョン AMI コピーの数。
ImagesCopiedRegionDeregisterCompleted	EBS-backed AMI ポリシーによって保持ルールで指定された、登録解除されたクロスリージョン AMI コピーの数。
ImagesCopiedRegionDeregisterFailed	EBS-backed AMI ポリシーによって登録解除できなかった、保持ルールで指定されたクロスリージョン AMI コピーの数。
EnableImageDeprecationCompleted	EBS-backed AMI ポリシーによって非推奨としてマークされた AMI の数。
EnableImageDeprecationFailed	EBS-backed AMI ポリシーによって非推奨としてマークされなかった AMI の数。
EnableCopiedImageDeprecationCompleted	EBS-Backed AMI ポリシーによって非推奨としてマークされたクロスリージョン AMI コピーの数。

メトリクス	説明
EnableCopiedImageDeprecationFailed	グリッドでポリシーを選択し、Monitoringタブを選びます。EBSでサポートされているAMIポリシーによって非推奨としてマークされなかったクロスリージョンAMIコピーの数。

Cross-account copy event policies

クロスアカウントコピーイベントポリシーでは、以下のメトリクスを使用できます。

メトリクス	説明
SnapshotsCopiedAccountStarted	クロスアカウントコピーイベントポリシーによって開始された、クロスアカウントスナップショットコピーアクションの数。
SnapshotsCopiedAccountCompleted	クロスアカウントコピーイベントポリシーによって別のアカウントからコピーされたスナップショットの数。これには、スケジュールされた時刻から 24 時間以内に成功した再試行が含まれます。
SnapshotsCopiedAccountFailed	クロスアカウントコピーイベントポリシーによって別のアカウントからコピーできなかったスナップショットの数。これには、スケジュールされた時刻から 24 時間以内に失敗した再試行が含まれます。
SnapshotsCopiedAccountDeleteCompleted	クロスアカウントのコピーイベントポリシーによって、保持ルールで指定された削除されたクロスリージョンスナップショットコピーの数。
SnapshotsCopiedAccountDeleteFailed	クロスアカウントのコピーイベントポリシーによって、保持ルールで指定された削除できなかったクロスリージョンスナップショットコピーの数。

メトリクス	説明
ountDelet eFailed	

CloudWatch ポリシーのメトリクスを表示します。

AWS Management Console またはコマンドラインツールを使用して、Amazon Data Lifecycle Manager が Amazon に送信するメトリクスを一覧表示できます CloudWatch。

Amazon EC2 console

Amazon EC2 コンソールを使用してメトリクスを表示するには

1. Amazon EC2 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/ec2/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで Lifecycle Manager を選択します。
3. グリッドでポリシーを選択し、モニタリングタブを選びます。

CloudWatch console

Amazon CloudWatch コンソールを使用してメトリクスを表示するには

1. <https://console.aws.amazon.com/cloudwatch/> CloudWatch でコンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで [メトリクス] を選択します。
3. [EBS] 名前空間を選択し、[Data Lifecycle Manager metrics] (Data Lifecycle Manager メトリクス) を選択します。

AWS CLI

Amazon Data Lifecycle Manager で利用可能なメトリクスをすべて表示するには

[list-metrics](#) コマンドを使用します。

```
$ C:\> aws cloudwatch list-metrics \  
--namespace AWS/EBS
```

特定のポリシーのすべてのメトリクスを表示するには

[list-metrics](#) コマンドを使用して、DLMPolicyId デイメンションを指定します。

```
$ C:\> aws cloudwatch list-metrics \  
  --namespace AWS/EBS \  
  --dimensions Name=DLMPolicyId,Value=policy-abcdef01234567890
```

すべてのポリシーにわたって単一のメトリクスを表示するには

[list-metrics](#) コマンドを使用して、`--metric-name` オプションを指定します。

```
$ C:\> aws cloudwatch list-metrics \  
  --namespace AWS/EBS \  
  --metric-name SnapshotsCreateCompleted
```

ポリシーのグラフメトリクス

ポリシーの作成が完了したら、Amazon EC2 コンソールを開いて、Monitoring タブにポリシーのモニタリンググラフを表示できます。各グラフは、利用可能な Amazon EC2 メトリクスのいずれかに基づいています。

以下のグラフが利用可能です：

- ターゲットとなるリソース (ResourcesTargetedに基づく)
- スナップショットの作成が開始されました (SnapshotsCreateStarted)
- スナップショットの作成が完了しました (SnapshotsCreateCompletedに基づく)
- スナップショットの作成に失敗しました (SnapshotsCreateFailedに基づく)
- スナップショットの共有が完了しました (SnapshotsSharedCompletedに基づく)
- スナップショットの削除が完了しました (SnapshotsDeleteCompletedに基づく)
- スナップショットの削除に失敗しました (SnapshotsDeleteFailedに基づく)
- スナップショットのクロスリージョンコピーが開始されました (SnapshotsCopiedRegionStartedに基づく)
- スナップショットのクロスリージョンコピーが完了しました (SnapshotsCopiedRegionCompletedに基づく)
- スナップショットのクロスリージョンコピーに失敗しました (SnapshotsCopiedRegionFailedに基づく)

- スナップショットのクロスリージョンコピーの削除が完了しました (SnapshotsCopiedRegionDeleteCompletedに基づく)
- スナップショットのクロスリージョンコピーの削除に失敗しました (SnapshotsCopiedRegionDeleteFailedに基づく)
- スナップショットのクロスアカウントコピーが開始されました (SnapshotsCopiedAccountStartedに基づく)
- スナップショットのクロスアカウントコピーが完了しました (SnapshotsCopiedAccountCompletedに基づく)
- スナップショットのクロスアカウントコピーに失敗しました (SnapshotsCopiedAccountFailedに基づく)
- スナップショットのクロスアカウントコピーの削除が完了しました (SnapshotsCopiedAccountDeleteCompletedに基づく)
- スナップショットのクロスアカウントコピーの削除に失敗しました (SnapshotsCopiedAccountDeleteFailedに基づく)
- AMI の作成が開始されました (ImagesCreateStartedに基づく)
- AMI の作成が完了しました (ImagesCreateCompletedに基づく)
- AMI の作成に失敗しました (ImagesCreateFailedに基づく)
- AMI の登録解除が完了しました (ImagesDeregisterCompletedに基づく)
- AMI の登録解除に失敗しました (ImagesDeregisterFailedに基づく)
- AMI のクロスリージョンコピーを開始 (ImagesCopiedRegionStartedに基づく)
- AMI のクロスリージョンコピーが完了しました (ImagesCopiedRegionCompletedに基づく)
- AMI のクロスリージョンコピーに失敗しました (ImagesCopiedRegionFailedに基づく)
- AMI のクロスリージョンコピーの登録解除が完了しました (ImagesCopiedRegionDeregisterCompletedに基づく)
- AMI のクロスリージョンコピーの登録解除に失敗しました (ImagesCopiedRegionDeregisteredFailedに基づく)
- AMI の有効化の廃止が完了しました (EnableImageDeprecationCompletedに基づく)
- AMI の有効化の廃止に失敗しました (EnableImageDeprecationFailedに基づく)
- AMI クロスリージョンコピーの有効化の廃止が完了しました (EnableCopiedImageDeprecationCompletedに基づく)
- AMI クロスリージョンコピーの有効化の廃止に失敗しました (EnableCopiedImageDeprecationFailedに基づく)

CloudWatch ポリシーのアラームを作成します。

CloudWatch CloudWatch ポリシーのメトリックスを監視するアラームを作成できます。CloudWatch メトリクスが指定したしきい値に達すると、自動的に通知が送信されます。CloudWatch CloudWatch コンソールを使用してアラームを作成できます。

CloudWatch コンソールを使用してアラームを作成する方法の詳細については、Amazon CloudWatch ユーザーガイドの以下のトピックを参照してください。

- [CloudWatch 静的しきい値に基づいてアラームを作成する](#)
- [CloudWatch 異常検出に基づくアラームの作成](#)

ユースケースの例

ユースケースの例を次に示します。

トピック

- [例 1: メトリクス ResourcesTargeted](#)
- [例 2: SnapshotDeleteFailed メトリック](#)
- [例 3: SnapshotsCopiedRegionFailed メトリック](#)

例 1: メトリクス ResourcesTargeted

ResourcesTargeted メトリクスを使って、特定のポリシーが実行されるたびに対象となるリソースの総数をモニタリングすることができます。これにより、ターゲットリソースの数が予想されるしきい値を下回ったり上回ったりしたときにアラームをトリガーできます。

例えば、日時ポリシーで 50 個以下のボリュームのバックアップを作成することを想定している場合、1 時間の間に ResourcesTargeted の sum が 50 より大きくなったときにメールで通知するアラームを作成することができます。これにより、誤ってタグ付けされたボリュームからスナップショットが予期せず作成されないようにすることができます。

以下のコマンドを使用して、このアラームを作成できます。

```
$ C:\> aws cloudwatch put-metric-alarm \  
  --alarm-name resource-targeted-monitor \  
  --alarm-description "Alarm when policy targets more than 50 resources" \  
  --metric-name ResourcesTargeted \  
  --namespace AWS/EBS \  
  --period 3600 \  
  --evaluation-periods 2 \  
  --threshold 50 \  
  --comparison-operator GreaterThan \  
  --actions sns:SendMessage --action-arn arn:aws:sns:us-east-1:123456789012:my-topic
```

```
--statistic Sum \  
--period 3600 \  
--threshold 50 \  
--comparison-operator GreaterThanThreshold \  
--dimensions "Name=DLMPolicyId,Value=policy_id" \  
--evaluation-periods 1 \  
--alarm-actions sns_topic_arn
```

例 2: SnapshotDeleteFailed メトリック

この SnapshotDeleteFailed メトリクスを使用して、ポリシーのスナップショット保持ルールに従ってスナップショットを削除する際の失敗をモニタリングできます。

例えば、12 時間ごとにスナップショットを自動的に削除するポリシーを作成した場合、1 時間の間に SnapshotDeletionFailed の sum が 0 より大きくなったときにエンジニアリングチームに通知するアラームを作成することができます。これにより、不適切なスナップショットの保持を調査し、不要なスナップショットによってストレージコストが増加しないようにすることができます。

以下のコマンドを使用して、このアラームを作成できます。

```
$ C:\> aws cloudwatch put-metric-alarm \  
--alarm-name snapshot-deletion-failed-monitor \  
--alarm-description "Alarm when snapshot deletions fail" \  
--metric-name SnapshotsDeleteFailed \  
--namespace AWS/EBS \  
--statistic Sum \  
--period 3600 \  
--threshold 0 \  
--comparison-operator GreaterThanThreshold \  
--dimensions "Name=DLMPolicyId,Value=policy_id" \  
--evaluation-periods 1 \  
--alarm-actions sns_topic_arn
```

例 3: SnapshotsCopiedRegionFailed メトリック

SnapshotsCopiedRegionFailed メトリクスを使用して、ポリシーが他のリージョンへのスナップショットのコピーに失敗した場合を特定します。

例えば、ポリシーによりリージョン間でスナップショットを毎日コピーしている場合、1 時間の間に SnapshotCrossRegionCopyFailed の sum が 0 より大きくなったときにエンジニアリングチームに SMS を送信するアラームを作成することができます。これは、系統内の後続のスナップショットがポリシーによって正常にコピーされたかどうかを検証する場合に便利です。

以下のコマンドを使用して、このアラームを作成できます。

```
$ C:\> aws cloudwatch put-metric-alarm \  
  --alarm-name snapshot-copy-region-failed-monitor \  
  --alarm-description "Alarm when snapshot copy fails" \  
  --metric-name SnapshotsCopiedRegionFailed \  
  --namespace AWS/EBS \  
  --statistic Sum \  
  --period 3600 \  
  --threshold 0 \  
  --comparison-operator GreaterThanThreshold \  
  --dimensions "Name=DLMPolicyId,Value=policy_id" \  
  --evaluation-periods 1 \  
  --alarm-actions sns_topic_arn
```

失敗したアクションを報告するポリシーの管理

ポリシーの1つで、失敗したアクションメトリックスについて予期しない0以外の値が報告された場合の対処方法の詳細については、「[Amazon Data Lifecycle Manager CloudWatch がメトリックスで失敗したアクションを報告した場合はどうすればよいですか?](#)」を参照してください。AWS ナレッジセンターの記事。

トラブルシューティング

以下のドキュメントは、発生する可能性のある問題のトラブルシューティングに役立ちます。

トピック

- [エラー: Role with name already exists](#)

エラー: Role with name already exists

説明

コンソールを使用してポリシーを作成しようとしたときに、Role with name AWSDataLifecycleManagerDefaultRole already exists または Role with name AWSDataLifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement already exists エラーが発生します。

原因

デフォルトロールの ARN 形式は、コンソールまたは AWS CLIのどちらを使用して作成されたかによって異なります。ARN は異なりますが、ロールは同じロール名を使用するため、コンソールと AWS CLIでロール名の競合が発生します。

ソリューション

この問題を解決するには、次の操作を行います。

1. (プレスクリプトとポストスクリプトでのみ有効になっているスナップショットポリシーの場合) `AWSDatalifecycleManagerSSMFullAccess` AWS 管理ポリシーを `AWSDatalifecycleManagerDefaultRoleIAM` ロールに手動でアタッチします。詳細については、「[IAM アイデンティティのアクセス許可の追加](#)」を参照してください。
2. Amazon Data Lifecycle Manager ポリシーを作成するときに、[IAM ロール] で [別のロールを選択] を選択し、`AWSDatalifecycleManagerDefaultRole`(スナップショットポリシーの場合) または `AWSDatalifecycleManagerDefaultRoleForAMIManagement`(AMI ポリシーの場合) を選択します。
3. 引き続き、通常どおりポリシーを作成します。

EBS direct API を使用して EBS スナップショットの内容にアクセスする

Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) direct API を使用して、EBS スナップショットの作成、スナップショットへのデータの直接書き込み、スナップショットのデータの読み取り、2つのスナップショット間の違いや変更の特定を行うことができます。Amazon EBS のバックアップサービスを提供する独立系ソフトウェアベンダー (ISV) の場合は、EBS direct API を使用すると、スナップショットを介して EBS ボリュームの増分変更の追跡を効率化し、費用対効果を高めることができます。これを行うために、スナップショットから新しいボリュームを作成したり、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスを使用して違いを比較したりする必要はありません。

増分スナップショットは、オンプレミスのデータから EBS ボリュームやクラウド内に直接作成し、迅速な災害対策に使用できます。災害が発生した場合は、スナップショットの読み書き機能を使用して、オンプレミスのデータを EBS スナップショットに書き込むことができます。災害からの復旧後に、スナップショットから AWS またはオンプレミスにデータを回復できます。Amazon EBS との間でデータをコピーする複雑なメカニズムを構築して維持する必要はなくなりました。

このユーザーガイドでは、EBS direct API を構成する要素に関する概要と、これらの要素を効果的に使用方法の例を示します。API のアクション、データ型、パラメータ、エラーの詳細については、[EBS direct API リファレンス](#)を参照してください。EBS direct API でサポートされる AWS リージョン、エンドポイント、Service Quotas の詳細については、「AWS 全般のリファレンス」の「[Amazon EBS エンドポイントとクォータ](#)」を参照してください。

コンテンツ

- [EBS direct API について](#)
- [EBS ダイレクト API 用の IAM アクセス許可](#)
- [EBS direct API を使用する](#)
- [EBS direct API の料金](#)
- [EBS direct API でインターフェイス VPC エンドポイントを使用する](#)
- [AWS CloudTrail による EBS direct API の API コールのログ記録](#)
- [よくある質問](#)

EBS direct API について

EBS direct API の使用を開始する前に、以下の主要要素を理解しておく必要があります。

スナップショット

スナップショットは、EBS ボリュームからデータをバックアップするための主な手段です。EBS direct API では、オンプレミスのディスクからスナップショットにデータをバックアップすることもできます。ストレージコストを節約するために、連続するスナップショットは増分で、以前のスナップショット以降に変更されたボリュームデータのみが含まれています。詳細については、「[Amazon EBS スナップショット](#)」を参照してください。

Note

EBS direct API は Outposts のパブリックスナップショットとローカルスナップショットをサポートしていません。

ブロック

ブロックは、スナップショット内のデータのフラグメントです。各スナップショットには、何千ものブロックを含めることができます。スナップショット内のすべてのブロックは固定サイズです。

ブロックインデックス

ブロックインデックスは、512 KiB ブロック単位の論理インデックスです。ブロックインデックスを識別するには、論理ボリューム内のデータの論理オフセットをブロックサイズで除算します (データの論理オフセット/524288)。データの論理オフセットは 512 KiB に整合させる必要があります。

ブロックトークン

ブロックトークンは、スナップショット内のブロックの識別ハッシュであり、ブロックデータの検索に使用されます。EBS direct API から返されるブロックトークンは一時的なものです。ブロックトークンは、これらのトークンに指定された有効期限のタイムスタンプに応じて変更されるか、同じスナップショットに対して別の ListSnapshotBlocks リクエストや ListChangedBlocks リクエストを実行した場合に変更されます。

チェックサム

チェックサムは、送信中や保存中に発生したエラーを検出するために、データのブロックから派生される小さいサイズのデータです。EBS direct API は、チェックサムを使用してデータの整合性を検

証します。EBS スナップショットからデータを読み取る際に、送信されるデータブロックごとに Base64 でエンコードされた SHA256 チェックサムがサービスから提供されます。このチェックサムを使用してデータを検証できます。EBS スナップショットにデータを書き込むときは、送信するデータのブロックごとに Base64 でエンコードした SHA256 チェックサムを提供する必要があります。サービスは、提供されたチェックサムを使用して、受信したデータを検証します。詳細については、このガイドで後述する [チェックサムの使用](#) を参照してください。

暗号化

暗号化は、データを読み取り不可能なコードに変換することで、データを保護します。このコードは、暗号化に使用された KMS キー にアクセスできるユーザーのみが解読できます。暗号化されたスナップショットは、EBS direct API を使用して読み書きできますが、いくつかの制限があります。詳細については、このガイドで後述する [暗号化の使用](#) を参照してください。

API アクション

EBS direct API は、6 つのアクションで構成されています。3 つは読み取りアクションであり、他の 3 つは書き込みアクションです。読み取りアクションは以下のとおりです。

- ListSnapshotBlocks – 指定されたスナップショット内のブロックから、ブロックインデックスとブロックトークンを返します。
- ListChangedBlocks – 同じボリュームとスナップショット系列の 2 つの指定されたスナップショットのブロック間で異なる、ブロックインデックスとブロックトークンを返します。
- GetSnapshotBlock – 指定されたスナップショット ID、ブロックインデックス、ブロックトークンに対応するブロックのデータを返します。

書き込みアクションは以下のとおりです。

- StartSnapshot – 既存のスナップショットの増分スナップショット、あるいは新しいスナップショットとしてスナップショットを開始します。開始済みスナップショットは、CompleteSnapshot アクションを使用して完了するまで、保留状態となります。
- PutSnapshotBlock – 開始済みスナップショットに、個別のブロックとしてデータを追加します。データのブロックを送信する際に、Base64 でエンコードした SHA256 チェックサムを指定する必要があります。送信が完了すると、このチェックサムがサービスによって検証されます。サービスが計算したチェックサムと指定したチェックサムが一致しない場合、リクエストは失敗します。
- CompleteSnapshot – 保留状態にある開始済みスナップショットを完了します。これにより、スナップショットは完了状態に変更されます。

EBS ダイレクト API 用の IAM アクセス許可

ユーザーが EBS direct API を使用するためには、次のポリシーが必要です。詳細については、「[ユーザー許可の変更](#)」を参照してください。

EBS ダイレクト API リソース、アクション、条件コンテキストキーの IAM アクセス許可ポリシーでの使用については、サービス認証リファレンスの[Actions, resources, and condition keys for Amazon Elastic Block Store](#)を参照してください。

Important

以下のポリシーをユーザーに割り当てる際には注意が必要です。これらのポリシーを割り当てることで、Amazon EC2 API (CopySnapshot アクションや CreateVolume アクションなど) を介して、同じリソースへのアクセスが拒否されているユーザーにアクセスが許可される場合があります。

スナップショットを読み取るためのアクセス許可

次のポリシーでは、特定の AWS リージョンにおいて、すべてのスナップショットに対する読み込み EBS direct API の使用を許可します。このポリシーで、**<Region>** はスナップショットのリージョンに置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ebs:ListSnapshotBlocks",
        "ebs:ListChangedBlocks",
        "ebs:GetSnapshotBlock"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:<Region>::snapshot/*"
    }
  ]
}
```

次のポリシーでは、特定のキーと値のタグを持つスナップショットに対する読み取り EBS direct API の使用を許可します。このポリシーで、`<Key>` はタグのキー値に置き換え、`<Value>` はタグの値に置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ebs:ListSnapshotBlocks",
        "ebs:ListChangedBlocks",
        "ebs:GetSnapshotBlock"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEqualsIgnoreCase": {
          "aws:ResourceTag/<Key>": "<Value>"
        }
      }
    }
  ]
}
```

次のポリシーでは、特定の時間範囲に限り、アカウント内のすべてのスナップショットに対するすべての読み取り EBS direct API の使用を許可します。このポリシーは、`aws:CurrentTime` グローバル条件キーに基づいて EBS direct API の使用を許可します。このポリシーで、表示されている日時範囲は、必ずポリシーの日時範囲に置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ebs:ListSnapshotBlocks",
        "ebs:ListChangedBlocks",
        "ebs:GetSnapshotBlock"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*",
      "Condition": {
        "DateGreaterThan": {
```

```

        "aws:CurrentTime": "2018-05-29T00:00:00Z"
      },
      "DateLessThan": {
        "aws:CurrentTime": "2020-05-29T23:59:59Z"
      }
    }
  ]
}

```

詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー許可の変更](#)」を参照してください。

スナップショットを書き込むためのアクセス許可

次のポリシーでは、特定の AWS リージョンにおいて、すべてのスナップショットに対する書き込み EBS direct API の使用を許可します。このポリシーで、*<Region>* はスナップショットのリージョンに置き換えます。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ebs:StartSnapshot",
        "ebs:PutSnapshotBlock",
        "ebs:CompleteSnapshot"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:<Region>::snapshot/*"
    }
  ]
}

```

次のポリシーでは、特定のキーと値のタグを持つスナップショットに対する書き込み EBS direct API の使用を許可します。このポリシーで、*<Key>* はタグのキー値に置き換え、*<Value>* はタグの値に置き換えます。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",

```

```

    "Action": [
      "ebs:StartSnapshot",
      "ebs:PutSnapshotBlock",
      "ebs:CompleteSnapshot"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*",
    "Condition": {
      "StringEqualsIgnoreCase": {
        "aws:ResourceTag/<Key>": "<Value>"
      }
    }
  }
]
}

```

次のポリシーでは、すべての EBS direct API の使用を許可します。また、親スナップショット ID が指定されている場合に限り、StartSnapshot アクションを許可します。したがって、このポリシーでは、親スナップショットを使用せずに新しいスナップショットを開始することを禁止します。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ebs:*",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "ebs:ParentSnapshot": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*"
        }
      }
    }
  ]
}

```

次のポリシーでは、すべての EBS direct API の使用を許可します。また、新しいスナップショットに対する user タグキーの作成のみを許可します。また、このポリシーでは、ユーザーがタグを作成するためのアクセス権を持っていることを確認します。タグを指定できるアクションは、StartSnapshot アクションのみです。

```

{
  "Version": "2012-10-17",

```

```

"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": "ebs:*",
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "ForAllValues:StringEquals": {
        "aws:TagKeys": "user"
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": "ec2:CreateTags",
    "Resource": "*"
  }
]
}

```

次のポリシーでは、特定の時間範囲に限り、アカウント内のすべてのスナップショットに対するすべての書き込み EBS direct API の使用を許可します。このポリシーは、aws:CurrentTime グローバル条件キーに基づいて EBS direct API の使用を許可します。このポリシーで、表示されている日時範囲は、必ずポリシーの日時範囲に置き換えます。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ebs:StartSnapshot",
        "ebs:PutSnapshotBlock",
        "ebs:CompleteSnapshot"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:*::snapshot/*",
      "Condition": {
        "DateGreaterThan": {
          "aws:CurrentTime": "2018-05-29T00:00:00Z"
        },
        "DateLessThan": {
          "aws:CurrentTime": "2020-05-29T23:59:59Z"
        }
      }
    }
  ]
}

```

```
    }  
  ]  
}
```

詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー許可の変更](#)」を参照してください。

AWS KMS keys を使用するための許可

次のポリシーでは、特定の KMS キーを使用して、暗号化されたスナップショットを復号するための許可を付与します。EBS 暗号化のデフォルトの KMS キーを使用して新しいスナップショットを暗号化するための許可も付与します。このポリシー内で、*<Region>* を KMS キーのリージョンに、*<AccountId>* を KMS キーの AWS アカウント ID に、*<KeyId>* を KMS キーの ID にそれぞれ置き換えます。

Note

デフォルトでは、アカウント内のすべてのプリンシパルはデフォルトの Amazon EBS 向けの AWS マネージド KMS キーにアクセスでき、EBS の暗号化および復号オペレーションに使用できます。カスタマーマネージドキーを使用している場合は、新しいキーポリシーを作成するか、カスタマーマネージドキーの既存のキーポリシーを変更して、カスタマーマネージドキーへのアクセス権をプリンシパルに付与する必要があります。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMS でのキーポリシー](#)」を参照してください。

Tip

最小権限のプリンシパルに従うには、`kms:CreateGrant` へのフルアクセスを許可しないでください。代わりに、次の例に示すように、AWS のサービスによってユーザーに代わって許可が作成された場合にのみ、`kms:GrantIsForAWSResource` コンディションキーを使用して、KMS キーに許可を作成できるようにします。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Sid": "VisualEditor0",  
      "Effect": "Allow",
```



```
    "Action": [
      "kms:Encrypt",
      "kms:Decrypt",
      "kms:GenerateDataKey",
      "kms:GenerateDataKeyWithoutPlaintext",
      "kms:ReEncrypt*",
      "kms:CreateGrant",
      "ec2:CreateTags",
      "kms:DescribeKey"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kms:<Region>:<AccountId>:key/<KeyId>",
    "Condition": {
      "Bool": {
        "kms:GrantIsForAWSResource": true
      }
    }
  }
}
```

詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー許可の変更](#)」を参照してください。

EBS direct API を使用する

以下のトピックでは、EBS direct API を使用してスナップショットに対し読み取りと書き込みを行う方法について説明します。スナップショットでの読み取りと書き込みは、AWS CLI、AWS API、および AWS SDK のみから行うことができます。詳細については以下を参照してください。

- [AWS CLI のインストール](#)および[AWS CLI の設定](#)
- [EBS direct APIs Reference](#)
- [AWS SDK](#)

Important

EBS direct API には、AWS 署名バージョン 4 の署名が必要です。詳細については、[署名バージョン 4 の署名の使用](#)を参照してください。

トピック

- [EBS direct API を使用してスナップショットを読み取る](#)
- [EBS direct API を使用してスナップショットに書き込む](#)
- [暗号化の使用](#)
- [署名バージョン 4 の署名の使用](#)
- [チェックサムの使用](#)
- [StartSnapshot API のべき等](#)
- [エラー時の再試行](#)
- [パフォーマンスの最適化](#)
- [EBS ダイレクト API サービスエンドポイント](#)

EBS direct API を使用してスナップショットを読み取る

次の手順では、EBS direct API を使用してスナップショットを読み取る方法について説明します。

1. スナップショット内にあるすべてのブロックのブロックインデックスとブロックトークンを表示するには、ListSnapshotBlocks アクションを使用します。同じボリュームやスナップショット系列の 2 つのスナップショット間で異なるブロックのブロックインデックスとブロックトークンのみを表示するには、ListChangeBlocks アクションを使用します。これらのアクションは、データを取得するブロックのブロックトークンとブロックインデックスを識別するのに役立ちます。
2. GetSnapshotBlock アクションを使用し、データを取得するブロックのブロックインデックスとブロックトークンを指定します。

次に、EBS direct API を使用しながらスナップショットを読み取る場合の例を示します。

トピック

- [スナップショット内のブロックの一覧表示](#)
- [2 つのスナップショット間で異なるブロックの一覧表示](#)
- [スナップショットからのブロックデータの取得](#)

スナップショット内のブロックの一覧表示

AWS CLI

次の [list-snapshot-blocks](#) コマンドの例では、スナップショット `snap-0987654321` 内のブロックのブロックインデックスとブロックトークンを返します。--starting-block-index パラメータは、結果を 1000 より大きいブロックインデックスに制限します。--max-results パラメータは、結果を最初の 100 ブロックに制限します。

```
aws ebs list-snapshot-blocks --snapshot-id snap-0987654321 --starting-block-index 1000 --max-results 100
```

前のコマンドに対する次のレスポンスの例では、スナップショット内のブロックインデックスとブロックトークンを一覧表示します。get-snapshot-block コマンドを使用し、データを取得するブロックのブロックインデックスとブロックトークンを指定します。ブロックトークンは、表示されている有効期限まで有効です。

```
{
  "Blocks": [
    {
      "BlockIndex": 1001,
      "BlockToken": "AAABAV3/
PNhX0ynVdMYHUpPsetaSvjLB1dtIGfbJv50J0sX855EzGTWos4a4"
    },
    {
      "BlockIndex": 1002,
      "BlockToken": "AAABATGQIgwir0WwIuqIMjCA/Sy7e/
YoQFZsHejzGNvjKauzNgzeI13YHBfQB"
    },
    {
      "BlockIndex": 1007,
      "BlockToken": "AAABAZ9CTuQtUvp/
dXqRWw4d07e0gTZ3jvn6hiW30W9duM8MiMw6yQayzF2c"
    },
    {
      "BlockIndex": 1012,
      "BlockToken": "AAABAQdzxhw0rVV6PNmsfo/
YRIxo9JPR85XxPf1BLjg0Hec6pygYr6laE1p0"
    },
    {
      "BlockIndex": 1030,
```

```

        "BlockToken": "AAABAaYvPax6mv+iGWLdTUjQtFWouQ7Dqz6nSD9L
+CbXnvpkswA6iDID523d"
    },
    {
        "BlockIndex": 1031,
        "BlockToken": "AAABATgWZC0XcFwUKvTJbUXMiSPg59KVxJGL
+BWBC1kw6spzCxJVqDVaTskJ"
    },
    ...
],
"ExpiryTime": 1576287332.806,
"VolumeSize": 32212254720,
"BlockSize": 524288
}

```

AWS API

次の [ListSnapshotBlocks](#) リクエストの例では、スナップショット `snap-0acEXAMPLEcf41648` にあるブロックのブロックインデックスとブロックトークンを返します。startingBlockIndex パラメータは、結果を 1000 より大きいブロックインデックスに制限します。maxResults パラメータは、結果を最初の 100 ブロックに制限します。

```

GET /snapshots/snap-0acEXAMPLEcf41648/blocks?maxResults=100&startingBlockIndex=1000
HTTP/1.1
Host: ebs.us-east-2.amazonaws.com
Accept-Encoding: identity
User-Agent: <User agent parameter>
X-Amz-Date: 20200617T231953Z
Authorization: <Authentication parameter>

```

前のリクエストに対する次のレスポンスの例では、スナップショット内のブロックインデックスとブロックトークンを一覧表示します。GetSnapshotBlock アクションを使用し、データを取得するブロックのブロックインデックスとブロックトークンを指定します。ブロックトークンは、表示されている有効期限まで有効です。

```

HTTP/1.1 200 OK
x-amzn-RequestId: d6e5017c-70a8-4539-8830-57f5557f3f27
Content-Type: application/json
Content-Length: 2472
Date: Wed, 17 Jun 2020 23:19:56 GMT
Connection: keep-alive

```

```

{
  "BlockSize": 524288,
  "Blocks": [
    {
      "BlockIndex": 0,
      "BlockToken": "AAUBAcuWq0CnDNuK1e11s7IIX6jp6FYcC/q8oT93913HhvLvA
+3JRrSybp/0"
    },
    {
      "BlockIndex": 1536,
      "BlockToken": "AAUBAWudwfmofcrQhGV1LlWuRkm2b8ZXPiyrgoykTRC6IU1NbxKWDY1pPjvnV"
    },
    {
      "BlockIndex": 3072,
      "BlockToken": "AAUBAV7p6pC5fKAC7TokonCtAnZhqq27u6YEXZ3MwRevBkDjmMx6iuA6tsBt"
    },
    {
      "BlockIndex": 3073,
      "BlockToken": "AAUBAbqt9zpqBUEvt02HINAFaWTo0w1PjbIsQ01x6JUN/0+iMQ10NtNbnX4"
    },
    ...
  ],
  "ExpiryTime": 1.59298379649E9,
  "VolumeSize": 3
}

```

2つのスナップショット間で異なるブロックの一覧表示

2つのスナップショット間で、変更されたブロックを一覧表示するためにページ分割されたリクエストを実行する場合は、次の点に注意してください。

- レスポンスには、1つ以上の空の `ChangedBlocks` 配列を含めることができます。例:
 - スナップショット 1 - ブロックインデックス 0 - 999 を含む 1000 個のブロックの完全なスナップショット。
 - スナップショット 2 - ブロックインデックス 999 を持つ変更されたブロックが 1 個だけの増分スナップショット。

これらのスナップショットの変更されたブロックを `StartingBlockIndex = 0` および `MaxResults = 100` で一覧表示し、`ChangedBlocks` の空の配列を返します。変更されたブロックが 10 番目の結果セットで返されるまで `nextToken` を使用して残りの結果をリクエストする必要があります。これにはブロックインデックス 900 - 999 を持つブロックが含まれます。

- レスポンスは、スナップショット内の書き込まれていないブロックをスキップできます。例:
 - スナップショット 1 - ブロックインデックス 2000 - 2999 を含む 1000 個のブロックの完全なスナップショット。
 - スナップショット 2 - ブロックインデックス 2000 を持つ変更されたブロックが 1 個だけの増分スナップショット。

これらのスナップショットの変更されたブロックを `StartingBlockIndex = 0` および `MaxResults = 100` で一覧表示すると、レスポンスはブロックインデックス 0 - 1999 をスキップし、ブロックインデックス 2000 を含みます。レスポンスには、空の `ChangedBlocks` 配列は含まれません。

AWS CLI

次の [list-changed-blocks](#) コマンドの例では、スナップショット `snap-1234567890` とスナップショット `snap-0987654321` の間で異なるブロックのブロックインデックスとブロックトークンを返します。 `--starting-block-index` パラメータは、結果を 0 より大きいブロックインデックスに制限します。 `--max-results` パラメータは、結果を最初の 500 ブロックに制限します。

```
aws ebs list-changed-blocks --first-snapshot-id snap-1234567890 --second-snapshot-id snap-0987654321 --starting-block-index 0 --max-results 500
```

前のコマンドに対する次のレスポンスの例は、2 つのスナップショット間でブロックインデックス 0、6000、6001、6002、6003 が異なることを示しています。さらに、ブロックインデックス 6001、6002、および 6003 は、指定された最初のスナップショット ID にのみ存在し、2 番目のスナップショット ID には存在しません。これは、レスポンスに 2 番目のブロックトークンが表示されないためです。

`get-snapshot-block` コマンドを使用し、データを取得するブロックのブロックインデックスとブロックトークンを指定します。ブロックトークンは、表示されている有効期限まで有効です。

```
{
```

```

    "ChangedBlocks": [
      {
        "BlockIndex": 0,
        "FirstBlockToken": "AAABAVahm9S060Dyi00RySzn2ZjGjW/
KN3uygG1S0Q0YWesbzBbDnX2dGpmC",
        "SecondBlockToken":
"AAABAf8o0o6UFi1rDbSZGIRaCEdDyBu9T1vtCQxxoKV8qrUPQP7vcM6iWGSr"
      },
      {
        "BlockIndex": 6000,
        "FirstBlockToken": "AAABAbYSiZvJ0/
R9tz8suI8dSzecljN4kkazK8inFXvintPkdaVFLfCMQsKe",
        "SecondBlockToken":
"AAABAZnqTdzFmKRpsaMAsDxviVqEI/3jJzI2crq2eFDCgHmyNf777e1D9oVR"
      },
      {
        "BlockIndex": 6001,
        "FirstBlockToken": "AAABASBpSJ2UAD3PLxJnCt6zun4/
T4sU25Bnb8jB5Q6FRXHFqAIAqE04hJoR"
      },
      {
        "BlockIndex": 6002,
        "FirstBlockToken": "AAABASqX4/
NWjvNceoyMULjCrd0DnwbSwNnes1UkoP62CrQXvn47BY5435aw"
      },
      {
        "BlockIndex": 6003,
        "FirstBlockToken":
"AAABASmJ005JxA0ce25rF4P1sdRtyIDsX12tFEDunnePYUK0f4PBR0uICb2A"
      },
      ...
    ],
    "ExpiryTime": 1576308931.973,
    "VolumeSize": 32212254720,
    "BlockSize": 524288,
    "NextToken": "AAADARqElNng/sV98CYk/bJDCXeLJmLJHnNSkHvLzVa00zsPH/QM3Bi3zF//
06Mdi/BbJarBnp8h"
  }

```

AWS API

次の [ListChangedBlocks](#) リクエストの例では、`snap-0acEXAMPLEcf41648` スナップショットと `snap-0c9EXAMPLE1b30e2f` スナップショットの間で異なるブロックのブロックインデック

スとブロックトークンを返します。startingBlockIndex パラメータは、結果を 0 より大きいブロックインデックスに制限します。maxResults パラメータは、結果を最初の 500 ブロックに制限します。

```
GET /snapshots/snap-0c9EXAMPLE1b30e2f/changedblocks?
firstSnapshotId=snap-0acEXAMPLEc41648&maxResults=500&startingBlockIndex=0 HTTP/1.1
Host: ebs.us-east-2.amazonaws.com
Accept-Encoding: identity
User-Agent: <User agent parameter>
X-Amz-Date: 20200617T232546Z
Authorization: <Authentication parameter>
```

前のリクエストに対する次のレスポンスの例では、2つのスナップショット間でブロックインデックス 0、3072、6002、6003 が異なることを示しています。さらに、ブロックインデックス 6002 および 6003 は、指定した最初のスナップショット ID にのみ存在し、2番目のスナップショット ID には存在しません。これは、レスポンスに 2番目のブロックトークンが表示されないためです。

GetSnapshotBlock アクションを使用し、データを取得するブロックのブロックインデックスとブロックトークンを指定します。ブロックトークンは、表示されている有効期限まで有効です。

```
HTTP/1.1 200 OK
x-amzn-RequestId: fb0f6743-6d81-4be8-afbe-db11a5bb8a1f
Content-Type: application/json
Content-Length: 1456
Date: Wed, 17 Jun 2020 23:25:47 GMT
Connection: keep-alive

{
  "BlockSize": 524288,
  "ChangedBlocks": [
    {
      "BlockIndex": 0,
      "FirstBlockToken": "AAUBAVaWq0CnDNuK1e11s7IIX6jp6FYcC/
tJuVT1GgP23AuLntwiMdJ+OJKL",
      "SecondBlockToken": "AAUBASxzy0Y0b33JVRL0Ym3N0resCxn5R0+HVFzXW3Y/
RwfFaPX2Edx8QHCh"
    },
    {
      "BlockIndex": 3072,
```



```

        "FirstBlockToken":
        "AAUBAcHp6pC5fKAC7TokoNctAnZhqq27u6fxRfZ0LEmeXlmHBf2R/Yb24MaS",
        "SecondBlockToken":
        "AAUBARGCaufCqBRZC8tEkPYGGkSv3vqv0jJ2xKDi3ljDFiytUxBLXYgTmkid"
    },
    {
        "BlockIndex": 6002,
        "FirstBlockToken": "AAABASqX4/
NWjvNceoyMULjcRd0DnwbSwNnes1UkoP62CrQXvn47BY5435aw"
    },
    {
        "BlockIndex": 6003,
        "FirstBlockToken":
        "AAABASmJ005JxA0ce25rF4P1sdRtyIDsX12tFEDunnePYUKOf4PBR0uICb2A"
    },
    ...
],
"ExpiryTime": 1.592976647009E9,
"VolumeSize": 3
}

```

スナップショットからのブロックデータの取得

AWS CLI

次の [get-snapshot-block](#) コマンドの例では、スナップショット 6001 内でブロックインデックスが AAABASBpSJ2UAD3PLxJnCt6zun4/T4sU25Bnb8jB5Q6FRXHFqAIAqE04hJoR で、ブロックトークンが snap-1234567890 のデータを返します。バイナリデータは、Windows コンピュータの C:\Temp ディレクトリ内の data ファイルに出力されます。Linux または UNIX コンピュータでコマンドを実行する場合は、出力パスを /tmp/data に置き換え、データを data ディレクトリ内の /tmp ファイルに出力します。

```
aws ebs get-snapshot-block --snapshot-id snap-1234567890 --block-index 6001 --block-token AAABASBpSJ2UAD3PLxJnCt6zun4/T4sU25Bnb8jB5Q6FRXHFqAIAqE04hJoR C:/Temp/data
```

前のコマンドに対するの次のレスポンスの例は、返されたデータのサイズ、データを検証するためのチェックサム、チェックサムのアルゴリズムを示しています。バイナリデータは、リクエストコマンドで指定したディレクトリとファイルに自動的に保存されます。

```
{
```

```

    "DataLength": "524288",
    "Checksum": "cf0Y6/Fn0oFa4VyjQP0a/iD0zhTf1PTKzxGv20KowXc=",
    "ChecksumAlgorithm": "SHA256"
  }

```

AWS API

次の [GetSnapshotBlock](#) リクエストの例では、スナップショット 3072 内でブロックインデックスが AAUBARGCaufCqBRZC8tEkPYGGkSv3vqv0jJ2xKDi3ljDFiytUxBLXYgTmkid で、ブロックトークンが snap-0c9EXAMPLE1b30e2f のデータを返します。

```

GET /snapshots/snap-0c9EXAMPLE1b30e2f/blocks/3072?
blockToken=AAUBARGCaufCqBRZC8tEkPYGGkSv3vqv0jJ2xKDi3ljDFiytUxBLXYgTmkid HTTP/1.1
Host: ebs.us-east-2.amazonaws.com
Accept-Encoding: identity
User-Agent: <User agent parameter>
X-Amz-Date: 20200617T232838Z
Authorization: <Authentication parameter>

```

前のリクエストに対する次のレスポンスの例は、返されたデータのサイズ、データを検証するためのチェックサム、チェックサムの生成に使用されたアルゴリズムを示しています。バイナリデータは、レスポンスの本文で送信され、次の例では *BlockData* として示されています。

```

HTTP/1.1 200 OK
x-amzn-RequestId: 2d0db2fb-bd88-474d-a137-81c4e57d7b9f
x-amz-Data-Length: 524288
x-amz-Checksum: Vc0yY2j3qg8bUL9I6GQuI2orTudrQRBDMIhcy7bdEsw=
x-amz-Checksum-Algorithm: SHA256
Content-Type: application/octet-stream
Content-Length: 524288
Date: Wed, 17 Jun 2020 23:28:38 GMT
Connection: keep-alive

```

BlockData

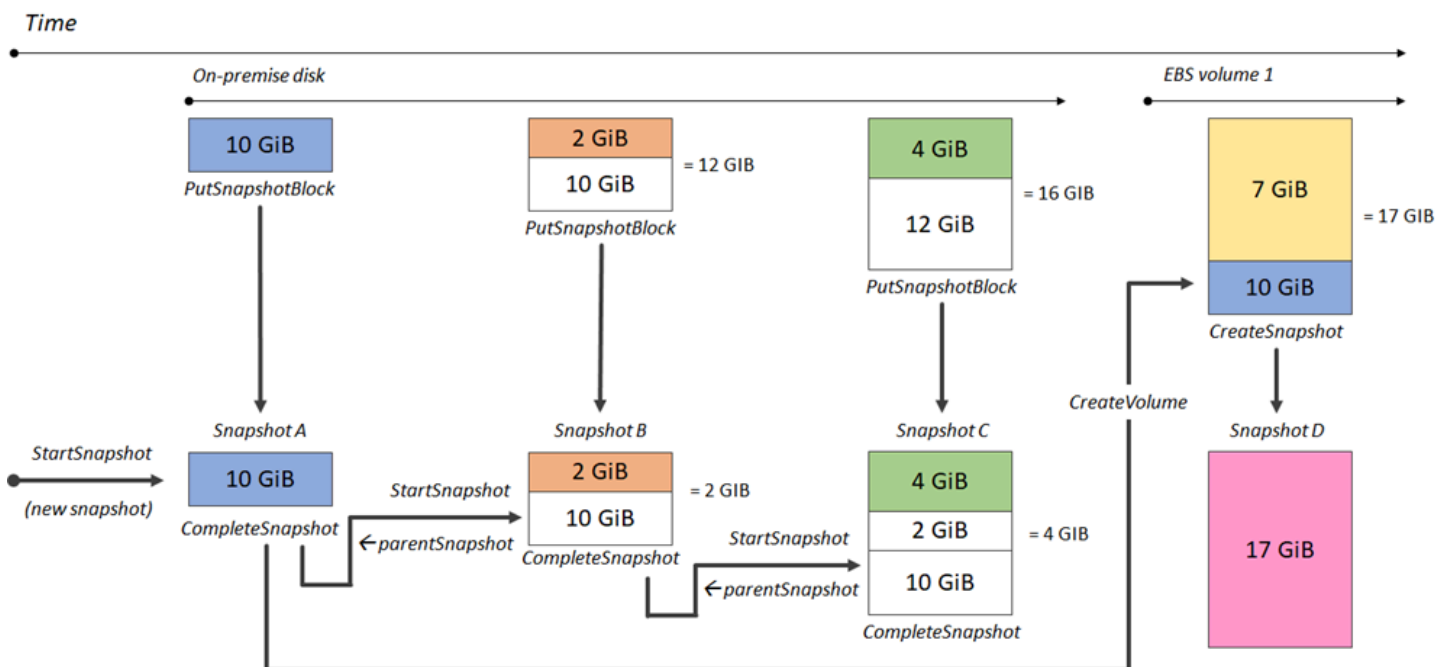
EBS direct API を使用してスナップショットに書き込む

次の手順では、EBS direct API を使用して増分スナップショットを書き込む方法について説明します。

1. StartSnapshot アクションを使用して親スナップショット ID を指定し、既存のスナップショットの増分スナップショットとしてスナップショットを開始します。または、親スナップショット ID を省略して新しいスナップショットを開始します。このアクションは、保留状態にある新しいスナップショットの ID を返します。
2. PutSnapshotBlock アクションを使用し、保留中のスナップショットの ID を指定してデータを個別のブロックとして追加します。データのブロックを送信する際に、Base64 でエンコードした SHA256 チェックサムを指定する必要があります。サービスは、受信したデータのチェックサムを計算し、指定したチェックサムと照合してデータを検証します。チェックサムが一致しない場合、アクションは失敗します。
3. 保留中のスナップショットに対するデータの追加が完了したら、CompleteSnapshot アクションを使用して非同期ワークフローを開始し、スナップショットをシールして完了状態に移行させます。

上記の手順を繰り返し、以前に作成したスナップショットを親とする新しい増分スナップショットを作成します。

例えば、次の図のスナップショット A は、最初に開始した新しいスナップショットです。スナップショット A を親スナップショットとしてスナップショット B を開始します。スナップショット B を親スナップショットとしてスナップショット C を開始および作成します。スナップショット A、B、C は、増分スナップショットです。スナップショット A を使用して EBS ボリューム 1 を作成します。スナップショット D を EBS ボリューム 1 から作成します。スナップショット D は A の増分スナップショットであり、B または C の増分スナップショットではありません。



次に、EBS direct API を使用しながらスナップショットに書き込む場合の例を示します。

トピック

- [スナップショットの開始](#)
- [スナップショットへのデータの書き込み](#)
- [スナップショットの完了](#)

スナップショットの開始

AWS CLI

次の [start-snapshot](#) コマンドの例では、8 を親スナップショットとして使用し、snap-123EXAMPLE1234567 GiB スナップショットを開始します。新しいスナップショットは、親スナップショットの増分スナップショットになります。指定した 60 分のタイムアウト期間内にスナップショットに対する書き込みリクエストまたは完了リクエストが行われない場合、スナップショットはエラー状態に移行します。550e8400-e29b-41d4-a716-446655440000 クライアントトークンは、リクエストのべき等を保証します。クライアントトークンを省略すると、AWS SDK によって自動的にこのトークンが生成されます。べき等の詳細については、[StartSnapshot API のべき等](#)を参照してください。

```
aws ebs start-snapshot --volume-size 8 --parent-snapshot snap-123EXAMPLE1234567 --
timeout 60 --client-token 550e8400-e29b-41d4-a716-446655440000
```

前のコマンドに対する次のレスポンスの例は、スナップショット ID、AWS アカウント ID、ステータス、ボリュームサイズ (GiB)、スナップショット内の各ブロックのサイズを示しています。スナップショットは pending 状態で開始されます。スナップショットにデータを書き込むには、後続の put-snapshot-block コマンドでスナップショット ID を指定します。次に complete-snapshot コマンドを使用してスナップショットを完了し、ステータスを completed に変更します。

```
{
  "SnapshotId": "snap-0aaEXAMPLEe306d62",
  "OwnerId": "111122223333",
  "Status": "pending",
  "VolumeSize": 8,
  "BlockSize": 524288
}
```

AWS API

次の [StartSnapshot](#) リクエストの例では、スナップショット 8 を親スナップショットとして使用し、snap-123EXAMPLE1234567 GiB スナップショットを開始します。新しいスナップショットは、親スナップショットの増分スナップショットになります。指定した 60 分のタイムアウト期間内にスナップショットに対する書き込みリクエストまたは完了リクエストが行われない場合、スナップショットはエラー状態に移行します。550e8400-e29b-41d4-a716-446655440000 クライアントトークンは、リクエストのべき等を保証します。クライアントトークンを省略すると、AWS SDK によって自動的にこのトークンが生成されます。べき等の詳細については、[StartSnapshot API のべき等](#)を参照してください。

```
POST /snapshots HTTP/1.1
Host: ebs.us-east-2.amazonaws.com
Accept-Encoding: identity
User-Agent: <User agent parameter>
X-Amz-Date: 20200618T040724Z
Authorization: <Authentication parameter>

{
  "VolumeSize": 8,
  "ParentSnapshot": snap-123EXAMPLE1234567,
  "ClientToken": "550e8400-e29b-41d4-a716-446655440000",
  "Timeout": 60
}
```

前のリクエストに対する次のレスポンスの例は、スナップショット ID、AWS アカウント ID、ステータス、ボリュームサイズ (GiB)、スナップショット内の各ブロックのサイズを示しています。スナップショットは保留状態で開始されます。スナップショットにデータを書き込むには、後続の PutSnapshotBlocks リクエストでスナップショット ID を指定します。

```
HTTP/1.1 201 Created
x-amzn-RequestId: 929e6eb9-7183-405a-9502-5b7da37c1b18
Content-Type: application/json
Content-Length: 181
Date: Thu, 18 Jun 2020 04:07:29 GMT
Connection: keep-alive

{
  "BlockSize": 524288,
  "Description": null,
  "OwnerId": "138695307491",
```

```

    "Progress": null,
    "SnapshotId": "snap-052EXAMPLEc85d8dd",
    "StartTime": null,
    "Status": "pending",
    "Tags": null,
    "VolumeSize": 8
  }

```

スナップショットへのデータの書き込み

AWS CLI

次の [put-snapshot](#) コマンドの例では、524288 バイトのデータをスナップショット 1000 のブロックインデックス `snap-0aaEXAMPLEe306d62` に書き込みます。Base64 でエンコードされた `Q0D3gmEQ0XATfJx2Aa34W4FU2nZGyXfqtsUukt0w8DM=` が、SHA256 アルゴリズムを使用して生成されています。送信されるデータは、`/tmp/data` ファイルにあります。

```

aws ebs put-snapshot-block --snapshot-id snap-0aaEXAMPLEe306d62
--block-index 1000 --data-length 524288 --block-data /tmp/data --
checksum Q0D3gmEQ0XATfJx2Aa34W4FU2nZGyXfqtsUukt0w8DM= --checksum-algorithm SHA256

```

前のコマンドに対する次のレスポンスの例では、サービスによって受信されたデータのデータ長、チェックサム、チェックサムアルゴリズムが返されます。

```

{
  "DataLength": "524288",
  "Checksum": "Q0D3gmEQ0XATfJx2Aa34W4FU2nZGyXfqtsUukt0w8DM=",
  "ChecksumAlgorithm": "SHA256"
}

```

AWS API

次の [PutSnapshot](#) リクエストの例では、524288 バイトのデータをスナップショット 1000 のブロックインデックス `snap-052EXAMPLEc85d8dd` に書き込みます。Base64 でエンコードされた `Q0D3gmEQ0XATfJx2Aa34W4FU2nZGyXfqtsUukt0w8DM=` が、SHA256 アルゴリズムを使用して生成されています。データは、リクエストの本文で送信され、次の例では ***BlockData*** として示されています。

```

PUT /snapshots/snap-052EXAMPLEc85d8dd/blocks/1000 HTTP/1.1
Host: ebs.us-east-2.amazonaws.com

```

```
Accept-Encoding: identity
x-amz-Data-Length: 524288
x-amz-Checksum: Q0D3gmEQ0XATfJx2Aa34W4FU2nZGyXfqtsUukt0w8DM=
x-amz-Checksum-Algorithm: SHA256
User-Agent: <User agent parameter>
X-Amz-Date: 20200618T042215Z
X-Amz-Content-SHA256: UNSIGNED-PAYLOAD
Authorization: <Authentication parameter>
```

BlockData

前のリクエストに対する次のレスポンスの例では、サービスが受信したデータのデータ長、チェックサム、チェックサムアルゴリズムが返されます。

```
HTTP/1.1 201 Created
x-amzn-RequestId: 643ac797-7e0c-4ad0-8417-97b77b43c57b
x-amz-Checksum: Q0D3gmEQ0XATfJx2Aa34W4FU2nZGyXfqtsUukt0w8DM=
x-amz-Checksum-Algorithm: SHA256
Content-Type: application/json
Content-Length: 2
Date: Thu, 18 Jun 2020 04:22:12 GMT
Connection: keep-alive

{}
```

スナップショットの完了

AWS CLI

次の [complete-snapshot](#) コマンドの例では、スナップショット `snap-0aaEXAMPLEe306d62` を完了します。このコマンドは、5 ブロックをスナップショットに書き込むことを指定します。6D3nmwi5f2F0wlh7xX8QprJBFzDX8aacd0cA3KCM3c= チェックサムは、スナップショットに書き込まれたデータセット全体のチェックサムを示します。チェックサムの詳細については、このガイドの前半にある [チェックサムの使用](#) を参照してください。

```
aws ebs complete-snapshot --snapshot-id snap-0aaEXAMPLEe306d62 --changed-blocks-
count 5 --checksum 6D3nmwi5f2F0wlh7xX8QprJBFzDX8aacd0cA3KCM3c= --checksum-
algorithm SHA256 --checksum-aggregation-method LINEAR
```

前のコマンドに対するレスポンスの例を次に示します。

```
{
  "Status": "pending"
}
```

AWS API

次の [CompleteSnapshot](#) リクエストの例では、スナップショット `snap-052EXAMPLEc85d8dd` を完了します。このコマンドは、5 ブロックをスナップショットに書き込むことを指定します。6D3nmwi5f2F0wlh7xX8QprrrJBFzDX8aacd0cA3KCM3c= チェックサムは、スナップショットに書き込まれたデータセット全体のチェックサムを示します。

```
POST /snapshots/completion/snap-052EXAMPLEc85d8dd HTTP/1.1
Host: ebs.us-east-2.amazonaws.com
Accept-Encoding: identity
x-amz-ChangedBlocksCount: 5
x-amz-Checksum: 6D3nmwi5f2F0wlh7xX8QprrrJBFzDX8aacd0cA3KCM3c=
x-amz-Checksum-Algorithm: SHA256
x-amz-Checksum-Aggregation-Method: LINEAR
User-Agent: <User agent parameter>
X-Amz-Date: 20200618T043158Z
Authorization: <Authentication parameter>
```

前のリクエストに対するレスポンスの例を次に示します。

```
HTTP/1.1 202 Accepted
x-amzn-RequestId: 06cba5b5-b731-49de-af40-80333ac3a117
Content-Type: application/json
Content-Length: 20
Date: Thu, 18 Jun 2020 04:31:50 GMT
Connection: keep-alive

{"Status":"pending"}
```

暗号化の使用

[StartSnapshot](#) を使用して新しいスナップショットを開始する場合、暗号化ステータスは、Encrypted、KmsKeyArn、および ParentSnapshotId に指定した値と、AWS アカウントで [デフォルトでの暗号化](#) が有効になっているかどうかによって異なります。

Note

- 暗号化で EBS direct API を使用するには、追加の IAM アクセス許可が必要になる場合があります。詳細については、「[AWS KMS keys を使用するための許可](#)」を参照してください。
- AWS アカウントで Amazon EBS 暗号化がデフォルトで有効になっている場合、暗号化されていないスナップショットを作成することはできません。
- AWS アカウントで Amazon EBS 暗号化がデフォルトで有効になっている場合、暗号化されていない親スナップショットを使用して新しいスナップショットを開始することはできません。最初に親スナップショットをコピーして、これを暗号化する必要があります。詳細については、「[Amazon EBS スナップショットのコピー](#)」を参照してください。

トピック

- [暗号化の結果: 暗号化されていない親スナップショット](#)
- [暗号化の結果: 暗号化された親スナップショット](#)
- [暗号化の結果: 親スナップショットなし](#)

暗号化の結果: 暗号化されていない親スナップショット

次の表は、暗号化されていない親スナップショットを指定する場合の設定の可能な組み合わせごとの暗号化の結果を示しています。

ParentSnapshotId	暗号化された	KmsKeyArn	デフォルトでの暗号化	結果
暗号化されていない	省略	省略	有効	リクエストは ValidationException で失敗します。
			無効	スナップショットは暗号化されていません。
		指定	有効	
			無効	

ParentSnapshotId	暗号化された	KmsKeyArn	デフォルトでの暗号化	結果
暗号化されていない	True	省略	有効	リクエストは ValidationException で失敗します。
			無効	
		指定	有効	
			無効	
暗号化されていない	False	省略	有効	リクエストは ValidationException で失敗します。
			無効	
		指定	有効	
			無効	

暗号化の結果: 暗号化された親スナップショット

次の表は、暗号化された親スナップショットを指定する場合の設定の可能な組み合わせごとの暗号化の結果を示しています。

ParentSnapshotId	暗号化された	KmsKeyArn	デフォルトでの暗号化	結果
暗号化された	省略	省略	有効	スナップショットは、親スナップショットと同じ KMS キーを使用して暗号化されます。
			無効	
		指定	有効	
			無効	
暗号化された	True	省略	有効	リクエストは ValidationException で失敗します。
			無効	

ParentSnapshotId	暗号化された	KmsKeyArn	デフォルトでの暗号化	結果
暗号化された	False	指定	有効	リクエストは ValidationException で失敗します。
			無効	
		省略	有効	
			無効	
		指定	有効	
			無効	

暗号化の結果: 親スナップショットなし

次の表は、親スナップショットを使用しない場合の設定の可能な組み合わせごとの暗号化の結果を示しています。

ParentSnapshotId	暗号化された	KmsKeyArn	デフォルトでの暗号化	結果
省略	True	省略	有効	スナップショットは、アカウントのデフォルトの KMS キーを使用して暗号化されます。*
			無効	
		指定	有効	
			無効	
省略	False	省略	有効	リクエストは ValidationException で失敗します。

ParentSnapshotId	暗号化された	KmsKeyArn	デフォルトでの暗号化	結果
			無効	スナップショットは暗号化されていません。
		指定	有効	リクエストは ValidationException で失敗します。
			無効	
省略	省略	省略	有効	スナップショットは、アカウントのデフォルトの KMS キーを使用して暗号化されます。*
			無効	スナップショットは暗号化されていません。
		指定	有効	スナップショットは
			無効	、KmsKeyArn 用に指定された KMS キーを使用して暗号化されます。

* このデフォルトの KMS キーは、Amazon EBS 暗号化用のカスターマネージドキーまたはデフォルトの AWS マネージド KMS キーである可能性があります。

署名バージョン 4 の署名の使用

Signature Version 4 は、HTTP で送信される AWS リクエストに認証情報を追加するプロセスです。セキュリティ対策として、AWS へのほとんどのリクエストは、アクセスキーを使用して署名する必要があります。アクセスキーは、アクセスキー ID とシークレットアクセスキーで構成されます。これらの 2 つのキーは、一般的にセキュリティ認証情報と呼ばれます。アカウントの認証情報を取得する方法については、「[AWS セキュリティ認証情報](#)」を参照してください。

HTTP リクエストを手動で作成する場合は、リクエストへの署名方法を知っている必要があります。AWS Command Line Interface (AWS CLI)、またはいずれかの AWS SDK を使用して AWS へのリクエストを作成すると、これらのツールの設定時に指定したアクセスキーで自動的にリクエストが

署名されます。これらのツールを使う場合は、自分でリクエストに署名する方法を学ぶ必要はありません。

詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS API リクエストの署名](#)」を参照してください。

チェックサムの使用

GetSnapshotBlock アクションは、スナップショットのブロック内のデータを返します。PutSnapshotBlock アクションは、スナップショットのブロックにデータを追加します。転送されるブロックデータは、署名バージョン 4 の署名プロセスの対象外であるため、署名されません。そのため、データの整合性の検証には、次のようにチェックサムが使用されます

- GetSnapshotBlock アクションを使用する場合、レスポンスは x-amz-Checksum ヘッダーによるブロックデータの Base64 で暗号された SHA256 チェックサムと、x-amz-Checksum-Algorithm ヘッダーによるチェックサムアルゴリズムを提供します。返されたチェックサムを使用して、データの整合性が検証されます。生成したチェックサムが Amazon EBS から提供されたチェックサムと一致しない場合は、データが有効でないと判断し、リクエストを再試行する必要があります。
- PutSnapshotBlock アクションを使用する場合、リクエストは x-amz-Checksum ヘッダーによるブロックデータの Base64 で暗号された SHA256 チェックサムと、x-amz-Checksum-Algorithm ヘッダーによるチェックサムアルゴリズムを提供する必要があります。提供したチェックサムと Amazon EBS によって生成されたチェックサムが照合され、データの整合性が検証されます。両者のチェックサムが対応しない場合、リクエストは失敗します。
- CompleteSnapshot アクションを使用する場合、リクエストは、オプションとしてスナップショットに追加するデータセット全体に対する Base64 でエンコードされた SHA256 チェックサムの集計を提供できます。x-amz-Checksum ヘッダーによるチェックサム、x-amz-Checksum-Algorithm ヘッダーによるチェックサムアルゴリズム、x-amz-Checksum-Aggregation-Method ヘッダーによるチェックサム集計方法を提供します。線形集計による集計チェックサムを生成するには、書き込まれた各ブロックのチェックサムをブロックインデックスの昇順に配置し、これらを連結して単一の文字列を形成します。次に、SHA256 アルゴリズムを使用して、この文字列全体のチェックサムを生成します。

これらのアクションのチェックサムは、署名バージョン 4 の署名プロセスの一部です。

StartSnapshot API のべき等

べき等は、API リクエストが 1 回だけ完了することを保証します。べき等リクエストでは、元のリクエストが正常に完了した場合、その後の再試行は元の成功したリクエストの結果を返し、追加の効果はありません。

[StartSnapshot](#) API は、クライアントトークンを使用したべき等をサポートしています。クライアントトークンは、API リクエストを行うときに指定する一意の文字列です。API リクエストが正常に完了した後で、同じクライアントトークンと同じリクエストパラメータを使用して API リクエストを再試行すると、元のリクエストの結果が返されます。リクエストの再試行で同じクライアントトークンを使用し、リクエストパラメータの 1 つ以上を変更すると、`ConflictException` エラーが返されます。

独自のクライアントトークンを指定しない場合、AWS SDK はリクエストのクライアントトークンを自動的に生成し、それがべき等であることを確認します。

クライアントトークンには、64 文字の ASCII 文字を含む任意の文字列を指定できます。同じクライアントトークンを異なるリクエストに再利用しないでください。

API を使用して独自のクライアントトークンでべき等の `StartSnapshot` リクエストを行うには

`ClientToken` リクエストパラメータを指定します。

```
POST /snapshots HTTP/1.1
Host: ebs.us-east-2.amazonaws.com
Accept-Encoding: identity
User-Agent: <User agent parameter>
X-Amz-Date: 20200618T040724Z
Authorization: <Authentication parameter>

{
  "VolumeSize": 8,
  "ParentSnapshot": snap-123EXAMPLE1234567,
  "ClientToken": "550e8400-e29b-41d4-a716-446655440000",
  "Timeout": 60
}
```

AWS CLI を使用して独自のクライアントトークンでべき等の `StartSnapshot` リクエストを行うには

`client-token` リクエストパラメータを指定します。

```
$ C:\> aws ebs start-snapshot --region us-east-2 --volume-size 8 --parent-snapshot snap-123EXAMPLE1234567 --timeout 60 --client-token 550e8400-e29b-41d4-a716-446655440000
```

エラー時の再試行

AWS SDK には、エラーレスポンスを返したリクエストを自動的に再試行するロジックが実装されています。AWS SDK による再試行では、ユーザーによる設定が可能です。詳細については、「SDK のドキュメント」を参照してください。

失敗した場合の自動再試行を AWS CLI により設定できます。AWS CLI での再試行の設定の詳細については、「AWS Command Line Interface ユーザーガイド」の「[AWS CLI の再試行](#)」を参照してください。

AWS クエリ API は、失敗したリクエストの再試行ロジックをサポートしていません。HTTP または HTTPS リクエストを使用している場合は、クライアントアプリケーション内に再試行ロジックを実装する必要があります。

次の表に、発生する API エラーレスポンスを示します。一部の API エラーは再試行可能です。クライアントアプリケーションは、再試行可能なエラーの受け取りに失敗したリクエストを必ず再試行する必要があります。

エラー	Response Code (レスポンスコード)	説明	スローの原因	再試行可能なのは?
InternalServerErrorException	500	ネットワークまたは AWS サーバー側の問題によりリクエストが失敗しました。	すべての API	はい
ThrottlingException	400	API リクエストの数が、アカウントに対して許可された API リクエストの最大スロットリング制限を超えました。	すべての API	はい

エラー	Response Code (レスポンスコード)	説明	スローの原因	再試行可能なのは?
RequestThrottleException	400	API リクエストの数が、スナップショットに対して許可された API リクエストの最大スロットリング制限を超えました。	GetSnapshotBlock PutSnapshotBlock	はい
メッセージ「Failed to read block data」付き ValidationException	400	提供されたデータブロックは読み込まれませんでした。	PutSnapshotBlock	はい
他のメッセージ付き ValidationException	400	リクエスト構文の形式が正しくないか、入力が AWS のサービスで指定された制約を満たしていません。	すべての API	いいえ
ResourceNotFoundException	404	指定されたスナップショット ID が存在しません。	すべての API	いいえ

エラー	Response Code (レスポンスコード)	説明	スローの原因	再試行可能なのは?
ConflictException	409	指定されたクライアントトークンは、以前に異なるリクエストパラメータを持つ同様のリクエストで使用されていました。詳細については、「 StartSnapshot API のべき等 」を参照してください。	StartSnapshot	いいえ
AccessDeniedException	403	必要なオペレーションを実行するための許可がありません。	すべての API	いいえ
ServiceQuotaExceededException	402	リクエストを実行すると、アカウントの 1 つ以上の従属 Service Quotas を超えるため、リクエストは失敗しました。	すべての API	いいえ

エラー	Response Code (レスポンスコード)	説明	スローの原因	再試行可能なのは?
InvalidSignatureException	403	認証署名リクエストの有効期限切れです。リクエストを再試行するには、認証署名を更新する必要があります。	すべての API	いいえ

パフォーマンスの最適化

API リクエストは複数を実行できます。PutSnapshotBlock のレイテンシーが 100 ミリ秒であると仮定すると、スレッドは 1 秒間に 10 個のリクエストを処理できます。さらに、クライアントアプリケーションが複数のスレッドと接続 (100 件の接続など) を作成すると仮定すると、合計で 1 秒あたり 1000 (10 * 100) 件のリクエストを行うことができます。これは、1 秒あたり約 500 MB のスループットに相当します。

次のリストは、アプリケーションで確認すべき項目を示しています。

- スレッドごとに別個の接続を使用しているか? アプリケーションで接続数が制限されている場合、接続が利用可能になるまで複数のスレッドが待機するため、スループットが低下します。
- アプリケーションで 2 つの書き込みリクエスト間に待機時間があるか? 待機時間があると、スレッドの有効なスループットが低下します。
- インスタンスの帯域幅制限: インスタンスの帯域幅が他のアプリケーションによって共有されている場合、PutSnapshotBlock リクエストに使用可能なスループットが制限される場合があります。

ボトルネックを避けるために、アカウントで実行されている他のワークロードに注意してください。また、EBS direct API ワークフロー内に再試行メカニズムを組み込んで、スロットリング、タイムアウト、サービスの利用不可に対処する必要があります。

EBS direct API Service Quotas を確認し、1 秒あたりに実行できる API リクエストの最大数を判断します。詳細については、AWS 全般のリファレンスの[Amazon Elastic Block Store エンドポイントとクォータ](#)を参照してください。

EBS ダイレクト API サービスエンドポイント

エンドポイントは、AWS ウェブサービスのエン트리ポイントとなる URL です。EBS ダイレクト API は以下のエンドポイントタイプをサポートします。

- IPv4 エンドポイント
- IPv4 と IPv6 の両方をサポートするデュアルスタックのエンドポイント
- FIPS エンドポイント

リクエストを行うと、使用するエンドポイントとリージョンを指定できます。エンドポイントを指定しない場合、デフォルトで IPv4 エンドポイントが使用されます。別のエンドポイントタイプを使用するには、リクエストで指定する必要があります。これを行う方法の例については、「[エンドポイントの指定](#)」を参照してください。

リージョンの詳細については、「Linux インスタンス用 Amazon EC2 ユーザーガイド」の「[リージョンとアベイラビリティゾーン](#)」を参照してください。EBS direct API のエンドポイントのリストについては、「Amazon Web Services 全般のリファレンス」の「[EBS direct API のエンドポイント](#)」を参照してください。

トピック

- [IPv4 エンドポイント](#)
- [デュアルスタック \(IPv4 および IPv6\) エンドポイント](#)
- [FIPS エンドポイント](#)
- [エンドポイントの指定](#)

IPv4 エンドポイント

IPv4 エンドポイントは IPv4 トラフィックのみをサポートします。IPv4 エンドポイントは、すべてのリージョンで利用できます。

一般的なエンドポイントである `ebs.amazonaws.com` を指定する場合は、`us-east-1` のエンドポイントを使用します。別のリージョンを使用するには、関連するエンドポイントを指定します。例え

ば、`ebs.us-east-2.amazonaws.com` をエンドポイントとして指定した場合、リクエストは `us-east-2` エンドポイントに転送されます。

IPv4 エンドポイント名では、次の命名規則が使用されます。

- `ebs.region.amazonaws.com`

例えば、`us-west-1` リージョンの IPv4 エンドポイントは、`ebs.us-west-1.amazonaws.com` です。EBS direct API のエンドポイントのリストについては、「Amazon Web Services 全般のリファレンス」の「[EBS direct API のエンドポイント](#)」を参照してください。

料金

EBS ダイレクト API と Amazon EC2 インスタンス間で、同一リージョン内の IPv4 エンドポイントを使用して直接転送されたデータについては、課金されません。ただし、AWS PrivateLink エンドポイント、NAT ゲートウェイ、Amazon VPC トランジットゲートウェイなどの中間サービスがある場合は、それらに関連する費用が請求されます。

デュアルスタック (IPv4 および IPv6) エンドポイント

デュアルスタックエンドポイントは、IPv4 と IPv6 トラフィックの両方をサポートします。デュアルスタックエンドポイントは、すべてのリージョンで利用できます。

IPv6 を使用するには、デュアルスタックエンドポイントを使用する必要があります。デュアルスタックエンドポイントにリクエストを行うと、エンドポイント URL は、ネットワークとクライアントが使用するプロトコルに応じて IPv6 または IPv4 アドレスに解決されます。

EBS ダイレクト API はリージョンのデュアルスタックエンドポイントのみをサポートしているため、エンドポイント名の一部としてリージョンを指定する必要があります。デュアルスタックエンドポイント名には、次の命名規則が使用されます。

- `ebs.region.api.aws`

例えば、`eu-west-1` リージョンのデュアルスタックエンドポイント名は、`ebs.eu-west-1.api.aws` です。EBS direct API のエンドポイントのリストについては、「Amazon Web Services 全般のリファレンス」の「[EBS direct API のエンドポイント](#)」を参照してください。

料金

EBS ダイレクト API と Amazon EC2 インスタンス間で、同一リージョン内のデュアルスタックエンドポイントを使用して直接転送されたデータについては、課金されません。ただし、AWS PrivateLink エンドポイント、NAT ゲートウェイ、Amazon VPC トランジットゲートウェイなどの中間サービスがある場合は、それらに関連する費用が請求されます。

FIPS エンドポイント

EBS ダイレクト API は、FIPS 検証済みの IPv4 およびデュアルスタック (IPv4 および IPv6) エンドポイントを提供します。

- us-east-1 — 米国東部 (バージニア北部)
- us-east-2 — 米国東部 (オハイオ)
- us-west-1 — 米国西部 (北カリフォルニア)
- us-west-2 — 米国西部 (オレゴン)
- ca-central-1 — カナダ (中部)

FIPS IPv4 エンドポイントに使用される命名規則は `ebs-fips.region.amazonaws.com` です。例えば、us-east-1 の FIPS IPv4 エンドポイントは `ebs-fips.us-east-1.amazonaws.com` です。

FIPS デュアルスタックエンドポイントの命名規則は `ebs-fips.region.api.aws` です。例えば、us-east-1 の FIPS デュアルスタックエンドポイントは `ebs-fips.us-east-1.api.aws` です。

FIPS エンドポイントの詳細については、「Amazon Web Services 全般のリファレンス」の「[FIPS エンドポイント](#)」を参照してください。

エンドポイントの指定

このセクションでは、リクエストを行うときにエンドポイントを指定する方法を例で示します。

AWS CLI

次の例は、AWS CLI を使用して us-east-2 リージョンのエンドポイントを指定する方法を示しています。

- デュアルスタック

```
aws ebs list-snapshot-blocks --snapshot-id snap-0987654321 --starting-block-index 1000 --endpoint-url https://ebs.us-east-2.api.aws
```

- IPv4

```
aws ebs list-snapshot-blocks --snapshot-id snap-0987654321 --starting-block-index 1000 --endpoint-url https://ebs.us-east-2.amazonaws.com
```

AWS SDK for Java 2.x

次の例は、AWS SDK for Java 2.x を使用して us-east-2 リージョンのエンドポイントを指定する方法を示しています。

- デュアルスタック

```
AwsClientBuilder.EndpointConfiguration config = new  
    AwsClientBuilder.EndpointConfiguration("https://ebs.us-east-2.api.aws", "us-east-2");  
AmazonEBS ebs = AmazonEBSClientBuilder.standard()  
    .withEndpointConfiguration(config)  
    .build();
```

- IPv4

```
AwsClientBuilder.EndpointConfiguration config = new  
    AwsClientBuilder.EndpointConfiguration("https://ebs.us-east-2.amazonaws.com", "us-east-2");  
AmazonEBS ebs = AmazonEBSClientBuilder.standard()  
    .withEndpointConfiguration(config)  
    .build();
```

AWS SDK for Go

次の例は、AWS SDK for Go を使用して us-east-2 リージョンのエンドポイントを指定する方法を示しています。

- デュアルスタック

```
sess := session.Must(session.NewSession())
```

```
svc := ebs.New(sess, &aws.Config{
    Region: aws.String(endpoints.UsEast1RegionID),
    Endpoint: aws.String("https://ebs.us-east-2.api.aws")
})
```

- IPv4

```
sess := session.Must(session.NewSession())
svc := ebs.New(sess, &aws.Config{
    Region: aws.String(endpoints.UsEast1RegionID),
    Endpoint: aws.String("https://ebs.us-east-2.amazonaws.com")
})
```

EBS direct API の料金

トピック

- [API の料金](#)
- [ネットワークコスト](#)

API の料金

EBS direct API の使用料金は、リクエストに応じて異なります。詳細については、[Amazon EBS の料金表](#)を参照してください。

- ListChangedBlocks および ListSnapshotBlocks API ではリクエストごとに課金されます。例えば、1,000 リクエストあたり 0.0006 USD を請求するリージョンで 100,000 の ListSnapshotBlocks API リクエストを行うと、0.06 USD (1,000 リクエストあたり 0.0006 USD × 100) が課金されます。
- GetSnapshotBlock では、返されたブロックごとに課金されます。例えば、返された 1,000 ブロックあたり 0.003 USD を請求するリージョンで 100,000 の GetSnapshotBlock API リクエストを行うと、0.30 USD (1,000 ブロックあたり 0.003 USD × 100) が課金されます。
- PutSnapshotBlock では、書き込まれたブロックごとに課金されます。例えば、書き込まれた 1,000 ブロックあたり 0.006 USD を請求するリージョンで 100,000 の PutSnapshotBlock API リクエストを行うと、0.60 USD (書き込まれた 1,000 ブロックあたり 0.006 USD × 100) が課金されます。

ネットワークコスト

データ転送コスト

[非 FIPS エンドポイント](#)を使用する場合、同じ AWS リージョンにある EBS direct API と Amazon EC2 インスタンス間で直接転送されるデータには課金されません。詳細については、[AWS サービスエンドポイント](#)を参照してください。他の AWS のサービスがデータ転送の経路内に存在する場合は、それらのサービスに関連するデータ処理コストが課金されます。これらのサービスには、PrivateLink エンドポイント、NAT ゲートウェイ、および Transit Gateway が含まれますが、これらに限定されません。

VPC インターフェイスのエンドポイント

プライベートサブネット内の Amazon EC2 インスタンスもしくは AWS Lambda 関数から EBS direct API を使用している場合、NAT ゲートウェイの代わりに VPC インターフェイスエンドポイントを使用することで、ネットワークデータ転送にかかるコストを削減できます。詳細については、[EBS direct API でインターフェイス VPC エンドポイントを使用する](#)を参照してください。

EBS direct API でインターフェイス VPC エンドポイントを使用する

[AWS PrivateLink](#) を利用したインターフェイス VPC エンドポイントを作成することで、VPC と EBS direct API 間にプライベート接続を確立できます。インターネットゲートウェイ、NAT デバイス、VPN 接続、または AWS Direct Connect 接続を使用せずに、VPC 内にあるかのように EBS direct API にアクセスできます。VPC のインスタンスは、パブリック IP アドレスがなくても EBS direct API と通信できます。

インターフェイスエンドポイントに対して有効にする各サブネットにエンドポイントネットワークインターフェイスを作成します。

詳細については、「AWS PrivateLink Guide (AWS PrivateLink ガイド)」の「[Access an AWS のサービス using an interface VPC endpoint](#) (インターフェイス VPC エンドポイントを使用してにアクセスする)」を参照してください。

EBS direct API VPC エンドポイントに関する考慮事項

EBS direct API でインターフェイス VPC エンドポイントを設定する前に、「AWS PrivateLink ガイド」の「[考慮事項](#)」を確認してください。

VPC エンドポイントポリシーは EBS direct API でサポートされていません。デフォルトでは、エンドポイントを通じた EBS direct API へのフルアクセスが許可されています。ただし、セキュリティグループを使用して、インターフェイスエンドポイントへのアクセスをコントロールできます。

EBS direct API でインターフェイス VPC エンドポイントを作成する

EBS direct API 用の VPC エンドポイントは、Amazon VPC コンソールまたは AWS Command Line Interface (AWS CLI) で作成できます。詳細については、[AWS PrivateLink Guide] (ガイド) の [\[Create a VPC endpoint\]](#) (VPC エンドポイントを作成) を参照してください。

EBS direct API 用の VPC エンドポイントを作成するには、次のサービス名を使用します。

- `com.amazonaws.region.ebs`

エンドポイントのプライベート DNS を有効にすると、リージョンのデフォルト DNS 名 (`ebs.us-east-1.amazonaws.com` など) を使用して、EBS direct API への API リクエストを実行できます。

AWS CloudTrail による EBS direct API の API コールのログ記録

EBS direct API サービスは、AWS CloudTrail に統合されています。CloudTrail は、ユーザー、ロール、または AWS のサービスによって実行されたアクションを記録するサービスです。CloudTrail は、EBS direct API で実行されるすべての API コールをイベントとしてキャプチャします。証跡を作成する場合は、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [Event history] (イベント履歴) で最新の管理イベントを表示できます。データイベントは、イベント履歴にはキャプチャされません。CloudTrail で収集された情報を使用して、EBS direct API に対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエストの実行者、リクエスト日時などの詳細を把握できます。

CloudTrail の詳細については、[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)を参照してください。

CloudTrail での EBS direct API 情報

AWS アカウントを作成すると、そのアカウントに対して CloudTrail が有効になります。EBS direct API でサポートされるイベントアクティビティが発生すると、そのアクティビティは CloudTrail イベントとして AWS のサービスの他のイベントと共に [Event history] (イベント履歴) に記録されます。最近のイベントは、AWS アカウントで表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、「[CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示](#)」を参照してください。

EBS direct API のイベントなど、AWS アカウントのイベントの継続的な記録については、証跡を作成します。証跡より、CloudTrail はログファイルを S3 バケットに配信できます。デフォルトでは、コンソールで証跡を作成するときに、証跡がすべての AWS リージョンに適用されます。証跡では、AWS パーティションのすべてのリージョンからのイベントがログに記録され、指定した S3 バケットにログファイルが配信されます。さらに、CloudTrail ログで収集したイベントデータをより詳細に分析し、それに基づく対応するためにその他の AWS サービスを設定できます。詳細については、次を参照してください:

- [証跡を作成するための概要](#)
- [CloudTrail がサポートするサービスと統合](#)
- [CloudTrail 用の Amazon SNS 通知の構成](#)
- [複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取るおよび複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る](#)

サポートされている API アクション

EBS direct API のために CloudTrail を使用すると、以下の 2 種類のイベントをログに記録できます。

- **管理イベント** — 管理イベントでは、AWS アカウントのスナップショットで実行される管理オペレーションについて知ることができます。以下の API アクションは、デフォルトで管理イベントとして証跡に記録されます。
 - [StartSnapshot](#)
 - [CompleteSnapshot](#)

管理イベントの記録については、CloudTrail ユーザーガイドの[証跡での管理イベントの記録](#)を参照してください。

- **データイベント** — これらのイベントでは、スナップショット上またはスナップショット内で実行されたスナップショットオペレーションについての洞察が得られます。次の API アクションは、オプションでデータイベントとして証跡に記録できます。
 - [ListSnapshotBlocks](#)
 - [ListChangedBlocks](#)
 - [GetSnapshotBlock](#)
 - [PutSnapshotBlock](#)

証跡の作成時、デフォルトでは、データイベントは記録されません。EBS direct API コールのデータイベントを記録するには、アドバンスドイベントセレクターのみを使用できます。詳細については、CloudTrail ユーザーガイドの[証跡でのデータイベントのログ記録](#)を参照してください。

Note

共有されているスナップショットに対してアクションを実行した場合、データイベントはスナップショットを所有する AWS アカウントに送信されません。

アイデンティティ情報

各イベントまたはログエントリには、リクエストの生成者に関する情報が含まれます。アイデンティティ情報は、以下を判別するために役立ちます。

- ルートユーザーまたはユーザー認証情報のどちらを使用してリクエストが送信されたか
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーのテンポラリなセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが、別の AWS サービスによって送信されたかどうか。

詳細については、[CloudTrail userIdentityElement](#)を参照してください。

EBS direct API のログファイルエントリを理解する

証跡は、指定した S3 バケットにイベントをログファイルとして配信するように設定できます。CloudTrail ログファイルには、1 つ以上のログエントリがあります。イベントは任意のソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストのパラメータなどの情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、パブリック API 呼び出しの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

以下に CloudTrail ログエントリの例を示します。

StartSnapshot

```
{
  "eventVersion": "1.05",
  "userIdentity": {
    "type": "IAMUser",
```

```

    "principalId": "123456789012",
    "arn": "arn:aws:iam::123456789012:root",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "userName": "user"
  },
  "eventTime": "2020-07-03T23:27:26Z",
  "eventSource": "ebs.amazonaws.com",
  "eventName": "StartSnapshot",
  "awsRegion": "eu-west-1",
  "sourceIPAddress": "192.0.2.0",
  "userAgent": "PostmanRuntime/7.25.0",
  "requestParameters": {
    "volumeSize": 8,
    "clientToken": "token",
    "encrypted": true
  },
  "responseElements": {
    "snapshotId": "snap-123456789012",
    "ownerId": "123456789012",
    "status": "pending",
    "startTime": "Jul 3, 2020 11:27:26 PM",
    "volumeSize": 8,
    "blockSize": 524288,
    "kmsKeyArn": "HIDDEN_DUE_TO_SECURITY_REASONS"
  },
  "requestID": "be112233-1ba5-4ae0-8e2b-1c302EXAMPLE",
  "eventID": "6e12345-2a4e-417c-aa78-7594fEXAMPLE",
  "eventType": "AwsApiCall",
  "recipientAccountId": "123456789012"
}

```

CompleteSnapshot

```

{
  "eventVersion": "1.05",
  "userIdentity": {
    "type": "IAMUser",
    "principalId": "123456789012",
    "arn": "arn:aws:iam::123456789012:root",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "userName": "user"
  }
}

```

```
},
"eventTime": "2020-07-03T23:28:24Z",
"eventSource": "ebs.amazonaws.com",
"eventName": "CompleteSnapshot",
"awsRegion": "eu-west-1",
"sourceIPAddress": "192.0.2.0",
"userAgent": "PostmanRuntime/7.25.0",
"requestParameters": {
  "snapshotId": "snap-123456789012",
  "changedBlocksCount": 5
},
"responseElements": {
  "status": "completed"
},
"requestID": "be112233-1ba5-4ae0-8e2b-1c302EXAMPLE",
"eventID": "6e12345-2a4e-417c-aa78-7594fEXAMPLE",
"eventType": "AwsApiCall",
"recipientAccountId": "123456789012"
}
```

ListSnapshotBlocks

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "IAMUser",
    "principalId": "AIDAT4HPB2A03JEXAMPLE",
    "arn": "arn:aws:iam::123456789012:user/user",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "userName": "user"
  },
  "eventTime": "2021-06-03T00:32:46Z",
  "eventSource": "ebs.amazonaws.com",
  "eventName": "ListSnapshotBlocks",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "111.111.111.111",
  "userAgent": "PostmanRuntime/7.28.0",
  "requestParameters": {
    "snapshotId": "snap-abcdef01234567890",
    "maxResults": 100,
    "startingBlockIndex": 0
  },
}
```

```
"responseElements": null,
"requestID": "example6-0e12-4aa9-b923-1555eexample",
"eventID": "example4-218b-4f69-a9e0-2357dexample",
"readOnly": true,
"resources": [
  {
    "accountId": "123456789012",
    "type": "AWS::EC2::Snapshot",
    "ARN": "arn:aws:ec2:us-west-2::snapshot/snap-abcdef01234567890"
  }
],
"eventType": "AwsApiCall",
"managementEvent": false,
"recipientAccountId": "123456789012",
"eventCategory": "Data",
"tlsDetails": {
  "tlsVersion": "TLSv1.2",
  "cipherSuite": "ECDHE-RSA-AES128-SHA",
  "clientProvidedHostHeader": "ebs.us-west-2.amazonaws.com"
}
}
```

ListChangedBlocks

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "IAMUser",
    "principalId": "AIDAT4HPB2A03JEXAMPLE",
    "arn": "arn:aws:iam::123456789012:user/user",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "userName": "user"
  },
  "eventTime": "2021-06-02T21:11:46Z",
  "eventSource": "ebs.amazonaws.com",
  "eventName": "ListChangedBlocks",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "111.111.111.111",
  "userAgent": "PostmanRuntime/7.28.0",
  "requestParameters": {
    "firstSnapshotId": "snap-abcdef01234567890",
    "secondSnapshotId": "snap-9876543210abcdef0",
  }
}
```

```

    "maxResults": 100,
    "startingBlockIndex": 0
  },
  "responseElements": null,
  "requestID": "example0-f4cb-4d64-8d84-72e1bexample",
  "eventID": "example3-fac4-4a78-8ebb-3e9d3example",
  "readOnly": true,
  "resources": [
    {
      "accountId": "123456789012",
      "type": "AWS::EC2::Snapshot",
      "ARN": "arn:aws:ec2:us-west-2::snapshot/snap-abcdef01234567890"
    },
    {
      "accountId": "123456789012",
      "type": "AWS::EC2::Snapshot",
      "ARN": "arn:aws:ec2:us-west-2::snapshot/snap-9876543210abcdef0"
    }
  ],
  "eventType": "AwsApiCall",
  "managementEvent": false,
  "recipientAccountId": "123456789012",
  "eventCategory": "Data",
  "tlsDetails": {
    "tlsVersion": "TLSv1.2",
    "cipherSuite": "ECDHE-RSA-AES128-SHA",
    "clientProvidedHostHeader": "ebs.us-west-2.amazonaws.com"
  }
}

```

GetSnapshotBlock

```

{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "IAMUser",
    "principalId": "AIDAT4HPB2A03JEXAMPLE",
    "arn": "arn:aws:iam::123456789012:user/user",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "userName": "user"
  },
  "eventTime": "2021-06-02T20:43:05Z",

```

```
"eventSource": "ebs.amazonaws.com",
"eventName": "GetSnapshotBlock",
"awsRegion": "us-east-1",
"sourceIPAddress": "111.111.111.111",
"userAgent": "PostmanRuntime/7.28.0",
"requestParameters": {
  "snapshotId": "snap-abcdef01234567890",
  "blockIndex": 1,
  "blockToken": "EXAMPLEiL5E3pMPFpaDwjExM2/mnSKh1mQfcbjwe2mM7EwhrgCdPAEXAMPLE"
},
"responseElements": null,
"requestID": "examplea-6eca-4964-abfd-fd9f0example",
"eventID": "example6-4048-4365-a275-42e94example",
"readOnly": true,
"resources": [
  {
    "accountId": "123456789012",
    "type": "AWS::EC2::Snapshot",
    "ARN": "arn:aws:ec2:us-west-2::snapshot/snap-abcdef01234567890"
  }
],
"eventType": "AwsApiCall",
"managementEvent": false,
"recipientAccountId": "123456789012",
"eventCategory": "Data",
"tlsDetails": {
  "tlsVersion": "TLSv1.2",
  "cipherSuite": "ECDHE-RSA-AES128-SHA",
  "clientProvidedHostHeader": "ebs.us-west-2.amazonaws.com"
}
}
```

PutSnapshotBlock

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "IAMUser",
    "principalId": "AIDAT4HPB2A03JEXAMPLE",
    "arn": "arn:aws:iam::123456789012:user/user",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "userName": "user"
  }
}
```



```
  },
  "eventTime": "2021-06-02T21:09:17Z",
  "eventSource": "ebs.amazonaws.com",
  "eventName": "PutSnapshotBlock",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "111.111.111.111",
  "userAgent": "PostmanRuntime/7.28.0",
  "requestParameters": {
    "snapshotId": "snap-abcdef01234567890",
    "blockIndex": 1,
    "dataLength": 524288,
    "checksum": "exampleodSGvFSb1e3kxWUgb0Q4TbzPurnsfVexample",
    "checksumAlgorithm": "SHA256"
  },
  "responseElements": {
    "checksum": "exampleodSGvFSb1e3kxWUgb0Q4TbzPurnsfVexample",
    "checksumAlgorithm": "SHA256"
  },
  "requestID": "example3-d5e0-4167-8ee8-50845example",
  "eventID": "example8-4d9a-4aad-b71d-bb31fexample",
  "readOnly": false,
  "resources": [
    {
      "accountId": "123456789012",
      "type": "AWS::EC2::Snapshot",
      "ARN": "arn:aws:ec2:us-west-2::snapshot/snap-abcdef01234567890"
    }
  ],
  "eventType": "AwsApiCall",
  "managementEvent": false,
  "recipientAccountId": "123456789012",
  "eventCategory": "Data",
  "tlsDetails": {
    "tlsVersion": "TLSv1.2",
    "cipherSuite": "ECDHE-RSA-AES128-SHA",
    "clientProvidedHostHeader": "ebs.us-west-2.amazonaws.com"
  }
}
```

よくある質問

ステータスが保留中になっているスナップショットに、EBS direct API からアクセスできますか？

いいえ。スナップショットは、完了ステータスの場合のみアクセスできます。

ブロックインデックスは、EBS direct API から数値順に返されますか？

はい。返されるブロックインデックスは一意で、数値順になっています。

MaxResults パラメータ値が 100 未満のリクエストを送信できますか？

いいえ。使用できる最小の MaxResult パラメータ値は 100 です。MaxResult パラメータ値が 100 未満のリクエストを送信し、スナップショット内に 100 を超えるブロックがあった場合、API は最低 100 の結果を返します。

複数の API リクエストを同時に実行できますか？

API リクエストは複数を実行できます。ボトルネックを避けるために、アカウントで実行されている他のワークロードに注意してください。また、EBS direct API ワークフロー内に再試行メカニズムを組み込んで、スロットリング、タイムアウト、サービスの利用不可に対処する必要があります。詳細については、[パフォーマンスの最適化](#)を参照してください。

EBS direct API Service Quotas を確認して、1 秒あたりに実行できる API リクエストの数を判断します。詳細については、AWS 全般のリファレンスの[Amazon Elastic Block Store エンドポイントとクォータ](#)を参照してください。

ListChangedBlocks アクションを実行したときに、スナップショット内にブロックがあっても空のレスポンスが返されることがありますか？

はい。スナップショット内の変更されたブロックが少ない場合、レスポンスは空になる場合があります。ただし、API は次ページのトークン値を返します。次ページのトークン値を使用して、結果の次ページに進みます。API から返された次ページのトークン値が null である場合は、結果の最終ページに達したことを確認できます。

NextToken パラメータと StartingBlockIndex パラメータを一緒に指定した場合、どちらのパラメータが使用されますか？

NextToken が使用され、StartingBlockIndex は無視されます。

ブロックトークンとネクストトークンの有効期間はどれくらいですか？

ブロックトークンの有効期間は 7 日で、ネクストトークンの有効期間は 60 分です。

暗号化されたスナップショットはサポートされますか？

はい。暗号化されたスナップショットには、EBS ダイレクト API を使用してアクセスできます。

暗号化されたスナップショットにアクセスするには、スナップショットの暗号化に使用された KMS キーおよび AWS KMS 復号アクションへのアクセス権が必要です。ユーザーに割り当てる [EBS ダイレクト API 用の IAM アクセス許可](#) ポリシーについては、このガイドの前半にある [AWS KMS セクション](#) を参照してください。

パブリックスナップショットはサポートされていますか？

パブリックスナップショットはサポートされていません。

Outposts で Amazon EBS ローカルスナップショットはサポートされていますか？

Outposts で Amazon EBS ローカルスナップショットはサポートされていません。

スナップショットブロックのリストは、スナップショット内のすべてのブロックインデックスとブロックトークンを返すのですか、それともデータが書き込まれたものだけを返すのですか？

データが書き込まれたブロックインデックスとブロックトークンのみを返します。

セキュリティ分析および運用に関するトラブルシューティングを行うために、アカウントで EBS direct API によって実行された API コールの履歴を取得できますか？

はい。アカウントで EBS direct API によって実行された API コールの履歴を取得するには、AWS Management Console で AWS CloudTrail を有効にします。詳細については、「[AWS CloudTrail による EBS direct API の API コールのログ記録](#)」を参照してください。

Amazon Elastic Block Store のセキュリティ

AWS でのクラウドセキュリティは最優先事項です。AWS のユーザーは、セキュリティを最も重視する組織の要件を満たすように構築されたデータセンターとネットワークアーキテクチャを利用できます。

セキュリティは、AWS とユーザーの間の責任共有です。[責任共有モデル](#)では、これをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティとして説明しています。

- クラウドのセキュリティ - AWS は、AWS クラウドで AWS のサービスを実行するインフラストラクチャを保護する責任を担います。また、AWS は、ユーザーが安全に使用できるサービスも提供します。[AWS コンプライアンスプログラム](#)の一環として、サードパーティーの監査が定期的にセキュリティの有効性をテストおよび検証しています。Amazon Elastic Block Store に適用するコンプライアンスプログラムの詳細については、「[コンプライアンスプログラムによる対象範囲内の AWS のサービス](#)」を参照してください。
- クラウド内のセキュリティ - ユーザーの責任は、使用する AWS サービスに応じて異なります。また、お客様は、データの機密性、会社の要件、適用される法律や規制など、その他の要因についても責任を負います。

このドキュメントは、Amazon EBS 使用時の責任共有モデルの適用方法を理解するのうえで役立ちます。次のトピックでは、セキュリティおよびコンプライアンスの目標を達成するため、Amazon EBS を構成する方法について説明します。Amazon EBS リソースのモニタリングおよびセキュリティ保護に役立つその他の AWS サービスを使用する方法も説明します。

トピック

- [Amazon Elastic Block Store でデータ保護](#)
- [Amazon Elastic Block Store 用 ID およびアクセス管理](#)
- [Amazon Elastic Block Store のコンプライアンス検証](#)
- [Amazon Elastic Block Store の回復力](#)

Amazon Elastic Block Store でデータ保護

AWS [責任共有モデル](#)は、Amazon Elastic Block Store のデータ保護に適用されます。このモデルで説明されているように、AWS は、AWS クラウドのすべてを実行するグローバルインフラストラクチャを保護するがあります。このインフラストラクチャでホストされているコンテンツに対する管

理を維持する責任はユーザーにあります。また、使用する AWS のサービスのセキュリティ設定と管理タスクもユーザーの責任となります。データプライバシーの詳細については、「[データプライバシーのよくある質問](#)」を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、「AWS セキュリティブログ」に投稿された「[AWS 責任共有モデルおよび GDPR](#)」のブログ記事を参照してください。

データを保護するため、AWS アカウントの認証情報を保護し、AWS IAM Identity Center または AWS Identity and Access Management (IAM) を使用して個々のユーザーをセットアップすることをお勧めします。こうすると、それぞれのジョブを遂行するために必要なアクセス許可のみを各ユーザーに付与できます。また、以下の方法でデータを保護することをお勧めします。

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。TLS 1.2 が必須です。TLS 1.3 が推奨されます。
- AWS CloudTrail で API とユーザーアクティビティロギングをセットアップします。
- AWS のサービス内でデフォルトである、すべてのセキュリティ制御に加え、AWS の暗号化ソリューションを使用します。
- Amazon Macie などの高度なマネージドセキュリティサービスを使用します。これらは、Amazon S3 に保存されている機密データの検出と保護を支援します。
- コマンドラインインターフェイスまたは API により AWS にアクセスするときに FIPS 140-2 検証済み暗号化モジュールが必要な場合は、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、「[連邦情報処理規格 \(FIPS\) 140-2](#)」を参照してください。

お客様の E メールアドレスなどの機密情報やセンシティブ情報は、タグや名前フィールドなどの自由形式のフィールドに配置しないことを強くお勧めします。これには、Amazon EBS またはコンソール、API、AWS CLI、AWS SDK を使用するその他の AWS のサービスを使用する場合も含まれます。名前に使用する自由記述のテキストフィールドやタグに入力したデータは、課金や診断ログに使用される場合があります。外部サーバーへの URL を提供する場合は、そのサーバーへのリクエストを検証するための認証情報を URL に含めないように強くお勧めします。

トピック

- [Amazon EBS のデータセキュリティ](#)
- [保管中と転送中の暗号化](#)
- [KMS キー管理](#)

Amazon EBS のデータセキュリティ

Amazon EBS ボリュームは、初期化されていない raw ブロックデバイスとして表示されます。これらのデバイスは、EBS インフラストラクチャ上に作成される論理デバイスであり、Amazon EBS サービスは、お客様による利用または再利用の前に、デバイスが論理的に空になっている (つまり、raw ブロックがゼロになっている、または暗号で擬似ランダムデータが含まれている) ようにします。

DoD 5220.22-M (National Industrial Security Program Operating Manual) や NIST 800-88 (Guidelines for Media Sanitization) に詳述されているような、使用後もしくは使用前 (またはその両方) に特定の使用方法を使用してすべてのデータを消去する必要がある手順がある場合、Amazon EBS でこれを行うことができます。ブロックレベルのアクティビティは、Amazon EBS サービス内の基盤となるストレージメディアに反映されます。

保管中と転送中の暗号化

Amazon EBS 暗号化は、AWS Key Management Service 暗号化キーを使用して Amazon EBS ボリューム および Amazon EBS スナップショットを暗号化できるようにする暗号化ソリューションです。EBS 暗号化オペレーションは Amazon EC2 インスタンスをホストするサーバー上で実行され、インスタンスとそれに接続されたボリューム間、ならびにそれ以降のスナップショットに含まれる保管中のデータおよび転送中のデータの両方のセキュリティを確保します。詳細については、「[Amazon EBS 暗号化](#)」を参照してください。

KMS キー管理

暗号化 Amazon EBS ボリュームまたはスナップショットを作成するとき、AWS Key Management Service キーを指定します。デフォルトでは、Amazon EBS はアカウントおよびリージョン (aws/ebs) の Amazon EBS 用 AWS マネージド KMS キーを使用します。ただし、ユーザーが作成および管理するカスタマーマネージド KMS キーを指定することができます。カスタマーマネージド KMS キーを使用すると、KMS キーを作成、更新、無効化する機能を含め、より柔軟性が得られます。

カスタマーマネージド KMS キーを使用するには、ユーザーに KMS キーを使用する許可を付与する必要があります。詳細については、「[ユーザーのアクセス許可](#)」を参照してください。

Important

Amazon EBS は、「[対称 KMS キー](#)」のみをサポートします。「[非対称 KMS キー](#)」を使用して Amazon EBS ボリュームおよびスナップショットを暗号化することはできません

ん。KMS キーが対称か非対称かを判別する情報については、「[Identifying asymmetric KMS keys](#)」を参照してください。

Amazon EBS では、ボリュームごとに指定した KMS キーで暗号化された一意のデータキーを生成するように AWS KMS に要求します。Amazon EBS は、暗号化されたデータキーをボリュームとともに保存します。次に、ボリュームを Amazon EC2 インスタンスにアタッチすると、Amazon EBS は AWS KMS を呼び出してデータキーを復号します。Amazon EBS は ハイパーバイザーメモリでプレーンテキストデータキーを使用し、すべての I/O をボリュームに暗号化します。詳細については、「[EBS 暗号化の仕組み](#)」を参照してください。

Amazon Elastic Block Store 用 ID およびアクセス管理

AWS Identity and Access Management (IAM) は、管理者が AWS リソースへのアクセスを安全に制御するために役立つ AWS のサービスです。IAM 管理者は、Amazon EBS リソースの使用に「認証」(サインイン) されて「承認」(許可の付与) される人を管理します。IAM は、追加費用なしで使用できる AWS のサービスです。

トピック

- [対象者](#)
- [アイデンティティによる認証](#)
- [ポリシーを使用したアクセス権の管理](#)
- [Amazon Elastic Block Store が IAM と連携する方法](#)
- [Amazon Elastic Block Store のアイデンティティベースのポリシーの例](#)
- [Amazon EBS の ID およびアクセスのトラブルシューティング](#)

対象者

AWS Identity and Access Management (IAM) の使用方法は、Amazon EBS で行う作業に応じて異なります。

サービスユーザー – Amazon EBS サービスを使用して業務を行う場合、管理者が必要な認証情報および許可を付与します。業務のために使用する Amazon EBS 機能が増えるにつれ、追加の許可が必要な場合があります。アクセスの管理方法を理解すると、管理者から適切な権限をリクエストするのに役に立ちます。Amazon EBS の機能にアクセスできない場合、「[Amazon EBS の ID およびアクセスのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

サービス管理者 – 社内の Amazon EBS リソースを担当している場合、通常は Amazon EBS へのフルアクセスがあります。サービスのユーザーがどの Amazon EBS 機能やリソースにアクセスするかについて決めるのは、管理者の仕事です。その後、IAM 管理者にリクエストを送信して、サービスユーザーの権限を変更する必要があります。このページの情報を点検して、IAM の基本概念を理解してください。会社が Amazon EBS に IAM を使用方法の詳細については、「[Amazon Elastic Block Store が IAM と連携する方法](#)」を参照してください。

IAM 管理者 – IAM 管理者である場合、Amazon EBS へのアクセスを管理するポリシーの作成方法の詳細について確認することをお勧めします。IAM で使用可能な Amazon EBS アイデンティティベースのポリシーの例を確認するには、「[Amazon Elastic Block Store のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」を参照してください。

アイデンティティによる認証

認証とは、アイデンティティ認証情報を使用して AWS にサインインする方法です。ユーザーは、AWS アカウントのルートユーザーとして、または IAM ロールを担うことで、認証済み (AWS にサインイン済み) である必要があります。

ID ソースから提供された認証情報を使用して、フェデレーテッドアイデンティティとして AWS にサインインできます。AWS IAM Identity Center フェデレーテッドアイデンティティの例としては、(IAM Identity Center) ユーザー、会社のシングルサインオン認証、Google または Facebook の認証情報などがあります。フェデレーテッドアイデンティティとしてサインインする場合、IAM ロールを使用して、前もって管理者により ID フェデレーションが設定されています。フェデレーションを使用して AWS にアクセスする場合、間接的にロールを引き受けることになります。

ユーザーのタイプに応じて、AWS Management Console または AWS アクセスポータルにサインインできます。AWS へのサインインの詳細については、「AWS サインインユーザーガイド」の「[AWS アカウントにサインインする方法](#)」を参照してください。

プログラムを使用して AWS にアクセスする場合、AWS は Software Development Kit (SDK) とコマンドラインインターフェイス (CLI) を提供し、認証情報を使用してリクエストに暗号で署名します。AWS ツールを使用しない場合は、リクエストに自分で署名する必要があります。リクエストに署名する推奨方法の使用については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS API リクエストの署名](#)」を参照してください。

使用する認証方法を問わず、セキュリティ情報の提供を追加でリクエストされる場合もあります。例えば、AWS は、アカウントのセキュリティを強化するために多要素認証 (MFA) を使用することをお勧めします。詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[多要素認証](#)」

[\(MFA\)](#)」および「IAM ユーザーガイド」の「[AWS での多要素認証 \(MFA\) の使用](#)」を参照してください。

AWS アカウントのルートユーザー

AWS アカウントを作成する場合は、このアカウントのすべての AWS のサービスとリソースに対してフルアクセスを持つ 1 つのサインイン ID から始めます。このアイデンティティは AWS アカウントのルートユーザーと呼ばれ、アカウントの作成に使用した E メールアドレスとパスワードでサインインすることによってアクセスできます。日常的なタスクには、ルートユーザーを使用しないことを強くお勧めします。ルートユーザーの認証情報を保護し、それらを使用してルートユーザーのみが実行できるタスクを実行してください。ルートユーザーとしてサインインする必要があるタスクの完全なリストについては、「IAM ユーザーガイド」の「[ルートユーザー認証情報が必要なタスク](#)」を参照してください。

フェデレーティッドアイデンティティ

ベストプラクティスとして、管理者アクセスを必要とするユーザーを含む人間のユーザーに対し、ID プロバイダーとのフェデレーションを使用して、一時的な認証情報の使用により、AWS のサービスにアクセスすることを要求します。

フェデレーティッドアイデンティティは、エンタープライズユーザーディレクトリ、ウェブ ID プロバイダー、AWS Directory Service、Identity Center ディレクトリのユーザーか、または ID ソースから提供された認証情報を使用して AWS のサービスにアクセスするユーザーです。フェデレーティッド ID が AWS アカウントにアクセスすると、ロールが継承され、そのロールが一時的な認証情報を提供します。

アクセスを一元管理する場合は、AWS IAM Identity Center を使用することをお勧めします。IAM アイデンティティセンターでユーザーとグループを作成するか、すべての AWS アカウントとアプリケーションで使用するために、独自の ID ソースで一連のユーザーとグループに接続して同期することもできます。IAM アイデンティティセンターの詳細については、[AWS IAM Identity Center ユーザーガイド] の「[IAM アイデンティティセンターとは](#)」を参照してください。

IAM ユーザーとグループ

[IAM ユーザー](#)は、1 人のユーザーまたは 1 つのアプリケーションに対して特定の権限を持つ AWS アカウント内のアイデンティティです。可能であれば、パスワードやアクセスキーなどの長期的な認証情報を保有する IAM ユーザーを作成する代わりに、一時的な認証情報を使用することをお勧めします。ただし、IAM ユーザーでの長期的な認証情報が必要な特定のユースケースがある場合は、アクセスキーをローテーションすることをお勧めします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」

の「[長期的な認証情報を必要とするユースケースのためにアクセスキーを定期的にローテーションする](#)」を参照してください。

[IAM グループ](#)は、IAM ユーザーの集団を指定するアイデンティティです。グループとしてサインインすることはできません。グループを使用して、複数のユーザーに対して一度に権限を指定できます。多数のユーザーグループがある場合、グループを使用することで権限の管理が容易になります。例えば、IAMAdmins という名前のグループを設定して、そのグループに IAM リソースを管理するアクセス許可を与えることができます。

ユーザーは、ロールとは異なります。ユーザーは 1 人の人または 1 つのアプリケーションに一意に関連付けられますが、ロールはそれを必要とする任意の人が引き受けるようになっています。ユーザーには永続的な長期の認証情報がありますが、ロールでは一時的な認証情報が提供されます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー \(ロールではなく\) の作成が適している場合](#)」を参照してください。

IAM ロール

[IAM ロール](#)は、特定のアクセス許可を持つ、AWS アカウント 内のアイデンティティです。これは IAM ユーザーに似ていますが、特定のユーザーには関連付けられていません。[ロールを切り替える](#)ことによって、AWS Management Console で IAM ロールを一時的に引き受けることができます。ロールを引き受けるには、AWS CLI または AWS API オペレーションを呼び出すか、カスタム URL を使用します。ロールを使用する方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールの使用](#)」を参照してください。

一時的な認証情報を持った IAM ロールは、以下の状況で役立ちます。

- フェデレーションユーザーアクセス - フェデレーテッドアイデンティティにアクセス許可を割り当てるには、ロールを作成してそのロールのアクセス許可を定義します。フェデレーテッドアイデンティティが認証されると、そのアイデンティティはロールに関連付けられ、ロールで定義されている権限が付与されます。フェデレーションの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティーアイデンティティプロバイダー向けロールの作成](#)」を参照してください。IAM Identity Center を使用する場合、アクセス許可セットを設定します。アイデンティティが認証後にアクセスできるものを制御するため、IAM アイデンティティセンターは、アクセス許可セットを IAM のロールに関連付けます。アクセス許可セットの詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[アクセス許可セット](#)」を参照してください。
- 一時的な IAM ユーザーアクセス許可 - IAM ユーザーまたはロールは、特定のタスクに対して複数の異なるアクセス許可を一時的に IAM ロールで引き受けることができます。
- クロスアカウントアクセス - IAM ロールを使用して、自分のアカウントのリソースにアクセスすることを、別のアカウントの人物 (信頼済みプリンシパル) に許可できます。クロスアカウントアク

セス権を付与する主な方法は、ロールを使用することです。ただし、一部の AWS のサービスでは、(ロールをプロキシとして使用する代わりに) リソースにポリシーを直接添付できます。クロスアカウントアクセスにおけるロールとリソースベースのポリシーの違いについては、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールとリソースベースのポリシーとの相違点](#)」を参照してください。

- クロスサービスアクセス - 一部の AWS のサービスでは、他の AWS のサービスの機能を使用します。例えば、あるサービスで呼び出しを行うと、通常そのサービスによって Amazon EC2 でアプリケーションが実行されたり、Amazon S3 にオブジェクトが保存されたりします。サービスでは、呼び出し元プリンシパルの権限、サービスロール、またはサービスリンクロールを使用してこれを行う場合があります。
- 転送アクセスセッション (FAS) - IAM ユーザーまたはロールを使用して AWS でアクションを実行するユーザーは、プリンシパルと見なされます。一部のサービスを使用する際に、アクションを実行することで、別のサービスの別のアクションがトリガーされることがあります。FAS は、AWS のサービスを呼び出すプリンシパルの権限を、AWS のサービスのリクエストと合わせて使用し、ダウストリームのサービスに対してリクエストを行います。FAS リクエストは、サービスが、完了するために他の AWS のサービス または リソースとのやりとりを必要とするリクエストを受け取ったときにのみ行われます。この場合、両方のアクションを実行するためのアクセス許可が必要です。FAS リクエストを行う際のポリシーの詳細については、「[転送アクセスセッション](#)」を参照してください。
- サービスロール - サービスがユーザーに代わってアクションを実行するために引き受ける [IAM ロール](#)です。IAM 管理者は、IAM 内からサービスロールを作成、変更、削除できます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS のサービスに権限を委任するロールの作成](#)」を参照してください。
- サービスにリンクされたロール - サービスにリンクされたロールは、AWS のサービスにリンクされたサービスロールの一種です。サービスがロールを引き受け、ユーザーに代わってアクションを実行できるようになります。サービスにリンクされたロールは、AWS アカウント に表示され、サービスによって所有されます。IAM 管理者は、サービスにリンクされたロールのアクセス許可を表示できますが、編集することはできません。
- Amazon EC2 で実行されているアプリケーション - EC2 インスタンスで実行され、AWS CLI または AWS API 要求を行っているアプリケーションの一時的な認証情報を管理するには、IAM ロールを使用できます。これは、EC2 インスタンス内でのアクセスキーの保存に推奨されます。AWS ロールを EC2 インスタンスに割り当て、そのすべてのアプリケーションで使用できるようにするには、インスタンスに添付されたインスタンスプロファイルを作成します。インスタンスプロファイルにはロールが含まれ、EC2 インスタンスで実行されるプログラムは一時的な認証情報を取得できます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[Amazon EC2 インスタンスで実行されるアプリケーションに IAM ロールを使用してアクセス許可を付与する](#)」を参照してください。

IAM ロールと IAM ユーザーのどちらを使用するかについては、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールの作成が適している場合 \(ユーザーではなく\)](#)」を参照してください。

ポリシーを使用したアクセス権の管理

AWS でアクセスをコントロールするには、ポリシーを作成して AWS アイデンティティまたはリソースに添付します。ポリシーは AWS のオブジェクトであり、アイデンティティやリソースに関連付けて、これらのアクセス許可を定義します。プリンシパル (ユーザー、ルートユーザー、またはロールセッション) がリクエストを行うと、AWS はこれらのポリシーを評価します。ポリシーでのアクセス許可により、リクエストが許可されるか拒否されるかが決まります。大半のポリシーは JSON ドキュメントとして AWS に保存されます。JSON ポリシードキュメントの構造と内容の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[JSON ポリシー概要](#)」を参照してください。

管理者は AWSJSON ポリシーを使用して、だれが何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

デフォルトでは、ユーザーやロールに権限はありません。IAM 管理者は、リソースで必要なアクションを実行するためのアクセス許可をユーザーに付与するため、IAM ポリシーを作成できます。その後、管理者はロールに IAM ポリシーを追加し、ユーザーはロールを引き継ぐことができます。

IAM ポリシーは、オペレーションの実行方法を問わず、アクションのアクセス許可を定義します。例えば、iam:GetRole アクションを許可するポリシーがあるとします。このポリシーがあるユーザーは、AWS Management Console、AWS CLI、または AWS API からロール情報を取得できます。

アイデンティティベースポリシー

アイデンティティベースポリシーは、IAM ユーザー、ユーザーグループ、ロールなど、アイデンティティにアタッチできる JSON 許可ポリシードキュメントです。これらのポリシーは、ユーザーとロールが実行できるアクション、リソース、および条件を制御します。アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

アイデンティティベースポリシーは、さらにインラインポリシーまたはマネージドポリシーに分類できます。インラインポリシーは、単一のユーザー、グループ、またはロールに直接埋め込まれます。管理ポリシーは、AWS アカウント内の複数のユーザー、グループ、およびロールにアタッチできるスタンドアロンポリシーです。マネージドポリシーには、AWS マネージドポリシーとカスタマー管理ポリシーがあります。管理ポリシーまたはインラインポリシーのいずれかを選択する方法につい

では、「IAM ユーザーガイド」の「[管理ポリシーとインラインポリシーの比較](#)」を参照してください。

リソースベースのポリシー

リソースベースのポリシーは、リソースに添付する JSON ポリシードキュメントです。リソースベースのポリシーには例として、IAM ロールの信頼ポリシーや Amazon S3 バケットポリシーが挙げられます。リソースベースのポリシーをサポートするサービスでは、サービス管理者はポリシーを使用して特定のリソースへのアクセスを制御できます。ポリシーが添付されているリソースの場合、指定されたプリンシパルがそのリソースに対して実行できるアクションと条件は、ポリシーによって定義されます。リソースベースのポリシーでは、[プリンシパルを指定する](#)必要があります。プリンシパルには、アカウント、ユーザー、ロール、フェデレーションユーザー、または AWS のサービスを含めることができます。

リソースベースのポリシーは、そのサービス内にあるインラインポリシーです。リソースベースのポリシーでは IAM の AWS マネージドポリシーは使用できません。

アクセスコントロールリスト (ACL)

アクセスコントロールリスト (ACL) は、どのプリンシパル (アカウントメンバー、ユーザー、またはロール) がリソースにアクセスするための許可を持つかを制御します。ACL はリソースベースのポリシーに似ていますが、JSON ポリシードキュメント形式は使用しません。

Amazon S3、AWS WAF、および Amazon VPC は、ACL をサポートするサービスの例です。ACL の詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[アクセスコントロールリスト \(ACL\) の概要](#)」を参照してください。

その他のポリシータイプ

AWS では、他の一般的ではないポリシータイプをサポートしています。これらのポリシータイプでは、より一般的なポリシータイプで付与される最大の許可を設定できます。

- 権限の境界 - 権限の境界は、アイデンティティベースのポリシーによって IAM エンティティ (IAM ユーザーまたはロール) に付与できる許可の上限を設定する高度な機能です。エンティティに権限の境界を設定できます。結果として得られる権限は、エンティティのアイデンティティベースポリシーとその権限の境界の共通部分になります。Principal フィールドでユーザーまたはロールを指定するリソースベースのポリシーでは、権限の境界は制限されません。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、権限は無効になります。アクセス許可の境界の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM エンティティのアクセス許可の境界](#)」を参照してください。

- サービスコントロールポリシー (SCP) - SCP は、AWS Organizations で組織や組織部門 (OU) の最大アクセス許可を指定する JSON ポリシーです。AWS Organizations は、ビジネスが所有する複数の AWS アカウント をグループ化し、一元管理するサービスです。組織内のすべての機能を有効にすると、サービスコントロールポリシー (SCP) を一部またはすべてのアカウントに適用できます。SCP はメンバーアカウントのエンティティに対するアクセス許可を制限します (各 AWS アカウントのルートユーザー など)。組織と SCP の詳細については、「AWS Organizations ユーザーガイド」の「[SCP の仕組み](#)」を参照してください。
- セッションポリシー - セッションポリシーは、ロールまたはフェデレーションユーザーの一時的なセッションをプログラムで作成する際にパラメータとして渡す高度なポリシーです。結果としてセッションの権限の範囲は、ユーザーまたはロールのアイデンティティベースポリシーとセッションポリシーの共通部分になります。また、リソースベースのポリシーから権限が派生する場合があります。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、権限は無効になります。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[セッションポリシー](#)」を参照してください。

複数のポリシータイプ

1 つのリクエストに複数のタイプのポリシーが適用されると、結果として作成される権限を理解するのがさらに難しくなります。複数のポリシータイプが関連するとき、リクエストを許可するかどうかを AWS が決定する方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ポリシーの評価論理](#)」を参照してください。

Amazon Elastic Block Store が IAM と連携する方法

IAM を使用して Amazon EBS へのアクセスを管理する前に、Amazon EBS で利用できる IAM 機能について説明します。

Amazon Elastic Block Store で使用できる IAM 機能

IAM の機能	Amazon EBS サポート
アイデンティティベースのポリシー	あり
リソースベースのポリシー	いいえ
ポリシーアクション	あり
ポリシーリソース	はい
ポリシー条件キー	はい

IAM の機能	Amazon EBS サポート
ACL	なし
ABAC (ポリシー内のタグ)	部分的
一時的な認証情報	あり
プリンシパル権限	あり
サービスロール	あり
サービスリンクロール	いいえ

Amazon EBS およびその他の AWS サービスがほとんどの IAM 機能との連携する方法の概要については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM と連携する AWS サービス](#)」を参照してください。

Amazon EBS のアイデンティティベースのポリシー

アイデンティティベースポリシーをサポートする	あり
------------------------	----

アイデンティティベースポリシーは、IAM ユーザー、ユーザーグループ、ロールなど、アイデンティティに添付できる JSON アクセス許可ポリシードキュメントです。これらのポリシーは、ユーザーとロールが実行できるアクション、リソース、および条件を制御します。アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

IAM アイデンティティベースのポリシーでは、許可または拒否するアクションとリソース、およびアクションを許可または拒否する条件を指定できます。プリンシパルは、それが添付されているユーザーまたはロールに適用されるため、アイデンティティベースのポリシーでは指定できません。JSON ポリシーで使用できるすべての要素について学ぶには、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM JSON ポリシーの要素のリファレンス](#)」を参照してください。

Amazon EBS のアイデンティティベースのポリシー例

Amazon EBS のアイデンティティベースのポリシー例を確認するには、「[Amazon Elastic Block Store のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」を参照してください。

このアクションは、関連付けられたオペレーションを実行するためのアクセス許可を付与するポリシーで使用されます。

Amazon EBS アクションのリストについては、「Service Authorization Reference」の「[Actions, resources, and condition keys](#)」を参照してください。

Amazon EBS のポリシーアクションは、アクションの前に次のプレフィックスを使用します。

```
ec2
```

単一のステートメントで複数のアクションを指定するには、アクションをカンマで区切ります。

```
"Action": [  
  "ec2:action1",  
  "ec2:action2"  
]
```

Amazon EBS のアイデンティティベースのポリシー例を確認するには、「[Amazon Elastic Block Store のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」を参照してください。

Amazon EBS のポリシーリソース

ポリシーリソースに対するサポート	あり
------------------	----

管理者は AWS JSON ポリシーを使用して、誰が何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

Resource JSON ポリシーの要素は、オブジェクトあるいはアクションが適用されるオブジェクトを指定します。ステートメントには、Resource または NotResource 要素を含める必要があります。ベストプラクティスとしては、[Amazon リソースネーム \(ARN\)](#) を使用してリソースを指定します。これは、リソースレベルのアクセス許可と呼ばれる特定のリソースタイプをサポートするアクションに対して実行できます。

オペレーションのリスト化など、リソースレベルのアクセス許可をサポートしないアクションの場合は、ステートメントがすべてのリソースに適用されることを示すために、ワイルドカード (*) を使用します。

```
"Resource": "*"
```

Amazon EBS のリソースタイプおよびその ARN のリストを確認するには、「Service Authorization Reference」の「[Resources Defined by Amazon Elastic Block Store](#)」を参照してください。どのアクションで各リソースの ARN を指定できるかについては、「[Actions Defined by Amazon Elastic Block Store](#)」を参照してください。

一部の Amazon EBS API アクションは複数のリソースをサポートします。複数リソースを単一ステートメントで指定するには、ARN をカンマで区切ります。たとえば、DescribeVolumes は vol-01234567890abcdef および vol-09876543210fedcba にアクセスするため、プリンシパルには両方のリソースにアクセスする許可が必要です。

```
"Resource": [  
  "arn:aws:ec2:us-east-1:123456789012:volume/vol-01234567890abcdef",  
  "arn:aws:ec2:us-east-1:123456789012:volume/vol-09876543210fedcba"  
]
```

Amazon EBS のポリシー条件キー

サービス固有のポリシー条件キーのサポート	はい
----------------------	----

管理者は AWS JSON ポリシーを使用して、誰が何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどんなリソースにどんな条件でアクションを実行できるかということです。

Condition 要素 (または Condition ブロック) を使用すると、ステートメントが有効な条件を指定できます。Condition 要素はオプションです。equal や less than などの[条件演算子](#)を使用して条件式を作成することによって、ポリシーの条件とリクエスト内の値を一致させることができます。

1 つのステートメントに複数の Condition 要素を指定する場合、または 1 つの Condition 要素に複数のキーを指定する場合、AWS は AND 論理演算子を使用してそれらを評価します。単一の条件キーに複数の値を指定する場合、AWS は OR 論理演算子を使用して条件を評価します。ステートメントの権限が付与される前にすべての条件が満たされる必要があります。

条件を指定する際にプレースホルダー変数も使用できます。例えば IAM ユーザーに、IAM ユーザー名がタグ付けされている場合のみリソースにアクセスできる許可を付与できます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの要素: 変数およびタグ](#)」を参照してください。

AWS はグローバル条件キーとサービス固有の条件キーをサポートしています。すべての AWS グローバル条件キーを確認するには、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS グローバル条件コンテキストキー](#)」を参照してください。

たとえば、次の条件では、ボリュームタイプが gp2 の場合にのみ、プリンシパルがボリュームに対してアクションを実行できます。

```
"Condition":{
  "StringLikeIfExists":{
    "ec2:VolumeType":"gp2"
  }
}
```

Amazon EBS の条件キーのリストを確認するには、「Service Authorization Reference」の「[Actions, resources, and condition keys](#)」を参照してください。どのアクションおよびリソースで条件キーを使用できるについては、「[Actions Defined by Amazon Elastic Block Store](#)」を参照してください。

Amazon EBS の ACL

ACL のサポート	なし
-----------	----

アクセスコントロールリスト (ACL) は、どのプリンシパル (アカウントメンバー、ユーザー、またはロール) がリソースにアクセスするための権限を持つかを制御します。ACL はリソースベースのポリシーに似ていますが、JSON ポリシードキュメント形式は使用しません。

Amazon EBS の ABAC

ABAC (ポリシー内のタグ) のサポート	部分的
-----------------------	-----

属性ベースのアクセス制御 (ABAC) は、属性に基づいてアクセス許可を定義する認可戦略です。AWS では、これらの属性はタグと呼ばれます。タグは、IAM エンティティ (ユーザーまたはロール)、および多数の AWS リソースに添付できます。エンティティとリソースのタグ付けは、ABAC の最初の手順です。次に、プリンシパルのタグがアクセスを試行するリソースのタグと一致したときにオペレーションを許可するよう、ABAC ポリシーを設計します。

ABAC は、急成長する環境やポリシー管理が煩雑になる状況で役立ちます。

タグに基づいてアクセスを制御するには、`aws:ResourceTag/key-name`、`aws:RequestTag/key-name`、または `aws:TagKeys` の条件キーを使用して、ポリシーの [条件要素](#) でタグ情報を提供します。

サービスがすべてのリソースタイプに対して 3 つの条件キーすべてをサポートする場合、そのサービスの値は Yes です。サービスが一部のリソースタイプに対してのみ 3 つの条件キーすべてをサポートする場合、値は Partial です。

ABAC の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の [\[ABAC とは?\]](#) を参照してください。ABAC をセットアップする手順を説明するチュートリアルについては、「IAM ユーザーガイド」の [「属性ベースのアクセス制御 \(ABAC\) を使用する」](#) を参照してください。

Amazon EBS での一時的な認証情報の使用

一時的な認証情報のサポート

あり

AWS のサービスには、一時的な認証情報を使用してサインインしても機能しないものがあります。一時的な認証情報を利用できる AWS のサービスを含めた詳細情報については、「IAM ユーザーガイド」の [\[IAM と連携する AWS のサービス\]](#) を参照してください。

ユーザー名とパスワード以外の方法で AWS Management Console にサインインする場合は、一時的な認証情報を使用していることになります。例えば、会社のシングルサインオン (SSO) リンクを使用して AWS にアクセスすると、そのプロセスは自動的に一時認証情報を作成します。また、ユーザーとしてコンソールにサインインしてからロールを切り替える場合も、一時的な認証情報が自動的に作成されます。ロールの切り替えに関する詳細については、「IAM ユーザーガイド」の [「ロールへの切り替え \(コンソール\)」](#) を参照してください。

一時認証情報は、AWS CLI または AWS API を使用して手動で作成できます。作成後、一時的な認証情報を使用して AWS にアクセスできるようになります。AWS は、長期的なアクセスキーを使用する代わりに、一時的な認証情報を動的に生成することをお勧めします。詳細については、「[IAM の一時的セキュリティ認証情報](#)」を参照してください。

Amazon EBS 用クロスサービスプリンシパルの許可

フォワードアクセスセッション (FAS) をサポート

はい

IAM ユーザーまたはロールを使用して AWS でアクションを実行するユーザーは、プリンシパルと見なされます。一部のサービスを使用する際に、アクションを実行してから、別のサービスの別のアクションを開始することがあります。FAS は、AWS のサービスを呼び出すプリンシパルの権限

を、AWS のサービスのリクエストと合わせて使用し、ダウンストリームのサービスに対してリクエストを行います。FAS リクエストは、サービスが、完了するために他の AWS のサービス または リソースとのやりとりを必要とするリクエストを受け取ったときにのみ行われます。この場合、両方のアクションを実行するためのアクセス許可が必要です。FAS リクエストを行う際のポリシーの詳細については、「[転送アクセスセッション](#)」を参照してください。

Amazon EBS 用サービスロール

サービスロールに対するサポート あり

サービスロールとは、サービスがユーザーに代わってアクションを実行するために引き受ける [IAM ロール](#) です。IAM 管理者は、IAM 内からサービスロールを作成、変更、削除できます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS のサービスに権限を委任するロールの作成](#)」を参照してください。

Warning

サービスロールの許可を変更すると、Amazon EBS の機能が破損する恐れがあります。Amazon EBS が指示するときのみ、サービスロールを編集してください。

Amazon EBS 用サービスリンクロール

サービスにリンクされたロールのサポート いいえ

サービスにリンクされたロールは、AWS のサービスにリンクされているサービスロールの一種です。サービスがロールを引き受け、ユーザーに代わってアクションを実行できるようになります。サービスにリンクされたロールは、AWS アカウントに表示され、サービスによって所有されます。IAM 管理者は、サービスにリンクされたロールのアクセス許可を表示できますが、編集することはできません。

サービスにリンクされたロールの作成または管理の詳細については、「[IAM と提携する AWS サービス](#)」を参照してください。表の中から、[サービスにリンクされたロール] 列から Yes を含むサービスを検索します。サービスにリンクされたロールに関するドキュメントをサービスで表示するには、[はい] リンクを選択します。

Amazon Elastic Block Store のアイデンティティベースのポリシーの例

デフォルトでは、ユーザーおよびロールには Amazon EBS リソースを作成または変更する許可がありません。また、AWS Management Console、AWS Command Line Interface (AWS CLI)、または AWS API を使用してタスクを実行することもできません。IAM 管理者は、リソースに必要なアクションを実行するための権限をユーザーに付与する IAM ポリシーを作成できます。その後、管理者がロールに IAM ポリシーを追加すると、ユーザーはロールを引き受けることができます。

これらサンプルの JSON ポリシードキュメントを使用して、IAM アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

Amazon EBS が定義するアクションおよびリソースタイプ (リソースタイプごとの ARN の形式を含む) の詳細については、「Service Authorization Reference」の「[Actions, Resources, and Condition Keys for Amazon Elastic Block Store](#)」を参照してください。

トピック

- [ポリシーのベストプラクティス](#)
- [Amazon EBS コンソールの使用](#)
- [自分の許可の表示をユーザーに許可する](#)
- [ボリュームの使用](#)
- [スナップショットの使用](#)

ポリシーのベストプラクティス

アイデンティティベースのポリシーは、あるユーザーがアカウントの Amazon EBS リソースを作成、アクセス、削除できるかどうかを決定します。これらのアクションを実行すると、AWS アカウントに料金が発生する可能性があります。アイデンティティベースのポリシーを作成したり編集したりする際には、以下のガイドラインと推奨事項に従ってください。

- AWS マネージドポリシーを使用して開始し、最小特権のアクセス許可に移行する – ユーザーとワークロードへの許可の付与を開始するには、多くの一般的なユースケースのためにアクセス許可を付与する AWS マネージドポリシーを使用します。これらは AWS アカウントで使用できます。ユースケースに応じた AWS カスタマー管理ポリシーを定義することで、許可をさらに減らすことをお勧めします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS マネージドポリシー](#)」または「[職務機能の AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

- 最小特権を適用する - IAM ポリシーでアクセス許可を設定する場合、タスクの実行に必要なアクセス許可のみを付与します。これを行うには、特定の条件下で特定のリソースに対して実行できるアクションを定義します。これは、最小特権権限とも呼ばれています。IAM を使用してアクセス許可を適用する方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM でのポリシーとアクセス許可](#)」を参照してください。
- IAM ポリシーで条件を使用してアクセスをさらに制限する - ポリシーに条件を追加して、アクションやリソースへのアクセスを制限できます。例えば、ポリシー条件を記述して、すべてのリクエストを SSL を使用して送信するように指定できます。また、AWS CloudFormation などの特定の AWS のサービスを介して使用する場合、条件を使用してサービスアクションへのアクセスを許可することもできます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM JSON ポリシー要素：条件](#)」を参照してください。
- IAM Access Analyzer を使用して IAM ポリシーを検証し、安全で機能的なアクセス許可を確保する - IAM Access Analyzer は、新規および既存のポリシーを検証して、ポリシーが IAM ポリシー言語 (JSON) および IAM のベストプラクティスに準拠するようにします。IAM アクセスアナライザーは 100 を超えるポリシーチェックと実用的な推奨事項を提供し、安全で機能的なポリシーの作成をサポートします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM Access Analyzer ポリシーの検証](#)」を参照してください。
- 多要素認証 (MFA) を要求する - AWS アカウントで IAM ユーザーまたはルートユーザーを要求するシナリオがある場合は、セキュリティを強化するために MFA をオンにします。API オペレーションが呼び出されるときに MFA を必須にするには、ポリシーに MFA 条件を追加します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[MFA 保護 API アクセスの設定](#)」を参照してください。

IAM でのベストプラクティスの詳細については、『IAM ユーザーガイド』の「[IAM でのセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

Amazon EBS コンソールの使用

Amazon Elastic Block Store コンソールにアクセスするには、最小限の許可セットが必要です。これらの許可は、AWS アカウントの Amazon EBS リソースに関する詳細をリストおよび表示できるようにする必要があります。最小限必要なアクセス許可よりも制限が厳しいアイデンティティベースのポリシーを作成すると、そのポリシーを持つエンティティ (ユーザーまたはロール) ではコンソールが意図したとおりに機能しません。

AWS CLI または AWS API のみを呼び出すユーザーには、最小限のコンソールアクセス許可を付与する必要はありません。代わりに、実行しようとしている API オペレーションに一致するアクションのみへのアクセスを許可します。

ユーザーおよびロールが引き続き Amazon EBS コンソールを使用できるようにするには、エンティティに Amazon EBS *ConsoleAccess* または *ReadOnly* AWS マネージドポリシーもアタッチしてください。詳細については、『IAM ユーザーガイド』の「[ユーザーへの権限の追加](#)」を参照してください。

自分の許可の表示をユーザーに許可する

この例では、ユーザーアイデンティティに添付されたインラインおよびマネージドポリシーの表示を IAM ユーザーに許可するポリシーを作成する方法を示します。このポリシーには、コンソールで、または AWS CLI が AWS API を使用してプログラマ的に、このアクションを完了する権限が含まれています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "ViewOwnUserInfo",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:GetUserPolicy",
        "iam:ListGroupForUser",
        "iam:ListAttachedUserPolicies",
        "iam:ListUserPolicies",
        "iam:GetUser"
      ],
      "Resource": ["arn:aws:iam::*:user/${aws:username}"]
    },
    {
      "Sid": "NavigateInConsole",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:GetGroupPolicy",
        "iam:GetPolicyVersion",
        "iam:GetPolicy",
        "iam:ListAttachedGroupPolicies",
        "iam:ListGroupPolicies",
        "iam:ListPolicyVersions",
        "iam:ListPolicies",
        "iam:ListUsers"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```



```
]
}
```

ボリュームの使用

例

- [例: ボリュームのアタッチとデタッチ](#)
- [例: ボリュームの作成](#)
- [例: タグ付きのボリュームの作成](#)
- [例: Amazon EC2 コンソールを使用したボリュームの操作](#)

例: ボリュームのアタッチとデタッチ

API アクションが複数のリソースを指定するために発信者を必要とする場合、ユーザーがすべての必要なリソースにアクセスできるようにポリシーステートメントを作成する必要があります。1つ以上のリソースで Condition エlementを使用する必要がある場合、この例のとおり複数のステートメントを作成する必要があります。

以下のポリシーでは、ユーザーがタグ volume_user=iam-user-name」の付いたボリュームを、タグ department=devの付いたインスタンスにアタッチしたり、またインスタンスからボリュームをデタッチしたりできるようにします。このポリシーを IAM グループにアタッチする場合、aws:username ポリシー変数によってグループのユーザーに、値としてユーザー名を持つタグ名が volume_user のインスタンスからボリュームをアタッチまたはデタッチするための許可が付与されます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:AttachVolume",
        "ec2:DetachVolume"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:instance/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/department": "dev"
        }
      }
    }
  ]
}
```

```

    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:AttachVolume",
      "ec2:DetachVolume"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "aws:ResourceTag/volume_user": "${aws:username}"
      }
    }
  }
]
}

```

例: ボリユームの作成

次のポリシーでは、ユーザーが [CreateVolume](#) API アクションを使用することができます。ユーザーは、ボリユームが暗号化されていて、ボリユーム サイズが 20 GiB 未満の場合にのみボリユームの作成を許可されます。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateVolume"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
      "Condition": {
        "NumericLessThan": {
          "ec2:VolumeSize" : "20"
        },
        "Bool": {
          "ec2:Encrypted" : "true"
        }
      }
    }
  ]
}

```

```
}
```

例: タグ付きのボリュームの作成

次のポリシーには、タグ `aws:RequestTag` および `costcenter=115` を使用して作成したすべてのボリュームへのタグ付けをユーザーに求める `stack=prod` 条件キーが含まれています。ユーザーがこれらのタグを渡さないか、タグをまったく指定しない場合、リクエストは失敗します。

タグを適用するリソース作成アクションでは、ユーザーが `CreateTags` アクションを使用するアクセス権を持っていることも必要です。2 番目のステートメントは、`ec2:CreateAction` 条件キーを使用して、ユーザーが `CreateVolume` のコンテキストのみタグを使用できるようにします。ユーザーは、既存のボリュームにも他のリソースにもタグ付けできません。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "AllowCreateTaggedVolumes",
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateVolume",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/costcenter": "115",
          "aws:RequestTag/stack": "prod"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateTags"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "ec2:CreateAction" : "CreateVolume"
        }
      }
    }
  ]
}
```

次のポリシーでは、ユーザーがタグを指定しなくてもボリュームを作成することができます。CreateTags アクションは、タグが CreateVolume リクエストで指定されている場合にのみ評価されます。ユーザーがタグを指定する場合、purpose=test タグを指定する必要があります。リクエストでは他のタグは許可されません。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateVolume",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateTags"
      ],
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/purpose": "test",
          "ec2:CreateAction": "CreateVolume"
        },
        "ForAllValues:StringEquals": {
          "aws:TagKeys": "purpose"
        }
      }
    }
  ]
}
```

例: Amazon EC2 コンソールを使用したボリュームの操作

次のポリシーは、ボリュームの表示および作成、ならびに Amazon EC2 コンソールを使用して特定のインスタンスにボリュームのアタッチおよびデタッチする許可をユーザーに付与します。

ユーザーは、「purpose=test」というタグを含むインスタンスに対してどのボリュームもアタッチできます。同様に、それらのインスタンスからボリュームをデタッチすることもできます。Amazon EC2 コンソールを使用してボリュームをアタッチするには、ユーザーに ec2:DescribeInstances アクションを使用するアクセス許可があると、[Attach Volume] ダイアログボックスのあらかじめ用意されたリストからインスタンスを選択できるため、役立ちます。ただ

し、これにより、コンソールの [Instances] ページでもすべてのインスタンスが表示されるため、このアクションを省略することもできます。

最初のステートメントでは、ボリュームを作成するときにユーザーがアベイラビリティゾーンを選択できるようにするため、`ec2:DescribeAvailabilityZones` アクションが必要です。

ユーザーは、作成したボリュームをタグ付けできません (ボリュームの作成中も作成後も)。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:DescribeVolumes",
      "ec2:DescribeAvailabilityZones",
      "ec2:CreateVolume",
      "ec2:DescribeInstances"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:AttachVolume",
      "ec2:DetachVolume"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:region:111122223333:instance/*",
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "aws:ResourceTag/purpose": "test"
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:AttachVolume",
      "ec2:DetachVolume"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:region:111122223333:volume/*"
  }
  ]
}
```

スナップショットの使用

以下に、CreateSnapshot (EBS ボリュームのポイントインタイムスナップショット) と CreateSnapshots (マルチボリュームスナップショット) の両方のポリシーの例を示しています。

例

- [例: スナップショットの作成](#)
- [例: スナップショットの作成](#)
- [例: タグ付きのスナップショットの作成](#)
- [例: タグを使用してマルチボリュームスナップショットを作成する](#)
- [例: スナップショットのコピー](#)
- [例: スナップショットのアクセス許可設定の変更](#)

例: スナップショットの作成

次のポリシーでは、お客様が [CreateSnapshot](#) API アクションを使用することができます。お客様は、ボリュームが暗号化されていて、ボリューム サイズが 20 GiB 未満の場合にのみスナップショットを作成できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
      "Condition": {
        "NumericLessThan": {
          "ec2:VolumeSize": "20"
        },
        "Bool": {
          "ec2:Encrypted": "true"
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
]
}
```

例: スナップショットの作成

次のポリシーでは、お客様が [CreateSnapshot](#) API アクションを使用することができます。インスタンス上のすべてのボリュームがタイプ GP2 の場合にのみ、お客様はスナップショットを作成できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": [
        "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
        "arn:aws:ec2:*:*:instance/*"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:*:volume/*",
      "Condition": {
        "StringLikeIfExists": {
          "ec2:VolumeType": "gp2"
        }
      }
    }
  ]
}
```

例: タグ付きのスナップショットの作成

次のポリシーには、タグ `aws:RequestTag` および `costcenter=115` をすべての新しいリクエストに適用することをお客様に求める `stack=prod` 条件キーが含まれています。ユーザーがこれらのタグを渡さないか、タグをまったく指定しない場合、リクエストは失敗します。

タグを適用するリソース作成アクションでは、`CreateTags` アクションを使用するアクセス権限も持っていることが求められます。3 番目のステートメントは、`ec2:CreateAction` 条件キーを使用

して、お客様が CreateSnapshot のコンテキストでみタグを使用できるようにします。お客様は、既存のボリュームにも他のリソースにもタグ付けできません。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*"
    },
    {
      "Sid": "AllowCreateTaggedSnapshots",
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/costcenter": "115",
          "aws:RequestTag/stack": "prod"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateTags",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "ec2:CreateAction": "CreateSnapshot"
        }
      }
    }
  ]
}
```

例: タグを使用してマルチボリュームスナップショットを作成する

次のポリシーには、マルチボリュームスナップショットセットを作成するときにタグ `costcenter=115` および `stack=prod` を適用することをお客様に要求する `aws:RequestTag` 条件キーが含まれています。ユーザーがこれらのタグを渡さないか、タグをまったく指定しない場合、リクエストは失敗します。


```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": [
"arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
"arn:aws:ec2:*:*:instance/*",
"arn:aws:ec2:*:*:volume/*"
      ]
    },
    {
      "Sid": "AllowCreateTaggedSnapshots",
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/costcenter": "115",
          "aws:RequestTag/stack": "prod"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateTags",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "ec2:CreateAction": "CreateSnapshots"
        }
      }
    }
  ]
}
```

次のポリシーでは、お客様がタグを指定しなくてもスナップショットを作成することができます。CreateTags アクションは、タグが CreateSnapshot または CreateSnapshots リクエストで指定されている場合にのみ評価されます。リクエストでは、タグを省略できます。タグを指定する場合、タグは purpose=test である必要があります。リクエストでは他のタグは許可されません。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateTags",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/purpose": "test",
          "ec2:CreateAction": "CreateSnapshot"
        },
        "ForAllValues:StringEquals": {
          "aws:TagKeys": "purpose"
        }
      }
    }
  ]
}
```

次のポリシーでは、お客様がタグを指定しなくても、マルチボリュームスナップショットセットを作成することができます。CreateTags アクションは、タグが CreateSnapshot または CreateSnapshots リクエストで指定されている場合にのみ評価されます。リクエストでは、タグを省略できます。タグを指定する場合、タグは purpose=test である必要があります。リクエストでは他のタグは許可されません。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateTags",
```

```

    "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "aws:RequestTag/purpose": "test",
        "ec2:CreateAction": "CreateSnapshots"
      },
      "ForAllValues:StringEquals": {
        "aws:TagKeys": "purpose"
      }
    }
  }
]
}

```

次のポリシーでは、ソースボリュームにお客様の `User:username` がタグ付けされていて、スナップショット自体に `Environment:Dev` と `User:username` がタグ付けされている場合にのみスナップショットの作成を許可します。お客様は、スナップショットにタグを追加できます。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/User": "${aws:username}"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/Environment": "Dev",
          "aws:RequestTag/User": "${aws:username}"
        }
      }
    }
  ],
  {

```

```

    "Effect": "Allow",
    "Action": "ec2:CreateTags",
    "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*"
  }
]
}

```

次の CreateSnapshots のポリシーでは、ソースボリュームにお客様用の `User:username` がタグ付けされ、スナップショット自体に `Environment:Dev` と `User:username` のタグ付けがされている場合にのみスナップショットを作成できます。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:*:instance/*",
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1:account-id:volume/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/User": "${aws:username}"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateSnapshots",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/Environment": "Dev",
          "aws:RequestTag/User": "${aws:username}"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CreateTags",
    }
  ]
}

```

```

    "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*"
  }
]
}

```

次のポリシーでは、スナップショットにお客様の User:username がタグ付けされている場合のみスナップショットの削除を許可します。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:DeleteSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/User": "${aws:username}"
        }
      }
    }
  ]
}

```

次のポリシーでは、お客様はスナップショットを作成できますが、作成されるスナップショットにタグキー value=stack が付いている場合はアクションが拒否されます。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateSnapshot",
        "ec2:CreateTags"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Deny",
      "Action": "ec2:CreateSnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {

```

```

        "ForAnyValue:StringEquals":{
            "aws:TagKeys":"stack"
        }
    }
}
]
}

```

次のポリシーでは、お客様はスナップショットを作成できますが、作成されるスナップショットにタグキー value=stack が付いている場合はアクションが拒否されます。

```

{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect":"Allow",
      "Action":[
        "ec2:CreateSnapshots",
        "ec2:CreateTags"
      ],
      "Resource":"*"
    },
    {
      "Effect":"Deny",
      "Action":"ec2:CreateSnapshots",
      "Resource":"arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition":{"
        "ForAnyValue:StringEquals":{
          "aws:TagKeys":"stack"
        }
      }
    }
  ]
}

```

次のポリシーでは、複数のアクションを単一のポリシーにまとめることができます。スナップショットがリージョン CreateSnapshots で作成された場合にのみ、(us-east-1 のコンテキスト内で) スナップショットを作成できます。スナップショットがリージョン CreateSnapshots に作成されている場合、およびインスタンスタイプが us-east-1 の場合にのみ、スナップショットを作成できます (t2* のコンテキスト内で)。

```

{

```

```

"Version": "2012-10-17",
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:CreateSnapshots",
      "ec2:CreateSnapshot",
      "ec2:CreateTags"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:ec2:*:*:instance/*",
      "arn:aws:ec2:*:*:snapshot/*",
      "arn:aws:ec2:*:*:volume/*"
    ],
    "Condition": {
      "StringEqualsIgnoreCase": {
        "ec2:Region": "us-east-1"
      },
      "StringLikeIfExists": {
        "ec2:InstanceType": ["t2.*"]
      }
    }
  }
]
}

```

例: スナップショットのコピー

CopySnapshot アクション用に指定されたリソースレベルのアクセス許可は、新しいスナップショットにのみに適用されます。ソーススナップショットには指定できません。

以下のポリシーの例では、新しいスナップショットがタグキー `purpose`、タグ値 `production` (`purpose=production`) を使用して作成された場合にのみ、プリンシパルがスナップショットをコピーすることを許可します。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "AllowCopySnapshotWithTags",
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:CopySnapshot",
      "Resource": "arn:aws:ec2:*:account-id:snapshot/*",

```

```
        "Condition": {
            "StringEquals": {
                "aws:RequestTag/purpose": "production"
            }
        }
    ]
}
```

例: スナップショットのアクセス許可設定の変更

次のポリシーでは、スナップショットに `User:username` というタグが付けられている場合にのみスナップショットを変更できます。ここで、`username` はお客様の AWS アカウントのユーザー名です。この条件が満たされない場合、リクエストは失敗します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "ec2:ModifySnapshotAttribute",
      "Resource": "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/user-name": "${aws:username}"
        }
      }
    }
  ]
}
```

Amazon EBS の ID およびアクセスのトラブルシューティング

次の情報を使用し、Amazon EBS および IAM の操作時に発生する可能性がある一般的な問題の診断や解決に役立ててください。

問題

- [Amazon EBS でアクションを実行する権限がありません](#)
- [I am not authorized to perform iam:PassRole](#)

- [自分の AWS アカウント 以外のユーザーに Amazon EBS リソースへのアクセスを許可したい](#)

Amazon EBS でアクションを実行する権限がありません

AWS Management Console から、アクションを実行する権限がないと通知された場合は、管理者に問い合わせサポートを依頼する必要があります。管理者とは、サインイン認証情報を提供した担当者です。

次のエラー例は、mateojackson IAM ユーザーがコンソールを使用してボリュームに関する詳細を表示しようとしても、`ec2:DescribeVolumes` 許可がない場合に発生します。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/mateojackson is not authorized to perform:  
ec2:DescribeVolumes on resource: volume-id
```

この場合、Mateo は AWS 管理者にボリュームの記述ができるように許可を依頼します。

I am not authorized to perform iam:PassRole

`iam:PassRole` アクションを実行する権限がないというエラーが表示された場合、ポリシーを更新して Amazon EBS にロールを渡せるようにする必要があります。

一部の AWS のサービスでは、新しいサービスロールやサービスリンクロールを作成せずに、既存のロールをサービスに渡すことができます。そのためには、サービスにロールを渡すアクセス許可が必要です。

次のエラー例は、marymajor という IAM ユーザーがコンソールを使用して Amazon EBS でアクションを実行しようとする場合に発生します。ただし、このアクションをサービスが実行するには、サービスロールから付与された権限が必要です。Mary には、ロールをサービスに渡すアクセス許可がありません。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/marymajor is not authorized to perform:  
iam:PassRole
```

この場合、Mary のポリシーを更新して Mary に `iam:PassRole` アクションの実行を許可する必要があります。

サポートが必要な場合は、AWS 管理者に問い合わせてください。管理者とは、サインイン認証情報を提供した担当者です。

自分の AWS アカウント 以外のユーザーに Amazon EBS リソースへのアクセスを許可したい

他のアカウントのユーザーや組織外の人が、リソースにアクセスするために使用できるロールを作成できます。ロールの引き受けを委託するユーザーを指定できます。リソースベースのポリシーまたはアクセスコントロールリスト (ACL) をサポートするサービスの場合、それらのポリシーを使用して、リソースへのアクセスを付与できます。

詳細については、以下を参照してください。

- Amazon EBS がこれらの機能をサポートしているかどうかを確認するには、「[Amazon Elastic Block Store が IAM と連携する方法](#)」を参照してください。
- 所有している AWS アカウント 全体のリソースへのアクセス権を付与する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[所有している別の AWS アカウント アカウントへのアクセス権を IAM ユーザーに付与する](#)」を参照してください。
- 第三者の AWS アカウント にリソースへのアクセス権を付与する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[第三者が所有する AWS アカウント へのアクセス権を付与する](#)」を参照してください。
- ID フェデレーションを介してアクセス権を付与する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[外部で認証されたユーザー \(ID フェデレーション\) にアクセス権を付与する](#)」を参照してください。
- クロスアカウントアクセスでのロールとリソースベースのポリシーの使用の違いの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールとリソースベースのポリシーとの相違点](#)」を参照してください。


Amazon Elastic Block Store のコンプライアンス検証

AWS のサービス が特定のコンプライアンスプログラムの範囲内にあるかどうかを確認するには、「[コンプライアンスプログラム別の範囲](#)」の「AWS のサービス」と「」の「AWS のサービス」を参照し、関心のあるコンプライアンスプログラムを選択してください。一般的な情報については、「[AWS コンプライアンスプログラム](#)」を参照してください。

AWS Artifact を使用して、サードパーティーの監査レポートをダウンロードできます。詳細については、「[AWS Artifact でレポートをダウンロードする](#)」を参照してください。

AWS のサービスを使用する際のユーザーのコンプライアンス責任は、ユーザーのデータの機密性や貴社のコンプライアンス目的、適用される法律および規制によって決まります。AWS では、コンプライアンスに役立つ以下のリソースを提供しています。

- [セキュリティとコンプライアンスのクイックスタートガイド](#) — これらのデプロイガイドでは、アーキテクチャ上の考慮事項について説明し、ベースライン環境をセキュリティとコンプライアンスに重点を置いた AWS にデプロイするための手順を示します。
- [Amazon Web Services での HIPAA のセキュリティとコンプライアンスのためのアーキテクチャ](#) — このホワイトペーパーは、企業が AWS を使用して HIPAA 対応アプリケーションを作成する方法を説明しています。

 Note

すべての AWS のサービスが HIPAA 適格であるわけではありません。詳細については、「[HIPAA 対応サービスのリファレンス](#)」を参照してください。

- [AWS コンプライアンスのリソース](#) — このワークブックおよびガイドのコレクションは、お客様の業界と拠点に適用される場合があります。
- [AWS Customer Compliance Guide](#) — コンプライアンスの観点から見た責任共有モデルを理解できます。このガイドは、AWS のサービスを保護するためのベストプラクティスを要約したものであり、複数のフレームワーク (米国標準技術研究所 (NIST)、ペイメントカード業界セキュリティ標準評議会 (PCI)、国際標準化機構 (ISO) など) にわたるセキュリティ統制へのガイダンスがまとめられています。
- 「AWS Config デベロッパーガイド」の「[ルールでのリソースの評価](#)」 - AWS Config サービスは、自社のプラクティス、業界ガイドライン、および規制に対するリソースの設定の準拠状態を評価します。
- [AWS Security Hub](#) — この AWS のサービスは、AWS 内のセキュリティ状態の包括的なビューを提供します。Security Hub では、セキュリティコントロールを使用して AWS リソースを評価し、セキュリティ業界標準とベストプラクティスに対するコンプライアンスをチェックします。サポートされているサービスとコントロールのリストについては、「[Security Hub のコントロールリファレンス](#)」を参照してください。
- [AWS Audit Manager](#) - この AWS のサービスは、AWS の使用状況を継続的に監査して、リスクの管理方法や、規制および業界標準へのコンプライアンスの管理方法を簡素化するために役立ちます。

Amazon Elastic Block Store の回復力

AWS グローバルインフラストラクチャは AWS リージョン およびアベイラビリティゾーンを中心に構築されています。AWS リージョン は、低レイテンシー、高スループット、そして高度な冗長ネットワークで接続される物理的に独立、隔離された複数のアベイラビリティゾーンを提供します。アベイラビリティゾーンを使用すると、中断することなくゾーン間で自動的にフェイルオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用できます。アベイラビリティゾーンは、従来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性が高く、フォールトトレラントで、スケーラブルです。

AWS リージョン とアベイラビリティゾーンの詳細については、「[AWS グローバルインフラストラクチャ](#)」を参照してください。

Amazon EBS は、AWS グローバルインフラストラクチャに加え、データ回復力およびバックアップのニーズをサポートできるように複数の機能をご用意しています。

- Amazon Data Lifecycle Managerを使用して EBS スナップショットを自動化する機能
- リージョン間の EBS スナップショットをコピーする機能

Amazon Elastic Block Store のモニタリング

モニタリングは、Amazon Elastic Block Store AWS やその他のソリューションの信頼性、可用性、パフォーマンスを維持する上で重要な部分です。AWS には、Amazon EBS を監視し、問題が発生した場合に報告し、必要に応じて自動アクションを実行するための以下のモニタリングツールが用意されています。

- AWS CloudTrailユーザーによって、またはユーザーに代わって行われた API AWS アカウント 呼び出しと関連イベントをキャプチャし、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。どのユーザーとアカウント AWS、呼び出しが行われたソース IP アドレス、呼び出しがいつ発生したかを特定できます。詳細については、『[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)』を参照してください。
- Amazon は、CloudWatch AWS AWS お客様のリソースとお客様が実行するアプリケーションをリアルタイムで監視します。メトリクスを収集および追跡し、カスタマイズされたダッシュボードを作成し、指定されたメトリックが指定したしきい値に達したときに通知またはアクションを実行するアラームを設定できます。たとえば、Amazon EC2 インスタンスの CPU CloudWatch 使用率やその他のメトリクスを追跡し、必要に応じて新しいインスタンスを自動的に起動できます。詳細については、[Amazon CloudWatch ユーザーガイドを参照してください](#)。
- Amazon EventBridge を使用すると、AWS サービスを自動化し、アプリケーションの可用性の問題やリソースの変更などのシステムイベントに自動的に対応できます。AWS サービスからのイベントは、EventBridge ほぼリアルタイムで配信されます。簡単なルールを記述して、注目するイベントと、イベントがルールに一致した場合に自動的に実行するアクションを指定できます。詳細については、[Amazon EventBridge ユーザーガイドを参照してください](#)。

トピック

- [Amazon EBS 向けの AWS CloudTrail](#)
- [Amazon EBS の Amazon CloudWatch メトリクス](#)
- [Amazon EventBridge フォー Amazon EBS](#)
- [Amazon GuardDuty フォー Amazon EBS](#)

Amazon EBS 向けの AWS CloudTrail

Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) は、AWS CloudTrail で統合されています。これは、Amazon EBS のユーザー、ロール、AWS サービスで実行されたアクションの記録を提供する

サービスです。CloudTrail は、Amazon EBS にすべての API コールをイベントとしてキャプチャします。キャプチャされた呼び出しには、Amazon EBS コンソールからの呼び出しや Amazon EBS API オペレーションへのコード呼び出しが含まれます。証跡を作成する場合、Amazon EBS のイベントを含め、Amazon S3 バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail によって収集された情報を使用すると、Amazon EBS に対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエストした者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

CloudTrail の詳細については、[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)を参照してください。

CloudTrail の Amazon EBS 情報

CloudTrail は、AWS アカウントを作成すると、その中で有効になります。Amazon EBS でアクティビティが発生すると、そのアクティビティは [イベント履歴] で CloudTrail イベントとその他の AWS サービスイベントと共に記録されます。最近のイベントは、AWS アカウントで表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、[CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示](#)を参照してください。

Amazon EBS のイベントを含む AWS アカウント 内の継続的なレコードのイベントには、証跡を作成します。証跡により、CloudTrail はログファイルを Amazon S3 バケットに配信できます。デフォルトでは、コンソールで証跡を作成するときに、証跡がすべての AWS リージョンに適用されます。証跡は、AWS パーティションのすべてのリージョンからのイベントをログに記録し、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集したイベントデータをより詳細に分析し、それに基づく対応するためにその他の AWS サービスを設定できます。詳細については、次を参照してください:

- [「追跡の作成の概要」](#)
- [CloudTrail がサポートされているサービスおよび統合](#)
- [CloudTrail の Amazon SNS 通知の設定](#)
- [「複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取る」](#) および [「複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る」](#)

すべての「[Amazon EBS API アクション](#)」アクションは CloudTrail によってログ記録されます。たとえば、CreateVolume、DeleteVolume、CreateSnapshot アクションの呼び出しは、CloudTrail ログファイルにエントリを生成します。

各イベントまたはログエントリには、リクエストの生成者に関する情報が含まれます。アイデンティティ情報は、以下を判別するために役立ちます。

- リクエストが、ルート認証情報と AWS Identity and Access Management (IAM) ユーザー認証情報のどちらを使用して送信されたか。
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーのテンポラリなセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが、別の AWS サービスによって送信されたかどうか。

詳細については、「[CloudTrail userIdentity 要素](#)」を参照してください。

Amazon EBS ログファイルエントリの概要

追跡は、指定した Amazon S3 バケットにイベントをログファイルとして配信するように設定できます。CloudTrail のログファイルは、単一か複数のログエントリを含みます。イベントは任意のソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストのパラメータなどの情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、パブリック API 呼び出しの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

次の例は、CreateVolume アクションを示す CloudTrail ログエントリを示します。

```
{
  "eventVersion": "1.09",
  "userIdentity": {
    "type": "Root",
    "principalId": "AROAJABCHBVMHREXAMPLE:root",
    "arn": "123456789012",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE"
  },
  "eventTime": "2024-02-08T08:02:21Z",
  "eventSource": "ec2.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateVolume",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "12.12.123.123",
  "userAgent": "aws-cli/1.10.10 Python/2.7.9 Windows/7botocore/1.4.1",
  "requestParameters": {
    "size": "100",
    "zone": "us-east-1a",
    "volumeType": "gp3",
    "iops": "3000",
    "encrypted": true,
    "masterEncryptionKeyId": "arn:aws:kms:us-east-1:123456789012:key/12345678-a202-4b72-8030-example23456",
  }
}
```



```
    "throughput": "125",
    "clientToken": "12345678-2427-4336-a555-e8607example"
  },
  "responseElements": {
    "requestId": "12345678-4229-4cfd-9cb1-0b094example",
    "volumeId": "vol-01234567890abcdef",
    "size": "100",
    "zone": "us-east-1a",
    "status": "creating",
    "createTime": 1707379341000,
    "volumeType": "gp3",
    "iops": 3000,
    "encrypted": true,
    "masterEncryptionKeyId": "arn:aws:kms:us-east-1:123456789012:key/12345678-
a202-4b72-8030-example23456",
    "tagSet": {},
    "multiAttachEnabled": false,
    "throughput": 125
  },
  "requestID": "12345678-4229-4cfd-9cb1-0b094example",
  "eventID": "12345678-4b33-4c18-90a1-76d4bexample",
  "readOnly": false,
  "eventType": "AwsApiCall",
  "managementEvent": true,
  "recipientAccountId": "123456789012",
  "eventCategory": "Management",
  "tlsDetails": {
    "tlsVersion": "TLSv1.3",
    "cipherSuite": "TLS_AES_128_GCM_SHA256",
    "clientProvidedHostHeader": "ec2.us-east-1.amazonaws.com"
  },
  "sessionCredentialFromConsole": "true"
}
```

Amazon EBS の Amazon CloudWatch メトリックス

Amazon CloudWatch メトリックスは、ボリュームの動作の表示、分析、アラームの設定に使用できる統計データです。

データは無料で 1 分間隔で自動的に取得されます。

からデータを取得するときに CloudWatch、Period 返されるデータの精度を指定するリクエストパラメータを含めることができます。これは、データの収集に使用する期間 (1 分間) とは異なりま

す。有効なデータが確実に返されるようにするために、リクエストに指定する期間は、収集の期間以上に設定することをお勧めします。

CloudWatch API または Amazon EC2 コンソールのいずれかを使用してデータを取得できます。コンソールは CloudWatch API から未加工データを取得し、そのデータに基づいて一連のグラフを表示します。必要に応じて、API のデータまたはコンソールのグラフのいずれかを使用できます。

トピック

- [Amazon EBS ボリュームのメトリクス](#)
- [Nitro インスタンスのメトリクス](#)
- [高速スナップショット復元のメトリクス](#)
- [Amazon EC2 コンソールのグラフ](#)

Amazon EBS ボリュームのメトリクス

AWS/EBS 名前空間には、すべてのインスタンスタイプにアタッチされている EBS ボリュームの、次のメトリクスが含まれます。すべての Amazon EBS ボリュームタイプは、ボリュームがインスタンスにアタッチされている場合に限り CloudWatch、自動的に 1 分のメトリクスを送信します。

インスタンスのオペレーティングシステムから使用可能なディスク領域に関する情報を取得するには、[空きディスク容量の表示](#)を参照してください。

Note

いくつかのメトリクスでは、Nitro System 上に構築されたインスタンスによって違いが生じます。これらのインスタンスタイプのリストについては、「[Nitro System 上に構築されたインスタンス](#)」を参照してください。

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeReadBytes	指定された期間の読み取りオペレーションに関する情報を提供します。	バイト	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> • Average • Sum • SampleCount

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
	<ul style="list-style-type: none"> Sum 統計は、期間内に転送されたバイトの総数をレポートします。 Average 統計は、期間中の各読み取りオペレーションの平均サイズを報告します。ただし、平均値が、指定された期間中の平均サイズを表す、Nitro インスタンスにアタッチされたボリュームを除きません。 SampleCount 統計は期間中の読み取りオペレーションの合計数を報告します。ただし、サンプル数が統計的計算で使用されるデータポイントの数を表す、Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームを除きません。 <p>注意: Xen インスタンスの場合、ボリュームに読み取りアクティビティがある場合にのみデータが報告されます。</p>			<ul style="list-style-type: none"> Minimum Maximum — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームのみ

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeWriteBytes	<p>指定された期間の書き込みオペレーションに関する情報を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> Sum 統計は、期間内に転送されたバイトの総数をレポートします。 Average 統計は、期間中の各書き込みオペレーションの平均サイズを報告します。ただし、平均が指定された期間にわたる平均を表す Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームを除きます。 SampleCount 統計は期間中に書き込みオペレーションの合計数を報告します。ただし、サンプル数が統計的計算で使用されるデータポイントの数を表す、Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームを除きます。 <p>注意: Xen インスタンスの場合、ボリュームに書き込みアクティビティが</p>	バイト	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> Average Sum SampleCount Minimum Maximum — Nitro ベース のイン スタ ンス にア タ ッ チ さ れ た ボ リ ュ ー ム の み

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
	ある場合にのみデータが報告されます。			
VolumeReadOps	<p>指定期間内の読み取りオペレーションの総数。</p> <p>注意: 読み取りオペレーションは、完了時にカウントされます。</p> <p>その期間の 1 秒あたりの読み込み I/O 操作回数 (読み取り IOPS) の平均を算出するには、その期間の読み取りオペレーション回数の合計をその期間の秒数で割ります。</p>	カウント	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> • Average • Sum • Minimum Maximum — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームのみ
VolumeWriteOps	<p>指定期間内の書き込みオペレーションの総数。</p> <p>注意: 書き込みオペレーションは、完了時にカウントされます。</p> <p>その期間の 1 秒あたりの書き込み I/O 操作回数 (書き込み IOPS) の平均を算出するには、その期間の書き込みオペレーション回数の合計をその期間の秒数で割ります。</p>	カウント	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> • Average • Sum • Minimum Maximum — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームのみ

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeTotalReadTime	<p>注意: マルチアタッチが有効なボリュームではサポートされません。</p> <p>指定期間内に完了した操作すべての読み取りオペレーションに要した時間(秒)の合計。複数のリクエストが同時に送信された場合は、この合計が期間の長さを超えることがあります。例えば、期間が1分間(60秒)で、その期間内に完了した操作の数が150あり、1つの操作に1秒かかるとすれば、この値は150秒となります。</p> <p>注意: Xen インスタンスの場合、ボリュームに読み取りアクティビティがある場合にのみデータが報告されます。</p>	[秒]	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> • Average — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームは対象外 • Sum • Minimum Maximum — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームのみ

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeTotalWriteTime	<p>注意: マルチアタッチが有効なボリュームではサポートされません。</p> <p>指定期間内に完了した操作すべての、書き込みオペレーションに要した時間 (秒) の合計。複数のリクエストが同時に送信された場合は、この合計が期間の長さを超えることがあります。例えば、期間が 1 分間 (60 秒) で、その期間内に完了した操作の数が 150 あり、1 つの操作に 1 秒かかるとすれば、この値は 150 秒となります。</p> <p>注意: Xen インスタンスの場合、ボリュームに書き込みアクティビティがある場合にのみデータが報告されます。</p>	[秒]	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> • Average — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームは対象外 • Sum • Minimum Maximum — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームのみ

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeIdleTime	<p>注意: マルチアタッチが有効なボリュームではサポートされません。</p> <p>指定期間内に、読み取りと書き込みのどちらの操作も行われなかった時間(秒)の合計。</p>	[秒]	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> Average — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームは対象外 Sum Minimum Maximum — Nitro ベースのインスタンスにアタッチされたボリュームのみ

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeQueueLength	指定期間内に完了を待っていた読み取りおよび書き込みの操作リクエストの数。	カウント	VolumeId	<ul style="list-style-type: none">• Average• Sum — Nitro インスタンスにアタッチされたボリュームは対象外• Minimum Maximum — Nitro インスタンスにアタッチされたボリュームのみ

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeStalledIOCheck	<p>注: Nitro インスタンスのみが対象です。Amazon ECS AWS Fargate とタスクにアタッチされたボリュームについては公開されていません。</p> <p>過去 1 分間にボリュームが停止した IO チェックに合格または失敗したかについてレポートします。このメトリクスは、0 (合格) または 1 (失敗) のいずれかになります。詳細については、「CloudWatch を使用して I/O 特性を監視する」を参照してください。</p>	カウント	VolumeId InstanceId	<ul style="list-style-type: none"> 合計 [Average] (平均) 最小値 最大値

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
VolumeThroughputPercentage	<p>[Note:] (メモ:)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロビジョンド IOPS SSD ボリュームのみが対象です。 マルチアタッチが有効なボリュームではサポートされません。 <p>Amazon EBS ボリュームにプロビジョニングされた合計 IOPS (1 秒間あたりの I/O 操作回数) に対する、配信された IOPS の割合 (パーセント)。プロビジョンド IOPS SSD ボリュームは、期間の 99.9 パーセントにわたり、プロビジョニングされたパフォーマンスを実現します。</p> <p>書き込みの間、他に保留中の I/O リクエストが 1 分以内になれば、メトリクス値は 100% となります。また、お客様が行ったアクション (例えば使用率ピーク時にボリュームのスナップショットを作成する、EBS 最適化インスタンス以外でボリュームを実行する、そのボリュー</p>	割合 (%)	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> Average Minimum Maximum

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
	ムのデータに初めてアクセスするなど) によってボリュームの I/O 性能が一時的に低下する場合があります。			
VolumeConsumedReadWriteOps	<p>注意: プロビジョンド IOPS SSD ボリュームのみが対象です。</p> <p>指定された期間内に消費された読み取り/書き込みオペレーションの合計量 (256K キャパシティユニットに正規化)。</p> <p>それぞれ 256K より小さい I/O 操作は、1 消費 IOPS とカウントされません。256K より大きい I/O 操作は、256K キャパシティユニットでカウントされます。例えば、1024K I/O は 4 消費 IOPS としてカウントされます。</p>	カウント	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> • Average • Sum • Minimum Maximum

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
BurstBalance	<p>注意: 汎用 SSD (gp2)、スループット最適化 HDD (st1)、Cold HDD (sc1) ボリュームのみが対象です。</p> <p>バーストバケットに残っている I/O クレジット (gp2 用) またはスループットクレジット (st1 と sc1 用) の割合に関する情報を提供します。CloudWatch データはボリュームがアクティブな場合にのみ報告されます。ボリュームがアタッチされていない場合、データは報告されません。</p> <p>ボリュームのベースラインパフォーマンスが最大バーストパフォーマンスを超える場合、クレジットは消費されません。ボリュームが Nitro System で構築されたインスタンスにアタッチされている場合、バーストバランスは報告されません。その他のインスタンスの場合、報告されるバーストバランスは 100% です。詳細については、「gp2 ボリュームのパフォーマンス</p>	割合 (%)	VolumeId	<ul style="list-style-type: none"> Average Sum — Nitro インスタンスにアタッチされたボリュームは対象外です。 Minimum Maximum

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
	ンス 」を参照してください。			

Nitro インスタンスのメトリクス

AWS/EC2 名前空間には、ベアメタルインスタンスではない、Nitro ベースのインスタンスにアタッチされているボリュームに関する、追加の Amazon EBS メトリクスが含まれます。

メトリクス	説明	単位	有意義な統計
EBSReadOps	<p>指定された期間にインスタンスに接続されたすべての Amazon EBS ボリュームからの、完了した読み込みオペレーション。</p> <p>その期間の 1 秒あたりの読み込み I/O 操作回数 (読み込み IOPS) の平均を算出するには、その期間の操作回数の合計をその期間の秒数で割ります。基本 (5 分) モニタリングを使用している場合、この数を 300 で除算して読み込み IOPS を計算することができます。詳細 (1 分) モニタリングを使用している場合は、この数を 60 で除算します。CloudWatch DIFF_TIME メトリック演算関数を使用して 1 秒あたりの操作数を調べることもできます。例えば、EBSReadOps CloudWatch m1としてグラフ化した場合、$m1 / (\text{DIFF_TIME}(m1))$ メトリック計算式はそのメトリックをオペレーション数/秒で返します。その他のメトリック数学関数の詳細については、『Amazon CloudWatch ユーザーガイド』の「メトリック演算を使用する」を参照してください。DIFF_TIME</p>	カウント	<ul style="list-style-type: none"> 合計 [Average] (平均) 最小値 最大値

メトリクス	説明	単位	有意義な統計
EBSWriteOps	<p>指定された期間にインスタンスに接続されたすべての EBS ボリュームからの、完了した書き込み操作。</p> <p>その期間の 1 秒あたりの書き込み I/O 操作回数 (書き込み IOPS) の平均を算出するには、その期間の操作回数の合計をその期間の秒数で割ります。基本 (5 分) モニタリングを使用している場合、この数を 300 で除算して書き込み IOPS を計算することができます。詳細 (1 分) モニタリングを使用している場合は、この数を 60 で除算します。また、CloudWatch DIFF_TIME メトリック算術関数を使用して 1 秒あたりの操作数を求めることもできます。例えば、EBSWriteOps CloudWatch m1 としてグラフ化した場合、$m1 / (\text{DIFF_TIME}(m1))$ メトリック計算式はそのメトリックをオペレーション数/秒で返します。その他のメトリック数学関数の詳細については、『Amazon CloudWatch ユーザーガイド』の「メトリック演算を使用する」を参照してください。DIFF_TIME</p>	カウント	<ul style="list-style-type: none"> 合計 [Average] (平均) 最小値 最大値

メトリクス	説明	単位	有意義な統計
EBSReadBytes	<p>指定した期間内にインスタンスに接続されたすべての EBS ボリュームから読み取られたバイト数。</p> <p>報告された数は、期間中に読み取られたバイト数です。基本 (5 分) モニタリングを使用している場合、この数を 300 で除算して読み込みバイト/秒を求めることができます。詳細 (1 分) モニタリングを使用している場合は、この数を 60 で除算します。また、CloudWatch DIFF_TIME メトリックス算術関数を使用して 1 秒あたりのバイト数を求めることもできます。たとえば、CloudWatch としてグラフ化した場合 $m1$、EBSReadBytes $m1 / (\text{DIFF_TIME}(m1))$ メトリック計算式はメトリックをバイト/秒単位で返します。その他のメトリック数学関数の詳細については、『Amazon CloudWatch ユーザーガイド』の「メトリック演算を使用する」を参照してください。DIFF_TIME</p>	バイト	<ul style="list-style-type: none"> 合計 [Average] (平均) 最小値 最大値

メトリクス	説明	単位	有意義な統計
EBSWriteBytes	<p>指定した期間内にインスタンスに接続されたすべての EBS ボリュームに書き込まれたバイト数。</p> <p>報告された数は、期間中に書き込まれたバイト数です。基本 (5 分) モニタリングを使用している場合、この数を 300 で除算して書き込みバイト/秒を求めることができます。詳細 (1 分) モニタリングを使用している場合は、この数を 60 で除算します。また、CloudWatch DIFF_TIME メトリック算術関数を使用して 1 秒あたりのバイト数を求めることもできます。たとえば、CloudWatch としてグラフ化した場合 <code>m1</code>、<code>EBSWriteBytes m1 / (DIFF_TIME(m1))</code> メトリック計算式はメトリックをバイト/秒単位で返します。その他のメトリック数学関数の詳細については、『Amazon CloudWatch ユーザーガイド』の「メトリック演算を使用する」を参照してください。DIFF_TIME</p>	バイト	<ul style="list-style-type: none"> 合計 [Average] (平均) 最小値 最大値
EBSIOBalance%	<p>バーストバケットの I/O 残りクレジットの割合に関する情報を提供します。このメトリクスは基本モニタリング専用です。</p> <p>このメトリクスは、少なくとも 24 時間に 1 回、30 分間だけ最大パフォーマンスにバーストする一部の <code>*.4xlarge</code> インスタンスサイズ以下でのみ使用できます。詳細については、「EBS 最適化 (デフォルト)」を参照してください。</p> <p>Sum 統計は、このメトリクスに該当しません。</p>	割合 (%)	<ul style="list-style-type: none"> 最小値 最大値

メトリクス	説明	単位	有意義な統計
EBSByteBalance%	<p>バーストバケットのスループット残りクレジットの割合に関する情報を提供します。このメトリクスは基本モニタリング専用です。</p> <p>このメトリクスは、少なくとも 24 時間に 1 回、30 分間だけ最大パフォーマンスにバーストする一部の *.4xlarge インスタンスサイズ以下でのみ使用できます。詳細については、「EBS 最適化 (デフォルト)」を参照してください。</p> <p>Sum 統計は、このメトリクスに該当しません。</p>	割合 (%)	<ul style="list-style-type: none"> 最小値 最大値

高速スナップショット復元のメトリクス

AWS/EBS の名前空間には、[高速スナップショット復元](#)に関する次のメトリクスが含まれています。

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
FastSnapshotRestoreCreditsBucketSize	<p>蓄積できるボリューム作成クレジットの最大数。このメトリクスは、アベイラビリティゾーンごとにスナップショット単位で報告されます。</p>	カウント	SnapshotId AvailabilityZone	<ul style="list-style-type: none"> Average Minimum Maximum <p>注意: 最も有意義な統計は Average です。Minimum 統計と Maximum 統計の結果は、Average と同じであり、代わりに使用できません。</p>
FastSnapshotRestoreCredits	<p>使用可能なボリューム作成クレジットの数。このメトリクスは、アベイラ</p>	カウント	SnapshotId	<ul style="list-style-type: none"> Average Minimum Maximum

メトリクス	説明	単位	ディメンション	有意義な統計
eCreditsBalance	ビリティゾーンごとにスナップショット単位で報告されます。		AvailabilityZone	注意: 最も有意義な統計は Average です。Minimum 統計と Maximum 統計の結果は、Average と同じであり、代わりに使用できません。

Amazon EC2 コンソールのグラフ

ボリュームを作成したら、Amazon EC2 コンソールでボリュームのモニタリンググラフを確認できます。コンソールの [Volumes] ページでボリュームを選択し、[Monitoring] を選択します。次の表は、表示されるグラフをまとめたものです。右側の列には、CloudWatch API からの未加工データメトリックスを使用して各グラフを作成する方法が説明されています。すべてのグラフの期間は5分です。

グラフ	未加工メトリックスの使用に関する説明
読み取りスループット (KiB/s)	$\text{Sum}(\text{VolumeReadBytes}) / \text{Period} / 1024$
書き込みスループット (KiB/s)	$\text{Sum}(\text{VolumeWriteBytes}) / \text{Period} / 1024$
読み取り操作 (OPS/秒)	$\text{Sum}(\text{VolumeReadOps}) / \text{Period}$
書き込み操作 (OPS/秒)	$\text{Sum}(\text{VolumeWriteOps}) / \text{Period}$
平均キュー長 (オペレーション)	$\text{Avg}(\text{VolumeQueueLength})$
アイドル時間 (%)	$\text{Sum}(\text{VolumeIdleTime}) / \text{Period} \times 100$
平均読み取りサイズ (KiB/OP)	$\text{Avg}(\text{VolumeReadBytes}) / 1024$
	Nitro ベースのインスタンスの場合、次の式は Metric Math を使用して平均読み取りサイズを算出します。CloudWatch

グラフ	未加工メトリクスの使用に関する説明
	<p>$(\text{Sum}(\text{VolumeReadBytes}) / \text{Sum}(\text{VolumeReadOps})) / 1024$</p> <p>VolumeReadBytes VolumeReadOps およびメトリクスは EBS コンソールで確認できます。CloudWatch</p>
平均書き込みサイズ (KiB/OP)	<p>$\text{Avg}(\text{VolumeWriteBytes}) / 1024$</p> <p>Nitro ベースのインスタンスの場合、次の式では Metric Math を使用して平均書き込みサイズを算出します。CloudWatch</p> <p>$(\text{Sum}(\text{VolumeWriteBytes}) / \text{Sum}(\text{VolumeWriteOps})) / 1024$</p> <p>VolumeWriteBytes VolumeWriteOps およびメトリクスは EBS コンソールで確認できます。CloudWatch</p>
平均読み取りレイテンシー (ms/op)	<p>$\text{Avg}(\text{VolumeTotalReadTime}) \times 1000$</p> <p>Nitro ベースのインスタンスの場合、次の式は Metric Math を使用して平均読み取りレイテンシーを算出します。CloudWatch</p> <p>$(\text{Sum}(\text{VolumeTotalReadTime}) / \text{Sum}(\text{VolumeReadOps})) \times 1000$</p> <p>VolumeTotalReadTime VolumeReadOps およびメトリクスは EBS コンソールで確認できます。CloudWatch</p>

グラフ	未加工メトリクスの使用に関する説明
平均書き込みレイテンシー (ms/op)	$\text{Avg}(\text{VolumeTotalWriteTime}) \times 1000$ <p>Nitro ベースのインスタンスの場合、次の式は Metric Math を使用して平均書き込みレイテンシーを算出します。CloudWatch</p> $(\text{Sum}(\text{VolumeTotalWriteTime}) / \text{Sum}(\text{VolumeWriteOps})) * 1000$ <p>VolumeTotalWriteTime VolumeWriteOps およびメトリクスは EBS コンソールで確認できます。CloudWatch</p>

平均レイテンシーグラフおよび平均サイズグラフでは、期間中に完了したオペレーション (読み込みまたは書き込みのうち、いずれかグラフに該当する方) の合計数に基づいて平均が計算されます。

Amazon EventBridge フォー Amazon EBS

Amazon EBS は、EventBridge ポリユームとスナップショットに対して実行されたアクションのイベントを Amazon に送信します。EventBridge では、これらのイベントに応じてプログラムによるアクションをトリガーするルールを設定できます。例えば、スナップショットの高速復元が有効になったときに電子メールに通知を送信するルールを作成できます。

EventBridge 内のイベントは JSON オブジェクトとして表されます。イベント固有のフィールドは、JSON オブジェクトの「detail (詳細)」セクションに表示されます。「event」フィールドにはイベント名が入ります。「result」フィールドには、イベントをトリガーしたアクションの完了したステータスが入ります。詳細については、Amazon [EventBridge ユーザーガイドの「Amazon EventBridge イベントパターン」](#)を参照してください。

詳細については、「[Amazon とは EventBridge?](#)」を参照してください。Amazon EventBridge ユーザーガイドに記載されています。

イベント

- [EBS ポリユームイベント](#)
- [EBS ポリユームの変更イベント](#)
- [EBS スナップショットイベント](#)

- [EBS スナップショットのアーカイブイベント](#)
- [EBS 高速スナップショット復元イベント](#)
- [AWS Lambda EventBridge イベントの処理に使用する](#)

EBS ボリュームイベント

Amazon EBS は、EventBridge 以下のボリュームイベントが発生したときにイベントを送信します。

イベント

- [ボリュームの作成 \(createVolume\)](#)
- [ボリュームの削除 \(deleteVolume\)](#)
- [ボリュームのアタッチまたは再アタッチ \(attachVolume、reattachVolume\)](#)
- [detachVolume \(ボリュームをデタッチ\)](#)

ボリュームの作成 (createVolume)

ボリュームを作成するアクションが完了すると、createVolume AWS イベントはお客様のアカウントに送信されます。ただし、保存、ログ作成、アーカイブはされません。このイベントの結果は、available または failed のいずれかです。以下の例のように、無効な値が指定されている場合、AWS KMS key 作成は失敗します。

イベントデータ

以下に示すのは、createVolume イベントが正常に完了したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Volume Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
```

```
    "arn:aws:ec2:us-east-1:012345678901:volume/vol-01234567"
  ],
  "detail": {
    "result": "available",
    "cause": "",
    "event": "createVolume",
    "request-id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab"
  }
}
```

以下に示すのは、createVolume が失敗したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。失敗の原因は無効な KMS キー です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
  "detail-type": "EBS Volume Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "sa-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:sa-east-1:0123456789ab:volume/vol-01234567",
  ],
  "detail": {
    "event": "createVolume",
    "result": "failed",
    "cause": "arn:aws:kms:sa-east-1:0123456789ab:key/01234567-0123-0123-0123-0123456789ab is disabled.",
    "request-id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
  }
}
```

以下に示すのは、createVolume イベントが失敗した後で EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。失敗の原因は、KMS キー の保留中のインポートです。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
  "detail-type": "EBS Volume Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
```

```
"time": "yyyy-mm-ddTh:mm:ssZ",
"region": "sa-east-1",
"resources": [
  "arn:aws:ec2:sa-east-1:0123456789ab:volume/vol-01234567",
],
"detail": {
  "event": "createVolume",
  "result": "failed",
  "cause": "arn:aws:kms:sa-east-1:0123456789ab:key/01234567-0123-0123-0123-0123456789ab is pending import.",
  "request-id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
}
}
```

ボリュームの削除 (deleteVolume)

ボリュームを削除するアクションが完了すると、deleteVolume AWS イベントがアカウントに送信されます。ただし、保存、ログ作成、アーカイブはされません。このイベントの結果は deleted です。削除が完了しない場合、イベントは送信されません。

イベントデータ

以下に示すのは、deleteVolume イベントが正常に完了したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Volume Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddTh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1:012345678901:volume/vol-01234567"
  ],
  "detail": {
    "result": "deleted",
    "cause": "",
    "event": "deleteVolume",
    "request-id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab"
  }
}
```

```
}
```

ボリュームのアタッチまたは再アタッチ (attachVolume、reattachVolume)

インスタンスにボリュームをアタッチまたは再アタッチできない場合、attachVolume または reattachVolume イベントが AWS アカウントに送信されます。ただし、保存、ログ作成、アーカイブはされません。次の例に示すように、KMS キー を使用して EBS ボリュームを暗号化し、KMS キー が無効になった場合、インスタンスへのアタッチまたは再アタッチにその KMS キー が後で使用されると、EBS はイベントを出力します。

イベントデータ

以下に示すのは、attachVolume が失敗したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。失敗の原因は、KMS キー の保留中の削除です。

Note

AWS 定期的なサーバーメンテナンスの後、ボリュームへの再接続を試みる場合があります。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
  "detail-type": "EBS Volume Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1:0123456789ab:volume/vol-01234567",
    "arn:aws:kms:us-east-1:0123456789ab:key/01234567-0123-0123-0123-0123456789ab"
  ],
  "detail": {
    "event": "attachVolume",
    "result": "failed",
    "cause": "arn:aws:kms:us-east-1:0123456789ab:key/01234567-0123-0123-0123-0123456789ab is pending deletion.",
    "request-id": ""
  }
}
```


以下に示すのは、reattachVolume が失敗したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。失敗の原因は、KMS キー の保留中の削除です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab",
  "detail-type": "EBS Volume Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1:0123456789ab:volume/vol-01234567",
    "arn:aws:kms:us-east-1:0123456789ab:key/01234567-0123-0123-0123-0123456789ab"
  ],
  "detail": {
    "event": "reattachVolume",
    "result": "failed",
    "cause": "arn:aws:kms:us-east-1:0123456789ab:key/01234567-0123-0123-0123-0123456789ab is pending deletion.",
    "request-id": ""
  }
}
```

detachVolume (ボリリュームをデタッチ)

Amazon EC2 インスタンスからボリリュームがデタッチされると、detachVolume AWS イベントがアカウントに送信されます。

イベントデータ

detachVolume 以下は成功したイベントの例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "2ec37298-1234-e436-70fc-c96b1example",
  "detail-type": "AWS API Call via CloudTrail",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "2024-03-18T16:35:52Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [],
  "detail":
```

```
{
  "eventVersion": "1.09",
  "userIdentity": {
    "type": "IAMUser",
    "principalId": "AIDAJT12345SQ2EXAMPLE",
    "arn": "arn:aws:iam::123456789012:user/administrator",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAJ67890A6EXAMPLE",
    "userName": "administrator"
  },
  "eventTime": "2024-03-18T16:35:52Z",
  "eventSource": "ec2.amazonaws.com",
  "eventName": "DetachVolume",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "12.12.123.12",
  "userAgent": "aws-cli/2.7.12 Python/3.9.11 Windows/10 exe/AMD64 prompt/off command/ec2.detach-volume",
  "requestParameters": {
    "volumeId": "vol-072577c46bexample",
    "force": false
  },
  "responseElements": {
    "requestId": "1234513a-6292-49ea-83f8-85e95example",
    "volumeId": "vol-072577c46bexample",
    "instanceId": "i-0217f7eb3dexample",
    "device": "/dev/sdb",
    "status": "detaching",
    "attachTime": 1710776815000
  },
  "requestID": "1234513a-6292-49ea-83f8-85e95example",
  "eventID": "1234551d-a15a-43eb-9e69-c983aexample",
  "readOnly": false,
  "eventType": "AwsApiCall",
  "managementEvent": true,
  "recipientAccountId": "123456789012",
  "eventCategory": "Management",
  "tlsDetails": {
    "tlsVersion": "TLSv1.3",
    "cipherSuite": "TLS_AES_128_GCM_SHA256",
    "clientProvidedHostHeader": "ec2.us-east-1.amazonaws.com"
  }
}
```

```
}  
}  
}
```

EBS ボリュームの変更イベント

Amazon EBS は、modifyVolume EventBridge ボリュームが変更されるとイベントを送信します。ただし、保存、ログ作成、アーカイブはされません。

```
{  
  "version": "0",  
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",  
  "detail-type": "EBS Volume Notification",  
  "source": "aws.ec2",  
  "account": "012345678901",  
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",  
  "region": "us-east-1",  
  "resources": [  
    "arn:aws:ec2:us-east-1:012345678901:volume/vol-03a55cf56513fa1b6"  
  ],  
  "detail": {  
    "result": "optimizing",  
    "cause": "",  
    "event": "modifyVolume",  
    "request-id": "01234567-0123-0123-0123-0123456789ab"  
  }  
}
```

EBS スナップショットイベント

Amazon EBS は、EventBridge 以下のボリュームイベントが発生したときにイベントを送信します。

イベント

- [スナップショットの作成 \(createSnapshot\)](#)
- [スナップショットの作成 \(createSnapshots\)](#)
- [スナップショットのコピー \(copySnapshot\)](#)
- [スナップショットを共有 \(shareSnapshot\)](#)

スナップショットの作成 (createSnapshot)

スナップショットを作成するアクションが完了すると、createSnapshot AWS イベントはお客様のアカウントに送信されます。ただし、保存、ログ作成、アーカイブはされません。このイベントの結果は、succeeded または failed のいずれかです。

イベントデータ

以下に示すのは、createSnapshot イベントが正常に完了したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。detail セクションで、source フィールドにはソースボリュームの ARN が入ります。startTime フィールドと endTime フィールドは、スナップショット作成の開始時間と終了時間を示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567"
  ],
  "detail": {
    "event": "createSnapshot",
    "result": "succeeded",
    "cause": "",
    "request-id": "",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567",
    "source": "arn:aws:ec2::us-west-2:volume/vol-01234567",
    "startTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "endTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ"  }
}
```

スナップショットの作成 (createSnapshots)

マルチボリュームスナップショットを作成するアクションが完了すると、createSnapshots AWS イベントがアカウントに送信されます。このイベントの結果は、succeeded または failed のいずれかです。

イベントデータ

以下に示すのは、createSnapshots イベントが正常に完了したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。detail セクションで、source フィールドには、マルチボリュームスナップショットセットのソースボリュームの ARN が入ります。startTime フィールドと endTime フィールドは、スナップショット作成の開始時間と終了時間を示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Multi-Volume Snapshots Completion Status",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234567",
    "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234568"
  ],
  "detail": {
    "event": "createSnapshots",
    "result": "succeeded",
    "cause": "",
    "request-id": "",
    "startTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "endTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "snapshots": [
      {
        "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234567",
        "source": "arn:aws:ec2::us-east-1:volume/vol-01234567",
        "status": "completed"
      },
      {
        "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234568",
        "source": "arn:aws:ec2::us-east-1:volume/vol-01234568",
        "status": "completed"
      }
    ]
  }
}
```

以下に示すのは、createSnapshots が失敗したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。失敗の原因は、マルチボリュームのスナップショットセットの 1 つ以上のスナップショットが完了しなかったことです。snapshot_id の値は、失敗したスナップショットの ARN で

す。startTime と endTime は、スナップショットを作成するアクションの開始時間と終了時間を表します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Multi-Volume Snapshots Completion Status",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "012345678901",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234567",
    "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234568"
  ],
  "detail": {
    "event": "createSnapshots",
    "result": "failed",
    "cause": "Snapshot snap-01234567 is in status error",
    "request-id": "",
    "startTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "endTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "snapshots": [
      {
        "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234567",
        "source": "arn:aws:ec2::us-east-1:volume/vol-01234567",
        "status": "error"
      },
      {
        "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-east-1:snapshot/snap-01234568",
        "source": "arn:aws:ec2::us-east-1:volume/vol-01234568",
        "status": "error"
      }
    ]
  }
}
```

スナップショットのコピー (copySnapshot)

スナップショットをコピーするアクションが完了すると、copySnapshot AWS イベントがアカウントに送信されます。ただし、保存、ログ作成、アーカイブはされません。このイベントの結果は、succeeded または failed のいずれかです。

スナップショットをリージョン間でコピーしている場合、イベントは送信先のリージョンで発生します。

イベントデータ

以下に示すのは、copySnapshot イベントが成功したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。snapshot_id の値は、新しく作成されたスナップショットの ARN です。detail セクションでの source の値はソーススナップショットの ARN です。startTime および endTime は、スナップショットのコピーアクションの開始時刻と終了時刻を表します。incremental は、そのスナップショットが、インクリメンタルスナップショット (true) とフルスナップショット (false) のどちらであることを示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567"
  ],
  "detail": {
    "event": "copySnapshot",
    "result": "succeeded",
    "cause": "",
    "request-id": "",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567",
    "source": "arn:aws:ec2::eu-west-1:snapshot/snap-76543210",
    "startTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "endTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "incremental": "true"
  }
}
```

以下に示すのは、copySnapshot が失敗したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例です。失敗の原因は無効なソーススナップショット ID です。snapshot_id の値は、失敗したスナップショットの ARN です。detail セクションで、source の値は、ソーススナップショットの ARN です。startTime と endTime は、スナップショットをコピーするアクションの開始時間と終了時間を示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567"
  ],
  "detail": {
    "event": "copySnapshot",
    "result": "failed",
    "cause": "Source snapshot ID is not valid",
    "request-id": "",
    "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567",
    "source": "arn:aws:ec2::eu-west-1:snapshot/snap-76543210",
    "startTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
    "endTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ"
  }
}
```

スナップショットを共有 (shareSnapshot)

AWS 別のアカウントがそのスナップショットを共有すると、shareSnapshot イベントが自分のアカウントに送信されます。ただし、保存、ログ作成、アーカイブはされません。結果は常に succeeded です。

イベントデータ

shareSnapshot イベントが完了したときに EBS から出力される JSON オブジェクトの例を以下に示します。detailsource セクション内の値は、AWS スナップショットを自分と共有したユーザーのアカウント番号です。startTimeendTime スナップショットの共有アクションの開始時刻と終了時刻を表します。shareSnapshot イベントは、プライベートスナップショットが別のユーザーと共有された場合にのみ発生します。パブリックスナップショットを共有しても、イベントはトリガーされません。

```
{
  "version": "0",
  "id": "01234567-01234-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Snapshot Notification",
```



```

"source": "aws.ec2",
"account": "012345678901",
"time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567"
],
"detail": {
  "event": "shareSnapshot",
  "result": "succeeded",
  "cause": "",
  "request-id": "",
  "snapshot_id": "arn:aws:ec2::us-west-2:snapshot/snap-01234567",
  "source": 012345678901,
  "startTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "endTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ"
}
}

```

EBS スナップショットのアーカイブイベント

Amazon EBS は、スナップショットアーカイブアクションに関連するイベントを発行します。詳細については、「[スナップショットのアーカイブをモニタリングする](#)」を参照してください。

EBS 高速スナップショット復元イベント

Amazon EBS は、EventBridge スナップショットの高速スナップショット復元の状態が変化したときにイベントを送信します。イベントは、ベストエフォートベースで発生します。

以下はこのイベントのサンプルデータです。

```

{
  "version": "0",
  "id": "01234567-0123-0123-0123-012345678901",
  "detail-type": "EBS Fast Snapshot Restore State-change Notification",
  "source": "aws.ec2",
  "account": "123456789012",
  "time": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:ec2:us-east-1::snapshot/snap-03a55cf56513fa1b6"
  ],
  "detail": {

```

```
"snapshot-id": "snap-1234567890abcdef0",
"state": "optimizing",
"zone": "us-east-1a",
"message": "Client.UserInitiated - Lifecycle state transition",
}
}
```

state の想定される値は、enabling、optimizing、enabled、disabling、および disabled です。

message の有効な値は次のとおりです。

Client.InvalidSnapshot.InvalidState - The requested snapshot transitioned to an invalid state (Error)

高速スナップショット復元を有効にするリクエストが失敗し、状態は disabling または disabled に移行しました。このスナップショットに対しては、高速スナップショット復元を有効にすることができません。

Client.UserInitiated

状態は、正常に enabling または disabling に移行しました。

Client.UserInitiated - Lifecycle state transition

状態は、正常に optimizing、enabled、または disabled に移行しました。

Server.InsufficientCapacity - There was insufficient capacity available to satisfy the request

高速スナップショット復元を有効にするリクエストが容量不足のために失敗し、状態は disabling または disabled に移行しました。しばらく待ってから、もう一度試してください。

Server.InternalError - An internal error caused the operation to fail

高速スナップショット復元を有効にするリクエストが内部エラーのために失敗し、状態は disabling または disabled に移行しました。しばらく待ってから、もう一度試してください。

Client.InvalidSnapshot.InvalidState - The requested snapshot was deleted or access permissions were revoked

スナップショットが削除されたか、スナップショット所有者によって共有解除されたため、スナップショットに対する高速スナップショット復元の状態が disabling または disabled に移

行しました。削除されたか共有しなくなったスナップショットに対して、高速スナップショット復元を有効にすることはできません。

AWS Lambda EventBridge イベントの処理に使用する

Amazon EBS と Amazon を使用して、EventBridge データバックアップワークフローを自動化できます。これには、IAM ポリシー、AWS Lambda イベントを処理する関数、および受信イベントを照合して Lambda EventBridge 関数にルーティングするルールを作成する必要があります。

次の手順では、createSnapshot イベントを使用して完成したスナップショットを災害対策の目的で自動的に別のリージョンにコピーします。

完了したスナップショットを別のリージョンにコピーするには

1. 次の例に示すような IAM ポリシーを作成して、CopySnapshot アクションを使用したりログに書き込んだりするためのアクセス権限を付与します。EventBridge EventBridge イベントを処理するユーザーにポリシーを割り当てます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:CreateLogGroup",
        "logs:CreateLogStream",
        "logs:PutLogEvents"
      ],
      "Resource": "arn:aws:logs:*:*:*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CopySnapshot"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

2. コンソールから使用できる関数を Lambda で定義します。EventBridge Node.js で記述された以下のサンプル Lambda 関数は、Amazon EBS createSnapshot が一致するイベント (スナップショットが完了したことを示す) EventBridge を発行したときに呼び出されます。この関数は、呼び出されると、スナップショットを us-east-2 から us-east-1 にコピーします。

```
// Sample Lambda function to copy an EBS snapshot to a different Region

var AWS = require('aws-sdk');
var ec2 = new AWS.EC2();

// define variables
var destinationRegion = 'us-east-1';
var sourceRegion = 'us-east-2';
console.log ('Loading function');

//main function
exports.handler = (event, context, callback) => {

    // Get the EBS snapshot ID from the event details
    var snapshotArn = event.detail.snapshot_id.split('/');
    const snapshotId = snapshotArn[1];
    const description = `Snapshot copy from ${snapshotId} in ${sourceRegion}.`;
    console.log ("snapshotId:", snapshotId);

    // Load EC2 class and update the configuration to use destination Region to
    initiate the snapshot.
    AWS.config.update({region: destinationRegion});
    var ec2 = new AWS.EC2();

    // Prepare variables for ec2.modifySnapshotAttribute call
    const copySnapshotParams = {
        Description: description,
        DestinationRegion: destinationRegion,
        SourceRegion: sourceRegion,
        SourceSnapshotId: snapshotId
    };

    // Execute the copy snapshot and log any errors
    ec2.copySnapshot(copySnapshotParams, (err, data) => {
        if (err) {
            const errorMessage = `Error copying snapshot ${snapshotId} to Region
${destinationRegion}.`;
            console.log(errorMessage);
        }
    });
}
```

```
        console.log(err);
        callback(errorMessage);
    } else {
        const successMessage = `Successfully started copy of snapshot
${snapshotId} to Region ${destinationRegion}.`;
        console.log(successMessage);
        console.log(data);
        callback(null, successMessage);
    }
});
};
```

Lambda EventBridge 関数をコンソールから利用できるようにするには、EventBridge イベントが発生するリージョンで関数を作成します。詳細については、[AWS Lambda デベロッパーガイド](#)を参照してください。

3. <https://console.aws.amazon.com/events/> で Amazon EventBridge コンソールを開きます。
4. ナビゲーションペインで、[Rules (ルール)] を選択し、[Create rule (ルールの作成)] を選択します。
5. [Step 1: Define rule detail] (ステップ 1: ルールの詳細を定義する) で、次の操作を行います。
 - a. [Name] (名前) と [Description] (説明) の値を入力します。
 - b. [Event bus] (イベントバス) は [default] (デフォルト) のままにします。
 - c. [Enable the rule on the selected event bus] (選択したイベントバスのルールを有効にする) がオンになっているようにします。
 - d. [Event type] (イベントタイプ) で、[Rule with an event pattern] (イベントパターンを使用するルール) を選択します。
 - e. [次へ] をクリックします。
6. [Step 2: Build event pattern] (ステップ 2: イベントパターンを作成する) で、次の操作を行います。
 - a. [イベントソース] で、[AWS イベント] または [EventBridge パートナーイベント] を選択します。
 - b. [Event pattern] (イベントパターン) セクションにある [Event source] (イベントソース) で、[AWS service] が選択されていることを確認し、[AWS service] で [EC2] を選択します。

- c. [Event type] (イベントタイプ) で、[EBS Snapshot Notification] (EBS スナップショット通知) を選択し、[Specific event(s)] (特定のイベント) を選択してから、[createSnapshot] を選択します。
 - d. [Specific result(s)] (特定の結果) を選択してから、[succeeded] (成功) を選択します。
 - e. [次へ] をクリックします。
7. [Step 3: Select targets] (ステップ 3: ターゲットを選択する) で、次を実行します。
 - a. ターゲットタイプ] では、AWS サービス] を選択します。
 - b. [Select target] (ターゲットを選択) で [Lambda function] (Lambda 関数) を選択し、前に作成した関数を [Function] (関数) で選択します。
 - c. [Next] (次へ) を選択します。
 8. [Step 4: Configure tags] (ステップ 4: タグを設定する) で、必要に応じてルールのタグを指定し、[Next] (次へ) を選択します。
 9. [Step 5: Review and create] (ステップ 5: 確認および作成する) でルールを確認し、[Create rule] (ルールを作成) を選択します。

作成したルールが、[Rules] タブに表示されます。上の例で、設定したイベントは次回にスナップショットをコピーすると EBS から出力されます。

Amazon GuardDuty フォー Amazon EBS

Amazon GuardDuty は、アカウント、コンテナ、ワークロード、AWS および環境内のデータを保護するのに役立つ脅威検出サービスです。機械学習 (ML) モデルと異常/脅威検出機能を使用して、GuardDuty さまざまなログソースと実行時のアクティビティを継続的に監視し、環境内の潜在的なセキュリティリスクや悪意のあるアクティビティを特定して優先順位を付けます。

[内部のマルウェア対策機能は](#)、Amazon EC2 インスタンスとコンテナワークロードに関連付けられた Amazon EBS GuardDuty ポリユームをスキャンして、潜在的な脅威を検出します。GuardDuty これには次の 2 つの方法があります。

- マルウェア対策を有効にする — Amazon EC2 GuardDuty インスタンスまたはコンテナワークロードにマルウェアが存在する可能性があることを示す結果が生成されると、侵害されている可能性のあるリソースでマルウェアスキャンが自動的に開始されます。
- マルウェア保護を有効にせずにオンデマンドマルウェアスキャンを使用する — Amazon EC2 インスタンスの Amazon リソースネーム (ARN) を指定して、オンデマンドスキャンを開始します。

詳細については、[Amazon GuardDuty ユーザーガイドを参照してください](#)。

Amazon EBS のクォータ

AWS アカウント には、AWS のサービスごとにデフォルトのクォータ (以前は制限と呼ばれたもの) があります。特に明記されていない限り、クォータは地域固有です。一部のクォータについては引き上げをリクエストできますが、その他のクォータについては引き上げることはできません。

Amazon EBS のクォータを表示するには、「[Service Quotas コンソール](#)」を開きます。ナビゲーションペインで、[AWS サービス] を選択し、[Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS)] を選択します。クォータの引き上げをリクエストするには、「Service Quotas ユーザーガイド」の「[クォータ引き上げリクエスト](#)」を参照してください。

ユーザーの AWS アカウント には、Amazon EBS に関連する次のクォータが割り当てられています。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
ボリュームあたりのアーカイブされたスナップショット	サポートされている各リージョン: 25	<u>はい</u>	ボリュームあたりのアーカイブされたスナップショットの最大数。
アカウントあたりの CompleteSnapshot	サポートされている各リージョン: 10/秒	いいえ	アカウントあたりの許容される CompleteSnapshot リクエストの最大数。
送信先リージョンあたりの同時スナップショットコピー	サポートされている各リージョン: 20	いいえ	1つの送信先リージョンへの同時スナップショットコピーの最大数。
Cold HDD (sc1) ボリュームあたりの同時スナップショット	サポートされている各リージョン: 1	いいえ	このリージョンの Cold HDD (sc1) ボリューム

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
			あたりの同時スナップショットの最大数。
汎用 SSD (gp2) ボリュームあたりの同時スナップショット	サポートされている各リージョン : 5	はい	このリージョンの汎用 SSD (gp2) ボリュームあたりの同時スナップショットの最大数。
汎用 SSD (gp3) ボリュームあたりの同時スナップショット	サポートされている各リージョン : 5	はい	このリージョンの汎用 SSD (gp3) ボリュームあたりの同時スナップショットの最大数。
マグネティック (スタンダード) ボリュームあたりの同時スナップショット	サポートされている各リージョン : 5	はい	このリージョンのマグネティック (スタンダード) ボリュームあたりの同時スナップショットの最大数。
プロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームあたりの同時スナップショット	サポートされている各リージョン : 5	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームあたりの同時スナップショットの最大数。
プロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームあたりの同時スナップショット	サポートされている各リージョン : 5	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームあたりの同時スナップショットの最大数。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
スループット最適化 HDD (st1) ボリュームあたりの同時スナップショット	サポートされている各リージョン: 1	いいえ	このリージョンのスループット最適化 HDD (st1) ボリュームあたりの同時スナップショットの最大数。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
高速スナップショット復元	us-east-1: 5 us-east-2: 5 us-west-1: 5 us-west-2: 5 af-south-1: 5 ap-east-1: 5 ap-northeast-1: 5 ap-northeast-2: 5 ap-northeast-3: 5 ap-south-1: 5 ap-southeast-1: 5 ap-southeast-2: 5 ap-southeast-3: 5 ca-central-1: 5 eu-central-1: 5 eu-north-1: 5 eu-south-1: 5 eu-west-1: 5	<u>はい</u>	このリージョンで高速スナップショット復元を有効化できるスナップショットの最大数。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
	eu-west-2: 5 eu-west-3: 5 me-south-1: 5 sa-east-1: 5 他のサポートされている各リージョン: 5		
アカウントあたりの GetSnapshotBlock リクエスト	サポートされている各リージョン: 1,000/秒	はい	アカウントあたりの許容される GetSnapshotBlock リクエストの最大数。
スナップショットごとの GetSnapshotBlock リクエスト数	サポートされている各リージョン: 1,000/秒	いいえ	スナップショットごとの許容される GetSnapshotBlock リクエストの最大数。
プロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームの IOPS	サポートされている各リージョン: 300,000	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリューム全体でプロビジョニングできる IOPS の最大集計数。
プロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームの IOPS	サポートされている各リージョン: 100,000	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリューム全体でプロビジョニングできる IOPS の最大集計数。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
プロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームの IOPS 変更	サポートされている各リージョン: 500,000	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできる IOPS の最大集計数。
プロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームの IOPS 変更	サポートされている各リージョン: 100,000	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリューム全体のボリューム変更リクエストでリクエストできる IOPS の最大更新数。
アカウントごとの進行中のスナップショットアーカイブ数	サポートされている各リージョン: 25	はい	アカウントごとの進行中のスナップショットアーカイブの最大数。
アカウントごとの進行中のスナップショットのアーカイブからの復元数	サポートされている各リージョン: 5	はい	アカウントごとの進行中のスナップショットのアーカイブからの復元の最大数。
アカウントあたりの ListChangedBlocks リクエスト数	サポートされている各リージョン: 50/秒	いいえ	アカウントあたりの許容される ListChangedBlocks リクエストの最大数。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
アカウントあたりの ListSnaps hotBlocks リクエスト数	サポートされている各リージョン: 50/秒	はい	アカウントあたりの許容される ListSnaps hotBlocks リクエストの最大数。
アカウントあたりの保留中のスナップショット	サポートされている各リージョン: 100	はい	アカウントあたりの保留状態のスナップショットの最大数。
アカウントあたりの PutSnapshotBlock リクエスト	サポートされている各リージョン: 1,000/秒	はい	アカウントあたりの許容される PutSnapshotBlock リクエストの最大数。
スナップショットごとの PutSnapshotBlock リクエスト数	サポートされている各リージョン: 1,000/秒	はい	スナップショットごとの許容される PutSnapshotBlock リクエストの最大数。
リージョンあたりのスナップショット	サポートされている各リージョン: 100,000	はい	リージョンあたりのスナップショットの最大数
アカウントごとの StartSnapshot リクエスト数	サポートされている各リージョン: 10/秒	はい	アカウントあたりの許容される StartSnapshot リクエストの最大数。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
コールド HDD (sc1) ボリュームのストレージ (TiB)	af-south-1: 300 ap-east-1: 300 eu-south-1: 300 me-south-1: 300 他のサポートされている各リージョン: 50	はい	このリージョンの Cold HDD (sc1) ボリューム全体でプロビジョニングできるストレージの最大集計量 (TiB)。
汎用 SSD (gp2) ボリュームのストレージ (TiB)	af-south-1: 300 ap-east-1: 300 eu-south-1: 300 me-south-1: 300 他のサポートされている各リージョン: 50	はい	このリージョンの汎用 SSD (gp2) ボリューム全体でプロビジョニングできるストレージの最大集計量 (TiB)。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
汎用 SSD (gp3) ボリュームのストレージ (TiB)	af-south-1: 300 ap-east-1: 300 eu-south-1: 300 me-south-1: 300 他のサポートされている各リージョン: 50	はい	このリージョンの汎用 SSD (gp3) ボリューム全体でプロビジョニングできるストレージの最大集計量 (TiB)。
マグネティック (standard) ボリュームのストレージ (TiB)	af-south-1: 300 ap-east-1: 300 eu-south-1: 300 me-south-1: 300 他のサポートされている各リージョン: 50	はい	このリージョンのマグネティック (スタンダード) ボリューム全体でプロビジョニングできるストレージの最大集計量 (TiB)。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
プロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームのストレージ (TiB)	af-south-1: 300 ap-east-1: 300 eu-south-1: 300 me-south-1: 300 他のサポートされている各リージョン: 50	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリューム全体でプロビジョニングできるストレージの最大集計量 (TiB)。
プロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームのストレージ (TiB)	サポートされている各リージョン: 20	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリューム全体でプロビジョニングできるストレージの最大集計量 (TiB)。
スループット最適化 HDD (st1) ボリュームのストレージ (TiB)	af-south-1: 300 ap-east-1: 300 eu-south-1: 300 me-south-1: 300 他のサポートされている各リージョン: 50	はい	このリージョンのスループット最適化 HDD (st1) ボリューム全体でプロビジョニングできるストレージの最大集計量 (TiB)。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
コールド HDD (sc1) ボリュームのストレージ変更 (TiB)	サポートされている各リージョン : 500	はい	このリージョンの Cold HDD (sc1) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできるストレージの最大集計量 (TiB)。
汎用 SSD (gp2) ボリュームのストレージ変更 (TiB)	サポートされている各リージョン : 500	はい	このリージョンの汎用 SSD (gp2) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできるストレージの最大集計量 (TiB)。
汎用 SSD (gp3) ボリュームのストレージ変更 (TiB)	サポートされている各リージョン : 500	はい	このリージョンの汎用 SSD (gp3) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできるストレージの最大集計量 (TiB)。
マグネティック (standard) ボリュームのストレージ変更 (TiB)	サポートされている各リージョン : 500	はい	このリージョンのマグネティック (スタンダード) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできるストレージの最大集計量 (TiB)。

名前	デフォルト	引き上げ可能	説明
プロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームのストレージ変更 (TiB)	サポートされている各リージョン : 500	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできるストレージの最大集計量 (TiB)。
プロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームのストレージ変更 (TiB)	サポートされている各リージョン : 20	はい	このリージョンのプロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできるストレージの最大集計量 (TiB)。
スループット最適化 HDD (st1) ボリュームのストレージ変更 (TiB)	サポートされている各リージョン : 500	はい	このリージョンのスループット最適化 HDD (st1) ボリューム全体のボリューム変更でリクエストできるストレージの最大集計量 (TiB)。

考慮事項

- クォータは時間の経過とともに変化する可能性があります。Amazon EBS は、各リージョン内のプロビジョニングされたストレージと IOPS の使用状況を常にモニタリングしており、使用状況に応じて、リージョンごとにクォータを自動的に引き上げる場合があります。使用状況に基づいて Amazon EBS がクォータを自動的に引き上げますが、必要に応じてクォータの引き上げをリクエストすることもできます。たとえば、米国東部 (バージニア北部) で現在のクォータよりも多くの gp3 ストレージを使用する場合、使用予定より前にそのリージョンのボリュームタイプのクォータ引き上げをリクエストできます。

- 送信先リージョンあたりの同時スナップショットコピーのクォータは Service Quotas では調整できません。ただし、AWS サポートに連絡して、このクォータの引き上げをリクエストすることができます。
- IOPS 変更とストレージ変更クォータは、同時に変更できるボリュームの現在の合計値 (クォータに応じてサイズまたは IOPS) に適用されます。現在の値 (サイズまたは IOPS) を合計してクォータまでのボリュームに対して、同時に変更リクエストを行うことができます。たとえば、プロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームの IOPS 変更 クォータが 50,000 の場合、現在の IOPS の合計が 50,000 以下であれば、任意の数の io1 ボリュームに対して同時 IOPS 変更リクエストを行うことができます。3 つの io1 ボリュームにそれぞれ 20,000 IOPS がプロビジョニングされている場合、2 つのボリュームの IOPS 変更を同時にリクエストできます ($20,000 * 2 < 50,000$)。3 番目のボリュームに対して同時 IOPS 変更リクエストを送信すると、クォータを超過してリクエストは失敗します ($20,000 * 3 > 50,000$)。

Amazon EBS ユーザーガイドのドキュメント履歴

次の表は、Amazon EBS のドキュメントのリリースについての説明をまとめたものです。

変更	説明	日付
VolumeStalledIOCheck メトリクス	過去 1 分間にストールした IO チェックに、ボリュームが合格していたか不合格であったかは、VolumeStalledIOCheck メトリクスを使用して確認できます。	2023 年 11 月 16 日
Amazon EBS スナップショットのロック	Amazon EBS スナップショットをロックして、偶発的または悪意のある削除から保護したり、WORM 形式で一定期間保存したりできます。	2023 年 11 月 15 日
スナップショットのパブリックアクセスのブロック	パブリックに共有されることを防止するために、スナップショットのパブリックアクセスをブロックできるようになりました。	2023 年 11 月 9 日
Amazon Data Lifecycle Manager の事前および事後スクリプト	Amazon Data Lifecycle Manager のスナップショットポリシーで、事前スクリプトと事後スクリプトを使用して、アプリケーション整合性のあるスナップショットのライフサイクルを自動化できるようになりました。	2023 年 11 月 7 日
NVMe 予約	マルチアタッチ対応の io2 ボリュームは、業界標準のストレージフェンシングプロトコ	2023 年 9 月 18 日

ルのセットである NVMe 予約をサポートします。

[Amazon EBS での障害テスト](#)

AWS FIS を使用して EBS ボリュームとそれがアタッチされているインスタンスとの間の I/O を一時的に停止し、ワークロードが I/O 中断をどのように処理するかをテストします。

2023 年 1 月 27 日

[ルートボリュームを置き換える](#)

AMI を使用して実行中のインスタンスのルート Amazon EBS ボリュームを置き換えることができます。

2022 年 10 月 27 日

[io2 Block Express ボリューム](#)

io2 Block Express ボリュームのサイズとプロビジョンド IOPS を変更し、高速スナップショット復元のために有効にできます。

2022 年 5 月 31 日

[Amazon EBS スナップショットのごみ箱](#)

Amazon EBS スナップショットのごみ箱は、誤って削除したスナップショットを復元できるスナップショット復元機能です。

2021 年 11 月 29 日

[Amazon EBS Snapshots Archive](#)

Amazon EBS Snapshots Archive は、アクセス頻度の低いスナップショットを低コストで長期保存するために使用できる新しいストレージ階層です。

2021 年 11 月 29 日

Amazon Data Lifecycle Manager の CloudWatch メトリクス	Amazon CloudWatch を使用して、Amazon Data Lifecycle Manager のポリシーをモニタリングできます。	2021 年 7 月 28 日
EBS ダイレクト API の CloudTrail データイベント	ListSnapshotBlocks、ListChangedBlocks、GetSnapshotBlock および PutSnapshotBlock の API は、CloudTrail 内のデータイベントをログに記録することができます。	2021 年 7 月 27 日
io2 Block Express ボリューム	io2 Block Express ボリュームが一般利用可能になりました。	2021 年 7 月 19 日
ルートボリュームの置換	これで、ルートボリューム置換タスクを使用して、実行中のインスタンスのルート EBS ボリュームを置き換えることができます。	2021 年 4 月 22 日
io2 ボリューム用マルチアタッチのサポート	Amazon EBS マルチアタッチのプロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームを有効にできるようになりました。	2020 年 12 月 18 日
Amazon Data Lifecycle Manager	Amazon Data Lifecycle Manager を使用して、AWS アカウント間でスナップショットを共有しコピーするプロセスを自動化します。	2020 年 12 月 17 日

gp3 ボリューム	新しい Amazon EBS 汎用 SSD ボリュームタイプ。ボリュームを作成または変更するときに、プロビジョンド IOPS とスループットを指定できます。	2020 年 12 月 1 日
スループット最適化 HDD ボリュームサイズと Cold HDD ボリュームサイズ	スループット最適化 HDD (st1) ボリュームおよび Cold HDD (sc1) ボリュームのサイズは 125 GiB から 16 TiB です。	2020 年 11 月 30 日
Amazon Data Lifecycle Manager	Amazon Data Lifecycle Manager を使用して、EBS-backed AMI の作成、保持、削除を自動化できます。	2020 年 11 月 9 日
Amazon Data Lifecycle Manager	Amazon Data Lifecycle Manager ポリシーは、最大 4 つのスケジュールで設定できます。	2020 年 9 月 17 日
Amazon EBS 用プロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリューム	プロビジョンド IOPS SSD (io2) ボリュームは、0.001% 以下の AFR で 99.999% のボリューム耐久性を提供するように設計されています。	2020 年 8 月 24 日
高速スナップショット復元	共有しているスナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にすることができます。	2020 年 7 月 21 日

Amazon EBS マルチアタッチ	単一のプロビジョンド IOPS SSD (io1) ボリュームを、同じアベイラビリティゾーンにある最大 16 の Nitro ベースのインスタンスにアタッチできるようになりました。	2020 年 2 月 14 日
Amazon EBS 高速スナップショット復元	EBS スナップショットに対して高速スナップショット復元を有効にすることができます。これにより、スナップショットから作成された EBS ボリュームは、作成時に完全に初期化された状態になり、プロビジョンドパフォーマンスをすべて即座に提供できます。	2019 年 11 月 20 日
Amazon EBS マルチボリュームスナップショット	EC2 インスタンスにアタッチされている複数の EBS ボリューム間で、正確なポイントインタイムで、データ調整済みの Crash-consistent スナップショットを取得できます。	2019 年 5 月 29 日
デフォルトでの Amazon EBS 暗号化	リージョンでデフォルトで暗号化を有効にすると、そのリージョンで作成するすべての新しい EBS ボリュームは EBS 暗号化のデフォルトの KMS キー を使用して暗号化されます。	2019 年 5 月 23 日

スナップショットライフサイクルの自動化	Amazon Data Lifecycle Manager を使用して、EBS ボリュームをバックアップするスナップショットの作成と削除を自動化できます。	2018 年 7 月 12 日
アタッチされた EBS ボリュームに変更を行う	ほとんどの EC2 インスタンスにアタッチされたほとんどの EBS ボリュームでは、ボリュームをデタッチしたりインスタンスを停止したりせずに、ボリュームのサイズ、タイプ、IOPS を変更できます。	2017 年 2 月 13 日
暗号化された Amazon EBS スナップショットを AWS アカウント間でコピー	AWS アカウント間で暗号化された EBS スナップショットをコピーできるようになりました。	2016 年 6 月 21 日
スループット最適化 HDD ボリュームタイプと Cold HDD ボリュームタイプ	スループット最適化 HDD (st1) と Cold HDD (sc1) ボリュームを作成できるようになりました。	2016 年 4 月 19 日
汎用 SSD ボリュームタイプ	汎用 SSD ボリュームは、さまざまなワークロードに対応できるコスト効率の高いストレージとして使用できます。これらのボリュームは、1 桁ミリ秒のレイテンシー、長時間にわたる 3,000 IOPS へのバースト機能、最大 3 IOPS/GiB のベースパフォーマンスを実現しています。汎用 SSD ボリュームのサイズ範囲は、1 GiB ~ 1 TiB です。	2014 年 6 月 16 日

[Amazon EBS 暗号化](#)

Amazon EBS 暗号化により、EBS データボリュームとスナップショットがシームレスに暗号化されるため、セキュアキー管理インフラストラクチャを構築および維持する必要がなくなります。EBS 暗号化サービスは、AWS マネージドキー を使用してデータを暗号化することにより、保管中のデータのセキュリティを確保します。EC2 インスタンスをホストするサーバーで暗号化が行われるため、EC2 インスタンスと EBS ストレージとの間を移動するデータが暗号化されます。

2014 年 5 月 21 日

[増分スナップショットコピー](#)

インクリメンタルスナップショットコピーを実行できるようになりました。

2013 年 6 月 11 日

[EBS スナップショットのコピー](#)

スナップショットのコピーを使用して、データのバックアップを作成したり、新しい Amazon EBS ボリュームを作成したり、Amazon マシンイメージ (AMI) を作成したりすることができます。

2012 年 12 月 17 日

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。